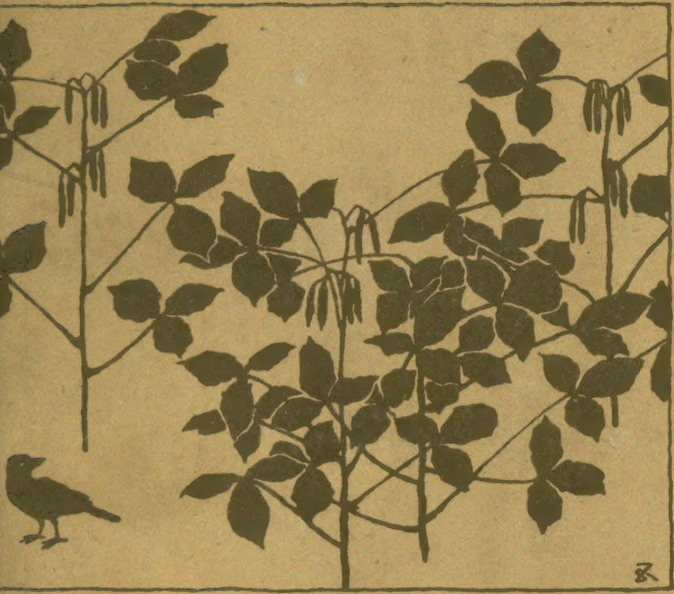




大正二年四月十三日印刷
大正二年四月十六日發行

有朋堂文庫
名家隨筆集上卷（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理
印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場
發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

梧窻漫筆 終

つぐ

法語巽與—論語子罕篇にあり法語は嚴正に論ずる語にして改むるを貴ぶ、巽與は柔かに導く語にして改むるを貴ぶ

卮言—支離して的當するなき言

莊語—重々しき語

をして頤を解き倦を忘れしむ。是れ亦言語の徳にて諷諫の餘流と云ふべし。孔子も五諫の中に、吾は諷諫に從はんと宣ふ。論語にも法語巽與の二途を示さる。滑稽の能は巽與の言を潤飾して妙に感動せしむる所ある故に、優孟の楚王を喩し、優旃の始皇を開くの類は、泄冶の尸諫及び鬻拳の兵諫には遙に勝れりと云ふべし。近ごろ猥瑣なる委巷の談、田夫野老の話をも采錄し、聊か世道人心の裨益にもと、彼酒の瓶より迸する如く、日々に卮言を出して門人小子に示せしが、竟には數頁の夥しきを成すに至る。若し其莊語にて之を訓導するは、先賢大儒の語錄家訓の書、世に乏しからず。余復何をか言はん。

箝默―口をつぐみ默すること
口喙―口さき
芻蕘―草かる賤人
雞雍―雞頭花の實
豕零―かんざう
鴟夷―酒を盛る囊なり
轉注―移し

中庸の人才を教ふるにかゝる高上なる事にては、其功効は見えがたし。是れ人を濟ふには非ず、人を棄るなり。己を守るは子弟の專要、教を受る身なり。人を誘くは長者の職分、道を指示す任なり。謹愼なるが好とて箝默して訓誨誘導に意なきは、不仁に非れば畏縮なり。此流の人ある故に、さてこそ荀卿に誚られて括囊。無咎無譽。腐儒之謂也。（非相篇）と詈辱す。劉向は善言而不能行。國之寶也。（說苑善說）と稱す。孔門の四科、德行言語と相駢比するにて、善言の國の寶たるも明白ならずや。聖賢の言語は、後世に遺りて經典となり、萬世の龜鑑となる。諸子駁雜の言も、韓子の所謂馬勃牛溲の一用となり、今に存す。我輩、凡庸淺劣の口喙も芻蕘に比すれば少く賢る所有るべきなれば、聖人には棄られまじ。さらば畏縮して箝默せんよりは、無寧吐露して人に擇ばしめん。臭を逐ひ痂を嗜むの徒あらば過て喜び玩ばんも知るべからず。或は平心にて愛憎の私意なきは、見て雞雍豕零の類として藥囊の一物に充つる人もあらん。

一談言微中。可以解紛と、滑稽傳に云へり。滑稽は鴟夷の類の酒器にて酒を轉注するものなれば、辯舌の宛轉窮らざること酒の瓶の口より出て止まざるに譬へたり。聞者

醜詆—惡口すること

樞機—事の要點をいふ

瞿曇—釋迦

こと無し。又一說には、貢父これにこそ妙計ありと云ふに、荆公膝を前めて問はる。劉云ふ、傍に一大湖を鑿開するに如かずと。公も此言にて其事の爲すべからざるを諭ると云ふ。一東坡表忠觀を荆公讀で此何等の文字ぞと言はれしを、側に曾布が聞て、訾らるゝと思ひ口を極めて醜詆す。公は耳にもかけず、良沈思して掌を拍て史記諸侯王年表也と稱し、再三賞嘆せしにて、曾布赧然として羞縮せしとも云ふ。

一言行は君子の樞機、樞機の發は榮辱の主也と、易の大傳孔子の示されしを始めとし、論語中にも訥ニ於言一敏ニ於行一とも、恥ニ其言一而過ニ其行一とも、以レ約失レ之者鮮とも、古者言之不レ出。恥ニ身之不一レ逮ともあり。兩見三見のみにあらず、中庸には、言顧レ行。行顧レ言。有レ所レ不レ足。不ニ敢不一レ務。有レ餘。不ニ敢盡一ともあり。言語は三分にて躬行は七分なるべき訓誨なり。養レ才修レ德の上には、さも有るべきなり。既に才器成立の上にては、言語に非れば開導の途はなし。故に孔子の諄々善誘も、孟子の好レ辯も、皆其仁厚忠誠にて、佛氏の所謂衆生濟度の爲なれば也。設使饒舌を下乘なりとし、專ら不言の教などを唱へば、老禪の見にて人を開導する忠悃には非ず。瞿曇の拈華微笑、蒙莊の目擊道存する如きは、賢賢相接する上には然る微妙もあるべし。

青衿―書生
拘泥―かゝはりなづむ
書簏の學―前に見ゆ
駢比―くらべる
玄黄云々―表面を措きて眞髓を論ず
調笑―なぶる
秉鈞の日―事を執れる
濼―沼なり

する詩文極めて精妙にして合作多し。東坡と荊公とは、交情不和なれども、東坡の文をば荊公甚だ重ぜられ、一篇を得ても沈吟反覆して、其模倣する所を求めらる。長公表忠觀の碑を觀て、葉致遠、楊德逢等と互に賞評して、二客は王褒、楊雄などに擬せしに、荊公は特に司馬遷に駢比し、畢竟は、史記の楚漢以來、諸侯王年表也と稱せらる。文學には篤けれども、事々穿鑿過ぎて拘泥の病あり。王衍盧杞の合して一人となる者と辨姦論に誚られしも、學術の迂僻より馴致せしもあるべきなり。大臣の學問は、九方皐の馬を相する如く、玄黄を畧して脈絡を論ずべきなり。

荊公は憨なる所ありて、人に調笑せらるゝ事、間小説に見ゆ。公の秉鈞の日、專ら農田水利を論ぜらる。人ありて、梁山濼を涸して若干頃の田を得べきを獻議す。介甫其水の歸すべき所なきを憂て劉貢父に問はる。貢父是に答へて、楊蟠無齒と云ふ。劉退く。公は此語を反覆思索して得ず、其子雱に何の書に出て何の意ぞと問ふに知らず、因て再び貢父を召して父の意にて問ふに、貢父云楊蟠は杭人にて相公熟知の人なり。浩然居士と稱して善く詩を賦す。今湖を涸して田と爲さんとす。此事浩然(楊蟠)無涯(無齒)也と答へしかば、元澤も冷笑せしが、一時聞者絶倒せずと云ふ

推識—おし知る
纏繞—共にまつはること
蔽蒙—蔽はれくらむ
睚眦仇視—少しの事にて互に敵視すること
蒼生—百姓人民といふこと
縮促—ちぢめる

に似たり。此一事の齟齬にても推識すべきことなり。朱子も心に安ぜざる處ある故に、吉月朝服の條に東坡の説を引て、曲禮の遺記と云ふを擧げられども、必竟は尹彦明の説の先入爲主て纏繞曲解いはゆる汨沒の蔽蒙なり。因陋踵訛は、大賢大學博の考亭朱夫子と雖も免れざることかくの如し。東坡は專經の人に非れば、所謂汨沒の弊なきに因て平心誦味して得る所あるが故に、書傳などに發明の説ありて、睚眦仇視の朱子も采用せられ、今の蔡沈本に處々蘇氏曰あり。人心には公所あり。善の揜ふべからざる天理なるべし。

一王安石は文學には天性長じたる人なれども、實は政事には拙きなり。子細は學問を其儘に政事に引當て用ひんとせらる。是れ從頭の過なり。是は梅福の云ひたる伯樂の圖を察して騏駿を市中に求むるの類なれば迂僻にて用に立ち難し。竟に執拗して天下の蒼生を誤り、宋の國祚を縮促するに足る。宋の太祖の言に、宰相は須らく書を讀みし人を用ふべしとは格論なれども、靑衿書生の如く典籍の字句に拘泥し、或は博覽該通を事とし、時變酬酢の才略なき人ならば、書簏の學にて用に立ちがたし。荊公の學は書生氣習にて、人の詩文を觀るに、必ず其出所淵源を窮めざれば舍かず。其自ら製

政は蒲盧なり—蒲盧は葦の類生じ易く長じ易し、政の擧がることの易く且つ速なるに喩ふ

疏食—粗末の飯

不厭精—精選せるを取ること

の語より已下は子思の論なり。必竟は乃祖の言を前に援て、自己の發明の人道敏政。地道敏樹。夫政也者。蒲盧也。以下の數言を陳せらる。王肅無識にて家語を僞作する時に、孔子の言と子思の言とを辨析する眼なきゆゑに、孔子の哀公面前にて瀆告かくの如しと思ひ。中間に、公曰。子之言美矣などの語を攙入し、更に中庸本文に敷衍を加へ、酒に水をさしたる如くせしなり。好學近乎知の上の、子曰の二字あるにて、人道敏政の子思の發明たることと明白なるを、却て此二字を衍文とせしは、呂覽に所謂黎邱の鬼に惑はされしなり。但これ而已には非ず、論語の鄕黨に衣服飲食種種の事を聚め錄せしは、古禮の雜記なるべし。子路の篇末、邦君の妻、君これを稱して曰夫人の類、孔門授受の言とも定め難きをば、鄕黨の一篇を孔子行狀記と心得て注せられしは、是れ亦汩沒の誤なり。但其中に季康子の藥を饋ると、山梁の雌雉の條は孔子に係る而已。先づ第一に、述而の篇に、孔子自ら稱せらるゝは飯疏食となり、粗糲は脫粟の如き、黑米に齊しきを食せらる。然るに鄕黨には食不厭精と、米の精鑿なるは養生の爲に能ければ粲きほどを好とすとなり、述而の孔子は儉にして鄕黨の孔子は奢なり。鄕黨の孔子は、身命保嗇の道を行ひ、述而の孔子は、身命を度外に置

く、少く、いやし
學究—田舍先生
措大—書生
村夫子—田舍學者
討捜—尋ねさがす
下調—調子低きをいふ

あらねども、著錄中に大學中庸を引くに禮記と引く。朱子の四書行はれ千年に近きを、其四書の制に從はじとて禮記云とするは愚僻の至と云ふべし。又大部の禮記左傳などを、唯其書名のみを引て篇名歲年を畧するは、讀者をして討捜檢閲に惱ましむ。時世に不レ通と云ふべきなり。又當時は四家の詩、八家の文、盛に行はる。是は文運の闢きたるなり。然るを明の七子の詩を喜び、歐蘇の文は下調なりと唱へて宋文を讀まざる輩もあり。是等は都下の村學究と云ふべき者なり。必竟は元祿享保間の諸先生の輩は、文運の開かんとする始ゆゑに、歐文の紆徐曲折、三蘇の筆の平淡流暢中に至極の深味ありて、又韓柳の不レ及ところ有るをば知解せざるを、其後百餘年の今日に猶其繆論を奉ずるは、荀卿の所謂上愚（即下愚）なるべし。

一陳編に汨沒すれば、因陋踵訛の弊は朱子と雖も免れず、其四書を註せらるゝに、自己の學問に附會せられて語孟の意を故らに誤解せらるゝもあり。是れは聖を誣ふるなれば罪に非ずとは言ひ難し。家學の筋に係らずして、強解誤解の處あるは、かの汨沒の過ちなり。大學中の明明德などは、家學に附會せらるゝなり。中庸の哀公問をば長問答と見られしは、家語に因て誤らる。哀公孔子との問答は其政息に止り、人道敏レ政

沿襲—前例に則り從ふ
萎薾—しなれかれる
汨沒—おぼれまごつく
蠡—蛤貝
因陋踵訛—ありきたりな誤り續けて拙なるをいふ
套圏—かこひ
淺狹寡陋—あさくせま

は專經の士なれども門人小子には務めて詩文を作り雜書を讀ましむるは、この寡陋の窟に墮入させまじき爲なり。朱子も此弊を覺られしことあり。周書洪範の皇建二其有極一とあるを、孔安國以來、皇は大なりと訓し、更に辟と見たる人なしとて、朱子皇極辨を作り、始て皇を辟と觀られ、（皇を君と見たるは班孟堅なり、知るや否）千有餘年の間、一人の其繆を覺てこれを正す者なしと、自讃せられ、末に緡雲馮氏（當可時行）の封事を引く。皇建二其有極一を君と見たる文なれば、其論二皇極一深合二鄙意一とし、云。然則予前所謂。千有餘年無下一人覺二其繆一而正レ之者上。亦近レ誣矣。但專經之士。無二及レ之者一。而文士反能識レ之。豈汨沒傳注者。不レ免二於因陋踵訛一。而平心諷味者。有下時而得二之文字之外一邪。と記さる。此論は、朱子の言にては、甚無我虛襟にて尊く覺ゆるなり。因陋踵訛の四字最も肯綮と云ふべし。後世の經學者共に此四字の套圏を出づることを得ずして、我こそ經學者と尊大に構へて在れども、淺狹寡陋なる徒多きが故に、學究措大の名稱を來せるなり。

固陋にして時世と推移するの見なきを村學究と云ふ。都下にも此村夫子あり。縱令其人の所染の習ひにて朱學に從はぬは、各見所あるなれば、一概に非とすべきにも

黍離は詩經に見ゆ周の東遷後大夫等故都を過ぎて歎息せしをいふ

折中—定まる

楚人の沐猴—沐猿は山猿なり楚の人は沐猴の冠せる如しといふより來る

口氣—くちまい

機軸—てくだ

ことを得ずと云ふに服し、又好色は將帥の耻と知り、最後に巴女を歸せしなど、義經より優れる所あり云々。此外に古き東鑑などをも引けり。道灌の見られしは、何等の本なるや覺束なけれども、義貞正成の古戰の論などは後人の口氣にて實說には非るべし。又古き東鑑と援て平家の侍大將上總五郎兵衛忠光の囚となり、鎌倉へ來らん時に、小山判官朝政、一の谷の合戰の事を問答に及びしも同じ機軸にて、後人の假託なるべし。

一唐以來宋に及び、沿襲して詩賦を以て士を取る。神宗の世王介甫、奏聞して詩賦を廢し、經義を以て選擧することに成りしに、人材萎薾して振はざりしかば、荊公悔恨して云ふ。本欲㆘變㆓學究㆒爲㆗秀才㆖。却變㆓秀才㆒爲㆓學究㆒との言あり。陳后山叢譚に見えたり。聖人の道は、德行を第一と論ふは勿論なれども、有用の成材をなすには才量を增益するに非れば、學問の功効を見ず。經書は日月と共に不㆑墜ものにして天地と不朽なり、義理の深奥、千萬世に涉て窮盡すこと無し。然れども、陳編に汨沒し、宋以前の註疏、宋元の語錄學にて聖經を窺はんとせば、所謂井に坐して天を覩、蠡を以て海を測るなれば、才識の長ずることも無く、知見の啓發する期も有るまじ。余

松籟水聲—松風と水の音
童竪—小供
彷彿—似たるをいふ
黍離麥秀—故都を過ぎて其廢墟となるを歎息せる歌をいふ、麥秀は箕子故事、

にて形も影も覩ざりしと。又南廷の大納言實世卿の許へ、一童竪の、尺牘の如くにして一首の國歌を署せしを持ち來る。

君が捿む宿の邊りを來て見れば昔に濡す墨染の袖

とあり。手蹟に記えあれば、彼の小竪に其人のさまを詰問へば、今朝西の原にて草を刈て在りしに、瘠悴へたる修行者の、此簡を達てとあるまゝに持來ると云ふ。急ぎ皇居へ來り此事を奏聞あれば、叡慮にて大和紀伊河內の關々へ命ありて、彼の修行者を捜索せしが、彷彿たるをも得ずして止みたり。其筆蹟は藤房入道なりと記し、此卿は世を遁れ越の方の山に入り、夫より筑紫へ通り給ふとて、舊都を經過ありての感慨なるべきよし、松翁附記す。此說に據れば、北山巖倉より越前へ向つて往き給ひしには、何か謀慮のありしにや。君が捿の一首は黍離麥秀の同調といふべし。

一太平記には數種あり。此邦雜家の一學問と稱す。太田道灌自記と題する小册に、古き太平記と援て、正成の宅にて新田義貞、足利直義、名和長年等相會して、古の戰闘、勇將烈士を論ず。其論は皆正成に折中す。義仲の器量義經に倍す、唯其深山に成長なし、一文不通、いはゆる楚人の沐猴なれども、關白は鎌足の胤に非ればその職に充つる

忠讜—忠にして直諫するをいふ
鹵簿—天子の行列をいふ茲に用ひしは恐らく誤ならん
秕政—惡しき政なり
亡命竄匿—駈け落ちにげかくれる
苾芻—僧
漱盥—口すゝぐ
相法—人相

て、何國ともなく出で去りたまふとは、太平記に識したり。明史を讀めば、明の神宗中年の後、政務に倦厭はれ、數年の頃、朝に臨まず、大臣をも見ず、秕政しば〳〵出るに依て、天下に怨讟の氣充つれども、如何とも爲すべき術なければ、六曹の臣詹沂の輩、漸〳〵に亡命竄匿せしことを載す。是れ明の亡ぶる基本にして、藤房の遁世と、一同軌轍なり。藤房の北岩倉をいでて、遠く跡を屏せられしとは有れども、實は深く潜伏して京師の妙心寺に棲み給ふ。遺留の物もある由をいひ傳ふれども、誤りなるべし。脇屋義助、越前より皇居（吉野なり）へ參りて語る、越前の鷹の巣の山は、高く聳えて城廓に宜しかるべしと思ふによりて、畑六郎左衛門時能に此山を守らしむ。時能猶も要阨を知らん爲に、樵夫を前導とし山深く入りしに、溪流の淸冽なる其源頭に、聳えたる巖石を片取り、松葉を用ひて上に葺たる庵室に、落葉を布て席とし、石の上に法華一卷あり。少頃して枯瘦せし苾芻の、此に歸來て、溪水に漱盥し、經卷を繙く。其相法の藤房卿に肖たりと云ふに因て、一條少將の伴ひて山に入り、彼菴室を訪しに、其人は已に去て、經を載せしと聞えし石の面に、一首の國風を書し留む。少將は其筆迹こそ藤房卿に疑なし、と山を攀ぢ谿に下り尋しかども、松籟水聲のみ

支持―もちこたへる
卿雲―めでたき雲
復辟重祚―君の位に復するをいふ
賦役―人民に服するをいふ
馬耳の東風―何の功もなきをいふ

に騰り、車駕すでに宮に入れば、雲陰不ㇾ見と記す。何か天の祐も有るかと思へば、僅に一年も度らずして翌年の二月、厓山の戰利を失ひて陸秀夫に負はれて海に入て殂す前日龍の見はれしは祥か妖か。明亡ての後、瞿式耜等、永明王を肇慶にて帝位に卽かしめ、元を永曆と改む。此日天氣淸明、旭日に五彩雲を現はし、又五采の文を具へし大鳥、南より飛來て殿上に止ると書す。又黃龍の瑞ありとも記す。然るに永曆帝は桂林にも駐り得ず、緬甸へ逃れしが、幾年を支持するにも及ばずして、もと明の臣たる吳三桂に迫り殺さる。黃龍卿雲は果して何の兆ぞや。豈造化の小兒、一時の戲弄にして然るや、不審きこと共なり。

一後醍醐復辟重祚の後は、色に耽り讒を信し、徭役を興し游宴を事とし、天下の士皆解體離心せし時に當て、出雲の壚冶高貞駿馬を上つる。中納言藤房卿は、此駿馬を假りて切諫せらると雖も、固より國武子の盡言に侔しく、馬耳の東風にて聽用し給はぬに因り、所謂微罪を以て去るの意にて建武二年乙亥三月十一日、八幡の行幸の供奉の翌日參內あり。是れを此世の限りと玉座に近づき、古へ忠讜の士、廉潔の臣などの話を奏し申され、退朝より鹵簿をば家に歸し、從者一人を將て北山の岩倉にて受戒あり

悽愴—憐れにもの寂しいこと
黄冠—草野の服より轉じて道士の服となる
牢絡—手に入れる
簒臣—國を奪ふ臣
大位—君の位

の幼主（恭宗なり、時に燕京に在り。）の詩とて傳ふる、寄レ語林和靖。梅花幾度開。黄金臺下客。應ニ是不ニ歸來一と、此二十字にて無レ限含畜悽愴の意ありと、陶宗儀の輟耕錄に云ふ。後又瞿存齋の詩話を讀みしに、汪元量は宋亡て後に其善レ琴を以て大都（元の燕京）に召さる。世祖に見えて仕官を願はざるの意を告ぐるに因て、黄冠を賜はりて遣り還らしむ。宋の幼主の送らるゝ詩に云、黄金臺上客。底事又思レ家。歸問林和靖。寒梅幾度花とあり。是れに据れば汪元量に與へられしなり。此時幼主に隨逐して、在りし宮人の元量を送る詩をも載せたり。客有ニ黄金共レ璧懷一。如何不ニ肯贖奴回一。今朝且盡ニ穹廬酒一。後夜相思無ニ此盃一。この詩を觀れは、元の世祖汪元量を召され、黄金白璧など賜はりて遣り歸らしむ、人物を牢絡する術なるべし。汪水雲は詩を巧にせしに因て、宋主の林和靖を以て目せられしか。

一帝王の興る時の祥瑞は、史家の潤色も有るべけれども、所謂天之所レ啓なれば左もあるべく、又簒臣の大位を竊む時の凶變、王莽、桓玄の妖孽は、天人の與せざる鬼神の譴責する所なれば、是れ亦誣ふべからざる者あらん。宋の帝昺（卽ち衞王なり）の硇州にて卽位（時に八歲）の日に、壇に登りて禮畢るころ、御輦の向ふ所に龍あり、空

情實暴露―たくみあらはろゝないふ
伉儷―配偶
識見の卓なる―目の付けどころの高きこと
駐驆―天子が輦を駐むること

款を輸すと雖も心に從はず。内侍は父俊基の薨ぜられし後、北朝の三位行氏卿の家に成立したまふに因て、高階師直姦智を運らし、行氏の家に遞き、梅が枝と云ふ女を囮とし、辨の内侍を騙し出し、行氏の第に將る往かんと謀りおほせし途中にて、楠正行の吉野へ參ずるに行遇ふ。正行これを怪しみ詰り問ひしが情實暴露して梅が枝をば尼になして北朝へ放ち還へし、内侍を護衛して吉野へ還り、南帝へ其旨を奏聞を遂しに、叡感ありて内侍を正行の室に賜はらんとの勅諚ありしが、正行の意は燕の幕に倚るが如き身にて、伉儷を求むべきに非ずとて、一首の國風を詠して之を辭せらる。識見の卓なる、源の頼政新田義貞の及ぶ所に非ず。南風の競はざる所以は、後醍醐の其始めに刑賞當を失ひしに由ればなり。

一宋の末造に、元は燕に都し、宋は臨安に駐驆す。南北距戰する十餘年の間なり。恭宗の德祐二年は元の至元十二年なり。元の丞相伯顏大に擧げて臨安に入り、遂に帝を執へて去り、宋朝は斯に至て全く亡ぶ。後に陳宜中陸秀夫張世傑の兩三輩、猶義を倡へて益王廣王を奉じて婺州に入る。此委曲は周密の癸辛襍識續集に、二王入閩大略一則あり。同下卷に、張世傑忠死と題する一則あり。此二條を併せ讀で明白なり。宋

寃結—怨み
將種—大將の血統、篠塚伊賀の女なればなり
左馬頭正儀—楠正儀
冢上—つかの上
情款—心情

を斥して光を放て飛去りぬ。局此事共を女院（新待賢門院）に奏聞し、其翌日吉水法印に詔あり、三七日法華經の供養ありしにて、再び妖怪の見はるゝ事も無りし。此婦人は將種なる故に壯膽なるのみに非ず、力量人に勝れたり。武藏守師直が南朝の皇居を襲ひたりし時に女院は山深く逃入りたまふ。芳野川の橋の一間ほど踏落したるを、かの局其邊の松櫻の大なる枝を攀折よぢをりして橋を架し、女院を背負て此難を免る。此時局の折しほどの枝を園部の六郎に折せて試み給ふに折り得ずして止みたりと吉野拾遺に記し、今は左馬頭正儀の妻となりしとあり。此拾遺を記せしは同じ南朝の侍從の臣に忠房（或は、吉房に作る）卿幼名命鶴丸と云ひし人、後醍醐崩御の後に冢上に廬し、薙髮して松翁と號せし人なり。彼拾遺の跋に、正平己戊の年、隱士松翁とあり。正平に己戊なし、つちのとは、戊の誤寫なるべし。又此書に卷數を侈にして後人攙入の本あり。識者は一見して知ることなれども、庸愚の輩をば惑はすに足る古書なりとて烏亂には讀みがたし。

一又同じ拾遺に、先帝（後醍醐帝なり）の宮女の辨内侍と云ふは、彼關東下向の右大辨俊基卿の女にして容色あり。武藏守師直の何れの時に垣間見せしや、頻に眷戀して情

ふ

薫染—しみこむ

蟇目—惡魔拂に用ふる矢

熄滅—消え止む

國風—歌

遺胔—なきがら

冥福—後生

爭趨。號空不踐實。躓彼荊棘塗。誰哉繼三聖。爲我焚其書。」とあれば、釋氏の害をば甚だ惡まれしを知るべし。外面の說は、右の如くなれども、佛學は心髓に薫染してあれば、經書の解中に明心見性の說、時々に發見して掩ふべからず。

一南朝の宮女に伊賀の局と申せしは、新田義貞の侍の四天王隨一ときこえし、篠塚伊賀守貞綱の女なるが故に、伊賀を以て呼れしなるべし。南朝女院の御所は皇居の西にて山に連れり。往し正平（南朝後村上帝）丁亥の年の春より妖怪ありとて人怯れ慄く。皇居より鎭護の武士を差し遣され蟇目など射させ、其變やゝ熄滅すと聞ゆ。六月の中旬の頃、夜の甚だ熱せしかば、彼局は獨庭に出て月を玩び風凉を愛し、一首の國風を得て朗吟せしに、人も在らじと思の外、松の梢の茂き方より、乾びたる聲して、秖能心靜便身凉と、唐人の句を誦す。局は彼方を視認るに、鬼形にして左右に翼あり、目光は炬の如くなれば、男兒と雖も心魂を喪ふべきに、局は膽力ある人故に、微笑して古人の詩句を擧げしは優也と讃じ、さても人にも非ず、鬼にも非ず、何者ぞやと詰るに、我こそ藤原の基遠にこそ。我女院の爲に命を捐つると雖も、厚く遺胔を斂め、冥福を薦め給ふ事も無きに因て、寃結の氣、異形の相を現ずるとて、北

ふ

董南の筆—筆直にて憚ることなきをいふ

懲創—こらしめる

革面—變節易に小人革面

麟經—春秋の異稱なり孔子が獲麟にて筆を止められたるより來る

技癢—伎藝ありて之を發揮せんと欲するをいふ

好事多應。醉裡書。と。これも亦董南の筆といふべし。子昂の身にて、歸去來の辭は、酣醉して精神昏迷の上に非ずしては、書くことを得まじきなり。此二詩は後世の革面して祿利を貪る人を懲創するに足れり。朱子筆を起して綱目を作り、楊雄に於て書して云く、莽大夫楊雄死とあるを、光を麟經に爭ふなどと奬稱すれども、明人の子昂を貶して那ぞ十畝瓜を種うるの田なからんの、含畜あるには如かざるなり。武田信玄は父信虎を幽囚せしに因て終身孝經を手に觸れざりしと云ふは、羞恥を知るものにして、孟頫の輩よりは天道に合ひたるなり。

一朱晦菴は才力富贍なる人なれば、技癢不已の病あり。釋老を窺はるゝのみならず、道家脩眞の方さへも窮めんとせられ、魏伯陽の參同契にも手を下して其說を善ばるゝなり。然れども一時の技倆にて此に沈迷せしには非ず、所謂定力を以て勝なり。文公感興の詩中の二篇に釋道を言て云、飄飄學仙侶。遺世在雲山。盜啓元命祕。竊當生死關。金鼎蟠龍虎。三年養神丹。刀圭一入口。白日生羽翰。我欲往從之。脫屣諒非難。但恐逆天道。偸生詎能安。これは道敎を斥す。西方論緣業。卑卑喩群愚。流傳世代久。梯接凌空虛。顧眄指心性。名言超有無。捷徑一以開。靡然世

再瘞―瘞は葬るなり

忠悃―忠誠の意悃はまこと

縱横一萬里云々支那全國五千年間の第一人五千年は五百年の誤

大疵―大きず

春秋の斧鉞―嚴しき筆誅なるをい

遺骸は沙漠に飄流して臨安の都へは還らざるなり。一時の人心を慰するが爲に、空函を奉じて還りしこと、周密の齊東野語、癸辛雜識に言へり。又雜識中に楊髠（即楊璉眞珈）發陵の一則あり、併せ見て明白なり。

一林景熙謝翺、唐珏の儕の宋帝の遺骼を再瘞するに至る艱苦は、忠悃の激烈こゝに極まる。名の爲にも非ず。利の爲にも非ずして此至難の事をなすは、天地鬼神を感動すべき理なり。豫讓の智伯の爲に讐を報んとて、漆レ身呑レ炭の苦行を爲したるは、名のためにするなれば、古今論議あり。然れども名を顧みざるに至ては羞惡之心を失ひて禽獸を違る事不レ遠者なり。趙孟頫子昂は書畫詩文共に長して、別して書に於ては、縱横一萬里、上下五千年の目あれども、宋の宗室にて有りながら、甘じて元の粟を食ふは、大節すでに失ふ。他の技藝の美なるも、何ぞ其大疵を補縫すべきや。明の虞堪の松雪の畫に題する詩に、王孫今代玉堂仙。自畫二茗谿一似二輞川一。如レ此青山紅樹底。那無二十畝種レ瓜田一。と、此一絶句二十八字は、孟頫には春秋の斧鉞なり。又松雪曾て、人の爲に陶靖節の歸去來の辭を書す、其人十襲して拱璧の如し。一僧ありて卷尾に絶句を題して云はく、典午山河半已墟。褰レ裳宵逝望歸レ廬。翰林學士宋公子。

梓宮―柩

（二帝の遺骨を拾ひ得たるは、唐珏なり、此詩は、唐に別るゝなり。）種年星在尾。根到九泉雜龍髓。恒星晝隕夜不見。七度山南與鬼戰。願君此心無所移。此樹終有開花時。山南金粟見離離。白衣人拜樹下起。靈禽啄粟枝上飛。となり。詩意淺率なるが如くにて分明ならず。山南と靈禽とに寓意あるか、猶繹ぬべし。星在尾とは、寅月なり。至元（元の世祖なり。）二十二年乙酉正月の事なりと云ふ。唐玉潛には夢中作とし、七言絶句四首あり。珠亡忽震蛟龍睡。軒弊寧亡犬馬情。親拾寒瓊出幽草。四山風雨鬼神驚。また、一坏自築珠丘土。雙匣猶傳竺國經。獨有春風知此意。年年杜宇泣冬青。これにつき猶二首あり、唐珏の高孝二帝の遺骼を得て兩函に貯へて佛經也と僞り越山に葬り、かの女貞樹を識表とせしなり。楊璉眞珈の事は、陶九成が輟耕錄諸書に見えたり。此に出す林謝等の詩は、宋詩畧に載す。

因みに記す。高宗の紹興十年に金と和議を謀り、徽欽二帝及び鄭后邢后の梓宮幷に大后韋氏を金より迎へらる。迎護使は、工部侍郎莫將等なり。十二年の八月に徽宗、顯肅、懿節二后の喪金より至る。帝（高宗）親ら梓宮を臨平に奉迎せらる。此一大禮にて朝臣の論功受賞も夥しきことなり。然れども其實は徽欽の二帝は金の五國城に崩し、

陵園―みささぎ
竹籠は―籠は俵なり
冬青木―ねずみもち

て足ることながら、吾輩の飲食は甚だ過侈なるものなり。

一宋亡びて元初に、胡僧の楊璉眞珈なる者主領となりて、宋の諸帝の陵園を發す。慘怛の極と云ふべし。宋の遺臣林景熈（字德陽號霽山）。謝翺（字皐羽號晞髮子）方鳳（字韶卿）唐珏（字玉潛、號菊山）此外に鄭宗仁、吳思齊の輩ありて、相共に協謀して、六陵の遺骨を拾ひ輯めて再び瘞藏す。其艱難崎嶇いふべからず。林景熈は身乞丐となり、背に竹籠を負ひ、竹を長き箸の如くして、路傍に落散たる物を挾みて彼の籠中に投ず。竊に金牌を鑄て腰間に繫ぎ、彼の楊璉眞珈の手下の西僧に賂ひて辛くして高宗孝宗の遺骨を得て、兩函を以て之を斂め其上に冬青木（一名女貞、又萬年枝、漢宮に嘗て植るに因て、宋の諸陵にも多く此樹をうゑしなり）を植て識となしぬ。謝皐羽林景熈ともに冬青樹の詩あり。今一詩を騈錄して其忠烈悲愴を見はす。林の詩に云。（冬青花と題す。）冬青花。花時一日腸九折。隔江風雨晴影空。五月深山護微雪。石根雲氣龍所藏。尋常螻蟻不敢穴。移來此種非人間。曾識萬年觴底月。蜀魂飛遶百鳥臣。夜半一聲山竹裂。となり。龍の藏ると云ひ、此種人間に非ずと云ひ、百鳥臣と云ふ、微意を知るに足る。謝の云く、冬青樹。山南陲。九日靈禽居上枝。知君

得るに非ざるをいふ

綺繡—あやぬひ

領の布衾を贈る。此より前に、范僕射堯夫布衾の銘を作りて學者の箴とせしを溫公是を愛せられ、彼景仁の貽りたる衾の首の處へ、隷書にてしるさる。古へは、日用服御の物に皆銘あり。太戴禮に見ゆ。公も其意にて有るべし。溫公遺命にて、死せる日此衾を以て覆ひとせしと云ふ。布衾の銘に云く、藜藿之甘。弟布之溫。名敎之樂。德義之尊。求之孔易。享之常安。綺繡之奢。膏粱之美。權寵之盛。利欲之繁。苦難其得。禍辱旋臻。取易捨難。去危就安。至愚且知。士寧不然。顏樂簞食。萬世師範。紂居瓊臺。死爲獨夫。君子以儉爲德。小人以侈喪軀。然則斯衾之陋。其可忽諸と。趙善璙の自警編に載す。又淸人陳世倌の粥を煮る詩あり、云。煮飯何如煮粥強。好同兒女細商量。一升可作三升用。兩日堪爲六日糧。有客只須添水火。無錢不必作羮湯。莫嫌淡泊少滋味。淡泊之中滋味長。又阮葵生の喫粥詩あり、云。香于酪乳膩于茶。一味和融潤齒牙。惜米不妨攙菉豆。佐餐少許抹鹽瓜と。これは茶餘客話に載す。菉豆は此都のやへなり豆なり。小豆粥は彼土にても煮ると見ゆ。塩瓜は瓜の形に作る燒鹽なるが、鹽藏の瓜ならば、抹すとは云ふまじ。寒を防ぐは布衾にて足れり、飢を療すは豆粥に

・
俘禽―俘虜
原委―末源
渾沌氏―莊子に見えたる耳目口鼻なき王
志不在溫飽―志はたゞ衣食の樂を

不レ如レ使レ過の語の出處いかにと。百詩も急に對に困せしが、宋の陳良時の文集に、使レ功不レ如レ使レ過の論一篇あり。文中に秦伯の孟明を用ふる事を云へども、此語の出處は何の書に出るを不レ知。後十五年を越えて、唐書を讀み、李靖の傳にて此語を得たり。高祖靖の逗留を以て詔して斬らしむ。許紹ために請うて免かる。後に靖、兵を帥ゐて開州の蠻を破る。俘禽五千、帝左右に謂て曰、使レ功。不レ如レ使レ過と果して然り。陳良時の論題はこゝに出でたりとす。後又五年、後漢書を讀むに、獨行傳の索盧放の下に出づ。索盧放更始の使者を諫めて、東郡の太守を斬ること勿らしむ。曰く、夫使レ功者。不レ如レ使レ過と、李賢の注に、若下秦穆公赦二孟明一而用レ之霸中西戎上と。陳良時の論は、全くこゝに出でたるを知る。僅に此一語の原委、凡二十年にして明白なり。瑣碎の事にて仍然り。何ぞ況んや經典の古奥なるをや。徒に一説を守り知見を出さず、師傳を恪奉すと倡へて固陋を掩ひ、抗顏して師たる者も世に多し。予は是を渾沌氏の儒と名づく。

一飽食煖衣は、小人の身を喪ふの楷梯なり。志不レ在二溫飽一とは、名賢の事を立て功を成す所以なり。宋の元豊中に、司馬溫公洛に在り。范蜀公鎭往いてこれを訪はれ、一

天縱—天より授けられし德を有する義

韋篇三絶—孔子易を讀んで韋篇三たび絶ゆ

く利口捷給なるをば、實に博覧該通なりと世俗は覺ゆれども、其力の深淺は詩文著錄にて識者の眼を欺く事は能はざるなり。老子の言に知者は不ㇾ言。言者は不ㇾ知とは格言なり。

一學問の道は、主父偃の言ひたる曠日彌久に非れば窮盡しがたきものなり。孔子の天縱の才にても、我に數年を假すの語ありて、史記には韋編三絶の説あり。古語の一言半句の微なるをも其原を窮むるは難し。何ぞ況や、經藝の古奥深邃なるをや。魏曹操の語に、寧我負ㇾ人。無二人負一ㇾ我とあるは、姦雄膽壯の口氣にて固より訓と爲すべきに非ず。是れを宋の呂原明の翻案して自警の銘とし、壁に貼して、寧人負ㇾ我。無二我負一ㇾ人とせしは、自己の意に出て古人に靠るには非ず。然るに晉書に既に此言あるなり。麴粥（慕容氏の臣）の羅仇に説く、主上荒耄にして讒を信ず、兵を勒して西平に向ふに如かずと。羅仇これに答ふ、誠に汝の言の如くなれども、吾家は世忠義を以て西土に著はる、寧使二人負一ㇾ我。我不ㇾ忍ㇾ負ㇾ人也と。晉書載記に見ゆ。原明これを援據とするには非ずして先づ此言あり。若し此語原明に剙まると云はゞ、原を窮はめずとせん。清の閻若璩は考證に長せし人なり。世宗嘗て勅問あるは、使ㇾ功

ろしや螢にも聲の有りけると云ふに、今一人の鳴蟲よりもとこそ取りなしたり。（後拾遺に、音もせで操に燃る螢こそ、なく蟲よりも哀也けり）偶此書を見るに因て附記す。

一松田一樂入道秀任の武者物語に、北條家の松田六郎左衞門定勝の說を引て曰く、善き武士數度の覺えあるは、我功を人の請ふことあるも一生語ること無し。不ㇾ語ども猛き勇夫と聲を取るなり。又未熟なる武士の、たま〱人並の高名を遂げ、或は追首など二三度も仕たるは、己が名を取らんとの欲心にて、妄に身の事を大造に誇り說き、人の請問ふに値うては、猶更に過溢の大言を吐き出して少年輩を欺く。譬へば樽に酒を入れたるが如し。十分に滿ちたるは鳴ることなし、酒を少しく入れたるは、鳴響きて喧しき如く、戰場に遇ひたると云ふまでにて、武功に乏しきは故さらに自ら鳴るなり。秀任云く、藝事はすべて如ㇾ此ものなり。澤庵和尚の少智の題にて詠ぜし歌に、

麓なる一樹の色を知り顏に奧もまだ見ぬ三芳野のはな

とは幽遠の趣を得たるなり。按ずるに桶水の說は程子の語に出たり、暗合なるべし、都て文藝にても亦然るなり。書物の標題を能く記憶し、張釋之の嫌ふ虎圈の嗇夫の如

妍媸―美醜
馬道―緣
追首―追擊して首を取ること
大造―大げさ

獨夫孤豎—助なき一人者

耳食—耳學問

忿狷鷙猛—怒り易く暴きこと

矮人の場を觀る—前に見ゆ場は劇なり矮人見えざるを以て人の言を聞て雷同するをいふ

無く、三好長慶の義輝を弑せしをも、坐視して義兵を擧ぐる家士もなきにて、足利氏の獨夫孤豎となりしを知るべし。信長の三好を伐れしは、一時天下を牢絡する權畧などと云ふもあらんが、始終昌山（卽ち義輝の弟義昭）を扶持羽翼せられしこと曾て詐力とは覺えず。事は江村專齋の雜話に詳なり。後世耳食の徒は太閤をば粗野無識を以て目し、信長公をば忿狷鷙猛とのみ思ふは、所謂成敗にて人を論ずるなり。是を矮人の場を觀る人に從つて姸媸を說くと云ふなり。

螢の鳴くと云ふこと、其以前にもあることなり。信實朝臣の今物語と云ふ册子は、種々瑣碎の說を記したるが、其中に載する。或殿上人の舊き宮はらへ夜深に參りて北の臺の馬道に佇みけるに、局に居るゝ人の氣色あまたしければ、引きかくれて覗きけるに、御局のやり水へ螢の多くすだきけるを見て、さきに立ちたる女房の螢火みだれ飛で（樂天の句）とうち眺めたるに、次なる人夕殿に螢飛で（同上）と口占む。尾に立ちたる人、かくれぬものは夏蟲の（後撰集、つゝめども隱れぬものは夏虫の身より餘れる思也けり）と華やかに獨語たる、とり〴〵に優しきも面白くて、此男も何となく節なからんも本意なくて、鼠鳴をして居たりける。首なる女房のもの怯

僻語—ひがこと
氣魄—心
比況—くらべる
酷肖—よく似る
任使—まかせ使ふ
眷顧—ひいき

ひたるは、一座の愚昧なるべし。田父野老なりとも、螢の聲なきを知らざるべきや。如此の僻語をなして衆を試みたるなり。其言に我威を以て加へば、鳴ざる螢をも聲を發せしむべしと。此一語は妄也と雖も、其氣魄の宏雄偉大なるを知る　曾て近侍に問はる、人云我面は猿に似たりと、然るや否や。近侍の士答へて、然るに非ず、猿の面の君に似たる也と。是蓮花六郎に似たりの答に比況すれば、其面さらに猿よりも醜きなれども、我彼に從はず、彼をして我に從はしむれば、其意自ら安きなり。太閤の面の猿に似たるは、十六歲にて松下嘉平次に奉公せし頃は、たゞ猿とばかり呼れしなり。松下が飯尾豐前に言しにも、此に人あり、猿かと思へば人、人かと思へば猿、(松下環翠の太閤傳)とあるにて、其酷肖を知るべし。更に人に問て、其然否を定めるる謂あらん。凡て太閤は、膽力を以て勝たる人ながら、能くこれを登庸任使したまふ信長公は、將に將たるにて、(武弁にて始めて天下の權を秉られし賴朝は、其機智卓絕にて、能く拙を以て巧を使ひ、怯に居て勇を役す。晉の宣帝の流亞なり。信長は性易直なる故に此伎倆なし)其才力器度は遠く尊氏義貞の及ぶ所に非ず。近く武田上杉の企て望むべきに非ず。此時足利氏は、天下の衆に見離されて、誰これを眷顧する者も

奬稱—ほめたゝへること
豔簡—いろぶみ
涉獵—目を通しよむこと
覺世—世を醒す

中のことなるべし）彼著はせし徒然草の下卷に、後醍醐の吉野へ移らせたまふ後にも、先帝と書せず當代と書し、又南朝の公卿をば彼書中に多く奬稱し、又身は伊賀へ移住して、南朝へ參內するの便宜を圖る。此等の事にて其心事を測るべし。高の師直が爲に鹽冶高貞が妻に送る豔簡を書せしを、深草元政及林讀耕子は兼好の過失とすれども、是れは兼好の微意ある事にて、師直の斯る不道の行を爲すは足利氏の亂るべき前兆也と、心中に喜び、筆を奪つて情態を曲盡したるなり。果して師直師泰兄弟不睦にして、高氏の一族多く殺戮に遭ふ。兼好の師直とは歌道の交なるに因つて、伊賀より折節往來して、京師の事を南朝に報聞し、間諜をせしならんが、其事至密にて知る人なきが故に、無難に一生を了せりと、春湊浪話と云ふ書に記せり。未知然るや否や兼好は常に老莊二書を讀み、白氏の長慶集竝に文選などに涉獵し、文才ある士なれば、彼著はせし徒然草は覺世の益ある書なり。

一豐太閤ある日、連歌の筵を開きたまひ、「奥山に紅葉踏みわけ鳴く螢」とせられしかば衆あやしみて、螢には聲あるまじきを論ず。玄旨法印古歌を引かれて、「螢より外鳴く蟲もなし」とあるを以て附會せらる。太閤此句を出さるゝを鄙野無識より出でしと疑

剳割—腹を割く
陋巷—いぶせき街
乞與—乞ひ貰ふ
潤删—取捨すること

百倍なるべし。朝に渉るの脛を斮り孕婦を剳割し、賢人の心を剖くなどの暴虐は無れども、夏殷以來の丘陵墳墓を發掘殘伐するは嚴刑峻法よりも酷毒なるべし。宋の鄭景璧も好古器玩の癖ありて三代秦漢間の遺器を藏せしが錢唐の兵亂に遭て盡く亡びしに、後古銅の鳩杖を贈るあり。古銅の製作の杖頭の鳩なり。卽ち天台藤を幹として拄杖になし、左右に置て玩弄す。後古銅の酒器を友人より得て此二物を身を離さず。晩年衰老に及び彼鳩杖に憑り、古酒器を兒童に携へしめ、山水の佳處にて獨酌して娛樂し、却て自ら其癖を笑ふ。頃者又好古を嘲る者あり。一人ありて、性古物に沈耽して價直の高下を論ぜず、古物を見れば買取て收藏となす。忽焉として產を失ひ、乞丐となりしが、猶其愛玩せし顏子陋巷の瓢を携へて人家に傍ひ、慈仁の君子は孰ぞや、太公九府の錢一文を乞與せんと號びて、市中に嗤笑されしを見たり。此れ偶言なれども、古器玩好に產を蕩失するの烱戒とすべし。鄭景璧蒙齋筆談に言ふ所に潤删を加へて、玩物喪志の說の結語とす。

一吉田の兼好は南朝の忠臣也と云ふ。其始は左兵衛佐にて正和文保の頃は、後醍醐いまだ東宮に在せし日より奉仕す。(兼好の薙髮は、後宇多崩御の後にて元亨の後、正中年

耽古―古に耽る、古物を極愛する所

尙方―天子の器物を掌る所

腥羶烹飪―料理

む。又蔡條の叢談に、古器を愛玩するは梁の劉之遴に始まる。劉の荆楚にある日、古器數十百種を聚むとあれども、其他は此癖の人を多く見ず。國朝以來寖く盛になり、劉原父に始まり、歐陽公に成る。其際に附和するは、伯父君謨東坡數公のみなり。原父もとより博雅にして、出でて長安に守たる日、古簋敦鏡甗彝の屬を得るに因て、自ら一書を著して先秦古器記と名づく。永叔は古石刻に迄及んで集古錄と題し、原父の得る古器の銘款等を詳載す。嗣で後に李公、麟伯時、出て生平得る所と、聞見する者を倂せ圖狀を作爲して考古圖を著はす。徽宗もと耽古の癖あるに因て、卽位の後大觀中に、李伯時の考古圖を推衍し、所レ謂宣和博古圖なる者成る。此れより後古器の價踊貴數倍、一器の價百萬に至る。天下の塚墓發掘して殆ど盡く。政和間には最も盛にして、尙方の貯ふる所の古器六千餘數ただのみならず。靖康の變に、金人宮闕を蹂躪して彼の法書名畫兵燹に燒亡し、周鼎夏彝も、腥羶烹飪の用を充つるに至る。（以上大意を摘錄す）天子の玩物喪志は天下を喪ふなり。夏桀殷紂の酒色に荒耽したると、徽宗欽宗の古器古物に沈溺せしと、天下を喪ひたるは同きのみならず、其罪も亦相下らず。何となれば禹王の箴に峻宇雕墻は亡國の道とあり、艮嶽の結構大費は傾宮琁室の

淺頂—短きくび
痺足—ひくき足
規口—まろき口
矩耳—かくの耳
矯作—にせもの

に、蘇味道、李嶠、沈佺期、宋之問の詩を引く。此四人は歐陽詢より後の人なり。率更なにとて豫じめ引用を得べきや。此等の類、細かに算すれば枚擧に堪へざるべし。佐理の書れし徒然草は怪むに足らぬ事なり。

一漫筆の前編に、古器玩好を論じ、玩物喪志の一端也とす。其說いまだ盡さず。古器の鑒定の眼開きたるは、北宋の劉敞原父の輩より始まる。其以前は蒙昧なる事どもなり。高彥休の闕史に載す、唐の宰相河東の裴公、好古の僻あり。曲阜の農夫、田を墾開して古鐵器を得たり。盎と云ふものにて、淺頂痺足規口矩耳、うちに三斗を容るべし。盎の腰に篆文九字あり。曲阜の令讀む事能はず。兗州に書生あり、云ふ、是古篆也とて、これを讀む。曰。齊桓公會二於葵邱一歲鑄となり。邑宰これを裴丞相の家に獻ず。公大に喜で重襲す。後に中書舍人劉蛻これを難じて近世の僞造なりとす。裴公不レ悅して其說を問はるゝに、劉曰、葵邱の會は、九合の第八盟にて、魯僖公九年なり。按ずるに、禮經に諸侯五月而葬る。已に葬て後反虞し、虞して後卒哭、卒哭の後諡を定む。葵邱の會は桓公生前なり、諡を以て稱すべきに非ず。是近時の矯作たる疑なしと說きたるにて、裴公恍然として始て悟り、立どころに命じて破碎せし

推識—推して知る
嗑然—からから笑ふ

草あり、（唐土の詼話に、右軍の書せし赤壁の賦より出づる）十襲の重祕なりと云ふ其友嗑然として哂て諭して曰く、徒然草は兼好法師の作にして、此僧は南北朝の世足利氏將軍たる時の人にして、今を距ること四百年にも及ぶべし。佐理卿は兼好よりも遡に以前、一條帝の時世の人なれば、四百年も遠くて今より八百年も隔つるなり。佐理卿の徒然草を書せらるべき謂なしと云ふに、其人仍云、不レ可レ有のものにしてこれ有る、是其希世の珍貨たる所以なりと、其蒙昧不通こゝに至る。然れども古書に多く此類のことあり、先史記を觀るべし。司馬遷は武帝の時の人なるに、司馬相如の傳の末に太史公曰として、哀平の時の楊雄の言を引く、公孫弘の傳にも、平帝の元始中、王元后の詔して弘の子孫に爵を賜ふことを載す。子長死して後百年を過ぎ、忽然として筆を挈て此等の潤色をなす。一大怪事なり。又徐堅の初學記に、楊子雲の九州の箴を引く。子雲の州箴を作ることは、漢書本傳に見えたり。其箴に曰。吳晉梁宋六代都興と云ふ。六代とも六朝とも云ふは、三國の吳より東晉劉宋齊梁陳を斥して云ふ。皆建業に都せし國々なり。楊雄漢末に生れて、何とて隋唐の稱呼の六代と建るを知るや。又藝文類從は、唐の太宗の時に、率更令歐陽詢の纂輯する所なるに、其書中

混殺—まぜかへす

廩—米倉なり

頑嚚—心德義に則らさるを頑といひ口忠信を言はざるを嚚といふ

に詳錄す。萬章の陳ずる事實とも覺えず。父母使二舜完一レ廩。捐レ階。瞽瞍焚レ廩。此文のみにては何にて免れしや知り難し。史記には瞽瞍從レ下縱レ火。舜以二兩笠一自扞而下る。笠を左右の翼の如くにして、飛下り給ふと見ゆ。舜の事には外にも異聞の多きことなり。舜に兄もあり、妹もあり、越絶書（漢袁康の撰なり、隋志に子貢の作とす、誤なり）に、舜兄狂弟傲とあり。尸子（名は佼商鞅の客なり書二十篇を著はす）舜事レ親養レ兄。爲二天下法一とあり。舜の妹を敤首と云ふ祖君彥の煬帝に檄する文に見ゆ。淸の夏醴谷、湖北の學政となりて、秀才を試むる、象曰に舜を殺すを以て事となすを題とす。某の文に云ふ、象不レ特殺二之于レ水于一レ火。而且殺二之于酒一也。舜雖レ不レ得二于其父其母一。而幸得二于其妹一也。舜を酒に殺さんとするは、馬驌の繹史に列女傳に出でしと云ふ。又許愼の說文に見えたり。舜の兄あり妹ある信ずるに足らず、原は尙書の父頑母嚚象傲と云ふより胚胎せしなり。孟子に記せし、象の舜を死せりとして其妻を奪ひ、其弓矢を取らんと云ふ處の文は、古奧樸茂なるを觀れば、事實は誣妄ながらも、戰國以前よりも、各色の說話を舜に負はせしことを推識すべし。

一舊く傳ふる笑話あり。一人ありて其友に誇り說く、我家に佐理卿の寫したまひし徒然

を知らず事の宜しきに因り雷同するをいふ

譸張―譸ははぶらかす張はいつはるなり人をだますこと

て般を亡せしと云ふは、文王羑里の阨を解するに閎夭散宜生等相謀て美女珍寶を紂王に獻りしに附會せしものか。宋の司城子罕は賢士なり。左傳に見えたる、璧を受けざる及び宋國區々にして、有レ詛有レ祝は國の福にあらず云々、分謗の事などを觀て知るべし。劉向說苑に載するは、子罕の宋君に勸めて、慶賞は人の悅ぶもの君これを行へ、刑罰は衆の惡む所なれば臣請ふこれに當らんと、宋君これに從ふ。頃之にして威柄手に屬して、宋君を弑して簒立せりと記せり。誕妄の甚しきなり。當時の毀譽は愛憎の私あれば信じ難きに因て、闔レ棺て事始て定まると古人言ひたれども、筆頭の變幻譸張も、亦後世を眩惑すること少からず。

一戰國には種々の雜說多きこと、孟子を讀ても知るべし。齊の稷下書生などの駁雜の學にて、無根不經の說を吐きたるが、異同紛錯して諸子中などに散見し、又同じき戰國時世の事にても、辯士の口角にて自在に轉換して、其說の投入に便にす。蔡澤の范雎に說く。箕子接輿漆レ身爲レ厲。被レ髮爲レ狂と云ふ。漆レ身爲レ癩は、遠からぬ豫讓のことをば箕子なりとし、箕子爲レ奴の本文にて、史記に佯狂とあるに因て楚の狂接輿と混殽せしむ。此外にも此類は多くあり。舜の父母の嫉みを受けられし時の事を、孟子

禁防—とゞめふせぐ
陰符—兵書をいふ
止觀—總ての妄想を止めて事理を觀る
上智—知才勝れたる人
用間—孫子の篇名
段辛—紂王の名
太甲—湯王子
附會—正理

云ふ眼耳鼻舌身意を指す、賊の首たるは眼なり、故に陰符にも、機在レ目とあり。楊秉の三不惑の色は眼より入る、色を好むにより、財を貪るの屬の種々の欲を生ず。老子の可レ欲を見ざれば、心をして亂れざらしむ。此れも眼の賊を防ぐの術なり。此眼の賊を防ぐを難しとするは、凡下の事にて、中人以上には心の眞宰あれば、眼の賊は恐るゝに足らざるかと思ふに、然るに非ず。孔子の顏淵に告げたまふ克己の目に、非禮は視ること勿れを第一に示さるゝにて、諸欲の眼より入るを可レ知なり。禪家の止觀の瞑目澄心も、目を閉ざれば澄心すること能はざる理なり。

一孫武曰く、昔殷の興るや伊摯夏にあり、周の興るや呂牙商にあり、故に明君賢相必ず上智を以て間者となして、必ず大功を成すと用間に記す。伊尹太公共に間者と成て夏殷を傾けしと云ふ、晉語史蘇の言は更に甚し。昔夏桀有施を伐つ。有施の人妹喜を以てこれに妻はす。妹喜寵あり。此に於て伊尹と比して夏を亡ぼす。殷辛有蘇を伐つ。有蘇氏妲己を以て是に妻はす。妲己寵あり、此に於て膠鬲と比して殷を亡ぼすと云へり。竹書紀年更に甚し。伊尹太甲を弑して自立すと書す。戰國雜書の誣罔かくの如し。伊尹の間者なりしと云ふは、五就レ湯。五就レ桀の說より附會せしか、膠鬲の妲己と諜し

驪黄―黒栗毛
伯樂―古昔に於ける鑑馬の名人
糾纆―なへる繩
更遞―改まり變はる
懊惱―考へなやむ
玄遠―深くして遠きをこふ
尤怨―とがめうらむ
蟾蜍―ひきがへる

も辨知せずして、我は伯樂の道を傳へたりと覺えたるに同じ。

一老子の「禍兮福所レ倚。福兮禍所レ伏」と云ふ。賈長沙是を縮して、吉凶は糾纆の如しとす。更に簡妙を覺ゆ。天地陰陽の消長と、人事窮達の更遞と一貫同條なり。夫れ陰陽の氣專壹なれば、生化の理こゝに滅息す。鬼神の效用は玆に妙ありて至陽の中必ず陰あり、至陰の中必ず陽あり、其極に至て相生ず。夫れ離は火なり、至陽なり。然して中爻は陰なり坎は水なり、至陰なり。然して中爻は陽なり。榮枯盛衰窮達得失の道は往復相從ふ。陰陽消長の理を觀て推識すべし。少小の出入利害に懊惱して、吾が靈府を銷耗するに至るは憫むべし。聖人は睿知微妙にして天道を知る。天道玄遠にて知り難きに因て、易を衍して天を知るの階梯となす。天を知れば命を知る。命を知れば、己が窮達得失に就て尤怨なし。論語開卷の人不レ知而不レ慍の君子は即ち結末の知命の君子なり。

一韓非子に、日月外に暉いて、其賊は内にありと云ふことあり。これは彼の日中の金烏、月中の桂兎蟾蜍の類の說なるべし。これは姑く舍く。人の身を修むる先づ身中に賊あるを知て能くこれを禁防すべし。本身中に六賊ありと云へり。六賊とは、心經の序に

甄錄—あらはししるす
孔曾思孟—孔子曾子子思孟子
權衡—はかる
博文約禮—論語に君子博學於文約之以禮

を以て分て區別を示す。然れども儒家の患は、門戶より大なるは無し。然るに圻は門戶を以て限をなせば、是れ天下を率て黨を植つるを教ふるなり。今儒書を列し甄錄する所、たゞ時代先後を以て次とす。復宗派を分析せず。要其孔孟の旨を失はざるを求むるのみ。各〻別子を尊で祖となして却て太宗を不問に置く。是惡ぞ學問の本原を識るものならんや。以上共に簡明目錄に於て論ずる意なり。濂洛の兩賢の如きは所謂一別子なり。孔曾思孟は所謂太宗なり。曉嵐の一言は、宋明諸儒の門戶爭軋する者には、頂門上の一鍼なり。孟子の言にも一指を養て肩背を失ふを狼疾の人と爲すとのたまへり。是後世講學家の惑なり。

一淸の茅星來、近思錄集註を著はして後序に言あり。云く、馬鄭賈孔の學は百貨の聚まる所の如し、周程張朱の學は百貨の輕重を權衡するが如しと。是れ覈實の名言なり。學者の經を窮むるに、漢の諸家に汎濫し饜飫して周程張朱に及ばゞ孔子の教法の博文約禮と云ふにも協ふべし。然るに宋學者と稱する徒は、多くは馬融、鄭玄、賈逵、服虔、陸德明、孔頴達等の傳疏音釋には曾て涉獵にも及ばず。輓近の呂留良陸隴其の諸書を抱きて、肆然として權衡を執て手に在りと誇るは捧腹に耐へず。譬へば馬の牝牡驪黃を

爭軋—爭ひきしろ

比黨—君子は比して黨せず

濂洛—周茂叔及二程子周茂叔は濂溪の人二程は洛湯の人

鼻祖—始祖をいふ

本意をも辨知せざるの徒なれば、憎むにも足らず、咎むるにも足らざるなり。我が家法は漢傳唐疏宋元註解、明清著錄、いづれも愛憎の取舍をなさず。務めて公平の心を以て諸説を折中し、猶心に慊せざる處あらんには、精思考覈し、至當を期して止む。門戸爭軋の意は、神明に誓つて挾まず。是論語の比黨の聖訓を恪み守るなり。

近時清太史紀昀曉嵐の言く、宋朝儒士、司馬光家範、范祖禹帝學、王開祖儒志編の如き諸書は、濂洛の未出已前にて、其學も、己を修め人を治むるを主として、所謂理氣心性の微妙の説なし。其述ぶる所、聖人を誦法するに過ぎずして、未だ嘗て別に一先生を尊んで天下に號召せず。中唯王通師弟は私に相標榜すれども、亦尚門戸相攻むること無し。儒家の初軌はかくの如し。朱子雜學辨を著はし、東坡潁濱の易傳老子解、及び張九成呂希哲の中庸大家解を條擧して、其聖人に繆るを論列す。專ら聖書を著はして、他人を攻駁するもの是を鼻祖とす。此より後は、末流晩輩殆ど朋黨の局を釀するに至り、儒家の軌轍一變して、忠厚の意、地を掃うて空し。太史又言く、非十二子荀子の書に見ゆ、是實に儒術爭構の始なり。宋より明に及んで角立して朋を分ち格鬪して休まざる者四五百年、故に王圻の續文獻通考には、儒家の諸書に於て各學派

一幟—幟は旗
攀援—とりつく
涉獵—目を通す
擡出—つきだす

れ。別に一幟を竪らるゝと雖も、漢儒に攀援せざることを得ず。漢儒とは云へども鄭氏康成に依らずしては、手を下すべき者なし。さて又伊川の易傳、春秋傳、朱子の諸經、當時かくの如く信用尊奉すること、甲令の如くなり。然るに朱學を爲すもの、甚だ陋なるは、書經詩經に序と云ふ者あるを知らざるに至る。况や漢魏の諸儒の傳注ある、今に存するを一たび涉獵にも及ばず。所謂朱熹集註と云ふ者に、漢魏諸儒の解を收めらるゝを不レ知。先づ論語孟子二書に就て云はんに、論語注中には、多く何晏の集解を取らるれども、其姓氏を掲げざるは既に集註と題せる故なり。固より其註を襲用するには非ず。疑似の處決斷しがたき處にては、馬氏曰など馬融の說を見はし、趙氏曰は趙岐の說、或は孔氏曰と、唐の孔穎達の疏などをも引用せらる。是れは朱子の敬愼とも云ふべし。狂妄の少年輩は、朱子の集註多く古人の說を剿ひ、其不通艱澁の處に、古人を擡出して、殃を人に嫁すなど言ふは、所レ謂童觀にて取るに足らざるなり。余初年九經談を著はし、宋元諸儒の著述、黃氏日抄、困學紀聞の類、淸朝にて、朱錫鬯顧寧人の說を引用するに姓名を出すもあり、出さゞるもあり。本九經の談話なれば、體裁しかるべきなり。近時余が先儒の說を剿掠すると謗ると聞けども、著書の

烜赫—きらきらする

聖謨—書經の中の大禹謨などの類をいふ

一規—一様に同じ

勃窣—理窟に陷りたるをいふ

恨むる曲筆に非るは明かなり。

一聖賢の氣脈教誨の後世に傳はりて、千古不朽、日星と共に烜赫なるは經典なり。聖謨は深奥玄遠なるに、文辭も鬱茂なる、古樸なる、艱澁なる、簡率なる、各種にして一規ならず。傳注家時世を斟酌して、意を以て志を迎へ、其意脈を後世に詔るときは、其功の偉なる天地と共に不レ墜と云ふべし。經典に注を加へたる、古きは子夏易傳申培詩說などを稱すべきなれども、二書ともに後世僞作、信ずるに足らず。今に存して最も古なるは、毛萇詩傳を推すべし。尚書孔安國傳は本文とも僞造、是には論あることにて、余が壁經辨正等の諸書に詳なり。孝經の孔傳に至ては、最も恠僻と云ふべし。本文は殊に淺易なるに、傳は管子などを剽竊して、却て深險勃窣なるものなり。是れ本文は傳文の僞に晦きなり。鄭康成に至ては、諸經として解を僞さゞること無く、曠古の大手筆と云ふべく、是時世儒者輩出し、服虔虞翻王肅高誘韋昭の儕、其作る處の諸注今に儼存すと雖も、鄭氏の完全なるに及ばず。鄭玄の諸經を解する、禮記に於ては、文字を改竄すること武斷に過ぎたれども、後世三禮の讀むべきを得たるは康成の賜なり。郝仲輿の談經にも其事をば論ぜしなり。宋に至て程朱の諸公、經學を倡へら

完節の臣―節義を完くする臣
堙沒―埋めつぶす
璽―印なり
神色―顏色
遺議―殘る言分

表を作りて奉迎せしむ。憲是を肯んぜず遂に之に死す。張憲は莊宗の完節の臣なるに、歐公史を作り、憲を唐臣傳にも列せず。又使節傳にも入れず。是韓通と同じく、忠臣を堙沒するなり。朱全忠の簒立の日、唐相楊涉、押國璽使となる。其子の凝式、諫めて曰く、大人唐の相となり、國家のこゝに至る無レ罪にあらず。況や天子の璽を持して人に與ふ。假令ひ富貴を保つも千載の公議を何如と。涉大に驚て汝は吾族を滅せんと云て神色不レ寧もの數日。この事は唐書に載せず。通鑑に詳なり。五代史に絕て敍せず。凝式の一言忠孝に涉るを曾て錄せざるは、粗脫なるか回護なるか。袁文、甕牖閒評にいふ、南唐李後主既に降る。宋の太祖其拒守の久しきを憎む意にて、封じて違命侯とす。五代史後主を說く、皆違命侯と書す。陳壽の三國志は、其身蜀人、蜀は父母の邦なる故に、先主後主と書して吳主に名いふの例と異にす。歐公吉州の人にて正に南唐に屬す。祖父は親しく南唐の臣民なるに、違命侯の辱名を斥云ふに忍ぶ、不仁に近きに似たり。然れば五代史には猶遺議の多きを知るへし。吳越王錢弘佐の善を沒せる一事のみならば、胡明仲の雜書を引きたるを信ずべけれども、可レ議もの一にして足らざれば、吳越の錢氏が重斂を書せしこと、錢惟演を

倉吏―倉庫を督する官吏

昵し―馴染む

永叔―歐陽修の字

にも非るなり。但行事の邪正美惡は、顚倒あるまじきなれども、開背馳乖盭するに因て、名賢も浮議を受ることあり。溫史には、吳越王錢弘佐年十四にして位に卽く。溫恭にして書を好み士を禮す。倉吏に問ふ。今蓄積幾何。曰く、十年と。さらば軍食たりぬ、以て民を寛くすべしとて、命じて境内の稅を復する三年、これ其仁明を見るべし。五代史には、錢氏は武穆王鏐より重斂して奢侈を事とす。魚蝦鷄卵の類に至て、必ず家ごとに至り、日ごとに取る云々とあり。此れ弘佐の美を沒するなり。胡明仲の管見に云ふ、司馬氏、弘佐復稅の事を記して、歐陽氏は錢氏重斂の虐を言ふ。其虛實有レ證矣予按ずるに、宋代別記に載す、歐陽脩の推官たる時に、一妓に昵し、錢惟演の僞に論ぜらる。永叔是を恨み後に五代史を作るに及んで、其祖を誣ふるに重斂民怨の事を以てす。元貞謂ふ。別記とは何等の書なるや。魏泰の僞作せし碧雲騢の類ならば、歐陽公を誣罔するに疑なし。

歐公五代史を編みて成るの後、東坡に對して曰、某此書に於て竊に善レ善惡レ惡の意ありと。東坡、韓通無傳と答へしには、歐公も言なくして止む。此而已には非ず。後唐の張憲北京の留守たり、莊宗弑せられ明宗將に入らんとす。或人憲に勸て

純駁—清純なるものと雜駁なるものを合せるをいふ

胚胎—はらみきざす

倚伏—禍福互に相倚り相伏して至るをいふ

三長—才、學、識、

言に純駁あり識に淺深はあれども、筆を把て書を編み耳目の聞見せしことを人に詒知らすは、儒者の淸世にある一務にして天人の與する所ならん。

一十月を陽月と云ふは、純陰にて陽なきを嫌ひ此名を設くると云ふは舊說なれども否らず。既に純陰なれば卽ち陽氣は斯に萠蘖してあればなり。象に未だ見はれざれども自然の勢なり。四月の純陽も陰氣は斯に胚胎するなり、復䷗十一月と姤䷫五月と一陽爻、一陰爻の見はれて知るは神道には非ず。闡幽微顯の道なれば、發見せざる以前に幾を見るべきなり。さて水火は陰陽の極なるに離火の中爻は陰にして、坎水の中爻は陽なり。此二爻を見て陰陽倚伏の理を知り、得失、榮辱、窮達、盛衰を覺悟すべし。

一史家に三長を該ざれば筆を操ること能はずの說は、劉知幾より發す。其三長を該たりと稱するは誰そや。左丘明なり、司馬子長なり、班孟堅なり。此を降りて范曄陳壽に至つては議論ある事なり。宋に逮で、溫公通鑑を作り歐陽公五代史を著はす。此二史體裁は殊異なれども、班馬に追步上下すべき者なり。通鑑は五代に及で歐史と駢び行はる。事の取舍は所謂識に在る故に、彼に逸して此に見はるゝも、彼疎にて此密なる

屬吏―下役
顰蹙―顔をしかめる
三不惑―酒色財
珠璣―共に玉なり
攀援―とりつくこと
掀摘―あげつまむこと

中年以後に姫妾を容れしより、衣服玩好も自ら靡麗になりし事あり。其以前に沈倫、家やぶれ子孫落魄し、銀器を鬻り拂ふ。これは錢塘の錢氏より得たる花籃火桶の類なり。王旦の屬吏ども買取て旦に視せしに、初は顰蹙して屏けしが、後房に色を貯へしより後は、彼銀器を出して用ひらる。如(二)固有(一レ)之にて有りしと記す。聲色之移(レ)人如(レ)此なれば楊秉の三不惑は卓絶なることなり。此王文正は賢名はあれども、一體は定力のなき人なり。王欽若の眞宗に勸めて封禪を議せし時も、酒の壺に珠璣を入れて賜はりしにて、異議を建てず阿從せしなれば、楊秉の不惑には咸く惑ふ人なり。

一宋の洪景盧は、晩年著書に急にして、太平廣記中の神恠なるを纂輯して夷堅志を作る。後人これを知れども。太平廣記、夷堅志併び行はれて妨なし。明の張燧の千百年眼は、謝肇淛の五雜俎、文海披沙、胡元瑞の筆叢、焦竑の筆乘、楊用修の丹鉛錄、升庵外集等を攟摭して成したる書なれども、天下に流布して有益の書たるに害あらず。六經は聖人の心髓にて、千載不朽論を須たず。蒼頡始めて文字を制してより、聖經賢傳を攀援し、古往今來を掀摘して、書を著はし言を立つる者、大凡幾千百人たるを知らず。王充論衡の如きは、聖賢を蔑如する言もあれども、世に行はれて廢せず。されば

擔摭—拾ひ取る
眩惑—まどはす
容觀—外貌のこと
好尙—好みたふとぶ義

文を割裂して後學を眩惑し、汪琬（苕文鈍翁堯峯）の私に典禮を造り古昔を誣罔し、李因篤（天生）の故實を杜撰して引證に姦をなす如きは甚だ厭ひ憎むべきを、閻百詩（若璩潜邱）の大息せられしことあり。又阮葵生の伯祖應商（樾軒）の常に子弟を戒む。近者後生小子。皆讀毛西河集。其所稱引。未足爲據。必須搜討源頭。字字質證。勿爲懸河之口所謾と云ひしを、茶餘客話に載す。此輩の著述は讀まざるを好とすべし

一司馬公ある時人に向つて、世間の人多くは目にて食ひ、耳にて視る、可嘆事なりと云ふ。これは何如と問へば、されば其事なり。衣冠は容觀を爲す所以なり。體に適稱するを美とす。世人は、其稱ふ所を舍て、時世の好尙を聞いて是を慕ふ。是を耳にて視ると云ふ。飮食は味を爲す所以なり。口に可適して善とすべし。世人は菓餌を取て朱にし綠にし、又これに刻鏤の巧を加へ、盤案の玩弄となす。これを目を以て食ふと云ふ。目食耳視は、奢侈の病を竭したる四字なり。此目食耳視は皆婦女より起る。凡て淫蕩華美の具は、其原は好色の心にて、閨房を喜ばしめんとの意より漸々に盛になりもてゆくなり。宋の眞宗の時に王魏公旦は明賢の聞あれども、天子の勸めにより、

といふ如く數の極めて多きに喩ふ
搜羅―さがし集める
浮實―定まらざるをいふ
唾餘―あまりもの

閲史、倘靡識于撑犂。枚臯屬文。徒率成于骫骳。これ文忠誤りて陸機とするなり。黄朝英の緗素雜記には、歐陽公の撑犂の故事を陸機とせられしは別に所見ありやとす。渠未讀玄晏春秋爾と。葉大慶の攷古質疑にこれを辨して云く、嘗觀匈奴傳に單于姓は攣鞮氏、(上力全反下刀兮反)其國これを稱して撑犂孤塗單于といふ。匈奴謂天爲撑犂。謂子爲孤塗。單于廣大之貌。班史の本文右の如く詳明なり。皇甫謐もし匈奴傳を讀みたらば、燭奴の說を待たざるべし。朝英の玄晏春秋を見ざるは固より然り。吳曾も匈奴傳をば讀まざるならん。是れ所謂螳螂の後に黄雀あり、著述の道の恒河沙無盡藏とは此れを云ふなり。又洪邁の隨筆に、文中子は阮逸の僞作と云ふを駁して、阮逸は宋の仁宗の時の人なるに、其以前の人、唐の李翺が文中を讀みて、これを大公家敎に並べ、劉蕡は文中子を讀みてこれを譏て、六經の奴婢也とする如き褒貶浮實ながら、其書は唐の初より行はれしなど、辨析昭明なり。都て宋元の諸儒の著錄は、大筆の經籍の注解は論を須たず。劄記の小册と雖も益讀みて益得る事あり。明に及では、十に八九まで、宋元唾餘を攟摭して編をなす者多し。然れども是れは人の門墻に依託すると云ふまでにて害にはならず。淸人の毛甡(大可、奇齡西河)の經

意鼎は周の
王茂宏—王楙
雷同—妄りに人の說に賛成する
吹毛求疵—毛の中までもたづねて疵を求むる如く隱れたる罪を發き小疵を求むる意なり
恒河沙—恒河は天竺にある河なり恒河沙は俗に濱の眞沙

一蟬を窺ふ螳螂あり、螳螂を狙ふ黃雀あり、黃雀を打たんとする彈丸ありと。蕭代の比喩は正に是れ實事にて天下の世態は皆古往今來かくの如きなるべし。儒者の典籍を考證勘覈を加ふる、最もこれに似たり。唐人の小說脞記の類は、時世のことを箚記するにて、經史訂誤のことに及ばず。段柯古の酉陽雜俎、竝に顏師古の匡謬正俗、丘光庭の兼明書等は、良勘覈訂正の書なれども、至極粗漏なる者にて有益の書と云ふ程のこともなし。宋に至ては、容齋隨筆、(洪邁景盧)黃氏日抄、(震東發)困學紀聞、(王應麟伯厚)の類を姑く置て、吳虎臣の能改齋漫錄、竝に葉大慶の攷古質疑などは、經傳子史を訂正して一部の好書なれども、所謂螳螂の後に黃雀あることを免れず。著述編錄は恒河沙の如し、盡る期はあるまじきなり。前人の功を積で後世に至り、捜羅して遺脫なかるべきなれども、亦其中にも掛漏ある、是れ亦造物者の無盡藏と云ふべし。吳虎臣の漫錄に、皇甫謐曰。計君父授二與司馬相如傳一。遂涉二漢書一。讀二匈奴傳一。不レ識二撐犁孤塗之字一。胡奴の執レ燭あり。顧みてこれに問ふに、奴曰、撐犁は天子也。匈奴の單于を號する、猶漢の天子あるが如し。予于レ是曠然として發悟すと、玄晏春秋にあり。余(吳曾)按ずるに、歐陽文忠公の少時王狀元に代て及第を謝する啓に云。陸機

に服するなり

庖厨角―庖厨は臺所なり食事のこと

鮮―生魚

膾―なます

江陵―張居正の號

分宜―嚴嵩の號

天癸―月事なり

虎子―便器なり

商彝周鼎―彝は宗廟寶器商や周の國寶といふ

盛り魚を養て、庖厨の用に充つ。宋の神宗の東封に丁謂の扈從せしに、大車に木匣を載せ、これに生魚を貯へ、每に鮮を擊ち膾を斫りて食とす。孝仁は誣告にて誅に伏し、晋公は姦謀に坐して謫徙せらる。天物を暴殄せし奢侈の冥報なり。戒懼すべし。明の張居正嚴嵩は更に甚し、江陵は予告して家に還る途中にて、一飯に數竈を列ね、三百の鍋釜を以て烹飪するに至る。分宜の家にては蜀江の錦にて小片を織りなして婢妾の輩の天癸の用となし、七寶鉗金にて尿溺を取る虎子を作らしむ。其誅夷廢死に罹るも宜なるかな。分宜の家の籍沒せしに、珍寶奇物商彝周鼎の類、古器玩好の希世なる物、府庫に充斥したるを書記して天水氷山錄三卷、今知不足齋叢書に收む。胡椒八百斛などは、云ふに足らざるなり。

一王茂宏客と語るごとに、一坐皆稱嘆して已まず。獨王述は否らず。曰。人非二堯舜一。何得二每事盡一善。とて、雷同の諛言を爲さず。述の一言は、材を論じ人を取る規則とすべし。古人の謂ふ、人を論ずる當に有過中にて無過を求むべし。無過の中に於て有過を求むべからずと。理學家或は之に反して、吹レ毛求レ疵の病あり。孟子の人皆以て堯舜たるべし。顏子の舜何人ぞや。などを悞り解せしものか。

酷毒―嚴重殘酷なるをいふ
明恕―聰明にして思ひやりのあるをいふ
拌―はんぎり
門役―下役
刑具―刑罰の具
首服―自白して罪に服すること
沸湯―にえたる湯
誣服―寃罪

の如し。後果して廷尉となり、刑罰を用ふる酷毒なり。又鼠に因て獄具を除きし事あり。明の世に閩の大中丞劉公、官に居て明恕なり。恒に獄具の最も酷なる者を去らんと思ひしに、一日書齋に晝臥したり。傍に雞卵を多く拌に貯たるが、一鼠出て仰臥し、足を以て卵を抱き、又別に一鼠あり、其卵を抱きたる者の尾を牽て瓦の際へ入る。須臾にして一拌の卵皆盡たり。劉、其翌日門役を召して卵を盜しやと責む。固より知らざれば服せず。劉いよ〳〵怒を呈はし、諸の刑具を雜べ陳ねて詰問すれども肯て首服せず。最後に錫蛇と云ふものを取り來らしむ。錫蛇と云ふものは錫にて蛇の形をなし、中を虛にし、これを罪人の腰と腹とに纒はしめ、沸湯を其中へ沃ぐ。刑具の酷毒の最上なるものなり。此具を出し示すにて、門役乍ち誣服せり。劉は素より明恕の士なれば、慘酷の刑は無辜を殺すに足るを知る故に、誣服の者をば置て刑を加へず。さて奏聞して此酷毒の刑具をば除きしとなり。張廷尉は鼠を覈せしより益〳〵酷刑をなし、劉中丞は鼠の雛子を竊むを見るに因て、天下に寃枉の死のあるべきを察して刑具を除く、君子小人用心の殊絶かくの如し。是亦義に喩り利に喩るの一端なるべし。

一隋の將虞孝仁は、性奢靡なり。煬帝に從て遼を伐つに、駱駝を以て函を負はせ、水を

夢、寢夢、喜夢、懼夢
歷然—はつきり
擬する—見つもる
華胥—支那人の理想國
覃及—廣がる
偶言—假託の言

接を事となす。浮虛なれば夢に揚り、沈實なれば夢に溺る。寢ねて帶を藉けば蛇を夢み、鳥髮を銜めば飛ぶを夢む。(此等の事、早く列子に出る)など云ふの類諸書つぶさにあり。加州の士に青地四郎右衞門と云ふ人、壯き時に、朝鮮に渡りしことを歷然と夢に見て珍らしき事なりとて、覺て後自ら其山海の圖を夢のまゝに寫して枕屛風となしたり。十年許過ぎて朝鮮陣のこと始まりぬ。青地も、彼地へ赴くべし、前年の夢こそ奇兆なり。經歷する山海の夢に見たる如きも有りやと、彼圖をひき剝て携へ去りしに、少しも舛ふこと無し。何歩ほど過ぎて川有るべしと思へば果して然り。又幾里ばかりにて山あらんと擬するに山あり。夢中に見たるにて、一應昔し經歷せし如くにて大に利ありしと云ふことを、白石紳書に加州の小瀨順元の話を載す。因て思ふに、黃帝夢に華胥に遊んで其地の風俗淳厚なるを愛せらしが、晩年天下大に治まり、敎化覃及して、昔夢に見たる華胥の如くにて有しと云ふ。偶言ならんと思ひしが、青地の夢を以て考ふれば實事ならんも知るべからず。

一漢の張湯の幼少の時に、家を守りて肉を失ふ、竊食者と疑はる。翌日其肉を啖ひし鼠を捕へて磔罪となし、其罪狀を書して、己が辜に非るを明にす。書法あだかも老獄吏

掉頭—頭をふる
避穀—穀類を避けて食はぬこと
澄滌—洗ひ清むること
筮人—占者
六夢—正夢、靈夢思、

ば、掉頭して、否々それは斯くあり、これは爾なりと辨析するに因て、其海尊たり龜井たるを識ると、新井白石の記せしを見る。此ことの眞妄は如何あるべき。松脂を煉るの法は本草に出でたるに異なること無しとあり。避穀長生の方法もあるべきなれども、深山幽谷に在て心志を澄滌する上の事なるべし。市井塵埃に厠りて、煉氣服食も覺束なきことなり。白石又同時中根某の話を擧げて、義經蝦夷へ渡られしことを記す。

橘南谿の西游記に、薩州の霧嶋山に仙人あり、雲居官藏と云ふ。もとは武士にて平瀨甚兵と云ひしが、不平のこと有るに因て、官祿を棄てゝ山に入り、遂に此霧嶋にうつり棲と聞て、其躰なるもの來り訪ひしに木の葉を衣とし髮鬚は生える儘なれば、更に人とは見えず。又肥後の球磨郡人吉の城下より十里ばかり奧に、たら木と云ふ處の百姓に吉村千兵といふものも、此たら木の深山に入て仙術を得たり、京都白川の山中には白幽といふ仙人ありしが、今は若州の山中に移れると云ふ。

一周官筮人の六夢を占すること舊し。釋氏は四法を以てこれを判す。一は無名薰習、二は舊識巡游、三は四大偏增、四は善惡先兆となり。造化權輿には、神遇を夢となし形

結ぶ意
坐視―居ながら見る
尸諫―死して諫むるをいふ
松脂―まつやに
服餌―食物として食ふ

大志ありとて、坐視して拯はざるの道理あるべきや。義經の青墓の擧に於ては義勇なり。左氏傳に見ゆる子路の死の類には非ず。源平盛衰記の弓流は、いかさま非恥の恥とも云ふべし。憲春は滿氏を諫めて聽かれず、竟に尸諫せし忠節の士なり。義を擇ぶことの審ならざるは、戰國の時世の學問さもあるべし。

一加州の小瀨復菴順元の話を錄して云ふ。三十年（寶永正德の頃より）許以前に、殘月と云顏色容貌の、六十歲ばかりに見ゆる老僧の來り、加州城下、犀川と云ふ一つの川、あさの川の東西へ流れしを見て、昔は此水南北へ流れ斯は流れざりしといふより事おこり、春日山と云ふ山を見て、此山にて義經を富樫の酒宴せし事こそ有りつれ。昔物語に判官殿十二の作り山伏にて通られしと云ふこと、跡形も無き譌なり。當時此地を過ぎられしも百四十人ばかりにて有りしと云ふ。此殘月の住居を能く尋ぬれば、越後の田中といふほとりに一室を作りて、小松原宗雪と云ふ六十ばかりの者と同居し、穀を斷て食せず、松脂を煉て服餌とす。二人ともに如何なる者とも知らず、誰云ひいだすとも無く、殘月は常陸坊海尊にて、小松原は龜井六郎なりと云傳ふ。昔の事どもを問へば不レ答。これを探らん爲に、義經記と云ふ草子を拔き、兎あり角ありと云へ

と

寛裕中和—ゆつたりしておだやかなること

光風霽月—胸に曇少しもなきをいふ

四維—仁義禮智

被髪纓冠—亂髪に冠を

一鎌倉の足利滿氏は無道なりしかば、上杉憲春諫爭せし書に云ふ。貴賤を分たず、耻を知らざるは人に非ず。源義經は名高き人なれども、道に疎ければ理を知らず。理を知らざれば、耻を知らず。大義を思立ちて奥州へ下るに、恃む商人の財寶を奪はんとする盜賊の多く入りたるに、義經の居ながら防がざるは耻也と云ひて、身命を捨てゝ防ぎ戰ふ。天下の義兵を興さんとする大志あるもの、左ばかりの小事を耻と思ひ、身を棄んとするは、却て耻ならずや。後に平氏を伐たれし時に、身を棄てゝ弓を取り名の爲にす。其意は弓の弱きを敵に知らすを耻とするなり。大將は智謀の短なるをこそ愧べき。力の強弱を論ずるは匹夫の上のことなり。義經は名の在る所を知らず、耻の存する所を過まる。終に色に耽り政に怠り遺議を後世に留むと。耻を重んずるは、論語にも原憲の問を第十四篇の目に掲ぐ。孟子にも、耻之於レ人大矣とも、又羞惡之心は義なりとも、中庸には、知レ耻近ニ於勇一ともあり。管仲は耻を四維の一とす。耻の重ずべき斯の如し。然れども憲春が、義經の金賣吉次に伴はれ奥州へ下る途にて、熊阪を撃取りしを非義の義の働としたるは非なり。孟子に同室の人闘ふ者あらんには。被髪纓冠して救ふべしとなり。已に恩義ある者の賊の爲に窘めらるゝを、我は

従容―少しも騒がざるをいふ
排擠―推し落す
愕眙―驚くこと
犀首―公孫衍
閒居―爲すことなくして家に居ること
閙忙―極めて忙しきをいふ
卞急―卞は躁疾なり、きばやきこ

罪の疏を織成して後人を誤るに因て、遂に分宜をして寃を銜んで白すること莫らしむ。吾儕力を極めて楊繼盛を排擠し其飾說して賢を誣るを誅し、所謂五奸十罪を逐條剖析せば、分宜の寃枉こゝに於て申ぶべしと云ひたるにて、穆堂も愕眙して再び僻見を陳ぜざりしと、阮葵生が記せしを見て嘔噱せしことあり。

一史記に、陳軫魏に過て、犀首を見て問ふ。君何の故にか飲酒を好むや。對て云ふ。無事なるが故に飲む。又南越王尉佗の傳にも日飲亡ㇾ何（漢書遠絲の傳にもあり。亡何とは、何も事なきなり）の字あり。人の飲酒に耽るは、多くは閒暇無事なるが故なり。小人閒居不善を爲すの細事なり。人の閒暇に過ぎたるは失德の萠芽なれども、太だ閙忙に過ぐれば德を養ふこと無し。古へ聖人の敎は樂を以て德の偏枯を培養するの道あり。今の人は怠惰柔弱ならざれば、躁暴卞急にて、毫も寬裕中和の氣象あるを見ず。黃山谷の洪氏甥に與ふる書に、尺璧の陰を三分となし、一は公事を治め一は書を讀み、一は以て棋酒とす。如ㇾ此すれば公私皆辨ずと云ふ。理ある言なり。人は都て雍容閑雅の思なければ成器とは云ひ難し。二程の濂溪を見て歸れば、光風霽月の氣象ありしと、是れは其人に薫陶せられしなるべし。

假借—ゆるす
洛蜀の爭—洛は伊川蜀は東坡の黨なり
蒼生—人民
縮促—ちぢめる
疵垢—きずあか
執拗夫—我が主張を固守して剛情なる人
狠愎—强情をいふ
李紱—穆堂

妖亂志に載する、呉堯卿の事に已に此語あり。東坡これを以て伊川の陋に比せしなり。東坡の毎に程氏に假借せざるは、誠に其迂僻に堪へざる也（同上）東坡此時の言に、鏖糟皮裏の叔孫通と伊川を誚てより、洛蜀の爭となり、朱子の東坡を惡まるゝ事仇讐の如し。東坡を憎むとて王荊公を取らるゝは何ぞや。蘇氏の學、人の心術を破るとて擯斥す。荊公は天下の蒼生を苦しめ、宋朝の國祚を縮促せし人なり。蘇氏の學の心術を破りたるは其迹見えず。荊公新法の害は、史册に顯然たり、これたとへば阮籍劉伶等を憎むに因て蘇峻桓玄の輩を取ると云ふべし。楊升菴の好んで朱子の疵垢を發摘するも、謂れあるに似たり。

荊公をば司馬公は執拗夫と目せらる。執拗は即ち狠愎と云ふの緩き語なり。狠愎に一笑話あり。淸の世宗の雍正の初に、明史を修せられ、諸儒史館に會し、稿案ほゞ就るの日、李紱は其博通を負み、雄辯を逞して、其口に勝つもの無し。一日乍ち謂ふ。嚴嵩をば奸臣傳に入るまじき者なりと。纂修の諸公侃然として爭へども例の談辯、雲の湧くがごとく、縱横捭闔當りがたく諸儒も鉗默して鋭を避く。楊椿（農先）は、從容大息して云ふ。分宜當日なほ善を爲すべきに。楊繼盛が無知の小生にて五奸十

失勘―思誤り

通脱―諸事に通し世俗を超脱せること

斬侮―なぶる

矯虔―僞律義

庸墮―なまくら

戲謔―おどけ

る凡そ十餘則に及ぶ。東坡詩文中に用ひたる典故の失勘を擧げたるは洪景廬にて、其人は東坡の忠臣なり。長公の典故を誤用するは一時の粗率と云ふまでにて、後人を過るには至らず。程朱の學は經術に與かり心性に係るなれば、一歩を錯れば千里を差ふに至る。故に同時にも攻るもの亦多し。予が疑問錄、僞學辨の二書に詳なり。東坡の通脱にて、當時故さらに伊川と爭はれしは、沈明遠の說あり。曰く、程氏の學、自ら佳處あり。然れども椎魯不學の人の跡を、こゝに竄し譎て有德者と稱する、其實土木偶にして、一時の名を盜むなり。東坡斬侮して假借なき、人或はこれを過む。不レ知、東坡の意は、其楊墨たるを懼るゝなり。天下の人を率て矯虔庸墮の習をなす、これを闢いて力めざるを恐る、豈過也哉。哲宗の楊を折りしを伊川諫て云々。帝、色不平して棄擲したまふ。溫公これを聞て樂まず。門人に謂ふ。人主をして儒生を親近するを好まざらしむるは、正に此等の人の爲なり。此事劉元城の話る。然れば當時東坡の與せざるのみに非ず、溫公と雖も亦與せず。(以上寓簡)又一則をあぐ。司馬公の薨ぜらるゝ時に、程頤臆說を以て歛す。封角の狀の如し。東坡其怪妄を嫉み、因て怒り詆て云ふ。此豈信物。一角附二上閻羅大王一者邪と。人又此言を東坡の戲謔とすれども

班馬―班固司馬遷
永劫―永久無限
蘇張―蘇秦張儀
佛老―佛陀老子

るべきが、東坡の性質和易通脱なる所、其文筆の班馬に追歩する處、別に天地の一大觀にて、後世永劫自然に人を心醉するものあるならん。東坡を尊崇するは其時世既に然り。先づ李廌字方叔、師友紀談を作りて其一言一話を愼み錄す。浦城の何薳春渚紀聞十卷、その第六卷に全く東坡事實を載す。何薳の父は坡公の友なり。費袞補之、梁谿漫志十卷、其第四卷これ亦全く東坡事跡を記す。其他隨筆瑣記詩話小說中に、坡公の事の多き十餘則にも及び、少きも五六則を出さゞるは無し。もし朱子、東坡同時にて左右袒を募らば、恐くは東坡に與するもの多からん。何となれば朱學門流の人も東坡の人物を慕ひ、詩文の巧思を稱揚する者少からず。羅大經其一人なり。朱子の蘇氏を擯斥せらるゝを甚だ不滿の意あり。朱文公の語を揭て云ふ。二蘇以₂精深敏妙之文₁煽₂傾危變幻之習₁。又云。早拾₂蘇張之緒餘₁晚醉₂佛老之糟粕₁と、此文公二十八字の彈文なり。程蘇相攻てより、其徒各右₂其師₁。然れども孝宗殊に大蘇の文を重ぜられ御製序贊して特に大師を贈る。學者翕然として誦讀す。所謂人傳₂元祐之學₁。家有₂眉山之書₁。とは實を紀するなり。（以上鶴林玉露）此一則にても隱に坡公を尊奉推重の意を見るなり。此外にも、大蘇のことを揭て其文筆の妙を言ひ、又材器出群なるを論ぜ

ろこと
經籍―經書典籍
命世―命は名なり世に名ある英才をいふ
惡左府殿―藤原頼長
袒―肌ぬぐなり黨すること
歐蘇―歐陽修蘇東坡

程朱の註を始て用ひしは、後醍醐の時の北畠玄惠なりと一條禪閤の尺素往來（寛文刊行）に見ゆ。抑舊しきなり。近時、後光明帝、新註を以て四書を讀みたまひて、自我作古との玉音あり。鳩巣逸話に見ゆ。

一本朝に古昔は、論語を圓珠經と外題を錄し、册の小口がきにも爾しるしありと云ふ。圓珠の義は皇侃の疏に據る。孟子の外題を命世才と署せしは、史記の孟軻傳に命世之宏才とあるを取るとあり。孟子の書の此邦へ來るは、論語諸書より後といへども、惡左府殿の台記と云ふ書に永治元年に、孟子十四卷幷音義二卷を學ばるゝ事を載す。永治は今を距ること、七百年にも及ぶべきか。

一宋以來の學問に、左右の袒あり。今に至て勝負決せず。程朱の經術と、歐蘇の詩文なり。中に就て、朱子と東坡との二人、贔負區々にて天下中分と觀らるゝなり。朱子に祖するは利祿を得るの道こゝに在れば、其半は私心の阿諛なり。勢の然らしむる所なり。東坡に祖するは、其人物を愛慕し、其詩文の超妙を欣賞するにて、中心より出て爲にする所有て然るに非ず。又諂媚に出るにも非ず。試に公平に論ぜば、朱子の四書の集註の如きは、不朽の大業にて、萬世有益の書なれば、東坡の詩文よりは其功は賢

影撰—僞作

假託—かこつくる

纖結—かたまり

洞見—見通す

奔竄—逃け隱る

墨守—自説を主張して變ぜざるをいふ

揑造—僞作

記の類も後人影撰の故るきもの也。恩地左近聞書なども此に等しかるべし。近曾の水嶋卜也、桂秋齋など武家故實などと倡へて、種々書を著し古人に假託せしこと伊勢貞丈これを論ぜり。世道人心に益あるは、名を故人に託して信を人に取るも可なり。古實と稱して人を欺くは、誣罔の罪、遁るべからず。

一素問は黃帝に非ず。爾雅は周公に非ず。山海經は、禹王に非るは、小兒と云へども之を知る。古文尙書に至ては聚訟紛拏なり。然れども閻若璩なる者出て、古文疏證を作りては、作僞の纖結を洞見して古文家こゝに於て奔竄せざることを得ざれども、猶今に毛奇齡が殘破の餘壘に據りて、僞書を墨守するは愚に非れば卽ち頑なり。魏晉の人諸書に散見したる訓詁の語を湊合補綴して增多二十五篇を作る。揑造の迹顯然たれども、其言は世道人心に益なしとせず。佗の雜書にて己書を著はして人に託せしは、李德裕の門人、周秦行紀を著して名を牛僧孺に託し、襄陽の魏泰、碧雲騢を著して名を梅聖俞に託する如き、此書に因て紛爭を啓く。又王銍、龍城錄を作り柳子厚に託し、和凝、香奩集を作り韓偓に托す。是れ重きを古人に假るなり。

一我朝に經籍の傳はりし初は、王仁とは誰も知る。經書は當初皇都にて古註を用ひらる。

攙入—書き入れするをいふ

梧窓漫筆 三編 卷下

一　惰の劉炫劉焯の兩人は、時の遺書を求むるに因つて、古書を僞撰し、賞を取り去る。其贋造は、連山易、魯史記等なり。後此事發覺せしが、赦に遇ひて罪を免がる。僞書を作るの公然として史に見えたるは、是れを始とすべし。然れども秦漢より僞書をば作りしなり。尙書孝經などの事は誰も舊く論ずることにて、其外にも列子の一書は、西漢の時に僞作すと見ゆ。淸の姚首源の古今僞書考を著はして遺漏なきに近し。日本にて僞撰の古きは舊事記なりと云ひ傳ふ。其原く所は、古事記の序に誦㆓先代之舊辭㆒をの一句に、太平記第六卷、未來記の條、先代舊事本紀三十卷とあるを以て附會せし也と、多田義俊の駁せし說あり。甲陽軍鑑を高阪彈正の作とし、武門要鑑と云ふ越後の兵法を加治景房とするも、後人の僞撰ならん。高阪の作には非ずと云ふは彈正死後の事を錄する故なれども、古書には後人の攙入と云ふことあり。攙入あればとて、全部を僞書とも定め難し。夫等は近古なり。扶桑見聞私記、藤九郎盛長訓閱集、犬追物祕

人家後房―妾をいふ
北里倡女―色街の遊女なり

中に妙諦あり。人家後房、或は北里倡女、多く歳年を隱し諱む。人の問に遇へば往々二十以上に出でず。因て戯に謂て曰く、汝等亦有二減年恩例一。盡被二燒丹學仙道人買去一と。婦人女子は年歯を少く言ふを喜び、方士羽流は誕妄にて、動すれば齢百餘歳なりと稱すればなり。道士と婦女と乘除は妙諦に非ずや。

踪跡—跡をつける

刑辟—死罪

紛れなき云々—原本紛れなきもせよ

斧鉞—斧にて斬る重き刑

稱謝し、梁の重さ千斤に逾へたるを二鶴銜で去る。夏原吉仍も信ぜず。密に天下に訪求し、金の賤き地を搜索せしに、西華山の下にて、果して人の金を鬻ぐあり。價甚だ賤し。此れを踪跡し、山頂に至り見れば、道士とも六七人、金梁を斲削して在りしが、人を見て飛去る。搜捕の使者、かの半梁を持して、復命せしかば、世祖も原吉の識あるを嗟賞し、其爲に誑れしを悔恨す。明の孝宗の弘治中にも、徽王の道士の爲に誑れて、銀縷紋の門檻を與へ、後に姦迹發露し、道士の刑辟の罹りしも此軌轍なり。因て惟ふに、唐の玄宗に隱形の術を教へし、羅公遠も此類の道士なるべし。明皇を月宮へ連行きしも、金梁を竊む一機軸に疑なし。是等は騙驅の悪徒なれば論なけれども後漢の薊子訓、唐の呂純陽は、異術を得たるには紛れなきにもせよ、人間界に迹を留むるは何事ぞ。呂純陽は、宋元以降は箕仙と稱する世人玩弄の物となる。異術を得て何の益あるや。金丹一粒誤先生の一句、警策なり。陸放翁の薊子訓を詠ぜし詩に、世上年光東逝波。咸陽銅狄幾摩挲。神仙不死成何事。空向秋風感慨多。これも子訓の斧鉞と云ふべし。袁簡齋の詩話中に、反遊仙の詩あり。其二句を記得す。神仙原是尋常事。雞犬由來亦上天。これ淮南王劉安を援て仙方を詆るなり。宋人隨筆

たいふ
竇―穴
虛無―心を虛うし爲す所なきなり
胚胎―始めの義
恬澹―恬は安靜なり澹は淡泊なり
瞞誑―だます
梁材―梁にする材木

一老莊の虛無を說くにて、佛氏の空寂を胚胎し、列子、御風の一言にて、仙家の飛昇を醞釀す。虛無恬澹は、能くこれを用ふれば寡欲養生の益あり、一切抹摋すべきに非ず。長生久視は、貴高の身にて諸欲を窮極せし上の、最一層のこゝに至るなり。實は蒙蔽愚惑の限りなり。彼仙方を修する道士と云ふは、欒大が輩を祖とし、誕妄の說を皇張して、貨幣を弋取せんことを謀る。明王必誅の輩なり。然れども漢の文帝の如き英明にてさへ、新衍平が日再中の說に惑たるなれば、始皇武帝玄宗の如き、侈大を好む氣象にては、方士の儕に瞞誑せらるべき理あり。明の世祖の英武にて、道士の爲に金を騙り取られしことあり。永樂中に、世祖樓上に燕坐せしに、雲際より一の羽士あり、鶴に騎り來り、下つて奏して云ふ、天帝の白玉殿を榮築あるに因て、紫金の梁材一枝、長さ二丈なるを徵る。某月某日來て取らんと。世祖驚異して、此索に從はんとありしを、時の宰相夏原吉の云ふ、此れ幻術なり。天は空洞無物、なにとて宮殿のあるべき。縱令玉殿金梁あるも、人間に徵求すべからずと、議論決せざる頃に、道士復至り、世祖の疑惑を譴め、もし信ぜずんば、雷神を遣はして警を示さんとなり。果して翌日謹身殿に震す。世祖大に懼れて、金梁を式の如くに制して待つ。道士又來て

谿壑の欲―底の知れぬ大慾

財帛―銀財寶

呪法―のろふ法

詛死―のろひ殺す

麋沸魚潰―紛亂甚しき

の谿壑の欲の饜くことなきより、不死の道を求む。こゝにて方士の輩出て、其欲に投ずる餌をなし、修眞の術に、煉丹あり、燒汞ありと敎へ、財帛を弋り取る。譬へば小兒を機嫌よく游ばすに、約千千の戯れ、又紙鳶を放ぐるの、種種戯弄を取更ては、其日々を送る如く、富貴の極の此仙方に至るは、其愚の小兒を誘くに侔きなり。此邦、仙人の說なけれども、至治豐優の極り、中古の帝王、佛法を崇信したまふ。是れ彼土の神仙に惑ふに同じ。佛法にて冥福を修するには非ず、現在其身の如意圓滿具足を求むるなり。其如意具足と云ふより、諸寺諸山に、多くの莊園を寄附せられ、天下の大弊を生ずるは、彼の山門の嗷訴と云ふもの出來り、朕心に隨はぬもの三ありの白河帝の玉音あり。天下の治亂は、人主の邪正より萠蘖して、生民の安危こゝに在り。佛力にて心のまゝに欲を遂げんとせらるゝより、嫡を廢して庶を立てんとする如きは、人の與すまじきを知り、僧徒に命じて、呪法と云ふものにて詛死せしめらるの類、帝治の世に屢見えたり。此一人の邪曲より。天下麋沸魚潰せしは保元なり。唐土の天子の神仙と、此邦の帝王の佛法と、同一弊にて、至尊の欲、竇へ投じて無量の惡事を勸め果は、生民を塗炭に陷れたるなり。恐るべく戒むべし。

り
暢茂條達―暢長は盛に長ずるをいふ條達は枝の分ち布くが如きをいふ十分其材を發揮せろをいふなり
樸遬―小木なり、小才凡器に喩ふ
深文―刑を行ふの深刻なるを

一攝心攻意の敎は、人を精金美玉にせんと求むる忠懇なりと雖も、却て人材を畏縮して、委靡振はざらしむるに足る。宋の諸賢も、國初の人材は、暢茂條達、大厦の棟梁と爲すべし。周程張朱の諸公出て、心性の說盛になりては、人材も樸遬たる小器のみ多し。范希文は士を用ふるに、多く氣節を取りて、細故をば濶畧す。其取る所の孫威敏滕達道の輩は、瑜瑕掩はざるの士なり。或人これを疑うて希文に質すに、曰らく、人の才能ありて過なきは、自ら朝廷にて用ひらる。若し其實可レ用の材あるも、深文酷吏に厄せらる有んには、事に因て、これを起さゞれば、長く廢棄の人となる。是れ天下の爲にする所以に非ずと。故に公の擧る所の士は、槩皆有用の才なりと。葉石林の話を沈明遠の錄したる見ゆ。

一日本には仙人の說なし。常陸房海尊と天野景成と、仙術を得て數百年の後に一たび人間に出て、今は何れの姓の治なりやと、問ひしことを彷彿と記憶す。もし其終を知らざる者を、悉く山に入て、仙となりたるに歸せば、中納言藤房卿も、長崎爲基も、避穀の方に遊び神仙の籍に入りたるかも知るべからず。只思ふに、神仙不死、修眞煉丹などの方は、文成五利の徒の揑造假託せしにて、古より傳來あるには非ず。秦皇漢武

り合ふ
曠日—空しき日
厫倉—もみぐら
吏舍—役所

流徒の民—食なくして四方に流涙する
剝歛—はぎあつむ
富殖の家—富豪
禁過—禁じとゞむるな

て曰ふ、饑歳は工價賤し、大に土木を興し、堂宇を營築すべしと、因て諸寺の工作各地に興る。又厫倉吏舍をも新にせしめ、日に千夫を役す。監司劾奏す。杭州荒政を不恤、嬉遊を縱にし、公私の興造民力を傷耗すと。文正これを聞て自ら條叙す。宴遊し興造する所以は、富家有餘の財を發せしめ、貧者の惠となし、飲食に飽足すべし。工技服力の人の食を公私に仰ぐもの無慮數萬人。荒政の施し此より大なるなしと。此歳、兩浙みな饑荒なりしが、唯范公の領せし治所杭州のみ晏然として流徒の民なきは文政の救荒の道を得たるなり。沈括筆談に載する右の如し。羅景綸又云ふ、近時蒲陽の一寺大塔を規建す。工費鉅萬なり。或人侍郎陳正仲に告て云ふ。この荒歳に當て寺僧民財を剝歛し、無益の土木を興す。公は此土の望となり、盍ぞ郡守に白して之を禁止せざると。正仲笑て曰く、子過つ。建塔の役、寺僧よく自らなさんや。此邦の人を傭うて、之を役使するなれば、其利澤は卑き下に潤ふなり。財を富殖の家に歛して、これを貧窶の輩に散ず。是れ小民これに藉て食を得て、羸し得るは一塔なり。今荒歳に値て、唯恐る僧の塔を爲らざるを、何ぞ之を禁過せんやと云へり。范文正公陳正仲の二賢の如きは、治術を識ると云ふべし。

擧措敏捷―行ひがすばしこくきがきくをいふ
履者―草履取
糟糠の妻―困窮せし時より艱難を共にせし妻
華燭の儀―婚儀
殍殣―饑て路に斃るゝもの
枕藉―重な

にて、嘉兵ことに是れを愛せしかば舊く仕ふる扈從ども、これを妬みて、玩好の器物等を匿して、彼が竊みたると誣ること數々あり。嘉兵これを知り、其無實を憫み、永樂三十匹を賜ひて遣て去らしむ。是れ中一年を間てゝ十八歳の時なり。此賜を資とし、久能を出でて清洲に到り、信長公の小人頭、かんまく一若と云ふ、同鄕の者を賴みて、公の履者となり、頃くにして小人頭となり、名を藤吉郎と更たむ。太閤記（甫庵所撰。）に、黄金五兩を授けて、桶革胴の甲を買しむ。夫を偸み仕官の資とせしことを書せしは、誕妄の甚だしき也といへり。

一尾州津島に、淺井又右衞門と云ふ富有の人あり。其妻の姪は、卽ち豐公糟糠の妻、後に政所と稱する是れなり。其初婚の時は、又右衞門の長屋へ、入婿となりて往き、藁を敷き上に薄縁を掩ひて華燭の儀を行はれしと、彼の環翠の記にあり。

一范仲淹の浙西を領治せし仁宗の皇祐二年、吳中大に饑て、殍殣路上に枕藉す。文正卽ち粟を發して賑恤し、又民の存餉を募る。其術甚だ備る。吳中の俗、競渡を喜び好で佛事を爲す。是に於て、民の競渡を縱し、文正も亦日々に僚屬を帥ゐて湖上に游宴し、自春至夏まで曠日なし。居民も巷を空うして出遊す。又諸佛寺の主首を召て、諭し

空谷の足音—淋しき處に人の尋ね來りしを喜ぶにいへるにて非常に喜ばしきときに用ふ

證左—證據

鄕串—鄕里

發收—だしいれ

危に心を用ふる人は絶て見えず。もし其人あらば、空谷の足音にて、我死後に出るとも、旦暮一室にて交臂する想なるべし。

一松下瓔琴軒と云ふもの、豐臣太閤傳を論ず。小瀨甫庵より後の書なれども、其言は確乎として證左となすに足る。尾州愛智郡の中村と云ふに、上中下を分つ。中中村の代官は、稻熊助右衞門とて、信長の弓預なり。稻熊の女、太閤と前後の出生なるが、瓔琴軒が養母となり、其鄕串の事を話るとあり。太閤十六歲の時に、鄕里を出るに、父の遺留の永樂百匹の錢を少し分け齎し、淸洲に往き、木綿を縫大なる針を買て津島に來り、此針を以て食に更へ、又草鞋に換へて、路費の便とす。(淸洲にては、針の價低くして其先々の驛にては此針を貴ぶ、故に錢を得るよりも喜ぶを以て斯くなせし機智なりや、いぶかし)夫より濱松の町はづれに、垢付たる木綿の白きまゝなるを著て立回る。遠州久能の城守(今川の屬)松下嘉兵が濱松の城守飯尾豐前に往く途上にて之を見て、其相貌(猿に酷た肖たり)を異とし、奚れ自りす、何等の者と、人を遣て問はしめ、直に彼を伴ひ歸り、衣服を替へ、袴をも與へ、初は草履取など一所に居しが、程なく引上げ左右使令の扈從となす。衣服手道具などの發收を掌る。擧措敏捷

娼館—青樓
戯場—劇場
五衛の民—商賈なり
戯子—俳優
樗蒲—博奕なり一に又雙六をもいふ

踏狐疑せず、速に事を發するを善とす。管子に、游を開くと游を禁ずるの二術あり。相反するが如くにて實は表裡相保つなり。四郊の民は貧くして商賈の民は富めば、游を開く。游を開くとは、娼館戯場の類を設けて商賈の財を散ぜしめ、其餘潤の村氓に及ぶの術なり。五衛の民の衰へて、衣弊れ履穿つに至るを見れば、遊を禁ずるの令を下す。游を禁ずとは、游樂の途を塞ぐなり。今時の開游禁游の法は、大に本末を失するなり。是れは運智の活用を遺れて、常套の窩窟を離れ得ざるなり。田舍にて豐年なれば、都下の戯子を招聘して開場をなし、此にて近郷の村氓こと〴〵く來聚すれども、錢幣は其場の潤澤とはならず、却て其地の資産を蕩散す。果ては博徒の爲に誑誘せられ、家産を傾倒し、甚しきは妻孥の衣服を剝て樗蒲の債を償ふにも至る。豐年の樂の一轉變して、凶年の苦よりも甚だし。是れは其民の過には非ず。民はもと至愚なる者なり。開游禁游の二は政事の權なり。郡守縣令に知見才力ある人あらんには、豐年には貯畜を戸每に敎へ、荒歳には上の賑恤の及ばざるをば、別に救濟の道あるべし管子の開游の法など、能く其旨を得ば何ぞ行ふべからざらん。世に實才少くして學識ありと見ゆるも、心性の空理ならざれば、詩文の虛飾にて、民の利病を論じ、國の安

從涌―慫慂と同じすゝめること
蹩躠―ちんばひく形
張獻忠―張巡

綢繆―つきまとふ

する下乘の說なり。名を好むの盛なるは、戰國を甚しとす。信陵君の美人が、跛者の蹩躠として井に汲むを見て笑ひしは、婦女の常態にて、罪とするにも足らざるを、重レ色輕レ士の聲を憚りて、忍んでこれを殺せしは名を好むの弊にて、不仁の極と云べし。張獻忠が愛妾を斫殺し、燭に點ぜしは、暴惡ながら眞率とも云ふべし。適池北偶談を披いて一奇事を得たり。徐藹、字吉人と云ふもの、會稽の諸生なるが、瘕疾(正字通に、腹中の積塊有二物形一を瘕と云)を得て、疼痛忍ぶべからず。歳餘にて彼の瘕よく人言をなず、瀕死に當つて、恍惚として一の白衣の少婦を見る。徐に問ふ、君は張睢陽の妾を殺せしを識るや。君が前生は張公たり、吾は其妾なり。君は忠臣たり、吾何の罪ありて殺して軍士に饗せしや。吾其冤を抱て、君を尋ぬるに已に十三世、君が世々忠臣たるに因て、報復することを得ず。今日甫めて恨を雪ぎたり、と言訖て烟滅して見えず。藹また尋で死す。阮亭その門人の范思敬の說きたるを聞て記せしなれば、假構には非ず。睢陽の妾を殺せしは名の爲にせしには非ざれども、不辜の死の寃枉は、千年の後にまで綢繆するを視て、殺戮をば愼むべきなり。

一利を興し財を贍すは美事なり。聰明疏通の才にて、其必效あるべきを見んには、躊

鴻觀—大觀といふか如し

沮格—じやまする

因仍—從來の則による

土宜—風土に適する產物

鹿臺の財、鉅橋の粟—殷紂の作すところなり

堯舜以來教て富ますの制なり。又娓々として田野の税には、貢助の二法を該用ひんと論ぜらる。滕文公の如き能孟子を尊信せらるゝ侯伯ありて始終委任して疑ふこと無くば、施設作用何等の鴻觀を爲さんも量り識がたし。

一商鞅の言に、民は共に始を圖るべからず、倶に成を樂むべしとは妙語と云ふべし。新規に事を興さんとすれば、洶々然として、物論涌沸して左支右吾し、これを沮格せんとす。必竟は、姑息に因仍するを喜ぶ愚昧より起るなれば、蚩々無智の舌頭を怯れて、興すべき利をも興すに憚り、除くべき害をも除くに畏るゝは、才力の淺劣にて共に治道を語るに足らず。事の紛更を好むは甚だ不善事ながら、心を食貨に用ひ、民生の教育、國用の富實を旨とし、山林藪澤の土宜等を稽へ、萬世の必利を觀ること有らんには、一時財を散じ民を勞することをも隱忍し果決を以て事を剏むべし。但貨利を上に收めんとせば、民の怨府を作るなり。恐るべく戒むべし。鹿臺の財、鉅橋の粟は、周の資となり、李密王充が財と粟とも、唐の大宗の軍實に供するに足れり。不仁にして富むは、自ら斃るゝを速く也。

一三代以後は、唯人の名を好まざるを恐ると、古人も言ひたれども、是れは善事を從涌

賈長沙―賈誼、漢の文帝の時の人
五稼―五穀なり
違忤―くひちがふ
浚剝―多く税などを取りたてるをいふ
暴白―むきだし

の活智も裁制輔相の能を廢す。賈長沙には非れども、痛哭流涕長大息を爲すべし。何もかも、天まかせに爲さば、中庸の贊化の語はいかに濟すべき。事實にて推すにも、旱乾の天災をも、人力の灌培にて五稼の成熟するの類は、幾許もあること也。天を理なりと方付たるは、易の福善禍淫を據とす。本より謂れあれども、易の一語は教誨の上にて云ふ。天下國家乃至一郡一縣を管轄する治務の上にて云はゞ、天地は活物なる故に常理と違忤する所に、却て有餘不足の均平なるべき妙處あることなり。

孟子の諸侯の三寶に土地、人民、政事とあり。又不レ信二仁賢一則國空虛と云ひ、これに承るに無二政事一則材用不レ足とあり。經濟の實智を備へ、慈仁の心ある人に、國政を委任して富實を務むべしとの意なり。卽ち孔子の敎て富まさんの說なれども、當時七雄の爭戰、たゞ功利を而已事とし、白圭李悝等の地力を極むるなど倡へ、生民を浚剝する暴政の中にて、富實などは暴白に述べがたき故なり。孟子、大學、もと治務を開くの書なるに、其說に因て天下億兆の明德を明にし、天下億兆に性善養氣を敎へんとせば、却て作者の本意には非ず。韓非の所謂郢書燕說ならん。天下の農、其野に耕さんと欲し、天下の商、其市に藏せんと欲すなど、仁政を施すは卽ち

運用は覺束なし。理學者流は經を尊ぶことを知れども、史を尊ぶことを知らず、是れ從頭の誤なり。經とは何ぞや、書か、春秋か。尙書は虞夏商周の史なり。春秋は列國の史なり。今經と覺たるは皆史なり。されば書經は秦誓に畢り、此後に聖人出でざれば、經と云ふものは無れども、司馬遷史記を作り、夏殷周の本紀に繼ぐに秦を以てし、聖意を奉承して興廢の事實を錄す。只其書中に諄々訓誨の謨なきを以て、擯して史となしてより、經と史と君臣の如く、尊卑の別、判然として上天下澤の看をなすは所謂矮人の觀場なり。子長の八書は、萬世、天下國家經濟の基本ともなるべき一大典とも云ふべし。其平準書は、書經の洪範を原として食貨を論じ、治務の肯綮を示す。是にても世の蒙昧者の啓發しがたきを慮り、更に貨殖傳と云ふものを著はす。是とても史公の杜撰包彈には非ず。本は益稷の有無を遷して化居するの語を擴充して、周禮土宜植樹の類に據る。龍門は命世の英才にて、天下國家の經濟は、租稅常法の外に、別に一術ありて、山林川澤魚鹽桑麻の政にて、有餘不足の自然に均平なるべきを見はせしなり。後儒の局見にて經の史なることを辨知せず。程朱の語錄を崇信して、班馬の史漢を卑視す。此事天下の通弊となりて、天地の活物も開物成務の才を失ひ、人物

矮人の觀場—見識なく前人の說を承くるなしふ
洪範—尙書の篇名
肯綮—緊要のところ
擴充—推し廣げる

ら
膠桿―もち付いた麥がら
曚瞶―くらむ
騰躍―躍りあがる
王荊公―王安石
譸張爲幻―詐りだまし名を變して人を幻惑するをいふ
溫公―原本溫國

れを啖て飽を取り、麥場に就て身體を轉舒するに、數轉の後に、膠桿全身に粘して、耳目曚瞶し、懊惱憤怒に堪ずして、騰躍すること數丈に至り、已にして屹立して動かず。衆合噪してこれを視れば、早く立死せしなり。是れ猛獸其性の剛烈なるに由て、自ら震怒に斃るゝなり。伯陽氏の柔を尙ぶも理あることなり。

一溫公の王荊公と平準食貨の理を論じて、利權は上に在ざれば卽ち下にあり。故に下を剝せざれば上を損す。上を損せず下を剝せずして、貨利を殖せんとするは、譸張爲幻の說なりと爭辯せられしこと見えたり。溫公の侃々正論は、荊公の項門の一鍼なれども、却て一偏の見解にて、實は上下に損剝の弊なく、財利を居畜するの道ある事なり。天地は大活物なり。活物をば活智にて用ふべし。人が天地を用ふると云はゞ、僭妄とも云ふべく忌憚なしとも云ふべきが、造化の作用はもと、人の用ふるが爲にして、唯其用ふる塗の當否にて、鬼神の與すると與せざると、人情の向ふと背くとの違ひあることとなり。天下國家は云ふにも及ばず、一郡一縣を統治するにも、經濟の才力を運らして、上下に傷害なく、漸を積て富實を圖ること、其職の當務と云ふべく、天命に報答すと云ふべし。理學一應の儒士の、天を理也と見る眼孔にては、活物活智の

暴露—むきだし
穎鋭—筆の鋭きこと
疵議—そしり
犯燎—焼き拂ふ
軟藁—新わら
滾轉—ころがる
麥稈—麥が

一忿を懲すは周易なり。怒に難を思ふは論語なり。人の身を敗り家を覆すは、凶德にして種々あり。其中に怒に出るは其殃最烈にして速なり。怒は本心火より發す。火の物を犯燎するは迅速なり。此道理にて推すに、一朝の忿にて身を亡ぼし親戚に及ぼす。其禍殃の迅速にして挽回すべからざるを怖れ思ふべきなり。兵家の說に、貪兵忿兵の二をば必敗の道とす。然れども、秦の六國を幷呑する如きは、貪兵ながら一時天運の期會にや、呂政が才力の雄偉なるにや、宇内を奄有して、創めて郡縣の治を行ふ。此邦の武田勝頼が長篠の一戰の如きは、忿兵にて速に國を失ひ身を斃すに至りしなり。楚の懷王が秦に幽囚となりしも、忿兵の敗衂なり。忿怒の恐るべきことかくの如し。韓靑老農が紀聞に、膠黏にて虎を取ることを載す。性の躁暴の戒となすに足る。忻代の杒氏の兄弟あり、每に武を講して、奇勝を以て能を爭ふ。嘗て月夜に村莊に行しが、折から虎の夜來て麥場にて麥の軟藁に身を滾轉して遊嬉して快を取るに遭ふ。一人いふ、一箭を以て射殺せん。一人云ふ、予一術あり、膠黐にてこれを取こと飛雀の如くせんと。錢五千文を賭とす。彼一人莊中の戶口に募て、多く膠黐を得て、塗場の麥稈の上に塗り羊を繫で餌となす。其夜果して虎ありて、徐歩して來り、羊を得てこ

棻尾酒—最後に飲む酒
燒尾の醼—初て登庸せられ又は官の昇進せしときの祝宴
玩愒—むだに過ごす
柳子厚—柳宗元
司馬子長—司馬遷字は子長
班孟堅—班固、孟堅は字

記せり。棻尾酒のこと、樂天の詩より出て種々の説を發し、又燒尾の醼のこと、衆口の不同なる如き宋人の隨筆中に間見錯出して、指摘に暇あらず。都て方勻の泊宅編、馬永卿の嬾眞子、沈括の夢溪筆談、孫光憲の北夢瑣言、姚寬の西溪叢語、此類ともに小說家の優なるものなれども、雷同は免れず。近世都下の儒士、傳奇の俗語小說を喜んで讀み、李贄、金聖嘆を尊奉する事、昌黎東坡よりも賢ると見ゆる人あり。却て宋元の隨筆劄記をば涉獵にも及ばず、此流の輩は歳月を玩愒するに近し。宋人の隨筆は雷同襍糅は有れども讀では益あること尠からず。經藝の羽翼と云ふべく、詩文の資料とするには餘あり。我門の人は、詩話隨筆等は務て讀むべし。傳奇俗語小說、演義院本の類は、謹んで披覽する事勿れ。柳子厚の河間傳は、猥褻の極を寫して後人の遺議あれども、本は戰國策史記等に創まる。子厚を咎めんには、先づ司馬子長を貶すべし。班孟堅にも此類の筆あり。何れにも、事實を錄するには、閨房の事にも及ばざるを得ざれども、淫猥に涉らざるやうに記するを雅とすべし。柳河東の河間傳は、比託する所ありて記せしながら、暴露に過ぎて親族聚首の座にては讀みがたし。操觚の客、筆鋒穎銳に誇るものは、其才を恃まず、含畜囘護を心がけ、疵議を遺さぬやうにすべし

禰—父のこと
藝林—學藝の仲間
挿架—書架の中に挿む即ち所持するをいふ
折字—字をわけること
得色—自慢顔
權輿—はじまり

是をも知らざるか、其信ずる高廷禮の信を取る周伯弜を無名の男子と罵るは何ぞや。誣とせんか妄とせんか。禰を尊んで祖を侮謾すと云ふべし。又清の毛大可王阮亭などども、伯弜三體の事に言及べり。元明清三代相承て藝林には必ず彼書を挿架することなり。

一詩話、隨筆の類は、古人の意を用ひて著はすにも非ず、一時の趁筆多ければ、雷同をば免れず。時世年叙を考勘して、此を襲ひ、彼を竊むなどと云ふは、酷論にして、實は事體に達せざるなり。隨筆詩話共に盛になりたるは、北宋の末より然り。同事の各處に出る一二を擧て云はゞ、折字を以て祿命を論ずる、謝石と云ふものの事は、岳珂の程史に見え、沈作喆の寓簡にも出て、何薳の春渚紀聞にもあり。洪邁の翰林にありし日、一日に數草を揮ひ得色ありしに、老卒に耻しめられしは、周密の齊東野語にあり。羅大經の鶴林玉露にも出づ。哲宗の柳の芽を拗りたまひしを、伊川諫められしを、溫公の喜ばざりしことは、四朝聞見錄、幷に沈明遠寓簡、劉元城語錄にも記す。紙鳶の權輿は韓信謀叛し、陳稀と合體し、未央宮の淺深を探らん爲にこれを制し、是れに人を駕せしめしと云ふことは、費補之の梁谿漫志にも錄し、元の林坤の誠齋雜記にも

究竟するところ—おしつまるところ
碔砆—玉に似たる一種の石、爰は玉と思ひ石を取るをいふ

是也。魁讀儒家書。尤工於詩。平生壓立絶俗。誓不出世。住山。至有詩。贈之云。拈筆詩成首々新。興來豪叫欲攀雲。難醫最是狂吟病。我恰才痊又到君。かくあれば、伯弱の選の詩人の把玩せざるなく、注を下せし圓至と云ひ、天紀と云ひ、學識ある僧なれば、伯弱の名士なること益明なり。徂徠氏の學は固より寡陋なれども、瞿佑なり、李東陽なり、都穆なり。此三名家をば知りたらんに、此三家の詩話に如此掲げ論ぜしをば夢にも知らず、口の横に切れたる儘に、伯弱を誣て、無名の男子とせしは、所謂小人無所忌憚なり。究竟する處、周伯弱は有名の大家にて、物茂卿は無識の男子なるべし。然れども伯弱の選する詩は、碔砆の似たるを取り、宮商を舍て淫哇を收むるの誚は免るべからず。精選とは云ひ難し。是れ亦後學者の知らざるべからざることなり。

周汶陽の三體詩のことは、右の外に屠隆の鐵網珊瑚にも見え、郎瑛の七種類稿にも見え、楊升菴の丹鉛總錄詩話の部、其外にも散見す。又一事物茂卿の責めを逭れ難きあり。高廷禮の唐詩品彙は、物茂卿門派の尊奉する書なり。廷禮の品彙を選する引据書目に、三體詩汶陽周伯弱選。唐詩鼓吹元遺山編。郝天挺注。と擧ぐ。茂卿は

の掲げ、今行本に載せたる方虚谷の序文を全く錄し、末に云、按此序議論甚正。識見甚廣。而於周伯弜所集三體詩。則深寓不滿之意。書坊所刻皆不載。而獨取裴子昌序。近見唐孟高補寫三體詩一帙。書此序於卷首。故全錄於此。與篤於吟事者共詳參之。この言に因れば、三體詩にも數本ありて、元明の時に頻りに愛玩せしを知るに足れり。但これのみに非ず、明の李東陽の麓堂詩話にも云へり。選詩誠難。必識足以兼諸家者。乃能選諸家。識足以兼一代者。乃能選一代。一代不數人。一人不數篇。而欲以一人選之。不亦難乎。選唐詩者。惟楊士宏。唐音爲庶幾。次則周伯弜三體、但其分體過於細碎。而二書皆有不必選者。趙章泉絕句雖少。而精。若鼓吹。則多以晚唐卑陋者爲入格。吾無取焉耳矣。とあり。李西涯の此言を觀れば、周伯弜を軒て元遺山を輕すに至る。孰か周汝陽を無名の卑士とせんや。啻此而已には非ず、都穆の南濠詩話に、儼然たる一則ありて、元明已來三體詩をば、人每に誦し、家每に貯へたるを知るに足る。南濠曰。長洲陳湖磧砂寺。元初有僧魁天紀者。居之。魁與高安僧圓至友善。至嘗注周伯弜所選唐三體詩。魁割其資。刻寘寺中。方萬里特爲序。由是。三體詩盛傳人間。吳人稱磧砂唐詩

三家寒村―家の少き貧しき村

袒―ひいき

一則の―一則をか

唐詩訓解を僞作せし、余應孔獻可（書賈）なり。先づ其撰者を李于鱗、袁中郎同選なりと託名す。濟南と公安は、水火相容ざることを知らざるには非れども、妄書賈の心には、三家寒村のものを欺くには左右の袒なく、此選本なれば何れの派へも售れんとの姦計と見ゆ。其庸妄無識かくの如し。

一日本にて足利の末より、晩唐宋元の詩を悅ぶことになり、三體詩錦繡段の二書、盛に行はれしなり。三體詩は、宋文陽周伯弜の撰にて、元明以來の詩話にも間見錯出す。錦繡段二卷は、文明の末（足利義政の子、義尙）僧默雲なる者の纂集にして、彼土に知るべき謂れなし。さて此三體詩を、物茂卿には、古文眞寶と一樣の看を爲し、周伯弜一の無名男子など高聲に罵る。（平玄仲に與る書）其徒の依木附草の固陋なる、實に然として、三體詩を手にすることを耻と思ふに至る。所謂茂卿が一盲の衆盲を引くと云ふべし。先づ元人周密の武林舊事に、韜光菴韜光禪寺道場。與樂天同時。周伯弜有詩。前後諸賢。留題甚だ多しとあり。前後諸賢と一口に說過して、特に周弜を掲るは、其名望詞華を以て榮とするなり。豈無名の男子と云ふべけんや。又瞿宗吉は元人にして、初明に及びし人なり。其所著歸田詩話（卷之上）に、唐三體詩序の一則

恍忽—うつとりする
困憊—くたびれる
山魈魅—山林の妖怪
雄財—金持ち
吳梅村—偉業
搨本—石ずり
噓煽—そやしたてる
聲價—よき評判
鮑以文—廷博の字

須臾にして數百里を行き、數車の氷雹こゝに盡て、神思恍忽として原處にあり。家にかへりて身體困憊し、寢て未起と話りしを載す。此に云ふ天狗は、山魈木魅の類とは知れども、彼土に種々鬼恠を錄せる小説に、天狗に全く同しきものを揭げたるを看ず。猶博覽の客に問ふへし。

一汲古閣の毛晋は、雄財にて藏書に富むに因て、校勘して印行し、其書天下に播布して多く海外にも及ぶなり。吳梅村の集に、汲古閣歌。贈海虞毛生あり。其末に云、客來詩酒話生平。家近湖山擁百城。不數當年淸祕閣。亂離踪跡似雲林。とあれば、書籍のみに非ず、墨帖なども多く刻せしなり。然れども搨本の事は聞えざるに似たり。阮亭の說に、毛生の摸刻最も多くして、吳梅村の輩の交互に相噓煽するに因て、聲價世に盛になりしとなり。後には吳三桂の壻の王生の家に、其藏書も、刷板も歸せしと云ふ。淸の知不足齋鮑廷博も、海虞の毛氏に嗣で藏書多く、鏤板年々盛にて、千帙に至らんと、最初よりの企なれば、千字文を以て每帙に表す。無識の販書家には非ず。太宰純刊本古文孝經に盧文弨の序せしも、鮑以文好古篤學を讚稱す。但し彼土の書賈に一丁字をも不知は、古文眞寶を輯たる鄭本士文(序文に、至正の號を紀す)と、

癡呆—阿呆の子供
攫—つかむ
隆準—鼻高きこと
粥す—商ふ
詭異—怪しきこと
毳間—むくげの間

の怠忽なりと告げしに妖さらに止ざりしかば、今は城隍の神を廢すべしとて、家僕どもに命じて、盡く塑像どもを掊碎せしめ、是れを河中に抛て、別に偶像を更め作り。則ちこれを土神とせしかば、蛇妖こゝに於て止みたりとなり。是れまた孟子の遺意を得たり。西門豹が巫を沈めしは、頑愚を開きしなり。本朝の直江兼續が、人を閻魔大王に使に遣はせしは、狠愎を懲せしなり。

一此邦にて癡呆の小兒、やゝもすれば天狗と云ふものに、攫せられ、三年五年役使せらるゝあり。唐土には此天狗と云ふもの見えず。羽流羽客などの稱呼はあれども、是れは飛昇の術を修するに由ての名と見ゆ。必ず隆準雙翅の者には非ず。頃者王阮亭の池北偶談を讀みたるに、彼天狗の攫挐に似たることあり。邑北の蘇王莊の民某、蕢を平原に粥す。主人の次子、晝臥て醒めざるを見る。病ありやと問へば非なり。此兒昨日田間に往きしに、忽ち天陰り風起り、覺えず身雲中に入る。神人數十輩、形狀詭異なるが、各一車に駕し、其車に服せしは羊に似て獰し。車中に氷雹を載せたるを、彼兒に敎て四方に撒擲せしめ、彼恠神は蒲葵扇にて面を障へてあり、雹を撒して、手中殊に寒甚だしかりしかば、手を羊の毳間に入るゝに、頓に煖なる事火の如きを覺ゆ。

淳醨―厚薄と同じ意なり
庶女―賤女の意
推覈―推し極む
黜陟―しりぞけたりあげたりすること
社稷―社は土地神稷は五穀の神
偸兒―盗兒
指碎―打ち碎く

も踊貴せしかば、虎族ます〳〵暴になり、人民を怯れず、人を殘ひ傷り、竟には人を啖ふに至れり。風俗の淳醨また禽獸に及ぶと、鐵圍山叢談に記せり。老莊の流輩の恬澹無欲淸淨無爲の治を云ふも、空論には非るなり。

一人の精氣は、天地をも感動し、金石をも透穿す。文選江淹の書に、昔者賤臣叩ㇾ心。飛霜擊二於燕地一。庶女告ㇾ天。振風襲二於齊堂一と云ふ。鄒衍が燕の惠王を恨て、盛夏に霜を降らしめ、齊の庶女が寃結して天に告たれば、雷電下擊て、景公臺上より隕られしの類、枚擧に暇あらず。さて禮を以て規正し、道理を以て推覈せんには、鬼神をも黜陟すべし。孟子に犧牲既成。粢盛既潔。祭祀以ㇾ時。然而旱乾水溢則變二置社稷一と云へり。人より社稷の神に貶黜を加ふるも、其不職を劾するにて、此事は後世にもあり。句容に盗あり。改二置社稷一て盗止みたり。下邳に偸兒多し、社稷を南山の下に遷して盗自ら衰息せしこと、陳后山叢談に見ゆ。岳州に田鼠稼を害す。雍明遠令して迎猫の祭を修せしかば鼠隨て斃れしこと、范蜀公集に見ゆ。又劉安世が睢陽の妖宅を二十萬緡にて買ひしに、蛇夥しく出て日に一日より甚だし。安世その所の土神に祈り、此宅は己錢を以て買ひたれば蛇の妖を過められよ。もし蛇妖やまずんば、神

雋なり—深きいふ
辣撻—發越といふが如し
襟度—胸の中
恢豁—廣く大なるをいふ
宋均—光武の時の人
檻穽—落し穴
治所—役所
記—書付
胥吏—屬官

史に、漢の王章不レ喜二文士一語レ人曰。此輩與二一把算子一。未レ知二顚倒一。何益二於國一と。一把の算子は俗語なり。歐公は、其言のまゝに書せられて味雋なり。通鑑には修辭して、授二之握算一。不レ知二縱横一。と改められ、神氣索然たるを覺ゆ。詩にも此類あり。宋の藝祖の微時に、日を詠ぜらるゝ詩あり。云。欲レ出未レ出光辣撻。千山萬山如レ火發。須臾走向二天上一來。趕二却殘星一趕二却月一。と。雄宏の氣韻掩ふべからず。史家これを修飾して云、未レ離二海嶠一千山黑。才到二天心一萬國明とす。詞氣卑庸にして、英傑の趣を失ふ。高祖の大風の歌などは、其襟度の恢豁を觀るに足れり。

一後漢の宋均九江の太守となりしに、其郡中に虎多く人の妨害をなす。檻穽を設け捕捉せんとすれば、暴傷ます〳〵甚し。均の初めて治所に到るに、記を屬縣に下して檻穽を廢せしめ、捕張の令を罷め、貪惏の胥吏を黜け、清靜の政を施せしかば、虎暴おのづから止みたりと、范史に見ゆ。又嶺右の地は、風俗淳質に物價賤下なり。靖康間に蔡絛が博白に(嶺右の地)到りしころは、其地に虎多けれども、人を毀傷することなし唯民家村落を窺て羊豕を盜むに過ぎず。里民これを見認れば、叱避すること犬豕に同く、虎も亦恐れ去る。其後十年を過ぎて、風敎日々に變じ、淳樸漸々に醨く、物價

趁筆―筆先のこと
删落―けづり落す
塗上―大道
明晰條暢―はつきりと筋が立つ
股掌の間に弄する―籠に乘じ自由に翻弄する
很―ねぢけたるをいふ
混糅―まぜこぜなるをいふ
操觚の士―文士

焉。とあり。昭六年、宋寺人柳有寵。太子佐惡之。華合比曰。我殺之。柳聞之。乃坎用牲。埋書而告公曰。合比將納亡人之族。既盟于北郭矣。公使視之。有焉。これ同じく宋國にて一事を再見す。但其人を異にするなり。齊慶封の車の美なるを叔孫豹相鼠を賦して誚りたるは、襄の二十七年なり。其車を季武子に獻せしめ、穆子茅鴟の詩を賦して毀りたるは、襄の二十八年なり。是れ連年一事疊見し、毀る人誣る言、全く同じ。樂桓子相趙文子。欲求貨於叔孫。而爲之使請帶焉。弗與(昭元年)范獻子求貨於叔孫。使請冠焉。取其冠法。而與之兩冠曰。盡矣。(昭二十三年)これ亦必ず一事復出するなり。晉魏舒。合諸侯大夫于狄泉云々。昭二十三年と定元年と、連年兩書す。椒擧曰。夏桀爲仍之會。有緡叛之。商紂爲黎之會。東夷叛之。(昭四年)叔向曰。桀克有緡。以喪其國。紂克東夷。而隕其身。(同十一年)是れ亦一人の口氣を兩出するに似たり。左傳卷帙浩繁なれば、删落を失し、彼此を混糅するもあるべし。其富艶を害するには至らざれども、誤處をば辨知すべきなり。

一文章は修飾に過ぎて却て神氣の索るあり。操觚の士、これを知らざるべからず。五代

に倣て失敗する
玉珠—玉なり
卑—視やすく見る
程朱—程子（程影程顥）朱子（朱熹）
歐蘇—歐陽修三蘇（蘇老泉、蘇東坡、蘇潁濱）
卓異—勝れたるないふ
淘汰—選擇すること
裒集—とり集める

るに足れり。此等は國語に照して事態さらに詳密なり。左氏の意は併せ讀で明白ならしめんとて、彼に逸して此に留めしかも知らねども、優施の名さへ載せざるは是れ亦刪落に過たるなり。

一左傳に、一事重複して刪落すべきを失するあり。文公十二年杞桓公來朝。二月叔姫卒。不レ言レ杞。絕也。書二叔姫一。言レ非レ女也。この事再び成九年に見ゆ。宣九年孟獻子聘二於周一。王以爲レ有レ禮。厚賄レ之とあり。成十三年に再び此事を書す。襄二十五年、齊の崔杼の亂に、晏子立二於崔氏之門外一。其人曰。死乎。曰。獨吾君也乎哉。曰。行乎。曰。吾罪也乎哉。吾亡也。曰。歸乎。曰。君死。安歸。とあり。昭十年の欒高陳鮑四族の亂に、晏平仲端委立二乎虎門之外一。四族召レ之無レ所レ往。其徒曰。助二陳鮑一乎。曰。何善焉。助二欒高一乎。曰。庸愈乎。然則歸乎。曰。君伐。焉歸。と。是れ全く一事を兩處に出すなり。以上は一人の事を再出するなり。又襄二十六年。宋太子痤美而很、合左師畏而惡レ之。寺人惠牆伊戾。爲二太子內師一。而無レ寵。秋。楚客聘二於晉一。過レ宋。太子請レ野二享之一。公使レ往。伊戾請レ從レ之。至則飲用レ牲。加レ書徵レ之。而騁告レ公曰。太子將レ爲レ亂。既與二楚客一盟矣。公使レ視レ之。則信有

一體なり擬はこれを摸するなり
根据—どだい
横歛—惡税をいふ
權譎—てだて
標て榜—看板にする
蒴蘖—めだし
沿襲—從ひ據る
邯鄲の歩を學び—己が本分を棄て他人の行爲

收せし餘を裒集して國語の名を題せしなり。司馬遷の任少卿に與ふる書に、左邱失明。其有國語。の一言は一時趁筆の謬なり。邱明にもせよ、倚相の後人にせよ、其諸國簡牘を取舍せし中に、過て删落して義の暢ざるもあり。又國語を照して事の益詳なるあり。成五年の傳に、梁山崩。晉侯以傳召伯宗。伯宗辟重。曰。辟傳。重人曰。待我。不如捷之速也とあり。待我の二字は、重載の車と云ふ意にて、急に避がたきの意を持せたるながら、意の暢ざる所あり、公用の傳馬をば、避よと云はずとも、彼より避べき理なり。晉語を讀めば。梁山崩。以傳召伯宗。遇大車當道而覆。立而辟之。曰。辟傳。對曰。傳爲速也。若竢吾避之。則加遲矣。不如捷而行とあり。大車に載たる貨物の塗上に覆へりたるにて、待我の義、明晰條暢す。又重人の言に傳は速なるが爲なり、吾避るを竢たば加々遲からんなど、紆徐にして重人の非凡なるを見るに足る。此等は删落に過たるなり。又晉語驪姬の亂の條に、公之優曰施。通於驪姬。この優施の密通の事は左傳に見えず。驪姬の三公子を除んとする、其謀主は優施なり。又優施敎驪姬。夜半而泣謂公曰。吾聞申生。甚好仁而彊云々とあり。夜半に泣て言など、獻公をば驪姬が股掌の間に弄するさまを觀

八家皆私ニ百畝ヲ同養ニ公田ヲ」と見ゆ
封建—地を分ちて君を建つるをいふ
書藏—書を藏むるつゞらなり轉じて書を讀みて其義に通ぜざるものをいふ
聲價—よき評判
擬樂府—樂府は漢代に出でし詩の

學を解せられて、天下の人の明德を明にせんと欲せらるとも、宋以後の天下、三代の古に復せしとも見えず。左傳史記の如きは、事實を擧て勸懲自ら明なり 心性をば說ざれども、世道人心に裨益あるは、語錄劄記の類に非ず。特に史記は刪削の盡さゞる所は有れども、天文地理律曆に及で、天下國家經濟の大典なり。蘇潁濱の司馬遷を固陋にして輕信なりと誣るは、小疵を察して大功を遺すにて、其眼孔の小なる、乃翁乃哥に耻づべし。

近時袁簡齋は、說を立て云へらく、經學を倡ふるは、譬へば述者謂之明なり。詩文の作は、己が精神を抽で心思を嘔く。我より自ら刱むる故に、作者謂之聖なりと。某氏に答ふる書中に見ゆ。予は經學に從事すれども、其論は至當不易なりと覺ゆ。隨園は經學者に非れども、李穆堂(名は紱)に簡して三禮の妄を折き、惠定宇(名は棟)に答へて、其經說の踏襲を論駁せし類を見れば、世の所謂文人とは卓異なることなり。

一左傳はもと諸國の簡牘を輯めて、其中に就て取舍し、淘汰を加へて一書となす。精選に非ずとは云ふべからず。國語もと一手にあらず、列國の記載なり。左氏の傳中に采

叔、魏の人にして時の相魏齊に酷遇せらる去て秦に之き相となるに及び魏齊に報いんとし魏齊を出奔して死せり

酷毒—つらくあたる

井田—周代の田制なり孟子に方里ニシテ而井ス、井ハ九百畝、其中爲ス公田ト

傳寫は、大字を辭となし、細字を聲譜となす。聲譜と詞章と混淆し易ければ、舛錯繆亂敢て知るべからず。然るを樂府解題の如き膚淺なる書を帳祕となして、字倣ひ、句摸し、邯鄲の歩を學び美人の態度をなす。嗤ふべく又厭ふべし。樂府は本意の玄珠を失つて數百年也。崔豹は義を以て名を解し、吳兢は事を以て目を解す。共に埴を擿いて塗を索むると云ふべし。元微之が杜工部集の序にも、樂府の事を詳論す。併觀て惑を醒して可なり。家兄伯恒、曾て明の楊鐵崖に倣ひて、日本樂府數十首を作る、毫も古人の門墻に倚らず。設使刻行して世に公ならば、讀む人家兄の詩才詩學の凡庸ならざるを知んや否。

一唐子西文錄に、經學者の文章の士を卑視するは、譬ふるに王室を挾んで諸侯に令するが如しと、此語至妙と云ふべし。程朱を挾して歐蘇を詆る理學者の通弊なり。然れども程朱は孔孟に比すれば蔑如なり。常に孔孟を口にせらるゝ故に、程朱を非毀すれば、孔孟を貶すに近しと畏れ憚る。文章家の宗とする處は、左邱明、司馬遷なるべし。孔孟に比すれば蔑如ならんが、程朱とは優劣如何あるべき。程朱は心性を主張せらるとも空言空理にして、適切にもせよ、實効は明白に見えず。如何にとなれば。大

逆らはずして身を持し一郷稱して謹厚の人となす者いふ
貪惏慳妬—慾深くそねみ深いこと
誘掖—導くこと
分謗—責の謗を分ち受くる義
祖—ひいき
恩讎分明—恩と讎とをよく區別すること
范雎—字は

の儒士、宋學の心性を説くを無用なりと屏斥し、經濟有用の學を講ずと倡へ、其根据する所は何物ぞと云へば、劉歆附會の周官を剽竊して説を建るに過ぎず。周禮の征賦中には、殊に桀紂の世にも無きほどの横歛重税なども見えて、宋元諸儒の論駁も有ることなり。其戰國僞造、漢儒附會の書を、實に周公旦の説也と思ふ蒙昧か、又は横歛重税を爲して桀を富さんとする權譎か。何れにも此有用の儒先生は、登庸委任せば、國家圾々乎として危かるべし。井田封建を主張するは、本虛飾なれば試用に由なく、亦害を生ずるにも及ばず、周官などを標榜して、聖人經國の術爾々なりと倡へて、附和する者あらば亂の萠蘖なるべし。(周禮一書、全く戰國策士の僞造にも非ず、明眼にて取舍すべきなり)

一樂府をば何と心得たるや不審。樂府はこれ官監の名にして漢書に見えたるを本とす古樂府の君馬黃、臨高臺などの樂章は、久しく傳を失て何等の名義なることを知らず。典午の時には、思悲翁を改めて宣受命となし、朱鷺を靈之祥となし、曹魏には將進酒を平關中にかへ。上之回を克官渡と改む。共に古に泥まずして其時世の樂章を作る。典午の當塗高の迹を蹈まざるは、卽ち當塗の卯金に沿襲せざるなり。もと樂府の

譎詐―すかしだます
暴白―むきだし
臧否―よしあし
睚眦の小怨―少しの恨
狷介―操を守ること堅くして人を容るゝ量なきをいふ
鄉愿―世に

と與る。史記戰國策を讀たる人はこれを知らん。范雎の秦の相となりて、魏齊の己に酷毒なりし憾を報ぜしなど、如何にも痛快なれども、人情輕薄の極も此に見はる。都て何事も痛快なるは、後必ず害を生ず。善く念ひ重く戒むべし。己が廉潔を衒らひ正直を售んとせば、是れ亦恩讐分明の餘習と云ふべきなり。老子の知レ白て守レ黑の說は、保レ身持レ國の妙訣と云ふべし。

一漢土の儒者立言をなすに。己を欺き、人を欺く二事あり。井田封建を論ずる其一なり。井田封建の行はれざるは、己も知れども、學問上の作用を見はさんには、堯舜の治とか、成康の政とかを行ふの技倆なければ、書簏の誚を免れざる故に、行ひ難く施し難き物を揭て、此を以て聲價を博し取るの狡謀をなす。所謂己を欺いて人を欺くなり。又文集の首に擬樂府の詩を置く、其二なり。是れは世諺にいふ、鑿空師の玄關前と云ふものにて、門面莊麗ならざれは、人望でこれを尊崇せざる故に、己も知らざる樂府を作り。讀がたく知り易からぬにて、學識淵博なる狀態を觀す。所謂欺レ己欺レ人なり。本朝の儒士も此れに化せられて樂府を作り、文集の緣飾とす。海濤數千里、歲年數百を過ぎて唐山文士の欺を啗ふは笑ふべきの甚しきに非すや。又本朝

九階—九段
禹貢—書經の篇名にして禹が洪水を治め九州を開きたる顚末を記す
究竟—おしつまり
目—みたて
標榜—極札をつける
肆然—恣
貶黜—おとし退く
横に—我儘に

至清至潔ならんと願ふを好とする勿論ながら、我淸廉を人に矜り、又人の貪汚を咎むるの心あらば、乍禍殃を招き甚しければ爭亂の釁をも啓くべし。狷介の士は鄕愿に比すれば、卓然たるに似たれども、子弟少年の規則とは爲しがたし。世を憤り俗に奮はんの念あるは、廉直耿介の美質ながら、物を含容するの度量なければ、人の上となり師となり長となるに足らず。凡て人は度量寬宏にして、人の短拙過失をせめず、貪惏憸妬の性質なるをも能く容忍して、善良に敎化誘掖するに非れば、學問の益を見ること無し。

習與レ性成とあり。性は易へがたし。剛柔賢愚の如し。剛のまゝにて習なければ、折れて用をなさず。柔なれば撓みて事を遂げず。性の剛も折れず、性の柔も撓まさるの術は敎にあり。敎は卽ち習なり。是もと夔の典樂の敎へ、皐陶九德の訓なり。

一分レ謗の事は聖人の經には見えず、左傳のみなり。司城子罕の言に、宋國區々にして有レ詛。（人を毀る）有レ祝（人を譽る）は、國の福に非ずとなり。國に詛祝あり、左右の袒あるは、亂離の萌蘖にて甚だ惡むべき事なり。子罕の言は政體に煉達せる確言と云ふべし。分謗のことは、古人忠厚の意なるに、降て戰國に至て、恩讐分明と云ふこ

代の文豪、韓退之と並び稱せらる
太宗―唐の太宗皇帝
魏徵―太宗に仕へし名臣
瀆告―けがし告ぐ
班固―字は孟堅後漢明帝の時の人、父彪の成せる漢書を續成せしを以て名あり
評騭―論じ定める

憚なく、卒に南北の黨議の起るを馴致して、天下これより瓜分せり。人才の能否を覈論するも、鼓舞の一術とも云ふべきなれども、君子は毀譽の爲に心を動さざれども、小人は貶黜せられて怨恨憤恚を發せざることを得ず。されば當時見在の人物を評論するを國家に禁ぜらるゝは、紛爭の原を杜ぐの意なること明なり。今市井無知の庸妄輩、やゝもすれば、藝林の士類を品評し、横に名流を汚衊して、賢愚を顚倒すること少からず、都下の衆人をば欺き得ざれども、寒郷僻村の愚民をば瞞誑するに足れり。國家寛典にて劇かに此流輩を罪に處せらるゝ事は無れども、子弟には此の如き薄行を嚴禁ずべきなり

論語中に人物を論ぜし申棖微生高などの類は、其時世の人なり。孔子門人と一堂上の話說なれば、回護あるべき謂れなし。左傳に見えたる、其時世の人々の生死得失を評せしとても、稠人廣衆の席にて、公然として口舌に出せるには非ず。後漢に至ては、天下に暴白して臧否優劣を臚ぐ、睚眦の小怨天下の大亂を生ず。懼るべきの甚しきなり。

一伯夷叔齊は聖の淸なれば、貪夫の心を廉潔に薫陶するの功あり。凡人とても己一人は

ぼりきたない

僃を作る—悪例を作る

源君美—新井白石

汗牛充棟—非常に多きこと「處レバ則チ充ニ棟宇ニ出レバ則チ汗ス牛馬ニ」

雨傺—長き雨

禍殃—わざはひ

詆笑—そしり笑ふ

柳子厚—名は宗元、唐

て、識を立んとすれば、訐直せざることを得ざれども、中に就て回護の道もあるべきか。然れども、史筆に志ありながら禍殃を惧れば、柳子厚に詆笑せらるべきなり。夫の直言極諫は、漢以來これを尊ぶ。唐宋に及では、先づ君は納諫の美を掠め、臣は直言の名を售る。太宗魏徵すでに此踪あり。宋の余靖の如きは、專ら直名を售るに勇み、仁宗もこれを厭はれしこと見ゆ。余靖が仁宗に對して面陳するに、口中より唾を發し、帝の面を汚すに至れりとあり。仁宗の時は天下富實にして、四夷虞なく、政治休明なり。何等の急務弊政ありて、數々仁宗に瀆告せしや。唯是れ直を售り名を求むる鄙貪なり。然れども直を售る臣あれば、事に壅蔽なし。諛を獻ずる臣用ひらるゝ世は、傾覆日なしと知るべし。

一 班固、創めて古今の人物を評隲して、階級を設け、上中下の三等に、又三品を剖て九階となす。これ禹貢の土田を分つに、上の上、中の下などの品目に本づくに似たり。此人物表のことは古より論あることにて、究竟は無益なるに似たり。然れども其時世の人物に及ばず、謹愼を存して爭端を杜ぐの意なるべし。後漢に至ては、八顧八厨などの目をなし、月旦評を作り、人物優劣を標榜するに至ては、肆然として忌

製せしといひ傳ふ
老莊―老子莊子
貨殖傳―司馬遷の史記にあり
貪惏汚濁―むさぼりけがれたる
一錢―錢は匁
孚嫗―かへすこと
五莖―五本
狡獪―わるがしこい
貪猥―むさ

昌の縣令となり、其地に至り、先づ第一に雞卵の價を問ふ。一錢に三顆と答ふ。卽ち錢十千を出して三萬卵を買取て、これを村里に附屬し、孚嫗して雛とならしめ、一雛を三百文に賣却せしむ。半年の間に九十萬を獲たり。又竹筍の價を問ふに、五莖一錢なり。卽ち十千錢にて五萬莖を買取り。條達して竹となるを待て賣却せしめ、錢五十萬を收む。其術の狡獪なる、其心の貪猥なる、可ㇾ憎可ㇾ鄙の甚しきなれども、貨殖傳これが傭を作れるなり。

一孟子の直からざれば道見れずとは、墨者夷之と面論して、渠が惑を解かれんが爲なり。論語には、訐て直とするを惡むとあり。訐いて直とするは隱伏を發摘するなれば、直道ながらも人を害なふ事ある故なり。訐いて直とするは徒に人の惡む所なるのみならず、鬼神の疾むところ、天地の容れざる所なるを知る。源君美の著述、汗牛充棟、多く有用の編錄なれども、讀史餘論、古史通の如きは、垢を洗ひ瘢を見はし、鬼神も愁恨せしにや、登庸得意の時には、其著述の書一たび火に災し、其後廢黜失意の日には、深川の□に僑寓せしに、連日の雨潦にて著述の草稿をも漂沒せしを悲嘆せられしこと、其手簡中にも粗見え、且人の口碑に傳ふる舊し。史家の三長、才學識に

氣脈貫串—筋道がよく通ること
管韓—管子韓非子
淮南呂覽—淮南子と呂氏春秋
湊合—とりあはせ
蒼頡—黄帝の臣鳥跡を見て文字を

ぜし條に、老聃の師を商容なりと司馬貞が史記の索隱を引たるまでにて、實は老聃の商容を師とせしとは誤なり。老子は常摐に學びたること劉向の說苑に出るを知らず、又老聃の生死を論じたるに手近き莊子中に老聃死したる明文あるを知らず。此外にも叢攷中に遺漏あり、紕繆あり、古今著述の完善なり難きを知るべし。

一諸子は踳駁一ならず。信用すべきに非ざれども、其一手に出たるは氣脈貫串して、治務の資益となるもの少からず。管韓二家の經濟を論ぜし、孫武の兵制、墨翟の尙儉の如きも、其獨得の卓見ある皆不朽に足る者あり。淮南呂覽の二子は湊合補綴の編錄なれば、雋永の味は乏けれども、流石に古書の糟魄なれば、味外の味あり。鴻烈解（本經訓）に蒼頡字を制して鬼夜哭すとあり、高誘の註に、鬼神も文字に劾彈せられんことを懼ると云へり。此說は善く肯綮を得たるものなり。老莊は自然を尙びて作爲を屏く、是れ矯激の說にて平正ならざれども、知見を闢くは、詐僞を誨ふるの漸なるを知るべし。嘗試に、一事を證とせん。司馬遷貨殖傳を著はし。山林竹木陂澤牛馬生息の道を論ず。此は有用經濟の術の一端なり、然るに後世貪婪汚濁の士ありて、貨殖傳に根据して、暴政を施すあり。近曾小說を讀て浩嘆せし一事あり。唐の夏侯彪之、益州新

昭侯幣袴を藏す―昭侯が破れたる袴をも無意味に臣下に與へざりしをいふ
繼襲―嗣子をいふ
蝸角名―蝸牛の角の名つまらぬ名のこと
暗裏―何時の間にか
宣尼―孔子なり
原委―本末
老聃―老子

ずして、小過小罪を宥し恩を全くするを人君の美政とす。
周密の浩然齋雅談にいふ。候館牆壁の書する所に多く紀すべき者あり。貴陽池驛壁間の語を錄して云、昨日雨。今日晴。前月小。後月大。君欲レ問ニ百年一。百年如レ此過。孰爲レ辱。孰爲レ榮。何者福。何者禍。山中多ニ白雲一。莫レ敎ニ脚一蹉一。また潭州四通館梁間に記す語あり、蝸角名。蠅頭利。老天術何巧。以レ此役ニ此世一。昨日一替死。今日一替生。暗裏換レ人。人不レ悟。門前每日見ニ人行一と是皆警世之辭也。（以上）前の貴陽壁間の語は、荀子の意なり。天地始者。今日是也。百王之道。後王是也。千人萬人之情。一人之情是也。（不苟篇）又云。欲レ觀ニ千歲一則審ニ今日一。欲レ知ニ億萬一則審ニ一二一。故曰。以レ近知レ遠。以レ一知レ萬。（非相篇）直截明快と云べし。宣尼の子路に敎へたまふ、未レ知レ生。焉知レ死。未レ能レ事レ人。焉能事レ鬼。（先進篇）と示し給ふを發明するに足れり。

一趙翼（雲菘）陔餘叢攷四十三卷、上は經藝より、下は委巷細事器物玩好に至るまで、考證明覈にして、一部の好書、坐右必貯となすべきなり。然るに雲菘經學なければ、書易などの引證には、殊に其原委を顚倒せしも有ども、此は姑く措て。老聃彭鏗を辯

き恐れる

儒者—臆病者

躁者—輕躁の者

江村專齋—儒醫なり名は宗具加藤清正に仕へ其沒後京都に居り後水尾上皇に召されて修養の術は其の字にあるなと對へまつろ、歌を善くし長壽せし人

入レ島。勝則輦ニ海外奇珍一貢レ我。不レ勝而死。盡除ニ内患一。（斥ニ范文虎等一。）這達子（斥ニ世祖一。）儘有ニ算計一。關白遣ニ清正行長一。與ニ朝鮮一爲レ難。亦是此意。一二酋決不ニ敢歸一。亦何苦殺ニ入中國一來。中國人全然不レ曉。儒者爲ニ封貢之説一。躁者欲ニ盡兵力一。跨レ海長征。中國有ニ甚兵力一。學ニ得倭子一襲レ人。只備禦爲レ上。漸漸消ニ耗他一。（同卷）と記せり。朝鮮攻の考は、揣摩の説にて實を得ざるなれども、所見なしと云べからず。

一江村專齋が雜話に云ふ。信長は天性吝嗇の人なり。角力取の三番打したるに、燒栗一つ褒美に與る如きにて知るべしと。然れども覇者の術は、信賞必罰、名器を濫用せず、韓昭侯が獎袴を藏せしの類は、必ず鄙吝にも非ず。總て賜予は、上の德澤の下に覃ぶなれば、多きを善とすること勿論なれども、賞罰に至つては、淫刑は云迄もなし、濫賞をも嫌ふことなり。太閤の濶達にて恩賞を過分に與へられしは、英雄の心を攬るの術なれども、一傳せずして速にこれを奪はる。加藤遠江に甲州全國を賜ひ、其子に至て僅に二萬石を與へ、其餘をば褫はる。丹羽長重に七十萬石を賜ひしを、其子に及ては僅に四萬五千石を與ふ。氏卿の會津百萬石も、子息の世に八十萬を削奪して二十萬石の家となる。繼襲の時に子細あるにもせよ、刻薄少恩と云べし。始より過與せ

ころ觀は道士の居ると
ころなり
沈淪―おち
ぶれる
相家―人相
見のこと
令終―よき
身の終り
肯綮を認む
―要領を得
たること
□―家康
なり幕府時
代なれば家
康の不利な
ることは公
言する能は
ざるなり
怯怖―戰

めり。頃之して井戸理兵衛と云者の打手に向て、反撃に遭て無名の死を爲せり。相家の說に多く婦女を犯せるものは、姦婬ならざるも、令終なしと云へり。謂れある事ならん。(山三郎が高貴の婦人を姦亂せし始末は、國枝淸軒が武功要名祕錄に出づ)

一日本の史册に見えたるは、范曄が後漢書を始とするは誰も知ることなり。其後は諸書に散見し、歷史にも書して絕えず、明に至ては、力を殫して搜索せしと見え、日本の將棋のさしかた、定家卿の百人一首の和歌をも漢語に譯したる書あり。其題目は忘れたり。近者朱國禎の湧幢小品を讀しに、大阪一亂の事を署記して、粗肯綮を認たるに似たり。(朱國禎は、萬曆の進士なり、元和元年は、其四十三年也)曰。日本原六十八島至二平秀吉一。始統二攝之一。及二老且病一。子秀頼尙幼。托二於婦父□一代二攝其位一。吉死。□止以二和泉河内一歸レ賴。賴成立。索二其位於□一。□不レ與。忿還二其女一致二爭鬭一。賴兵敗。走二入和泉一。焚レ城而死。又有下言逃入二薩摩一者上。其位遂歸二於□一傳二其子一。爲二武藏將軍一。(卷三十)とあり。文祿の朝鮮の役を記せしあり。當時明朝にて大に怯怖せしを冷笑せるさまなり。曰。元世祖征二日本一。固是好レ大喜レ功。却有二深意宋末來降諸將范文虎等。與二部下一。何止數十萬。䠞二躅海上一。恐爲二後患一。故驅レ之

狙擊—ねらひ打ち

美姣—少年

珠璣錦繢玉とにしきあや

寺觀—寺は僧の居ると

大聖寺の山口玄番を前田家にて攻らる。山口が陣は山麓にあり。利長公いつも躬ら戰頭に前んで、山巓に到りたまふ。山口方にて其所へ標をたて、銃手の精煉なる者に命じて狙擊せしむるに、曾て中ること無しと見えたり。有命の將には矢石のあたる者に非ずと、豐公の宣ひしは傲言には非ず。

一戰國の時には、男色盛に行はれ、孌童の中より大剛の勇士多く出づ。明智左馬介（三宅彌平二とて光秀の小姓）光俊、直江山城守（春日源五郎とて景勝の小姓なり。長臣直江大和養て子とす）兼繼が其傑然たる者なり。兼繼は器量勝れたる故に、福嶋口の大合戰に伊達政宗、最上義光の二將を敵に受て、景勝は高臥安眠、兼繼一人の釆幣なり。扈從の美姣にて見れたるは、秀次の不破萬作、蒲生氏鄉の名古屋山三郎、木村伊勢の淺香莊次郎三人のみと記せり。就中、山三郎は容色も殊絕し勇氣も勝れ、十三歲の時に武功あり、十七歲の時に氏鄉卒し、浪人となり、父の許に歸り、京洛に在りて衣服刀劍に珠璣錦繢を施し、華靡侈麗を窮極して、寺觀に游跋せしが、高貴の婦人に眷戀せられ、屢姦亂をなす。其臭聲世に布たれば、勇名は有ながら、聘して臣とする公侯もなく、久しく沈淪せしが、森忠政に仕へて三左衛門と改め三千石の祿を食

相傳へしと稱する鼎にて支那の寶物なり洛は洛陽

稽首—首をたれる事

惡疾—癩病

の彰にして王を尊ぶべし。今此兩字を併せて守ること能はざるは、周の赧王の秦に入て稽首して地を獻じて、武王已來の天下此にて滅亡せしに同じと。痛快の論なれども、其言は過激を免れず。（京山の說は原謝良佐に出たるなり。上蔡語錄に謂く孟子沒。天下學者。不㆑識㆓自家寶藏㆒。彼佛氏窺㆓見一斑半點㆒。遂將㆓擎拳豎脚底事㆒。把在㆑手。敢自尊大。輕㆓視中國學士大夫㆒。而世人莫㆓敢與㆒㆑爭。又信㆓向歸依之㆒。使㆓聖學有㆑傳。豈至㆑此乎。とあり。此言より發せし也。）

一天の名將勇士を生ずるは、秀傑の氣を鍾めたるなれば、是を擊つものは、必ず後災を惹くことあり。武田信玄を鳥銃にて擊たる菅沼家の步卒の輕部何某は、後に惡疾を發して死せりと云傳ふ。本能寺にて信長公を槍付奉りし安田作兵衛（天野源右衛門と姓名を更へ、立花家に仕ふ）は頰に贅肉を發したるが、大剛の者なれば、琴の絲にてこれを紮り、其餘を柱に結つけ、足を蹶張て贅肉を拔きたり。如㆑此こと三度にして又發す。四度めに自害して死す。名將を刺たりし祟也と云へり。魯の朱家が季布を匿し置き滕公に說たる、人臣各爲㆓其主用㆒。職耳と云は、至當の事なれば、丁公が高祖を見逃したるをば學ぶまじけれども、戰爭中にも心得あるべき事にや。

をいふ
詼譃—おど
け

九鼎—禹よ
り夏殷周と

など云ふよりも甚しき邪說也。莊子の說も愛より出たれば其口氣の詼譃なるまでにて、仁の大體は失はず。朱の名儒大賢と稱して、論語諸書を老莊禪佛に捏合し、其謬妄更に其上に出るは何事ぞや。

郝京山(敬仲輿)九經全解を著はし、經學の大家なれども、論語の學の字を覺悟にて說き、大學の明德を淸淨圓覺となす。其意に謂ふ。佛說の明心見性の屬は、皆吾儒中の妙處を仙佛二氏に剽奪せられし也とし、曰。古今道術無レ過二定靜一(大學解)精神凝聚。盛德大業。由レ此出。大學知止。中庸不二。論語一貫。孟子收二放心一。易何思何慮。書惟幾惟康。詩不レ識不レ知。佛慧。僊丹。夫豈異術。皆蹈二襲聖敎餘緒一而偏用レ之也。世儒褊狹。惡二二氏似一レ己。倂二定靜一諱二之不一レ講。偏主二格物一。以レ窮二盡天下物理一爲二入門一。謬哉。と云ひ。又明德兩字。乃天命人性指南。學問淵源。二氏竊取。變換爲二妙明智慧定光種種名色一。其實本二聖敎一也。亡失既久。儒者怯懦。不レ求二光復一。反引レ嫌卻避。遂爲二二氏奄有一と。此に續く語、特に妙なり。曰く譬へば、王室(儒道)播遷して地を强藩(仙佛)に委するが如し。明德の兩字は、猶九鼎の洛に在るが如し。能王孫滿の節を抗げ言を執るが如くせば、猶大義

動かぬ
頓足—足ずりする
滿人—圍賴をいふ
宴安の酖毒—酒宴して樂しく暮すは身體に害あること毒藥の如きをいふ
逐條明揭—一々擧げる
程門—程子の門
肚皮裏—腹の中
浮屠氏—佛

脚の巡撫と呼び、之芳は變を聞て掀レ髯不レ已しかば撚鬚總督と號せしこと、四王合傳に見えたり。淸の太祖天下を平治して纔に十年餘にして、將軍たる滿人變を聞て攤軟となるに至る。所謂宴安の酖毒恐るべきに非ずや。

一儒者の老莊を說得ざるは拙と云べきのみ。經書を取て老莊に附會するは所謂我儒の異端と云ものにて、罪を辭しがたし。宋の諸老先生の多く佛老に薰染し、聖經に附會せしをば、予少時訐直編、疑問錄を作て逐條明揭す。彼の程門の四天王と稱せられし楊龜山は、中庸の君子無レ入不二自得一を卽ち是れ莊子の逍遙游一篇其意なり。孟子の知者行二其所レ無レ事は、養生主の一篇なりと云ひ、孟子の性善を佛說十識中の庵摩羅識（譯言に白淨無垢。）に比し、形色天性也を色卽是空に比する如き、又謝上蔡の佛氏作用是性の說に溺れて、知覺を以て仁を說き、曾點浴沂の對を以て禪家脫俗超妙の事と覺え、子路冉子被二曾點冷眼看一。他只管對二春風一吟二咏肚皮裡一。渾沒二些能解一。豈不二快活一と云ひ。又曾點有二甚事一。列子御レ風事近レ之とも云ふ。最も亂道の甚しきは嘗て呂晉伯に告て世人說レ仁。只管說二愛上一。怎生得レ仁と云が如き、全く浮屠氏の舍身割愛を以て仁の大なる者とするなり。此は姑く聖經を援かず。莊周が商太宰に答へて、虎狼仁也

烏薪―堅炭

臼子裏―臼の中

席子裏―むしろの中

撞不動―持ちあげても

慮も有たきものなり。頃者、宋稗を披閲してたまたま感激せし事あり。政和中に諸王禁闈に宿直して夜寒甚し、命じて炭を取來て爐に添しむ、使令の人烏薪を進めしかば大に怪みて、此物には非ず、炭とは深赤にて烈熱なるもの也と云へり。是火を炭とおぼえたるなり。(原書は却掃篇か)今世俗に云ひ傳る、都下の貴游子弟は、米は苞のまゝにて田より生ずる者と覺ゆなど云ふ。是は無逸より出たる比喩なれども、是にも典故あり。宋の徽宗の朝に、蔡京の諸孫生長膏粱不知稼穡。一日蔡京戲れに諸孫に問ふ、汝曹日々飯を喫て米の出る所を知るや。其一人遽に對て曰、從臼子裏出。京大に笑ふ。其一人旁より應て曰、不是。我見在席子裏出と。蓋京師運米以席囊盛之故云。(曾敏行の獨醒雜志)席囊は、今用ふる叺と云ものなり。前條の火を炭と記えたると同日の笑談にて、昇平の積弊、下情に悟きこと斯の如し。

清の康熙十三年吳三桂雲南に叛し、(日本延寶の初)閩中の耿繼茂これに應ぜしかば、天下騷擾大方ならず。時に兩浙を鎭ずる大將を園賴といひ、巡撫を田逢吉と云ひ總督を李之芳と云ふ。耿繼茂が吳三桂に連つて反逆せしの報至りしかば、園賴は攤軟、不能起とて腰が拔たり。因て之を撞不動の將軍と稱し。逢吉頓足不止しに因て跌

膏粱紈袴の子弟―貴族の子弟なり

遊戲にて却て深く答むるには足らざるなり。

升庵の丹鉛錄に、漢書、趙曄撰ニ吳越春秋ー。晉書、楊方亦撰ニ吳越春秋ー。今世所レ行曄邪。方邪。（卷二十七瑣語）とあり。此一條にても、其學の固陋淺薄を知るべし。元趙曄の作りたる吳越春秋は十二卷なり。晉の楊方が作りたるは吳越春秋削繁と名て五卷なり。又皇甫導（唐人）吳越春秋傳十卷を作るとも見ゆ。如レ此載たるは、尋常戶有の書（故に書名を匿す）に出でたり。升庵は奇書をば讀たりや。普通に讀むべき書をば却て披覽せざること明なり。只范史及び御撰晉史のみを瞥視し、たま〳〵同じ書名を視つけて、斯箚記せしは淺陋ならずや。

一邵康節（雍、堯夫）の言に、生ニ于太平ー。老ニ于太平ー。爲ニ太平之幸民ーと。陸放翁（游、務觀）是に反して謂く、太平に生れ太平に老たるは幸を知るとは云まじきなり。予が如きは、生ニ於亂離ー。乃老ニ于太平ー。眞可レ謂レ幸矣。（劍南詩稿自注）膏粱紈袴の子弟は學問も無ければ事情にも通ぜず、太平に生れ太平に長じ、狗馬玩好に日を送り、漁色耽酒に精を耗し、醉生夢死して、祖宗の艱難をも思はざるの徒、比々是なり。太平の餘澤の茁たき極なれども、志ある人は別に太平に報ゆるの道を求め、祖業を隆盛になすの思

一覇儒—徂徠
沁淫—しみこむ
中祕内府—天子の御倉をいふ
輕儁—かろくさえる
牽强附會—こぢつけ
導駕—天子の車の先驅
典故—よりどころ

さて、斯の如き眼光の小なる儒者衆ゆゑに、朱紫陽の學は經書の解に於ては、精微を極めて遺漏詿誤なしと思ふは、尤至極にして實は其蒙昧あはれむべきなり。余これが爲に疑問錄を著はして聊か世人を覺醒す。さて百年以前に朱學を攻る一覇儒を生じ、一時是に風靡されて、其毒今も猶人の脾肺に沁淫す。其徒の望んで畏るゝは、明の楊升菴（愼用修）にて、升庵を古今博識なりとす。升庵は其父楊廷和、宰相たるに因て、中祕内府に充斥する珍異の書を該覽して、其輕儁の才を資しなり。其實を云へば博を貪り多を競ひたる故、粗脫繆妄、指摘に暇あらず、且好で人に盭り異を立んとするより。牽强附會の僻說多し。此故に一時是を攻る者、群然挺起す。胡應麟（元瑞）丹鉛新錄を作りて其紕繆を條辨するが如きを見るべし。謝肇淛が文海披沙にも、升菴が學問の麁漏なるを論じ、且其儁才雄辯にて一時の人物を誣服し、首肯せざる者ありて往復詰問すれば、人間になき珍異の古書の名を揭て、其中に出たりと答へ、人の口を塞ぐ。譬ば、宋の陳彭年が導駕をなし、誤つて黃道を行きしを有司是を詰りしに、自有二典故一と答ふ。有司も其該博に氣を呑まれて復糾さざりしに同じと。肇淛が語意を玩べば、升庵が博識を負みて多く人を誣服せしを想像すべし。漢雜事祕辛を僞作せし如きは、文士一時の

く學問して行動皆禮に適ふこと

四子—四書

返魂香—死人の魂を返らしむる香なり武帝李夫人の死を念ひて止まらず方士をじて此香を燒かせたるに夫人見はれしといふ

寵奬—もてはやすこと

ざる學風あり。切實を務むるとなり。其徒筆記と云ふものを相傳して其講習する所は、四子小學近思錄に止る。其固陋如ㇾ此なれば、實は朱子の集註をも讀得ざるなり。是は孔孟の宗旨如何などと云ふまでも無く、先其尊信する朱子に背くと云なり。近日一書を見たるに、羅山先生の始て神祖に謁見ありし時に、漢の高祖と光武との世系を聖問あり。又漢武の返魂香の故事、屈原愛蘭の出典をも聖問ありしに、應對如ㇾ流にして、低回遲疑のさま少も無りしかば、殊に御稱譽あらせ給ひ、眞に有用資世の實材なりと宣ひて、是より寵奬日々に隆なりしと(擧知錄)なり。羅山先生の博識は敬服すべき勿論なり。

神意の學問を用ひたまふ所を觀るべし。後世詞章を浮華とし、博識を虛驁とする固陋の見とは、天地雲泥の懸絕と云ふべし。今日切實と稱する學風は、余不ㇾ識神意に合ふべきや否。

一本邦の人の經學は、先は學庸語孟に止つて、聖人の遺經の尊崇すべき周易尙書などに手を下し精力を用ひたるを見ず。彼四書なるものは、程朱の私に定められたる者にて、是を聖人の手定の詩書易に配するは愚と云ふべし。

規諷―ただしいさむること
侯國―大藩
封内―領分内
畜粟―かこひもみ
櫝―箱
博文約禮―論語より來る語なり博

に移し、其ある所の食に就て生活せしめ、又河東の粟を河内に轉ぜしめて、河内の民の老稚の移し難きものの食とすとなり。これは良法にして、恐くは魏罃の私智には非ず。周官の遺意にて晉國傳來の舊政なるも知るべからず。孟子の五十歩百歩を以て規諷せられしは、治道の最上乘の教へらるゝには、左も有るべきか。今日にも梁の惠王の如き準備をなす侯國あらば、有志の人と云ふべきなり。

大司徒以下に論ずるは、平日の備豫には非ず、臨時の權政なり。平年の務の上にては、九を耕し三を餘し、家に蓄藏あらしむるにあり。詳なるは周官の上に見ゆ。寛政の政に諸侯に令せられて其封内に畜粟の事を創めらる、善政と云ふべし。

一學問の主意は、世道人心に裨益あるに在り。されば空詩浮文を務となし、記誦該博に矜るは櫝を美にし石を售る類なり。詳なるは前編に論す。然れども博文約禮は聖教の第一義なれば、博覽多通に從事し、古今の事物に明にして、人情世態に洞識するに非ずしては、眞の有用の材とは云がたし。詩賦文章を制するも、才識を興起するの一路なり。世に御遺訓と稱する書に、詩賦に耽るべからずとは有れども、詩賦を禁して作るまじきとには非ず。近時一種理學中に又一區別をなして、歴史を讀まず詩賦を作ら

逋逃―追ひとらへること

勞攘―骨折

蕃樂は樂を閉ぢて作さず。十の多昏は聘幣を簡にし、婚嫁の時を失はざらしむ。十一に索二鬼神一は禳レ災祈レ福なり。十二の除二盜賊一は逋逮を嚴にし民間の害を去るなり。此十二條は饑荒にて民の他境へ散亡せざるやうにとの先生の仁政なり。されども此に止つて移民の事は見えず。これは唯尋常水旱不作の年なるべし。大饑大凶歲に至つては、移民の說もあり。周官又云ふ、大荒大札（札瘥の義なり。）則令二邦國移レ民通一レ財。（此二事は。前の十二政の外なり。）舍禁弛力、薄征、緩刑、（大司徒）これは諸國に令を下して、此權宜を行はしむるなり。又地官に云へる、凡萬民之食レ食（音飤）者。人四鬴（同レ釜。六斗四升を云。日本の斛目にては、今の六升四合餘に當るなり。）上也。三鬴中、人二鬴下也。若食不レ能二人二鬴一則令二邦移レ民就一レ穀。詔二王殺一二邦用一（廩人）とあり。是は人每に一月の食を云ふ。上中下は歲の豐凶を斥して云なり。二鬴なること能はざるは、歉歲の甚しきなり。又移民のことを云ふあり。秋官に、若邦凶荒則以二荒辨之法一治レ之令二移レ民通一レ財。糾レ守緩レ刑（士師）とあり。周禮中に、移民のこと屢見ゆれども、挈レ老提レ幼、其勞攘いかならん。特に孟子に見えたる、梁の惠王の救荒の術は、戰國澆季といへども、却て周官の及ばざる所あり。河內凶なれば其民を河東

編戸の民—戸籍に列せる民
比歳—毎年
賦斂—租税のとりたて
譏察—吟味

梧窓漫筆三編 卷上

一過し天明三年癸卯七月に淺間山より火發し、關東八州に灰沙を雨らし、白晝も暗黑にして、鳴動せしこと凡七日、上毛にては、熱泥湧出でて人家を漂沒し、編戸の民死する者數千に及ぶ。此歳關東奥羽の地、五穀不熟にて、奥民の餓死するもの二十餘萬に及ぶと云へり。同七年丁未の大凶歉のこと、前編に載せたり。此後とても、荒歳の阨あるまじきに非ず。近年は比歳諸國豐穰にして、米價も賤しく、生活に艱難ならざる時に當つて、豫め凶荒の備虞を講ずること、亦學問の功なるべし。周官大司徒の職に以荒政十有二聚萬民とあり。一を散利と云。倉を發し粟を振するなり。二を薄征と云ふ。賦斂を輕くするなり。三を緩刑と云ふ。これは凶歳には刑を犯すもの多き故、故らにこれを寬くするなり。四を弛力と云ふ。饑饉の民は力役に堪へざる故に、これを息はしむるなり。五に舍禁は山澤の利を民に頒つ。六に去幾は關市の譏察を止めて、民の轉移を得せしむ。七の眚禮は吉禮を省き。八の役哀は凶禮を畧にし、九の

寧請余續貂之陋。姑縱兎絲之附麗古松。而可矣。剞劂功竣。於是乎書。

天保十年己亥陽月之望

江戸　唐公愷鴻佐

也。大江之水。出于岷山。其原可濫觴。至其委之浩渺。不啻滔天已。大而治亂成敗。小則得失美疵。藐諸一身。爲土字畈章之所係也。大之自小。理勢固大。要之後人編述。益乎世道人心。不必做修辭擇言焉。鄙俚也。諸謔也。瑣屑也。取諸懷而出之。亦不敢不立誠之端緒。苟使人披覽之際。忘倦惜盡。是爲能言之流矣。能言則有善讀者焉。善讀邪。資之左右。逢其源。豈謂無益乎世道人心哉。古人稱。能言而不能行。國之寶也。括囊無咎無譽。腐儒之謂也。今夫箝默養望。凝然如泥塑。其果君子者耶。色莊者邪。蘭陵之言。可謂不吾欺矣。向者。曰書肆玉巖之懇囑。詮次遺聞。付以愚臆。竟得八十餘頁。剖爲二策。是爲漫筆之第三編也。黃太史有詩云。大小材則殊。氣味固相似。世之君子

題辭

梧窗漫筆。前後編輯。四策。不肖共加挍董。嗣續鐫行。乃眉山之書。庶乎戶傳人誦也。當時論者謂。涉乎鄙俚。長乎諧謔。蔓乎瑣屑焉。請畧辯之。夫莊語諭人。周程張朱諸老先生之後。接其武者。殺青日繁。寔牛喘而棟撓之。後之又後。攟摭殘香剩馥。哀爲己書。陳陳相仍。貫朽不可挍矣。是腐臭舊套。非人之掩鼻而走。則開卷思睡耳。謹不復循此。惟諧謔一事。似僭聖人也。武城弦歌。夫子以牛刀戲況。武公之睿聖。人稱戲謔之善。然則開諭善道之資。於諸謔。夐出乎繩墨規切之上焉。廼知優旃方朔之於秦皇漢武。亦得大易納約之遺意邪。隣人之醯。牖上之屨。不亦瑣屑乎。以孔孟曠古之大量。娓娓騰之口說何

心を生ぜざる者は、本を知る君子の人なりと云ふべし。

經咒—經文と巫咒と

して一生廢せざる者は、決して身家を敗亡する人に非ず。是は神佛の加護保佑も有べし。又は經咒の功德功力もあるべけれども、夫は別論に附す。唯其確然として守る所の堅固なる、此一心天地鬼神の福する所なりと知るべし。是心如結兮の一なり。世の學者、少の才學に誇つて、此等の事を看破りて、天道をも敬せず、神佛をも蔑如し、傲言肆行、反覆無常、忌憚る心なき者は、小人の尤なる者なり。吾は彼學者より此愚昧の信心者を、聖人君子の徒なりと尊く思ふ事なり。

一人の發達榮昌は、其人の才力に出づる樣に見ゆれども、實は父母先祖の宿善宿福、此に至りて發顯するなり。根より萠芽を生じ、枝葉を生じ、榮華を發すると同じ事なり。富山の藩士に、武井多宮と云へる人あり。夫が物語に、其同僚の内に、吉村順左衞門と云へる人ありて、微賤より奉行にまで爲りたり。君侯の社參に、六位の袍かを著て扈從せる時に、

　久方のあめの惠に開くとは知らでや花のしたり顏なる

と云ふ和歌を詠じたり。極て感賞すべき事なり。夫人は其身に福あらば、天恩君恩は言ふまでも無し。是は父母先祖の恩なりと云ふことに心付きて、己の才力なりと云ふ

霍光―字は子孟漢武帝に仕へ、奉車都尉たり小心謹愼、帝の遺詔をうけて昭帝を輔く

僕射―官名

れば清淨爲天下正ことを得べし。さて又其最妙なるは、無皇曰今日耽樂、乃非民攸訓、非天攸若。時人丕則有愆と云へり。今古の人情にて、今日一日はと云ふこと多き者なり。又明日よりは愼んでも、今日一日はと云ふ事も有るもの也。一日たりとも人是を善とせず人の善とせざる處は、天も善と爲したまはず、其に見習ふ人までも大過を爲出すなり。されば、是等の事の度重なれば、家も國も亡ぶるに至るなり。是特り人主の敎戒と云ふには非ず。士庶人とても同じ事なり。一日たりとも耽樂に就くこと、身家敗亡の基なり。孔子の顏淵に告げ給ふ、一日克己復禮。非禮勿視聽言動と仰せられたるも同樣の言なり。

一國風に、淑人君子、其儀一兮。心如結兮。と云へる妙なり。漢の武帝の、霍光に大事を託すべきを知りたるは、侍中にて毎日入朝するに、進止する所尺寸をも差へず。郎僕射など竊に其所にしるしつけて窺見たるに差ふこと無し、と云へるにて、其人守る所の確きを知れり。武帝の明智感服すべき事也。是詩の、其儀一兮。心如結兮と云へる處なり。さて人は、唯守る所ある者は身家をば亡失せざる者なり。世に毎日觀音經を讀誦するの、光明眞言を唱ふるのとて、終身替ふる事なく、又神佛を禮拜

字六字の句を重れ、對をとりて排叙せる華麗の文
詔誥—つげつぐる
表啓—まうしあげ
寶訓—寶として尊ぶべきをしへ

六朝唐文を見るべし。蕙帳空兮夜鶴悲。山人去兮曉猿驚。(北山移文)落霞與孤鶩齊飛。秋水兼長天一色。(滕王閣序)極て佳句なれども、是は唐詩の部類にて、一向文章には非ず。されども夫をも辨ぜずして、數百年よき事と思ひ誤りたり。夫のみならず、人君の詔誥、人臣の表啓などは、中古よりの文體なる故、今明清にても四六儷偶を法とす。俳儷の文は、今の一筆啓上、古文は今の唐樣の理に同じ。一目して知るべき文章さへも、其誤千年を經たり。況て知難き經義なり道學なり、いかなる心得違ひあるまじきも知れ難し。此後彼土の經義道學に、文章の韓柳、歐蘇の如き人出て、漢學も誤れり宋學も誤れりとて、別に孔孟の心髓を說く程の人出づべきも知れ難し。待文王而後興者。凡民也。若夫豪傑之士。雖無文王猶興。四六文章に欺れたる樣に、經學も道義も欺かれざる樣に致したき事ならずや。

一周公の無逸は、言々語々金玉の如くにして、千萬世の寶訓なり。嗚呼嗣王(成王)則其。(文王)無淫于觀于逸于遊于田と仰せられたること、先づ妙なり。觀は珍禽奇獸も、奇伎淫巧も、淸歌妙舞も、飛閣迷樓も、又は花月の賞詠までも、此内に兼たる也。逸は安逸逸樂なり。遊は遨游慢游なり。田は馳騁田獵なり。此等の事に淫せざ

垂白—しらがあたま

四六排偶の文四六儷偶の文—一に六朝體又駢驪文ともいふおもに四

焉能始復校此。日思誤書亦更是一適なりと。又唐人の王泉子に集賢韓昶名父之子(退之子也)性頗暗劣。及爲校理。史傳中見說金根車處。悉改根字爲銀字とあり。後漢書の輿服志より明白なる金根車を不知して金銀と改めたる事は、昌黎大家の子には不肖の甚しき也。されども集賢校理の官にても、校合を待たずして意を以て誤字を改むること、此にて明白なり。昔時亡友吉田篁墩の校合のみを好みたる故、亡友村田春海と、退之の子の事を語りて笑ひたる事あり。其時予は三十歳なりしが、今は垂白の老人となりて、何の用にも立難く、昔日を回顧すれば眞に一夢の間なり。

一彼土に數百千年行はるゝ事は皆々よき事なりと思ふは愚の至り也。文章は經義道學などとは違うて、一目して知るべき者なり。夫さへも後漢より衰へて、魏晋六朝を經て唐に至りて、韓柳、李翺等古文を唱ふれども、やはり不行。天下の文章皆四六排偶の文なり。五代を經て、宋初眞宗まで如此。仁宗の時より、天下古文を學ぶ事になりたり。柳開、穆修、張景、尹洙、蘇舜欽を初として、歐蘇の功にて成りたり。儷偶の文に對する故に、古文を平文散文と云ふ、墨客揮犀、夢溪筆談等に見えたり。さて

中庸の開卷には、中和を說いて、二章よりは中庸と云ふ。中の字にて中和を兼ねたり。是も似たる例なり。

一經書の文字、妄意に改竄するは不宜ことなり。されども慥に謬誤たることを知りて改正せざるも、愚陋の至なり。故に漢宋の諸名儒も、改定すべきは意を以て改めたり。大雅に蓺之荏菽。荏菽旆々。(禾役)穟々。麻麥幪々。瓜瓞唪々。(生民詩) 此禾役の二字極て可疑。毛公は役列也と解せり。朱子も異說なし。前後一物づつを騈擧して、禾列すと云ふ事義理をなさず。且役を列と云ふも極めての僻義なり。因つて知りたり、是は黍稷の二字なり。黍稷穟々にて、前後の文意と一樣齊整になるなり。全く字體の似たるにて誤りたる而已に非ず、黍稷の二字の闕損じて禾役となりたる也。凡詩書易の誤字、脫字、衍文、錯簡等、予が改定したる事少からず。從遊の士に非ざれば、容易には、傳授なしがたき事なり。

一世の愚人は、校讐せずしては、誤字たりとも妄意に改むべきものに非ざる樣に心得るは、以の外古に昧きの過なり。古人より誤字は意を以て改むることなり。北齊書邢邵子才傳に、見人校書。常笑曰。何愚之甚。天下書至死讀不可遍。

從遊の士――門人

一明徳は百徳の摠名なれば、上勤倹なる時は、下人の愉惰華奢も變化して勤勵倹朴となる。是明徳新民なり。されども經傳の言は、多く孝悌を主として言ふこと也。上孝悌仁義の明徳を昭明にすれば、下も孝弟仁義に化して、父子兄弟相親睦する也。是明徳親民なり。曾子曰。君子篤於親(明徳)則民興於仁(親民)此仁の字は、親親ことなり。子思曰。仁者人也。親親爲大。孟子曰。親親仁也。君子篤於親は明徳なり。民興於仁て親親は親民也。孟子曰。人倫明於上(明徳)小民親於下。(親民)人倫は五倫なり。されども是も父子兄弟夫婦を主に言ふなり。民親は父子兄弟夫婦の相親むを云ふ。是亦明徳親民なり。本篇に、一家仁一國興仁。一家讓。一國興讓とあり。仁とは父子相親むなり。讓とは兄弟不爭なり。一家仁讓は明徳なり。一國仁讓は、親民なり。さて開巻の三綱には親民として、三綱の解釋には新民と書改めたるは、乾の文言の元と仁とを書き改め、坤の文言の正と敬とを書改めたるに似たり。親民と、新民。化民と、一樣になること、實に不可思議の事なり。されども、此等の精義は、世に解する人も無ければ、やはり新の字に改正する事明白正大にて、是を定説とすべき事なり。

事なり—なほあの誤か

黎民—人民

の欠けたる事なし。然るに莊禪異端の學を蹈襲混糅せる事、返すぐくも心得ざるの甚しき事なり。

一親民は新民の誤たること、伊川の言千歲不刋の說なり。さて爰に一の不思議の事なり。親民と字のまゝにて、新民化民と少しも不違の義あり。

左傳吳王闔閭の親民(昭三十年)は、吳王僚を弑して簒立せる故、吳民に叛れん事を畏れて、民を親族の如くに親愛すること、韓非に、越王勾踐親民は、吳王夫差を亡し會稽の耻を雪がんとて、民を親族の如くに親愛すること、本あるまじき事なり。故に孟子曰。君子之於民也。仁之而不親とあるにて、民を親むと云ふことはなきことなるを悟るべし。

一親民を親民と讀みて、使民親也と解す。老子の明民愚民も、使民明使民愚也。是れと同例にて、是まで黎民の不和不睦なる者を變化して、親睦ならしむる事なり。故に親民の字にて新民化民と一樣の義となる也。堯典の克明峻德は、明明德也。黎民於變(變化)時雍。(和睦)於變の字は新民なり。時雍の字は親民なり。

拘累—束縛

塵垢—ちり あか

一朱子は、明德を心の異名として、明ニ明德一を心內の氣稟人欲を斷じて、本體の明に復することと云へり。此等の言は聖人の經よりして、漢唐までも、宋初までも不言處の奇怪の說なり。其不通の辨は、大學原解に、十七徵五驗等を載せたり。さて其內にて左傳には、成王封ニ伯禽於魯一。以昭ニ周公之明德一。（定四年）とあり。禮記には、成王康王追ニ念周公一。所下以明ニ周公之德一。而又以重中其國上也（明堂位）とあり。淮南子には、武王欲レ昭ニ文王之令德一（要畧）とあり。明レ德、明ニ明德一、氣稟人欲を斷つ事ならんには、周公より成王を教誨して、其氣稟の拘累を解き、其人欲の蒙蔽を祛て本心の明鏡に復せしむべし。然るに武王よりして文王の令德を明にし、成王康王よりして周公の明德を明にすと云ふこと、何とも可レ通の理はなき事なり。是にて朱子の解の謬妄たるを悟るべきことなり。

一明德は明鏡なり。氣稟人欲は塵垢なり。莊子云。鏡明則塵垢不レ止。止則不レ明也。（德充符）圓覺經云。譬如レ磨レ鏡。垢盡明現と。唐僧神秀偈云。心如ニ明鏡臺一。時々勤拂拭。莫レ使レ惹ニ塵埃一。詩書易左傳の明德の義には一々合せずして、其所レ說は、莊禪の言なり。聖人の經、正大明白にして、修レ身治レ人に何も事

亡びて、禁制同樣の諸學のみ今日に傳はりたり。時世に用ひられ、時世に行はるゝ事は多くは不宜して、後代には亡ぶべきことを是にて悟るべきなり。

後漢の光武の時より、左氏、公羊の爭甚しく、後漢末何休鄭玄に至つても此を爭へり。終には左氏の勝利を得たるなり。されども、三國になりても、公羊、左氏の爭は不止。隗喜曰。左氏直相斫書耳。不足精意也（王朗傳）されども鍾繇の左氏を大官、公羊を賣餅家（裴潛□）と云へるを妙とす。大官は公儀の御臺所、賣餅家は團子屋なり。左氏と二傳の優劣は此語にて盡したり。

一德者得也。得道也。其證は大學談と、仁說要義に詳に載せたり。得之於心。而行之於身。もの德なり。されば德とは善心善行の事にて、明德も令德も同じ事なり。明明德とは、善心を修め、善行を成し、家國天下に昭明なる事を云ふ。故に明明德於天下とは云へり。此等のことは白きを白と云ひ黑きを黑と云ふと同樣にて、漢唐の儒氏より溫公、程子等まで異議なき事なり。伊川の易傳にも、明明德於天下は昭明德於外也。（晋大象）とあり。溫公も盛德著明於天下。（大學廣義）と云へり。朱子の解の奇怪を悟るべし。

塗惲―後漢書には塗憚に作る

學あり。三家の學は經傳共に亡びて、鄭玄、王弼より今日に存する者は、費直の易など、書は伏生の今文、歐陽大小夏侯の學なり。孔安國の古文は、纔に一人づつ相傳して、王莽の時の王璜、塗惲に至る也。是も今文は經傳共に亡びて、今日に存する者は安國の古文なり。詩は齊魯韓三家の學にて、毛萇の學は民間に在る而已。此三家の經傳皆亡びて（韓詩は唐まで存せり。）今日に存する者は、毛萇の學なり。春秋は公羊の學なり。穀梁は學官に立ちたることもあれども、先は民間の事なり。左氏は學官の人の最忌み惡む處にして、以左氏爲重讐とあり、前漢の末に劉歆の左氏古文尚書等を信ぜる故に、都を逐出されたり。移大常博士書は、其時の事なり。後漢にて國學公羊博士最左氏を忌み、左氏公羊の爭前漢よりも甚し。章帝の時、賈逵は左氏を奉じて、左氏の二傳に優れる事數十條を說きたり。且其父賈徽は塗惲の門人にて、古文尚書の學者なり。此時代にては、學官に立ちたる諸學を、今學俗學と爲して、古文尚書左氏毛詩等を古學と唱へたり。賈逵の功にて、章帝 詔ありて、天下の學者に古文尚書毛詩、左氏穀梁を學ぶことを免許し給ふ。是までは此諸學略制禁位の事と見えたり。されば漢の世を終るまでは、學官には不立ことなり。然るに學官に立ちたる諸學は皆

解ある故、經學をなさゞるなり。劄記の書を讀めば、趙翼の存亡興廢の理に明なる事下手經學者の及ぶべきに非ず。史神とも云べき人なり。

一近世淸人の漢學、誠に無用の學なり。余蕭客が古經解鈎沈よりして、惠棟の九經古義易漢學の類一として用を爲すこと無し。尙書集註、尙書後案皆同じ。江永、惠士奇、錢大昕、王鳴盛の徒皆然り。王鳴盛は大家なれども十八年後案に精力を盡すの類、愚惑の極なり。堯典の稽古を同天に致しおほせたりとも、本鄭立愚謬の說なり。何の功力あらんや。是紀昀、袁枚、趙翼の爲ざる處、三人の時輩に卓出せるを知るに足れり。さて淸人の學は、書物の評判と字義の校合とに出でずして、道理などは毫も知らざる樣なり。書を讀むも、字義のみにて篇章を解する事は決して出來ざるなり。此後には眞の理經明道の人出づべきや覺束なし。明人の學、虛誕妄謬を言ふには勝りたれども、宋元二代の學者に比すれば、數十等を下りたる者と知るべし。

淸人漢學の書には、李鼎祚の易解賸義のみは、本書の易解には勝りて易學に功ある書なり。

一兩漢の時學官に立てたる經書は、易は施孟梁丘三家の學なり。民間に費氏(直)高氏の

虛誕妄謬—いつはりあやまり

時輩―其時代の人々

象なり。離日杲々乾天の上に見る、不雨象なり。西は兌象なり。郊は乾象なり。乾天曠遠なり。郊野も曠遠なり。故に需の需于郊、同人の同人于郊。皆乾天の象なり。毛奇齢の仲氏易(易小帖推易始末)此卦象を解し得ずして、一陰爻の卦を姤より夬へ動す説を云ひたり。虞翻、朱震の極悪最下の卦象學に云ふ妄説なり。眼前の卦象を不知して、曖昧不了の説を建つ。愚人の學は皆如此ものなり。李鼎祚易解は、虞翻の愚卦象を多く載せたる者なり。故に卦象の學にも必竟は無用なること多し。

一近世清人に三人の才子あり。紀昀(曉嵐)趙翼(雲菘)袁枚(子才)なり。さて此三人國制なれども、宋學の不宜ことを能々知りたり。紀昀は其灤陽消夏錄、如是我聞、槐西雜志、姑妄聽之、の四書に、神怪に託して性理の説の不通を指斥せり。袁枚は人に與ふる書中に、宋學の非、論語集註の非を辨駁せり。されば時の流行に從ひて漢學を爲べきなれども、漢學の愚謬は遠く宋學に下れることを知るが故に、三人共に經學をなさずして、紀昀は四庫全書を校合して大博識の家となり、趙翼は陔餘叢考、二十二史劄記を作りて史學家となり、袁枚は詩文家となりたり。三人共に時輩に卓出せる見

已甚—甚しいこと

漠視—ぼんやり見て居ること

富貴に生長する故に、我儘氣隨にて、萬事淫肆なるべきは平常の事なり。然るに臣たる者、毎度諫爭と云ふ事もなり難し。心得よき臣子の大勢にて能柁を取りて、君の邪惡の已甚に至らざる樣にすること、是小畜にて至極の良法なり。孟子の陳レ善閉レ邪と仰せられたるも是なり。味よく鹽梅よく、君の善に趣き惡を止むる樣にする時は、三代聖人の治には及ばずとも、唐の貞觀、開元、宋の慶曆、元祐位にはいつも出來べき事なり。されども、君の邪欲淫佚を抑へ制する人九人ありても、一人迎二君之惡一長二君之惡一ずる人あらんには、其人寵幸を得て、權勢は其人へ歸して、九人の人は束レ手て漠視するか、又は得レ罪而去るに至る。天寶の李林甫是なり。畜レ君と不レ畜と、世道存亡盛衰の係る處なり。學道の人は此等の事を能々講究すべき事なり。

孔子の御釋に、密雲不レ雨尙往也。自二我西郊一。施未レ行也。尙往とは、君夫の臣婦の畜を受けずして、我意の儘に行ふなり。施未レ行とは、臣子より出づる言ゆゑに、君夫應ぜず、君臣合體して善政行はれ、膏澤民に降ることを得ざるなり。

䷈周易卦象の學も知るべし。自レ二至レ四、兌澤象なり。兌澤の潤、乾天の上に升る密雲なり。兌西、巽風、西風にて吹拂ふ、不レ雨の象なり。自レ三至レ五、離日

齊澤　恩患

後人此卦辭の妙なるを不知、可嗟の甚しき也。今はゞ此を解して後人に告ぐ。小畜は陰の陽を止むるなり。臣子婦女の君夫の淫肆を止むるなり。東方より雲起れば、直に雨となる。周易にては、雨は陰陽和協の象なり。東は陽方、君夫より言出す事は臣子皆これに應ず。陽倡へて陰和し、陰陽和協雨となりて下を潤すなり。さて臣子の君夫の欲を止むるは、是に殊なり。密雲なれども不雨とは、臣子忠厚の情親切ならざるに非ず、君夫の聽信せざるを如何ともすべからず。密雲とは臣子忠厚深切の情を云ふ。不雨とは、君夫の應和せず、陰と陽と和協せざるを云ふ。又は國家に在ては膏澤の民に降らざるを云ふ。自我西郊とは、西は陰方、郊は曠遠疎遠せらるゝの味あり。我臣子より言ふこと故、聽用應和せられず、東陽君夫より出づる言ならんには、斯はあるまじと言ふこと也。文王忠厚なりと雖臣子なり。紂の聽信應和せざるを如何ともなすべからず。故に密雲不雨、自我西郊、岐周は西方、我西方と仰られたるにて、文王の暗に己が事を仰せられたるを知るなり。さて小畜の義大なり。祈招之詩に、以止王心（上文肆其心）二招の詩に、畜君何尤かあらんと云ふ、皆小畜の義なり。臣たる者の君の淫縱放肆の心を抑へ止むる是小畜なり。夫王公貴人は

司馬—軍事を司る官

治道—國を治むるみち

己が精神の放散せるをも招き返し招き集むる也。樂音の至妙に至りたる者なり。左傳に、昔穆王欲肆其心、周行天下、將皆必有車轍馬跡焉。(八駿の說是より起る)祭公謀父作祈招之詩。以止王心。王是以獲沒於祗宮。(昭十二年)祈は祈父なり。圻父と同じ。小雅には祈父に作り、酒誥には圻父に作る。司馬の官圻内の兵甲を司る。故に圻父と稱す。祭公謀父司馬なり。司馬にて穆王放佚淫肆の心を招き返せる故に、祈招之詩と云ふ。舜招樂の遺聲なり。孟子に、齊景公。欲觀於轉附朝儛。遵海而南。放于琅邪。晏子諫之。景公說。召大師曰。爲我作君臣相說之樂。蓋徵招角招是也。其詩曰。畜君何尤。畜君者好君也。無用の遊觀は精神の放逸なり。晏子、景公が放肆の心を招き返せる故に招と云ふ。徵角は五音の二名なり。是亦舜招樂の遺聲なり。朱子二招を解して招舜樂なりと云へるは、妙と云ふべし。楚辭に、大招招魂ありて。招き返すを以て義となす。皆々招の遺聲なり。

一少畜に、密雲不雨。自我西郊。程傳每卦每爻、人事治道に切實なる事を說きたるに、唯此卦辭には、雨の不降故のみを解して、毫も人事にも治道にも涉る事なし。故に

秋風團扇の人—秋風立ちて團扇のすてらるゝが如く、色衰へて寵の失せたる人

なり。一には君恩衰歇榮華凋盡なり。酒は忘憂の物、酒を假りて憂を忘れんと欲するに、樽前にて花落の曲を奏すること勿れ。只さへも憂に沈むに、況や此曲を聞くに於てをや。恩情衰薄なるは、己の晩暮衰老白頭なるが故なり。是亦秋風團扇の人なり。天子新奇の人を寵して、故老に廢したまふ故に、此詩を詠じて其怨を訴へたるなり。侍臣最有ニ相如渇一。不レ賜金莖露一盃と作りたるにても可レ見。此詩は精巧を窮めたる者なり。晩唐にては李商隱、杜牧を太宗師とす。されども、詩は如レ此用レ力用レ巧たるよりも、率意自然なる處に神妙の味ある者なり。あながちに如レ此を悦ぶべからず。去ども、古人の詩には如レ此精緻巧妙もあると云ふ事を知らば、詩を學ぶに淺薄粗率にのみ走らざる様になりて、古人の詩を讀むにも意を用ふる事を知るべし。

一樂記に、舜の韶樂を解して、韶紹也。舜紹レ堯。と云ひたるは、可レ笑の至りなり。韶は招なり。呂氏春秋、史記、山海經、竹書紀年にも、皆九招とあり。尙書、左傳、論語に韶に作るは、召音と云ふこと、周禮に九磬に作るは、召聲と云こと、皆招を以て義とす。廟堂に是を奏して、祖考精神の放散せるをも招き返し、招き集むるなり。又

晩暮—晩年

牧張保皐傳、李翰張中丞巡傳、鄭審天寶故事、溫公此等の諸書を採りて記載せりとあり。されば天寶遺事一部を典據となしたるに非ざる事明白なり。

一李義山宮詞に、君恩如水向東流。得寵憂移失寵愁。莫向尊前奏花落涼風只在殿西頭。君恩涼風と相對す。東流西頭と相對す。向と殿と相對す。詩の東門孟子楚辭の東家、東は春陽發生の鄕、故に皆少好の女子を云ふ。得憂失愁は、論語の憂得憂失字面を用ふ。花落は毛詩序の華落色衰也。涼風は恩幸の衰薄を云ふ。詩の北風其涼は、國政の寒涼肅殺、仁恩和義なきを云ふ。左傳に申生を論ぜる尨涼金寒、溫潤和厚の意なきを云ふ。又號多涼德。薄德なり溫厚ならざるを云ふ。殿。殿最の殿は、下功爲殿啓殿の殿は、軍後爲殿。又臀也。屬背。向東とは、君の意嚮の美少年にあるなり。殿西とは、君の情意衰老の人に背くなり。西は晩暮衰老の象、西方白色、西頭二字、隱然として白頭の義を含めり。此詩は、衰老失寵の宮人を詠じて以自比するなり。君王の寵幸はいつも美少年を逐うて移る水の東流の如きなり。さて此宮人も始の恩寵を蒙りたる時は、外へ恩幸の移るを憂ひたり。然るに衰老して終には恩寵を失つて愁を抱くに至りたり。花落は一には花落色衰

の如き嚴肅なる事と思へるや。可笑の至なり。大宗、納元吉妃。兄弟同室なり。高宗於則天。玄宗於楊妃は、父子聚麀なり。薛懷義張易之張昌宗之烝則天。武三思。馬秦客楊均。烝韋庶人。淫穢濁亂。遺臭史冊。唐の宮闈の汚穢古今比希なり。楊妃の淫、則天、韋庶人の下に出んや。祿山の姦亦豈張易之、武三思の下に出んや。玄宗内は楊妃を寵し、外は祿山を幸して天下を亂るをも不顧。さらば、出入禁闥。連夜不歸。有醜聲發于外と云ふ勢の所必至也。溫公の錄せる所、極て其實を得たること明白なり。袁枚詩人なり。故に其心唐人に黨して此言を出す。實は可笑の至なり。

通鑑、此條、姚汝能祿山事迹、溫畬天寶亂離記に取りたり。袁枚不學にして知らざるなり。

李義山、西郊百韻詩、皇子棄不乳。椒房抱羌渾。鄭嵎津陽門詩。祿兒此日侍御側。繡羽褓衣日屓屭と、唐人の詩中にも如此見えたり。

玄宗實錄、肅宗實錄、明皇雜錄、姚汝能祿山事迹、包諝河洛春秋、唐曆、宋巨玄宗幸蜀記、溫畬天寶亂離西幸記、平致美薊門紀亂、殷亮顏杲卿傳、同顏氏行狀、杜

投卷—本をなぐるなり
少陵—杜甫の號
路脈—すぢみち

讀みて、投卷して驚嘆せり。此詩實に楊妃、祿山の事を作れるなり。老杜の詩、童謠に原づきて、楊妃洗兒錢の事を詠じたるなり。予が心に浮みたる妄說は、少陵靈ありて予に暗に告ぐるやと思ふなり。

新書五行志云。祿山未反時。童謠曰。燕々飛上天。天上女兒鋪白氈。氈上有千錢。

燕卽范陽。祿山以范陽節度使起兵。覆兩京。僣天位。燕々飛上天也。天上女兒。卽楊妃也。

されども其詩は唯風景の樣なり。されば唐詩には、風景とのみ見えて如此こと多かるべし。唯此一首を我等言中てたるにて、其他は知るべきの路脈も無ければ、唐詩は解し難き者と云ふことを此詩にて大悟せり。

一楊妃、祿山姦通の事、新舊唐書共に載せず。溫公の通鑑には載せたり。近時袁子才隨園詩話に、溫公天寶遺事を採りて此を錄せるとて、乃據以汚唐家宮闈耶と云ひたり。開天遺事、國史補は作り物語の類なり。されども此事は、別に所據ありて溫公の記載せるならん。豈一部の遺事のみを典據とせんや。袁枚は、唐の宮禁は宋代

あれば、竹笋たる事明なり。韓子蒼も、笋名㆓稚子㆒老杜之意也と云ひたると夜話に載せたり。胡人の幼少なるを胡雛と云ふ。晉書に、王衍觀㆓石勒嘯㆒上東門㆒向者胡雛視㆑有㆓異志㆒。恐將㆑爲㆓天下之患㆒。さて楊貴妃の安祿山を養兒として錦褓に包みたる故に、祿山を錦褓の兒子と云ふ。昔時多紀一學、同安元、安肅等と共に韓文を會讀したる事あり。其日、予不圖心に浮みて、「此詩は、楊妃の祿山と密通せる事を作りたり。錦褓稚子無㆓人見㆒。沙上胡雛傍㆑母眠。胡雛の養母と同寢すと云ふことなり。柳花と云はず楊花と云へるも夫故ならん」と云ふ。一學は篤實縝密なる人故、「御説は奇妙至極なれども、白氈青錢など何とも解し得ず」と云はれたり。予其時、「洗兒錢の事にては無きや」と云へり。貴妃の祿山を錦褓に包みたるを、玄宗御覽じて、「夫は如何と」仰せらる。「祿兒を洗ふ也」と貴妃の答へたり。産湯をつかふと云ふ事なり。其時玄宗の、「さらば洗兒錢を賜ふべし」とて與へられたり。事開天遺事に見えたり。されども妄意に言出せることなれば、再度他人に此説を不㆑言なり。予少時新唐書を讀みたるに、紀傳のみを讀みて抄錄し諸志を不㆑讀。妄説を言出せる翌年の春（文化五年戊辰正月四日）第二兒第三兒の新唐書を讀みたるに、我も諸志を讀むべしとて五行志を

印可―師が弟子に證明を與ふること、ゆるし

たるにては明德とは云ふべからず。其德の下民に及んで、黎民於變時雍と云へるにて、德の光明なりと云ふべし。故に大學原解に、家齊は明德之明二于家一也。國治は、明德之明二于國一也。天下平なるは、明德之明二于天下一也。明德之與二新民一。其事二而實則一也。と云ことを反覆して云ひたるは、大學に欲レ平二天下一者と云ふことを、欲レ明二明德於天下一者と書き改めたるにて心付きたり。されども、其事の中庸にありとは心付ず。故に大學原解に其事を載せざるなり。然るに、吾此言孔子の言なり。中庸の終に、詩曰。予懷二明德一不レ大二聲以一レ色と云ふを、孔子釋レ之曰。聲色之於二以化一レ民。末也。と化民の二字にて詩の明德を解したまへり。奇と云べきや、妙と云ふべきや。謬說を云ふ故に、いつも經傳に齟齬するなり。正說を云ふ時は、吾不レ知に聖言に符合するなり。吾大學原解に、明德新民を解したるは、孔夫子の印可を得たりと、兒敦に語りて一笑せり。記して後の具眼の人に示す。

一杜詩に、糝レ徑楊花鋪二白氈一。點レ溪荷葉疊二青錢一。竹根稚子無二人見一。沙上鳬雛傍レ母眠。聯珠詩格にも此詩を開卷に出せり。稚子は雉子なりと云ふ說あり。冷齊夜話には、贊寧雜志を引いて、竹根大鼠なりと云ふ、皆非なり。唐人食レ筍詩に、稚子脫二錦棚一と

明徵—明なるよりどころ

其數也。錯は互錯なり。たがひちがひにすると云ふことなり。天數二十有五、地數三十、凡天地の數五十有五、大衍之數、五十、其用四十有九、と云へるは、綜其數也。綜とは總統なり。すべ緝むるを云ふ。この二語傳文明徵ありて、其義明白なり。予二十五歳の時、繫辭詳說を著して、錯綜の二字、傳文を以て傳文を解して、其原意を得たり。近頃繫辭詳說を再補增せるにて、門人へ對して、「予は二十五歳にて古人の謬解を悟りて、傳文容易に解することを得たり。されば、經傳を解すべき眼力を、天地鬼神より與へたまへるや」と自讚せり。

繫辭傳には、二大例を建てゝ說きたまへり。是は二十五歳の童觀にては知れざる也。近年詳說を增補せるにて、始て心付きたり。古人は其例をも不知して解せる故、謬解のみ多きことなり。

一大學の明明德は、己の德行を修め、國天下へ光輝昭然とかがやくことなり。新民は民を變化維新にして、善に遷らしむるなり。中庸の形著明則動變化なり。されども、民の變化せざれば、德かゞやけりと云ふに不足。堯の光被四表と云ふも、明德なり、舜の帝光天之下至海隅蒼生と云ふも明德なり。唯其聲聞などの顯れ

紕繆—あやまり

之說而不可通矣。豈非秦誓之文。出於魏晉間人之僞撰者邪(日知錄)と。二十五篇は僞書なれども、伊訓五子之歌などの如き、大に世敎に益ある故に廢棄せずと云はゞ、公平正大の見解なりと云ふべし。僞書を眞書なりと思ふ人は、先に云へる米蘇の帖と二王帖の見分つことも出來ざる程の眼力にて、童觀なり闚觀なりと云ふはさらなり、實は擿埴索途の盲目なり。夫らの愚矇の人と經義道學は語るべきに非ず。

漢書に、漢諸侯王。厥角稽首。應劭曰。厥者頓也。角者額角也。按ずるに、角は日角月角の角、厥は顚蹶の蹶。(胡三省通鑑注)厥角は叩頭頓首之類也。(晋灼亦云)

一繫辭の參伍以變。錯綜其數。と云ふ參伍の字、朱子の荀子、韓非にあるを引れたるは妙なり。されども、此二語を揲蓍求卦に解したるは、大紕繆なり。項安世、胡炳文など、朱子の謬誤を踵いで、愈精うして愈惑へり。さて繫辭の變變化は人事の變化にて、卦爻の變化なり。龍は一なり。潛見飛躍は其變を參伍したるなり。需は一なり。郊沙泥血は其變を參伍したる也。屯は難進の卦なり。初爻は止而不進。二爻は欲進而不能。三爻は妄進而冒禍。卦爻の變化人事の變化を參伍したる也。參伍はつぎ合はせて考ふる事なり。さて又、錯綜とは、天一地二天三地四と云へる錯

稽留―おさへとどむること

一人。今朕必往んと、論語湯誓の文を掠め取りて連綴せるに、語意語脈一向に不連屬可笑の極なり。一體二十五篇の僞書、毎篇に僞書の證據明白なれども、別して湯誥と泰誓の中篇にて、其贋僞の迹、昭然として發露せり。されども、是は經學の大事にて予が辨正と増多原に詳なり。容易の事に非ず。さて又僞書は、宋人の集句の詩なりと云ふ事も、泰誓の中篇にて昭然として明白なり。

一孟子に武王之伐殷也。革車三百兩。虎賁三千人。王曰。無畏。寧爾也。非敵百姓也。若崩厥角稽首とあり。是は武王の殷民へ仰せらるゝ、我征伐に來れるを畏るゝ事勿れ。我は紂を誅伐して爾百姓を救ひ安ずるなり。爾等百姓を讐敵とするには非るなりと。其言を聞きて、殷民の立ちたるもの、一時に地に伏し、額角を地にたふし、暫時首を地に付けて稽留せり。其勢山の崩るゝ如くなりと。若崩厥角稽首は、記者の辭なり。然るを泰誓中篇に掠め取りて、勗哉夫子。罔或無畏。寧執非敵。百姓懍々。若崩厥角。記者の詞を以て武王の語となす而已ならず、語句を割裂補綴して一向に意義通ずべきの理なし。是亦可笑の至極なり。清人顧炎武は尚書の眞僞を不知人なり。されども是には困りたりと見えて、曰。後儒雖曲爲

ることゝ

の說失考多く、誣妄謬誤も少からず、さらば、傳注の謬妄を匡正して、先聖在天の靈に報ぜんと、其後世道も屢變じて、宋學朱子學など云ふ名目を假らば、身を立て家を興すには利ある事もあれども、非以欺人也。自欺也。さはすまじき事なり。世に用ひられず身を立つることも難くして餓死せば餓死すべし、先聖在天の靈へ誓ひたることは變改はなり難しと、誠心決定して今日に至れり。天地神明の加護も有りけるにや、多くの家累飢寒にも逼らずして今日に至れり。世の名聞利益にする人も、うはの空にて書を讀む人も、我も同樣に世間の人に思はるゝは、生々世々の遺恨なり。

一論語に、百姓有過。在予一人とあるは、上文の萬方有罪。罪在朕躬と一樣の語にて、萬方の百姓に有過有罪は、上一人の敎化の不及なり。故に罪在朕躬。過在予一人と仰せられたるなり。萬方は古湯誓の文なり。百姓は古泰誓の文なるべし。湯誓に、有衆率怠弗協。曰時日曷喪。予及汝皆亡。夏德若茲。今朕必往。とありて、上の二語に桀の惡逆、民の之を惡むの樣を說盡せり。故に夏の凶德如此。今朕必往誅罰せんとなり。然るに今の僞書泰誓中に、百姓有過。在予

希覯—稀にみるところ

郢書燕說—韓非子に出づ。書を解くに牽强附會强て道理に合せしむ

を憂るを、顏面へも見はし、言語へも出すは、王道盛時の明驗なり。臣子たるもの、秉㆓行德義㆒。明㆓言憂恤㆒。君德の盛、得て知るべき而已。太宗の諸臣などは明恤と云ふべきか。

一多士に、昔朕來ㇾ自ㇾ奄。予大降㆓爾四國民命㆒。多方には、我惟大降㆓爾命㆒。爾罔ㇾ不ㇾ知。(此句は實は下に屬す)又云。我惟大降㆓爾四國民命㆒。又云。不ㇾ用㆓我降ㇾ爾命㆒。我乃其大罰㆓殛之㆒とあり。命は命令號令なり。四國の人民に大命令大號令を下したまふを云ふ。故に不ㇾ用㆓我降ㇾ爾命㆒我乃罰㆓殛之㆒とありて、小兒にも讀み得べく解し得べき事なり。然るを僞傳には、民命謂ㇾ君也。大下㆓汝民命㆒謂ㇾ誅㆓四國君㆒とあり。民命と二字熟用にして君の事とし、四國の君を誅殺することと解す。蔡沉は、汝四國之民。罪皆應ㇾ死。我大降㆓爾命㆒。不ㇾ忍㆓誅戮㆒。乃止とあり、是は四國の民、罪誅殺すべけれども、赦して不ㇾ問、爾等に壽命を降し賜へりと云ふことなり。二家の解、郢書燕說の極なり。予二十一歲の時門徒へ尙書を講ぜんとて、注疏と大全を反覆して讀みたるに、古注集注の謬誤を多く檢出せり。是其一條なり。予此時心中に誓つて以爲、漢宋傳注の功にて經書は解すべけれども、傳注

保佑―保護したすくること

納諫―いさめをうけいれること

に非ざるなり。

一先祖在天の神靈は、後の子孫を保佑せざることとなし。子孫の淫虐を肆行する時は、先祖の神靈も若何ともする事能はずして、束レ手て其滅亡を漠視するのみ。紂の淫戲自絕是なり。さて猿樂の謠曲に、親は空にて血の涙と云ふ語あり。今は妓樂の歌曲にも是を襲ひ用ひたり。面白きことなり。父母雖レ沒。神靈在レ天。子孫の惡念を生じ惡事を爲して身家を敗亡せんには、親の子を憐む至情にては、血淚相和して流るべし。されば人子たるもの、常々此一語を忘れざれば、惡念も消すべし、惡事にも染むまじ。唯此一語、聖賢に至るべきの路脈なり。卑俗なる歌謠の言、古尙書と相表裡するは妙と云ふべし。

一周公殷道の盛時を說いて、百姓王人。罔レ不レ秉レ德明レ恤と宣へり。（君奭）秉レ德の解には及ばず、明レ恤の二字無量の妙義あり。君德の失朝政の非、臣子たる者誰か是を憂ざらんや。唐の太宗、創業の君にて、好んで納諫を以て自任されたる故、魏徵も忠直を盡したり。古今希覯の事なり。其它は、臣子は心に憂を抱けども色へも出さず。まして言語へは出し難し。憂を掩匿すること、古今敝風の常なり。されば、臣子の國

一僞書の二十五篇は、名言嘉語の類集なり。其鼎則贋、其肉則美と予が增多原に云へる、得實の言なり。さて、眞書には別に深妙の道理ありて、祖己の武丁へ敎へたる、惟天監下民。典厥義。降年有永有不永。非天夭民。民中絕命。（高宗肜日）と云へる事の得宜義なり。失宜不義なり。壽命も家運も長短の別あるは處事義不義の差に因るを云ふ、大酒多房の攝生を不知も不得宜なり。其他不義無道の極は刑殺をも蒙るべし。されども、夫まではなしとも、不義無道なれば、年命も縮り、家運も縮り、傾敗に至る。是天より夭するに非ずして、我より中絕するなり。されば人たる者は淡白を甘じて攝生をよくすべく、儉朴を務めて生業をよくすべし。是其命の中絕せざるの方ならずや。

一祖伊の紂に告ぐるに、非先王不相我後人。惟王淫戲用自絕。（西伯戡黎）と云へる、紂の惡逆を淫戲の二字にて盡したり。能々考ふれば、酒池肉林、炮烙の刑、長夜の飮、皆々戲なり。戲の增長して天下を亡すに至るなり。隋の煬帝の西園剪綵の花、汴堤殿脚の女、飛閣迷樓、宋の徽宗の艮嶽珍禽奇獸花石綱も皆戲の增長せる者なり。淫戲と云へる二字にて千古亡國の惡を說き盡したるは、五子之歌、伊訓の可及所

左驗―證左、證據

鴻寶―大なる寶

秦火の厄―秦の始皇の古典を焼きたるをいふ

經と引けるや。是は古人も知りたる僞書の僞たる斷案左驗の第一なり。

一夫よりも、論語に、堯曰。咨爾舜。天之曆數。在爾躬。允執厥中。四海困窮。天祿永終と、毎句一東の韻にて蹈みたる韻文なり。夫に心付かずして、今の禹謨に掠取りて種々の語言を傅會して、無韻の文となりたり。論語に舜亦以命禹とあれば、舜の禹に命ぜられたるも此語ばかりにて、道經の人心道心などあるべき事にも非ず。天照大神の伊呂波四十七言のことを宣ひたる御辭と同樣の事なり。是亦僞書の僞たる斷案證左の第一なり。

一世に有識具眼の人、眞書を讀得べきは少なく、學者も多分は素人なり。故に、僞書のよめ易く、解し易く、世教に益なる故に、廢棄すまじとは云たるなり。其實は、眞書の尊きは、天地間第一の鴻寶、我邦の三種の神器にも比すべき者なり。堯典天文、禹貢地理はさらなり、舜典九官、皐陶謨九德天敍天秩天命天討、洪範の九疇、無逸の數戒、此等にて聖人の道、蘊奥妙義、今日に明々了々なるは、眞書數篇の亡失せざるの力也。秦火の厄を免れて今日に存在せること、天地鬼神の此數篇を殊に呵護なし給へるにや。

尙書の眞贋を分つこと不レ能ほどの愚人ならば、古文を知り、古書を解し、古道を知らんこと盲目の黑白を云ふに同じ。

一二十五篇は、王肅か、皇甫謐か、二家の學徒かと淸人などは云へり。多分皇甫謐の作なるべし。帝王世紀を作れる手際に類せり。さて、僞書も初の內は力を用ひたる故、禹謨五子之歌などは大出來なり。周書の末に至りては、文章卑俗を露したり。既歷二三紀一。世變風移。(畢命)斂化奢麗。萬世同レ流。(同上)蹈二虎尾一渉二春氷一。(君牙)などの類、西漢人の文章にも入れがたし。まして戰國をや。然るを周初の古文にて如レ此。可レ笑の甚しき事なり。

一尙書を引くに三法あり。書云と云ふあり、夏書云。周書云と時代にて分つあり、又帝典曰。太甲曰。湯誓曰と篇名を擧るあり、尙書と引けるもあり。墨子には異樣なる書名を引けり。されども、經曰と引けることは先秦の古文には無き事なり。漢書の中に始てあり。さて荀子の解蔽は心術を論ぜし故、道家の經を引いて、道經曰。人心之危。道心之微と云ひたるを、今の大禹謨にかすめ取りて、人心惟危。道心惟微とせるは、何等の淺拙ぞ。此語古の禹謨ならんには、荀子夏書曰と引くべし。何故に道

突兀―山の高く聳ゆるさま。こゝにては、文辭の曲折多くして解すに難きをいふ

と多く人君などの學問心得に奇妙なり。眞書は讀み難く解し難し。此二十五篇の僞書にて、大に後代の龜鑑になれば、僞書なれども廢棄すべからず。唐人の帝範臣軌、貞觀政要の類すら、後代の大教なり。まして古尙書の逸語なり。李唐よりは四百年前に僞作せる者なり。學者は僞作也と云ふことは辨知すべし、世教に益あることをも辨知して廢棄すべからず。

五子之歌、伊訓など、別して世教に大功あり。

一さて其僞書たることは、其諸篇、邊幅齊整、辭義明暢、虞夏商周四代文辭の差別なく、訓謨誓命、諸體體裁の差別なく、二十五篇一手の所爲なり。禮記は漢人の手に出づる多し。去ど突兀として解し難き事多し、古文の故なり。今三千年の古書にて、蒙求を解するよりも易し。吾欺レ誰乎。欺レ天乎。故に實は僞書の鑑定證據にも及ばず、左驗にも不レ及。文章を知る人には一目瞭然なり。東坡、米芾の帖を出して二王帖なりといはゞ、人豈尤なりと云はんや。眞書と僞書との別、米蘇帖二王帖の別なるよりも甚し。世教に益ある故用ふる不レ用と云ふは別論なり。僞書を眞書なりと云ふ人は米蘇の帖も二王帖も見分つこと不レ能盲目同前の人なりと知るべし。

冥鑒—冥々の裡にみそなはすこと
沮懲—はゞみこらすこと
僞書—所謂古文尙書

て悟るべし。今の學者は、曹孟德の徒なりと云ふことを。されば、天道天命を有りと云ふ人は、心に鬼神の冥鑒を畏れて善を務め、人にも善を勸むる人なり。天道天命をなき者に仕たき人は、鬼神の降鑒をも畏れず、惡を行ひ、人の惡を沮懲する人に非ず。此處にて善惡邪正の辨明白なり。天道鬼神を畏敬する人善人なり、正人なり。天道鬼神を誣蔑する人は、惡人なり、邪人なり。さて又、此處にて今の世の學者は、遠く無學の人に劣れることを悟り給ふべし。

一尙書增多二十五篇の僞書たることは、南宋の吳才老、朱子より略氣付かれて、元の吳澄が纂言には刊り去りたり。明の梅鷟の讀書譜にも、是を駁せり。去ども、是は淸人に至つて始て辨明せり。閻若璩が古文疏證、王鳴盛が尙書後辨にて、其僞を說盡せり。予も亦少時壁經辨正十二卷、梅本增多原十二卷を著述して、其僞を辨駁せり。僞書たるの證驗を知らんとには、諸書に就て辨知すべし。

一僞書二十五篇、左傳、國語、孟子、荀子を初として、墨子、呂氏、國策等まで、書を引ける語を集め綴りて拵へたる者にて、宋人集句の詩に同じ、逸書の語大抵は此二十五篇にあり。文辭は魏晉の人四六の體にて讀め易く解し易く、人事治道に切實なるこ

端人―行の正しき人

子を讀むの害なり。士人たる者、終日妓娼、俳優、幇間、騙棍等と交りて、端人正士となるべきや。非聖無法の諸子を終日披玩して、聖人の意聖人の德を得べきや。是必ず無の理なり。諸子は古書なり、讀まずんば有るべからず。されど、其己の心術に大害あること妓娼と類を同じうすと云ふことを知るべきなり。

孟聖は、楊朱、墨翟を無ㇾ父無ㇾ君。禽獸也と仰せられたり。楊墨は道に近き事あり。夫すら如ㇾ此。況や孫武韓非に於てをや。

一天道天命を說くことを迂なりと云ふ儒氏もありと聞けり。詩書の二經は不ㇾ知や。孔孟の語言は不ㇾ知や。知ㇾ命と云ひ、俟ㇾ命と云ひ、立ㇾ命と云ふ、何事ぞや。されど夫までの深義には不ㇾ及、天命天道の吉凶禍福をいやに思ふ人は、墨子の非命、列子の力命、又淮南などの孔孟不遇なり、顏子は短命なり、伯牛は惡疾なり、司馬遷の盜跖橫行、夷齊餓死などを云つて、天道天命は無き事に仕たきこゝろなり。是は、己が心術は、不正なり、身行は詐僞なり、世を涉り事を處する權譎のみなる故、もしや天地鬼神の昭明ならんには、其冥罰免れ難しと心に畏るゝ所ある故に、天道天命鬼神等は無き物にしたきなり。曹操が無類の權譎ものにて、性不ㇾ信二天命之事一と云ひたるに

蹤迹—あとをつくること

彝倫—人の爲に守るべき道

の財寶を奪つて、さて捕吏の蹤迹し搜索する跡を滅せんと計ると同じ術なり。捕吏の蹤跡するを畏れば、初より盜まざるには如かず。妻子の仇敵たるを畏れば、初より邪惡の心にて庶孼を寵昵すべからず。無道を以て妻子を遇待すべからず。其本を知らずして妻子を仇視すると云ふ。されば韓非の學韓非の智は盜賊の智と云ふべし。

一莊周妻死して、鼓盆而歌事を高慢に說き出せり。是は原壤が母死而歌の意にて、實は風顚喪心の人の所行也。去ば、莊子の學莊子の智は、狂人の智と云べし。春秋の末世より戰國に涉りて、孔孟大聖人の出世なれども、其道德の尊きをも知らざる程の亂逆衰敝の世なり。故に人物と云ふ時は、屈原、樂毅、魯仲連、藺相如等に過ぎず。處士任意て橫議邪說を云ひたるもの也。時代の古き故に、其文辭は後人の及び難きことあり。其說きたることは、十に八九は皆非聖無法の言なり。取るに足ることなし。兩漢に至りて、孔孟の尊きを知りて、二帝三王の古に復することは得ざれども、其彷彿は得て、彝倫も再次序すと云ふべし。さて諸子の書を讀むには、經書の字義又は語句等の證左となるべきを知る而已なり。其言其意を以て經書を解釋すべからず。まして、其邪說を信用すべからず。明儒と我邦の學者の經學道義に暗きは、好んで諸

髮も僞には渉らず。是も孔夫子の仁道仁德にや。

一孫武子は、兵書第一のものにて、戰國秦漢の人兵法と引けるは、多く孫子の語にて、當時より尊き書なり。文辭も條暢明白にて、古文の正大なるもの也。(脫誤多し)されども、處女脫兎の一條にて、其下劣を悟るべし。初は處女の如くにすれば、敵も油斷して戸を開く。其時に脫兎の如くに飛入れば、敵防禦すること不ㇾ能と。越王勾踐の吳王夫差を欺きたるは、此術なり。一人の身にとりては、睡り目をして居る時は敵ち油斷すべし。其時飛懸りて刺殺すと云ふ術なり。是は盜を能くする猫に多き事なり。肴を料理する傍には、必ず居睡をして居る者なり。料理人の少し油斷すれば、肴をくはへて逃げ出すなり。されば、孫子の學、孫子の智は、禽獸の智と云ふべし。

一韓非子に、當時諸侯の皇后太子に毒殺せらるゝを畏れて、妻子を仇視することを說きたり。是は諸侯の愛妾を寵幸して、后夫人を粗略にし、愛妾の生みたる庶孼を家督にして、太子を廢せんとする邪惡の心より、親しき妻子も仇敵となる事也。諸侯の正道を以て妻子を遇せば、仇敵たるべきや。仇敵も恩義に感じては味方となるは、道德の效なり。夫を親しき妻子の仇敵となり。此方よりも仇視して油斷せざるとは、盜賊の他人

條暢―のびやかなること

庶孼―めかけばらの子　庶子

たり。實は論語を讀みても行ひ得るに志なく、上の空にて解釋せる故に、療治せざる醫者の藥方を解するに同して。俗耳を聳動するとも、病人に無益なるが如し。もし行得る志あれば、儒者なれば書を讀むべし。書を讀むときは、愛人の念も無く、安民の事もなし。然るに孔子は無㆓終食之頃違㆑仁と仰せられたるを見て、さらば論語の仁の字は安民にても通ぜず、愛人にても通ぜずと心付くべき事なり。夫に心付かざるは、上の空にて書を解する明驗なり。さて又其尊奉する管仲は、三歸具官旅樹反坫汰侈僭上不㆑知㆓禮制㆒者にて、八佾雍徹旅㆓於泰山㆒、季桓子と同罪の人なり。大功あればとて尊奉すべきに非ず。孔子は小器と仰せられ、曾申は功烈其卑と云へり。管仲の信奉に足らざるは、孟荀を待たずして、孔門よりして定論あり。

中庸に、仲尼祖㆓述堯舜㆒。憲㆓章文武㆒とあり。桓文に憲章すとは宣はず。然るに管仲を尊奉の餘、桓文をも推奉するものあり。王覇の辨をも解せず、可㆑笑の尤なる者なり。

一心の善に發動し、惡に發動する天理人欲の別を知らず、中心欣然愛㆑人など云ふ字面にて仁を解せんには、人は愛妾愛妓などは、中心の至誠より欣然として之を愛す。毫

父母の遺體—自己の身體

布鼓を持ちて云々—到底及びもつかぬ意

不敬なりと心付いて坐を正しくする、是克ㇾ己復ㇾ禮の仁なり。是欲ㇾ仁仁至るなり。一讀書の上にても、仁道湧出す。是にて、無ニ終食之頃違ㇾ仁。道不ㇾ可ニ須臾離一と云ふこと、人々學んで行ふべく、修め得べし。否れば空言なり、空論なり。さて、又途中にて顚倒する時も、衣裳を汚すまじ、破るまじなど云ふ心發動するは、小人利欲の心にて不仁なり。父母の遺體を毀傷しては不孝なりと云ふに心付き、手を撐きて膝をすりむかざる樣にすれば、善心の發動にて仁なり。愛人の安民のと云ふことにて論語の仁の字を解せんなど思ふは、周易の童觀闚觀なり。夫らの蒙昧なる眼力を以て聖人の經を窺んとは、布鼓を持て雷門を過ぐると云ふべきか、俗に云ふおしの強きと云ふもの歟、太つ腹と云ふもの歟。

一我邦の古學者と云へる者、聖人の道德は毫髮も不ㇾ知、功利の學にて管仲を聖人よりも尊く思ふなり。故に論語第一の仁の字を解するも、管仲の仁より見解を起して、安民と云ひ愛人と云ふ。千言萬語皆管仲の爲に分疏を費すには過ぎず。可ㇾ笑の甚しきなり。近頃には、韓非の解老に云たる中心欣然愛ㇾ人と云ふにて、論語の仁の字を解する者もありて、周公管仲の仁と云ふことをも言出す。周公も管仲も同格の事と覺え

毫髮も—少しも

机案—つくゑ

一心の善に發動する者是仁なり。論語に其心不レ違レ仁と云ふ。孟子に、仁人心也と云ふ。善念善心を仁と云ふなり。論語の仁は、善心善行の事なりと知るべし。

一曰。我欲レ仁斯仁至矣と。能々熟讀して語意を玩味すべし。愛人を欲すれば愛人至るなどと云ふことにては、努々あるまじ。一曰。依二於仁一曰。顔子其心三月不レ違レ仁。餘子日月至焉。曰。造次於レ是。顚沛於レ是。愛人安民など云ふことにて、毫髮も通ずべき事に非ず。今學者家に在りて、父母を愛し、兄弟を愛し、妻子を愛し、奴婢を愛す。是愛人の仁にて、上もなき善行なり。去ども、これ愛人のみ仁なりとせば、机案へ向つて書を披けば、忽然として、愛人の心は消滅す。書を讀む中にも、愛妾の愛すべきを思ひ、愛妓の愛すべきを思はゞ、愛人の仁には叶ふべけれども、夫にては、書は一字も解し得まじ。さて、是は善心善行にもあるまじ。讀書の時は、愛人の念なくなる時は、終食の頃も無レ違の義に合せず、造次於レ是の義に合せず。夫にて、愛人にては通ずべからざるを悟るべし。仁は善心善行と云ふことを知れば、机案に向つて書卷を披く、是仁なり。讀書明理は上もなき善心なり、善行なり。机案の塵を拂ふも仁なり。机案の歪めるを正すも仁なり。古人の言行を見るに、膝を崩すは

仁は陰陽なり、人に在ては仁義なり、人愛念を生ずれば、身體暢然として解緩なり。義は是秋冬の陰氣なり。敬心を生ずれば、身體慄然として畏縮す。是春夏の陽氣なり。天地の陰陽に同じき仁義なれば、堯舜の時よりして、此事尚書に見えたり。去ども、仁義と云ふ字面はなし。論語にも、仁義の字は無くして、其事は二條まで出たり。さて、孟子は開卷に仁義を說出せり。仁は愛レ親を以て云ふ、義は敬レ君を以て云ふ。又曰。親レ親仁也。敬レ長義也と。是愛レ親の孝を仁とし、敬レ長の弟を義となす。尤至極の事なり。然るに論語には、孝弟也者。其爲レ仁之本與とありて、孟子の仁義と分けらるゝ者を、論語にては、總て仁となせり。仁義の二端は、聖道の大綱なり。夫さへも、引括て仁となす時は、論語にては衆善諸行仁に非ること無し。されば、張南軒が五十三條のみ仁と思へるは、論語の仁を不レ知にて、論語は言々句々仁を說きたる者なりと、古人の言ひたるは識者の妙言なり。孟子は仁義經なり。中庸は誠經なり。論語は仁經なりと知るべし。

一孟子にも、仁則榮。不仁則辱。仁之勝ニ不仁一。仁在レ熟レ之の類は、愛人の事に非ず、善行を云ふ。論語と同じ。

路脈—みちすぢ

面命提耳—「面命」は直接に向つて命ずること。「換耳」は教誨の詳且切なること。即ちまのあたりよく誨ふる意詩經に出づ

得レ仁と仰せられたり。

一さて、此事突然として是あらんには、可レ知の路脈もなく、可レ解の道理も無きに、論語を編集せる時、里仁の篇に、仁者安レ仁。知者利レ仁と云ふ語を載せて、安而行レ善者は仁者なり、利而行レ善者は知者なりと云ふことを辨明に知らしめて、其次の篇公冶長に、不レ知二其仁一也。焉得レ仁と、條々を擧げて、仁者は安行なりと云ことを明白に知らしむ。若二聖與一仁と仰せられたるも、安行のことなりと云ふ事まで、明白に分る樣に編集せり。古人用意の委曲詳悉なる、面命と云ふべきか、提レ耳と云べきか、手携と云べきか。實は今云把レ手て引くと云ふやうなるを、二千年夫に心付かざる故、焉得レ仁。不レ知二其仁一也と云ふを、皆無理なる注解而已を爲たるは、如何なる蒙昧ぞや。

夫子曰、若二聖與一仁、吾豈敢せんやと、安行の仁を云ふ。表記云。中心安レ仁。天下一人而已矣。安行の難きを云ふ。諸子の仁を許したまはざるは、其所レ行の善、皆利行勉行にて、安而行レ之ものに非ざるが故なること明々亮々なり。

一說卦に、立二天之道一。曰二陰與一陽。立二人之道一。曰二仁與一義。とありて、天地に在りて

歿、年六十三

己其利を得ずとも、子孫其善報を蒙ると云ふことを知り、天道を明辨する故に、善不善を擇んで不善を捨て善を行ひ、善を利なりとして行ふ、是智者の事なり。學者安行には至り難し。天道を明知して、利行には至るべき事なり。

一仁は善行なり。孔門諸子善行を修せざる者なく、善行の一端を得ざる者なし。何故に諸子には不ㇾ知二其仁一也と仰せられ、子文、陳子には焉得ㇾ仁と仰せられたるぞ。是所論語中第一の要義にて、此義を知れば、論語の義解すべし。知らざれば、論語解すべからず。仁の善行たるまでは、漢宋の儒も知りたれども、此義は、二千年實に解し得たる者なし。今其義を明辨して、天下後世に傳へ示さん。仁は衆善の總名故、小德微善も仁人仁者と云ふべし。親ㇾ仁友ㇾ仁などは、唯善行ある人の事を云故に、賢者より下に仁者と仰せられたり。扨眞の仁者は、安行の人を云ふ。安行ならざれば、眞の仁者には非ず。安行は中庸にても、生知と同格にて、聖人の事なり。故に仁の難きなり。然るに、仲弓之簡、子路之果、冉有之藝、公西赤之禮容、令尹子文之忠、陳文子之淸、皆善行の一端を得て、利行勉行に出で、安行自然の境に造れる人に非ず。自然の境界に造れば、性ㇾ之の誠聖なり。其企及ばざる事明白なり。故に不ㇾ知二其仁一也。焉

物茂卿—荻生徂徠江戸の人、名は雙松字は茂卿、通稱總右衛門、學を以て柳澤吉保に仕ふ復古の學を唱へ名聲甚だ高し。享保十三年

にとなれば、泥を踏み陷れば足袋を汚し、足履を濕すの害あればなり。何も、勉強することは無けれども、己と善と未だ一致の境界へ至らず、善の利あるを知つてこれを行ふ。安行の性のまゝにするに比すれば下れり。是知者のことなり、賢者のことなり。勉行は心内に邪なる情欲多くして、心のまゝに行ふ時は、不善無道に陷入すべきを、情を揉め欲を忍へて、勵レ精發レ憤して善行を勉強して行ふ者なり。利行に比すれば、又下れり、是勇者の事なり。士人學者の事なり。

物茂卿が論語徵に、利レ仁を勉強と解せり。義理に盲昧なる而已ならず、中庸表記を知らざるなり。此三行は吾道の緊要の事なるに、夫をも辨知せざる程の者なり。其經學其道義を奉ずる者は、盲目に均しき者なり。

上章の里仁は安レ仁なり。擇レ處レ仁は利レ仁なり。

一擇レ處レ仁。知者利レ仁とは、人欲利に走つて今不善をなせば、己の身に大益ありとも、此は後に巨害あり。不善にして利あるは、甘き毒を食ふに同じ。又盗賊の財を得るに同じ。今は利ありとも、後に大害を受くると云ふことを知り、又不善にして利を得れば、己は無事なりとも、子孫其惡報を蒙ると云ふことを知り、今善を行ひて利なし。

矯揉造作—むりにためなほし又はわざとつくり出すこと

泥濘—どろ

なり。論語に、仁者安ㇾ仁。智者利ㇾ仁と云ふ、表記には、仁有ㇾ三。仁者安ㇾ仁。智者利ㇾ仁。畏ㇾ罪者强ㇾ仁と云ひ、中庸に、或安而行ㇾ之。或利而行ㇾ之。或勉强而行ㇾ之と云ふ。善行は一なれども、行ひやうに三等の區別ありて仁智勇と分れ、聖賢凡庸の隔を爲すことなり。

一安而行ㇾ之とは、呂覽に、安ㇾ之若ㇾ性。（義賞）漢書に、安服若ㇾ性。（谷永傳）とありて、善行を行ふ事天性自然の如くにして、矯揉造作を假らず、酒好の酒を飮むが如くなる者安行なり。善を行ふ心なくして、行ふ處自然と道と合する者安行なり。中庸に誠者不ㇾ勉而中。道不ㇾ思而得。道從容中ㇾ道聖人也と云ふ。是安行なり。孟子には、堯舜性ㇾ之と云ひ舜由㆓仁義㆒行。非ㇾ行㆓仁義㆒也と云ひ、動容周旋中ㇾ禮盛德之至也と云ひ、孔子の七十從㆓心所㆒ㇾ欲。不ㇾ踰ㇾ矩と云ふ、皆安行の仁、至誠の聖なり。故に若㆓聖與㆒ㇾ仁。吾豈敢せんや。聖仁と並べて仰せらるゝも此故なり。是安行を眞の仁者とするなり。利行の利は、解知する者少し。利は利害の利にて、知者は、善の利ある、不善の害あるを明知する故不善をすてゝ善を行ふ。今人路を行くに右は泥濘なり、左は乾けり。夫へ向へば必泥の方を避けて乾ける方を行く。如何

是は中庸に、道也者。不可須臾離也と云ふと同うして、論語には仁と云ふ、中庸には道と云ふ。予先に論語の仁の字は衆善行の總名ゆゑに、論語の仁字を諸書には道德と云ふと言ひたること、相違あるまじ。眼を明にして讀みたまへ。仁の善たるを知れば、論語の仁の字を解するには破竹の勢あるなり。

一論語に、問孝は事親の方を問ふなり。問政は治民の方を問ふなり。問仁は善行を修するの方を問ふなり。故に樊遲には、恭敬忠の三を敎へ給ふ。子張には、恭寬信敏惠の五を敎へ給ふ。顏淵には、克己復禮。仲弓には、敬恕、司馬牛には、訒言。子貢には、能近取譬。又事賢友仁、樊遲に、又愛人。又先難後獲。可見仁と云ふは、一德一行に非ざることを、善行を問ふ故に、其人に應じて修すべき善行を擧げ示し給ふこと如此。されども、皆々能々修すれば、安行の仁者に至るべし。

分け上る麓の路は多けれど同じ高峯の月を見るかな

と云へる和歌、論語諸子へ告げ給へる、仁の義に能々叶へりと知るべし。

一さて、此善行を行ふに、三等の別あり。善行を安じて行へば、仁者にて聖人の事なり。利して行へば、智者にて賢人君子の事なり。勉强して行へば、勇者にて士人學者の事

巧言令色—言語を巧にし、顏色をよくし他の意を迎ふること

節文—序を守り行ををさめとゝのふること

も畧知りたる事にて、新奇奇怪を言ふに非ることを知りたまふべし。

一論語の仁の字、善の字と同じと云ふことを知れば、曰。孝弟也者。其爲レ仁之本與。孝以事レ親。弟以事レ兄。是修二善行一の初なり。曰。巧言令色。鮮矣有レ仁。巧言令色の人實に善行ありと云ふこと、世間の所レ希なり。曰。汎愛レ衆而親レ仁。衆人は兼て愛すべし。殊に善行のある人は、親近して薫陶の益を蒙るべきなり。曰。人而不仁。如二禮樂一何。人として善心なきものは、禮の節文も樂の和樂も何用をかなさんや。曰。里レ仁爲レ美。擇不レ處レ仁焉得レ知。里は鄕里の里、安居の謂なり。善行に安居するは美事の極なり。是眞に仁者なり。善惡の分を明辨して、惡事を擇び、去つて能善行に處る者は、智者の事なり。否なるときは智者には非ず。曰。仁者安レ仁。智者利レ仁。衆善を安行して、天性に出づるが如き者、これ眞に仁者也。善には利あり、不善には害ありと云ふことを明辨して、不善を捨てゝ善を取つて行ふものは、智者の事なり。曰。一日用二其力於仁一。精力を出して善行を修するを云ふ。曰。無三終食之頃違二仁。造次於レ是。仁。顚沛於レ是。仁。飯を食ふ程の間も善心を失はず、造次の假初の間も善を離れず、顚沛のころび倒るゝの時も善を離れずと云ふこと。さて、

邢疏―邢昺の論語の疏
徹底して―奥底までのみこみて

合ふ處には、愛人の發動を以て第一の事となす。人々相愛するの心なければ、五倫も歎れ人道も滅す。是故に、仁之爲レ人也。爲二接レ人之道一也。愛を以て上頭第一義となす。故に古來相傳して、愛を以て仁を說けり。されども、論語の仁の字を愛人の事などと心得ては、毫も通ぜざる事なり。

一 さて仁の字、衆善行の總名たること、予が言出せる新奇の說には非ず。程伊川曰。四德之元。猶二五常之仁一。偏言則一事。專言則兼二四者一。(易傳)是專に言へば、仁の一字仁義禮智を兼ぬと云ふこと也。是仁の字道德の總名となる。されど、性中有二仁義禮智四者一。何曾有二孝弟一乎と云はれたるを見れば、仁は衆善の總名を能々知られたるには非ず。邢昺論語の疏云く、仁者善行之大名也。(里仁篇名疏)是仁の總名たるを明言せり。されども、何の故に門人へ仁を許し給はずなど云ふ仔細の義理を知らざれば、邢疏にて論語の仁を呑込むべきに非ず。孔安國解二爲レ仁。由レ己而由レ人乎哉。云。行レ善在レ己。不レ在レ人者也。(顏淵問レ仁章)仁之爲レ善は西漢の儒既已く知レ之。されども、是は戰國以來、孔門の仁の字は善の事と云ふことは聞傳へて知りたるのみにて、實は徹底して其義理を盡せるには非ず。然し予が所レ說は、漢宋儒氏

殊異―ことなる

而民從レ之。孟子には、文武興則民好レ善。幽厲興則民好レ暴。仁暴對用。善暴對用、仁善の通可レ見。表記に、仁者安レ仁。知者利レ仁。畏レ罪者強レ仁。大戴には、太上樂レ善。其次安レ之。其下亦能強レ之。(曾子立事)仁善の通可レ見。僞書、天道福レ善禍レ淫。(湯誥)左傳には、神福レ仁而禍レ淫。(成二年)仁善の通可レ見。如レ此に古人は仁と善とを互換通用したり。仁とは善のことと云ふを了知すべきことなり。

一何を以て仁の字、善の字と同うして、衆善行の總名となるや。中庸、孟子表記に皆云ふ。仁者人也。これ義者我也(繁露)と云ふに對して、我に非ず人也と云ふことなり。仁者接レ人之道也と云ふことなり。さて、其爲レ字、从レ人从レ二。二人爲レ仁。凡聖人の道は、人と人と、すれ合ふ處よりして此道を生ずる者なり。父子之親、君臣之義、夫婦之別、長幼之序、朋友之信、五常五倫、孰れか人と人とすれ合ふ處より生ぜざる者あらんや。是皆仁なり。是故に、仁の字諸行を兼ぬべく、又衆善を總ぶべし。論語の仁を說くは、多く此義を言ひたる者なり。四端六德など對言せるの仁とは、判然として殊異なり。

一何を以て中庸孟子以下、又は孔子の言にも、仁を愛人の事に用ふるや。人と人とすれ

互換通用―双方入換へ或は共通に用ふること

さて、是は論語と它書とにて云ふ。論語に本立而道生。孝弟也者。其爲仁之本歟と。本は孝弟なり、道は仁なり。仁と道と互換通用すること、論語の開巻よりこれ有れば、論語の仁の字は道徳と同じく衆善行の總名と云ふことに心付くべき事なるに、是まで心付なきは、蒙昧の甚しき事なり。

一仁の字、衆善行の總名故に、論語には、行の字の換りにも用ふ。曰。君子以文會友。以友輔仁。これ文行相對するの例にて、朋友の忠告善導にて、己の徳行を輔くるなり。愛人を輔く、安民を輔くにて通ずべきや。曰。博學篤志。切問近思。仁在其中矣。中庸にて、博學審問。愼思明辨。次に篤行と云ふ處を、論語には仁とあり。善行の學問より生ずるを云ふ。愛人在其中。安民在其中。にて通ずべきや。

一古の仁の字は、善の字なり。故に古人は仁と善とを通用せり。論語に、我欲仁斯仁至矣。又云。欲仁而得仁。皆善道を行はんと願欲して、善道の眼前に至り、善道を得るを云ふ。孟子に、可欲之謂善とあり。仁善の通可見。論語に、舜擧皐陶。不仁者遠矣。湯擧伊尹。不仁者遠矣。左傳に、禹稱善人。不善人遠矣（宣十六年）仁善の通可見。大學に、堯舜率天下以仁而民從之。桀紂率天下以暴

支離予盾—はなれ／＼にしてつじつまの合はぬこと

て、賢者よりは下等の者なり。先後支離矛盾して通ずべきの義なり。是論語の一大疑なり。

一孔子の仁の字は、如何にぞと云へば、衆善行の總名にて、善の字と同じ。孔子曰。道二。仁與不仁而已矣と。此仁の字を愛人などと解して、知仁と並び、知仁勇と並び、仁義と並び、仁義禮知と並ぶ仁とせば、孔子の此言不通なり。道は二のみならんや。義不義もあり、禮無禮もあり、知不知もありて、道は百條なり。仁の字善と同じと云ふ事を知れば、道二善與不善而已矣と云ふことにて、目下に瞭然たり。是より眞智を開くべし。

一道も諸道の總名なり。德も諸德の總名なり。善も衆善行の總名なり。論語の仁の字衆善行の總名たる故に、道德の字と通用せり。曰。孝弟者也。其爲仁之本與。孝經云。夫孝。德之本也と。仁と德と通用せり。曰。仁遠乎哉。中庸云。道不遠人と。仁と道と通用せり。曰。仁者安仁。知者利仁。中庸五者。天下之達道也。或安而行之。或利而行之。二の之の字、指達道。仁と道と通用せり。曰。仁者安仁。知者利仁。大戴に、仁者樂道。智者利道。(曾子立事)と。仁と道と通用せり。

孰れの所—源本「の」を脱す

仲弓は徳行の一人にて、可使南面と仰せらる。南面は諸侯王の事なり。諸侯王となるも宜しき人なれば、愛人の徳も有るべし。長人安民の徳も有るべし。人を愛する心も無く、人の長となり、民を安んずる徳なきもの、可使南面と仰せらるべきや。是をされども、夫子曰。不知其仁也。是を古に求むれば、子文も仁者に非ず、是を今に求むれば、仲弓も仁者に非ず。孔子亦自言。若聖與仁。則吾豈敢せんやと。仁者は聖人と同格にて、夫子さへも謙して自居り給はず。是故に、禮記にも中心安仁者天下一人而已。(表記)とあり。此意を以て推す時は、天下に仁者は無きものなり。金の草鞋を著けて尋ねたりとも、逢ふべきものに非ず。聖人と同格の者なればなり。

一然るに。論語の初に、不學の子弟に、汎愛衆而親仁とあり。孰れの所に親むべき仁者あるぞ。又子貢に教へ給うて、居是邦也。事其大夫之賢者。友其士之仁者。孰れの所に友とすべき仁者あるぞ。鄕黨にも仁者あればこそ、子弟に是と親しめと仰せられ。諸侯の國にも仁者あればこそ、子貢に朋友とせよと仰せらる。先の仁の字は聖と同格にて、孔子さへ當り給はず、後の仁の字は、鄕黨にも侯國にも多くあり

疎謬—そまつにしてあやまりの多きこと

强解—こじつけて解釋する也

出レ門とは居レ家の反對にて、居不レ容。子之燕居。伸々如。夭々如とある故、出レ門の時は威儀容貌を齊整にし、敬肅不レ苟こと大賓に接見する如くにするなり。使レ民は役ニ使庶民一することにて、是亦敬愼不レ慢こと大祭に承事するが如くにすることなり。左傳に、鮑叔論ニ襄公一曰。君使レ民慢。亂將レ作矣。(僖八年)と云ふにて、使レ民の敬すべきを知るべし。二語共に敬の事なりと、古註集註ともに言うたり。間然すべからず。左傳に、臼季が冀缺夫妻敬相待如レ賓を論じて、敬。德之聚也。能敬必有レ德。臣聞レ之。出レ門如レ賓。承レ事如レ祭。仁之則也、(僖三十三年)とあるにて、二語ともに敬の事たるを知るべし。

近時愛人を以て仁を說くものあり。出レ門の語を强解して、視レ民若レ傷の事とす。可レ哂の甚しき也。孔子樊遲問レ仁にも、執レ事敬と仰せられたり。此敬の義を無理に愛人に爲しおほせたりとも、克己復禮に愛人の義あるべきや。論語の仁の字、愛を以て通ずべきの理は斷じて無き事なり。

一論語の仁の字に、一の大疑あり。令尹子文は楚國の良大夫なり。愛人の德も有るべし、長人安民の德もありたる人なり。されども、夫子曰。焉得レ仁とあり。冉雍、

きたる爲頭大に尾小く、其形科斗（おたまじやくし）に似たるよりいふ

旁義—第二義

關渉—あづかる

も仁の一端にて、仁を解して愛人とは爲難し。且諸子問仁に種々の答ありて、愛人のみ仁の正義ならば、孔子諸子へは旁義のみを教へ給うて、樊遲に而已正義を教へ給ふにや。これ不通の論なり。門人の最第一たる顔淵には、克己復禮と宣へり。一向に愛人の事にはあらず、仲弓には。出門如見大賓。使民如承大祭。と宣へり。二句敬の事にて、一向に愛人のことに非ず。樊遲に恭敬忠と云ふ。是も愛人の事に非ず。子張に恭寛信敏惠と云ふ、是も愛人の事に非ず。其最不通なるは、司馬牛には、訒言と宣ふ。愛人にて通ずべきの理なし。曰。無終食之間違仁。造次於是。顚沛於是と。顚沛は下駄の鼻緒を蹈切りて、臥轉ぶの時なり。此時愛人するも、虐人るも有べき時ならず。愛人にて通ずべきや。曰。欲仁斯仁至と。閒居獨坐せんに愛人は至らざるなり。是は閒居獨坐の時、眼前に來り至るの事に非れば、此語意に叶はざるなり。伯夷、叔齊、讓國餓死せり。曰。求仁而得仁。愛人に關渉する事なし。微子去之。箕子爲之奴。是亦愛人に關渉することなし。愛人安民。濟世利民など云ふことにて、論語の仁の字毫も通ずべきの理なきことなり。是にて先漢宋儒氏の疎謬を斷知すべきことなり。

末造—末年

科斗の古文—古代の文字、竹簡に漆を以て書

何等の禮を傳ふべしや。是も亦夢中の囈語なり。總て禮の事は、夢中の囈語のみ多しと知るべし。孟子の諸侯惡其害己。皆去其籍。軻也嘗聞其畧とのたまへる、誠に得實の言なり。然るを周禮の如き精細の書あらば、孟子の知り給はざることはなきなり。其書の戰國の末造たる事明々了々たり。

一論語に、博文約禮と云ひ、約之以禮と云ふ。三千三百、約なる者に非ず。されば論語の禮と云へるは、三千三百の外に出づるや。不審なる事に非ずや。

一制度を好む人は、我邦の有職故實、武家の弓馬の法式、當時の御法令を學ぶべし、周禮を悅んで天下を亂敗せるには遙にまさりて、且は今日の實學とも云ふべし。三代の禮文を論ずるは、茶器の僉議にて、無用の學と知るべし。

一予少時より、漢宋の舊說に從つて、仁を愛人なりと解說せり。中庸以下の仁義と對言せる類は、愛人にて明々亮々なり。唯論語にては、愛人の義通ぜず合せず。戰國の愛人を以て孔子の仁の字を說くは、漢隷の字を以て科斗の古文と爲すに同じ。苦心數十年にして、始て其解を得たり。今論列すること左の如し。

一樊遲問仁。子曰。愛人。問知。曰。知人と。知人は知の一端なり。去れば、愛人

歸一の論——一定の論

囈語——たはこと

禮言其極也とありて、三十までに娶り、二十までに嫁すとせり。是は王肅が拵へたる處なれども、禮記鄭玄にはまされり。婚姻の時も、鄭玄は周禮の媒氏を據とし て、二月なりとす。王肅は荀子家語毛萇に因りて冬月とす。國風の士如歸妻。逮氷未泮と云ふに因れば、是も、王肅をまされりとす。されども、制度の事は一致に出づる故、法則となる。今の三禮は、戰國西漢の人の各々聞傳へを記せる者なれば、紛然として歸一の論なし。夫を孔子の舊などと思ふは笑ふべき事なり。

一檀弓に、孔子姊の喪ある故に、拱して右を尙にすれば、門人も拱して尙右とあり。孔門の弟子吉事尙左凶禮尙右を知らざれば。不學の甚しきなり。夫を甚矣哉。二三子之好學也と、孔子の嘆賞したまふ。誠に夢中の囈語なり。左傳、晉の范獻子、趙簡子、中行文子、魯に來りて、范子は上卿ゆゑ羔を贄とし、趙子、中行子は次卿ゆゑ雁を贄とす。此よりして、魯人始て羔を尙ぶと云ふことを載せたり。(定公八年)二生一死贄は、舜典に出でて、卿は羔、大夫は雁、士は雉と云ふ事は、小兒も知りたること也。魯猶秉周禮。(閔元年)周禮盡在魯。(昭二年)左傳にも頻繁に云へり。禮記にも、有禮之國也。(明堂位)とあり。然るに是等の次弟をも辨ぜずして、

室—つま

衰なる者、大に間違へり。聖人喪の五服を定められたるは、絲の太き細きにて、斬衰齊衰、大功、小功、緦の別を立てられたる者にて、中庸に云ふところの親親之殺、此にて別る。然るに、其糸の疎細、斬に叶はざれば、斬衰に非ず。父の喪に小功緦の絲を用ひてすむべきや。五位の人三位の服を服せば、罰を蒙るべし。此は上の御制法もなければ、手次第なりとてすむべきや。官位の五服も喪の五服も同じことにて、親親之殺。尊賢之等。禮之所生也と、中庸に説けるにて知るべし。さて、喪服の絲の疎細を間違へる時は、禮に中らざること禮に明文あり。檀弓云衰與其不當物也。寧無衰。此文にて疎細を間違へたる喪服は著ざるを可とすること明らか也、禮學の人は國俗にも違ひて如此ことをなし、又禮文にも違ふに至る。悪むべき事ならずや、笑ふべき事ならずや。

一王制には、春秋教以禮樂。冬夏教以詩書とあり。文王世子には、春誦（詩也）夏絃（樂也）秋學禮。冬學書とあり。是も異同なり。春絃夏誦と云はゞ王制と符合すべし。班固十五入大學。學先聖禮樂と云ふ。内則には、二十始學禮とあり。是も異同なり。禮記にては、男子三十有室。女子二十而嫁すとあり。家語にては、

拘泥―かゝはりなづむ

の明白なる者なり。昔時、京都に學者あり、內則の子事二父母一。雞初鳴、咸盥漱。衣服。斂二枕簟一と云ふ文を確く守り、寒天にも曉の七つに起きて父母をも呼び起し、其夜具蒲團を收めたり。老父の迷惑するにも構はず、終に其父は寒氣に中りて死したりと承り傳ふ。禮文の人道に害あること如レ此なり。

一禮記諸篇には、名理の語の拳々服膺すべきこと多く、誠に感歎にたへたること多し。大抵制度を說けるは、大半は僞なりと定めて、其れに拘泥せずして、唯其名理の語を信奉せば、論孟の羽翼とも云ふべし。吾三禮を惡むには非れども、禮學の人は制度を喜んで義理を知らず、義理に不通なる故に聖人の道德を知らず。天下は車服器械にて治るものの樣に思ひ、器數の末事に拘泥して、脩身治人の義に暗し。其害少からず。孔子の言に、禮云禮云。玉帛之云乎哉。樂云樂云。鐘鼓之云乎哉。禮樂の妙理は、玉帛鐘鼓の外に在ることを知るべし。

一予が舊友に、禮學を好みたる者あり。父の喪なりとて、斬衰に似たる者を拵へて著たり。さて斬衰を時々脫いで酒を吞み肉を噉ひ、又時々は此を著けて人を欺く。予此よりして、其人を惡み、又禮學の無用を悟れり。其人の不義は論ずるに足らず。其斬

夷隷の鳥獸と云ふ役人など、聖人の世にあるべき事歟。逆罪たりとも焚殺すと云ふこと、文武周公の刑なるべき歟。理財の事の多き、末世の弊政にて、文武成康の盛代には有るまじき事なり。王莽これを用ひて天下を亡し、王安石これを用ひて天下を亂る二王の先蹤にも懲りずして、周禮は周公致太平之跡と云ひ、周禮一書自聖人廣大心中流出來などと云ふ、如何なる謬見ぞや。萬斯大が周官辨非も讀むべし。されど郝京山が談經周禮の條に辨斥する所、極て其肯綮を得たり。

一孟子王制に、公侯百里。伯七十里。子男五十里と云ふこと、今古の定說なり。孟子に、又魯儉於百里、齊儉於百里ともあり。左傳に子產の語にも、古者列國一同（百里なり）とあり。周禮には、公五百里。侯四百里、伯三百里。子二百里。男百里と云ふ。此も、我建立せる一家言の法制なり。

一禮記諸篇を、皆古聖人の禮となすとも、重喪に酒肉を斷つと云ふことは、有べき理なり。小祥までは、疏食水飮。不食菜果と云ふ。一年の間肉食は云ふまでも無く、野菜をも食はず。野菜をも食はずして何を食すべきや。古今の人情相遠からず。今人に肉食はおろかなり、菜食を斷ぜば、堪ふべきや。堪難き事の强ふるは非理なり、是僞

佗國—他國

繁蕪叢脞—くだ〳〵しく煩しきこと

禮運に以㆓衰裳㆒入㆑朝。非㆑禮也とあり。檀弓には、蟜固が言に、士唯公門脱㆓齊衰㆒と云ひ、服問にも、雖㆑朝㆓於君㆒無㆑免㆑經。唯公門有㆑脱㆓齊衰㆒と云ふ。此文にては、喪中にも入朝すと見えたり。三禮の信ずるに足らざること如㆑此。

一王制には、大夫祭器不㆑假と云ひ、禮運には、大夫祭器不㆑假非㆑禮也。是謂㆓亂國㆒とあり。是大夫は祭器を假るべきや、假るべからざるや、紛然として從ふ所を知らざるなり。

一禮記の誕妄なるは、明堂位の魯君臣未㆓嘗相弑㆒也と云ひ、隱公、桓公、閔公、太子般、太子惡等の類、弑逆簒奪、佗國よりも多し。文王世子の文王の、我百、爾九十吾與㆓爾三㆒焉と云ふに至つては、誕妄極れり。聖人とても、人に年壽を分ち與ふべきものならんや。

一周禮は、戰國の末の人、我世に用ひられば、如㆑此の法制を立てゝ世を治むべしとて古禮をも取り、管仲、商鞅が法などをも取りこみて、一家言を搆へたる者なり。戰國の末に成りたるもの故、重斂重刑、繁蕪叢脞、古の聖人寬簡を貴ぶの意とは、沒交渉の事なり。先づ數の定りたる官人一億に及べり。螻蛄を捕ふる役人、蛙を捕ふる役人、

金革—兵器の義、轉じて戰爭をいふ

足らざること如レ此。

一禮運に、三年之喪。與二新有レ昏者一。期不レ使と云ふ。雜記に、三年之喪。祥(小祥、一周忌也)而從レ政と云ふ。公羊傳に、古者臣有二大喪一則君三年不レ呼二其門一已練(小祥、一周忌也)可三以弁冕服二金革之事一。君使レ之。非也。臣行レ之禮也。(宣元年)此文にては、三年の喪に、一周忌より後は、上の政事に服役することを云ふ。曾子問に、子夏問曰。三年之喪。卒哭金革之事無レ避也禮與。孔子曰。昔魯公伯禽有レ爲爲レ之也と云ふ。喪大紀に、既卒哭弁絰帶。金革之事無レ避也。と云ふ。此文にては、一周忌を待たずして、兵戎のことにも、服役することを云ふ。或は是は金革の事故に、常事とは別也と云へど、公羊傳には、一周忌よりして金革の事に役すとあり。或は公羊傳は常禮を云ひ、喪大紀曾子問は戎事ゆゑ變禮を云ふと云へど、小祥までは、疏食水飲。不レ食二菜果一瘦せ衰へたる底弱の人戰場へ出でては、味方の足手纏となりて、敗北疑なし。聖人の禮は、如レ此なる者には非ざらん。三禮の信ずるに足らざること如レ此。

一曾子問にも、雜記にも、服問にも、君子不レ奪二人之喪一。亦不レ可レ奪レ喪也とありて、

爲難し―原本「爲雑し」

祠夏禴秋嘗冬烝とあり。王制祭統には、春禴夏禘秋嘗冬烝とあり。郊特牲、祭義には春禘秋嘗とあり。明堂位には、夏禴秋嘗冬烝春社秋省と云ふ文もあり。鄭玄は周禮を周の時の禮と定むる故、此異同に苦みて、王制の注には、蓋夏殷之祭名と云ふ。祭統注には、夏殷時禮也と云ふ。笑ふべきの甚しきこと也。鄭玄又郊特牲を注して、此禘皆當爲禴。字之誤也と云ふ。祭義を注して、春禘夏殷禮也と、夏殷の禮と云ふさへ、遁辭にて笑ふべきに、本文の字を妄に改ること、以の外の誕妄なり。さて、仲尼燕居孔子之言に、郊社之義嘗禘之禮とあり。中庸にも、郊社之禮禘嘗之義とあり。是は、宗廟春秋の祭を稱せられたると見ゆれば、郊特牲祭義の春禘秋嘗の言其實を得たりと見ゆ。されども、是も決定は爲難し。是禮文第一の宗廟四時の祭さへ、紛然として明かならず。三禮信ずるに不足こと如此。

一祭義には、致齋於內。散齋於外とあり。祭統には、君致齋於外。夫人致齋於內とあり。是致齋は內に在りや外にありや。何にをるべきや。王制に、五十杖於家。六十杖於鄕。七十杖於國。八十杖於朝とあり。祭義には七十杖於朝とあり。七十の人、國に杖つくべきや、朝に杖つくべきや。禮文錯出從ふ所を知らず。三禮の信ずるに

なり。中月の中は、左傳に命汝三宿。女中宿至（僖二十四年）是中一晩とまりと云ふことなり。學記に、比年入學。中年考校すとあり、是も、中一年と云ふことなり。喪服小記に、亡則中一以上而祔すとあり。是も昭穆の中、一世をへだてゝ、孫は祖に祔することを云ふ。中元とは、中一月をへだてゝと云ふことなり。雜記の十五月の禫にて、明白に分る事なり。牽合の説は論ずるに足らず。是禮文第一の父母の喪さへ、二十五月にや、二十七月にや、辨別しがたし。三禮の信ずるに足らざること如此。

牽合の說―無理にひきつけたる說

唐の時に、王元感と云へるもの、三年の喪は三十六月なりと云ふことを言出して、張柬之にか辨斥せられたること、新唐書に見ゆ。淸の毛奇齡は、三年の喪は三十六月なりと云ひ、喪禮吾說篇に見ゆ。皆々笑ふべき事なり。去ども、漢の文帝始て短喪を定められたる時に、易日の制とて、月を日に易へて三十六日とせられたれば、此時代までは、三年の喪は三十六月と覺えたりと見ゆ。記傳の類は文帝より後に出たるも計りがたきこと也。

一宗廟四時の祭は、小雅天保の詩（毛詩如此）爾雅の釋天、周禮大宗伯の職には、春

文は三年忌の其月に禫の祭をして喪を祛き、其翌月には音樂すると云ふことなり。檀弓に、又、魯人有朝祥而暮歌者。子路笑之。夫子曰。由爾責於人終無已夫。三年之喪亦已久矣夫。子路出。夫子曰。又多乎哉。踰月則其善也。これも同說にて、三年忌の明月よりは歌樂すべしと云ふこと也。是王肅が二十五月の說なり。儀禮の士虞禮に、朞而小祥。(一周忌也)曰。薦此常事。又朞而大祥。(三年忌也)曰。薦此祥事。中月而禫。是月也。吉祭猶未配。と戴記の間傳にも、父母之喪。既虞卒哭。疏食水飲。不食菜果。期而小祥。食菜果。又期而大祥。有醯醬。中月而禫。禫而飮醴酒と。此文は再期二十五月に大祥の祭を作して、中一月を置いて、二十七月めに禫祭して、始て喪を祛くと云ふことなり。雜記に、父在爲母の喪を說けるに期之喪。十一月而練。十三月而祥。(一周忌也)十五月而禫。これも母の喪一周忌十三月に終れども、中一月を置いて、十五月に禫の祭をして喪を祛く。三年の喪の二十七月と同じ理なり。是鄭玄が二十七月の說なり。後世は大抵鄭說を用ふ。淸の萬斯大學禮質疑には、二說の異同に苦みて、中月を中谷中林の例にて、其月の中と讀みたり。總て鄭玄より禮文の異同に苦みて牽强附會すること、禮學の習にて、笑ふべき事

國法の一條なり。決して排闢すべき道理なきこと也。

一宋祁が新唐書、王縉傳の贊に、佛法は多分中國人の老莊などに取りて拵へたる者と云ふことを言へり。朱子晩年此説を得て大に悦び、韓歐の闢佛よりも宋祁の言眞贓を得たりとて、釋氏論二篇を著して、佛法の言の莊列に符合する四條の證を載せられたり。其説其文は極て可なり。さて、道學者の中にては、朱子は第一博識とすれども、宋祁の言を得て、是を知られたるは、書を讀むことの多からざるを知る。是は唐の太宗の時、例の佛法嫌の傅奕が言ひたる事なり。傅奕上疏請レ除二佛法一。佛在二西域一。言妖路遠。漢譯胡書。恣二其假托一と云ひたるなり。宋祁よりは四百年前、唐の初に此説あることなり。

一韓が佛骨表の初の一段も、傅奕が上疏の、古無二佛法一。君明臣忠。祚長年久。自レ傳二其法一。主庸臣佞。政虐祚短。と云へるに原きたるものなり。

一父母の喪の事、戴記に、三年之喪、二十五月而畢。(三年問)公羊傳に、三年之喪。實以二二十五月一。(閔公三年)戴記に、再期之喪。三年也。(喪服小記)是故に、檀弓に、祥而縞。是月禫。徙レ月樂すとあり。祥は三年忌なり。禫は喪を祓くの祭なり。此

二氏—佛老

闢排する—攻撃する

六百、蘭若四萬、僧尼二十六萬五百のみなり。是にて我國佛法の盛なるを比べ知るべきなり。釋迦の佛法東漸と云へるは、妙と云ふべし。

一乾隆の御製文集を讀みたるに、近年二氏大に衰ふ。此衰に乘じて二氏を禁絶せんと、部臣の奏疏に答へたる詩なり。落句に、留充畫景兼詩景とあり。三武の覆轍を蹈まずして、其大識量嘆服すべき事なり。

一排佛の文は、韓退之の原道、孫明復の儒辱、石徂來の怪說、歐陽永叔の本論、皆一代の好文章にて、道理の至極を得たり。二程全書、朱子語類にも、排佛の言多し。韓退之の言は淺くして程朱の理は深し。されども、退之の淺きもの實用ありて、深き程朱の言無用に屬するは、淸の紀昀が辨にて明白なり。其姑妄聽之に見えたり。感服すべきこと也。諸名公の文は、明人の異端辨正に載せたり。さて、又陳繼儒眉公の佛寺を大養濟院なりと云へるも、面白き見識なり。其古文品外錄に見えたり。さて又我國の人は、學者は少くして、文字をも不レ知愚民のみ多ければ、佛法は凶惡を戒むる一助となりて、古今大害もあれども、又大功ありと見えて、天よりして今日に至らしむれば、學者これを闢排するは無用のことにて、且我邦今日にては、佛法は王法の一端、

鄭成功─鄭芝龍の子、母は田川氏寛永元年肥前平戸に生る、明朝に仕へ、其滅後臺灣に據りて清朝に抗す、寛文二年歿

海督撫尙書王登聯等構死す。丁未春には、災祲疊見彗星出で、大白晝見。白靑出㆓西北㆒。經㆓月餘㆒。是歲七月。輔臣蘇克薩哈誅死すること、王士禎の池北偶談に見えたり。乾隆五十一年丙午には、臺灣の彰化縣に林爽文と云ふもの起㆑兵。鳳山縣の莊大田と云ふ盜賊の首魁乘㆑亂而起れり。五十二年丁未を經て、五十三年戊申に、林莊共に伏㆑誅。事は趙翼の國朝武功紀盛に見えたり、乾隆の丙午丁未は、我天明の丙午丁未なり。丙丁の厄、彼我共に免るゝ事を得ざるなり。

順治十八年に、鄭成功襲㆓取臺灣㆒(荷蘭人所㆑據)子鄭經孫克塽に至り、康熙二十二年(我天和三年癸亥なり。)靖海侯施琅攻克。克塽降れり。事鄭成功傳に詳なり。康熙六十年、(我享保六年辛丑なり)奸民朱一貴亂を作す。一月にして誅に伏す。事平臺紀畧に詳なり。林莊と共に清朝にて臺灣三囘の亂あり。

佛法三武の厄とて、北魏の道武、北周の武帝、唐の武宗と三度佛法を禁じて、僧尼を還俗せしめられたれども、皆幾程もなくして再興せり。武宗の佛法破却の詔は、李德裕の書きたるにて、面白き文章なり。劉昫の舊唐書に載せて、新唐書に一字も錄せず。藏書の家は新舊唐書は備ふべきことなり。さて武宗の時祠部奏す、括天下寺四千

目撃親見し
て―まのあ
たりしたし
く見て
高野大師―
弘法大師
聞見―見聞
といふに同
じ

ㇾ益の理なり。極めて妙理なり。是等の事學んで知るべし。本心のみにて知るべきの理なし。畏天錄に、家宅の崇高なるは害あるを言へり。是は予が經傳に得たると、多年目撃親見して知りたる事なり。後に予が女壻の古筆了伴が、其父了意が言なりとて傳へたり。高野大師の言に、家は崇高なるは悪し。火災の害を不ㇾ免。簷の卑く低れたる家は、繁昌にして永久なりとて、今にも東寺の大師堂は、簷各別に卑く低れたる故に久しく火災を免れたりと云ふ。予所ㇾ見と符合せり。故に予京師在留の日、六度まで大師堂へ參詣したるは、此等のことに感服すれば也。大師の唐人より傳へられたることと、予が所見の符合すること、奇と云ふべし。是等のことも、學問聞見の功にて得ることなり。良知のみを主張せば、典籍も無用なり、識者も無用なり。孔子は文(典籍)獻(識者)と宣へり。詩には雖ㇾ無二老成人一(識者)猶有二典刑一(典籍)と云へり。道は典籍に存し、識者に傳はりて多聞多見の功を假らざれば得べからず。唯本心の良知のみを主張せば、冥然として天地萬事の事明白なるべきの理なし。陽明の學、其一を得て其二を失ふ。其害の少からざるを知るべし。

一丙午丁未厄歳たること畏天錄に載たり。清朝にても、康熈丙午冬には、戸部尙書蘇納

十三年諏訪頼茂を殺し、其女を妾としたるをいふ

至近切要—手近くして適切要用なるをいふ

書庫書厨の學者—讀書にのみ耽りて、實際の活用を知らぬ學者

針砭する—戒むる

る、其害少からず。其不通を知らんとには、今人宮室を造營するに、高大壯麗にすべきや、卑陋素朴にすべきや、我本心に問うても了知すべきの理なし。讀書の功にて堯舜の土堦、茅茨、采椽(墨子)を知り、禹の卑宮室(論語)を知り、峻宇雕墻(僞書五子之歌)の亡國の戒たるを知り、豐其屋。蔀其家(周易豐上六)の无人の凶たるを知り、高明之家。鬼瞰其室(楊雄解嘲)の畏るべきを知り、桀紂よりして秦の阿房、齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝などの、華靡壯麗の宮室樓閣を作りて、天下を亡したるを知り、小にしては、楚の靈王の章華の臺を作りて、身死乾谿(左傳)晋平公虒祈の宮を作りて、諸侯叛之(同上)などの事を知りて、宮室居宅、儉朴卑矮なること、天の冥理に叶ふと云ふことを、斷然として了知するなり。唯本心に問ふ而已にて知了するの理はなきこと也。宋向戌來聘于魯。見孟獻子。尤其室曰。子有令聞。而美其室。非所望也。(左傳襄十五年)昔の賢人の宮室を壯麗にするは、耻づべき事なること是にて明白なり。三瓦之戒とて、(史記龜策傳)宮室落成に、屋の瓦を三枚缺きて葺かず。是は、物十分に滿つれば必禍あり。故に三瓦を缺くは、何までも不成就の形にて、周易、亢龍有悔の理に叶うて、僞書の滿招損。謙受

に乘じ、永正三年、赤松政村の妾胡蝶を奪ひ次で政村を弑し、其國を奪ふ
三好實休—長慶の弟にして細川氏の臣なり、天文二十一年、細川持隆の妾岡本氏を奪ひ、後持隆を弑す
武田信玄—傳は贅せず、姑夫を殺し云々の事は、天文

獸の事にや。

一飮食もなるべき丈は薄くすべし。房室もなるべき丈は少くすべし。是身を全うするの法なり。衣服もなるべき丈は質素なるべし。器用もなるべき丈は儉朴なるべし。宮室もなるべき丈は卑陋なるべし。是家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると、放縱の欲を抑へ制すると、天下國家を治むる人も、一身を守る者も、抑の一字、至近切要の學なり。

一儉素なる者は、子孫連綿して、汰侈なる者は、子孫不振。此理最知り易し。儉朴の人は、吾が享くべき福分を惜みて享け盡さず。其福子孫へ傳へて、再興の期あり。奢侈なる者は、子孫の福分も吾一代に享け盡すゆゑ、再び興るべきの理なし。漢の文景の儉朴なるは、後世百代の模範なり。武帝の奢侈は、天下萬世の戒なり。武帝の血脈は哀平にて絶えたり。再興の後漢は、長沙定王劉發の後なり。又再興の蜀漢は中山靖王劉勝の後なり。皆景帝の子にて、文帝の孫なり。天の儉樸に與して華奢を惡み給ふ、千古の定論、今日にて昭々明々なり。

一王陽明の良知の說、書庫書厨の學者に針砭するには功ありて、其極は老子の絶學に至

馬史—司馬遷の史記

干戈—戰爭

浦上村宗—赤松氏の臣寵を足利幕府に得たる

是故哂レ之。と仰せられたり。禮は制度に非ずして辭讓を云へり。孟子此意を繼ぎ給うて、辭讓之心。禮之端也と仰せらる。父子國を爭ひ、兄弟國を爭ひ、君臣國を爭ひ、朝臣は威を爭ひ、庶民は利を爭うて、國家亂敗するを見て、讓の大德たることを悟るべし。書は堯舜の禪讓を始とし、春秋は隱公の謙讓を始とし、馬史には、世家に泰伯を始とし、列傳には伯夷を始とす。仲尼は泰伯を至德と云ひ、伯夷を得レ仁と云ひ、君子無レ所レ爭と仰せらる。されども、讓の妙を說けるは、左傳襄十三年、范宣子の讓を君子の論ぜる一條、尤明悉なり。聖賢の心今日にありて明々了々たるなり。小人利欲の爭より、讒訴も興り、小人利欲の爭より、干戈も起る。可レ畏の甚しき事なり。

一惟人は萬物の靈なれども、小人利欲を爭ひ、女色を爭ふの心は、犬猫と同じ。色を爭ひ、利を爭うて人を害するに至れば、虎狼と同じ。孟子は、人之所三以異二禽獸一者。殆希矣。と仰せられ、又違二禽獸一不レ遠とも仰せらる。可レ畏の甚しきこと也。戰國の人は、君を弑して妻妾を奪ふ、備前浦上村宗、阿波の三好實休の如き者あり、姑夫を殺して其女を奪ふ、武田信玄の如きものあり、猫狗虎狼を兼并せたるもの也。世には英雄豪傑と云ふことを言習はせて、道と無道の差別を不レ知。英雄豪傑とは禽

雜劇─芝居

るは無し。又夫までも無し。賤人の雜劇を觀るもの、大星を忠義の人と思ひ、定九郎父子を惡人と惡む。人心是非の明、亮々然として掩ふべからず。人心同然の說、經言に徵し、今日の人心に驗ありて、確として不レ可レ易也。

一思無レ邪。無レ邪は正なり。政者正也。子帥以レ正。孰敢不レ正。爲政の篇にありて、是は政を爲すの至要の處なり。爲レ政以レ德と、德なる者は、思無邪の心ならずや。有レ耻且格。格は正なり。上たる者、思無邪の心を以て政を爲せば、下たる者も、耻を知りて且は格正になること必定なり。子帥以レ正。孰敢不レ正と云ふことを三章に云ひたるもの也。

一論語には、思無レ邪を揭げ出したまふ。孟子には、無レ爲レ所レ不レ爲。無レ欲レ所レ不レ欲。如レ此而已矣。と云へり。身に不義を爲さず、心に無禮を欲せざるを云ふ。心に欲すまじきことを欲せざるは、思ふことの邪なきにて、孔孟の學、心思を說くこと如レ此。心學に非ずして何ぞや。吾が云ふ所の惡念を動かさゞるは。思無レ邪。不レ欲レ所レ不レ欲を脩行するなり。

一以二禮讓一爲レ國乎何有とありて、子路を哂ひ給へるにも、爲レ國以レ禮。其言不レ讓。

呦々の鹿さへ云々―「經々」は鹿の呼聲、詩經の「呦々鹿鳴、食ニ野之苹一云々」とあるをいひたるなり

せられ、中庸には、親レ親之殺。尊レ賢之等禮之所レ生也と仰せられたり。禮の大本は、辭讓恭敬の心と差等の差あり。故に皐陶も天秩ニ有禮一と仰せられ、左傳には、禮以レ順レ天。天之道也と云ふ。聖人の禮ありて後辭讓恭敬あり、など思へるは、第二等の處のみを知りて、向上の一路に昧きが故なり。古學者と云へる者皆然り。

一天地開闢より人心爭奪を本とせば、打合ひたゝき合ひて、相害し相殺して、人種は絶ゆべし。呦々の鹿さへ、美草を得て友を呼べり。人心の靈妙を以て鹿に不レ如べけんや。さらば推與へ分ち與へて。或は辭し或は讓る。天性の自然に非ることなし、天性の自然に原きて天下の大道となる。諸の德皆然り。

一左傳に、人心不レ同如ニ其面一と、子產の云ひたるは妙語なれども、人の心の粗處を云へり。人の心に剛柔あり、奢儉あり、明暗あり、勇怯あり。萬品不同なれども、別に一の同然なる處あり。孟子これを、人心之所ニ同然一と說き給へり。至妙の語にて、人の本心の精妙を盡せり。此を知らんとには、千萬人に一部の通俗三國志を讀ましめんに。曹操、仲達を善人と悅ぶ人なし、玄德、孔明を惡人と惡む者なし。太平記を讀まんに、千人は千人、萬人は萬人、正成の忠勇を感じ、直義、師直の惡行を惡まざ

は、僞書の仲虺之誥には出でたれども、是は妙語にて、樂記には以レ道制レ欲とあり。孟子には、以レ禮存レ心とあり。皆同意にて、禮を以て邪心を制し、禮義を以て邪欲を制することなり。樂記の道の字も、禮を斥すなり。存レ心とは、禮を以て邪欲の惡心を距ぎ制して、仁義の良心を失はざる樣にすることなり。さて、以レ禮制レ心は、聖經の大教間然すべきには非ず。去れども邪心邪欲を肆にすれば、身家も滅び、國家も亡ると云ふことを知りて、禮を以て邪心邪欲を制する者は何ものぞや。是己が心に非ずや。是も心を以て心を治るに非ずして何ぞ。

一古學者、辭讓之心。禮之端也と云ふを誹りて、左傳の凡有二血氣一者。皆有二爭心一を引きて、聖人の禮ありて後辭讓あり、聖人の禮なき時は辭讓なしと云へり。大なる誤なり。今人犬の嚙合ひて食を爭ひ奪ふを見る時は、惡み怒りの心を生ず。まして、人ありて打合ひて食を奪ひ爭はゞ、惡み怒らざる者は無かるべし。されば天地の開闢より、爭ひ奪ふ邪欲の盛なる者も有るべけれど、又夫を惡みて、辭退し推讓るの天性の者も有るべし。人の爭奪を惡しと思ふは、不二爭奪一を善なりと思ふ本心の良なり。聖人此心に原きて、禮を教へ給へる也。されども、孟子も後には、恭敬之心禮也。と仰

殘賊—人をそこなふこと
褻瀆—けがれよごるゝこと
朔望—ついたち十五日

と。冉雍仲弓は可レ使ニ南面一とあれば、是も長人安民の徳ある者なり。孔子曰。不レ知ニ其仁一と、長人安民にて仁を解せんとは、論語を讀まざる人の言なり。欲レ仁仁至。造次顚沛於レ是と云ふ。長人安民などにて通ずべきや。顚沛は顚倒なり。下駄の鼻緒を蹈みきり、轉び倒るゝに、長人安民せん、愛人をせんと云ふ理あるべきや。予が仁說を讀みて眞智を開きたまへ。

一徂徠の道ニ千乘之國一と、道の字を道すると讀みて、天子諸侯の國を巡狩する事と云へり。さらば敬レ事而信。節レ用而愛レ人は、天子巡狩の禮にて、平常は不レ敬不レ信、財用を費耗し、民人を殘賊しても能きことにや。君子不レ重則不レ威を、非ニ重事一不レ見レ威と解したり。君子は動作周旋を威儀容貌と云ふ。左傳に、北宮文子の言(襄三十一年)に詳なり。重大の事ならざれば威を見はさずと言ふときは、君子平常は褻瀆にして威儀を修飾せざる者と云ふことなり。平常朔望の朝禮位は、亂髮裸體にても可ならんか。淺陋謬妄、古今經を解するに、如レ此の怪誕なるは無きことなり。

一古學者、以レ心治レ心と云ふを嘲りて、心を以て心を治るは、狂人の狂人を制すると同じくして不レ能ことなり。故に、聖人は以レ禮制レ心と說けりと云へり、以レ禮制レ心

梧窻漫筆後編　卷下

一古學者仁を長人安民の德と云ふ、笑ふべき事なり。中庸に知仁勇三者。天下之達德也と云へり。達德とは、上下に通達する行を云ふ。安民長人は君德にて、達德には成難し。論語に、君子篤於親。則民興於仁と云へり。此仁は、中庸の、仁人也。親親爲大。孟子。親親仁也。晉語の愛親謂之仁と云ふ仁に同うして、親族を親愛するを仁と云へり。孝弟。爲仁之本。親族を親愛するは、仁を行ふ始なり。仁を長人安民とせば、民の仁に興起して興つて行ふ處は、謀叛叛逆して國郡を横領し、始て長人安民の行を成就すべし。さらば君子の親族に篤きは民の逆心を企つる基にや。是笑ふべきの甚しき也。されど是は戲言なり。仁を長人安民など云ふは、皐陶謨に安民とあり、文言に長人とあるなどを見て、管仲の仁に合せんとて、根も葉もなき俄拵への出來合もの、小兒の見解、周易の童觀と云ふべきものなり。

令尹子文は、楚國の良大夫にて、長人安民の德あるもの也。孔子曰。焉得仁

烝民—庶民に同じ

レ心盡レ性。と云ふは、面壁坐禪の事に非ず。又外を逐て狂走するにも非ず。讀レ書明レ理の功積みて、心卽行。行卽心、論孟の言々語々皆此境界の說ける者なり。此卽ち心學の骨髓なり。

一天地は形氣而已なり。されども其中に不可思議の神靈ありて、吉凶禍福を司どる。人身も形氣のみなり。されども其中に不可思議の神靈ありて、仁義忠信是より出づ。されば天地の萬事萬物氣に非ざるは無し。氣中よりして、種々の理は出づること也。吳廷翰の、理は卽ち氣中之條理と吉齋漫錄に云ひたるは、妙言なり。郝敬の養氣の二字を以て、內は身心を脩め、外は國家を治ることを時習新知に說きたるは、當時孟子の本意には非ざれとも、經世の學の外馳すると、正心の學の內に專なる弊を矯めんとて、養氣の二字にて、內外を兼ねたるは面白きことなり。宋儒理氣の說、未レ有二天地一必竟先有二此理一。と晦菴の云れたるは、不レ宜說なり。大雅に、天生二烝民一有レ物有則。と云ひて、事物ありて後法則ありと云ふ時は、理は氣中の條理なる事必定なり。さて、事物の法則とは、卽ち道の事なり。道は事物の法則と解すべきことなり。

鴻益―大なる益なり

偏內―內にかたよる

本草家―植物學者

是にて伊川の謬誤を斷知すべき事なり。さて、又聖經には小々間違たりとも、今日人を教ふるに鴻益あることは、郝京山の養氣の類にて取るべきなり。伊川の此言、孝弟非性と云はれしには、天下の人を驅て不孝に趣かしむ。聖經に違ふのみならず、百世人を導くに大害あり。辨斥せずんば有るべからず。されども是は伊川の誤には非ず、董仲舒劉向より、聖經には無き五常五性と云ふことを立てたるを、程朱なども誤つて信ぜらるゝ故に、如此の謬妄を吐き出さるゝものなり。

一理氣の說にて、陰陽を氣とし、仁義を理とす。說卦に立天之道。曰陰與陽。立人之道。曰仁與義。天道の方は、氣を云ひ、人道の方は理を云ふ。可笑ことなり。陰陽非道。所以陰陽者。是道也と、程朱は云はるれども、孔子は斷然として立天之道。曰陰與陽。と仰せられて、陰陽を道となしたまへり。宋儒理氣の說、其不可信こと如此なり。

一宋儒の學可攻こと多し。一草一木の理をも、窮むと云ひしは、外馳と云ふべし。靜坐瞑目、認喜怒哀樂未發氣象と云ひしは、偏內と云ふべし。草木の理は、本草家に託すべし。靜坐澄心は坐禪僧に託すべし。我聖人の心學、知性知天。存心養性。盡

背戾—そむきもどる。

る様にすべきこと也。

一程伊川の人之性中有仁義禮智四者。何曾有孝弟乎。孝弟は、仁の本には非ず、行仁は孝悌を本とすと云ふを辨ぜられたるは可なり。されども此言には大なる誤あり。仁義も、孝弟も、禮樂も、忠信も、百德百行皆人性の自然に出づる者なり。先づ孟子には、親親。仁也。敬長。義也。是の直に孝弟を以て、仁義とす。又云、仁之實。事親是也。義之實順兄。是也。これも亦孝弟を以て仁義とす。又云ふ、有人於此。入則孝。出則悌。下文稱之。爲仁義者と云ふ。是も亦孝弟を以て仁義とす。思孟孝弟を以て仁義と爲せるに（中庸にも仁者人也。親親爲大とあり）伊川人性に仁義ありて、孝悌なしと云ふ。是何の義ぞや。さて又大學に爲人君止於仁。爲人子。止於孝。とありて、仁孝は聖人の大道なり。又君子の美德なり。人々の性心に出づる者なり。故に並べ稱す。然るに仁は性なり、孝は性に非ずとせば、爲君の道は天性に出で、爲子の道は天性に非ずや。是不通の言なり。さて又孝經に父子之道。天性也とあり。父の道は慈なり、子の道は孝なり。孝の天性に出ること、孔子の言なり。然るに伊川の仁義は性なり、孝悌は性に非ずと云ふは、孔子の敎に背戾せり。

鴟梟—みゝづくふくろふ共に惡鳥

訓詁—註解なり

錯會—解釋を誤ること

ず。李斯和士開が如き妖言を人主に説くは、其天下の滅亡の時至れるにて、鴟梟の聲に同じく、天下の妖孼彗孛より大なる者なりと知るべし。

一人主游觀を好み、祈禳を好み、土木を好み、甲兵を好む、皆々侈大を好むよりして、是に至る。秦皇、漢武、唐玄、宋徽、元順、明武の類、皆此病にて天下を亂亡せり。侈大を好む一心の欲を肆にするよりして、四海億兆の民、無邊無量の害を被むる。學心學を講ぜずして何を以て、治化の本とするや。

一漢唐傳疏の功にて、聖經訓詁畧通ずる事を得たり。其功德最大なり。されども十に六七は大紕繆ありて、一々信用せば聖意を錯會すべし。宋儒傳注の功にて聖經の義理略明なる事を得たり。其功德最深し、され共十に三四は誤解あり。誤解せざるも大切の義理、修身治人の要、人事治道に切實なる處を疎々に解過して義理を盡さざる事多し。是亦一々信用せば、聖意を錯會すべし。されども古人の注解に善を盡せる無き時は、天下の學政などには、宋儒の傳注を用ふる事明清の如くする事極めて可なり。宋儒の學は、畧聖人の正統を得たる者なりと云ふべし。只今經を學ぶには、漢宋明清の諸儒を通觀して、聖言を得たる者に從ひ、さて聖意を能く解して、人事治道に切實な

學庸―大學
中庸

思孟―子思
孟子

や。是にて荀卿の愚昧邪說を決斷して知るべし。扨又、惡を天性、善を詐僞と定めたれば、堯舜は詐僞なり、桀紂は天性の誠を得たり。されば人たるもの天性の誠を爲さんには、不仁不義不孝不忠を爲すべき事なり。然るに不苟篇には、學庸の遺意を繼で誠の一字を主張して、仁義も誠ならざれば用を爲ざることを明辨せり。前後矛盾齟齬して通ずべき理なし。是亦其盲昧を斷知すべし。近世には、性善も性惡も同じ樣のこと也など覺えたる愚儒ある故、辨ぜずば有るべからず。古人の云へるは、非十二子は、韓詩外傳に引けるには、十子而已にて思孟は無し。思孟を入れたるは、李斯韓非などの所爲なりと云へり。性惡なども李斯韓非の補增せるならん。此は、荀卿びいきの說なれども、恐らくは其實を得たるなるべし。

一李斯が二世に上書せる督責の言と、北齊の和士開が後主に敎へたる言と同樣の事なり。和士開は佞幸の小人如何なることをも言ふべき也。怪むに足らず。李斯は惡人なりとも士君子なり。如ㇾ此の拙惡の事を人主に勸むる、誠に怪しむべきこと也。荀卿に學びたるは、如何なる事を學びたるや、荀卿も如何なる事を敎へたるや。蘇東坡の、惡しき門人を持ちたるにて荀卿の罪を判斷せるは、少し刻なれども無理とは云ふべから

大賚―大なる賜もの

り。されども廣き世界の事なれば、良心本性を失うて悪逆をする民も有るべし。天下の人これを悪む。天討有罪なれば、聖人天に代て此を誅戮して他人の戒と爲したまふ。是亦天下の人をして其性を盡し、其心を存ぜしむるの道也と知るべし。

一荀子正名に、性者天之就也とありて、性悪には、人の性悪。其爲善者僞也と云へり。されば人の性は天造にて悪を本體とす。悪は皇天上帝の我に畀へられたる大賚なり。然れば人たるものの悪を棄て善を僞さんには、天に背けるの人と云ふべし。父富厚の祿を其子に與へたるに、子たるもの其祿を失なはゞ、父に背けるの子にあらずや。天の暴賊の悪を人民に與へたるに、人たる者其悪を失はゞ、天に背けるの人に非ずや。然らば何が故にか、商書には天道福善と云ひたるや。老子も天道無親。常與善人と云ひたるや。夫子も積善之家。必有餘慶と仰せられたるや。されども先づ三代の後は姑く置く、堯舜の時代虞廷の謀謨に、天叙有典。天秩有禮。天命有德。天討有罪。と皐陶の仰せられたる事少しも通ずべからず。さらば皇天上帝は、我に背ける者を悦こび、福を與へたまふ者にや。堯舜は、天に背ける詐僞の人にて、桀紂は天を奉じて天に叶へる誠實の人なり。何とて背天の人は興りて、奉天の人は滅亡せし

惻隱―思ひやり切なるをいふ
羞惡―己の不善を恥ぢ人の不善を惡む
辭讓―己をすて人に讓ること

るゝは、天命の本性なれど。利欲の心に逐れて其心本性を全くし盡すことを得ず。惻隱不レ忍の心なき者はなけれども、利欲に逐はれては、人を殺しても奪ふべし、羞惡不レ爲の心なき者はなけれども、利欲に逐はれては君を欺ても奪ふべし、樂記に所謂、人欲肆而天理滅すとは此處を云ふなり。されども本心は妙明にして是非の智明なる故に、人を殺し君を欺く人にも、其惡事たることを自知する故に、心內安からず。人心是非の明、揜ふべからず。さて、己の心に其惡を知るは、天地鬼神の其惡を知り、惡み給ふなり。己の本心人の本心、皆これ天地の鬼神なり。他人のその惡を知らざるも、己の其惡を知る。この處既に天地神明の罰を蒙りたるところなり。利欲に逐れて本心本性を盡すこと不レ能、天地の冥罰を被むるに至るは、譬へば桃李などは美なる花を生ずべき天性なれども、寒氣に閉られて花を開く事能はざるに同じ。卉木の花は人の仁義なり、寒氣は利欲の心なり。和暖の氣を得れば花の開くは、教導の功にて仁義の德を成すなり。聖人は人欲の閉塞なくして、仁義の本性良心を全くし給ふ而已ならず。政を正しくし教を明にして、天下の人にも仁義の本性を盡さしめ、仁義の良心を存ぜしめて、天下の人をして天地鬼神の罰を蒙らざらしむ。是聖人廣大の仁恩な

井田―周の田制なり井は九百畝、八家にて之を耕し其百畝を公田とし八家各百畝を私す

玉帛―禮をいふ舜典にいふ五玉三帛なり

多年無用の暇費をせんよりは、學ばざるを妙とすること也。

一道は形迹に拘る者に非ず。形迹に拘りては道不ㇾ行。唐人は三代聖人より立を禮敬とす。我邦にては坐を禮敬とす。唐人の敬は、我邦の無禮なり。我邦の禮は、唐人の不敬なり。故に座立の異ありとも、恭敬の心は一なる時は、立て禮とする國は立つべし、座して禮とする國は、坐すべし。形迹の拘はるべからざること如ㇾ此。是にて知るべし。只今の四公六民の税法にて、上下其所を得れば、是即ち聖人井田の良法なりと思ふべし、熨斗目麻上下にても、袴羽織にても、上下の禮節を得れば、是即ち堯の服なり、先王の法服なりと思ふべし、若し餘計の年貢課役を掛けて、民窮し、人恨むる時は、是即ち桀の行にて大桀小桀なりと知るべし。奢侈華麗の衣服を服せば是即ち桀の服なりと知るべし。禮云禮云。玉帛云乎哉。樂云樂云鐘鼓云乎哉。形迹に拘らずして、聖人心を知るべきこと也。

一子思は盡ㇾ性と仰せられ、孟子は盡ㇾ心と仰せらる。其實は同じ事にて、性とは中庸の徳性、孟子の性善にて、仁義の本性を云ふ。心とは孟子の本心良心、仁義之心惻隱羞惡辭讓是非四端の心、不ㇾ忍不ㇾ爲仁義の心を云ふ。さて、人々仁義の良心を得て生

愼獨—人見ざるところにて恐れ愼しむ

孜々—勉むる貌

胡越の隔—非常に隔絶せるをいふ胡越ともに國名なり

思レ溫。貌思レ恭なり。言忠信。行篤敬なり。此處は、二雅の抑々威儀なり。飲レ酒溫克するなり。此處は、堯典の允恭克讓なり。無逸の寅畏抑畏なり。此所は、周易の履レ霜堅冰の戒なり。懲レ忿窒レ欲の戒なり。節二飲食一。愼二言語一。の戒なりと蚤起より夜寐るまで、行住坐臥、聖經の教の中に周旋して、己が言行の聖人の言に背戻せざる樣に、心を用ふる時は、不レ知不レ識。順二帝之則一。にて吾不レ知賢人君子の域に造るべし。是孟子の宣へる鷄鳴而起。孜々爲レ善舜之徒也。と云所、服二堯之服一言二堯之言一。行二堯之行一。是堯而已矣。と云所なり。平々易々たる事にて難行にも苦行にも非ず。如レ此心を用ひて聖經を學びたる人、聖道を志すと云ふべし。今の學者は、四子五經の文句文字を解釋するに、考證考据の學などと云而已にて、夫を明細に解釋せるとも、己が身心言行と、胡越の隔りをなせり。されば聖經は何の用ぞや。幼少より唐詩の熟字を習ひて、青山白水とか、夕陽芳草とか學び得れば、境に觸れて詩を作り出す事を得。是は學びたる熟字直に用をなせり。今の學者の學問は、經傳は經傳、己が言行は言行と、一向に別者なれば、是は幼年より多年の修行にて、折角よく熟字を覺え、且は熟字の意も能々解釋はすれども、一首も詩は作たる事なきに均し。さらば

九思―論語季氏篇に君有ニ九思一視ハ思レ明、聽ハ思レ聰、色思レ溫、貌ハ思レ恭、言ハ思レ忠、事ハ思レ忠、疑ハ思レ問、忿思レ難、見レ得思レ義

ば、大に下れり。まして能き僧徒の坐禪觀法して悟道見性せんなど心掛るものには、百等を下りたる者なり。恥べきの甚ならずや、吾門の學者は、唐宋の詩文も學びたまへ。されども論孟を素讀し給はゞ、是は皆今日己が身心の事を說ける者にて。行住坐臥、皆是論孟を行ふ也と知りて、親を愛すれば是仁、兄を敬すれば是義、奴婢を慰勞すれば是仁、妻子を敎戒すれば是義、柔順利貞、溫柔恭儉、言忠信行篤敬、君子の三道、君子の九思、謹レ身節レ用、節レ用愛レ人、孰か今日己が所行に非ざらん。曉起るより夜寐るまで。論孟中の聖賢の言行を言に用ひ、行に用ひて、家に居るも如レ此、朝に事ふるも如レ此。斯の如にして、始めて、儒者の道を學びたる者として、始て醫者僧徒に優れる人とは云ふべきこと也。

一聖人の四書六經とて、何も他事あるには非ず、唯是千萬歲の人に敎ふる勸善懲惡の具也。言々語々惡を去り善を脩ることを云而已。過を改め惡を袪けば即ち善なり。されば聖經は善の一字の細目を注せる者と知るべし。學者平生の言行に。此處は。大學の止ニ於敬一。止ニ於孝一也。勿ニ自欺一也。此處は、中庸の愼獨なり。衣レ錦尙レ絅なり。此處は、孟子の親レ親之仁。敬レ長之義也。存ニ其心一。養ニ其性一なり。此處は、論語の色

沈落―おちぶれる

素讀―暗誦するをいふ

洽聞―ものしり

雲表―雲の上

達せる故も沈落せる故も、明細には知り難し。故に天命を知り難きに附すれども、實は昭々明々毫髮を差へざるは天命なり。祖先の善惡は今に在ては知り難し。唯人は善を行へば吾其報を得ずとも、子孫必ず其報を得て福あり、不善を行へば吾其報を得ずとも子孫必ず其報を得て、禍ありと云ふ理を明辨して、善を行ひ不善を去るべきことなり。されども男子なくして、吾一代にて消え失せる人は、御勝手次第の事なり。

一醫者は、傷寒論を素讀するより、惡寒發熱には、桂枝湯を用ふ。往來寒熱には、柴胡湯を用ふと云ふことを覺えて病人に與へ施す。學ぶ所は行ふ所にして、學の用をなす。さて、儒者は論孟を素讀するより、博學洽聞に至るまで唯文字章句を解釋するのみにて用所なし。學ぶ所と行ふ所とは、一向に別なり。學問は學問、行事は行事と、氷炭黑白の異をなして、聖經は雲表に在る如く、吾身は糞土の中に住せり。徂徠以後の學者は天下の老中になるまでは、學問用なしなどと覺えたり。故に無道不善を所行とするも、尤の事なり。されば世間の諺に論語讀み論語を不レ知などと云ふ樣になることと、學者の其方を失せるより出でたり。敎ふる儒者も文字を解釋する而已にて、學ぶ弟子も文字を受くるに過ぎず。學ぶ所は行ふ所に非ず。醫者の學ぶ所を行ふに比すれ

蘊奥—おく
そこ

されば聖人の經典も、千百載の歴史も、心得をよくする爲の道具なり。諸子百家の言には不心得の事もあれども、能く讀めば心得となるなり。心得のためを離れて、別に道義はなきこと也。然るに餘りに深入りして、性命の蘊奥を論ずるも、又外馳して制度と末義を悦こぶも、多くは身心に益なし。身心に益なければ治國平天下の大道には非ざるなり。

一左傳に吉凶由レ人と云ひ、孟子禍福無レ不三由レ己求二レ之と云ふ。是千古の確論にて、中庸にも、禍福之將レ至善必先知レ之。不善必先知レ之と云ふ。人善を行へば必ず吉にして福を得、不善を行へば必ず凶にして禍を得。千萬世に渉て、此理違ふこと無し。維天之命於穆不レ已と云ひしも、天より人に吉凶禍福を命ずること、穆々幽遠にして窺ひ難しと云へども、千萬世に渉つて止む事無きを云ふ。僞書の大禹謨に惠レ迪吉。從レ逆凶。惟影響なりと云ひしも、湯誥に、天道福レ善而禍レ淫と云ひしも、皆此事なり。されども、人善を行ひて福を得、不善を行うて禍を得る。其根源を問へば善を行ふ人は祖先の餘慶なり。不善を行ふ人は祖先の餘殃なり。吉凶禍福の報應は、數十世數百年に渉て毫釐も差ふべき者にあらず。されども祖先の起居、注も無ければ、其發

奇禍―ふしぎのわざはひ

も倒すべし。酒は倒るゝに縁ありて、興立には遠き者と知るべし。

一西方の大眞人も、飮酒人の種々の惡行をなしたるを見て、飮酒戒を立てたると承る。實は然るや。予も幼より世の人の酒禍にて身家を害する者を見たること夥しき故にや。平生酒を畏るゝ心、酒を好む心よりは長じ、大禹の惡旨酒の一事、大聖の戒を垂るゝの遠きを知れり。

酒は歡樂の爲に作りしものにや。予は、上古の人の寒氣を防ぐ爲に作りたるものかとも思へり。今日にて狂藥と云ふ二字にて、其德を盡したりと覺ゆ。

一吾亡友小笠原益卿の予に敎へたる言あり。六十年來世人を驗みたるに、小飮は格別のこと、過分の大酒する人は、徃々不圖奇禍を得るものなり。是も、心得べきことなり。又是は世人も能く知りたる事にて、酒を飮で溫克なる人は禁酒する事難からず。酒癖ありて禍を受くべき人は、酒を禁じ得ず。天罰を受くべき人なればなり。

一堯舜聖人とて、四目兩口あるに非ず。唯是心得の能き人を云ふなり。別に多般の理あるには非ず。心得のよき人は、身をも立つべし、天下をも治むべし。心得の惡しき人は、身をも亡すべし、天下をも亡すべし。桀紂幽厲の類は、不心得ものの至極なり。

陵犯―長者をしのぎ犯すこと

啣杯―杯をふくむ酒を飲むをいふ

と云ふこと、今は奴僕下賤の者までも、口實となりたり。不ㇾ宜ことゝ知るべし。古今世を亂り賊を爲すもの孰れか豪傑に非ざらん。忠孝仁義を講ぜずして豪傑の氣象を學ぶ、其害少からずと知るべし。

一酒は天の美祿にて（前漢書食貨志）上下の人共に小々づゝ飲みて、歡心を生ぜんは、天より受け得たる福祿とも云ふべし。されど酒を飲て溫克なるものは、千百中の一人にて、先づは傲慢の態を生じ、怠惰の念を發し、忿爭を起し、陵犯を生じ、奢侈無用の費をなし、一醉口富の類、種々の惡行此よりして出づ。內は身の病を生じて生命を失ひ、外は言行に過失を生じて身家を亡す。酒禍の大なる、天下を亡すにも至れり。聖人を十分の地位として、酒を飲ざる人は、既に五分の地位に造れりと云は、解者の言なり。（宋儒の言、五雜俎も之を載す）さるが故にや、書には酒誥あり、詩には賓之初筵、抑の二篇あり。禮にも此を戒しむ。然るを酒德を頌し（劉伶）醉鄉を記して（王績）飲酒啣杯を達人の高致と思へるは、魏晉六朝より飲倒れの餘風にて、君子長者の所ㇾ不ㇾ取なり。國家の用に供する人は多くは小戸の人の選ぶべき事也。飲倒れの語奇特なり。多く飲めば倒れ臥すに至る。又我命をも倒すべく、又我家を

令甲―政令の義

一我邦は、四面大海故、魚類極めて多し。故に人獸肉を食ふことを不ㇾ好。四足を食へば穢れ也とて、國家の令甲にもあり。世人も斯く覺えて忌み嫌ふ。是も佛法仁柔の餘功なるべし。然るを香川修德と云へる者、邦人は獸肉を食はざる故に虛弱なり、などと云ひおどせし故、近年は山國の人而已ならず、海邊の魚肉多き處まで皆々好んで食ふことにはなりたり。今は江戶などにも、冬月に獸店夥し。夫が故に。惡瘡を發し、中風に類する病を發する者少からず。實に虛弱の人は、牛肉鹿肉を寒月に小々食せんは補虛の功も有るべし。熊肉猪肉は毒ありて、其害少からず。さて、此邦の人、飢饉亂世なりとも、人を不ㇾ食は、獸肉を忌むの大功なり。今より如ㇾ此獸肉を喜び食せば、遂には人を食ふにも至るべし。殘忍の心も習より長ずれば、虫を殺して不ㇾ止ば魚に至り、魚を殺して止ざれば鳥に至り、鳥を殺して不ㇾ止ば獸に至り、獸を殺して止ざれば人に至る。目出度風俗の都なりしを、大に香川の爲に破られたり。仁人君子は殘暴の源を塞がずんばあらざるなり。

客氣―血氣の假勇

徂徠の師弟醫者の香川、吉益など云ふ者よりして、儒者も醫者も學精密ならず、人溫柔ならず。客氣浮氣、粗豪の氣のみ增長せり。其風習俗人にも移りて、豪傑々々

崇禎—年號なり

清正—原本淸政につくる

套語—きまり文句

事なしと知るべし。

一孟子に人將ニ相食一と仰せられて、三代より此時までは、人食レ人の事は無りしにや。王莽の亂以後、漢土は兵亂の度毎に人を食ふこと少からず。崇禎の亂には、父子相食ふに至れり。後漢の初の賢人には、食はるべきを免れたる人少からず、と後漢書に見えたり、隋の亂には酒呑みは、糟漬の豕を食ふに同じと悦び食へること新唐書に見えたり。人理は失果て虎狼と同じと云ふべし。我邦には神武開闢より今日まで、人の人を食ふなど云ふことは無きこと也。淸正の蔚山に圍れたる時は、打死の肉を噉たるやも心もとなし。是は我邦の大愧辱なり。此一條を以ても、我邦風俗の惇厚遠く漢土に勝る事を知るべし。

左傳宣十五年、宋の圍に、易レ子而食。拆レ骸而爨と。是は米穀薪蒸の盡果て、籠城困窮の樣を、例の浮誇にて云ひたるや。此二語は、秦漢の古文に籠城の難義を云ふ套語なれば、漢土は上代より人の人を食ふこと多しと見えたり。聖人出世の國なれど、遠く我邦には不レ及ことなり。我國は樂國樂土、又は君子の國と稱すべし。さて、人相食むなどの事なきは、佛法も此に功ありと思ふべし。

花街柳陌—遊廓
賣る人—亡八
賣らるゝ人—娼妓
幇間—たいこもち

るは言ふまでも無し。孟子の宣へる樂所以亡者とは此こと也。さて、夫までは無しとも、屢々花街柳陌に往來せる者は、發達すること難く、縱令發達するとも難あり。如何にも此一條極めて不祥の事なり。此は如何なる故ならんと問ひしに、一人の云ふ、其地極めて不祥の地なり。賣る人、賣らるゝ人、幇間奴婢の屬まで不祥の人ならずと云ふ事なし。其不祥の氣を得て發達の吉祥を得んこと、水中に火を求むるの理なりと云へり。是一理あり。又一人の云く。世人身家を敗亡し、又極刑を犯す、皆此所にあり。されば身家を敗亡せずとも、其他に往來せば心ある者惡まずと云ふことなし。人の憎を觸れ侵す、是發達を妨ぐるの理なりと云へり。是一理あり。又一人の云ふ、樓上の游興、王公貴人の樂事に同じ、是一日の福分なり。卑賤の身にして王侯貴人の逸樂をなす時は、後來己が身に受用すべきの福分を此時皆受け盡すの意ある故、後必ず窮阨すべく、然らざるも發達なり難きの理なりと云へり。是一理あり。如何にも其他の不祥なる、其事の不祥なるを明辨して、少年の時より嚴禁するを妙とせり。

花柳の間にて、金銀を人に施すも陰德となるべき事なるに、其陰德の陽報を得たる者なし。是亦如何にと云ふに、都て己が欲と己がみえとにて施せる金銀は陰德たる

寵昵―寵愛し親しむ
嬌揉―おさへためる
淫訟―痴情より起る訴訟
上﨟―身分高き婦人

にする時は、必ず上淫を好む。火の炎升の勢にて、陽氣の所爲なり。さて、女は陰物にて下淫を好む。其身自由なるに及んでは、益ゝ下人を戀慕し寵昵す。是れは古今の載籍を考ふるにも及ばず、世の婦女の姦通するものは、其家の奴僕下人か、寄食の人か、又は其家に出入する下人同然の人なり。此三樣を出ることなし。其夫より貴人と密通する者は、天下に無き事なり。萬に一も是あれば、これは其本心には非ず、金錢を貪ぼる謀計に出る者なり。京師上方の女は、幼少より性を嬌揉して男子に順從する風俗なれば、上人と感通すまじきにも非ず。關東の女は、幼少より、氣隨氣儘に生育し風俗なれば、其本心自由ならんには、萬に一も上人と姦通はすまじき也。これは女子の本性にて、水の卑下に流るゝ陰氣の所爲なり。閨門を治るもの、此等の人情を知らずんばあらず。男女の淫訟を決する者も、亦此等の人情を辨ぜずんばあらず。此に一の妙あり。吉原の傾城なる者、上﨟の樣に粧飾して客よりは上坐させたるも、男子の上淫を好むの情を能々通知せる者の、其法を建たるなり。世の拘儒迂學の人の此等の事は知るべきの理には非ざるなり。

一花柳に枕藉する遊冶少年、世に云ふ、傾城買女郎買と云ふもの、即坐に身家を滅亡す

氷炭黑白―區別極めて判然たるをいふ

妃嬪―天子の后妃

公主―天子の女

後室―未亡人

肆にすることも成難しと思ふ利欲の心よりは、夫の死を願ふに至る。夫も愛妾に家財を分ち與ふべし、妾腹の子を家督にせんなど云ふ利欲の心よりは、妻嫡子の死を願ふに至る。古今の間、夫婦の相賊する利心に出でざるは無し。天地の間に父子兄弟夫婦ほど親睦なる者なし。されども利欲の心よりは敵讐を相爲て恩愛の情も、仁義の道も、地を掃ふに至る。是にて仁義と利欲と氷炭黑白なることを知るべし。されば利を棄てざれば仁義の道は立たず、仁義の道を立てんとには、利を破らざる事を得ず。是にて孟子開卷に此を辨ぜられたるの妙を悟るべし。されども仁義より出でたる利は、君子の悅ぶ所にして、是を義利連用の利と云ふ。義利反用の利とは異なるなり。

一天地の間に、陰陽の理に漏るゝ者なし。男子は陽物故に、上淫を好で妃嬪公主をも犯さんと願ふ。左氏に烝報の事を多く錄せるを見ても知るべし。劉曜の羊皇后、侯景の簡文公主などの類、史傳の所ㇾ載、枚擧に勝へず。義仲が松殿の關白の女を犯し、義經の、平大后、平大納言の女に通ずるの類、師直に至つては言に及ばず。豐臣の太閤の、信長の妹小谷の方に通ぜんと欲して能はず。其子淀殿を妾となし、蒲生の後室も信長の女故、上洛を勸めて、淀殿に比せんとす。可ㇾ見男子は勢を得て、其欲を自由

鄭本には爲仁を爲人に作れり。其爲人也孝弟とあれば、孝弟也者。其爲人之本與にても通ずること也。

一義利の辨は、論語に、夫子の此二つを以て君子小人を判じ給ふ。大學には、義利の辨を以て終とし、孟子には義利の辨を以て始とす。大學の卷末と孟子の開卷と相接すと云ふべし。さて、孟子利の害を論じて、君臣上下を以て說き給ふ、誠に明辨と云ふべし。今又父子兄弟夫婦の間を以て、說く時は、益ゝ明白なり。父も子を養育するの損あるを恐れて、天倫の愛情をも失ひ、子を洗兒と云ふことも世にあり。是利欲の心にて、仁義の本心を失ひたるものなり。されども是は好んて爲すことには非ず、貧民の止むことを得ざるに出るもの也。子は父の在す內は己自由ならす。父沒せば家財を自由にして、淫泆の欲を遂げんと云利欲の心よりは、父の死を願ふに至る。古今弑逆の禍は皆此利心に出でざるは無し。弟は兄沒せば、我此家督を嗣がん、われ此家財を自由にせんと云ふ利欲の心よりは、兄の死を願ふに至る。兄も弟あらば家財を分ち畀ふるの害ありと云ふ利欲の心よりは、弟の死を願ふに至る。古今兄弟の爭は、皆此利心に出でざるは無し。妻も、夫生存しては、我家財を自由にもなり難し。婬欲を

蔑如する—あなどる

亡如事存。孝之至也。と云へる處なり。されば是も孝を說けるなり。左傳には孝禮之始也。（文元年）とあり。聖人の禮樂も孝を本とする事覺るべし。里仁の篇も、孝を論ずること數章あり。孝弟爲仁之本とあれば、聖人の仁は、孝を始とすることを覺るべし。

一學者、己の才智に誇り、多聞博識に誇り、高慢の心のみ增長して世人を慢るのみならず、父兄をも慢り、君長をも慢るに至る。三代よりして然るの病ある事なり。故に論語の開卷に、其爲人也。孝弟而好犯上者鮮矣。と仰せられたり。此一句にて高慢の鼻を埶げるもの也。さて、高慢にて君父をも蔑如する程の者は、必定己を抑へ制するの心は無きもの也。これにて放蕩無賴にて欲を肆にしては、酒色淫泆に走り、怒を肆にしては、喧嘩鬪爭に及ぶ。禮義の常を亂らざること無し。故に不好犯上而好作亂者。未之有也。と仰せられたり。此一句にて放蕩の罪を斷ぜしなり。唯酒無量。不及亂の一句にて、亂の字を知るべし。禮義の常を亂るもの皆亂なり。さて、又孝弟恭順の心の人には、高慢の犯上も無く、放縱の作亂もなし。されば孝弟は善を行ふの初めならずや。

酗酒―酒に性を失ふ
淫放―放蕩
穰々―五穀みのる貌

物に非ずと云ことを知らば、唯此天工の二字にて、天下國家は治まるべきことなり。

一孝經に、古聖人之以孝治天下也とのたまへると、孟子の人々親其親。天下平と宣へると、共に至妙の言也。上孝を好めば下も亦必ず孝なり。孝子は必ず忠臣なり。凡そ人たる者孝心の深きものは、博奕、酗酒、淫放、爭鬪の類、一切の悪事せざる者なり。人々悪事を爲さゞれば、天下は治まり天下は平なり。且天地神明に對して孝徳ほど冥理に叶へるもの無し。上下冥理に叶へる世に亂敗のことあるべきや。されば人の親其親する時は、自天降康。豐年穰々たるは、必定の理なり。されども孝道も孝經の謹身節用。以養父母。の八字を最も要とはすること也。

一論語學而に、孝を論ずること數章あり。聖人の學は、孝を始とすることを覺るべし爲政にも孝を論ずること數章あり。爲政以徳と云ふ徳も、孝經を見るべし。夫孝者。徳之本也と有るに非ずや。されば導之以徳するも同じ。孝友施於有政と明言せり。聖人の政は、孝を要とすることを覺るべし。八佾は禮を説けり。されども人而不仁。如禮樂何と云ふ、孝弟爲仁之本也。孝弟の心なく、不仁の人ならんには、禮樂も用を爲さゞる者也。祭如在と云ふは、中庸の事死如事生。事

庶官—百官といふが如し

直言—忠直の言

ては一日も天下の事治まらざれば、此官、此職、天地自然に非ざることなし。さて、民を治る才ある者を司徒となし、土地を治る才ある者を司空となす。是を人其代之と云ふ。天の自然に代つて其官職を務るを云ふ。されども天性の自然にて民を治るに長じたるは、司徒と成るべき天命の人なり。天性の自然に水土を治むるに長じたるは、司空となるべき天命の人なり。天命有德なれば、其才其德の者を選んで其官其職に任ずるは、是天子の職なり。是を無曠庶官と云ふ。曠は、からあきと云ふ義にて、其才其德なきものに、其官其職を與ふるは、是大切の官職をからあきにすると云ふものなり。鷹に魚を捕せ、鵜に鶴を撃たせる樣の事、世間には多き者なり。是を曠庶官と云ふ。唐の玄宗の楊貴妃の兄也とて、楊國忠に四十一使を務めさせ、元の順帝の伯顏を用ふる官銜二百餘字に及べるの類、曠官の極と云ふべし。人君は己に媚び諂て己が氣に叶ひたりとも、人民に害あるものならば、退け去べし。己に諂屈せず、時には直言を入れて己が氣に叶はずとも、國家に利あるものならば、進め擧ぐべし。己が一身の好惡にあらずして、國天下の爲に人を好惡するもの、是を唯仁者能好人能惡人と、論語大學に云へる此處なり。庶官は天官なり。人君の己が私の

無慚―はぢを知らぬこと、轉じて勝手氣儘の振舞をなす意

ことなり。まして、明王賢主に於てをや。然るに敎と云ふは、敎ニ猱升ㇾ木と比喩するに同くして、上たるもの淫佚邪欲を肆にして、己を撿制することを不ㇾ知れば、下たるものは、放佚無慚となり。貪欲無慙となること手を返へすが如し。上好ㇾ之。則下必有ニ甚ㇾ焉者一と、孟子の宣へる此處なり。是不ㇾ敎の敎なり。されば堯舜率ニ天下一以ㇾ仁。桀紂率ニ天下一以ㇾ暴。と云ふも、皆是身に仁を行ふと、身に暴を行ふを云ふ。故に大學にも其所ㇾ令反ニ其所ㇾ好而民不ㇾ從と云ひ、緇衣にも、民之從ㇾ上也。不ㇾ從ニ其所ㇾ令。而從ニ其所ㇾ行と云へり。人の上たる者奈何ぞ敬せざる。さて、逸とは豫怠游宴の類を云ふ、欲とは聲色玩好の類を云ふ。此方にて言へば、逸は酒宴遊興に長ずるなり、鵜鷹逍遙を好むなり。欲とは能狂言、三味線、淨瑠璃、傾城狂、妾狂、茶の湯、物數奇、の類を言へるなり。漢書王嘉傳には敎を傲に作るは誤本に原けるもの也。

一叉天工人其代ㇾ之（同上）と云ふこと極て妙なり。舜典にも、二十有二人、惟亮ニ天功一とありて、天功天工同じ。天工とは天官と云ふことなり。諸侯大夫も司徒司空も天地自然の官職にて無くて不ㇾ叶もの也。司徒は民を司どる、司空は土地を司どる。無く

三德—正直剛克、柔克、

沈湎—酒に溺るゝなり

爲の字にて、助くると訓ずる者あり。妙なり。されど爲すと字のまゝ讀むも同義なり。天子諸侯の臣民を教へ導くにも、父師の子弟門人を教へ導くも、其惡心を拒み閉ぢて、善心へ勸め誘ふ樣にすること也。洪範の三德も、大戴の抑則揚。揚則抑（虞戴德）と云ひしも、孔子の進之。退之とのたまひたるも、孟子の陳善閉邪とのたまひたるも皆此ことなり。身家に害ある惡心惡行は皆寇なり。師範たる者は務めて其人に寇するものを拒み制して、其寇を助くべからざるを云ふ。天子諸侯の師範たる者は、此心得肝要なり。徐世勣が高宗の則天を皇后とせんと議せられたるときに、是陛下の家事と云へる一言は、寇を禦がずして寇を爲けたり。今世の學者など門人小子を導くに義理の正を以てせずして、高きは博覽に過ぎず、卑きは詩文のみ、傲辟驕志沈湎淫泆にして放肆なるを學者の能事なりとす。是を不禦寇して爲寇と云ふ。蒙に在て、此語最も妙なるに、王注傳義など解して此に至らず。漢魏傳注程朱理學皆々義理を蔑さゞる者なり。

一尚書に、無教逸欲有邦（皐陶謨）と云ふこと極めて妙なり。桀紂幽厲たりとも、淫逸をなすべし、嗜欲を肆にすべしと云ふ號令を出して人民に教ふと云ふことは無き

宗廟—先祖代々のおたまや

故、博奕にて一時に財寶を得んと欲し、是にて身家を沒落し、果ては盜賊となりて天下の刑を犯す。霜の凝て堅氷に至るとは、此事にて世間に此覆車の轍を履む者極めて多し。

一坤の上六、龍戰ニ于野一。其血玄黃なりと。龍は陽物なり。是は女子小人の勢増長して、君夫をも蔑如し、其權勢の盛なる、君夫と紛らはしきに至ては、陰物の極、陽物の龍となれり。此にて君父も其憤に堪へずして相爭ふに至る。相爭ふに至ては、君夫も血を流し、臣妾も血を流す。玄は天の色君夫を云ふ。黃は地の色臣妾を云ふ。血とは傷害の難を云ふ。高宗の則天を寵愛して其后妃をも殺され、其太子も害せられ、其宗廟社稷も滅さるゝに至るも、玄宗の祿山を寵幸して、兩京を覆沒せられ、成都へ出奔せらるゝに至るも、後白河法皇の淸盛を寵信して、後は淸盛の爲に鳥羽の離宮へ押込られたるも、皆此霜の氷となり、龍戰流レ血の禍を踏みたる物なり。

一乾坤は天地なり。屯に君道あり、蒙は師道なり。天地開くれば、君師の道を第一とす。武王の天佑ニ下民一。爲ニ之君一。爲ニ之師一。と云へる處なり。さて、蒙は上九に不レ利レ爲レ寇。利レ禦レ寇。と云ひたる事、誠に至妙の義なり。爲の字先儒夫子爲ニ衞君一乎の

國邑を分ち與ふるには、印刓不ㇾ與と云つて、言をやさしく憐みて、人に物を與へざるを婦人の仁と云ふ。人に物を惠み施すは聖人の仁惠なり。乞食非人に一錢を與ふるも、堯舜の不ㇾ虐二無告一不ㇾ廢二困窮一の心なり。文王の先二鰥寡孤獨四者一の心なり。如何なる平日は無道の者たりとも、乞食非人に一錢を與ふる、此一事は文王の心にて堯舜文王の化身なりと知るべし。文盲の者は是非なし。學者にて如ㇾ此ことを言ふは、博覽多通、考据考證と云ふことに精神を奪はれて、豪髮も天地の事理に通ぜざる故に、終には如ㇾ此の文盲の言をも云ひ出すもの也。「學者も聖人を信奉して正道を天下に明らかにせんと志を立てざれば、天より其鑒を奪て、邪見邪道に陷入すること、荻生茂卿らが如くになりゆく者なり。畏るべきこと也。

一坤の初六に、履ㇾ霜堅冰至と。霜は陰の初て凝る所の者なり。君子を陽とし、小人を陰とす。男子を陽とし、女子を陰とす。是は女子や小人を寵幸じて、其勢漸々に增長して終には君夫をも害し、家を亂り邦を亡すの禍を云へり。さて、又一身にとれば、陰を惡とし陽を善とす。小惡を畏れずして馴れ行へば、終には大惡となりて身家を亡すを云ふ。少年の酒を嗜て其心放蕩となり、花柳に枕藉して金銀にさしつかふる

豪髮―毫髮の誤ならん

枕藉―いりびたること

司刑の官吏—罪人をあつかふ官吏

先表—前兆

と不ㇾ殺と天命長短の報、其驗如ㇾ此。

一天地の間に貴き者は、仁心仁愛の心なり。是天地生生の氣なり。天下の政、此心を失ふべからず。一身の行も、此心を失ふべからず。これを存するを人道とし、此を失ふを虎狼とす。故に論語の初にも、節ㇾ用愛ㇾ人と云ひ、汎愛ㇾ衆と云ひ、禮の哀公問には、古之爲ㇾ政愛ㇾ人爲ㇾ大とあり。愛の一字の徹上徹下の道たるを知るべし。

一昔より國に死刑の人多ければ、叛逆人たえずと云ふことを保元平治物語にか記して、昔よりの言習はせなり。左傳に所謂仁人之言。其利溥哉とは此等のことを云ふなり。小罪輕罰は、各別の事、死刑はなるべきだけ少なくすべきこと、天子諸侯より司刑の官吏まで心得べき事なり。さればとて、惡民多くて犯二死刑一ときは、赦すべき仕方もなし。因て政事を正しくして民情風俗を厚くして、人々生を重んじて死刑を犯すものの無きやうにすること、政事の第一なり。犯二死刑一人の多くして死罪人の多き事は天下亂逆の興るべき先表なりと知るべし。

一世に人を惠み施すもの有るを、學者舉て小惠なり、婦人の仁なりと云て、嘲り詈るものあり。以の外の誤なり。婦人の仁とは、韓信項王のことを言語にては人を憐みて、

粗豪—小事に拘泥せぬこと
縝密—粗豪の反對なり

誰使皇都作棘叢　奢雲艶雨夢還空
可憐銀閣東山寺　一縷茶烟殘照中

一陳蕃の一室を掃除せずして天下を掃除すと云ひしは、豪傑の氣象にて、七十になりても、忠義の志、忼慨激烈の氣を失なはずして、宦官を誅せんとして害を蒙りたるは感賞すべき人なり。されども一室を掃除せずと云ひたるは、疏豪にして縝密の氣象を欠けり。後來愚暗不肖の竇武と同謀して事を誤るべき氣習、此時已に見えたり。大抵疎豪なる氣象は、王敦桓温の氣象にして君子の所不取なり。

一竇武、陳蕃、宦官を誅せんと謀て害せられ、何進、袁紹、宦官を誅せんと謀りて何進は害せらる。外の大將軍董卓を召して宦者を刈り盡して後漢は亡びたり。李訓鄭注宦官を誅せんと謀て害せられ（文宗の時甘露の變）崔胤外の大將朱全忠を召して、宦官を刈り盡して唐は亡びたり。其事一轍に出るが如し。後漢黨錮の禍に、李膺杜密等を害して漢は亡び、宋の黨藉の碑に、司馬光呂公著の徒を排斥して北宋亡び、明の東林の黨議に高攀龍、周順昌等を害して明亡びたり。是亦一轍に出るが如し。漢明は賢者を枉害し、宋は賢者の徒を斥逐するのみ。漢明は一敗塗地て、宋は再興す。殺

自贊―自らほめたゝへること

衰颯―衰へさびしきこと

其地にて早世し給ふ）など、足利代々の將軍にはなき事なり。いかにも天子の御種と覺えたり。禍亂の將起の時は中冓の醜、閨門の穢より亂を萠す。亂匪降自天。生自婦人と、大雅の言至妙と云ふべし。されば天子諸侯は朝政のみ公明正大なりとて自贊はなりがたし。閨門中の事を第一に公明正大になさゞれば、聖人の治をなすことは叶はざることなり。

一堯舜も四海困窮。天祿永終と仰せられたるは妙なり。應仁記に應仁の大亂は起るべき事八箇條あれども、其八箇條よりは、其大本は義政の華靡なる事を好まれて、七度の晴と云ふ事を致されたるにて、天下の諸侯士民まで困窮し果て、人々亂を希ふ心より、此大亂を生じたりと記せり。奢侈華靡より困窮を生じ、困窮より變亂を生ずるは、千古一轍の事なり。されば國天下を有つものは、華靡は國天下を亂す大寇讐なりと云ふことを念々に忘れずして、上下の華靡に流るゝ事を嚴制して、困窮の源を防ぐべき事なり。古人の義政を詠じて、

東山風に靡くや茶の烟

晩年衰颯の趣を說き盡せり。予亦銀閣寺を詠じて、

義良親王—後村上天皇なり

宰相—參議

も、關東より持明院派、大覺寺派、二流の帝王、十年更代の法を立てゝ、我子に世を嗣せ給はんなど云ふこと思も寄らざること也。故に北條家を滅さんと、御隱謀の念起りしなり。是れ元弘建武の大亂の根源なり。亂匪ㇾ降ㇾ自ㇾ天。生ㇾ自二婦人一と聖經の言、萬世に涉て違ふ事なし。さて此准后の、尊氏直義の賄賂を納れて、護良親王を讒訴し、幽囚となし、直義の枉害せるに至ること、王室不ㇾ振の第一事なり。其罪最深し。

一義政將軍は子なき人也。弟の今出川の義視を家督に建んと申されども、義視固辭して受けられず。義政の「萬一男子あらば出家さすべし家を嗣ぎ給へ、と強て勸めらるゝ故に、義視も不ㇾ得ㇾ止受けられたり。さて、義政の夫人は、裏松の宰相の女にて美人の譽あり。一旦義政の意を失なうて、天子の御所に勤められたる姑の部屋子となり給ふ。其内天子と密に通じ給ふ。無ㇾ程義政の意解けて、又將軍の御所へ歸り給ふ。天子其別れに硯を賜ひたることあり。夫より懷姙して義尚將軍を生み給ふ。出家とせんことを惡みて、內々山名宗全を深く憑みて、義尚を託したまふ。是應仁兵亂の大根源なり。義尚學を好みて、近江の勾里の陣中にても講義を聽給ふ（勾里に三年在陣して

孛彗—前に見ゆ彗星なり

從兄弟—いとこ

中冓醜—中冓は深奧のところ

年の後、安祿山兩京を覆沒せり。されば國天下に如レ此の事あるは、實は妖孽にて、孛彗の出でけると同じこと也。

一遠き昔の、兄弟夫婦となり給ひたるは別論なり。近く堀河院の中宮篤子は、後三條院の第四女にて、父方の姑なり、年長二於帝一十九歲。二條の中宮妹子は、鳥羽院の皇女にて、是亦父方の姑なり。今は民間にても其等の事は爲さず。されば敎の民を遷すは、如何樣にもなるべき事なり。さて、又二代の后のことは姑く置て論ぜず。後宇多皇后姈子は、後深草の長女從兄弟なり。永仁の初、龜山上皇密に通し給ふ。姪なり、子婦なり、父子聚レ麀なり。又後嵯峨の皇女とも云ふ。されば後宇多の姑なり、龜山法皇には姉妹なり。二條局と云ひしは、後宇多嬖レ之、良治親王を生みたり。後醍醐烝レ之、世良親王、世尊法親王を生みたり。父子聚レ麀なり。三條局と云ひしは、伏見院嬖レ之、道燕法親王を生みたり。後伏見烝レ之、長助法親王を生みたり。是亦父子聚レ麀なり。龜山宮女民部卿三位は後醍醐烝レ之、祖孫聚レ麀なり。中冓の醜、閨門の穢如レ此。故に元弘建武の大亂を生じて王室は益卑微になりたまへり。可レ畏の甚しき也。

一後醍醐帝の准后を寵愛し給うて、其腹に出生し給へる義良親王を立給はんと思食せど

流亞—流をつぐもの同類の意
穀倉院—民部省に屬する役所
烝—目うへの女に通ずること
反正—天下を正道に反すこと
昭伯—公子頑
恒躰—普通の意

の頼業の言に此法皇は晉惠帝の流亞なりと云へり。是にて能々分りたり。さて、此頼業は穀倉院別當、高倉院の侍讀なり。吾朝にて儒家の後世神と祭る者は、菅公と此頼業のみなり。頼業の廟は嵯峨の車裂明神なり。予京師に在る時、北野の聖廟へ七度車裂の祠へは兩度參詣したるは、吾邦儒流の祖師と尊敬せる故なり。

一太子申生は驪姬の讒を不ㇾ辨して死に就く、溫恭君子の人なり。恭世子と謚せるも宜なり。されど是は獻公の父武公の妾齊姜に烝じて出生せる子なり。其令終ならざること、必然の理なり。大塔宮護良親王は、後醍醐反正の時、大功を建だる當代の英雄なり。されど是は後醍醐の、皇祖龜山院の宮女民部三位に烝じて出生せる子なり。其令終ならざる事、必然の理なり。是にて崇德院の御事をも了知すべし。

衞公子頑、嫡母の宣姜を烝して二男三女を生み、中興の君文公其一なり。是は怪しき事なり。されど左傳に初惠公之卽ㇾ位也。少。齊人使昭伯烝於宣姜。不ㇾ可。強之。(閔公二年)とあれば、恒體の烝報とも違ふ樣なり。

一衞宣公、太子伋の妻を奪ふ。(宣姜なり)數十年を經ずして、狄人滅ㇾ衞たり。楚王太子建の妻を奪ふ。其子昭王の初に吳人入ㇾ郢、昭王出奔す。唐玄宗壽王の妻を奪ふ。十

美福門院—近衛院の御母
新院—崇德院
重仁親王—崇德院の子
富家殿—藤原忠實
法性寺殿—忠通
敗績—大にまけること

父（堀河院の弟なり）也と云ふことは御存知なり。故に白河法皇崩御の後、失德も坐しまさゞれども、崇德院を推おろして、近衛院を立てたまへり。是は美福門院の讒口に非ずして眞實の事なり。近衛院崩御の時、新院の咒咀なりとて、新院を深く忌み惡くみ、重仁親王を不レ立して、文にも非ず、武にも非ざる、後白河を立てゝ、保元平治の亂を生じ、王家の權、武家に奪れ給ふ樣になしたるは、美福門院の惡所行なり。されど性命を天地の間に受け給ふこと不正なれば、崇德院の戰勝つて重祚し給ふべき理にあらず。扨又夫を輔佐せる惡左府、親の富家殿の愛子にて兄の法性寺殿をも蔑侮し以の外なる不義の人なり。皆天命の所レ不レ與なり。さて又平治の惡右衛門信賴は、文も無く武も無く、愚昧不肖のもの也。上皇の寵愛にて、勢を得て、天子上皇を幽囚して、自ら大臣大將となりたる程の妄人にて、夫を佐助する義朝は、三年前に父爲義の首を刎ね、諸弟を戮殺せる人なり。天命の可レ與所ならんや。是爲朝義平の良策忠謀不レ行して勝つべき軍に敗績して滅亡せること、人事にては可レ惜ことなれども、天道より見る時は、然らざることを得ざるの理なり。

一後白河法皇は、清盛賴朝に愚弄せられ給ひて、王家の權、武家に移りたること、清原

南都―奈良

潜幸―竊かに行幸あること

匹夫の勇―血氣にはやる小勇

日南都の僧兵の五千人來るを待受て合戰を始めんとて其策を不レ用。翌日義朝に逆寄せられて、火を放たれて院方は滅びたり。是れ可レ勝軍に負けたる也。平治の亂に惡源太義平の議を用ひて、淸盛熊野の途中にて變を聞いて狼狽して歸る所を阿部野へ馳向て擊んには、一擧に平家を滅すべきを、惡右衞門督信賴の其議を不レ用して、淸盛は六波羅に歸り、天子六波羅へ潜幸なされ、上皇は嵯峨へ逃げ藏れたまひて、源家は朝敵となりて滅びたり。是も可レ勝軍に負けたるなり。是死棊腹中有ニ勝著一なり。爲朝義平不運にて亡びたれども、實は匹夫の勇のみに非ず、軍略をも知りたる、一代の英雄なり。義家の孫に如レ此の英雄を生じて、義仲義經の大功にて、賴朝天下を領するに至る。不可思議の事なり。

一人事を以て見る時は、如レ此。天道より見る時は爲朝義平の良策用ひられざる事、尤も至極の事なり。崇德院は待賢門院の生み給ひて鳥羽院の嫡子とは云へども、實は皇祖白河院の、皇孫(鳥羽院)に妻はせんとて待賢門院を養ひ給うて、內々密通したまうて、懷妊し給へるに驚きて、急に鳥羽院と婚儀をなさしめられて、出生したまひたるは崇德院なり。白河法皇の威光にて一旦は踐祚し給へども、鳥羽院も吾子に非ず、叔

家久―義弘の弟
宗徒―重立ちたる
馬場―信房
山形―景昌
惡左府―頼長

一永祿三年、(五月十九日)尾張の桶狹間にて、信長公、今川義元を討取給ひしと、天正十二年、肥前の有馬にて島津中務大輔家久龍造寺隆信を討取りたると同樣の事なり。今川龍造寺は四萬の大軍、島津は八千の兵にて、海に船して横合より旗本へ切込で撃取たり。信長公の兵は五千にも滿たず、皆不意を撃て勝利を得たるなり。天正三年長篠合戰に、武田の家臣、勝頼の無道を憤りて、馬場山形を初めとして宗徒の者ども數を盡して討死せると、天正六年(十一月十一日也。八月十二日ともあり)日向高城耳川(高城川とも)の合戰に、大友家臣、宗麟の無道を憤りて、吉弘、戸次、臼杵、志賀、田北、一萬田など云ふ宗徒の者共數を盡して打死したると、是れ亦同樣の事なり。武田は天正十年に滅びたり、大友は天正十四年に亡びたり。

大友は、豐臣太閤の救を得て再興すれど、十四年の冬義統府内を出奔して一旦は滅びたり。

一死棋腹中に有二勝著一と云ふこと妙語なり。保元の亂に鎭西八郎爲朝の策を用ひられて、其夜御所を燒打にせんには、爲朝の言へる、火を逃るゝ者は箭を逃れず、箭を逃るゝ者は、火を逃れず、」夜の明けざる内に崇德院の帝位は定るべきに、宇治の惡左府の塋

佞幸―佞人を寵愛すること

建文帝―太祖の孫

燕王―太祖の子永樂の天子

藩鎭―前に見ゆ

もなく、盜賊も少し。逆賊少きが故に、刑罰自ら省けり。仁政とて此外にはなきこと也。千古の亂敗 奢侈の極の困窮に生ぜざる事なきを見て、聖賢儉徳の尊を知るべし。されど奢侈とて他物には非ず、人心邪欲の所爲なれば、天下治安の源は、克己の二字には出でざるなり。

天下國家の亂亡は、欲の一字に生ずるなり。女寵も佞幸も土木も甲兵も、皆々欲に生ず。奢華侈大孰れか欲に非ざる。天理人欲の學、講明せずんば有るべからず。

一大友の皇子(天智嫡)天武天皇(天智弟)と天下を爭ひて、大友滅びたるは、明の建文帝燕王と天下を爭うて、建文亡びたる靖難の亂に同じ。共に叔姪の爭なり。孝謙稱徳、淡路廢帝までは、天武の血統なれど、光仁桓武よりは天智の血脈に復して、天武の流は絶えたり。

一後醍醐帝、武家を滅し給ひて、公家天下と云ふこと、三年を經ずして、尊氏叛して天下又武家の有となる。唐憲宗元和十一二年までに、藩鎭を滅して天下一統せり。十四年に宦官に弑害せられて、其翌年穆宗の長慶元年より、藩鎭又勃興して舊の如し。是亦彼我同樣の事なり。

教戒—教諭訓戒

峻にす—嚴酷にする

の所爲にて、成敗利鈍天意に非ざることなし。されど人事を盡さずして、天々と云はんには、耕作せずして豐熟を願ひ、交接せずして子を願ふに同うして、是亦以の外の僻ごとなり。盡人事而後天命の一語、千萬世に渉て不刊の妙言なり。

一聖賢の心とて外には非ず、唯國治まりて民安からん事を願ふのみ。天地鬼神の心も亦同じ。然るに天子にても、庶民にても、己の分を踰て華靡奢侈に流るゝは、第一困窮の源なりと云ふまでもなく、天地に對して不冥利の事をなすなり。不冥利の極は必ず亂敗を招くの理なり。故に聖賢の克己之欲、尚儉素抑華奢たまふは、聖賢の教戒と云ふにはあらず、皇天上帝の教戒なり。民を治るもの、此理を知らずんば有べからず、人を教る者、此義を講ぜずんば有るべからず。然るに此理に暗くして、上奢侈を好めば、下必ず奢侈なり。奢侈の極は困窮に至る。困窮の極は、上にありては聚歛となり、下に在ては盜賊となる。此に至て、上は刑罰を峻にせざることを得ず、下は亂逆を起すに至れり。故に孟子の仁政を説き給ふ、省刑罰薄稅歛の六字に過ぎず。是は仁者の務て汰侈を禁じて儉朴を事とする故に、上の財用乏からず。財用乏しからざる故に、稅歛薄し。稅歛薄きが故に、民困窮せず。民困窮せざる故に、亂逆

耕稼耨耘―草を刈り田畑を耕やす

ひ、天地鬼神の冥鑒に背かざる事を思ふ心には、神とゞまり給ふべし。此に止りて萬事に處置せば、事々皆其至當を得べし。左傳にも此心不レ爽。昏二亂百度一と云へるは尤の事なり。今の人、精神昏亂にして書を讀み道を講じ、又は政事に處置す。百事の紛亂すること尤のこと也と知るべし。

一父母は小天地なり、天地は大父母なり。

一男女交媾は人事なり。されど子の生ずるあり、子の生ぜざるあり。人力の及ばざる處にして、自然にして然り、是天なり。天とは人事の自然にして然ることを云ふことなり。この故に孟子莫二之爲一而爲者天也と仰せられ、宋儒は人事盡處皆天と云はれたり。縦令男女交媾して子を生じたりとも、男子を生ずるあり、女子を生ずるあり。是人力の及ばざるなり。男子を生じて、其智愚賢不肖、女子を生じて、其美醜、是人力の不レ及所なり。耕稼耨耘は人事なり。歳の豐凶は陰陽の和不和にありて、是人力の所レ不レ及、是を稱して天とは云ふなり。是故孟子も毎度非二人之所一レ能。天也。とは仰せられたり。狡黠なるものは、權謀詐術を以て世を渉り、間其事をなしおほせたる故、世間萬事、皆我奸智に成る者の樣に思ふは、淺間しき愚人なり。世間の萬事は皆是天

ずに守りゆくこと
守文—前に見ゆ守成には文を以てするなり
壽夭—壽はながいきする夭ははやじにする
功利—自己の利益
菜根を咬む—まづきものを食ふ意

能く守るの艱難は。徒手創業の艱難に異なることなきもの也。唯繼體守文の君、繼業守成の人、先祖の福祿にて我不レ知奢侈に長ずる故、敗亡に至ることなり。天下にも國家にも、金銀田畠を守る身にも、破散滅亡を招くものは、外にはなし、奢侈の二字にあり。天下を亂り國家を亡すの大敵巨寇は、夷狄にも非ず、叛賊にも非ず、我不レ知世の風俗に漸靡する奢侈に在りと知るべきことなり。

一命に壽夭あり、厚薄ありて、養生せるとて長壽なるに非ず、儉素なりとて大福を得るには非ざれども、人の第一の智は、攝生を能くして年壽を延すと、儉素を守りて家業を豐にするとに在り。然るに世の學者、天命ありとて淫酒を肆にして攝生の道を知らず、天命ありとて汰侈放佚にして理財の道を知らず。此心を以て子弟を教導す、聖人の門を去ること遠甚にして、人を誤り世を誤ること少なからず。此等の人は破れ大乘と云ふべきものなり。さて、攝生理家の道も、天下國家を平治するも同じことにて、其要は約の一字にあることなり。

一放蕩淫縱の心には神もやどり給はず、權謀を肆にし詐力を奮つて功利にのみ外馳する心にも神はやどり給はず。唯菜根を咬みて寒苦を忍び、本心に復して君父の恩を思

一父母先祖より爵祿財寶を傳へて、安坐して美衣朊食する者は、是父母の恩なりと思ひ、獨力にて家を興し身を立つるものは、露塵も父母先祖の恩德なしと思ふ、是大なる僻言なり。如し父母先祖無道非義ならんには、我身は海翻に遭て死すべし。先祖の餘殃にて天罰を蒙りて、天地の間に食息すること不ㇾ能。されば爵祿財寶を讓り與へざるも、獨力にて身を立て家を興すは、父母先祖の大非義大無道もなき而已ならず、何ぞ、陰德陰功の餘慶にて、子孫の身も立ち、家も興ることとなれば、是皆父母先祖の恩にて、獨力にて起したりと思ふは、やはり父母先祖の與へられたるもの也。先祖非義の財寶を傳へて、不肖の子孫忽ちに滅亡するを見れば、獨力にて身を立て、家を興すの才力智慧を得たる子孫は、先祖の讓り物、金銀財寶よりは大なる物を傳はりたりと知るべきこと也。

餘慶―殘したるよき幸

一創業守成の難易は、太宗の御時に房玄齡魏徵の論ぜしにて明白なり。されど創業の艱難も守成の艱難も同じ事にて、創業の人と守成の人と、優劣ありとも、同じ福祿故に同じく天下國家を保つこととなり。天下國家を能く守りおほせる人は、天下國家を興す人なりと思ふべし。天下にても國家にても、金銀なりとも、田畠なりとも、能く保ち

創業―大事業を完成すること
守成―父祖の成したる事業を落さ

妖氣―惡い氣

四海―九夷八狄、七戎六蠻をいふ居るところ皆海に近きによるといへり

涓埃―極少をいふ

我には非ず、天地の鬼神なりと知るべし。されど人欲混亂して、是非も善惡も蒙昧なるときは、天地の神明に非るのみか、又我本心に非ざるなり。此心を以て天道天命なりと思はんは大なる誤也。それ等の心は天地の妖氣にて天地間の惡魔なりと知るべし。

一我何を以て天地の間に食息して、無事安穩なりやと云へば、父母の養育生長の恩なり。父母の我を易く長育せるは如何にと云へば、太平の德化にて、四海凱安なるが故にて、是は、東照宮の神恩なり。先祖十代太平の世に住して、子孫を長育すること、孰れか東照宮の神恩に非ざらん。今の世に視息する者、此神靈の大恩を忘却して、非義無道を爲して、太平の治に妨害をなすものは、神罰のがるべからず。さて、保元平治元弘建武、別しては、應仁以來、天下戰爭の區となりしを、如此、太平無事、四海安樂の天下となしたまへる、古人の云へる、眞人出でて、四海一なりと云へるに同じき、東照神君の天地の間に生じたまふは、如何にと云へば、是は天照大神の神德にて、此國を夷狄禽獸になし給はざるに因てなり。されば父母の恩を思はゞ、東照神君の大恩を忘却すべからず。東照宮の神恩を思はゞ、天照大神の神恩を忘却すべからず。今の世に生るゝ者は、此二神へ涓埃なりとも報恩の念を忘るべからざること也。

稠人―衆人
律義―物がたきこと

一事を以て覺るべし。數十人稠人廣坐の中に、一人の高慢倨傲不遜無禮のもの有らんには、同坐の數十人、皆其倨傲不遜を惡まざる者なし。倨傲不遜は不德無道たることを知るべし。又一人の慇懃丁寧律義柔和なる者あらんには、同坐の數十人皆其謙退恭順を愛すべし。謙退恭順は聖人の大道なり、君子の美德なり。是にて道德の天地の自然なり、人性の自然なることを知るべし。孝不孝、忠不忠、仁不仁、義不義、皆此と同じ。さて、衆人の一同に惡むものは天罰をうくる人なり。衆人の一同に愛する者は、天命を受たる人なり。皐陶の宣へる、天命有德。天討有罪。とはこの事なり。謙恭篤實にて人心の愛敬する處は、天命の歸する處にて、人心と天命と一同たることを知るべし。

一何を以て人心天命と一なるを知ると問はゞ、皐陶謨泰誓を引くにも及ばず、先づ吾心を知るべし。此心と云ふもの我造作し出せるにも非ず、父母の造作せる者にも非ず。自然にして然る者は、人造に非ずして、天造なり。人心なるもの天造なるときは、人心に是は善也と愛慕するは、天神の其善を愛し給ふなり。人心に是は惡なりと惡み忌むは、天神の其惡を惡み給ふなり。人の本心妙明にして是非善惡に惑はざるものは、

抗禮—對等の禮を執る

むるのみ。天地の間に寸分の功なし。しかれば王侯貴人の一天下の人を撫育し、一國の人を扶助する大功德に比すれば、己が無德無功なるを知るべきなり。吾門の學者は、王侯貴人は天地神明に均しき者と云ふ事を知りて、誣蔑の心を生ずべからず。是孔夫子の家法にて、天地の大道なり。されど王侯貴人なりとも、天下を亂り國を亡すの人は、各別の事なりと知るべし。

一 曾子の晉楚之富不レ可レ及。予何畏レ彼乎と云へると、田子方の貧賤者傲レ人と云へると、孟子の說ニ大人一則藐レ之と云へると、荀子の志意修。則傲ニ富貴一。道義重。則輕ニ王侯一と、此四條同意なり。されど是は天下の大道には非ず。さるが故に孟子の曾子の語を引給うて、其豈不義而曾子言レ之乎。是或一道也と、のたまへるにて知るべし。天地の間に、最第一の貴きものは仁義なり。仁義の貴きも、富貴の貴きも其理は一なり。さるが故に孟子も、貴レ貴尊レ賢。其義一也と仰せられたり。されば身に仁義の道德を兼備せる者は、王侯貴人に抗禮せんも何の不可かあらん。今世の學問文藝などにて、王侯を蔑如せんは、天下の戮民なりと知るべき事なり。

一 何を以て道は天地自然に出でたるを知ると問はゞ、經典の證左を引だにも及ばず、唯

藐之—藐は輕んずるなり
三畏—畏ニ天命ニ畏ニ大人ニ畏ニ聖人之言ニ論語に見ゆ
彷彿—似たること

一君子の三畏に、畏ニ大人ニとあり。此大人は文言の大人に非す、孟子の說ニ大人ニ則藐レ之の大人にて、王侯貴人を云ふなり。天命聖人同樣に畏れ敬ひ給ふ聖人の心を知るべきなり。繫辭にも崇高莫大ニ於富貴ニと仰せられたり。王侯貴人は天地神明と同じもの也と知るべし。後世天下を有つ人は堯舜の德なしと云ふとも、福祿は堯舜と同じ。且天下の亂逆を止て億兆の臣民を撫育するの功德、天地にも均ければ、堯舜の德なしとも、其功は堯舜に近し。されば福祿堯舜に同じく、功德堯舜に近し。天地神明と同じと云はんに誰か不可なりとせんや。後世愚昧なる天子にても、稱して聖と云ふこと當れりと云ふべし。聖人は王公貴人の、天命聖言に均しきことを知り給ふ故に、並べ稱して三畏の一となし給へり。然るに世の學者、己の小々の才智文藝に誇り、王侯貴人をも蔑如して無學となし、無能となし、不智不才なりとす。されど學者の文學、何の功德ありや。其著述する所、宋儒の著述の如く、天下の人をして惡を沮みて善に勸ましむるや。予今の學者の生民に功ある、道二が心學の人を善に導くの功に彷彿せるをも見ず。されば幾件の古事を知り、幾字の文義を知るに過ぎず。其文辭も人の一笑を博するに過ぎず。其甚しきに至ては、人の邪思を生じ、人の逸志を肆にせし

戒懼すべきの尤なり。然るを不レ足レ畏と云ふ時は、天戒は無用に屬す。是を墻破の無法者と云ふ、聖人の道理は夢にも不レ知人なり。其人一人をして天下の權を執らしむるに至れば、宋の天下の滅亡せるは神宗の大罪なり。

日食地震大風大雷大火洪水の類、星變等までも、戒懼すべきの尤なるもの也。

一程朱の天は理也、鬼神二氣之良能、造化之跡と云へるも信用すべき事に非ず。天地鬼神を畏敬する聖人の意には非ず。程朱の學流は、必竟無鬼の說に至る。今淸朝の宋學者は、無鬼の說を云ふと、紀昀（曉嵐）の云ひたること見ゆ。程子も人を評して言レ有二鬼神一惑矣。と云ふ。されば伊川の心中に無鬼の說あり。故に末流の弊は、阮瞻の無鬼論に陷るなり。天者。萬理之所レ出。鬼神者。二氣之靈。造化之妙など云はんには繫辭の意にも叶ふべきや。さて、天地鬼神の善には與して不善には與せざることを、能々悟り得て、一念の善、是天地鬼神の祐助あるを知り、一念の惡、是天地鬼神の冥罰あるを知り、言行共に邪惡に涉らざる樣に、念々忘れざるもの、是能天道を知り鬼神を敬畏する人と云ふべし。まして家國の政事、天道鬼神を畏敬せずんば有るべからざる事なり。

妖孽—わざはひ
非僻—誤りたること

人なり)大雅にも敬天之怒。敬天之渝とはなぜ言ひたるや。無逸には、畏天命自度と云ひ、周頌には、畏天之威と云ひ、孔子も畏天命と云ふ。天變無用にして不足畏ものならんには、春秋を作り給うて、三十六の日食、星隕如雨。隕石于宋。隕霜不殺菽。李梅實の類を丁寧反覆して記し給へるは何の故ぞや。是皆周書の降格にて、皇天上帝より人君の邪惡を匡正に降し給へる妖孽なり。董仲舒の對策には、天は甚だ人君を愛し給ふ故、妖孽を下して戒め給ふと云へり。尤も至極の理なり。是乃謹天戒の所なり。敬天之怒の所なり、畏天命の所なり。人主にても、又は在下のものにても、妖孽ある時は、懍々然として戒懼敬愼して、身行の邪惡、政治の非僻を改正すれば、妖不勝徳の道理にて、妖孽より却て興隆を生ず。大戊の桑穀、武丁の呴雉是なり。然るを天變ありても、地妖ありても、漫然として不省察、侈然として放肆なれば、天の必罰を蒙らざることなし。亡國の君、敗家の子弟皆如此。天地は人の父母なり。天變地妖は父母の怒なり。子たるもの、父母の怒には、恐懼敬愼せずんば有るべからず。迅雷風烈も、變色戒懼するは、聖人の法なり。是は例年にも有ることなり。夫すら如此、まして星の如雨に隕るの、石の隕つるのと云ふ如き、

王弼何晏—前に見ゆ淸談に耽りし人なり

を曹操曹丕曹植三人にて爭ひたるを見ても知るべし。禮法名撿を好まざる天性の人故其風下に移りて學者虛無淸談を悅ぶ世界となれり。晉の范甯の王弼何晏を責れども、是は第二著にて、王何竹林となりたるは、實は曹丕を罪人の巨魁とする也。

一後漢より文章衰へて卑弱になりたりと云ふ。されども三國の時も文名なき人の文は、西漢の氣習も略存して讀むべし。唯曹植の文は、儷偶冗長讀むに耐へざる拙惡の文なり。當時にては、是を第一の名文人と思ひ悞りて、陸機など是を模擬し。梁陳徐庾に至て其拙極れり。されば曹操より學者天道を畏敬することを忘れ、曹丕より學者禮法を侮蔑し、曹植より四六の惡文學者の肺腑に傳染し、聖人の道、古文の法、父子三人にて黴塵とはなしたり。世の學者は曹魏の三大罪を知るや、弗知や。

一王安石が天變不足畏。人言不足信。祖宗之法。不足法。三不足の論（上仁宗一萬言書）千古の罪言たることは、人々知る所にして辨斥に足らず。されど後の世にも、天變を不畏人主も人臣もあれば、王安石が再來と云ふべし。故に辨ずるのみ。先づ天變を不畏時は人主にて在下にても、畏戒の心を失なふ。從來天變を不畏道理あらんには、胤征に先王克謹天戒。とはなぜ言ひたるや。（安石は僞書をも取る

洪範五行の學—洪範は書經の篇名其中に木火水金土を說けり

空虛寥廓—前に見ゆ

讖—預言なり

瑯琊—地名なり

故に、自然と天道鬼神を畏敬することを知れり。洪範五行の學、災異を說くこと小小は誣罔に似たれども、天人相與する間の遠からざるを知るに足りて、諫爭の種子にもなりて排斥すべからず。さて、學者の天道鬼神をも知らず、畏敬の心をも亡失せる、其根原は、曹操司馬懿の二人詭譎邪惡なる天性のものにて、其權謀詐術を逞して天下を奪へり。是より天下の萬事、皆人の智力でなすべく、天は空虛寥廓にして、人事には關涉せざるものと、其世の學者は思ひ誤りて、兩漢學者の氣習蕩然として地を拂へり。さて、其曹操の後僅に四十餘年天下を領すれども、文帝明帝二代のみにて、齊王芳より後の樣を見るべし。仲達が後も、武惠懷愍四代僅に五十六年天下を領すれども、武帝一代而已にて、惠帝より後の樣を見るべし。元帝は牛繼レ馬の讖、瑯琊小吏牛金の子なれば、仲達の血胤には非ず、始皇王莽の天下と同じこと也。兩漢の四百年と比類すべきに非ず。曹操が自敘令（建案十五年）に性不レ信二天命之事一と云へり。開祖の君の言如レ此、其世の學者の天道鬼神を侮蔑する自然の勢なり。

一曹丕は無行の文人にて、父の妾を我妾とする程の者なり。卞后（曹丕の母）曹丕の大病の時、其寢所へ入て、始て是を知り。狗鼠も不レ食二汝餘一と詈りたり。甄皇后一人

梁武—梁の武帝

き人なり。

一右六篇の内、賀琛が梁武へ封奏せし文に、役人の貪殘にして廉白なるもの罕なるは、風俗の侈靡にて然らしむ。さて、淫奢の弊、其事多端なれども、其尤なる者二條を擧ぐと云ひて、其二條は飲食料理の奢豪と、歌姬舞女の歡娯なり。妙と云ふべし。

一宋の徽宗の奢侈にて朱勔が花石綱（舟十艘を一綱と云ふなり）にて南方の民を苦しめたる事は、宋史、宋通鑑にて明なり。明の神宗の貪欲にて、稅使礦使の四方に出で民を苦しめたることは明史に詳なり。さて、小吏にても、都を出ると上の威を假りて下を殘虐すること、古今政治の通弊なり。南齊の蕭子良（竟陵王が）陳㆓臺使勞擾㆒疏に如ㇾ畫に說盡せり。漢唐宋明四代の史書にも、かく詳明に言ひたるは無し。是れも一篇の重寶なり。

一古の聖人は、天道鬼神を畏敬し給ふ事、詩書の二經にて明白なり。天道鬼神を畏敬するは、吾道の大本なり。兩漢の學者は此意を假初にも失はず。是は秦無道にして天下を幷吞したれども、十五年にして亡びたり。王莽無道にして天下を奪ひたれども、是亦十五年にして亡びたり。無道なる者天命の所ㇾ不ㇾ與を眼前明白に見知り聞知りたる

敎化―敎を以て民を化すること
賦役―人民を使役すること
佶屈聱牙―文字難澁にして讀み難きをいふ

云ふことも能く分明なり。學者も能々是を讀で人事治道の切實なるを知るべし。此六篇は實に萬世の龜鑑にして聖經の羽翼とも云ふべし。

一蘇綽が六條は、一に治心、二に敦敎化、三に盡地利、四に擢賢良、五に卹獄訟、六に均賦役なり。さて、正心誠意などの云ふことは、宋の程朱二先生の功の樣に、宋儒以來言ひ習はせども、蘇綽が治道を說くに第一に治心淸心を以て要務とす。道義の根源、政事の本元を知れりと云ふべし。唐の古文は、元結に起りて韓柳に成る。宋の古文は、柳開穆修尹洙蘇舜欽に起りて、歐蘇に成る。六朝の惡習は韓柳歐蘇の功にて消滅して宋元明淸古文の世界となりたり。されども其根胎を尋ぬれば、此蘇綽より始れり。宇文泰を輔けて周の天下を起したる時に、六朝の文、綺麗浮華なり。其弊を改革せんとて、周書の大誥に擬したる詔一篇を作りて、天下に示せり。勾章棘句にて佶屈聱牙、樊宗師の文に近けれども、六朝の弊を矯んと云ふの志なり。されば散文平文を要とする古文の一脈も、正心治心を旨とする古學の一脈も、蘇綽より開きたるなり。周禮を悅びて、其官名などを用ひたるは、王莽王安石と其愚謬を同じくすれ共、一體は卓絕の見解あるものにて、其六條の文も四六などの輩に非ず。感服すべ

慎刑—刑罰を愼しむ

董仲舒—前漢武帝の時の人

賈誼—前に見ゆ

龜鑑—手本の意なり龜は疑を決し鑑は物を辨ず

儉愼刑とあり。又十漸の疏にも、太宗の儉約朴素終始弗渝と仰せられたるを第一に說けり。天下の治も、一身一家を守るも、唯儉約の一字にあることなり。縱欲肆情、奢侈華靡なるは、一身一家にても、國天下にても、小なれば衰敝の本、大なれば滅亡の基なること、千萬世必定の理なり。

一漢にては董仲舒の三策、賈誼が痛哭流涕長大息の疏、唐にては、陸贄が奏議、劉蕡が策對、皆一代の大文章にて世人の知る處なり。さて、南北朝二百年の間、君は暴君のみ多く、臣にも殊て純良の臣なく、大將も宰相も人君も令終の少き世にて文辭も四六の惡習ゆゑ、讀むに厭ふ愚拙鄙俗の極なり。然るに一代に一篇の好文章大文章ありて、文辭も其時にしては、卓乎として傑出し、さて、其所言の義理は、古今政治の龜鑑なり。今其目を掲げて後の人に告ぐ。第一には宇文周の蘇綽が時事六條、同じく樊遜が陳時宜疏、劉宋には周朗が讜言疏、蕭齊には崔祖思が啓陳政事疏、蕭梁には賀琛が陳時事封奏、元魏には李彪が封事七條、高齊と陳には一篇の如此なるものなし。以上の六篇を一卷の書と爲し、人君は常に座右に置き給ふべし。經書深妙の理は悟り難くとも、此六篇にて今古政治の弊も能く知れて政事の如此にすべしと

宇治殿―頼通

廻避―まはりさける

大屈より大伸を生じたる人なり。されども御堂殿の榮耀奢侈を極められて、其子の宇治殿、後三條院の英明に行逢ひたる故、藤原氏の權、頓に挫屈せり。道長にて藤原氏の盛此に極り、其衰も亦此に始れり。淨海入道の奢侈榮華を極められて、子孫は西海の波濤に沈溺せり。豐臣關白も榮華汰侈を極められて子孫滅亡せり。皆是れ大伸の大屈を感招するものなり。されば、王公貴人の大福大榮を禀らるゝ人は、各別に心得を能せざれば、或は當身に災害あり、或は子孫不振に至る。屈伸の理に通ずる者、世に其人ありや無しや。

一人を遇して、恭敬の誠を盡すは屈なり、其人必ず愛悅するは伸なり。道を行くにも、人を廻避するは屈なり、其人必ず悅喜するは伸なり。人に遇して倨傲不遜なるは伸なり、其人の怒り怨を受るは屈なり。道にて人を逃避せしむるは伸なり、其人の怒り怨を受るは屈なり。一言一行皆屈伸の理ありて、道を知る者は屈を知るものなり。能く屈する人は福祿の伸を得ざることなきは、天地古今の常理なり。古の聖人克レ己制レ欲、皆此屈を天性に得給へるなり。

一古今の名臣の奏議を見るに、儉約質素を說かざるは無し。魏徵の上疏にも、第一に節

御堂關白—藤原道長
平相國—清盛剃髮して淨海入道

なるべく、國家も安富尊榮なるべし。人主にては、漢文宋仁の恭儉は屈の理を得給へるなり。されども是屈伸、上下尊卑の差別なし。天地陰陽往來の實理なれば、天地の間に生を受くるもの此理に漏ると云ふ事なし。此理を悟り得れば智者なり、此理を知らざれば愚人なり。智愚賢不肖の別は、此理を知ると知らざるとに在ること也。是れ聖學を講ずる第一の義なり。

行儀を正くするは屈なり、福の伸を受くべし。驕りはね躁ぎまはるは伸なり、禍の屈を受くべし。天道を畏れ鬼神を敬するは屈なり、是れ亦福の伸を受くべし。天道を侮蔑し、鬼神を輕慢するは伸なり、禍の屈を受くべし。さて、富貴に生長する人は、我不レ知して伸る處多きものなり。各別に心得をよくして屈する事を學ばざれば、災禍を免れがたき也。

一日本にて奢侈を極めたる人は、御堂關白平相國豐臣大閤三人なり。御堂殿も、四男にて、少き時は麥飯海鰮を食ひたることある人なり。淨海入道の少き時は、繼母の池の禪尼にいぢめられて、某の中納言の家へ、もらひ食に日々行き給へること西光法師の詈るにて知られたり。(盛衰記)豐公の卑賤困窮は、女童部も語り傳ふること也。皆

妹姫―美姫

康寧―極めて平穩なるをいふ

聞二其政一は伸なり。孔孟の德一時に屈して、千萬世の下に伸ぶ。是亦屈伸の大なる者なり。諸德之基。衆善之本は孝弟の二なり。孝は親に屈事するなり、弟は兄に屈事するなり。屈せざれば犯レ上なり。論語開卷よりして、屈伸の理に非ざることなし。さて、王侯貴人は萬事意のまゝになる者故、美衣腴食麗妾妹姫金殿玉樓よりして、出入動作豫怠宴安、屈する理に出づること無くして、皆是れ伸の事なり。故に或は短命、或は病身、或は子孫血胤を斷絶する類の屈を感招す。其最も甚しくして情欲を縱肆にして、意の儘なるものは、秦皇、漢武、唐玄、宋徽の如くなる時は、天下亂亡をも感招するなり。さまでには至らずとも、災害の屈を受けざる事を得ざるなり。故に王公貴人は別して喫二欠闕一ことを心得たまふべき事なり。飮食衣服、なるべき丈は粗惡なるべく、さて、或は學問、或は藝術、或は政務、己が心に苦しと思ふことを、勉强して爲し給ふべし。是屈なり。或は賢者識者の長物語、又は講論の言、又は諸臣の諫爭上書など、面白からずと思ふことも、勉强して聞き給ふべし。是れ屈なり。十盃飮む酒を五盃にして止む、十度御すべき愛姫も五度にして止む、十囘出る遊獵も五囘にして止む、是れ皆屈なり。屈は伸を感招す。されば一身も康寧なるべく、壽命も長久

克己復禮―私欲に克ちて天理にかへるをいふ
簞瓢屢空―簞は小箱飯を容る器瓢は飲器なり飲食に窮するをいふ

るべし。屈首受經。屈節讀書、皆屈なり。されば立身興家の伸あるを知るべし。喫欠忍苦。屈の第一は飲食衣服居住の意に満ざるを第一とす。聖人不恥悪衣悪食。食無求飽。居無求安、皆屈を教へ給ふなり。これのみに非ず、凡聖人の明德は屈に非ざる者なし。恭者不倨なり、敬者不慢なり、謙者不盈なり、讓者不爭なり、儉者不侈なり、節者不過なり、約者不肆なり、和者不乖なり、順者不違なり、皆屈己者なり。懲忿窒慾も屈なり、改過遷善も屈なり。されば此諸明德にて、身なれば修まり、家なれば齊ひ、國なれば治まり、天下なれば平らかなり。是其伸る所なり。さて、是れを孔子の教に求むれば、言々語々皆皆屈伸の理なり。克己復禮は屈なり、天下歸仁は伸なり、敬恕而行は屈なり、在家邦無怨は伸なり。察言視色慮以下人は屈なり、在國家必達は伸なり。言忠信行篤敬は屈なり、道行於蠻貊之邦は伸なり。居處恭。執事敬。與人忠は屈なり、道行於夷狄之國は伸なり。顔子の如愚以能問不能。以多問寡は屈なり、亦足以發は伸なり。簞瓢屢空は屈なり、賢哉庶幾乎は伸なり。仲弓の居敬行簡は屈なり、可使南面は伸なり。夫子の溫柔恭讓は屈なり、所到之邦。必

蒲伏ー匍匐に同じ

令終ー善き終り

の伸あり。韓信が蒲二伏于市人胯下一は屈の甚しき也。故に齊楚の眞王たるの伸あり。凡世間の人、幼き時喫二闕欠一、少き時忍二寒苦一もの、或は少壯努力。攻レ苦茹レ淡時は、老大には必ず安富尊榮なり。幼少の時、榮耀榮華に誇るものは、必ず困窮難阨する、是れは世間の常人も讀書の人も皆知る所の屈伸なり。さて、此屈伸天地陰陽の常理にて、屈よりは伸を感出し、伸よりは屈を感出す。一生の屈伸あり、一年の屈伸あり、一月一日の屈伸あり。一年粗服粗食を忍んでなす時は、翌年は美衣腴食を得るもの也。一年酒色に放肆なれば、翌年は疾病にて酒色を禁ぜざれば叶はざるに至る。今日刻苦して、家業を勉勵すれば、翌日は間暇を得て、逍遙遊樂する事を得るものなり。今日怠惰放肆淫聲美色に耽樂すれば、翌日は或は災難、或は事用出で來りて、忙閙煩劇に至る。皆屈の伸を感じ、伸の屈を感ずるなり。天下常屈の理なく、又常伸の理なし。彼昏而不レ知もの、泰然として倨慢なり、侈然として放肆なり。其意衆人の上に伸ぶ。是れ豈屈を感招せざらんや。是れ終には家を敗り、身を亡し、令終を得ざるの基なり。古今亡國の君も、敗家の子弟も、皆伸よりして屈を招くものなり。酒宴遊興も、醉酗して歌ひ舞ふも、皆情欲の縱肆に出でて伸なり。されば屈を受くるの理あるを悟

南面―人君治を聽くの位なり

梧窻漫筆後編 卷上

一聖學の上頭第一義は、屈伸感應の理なり。下繫辭傳に、日往則月來。月往則日來。日月相推而明生焉。寒往則暑來。暑往則寒來。寒暑相推。而歲成焉。往者屈也。來者信也。屈信相感。而利生焉。尺蠖之屈。屈以求信也。伸龍蛇之蟄。屈以存身也。伸精義入神以致用也。伸利用安身。屈以崇德也。伸是れ屈伸の妙理を天下萬世に掲げ示し給ふなり。先づ舜は大聖德にて。耕于歷山。陶于河濱。漁于雷澤給ふは、屈の甚しき也。故に伸ぶる時は受終于文祖て南面して天下治れり。伊尹の畊于有莘之野は屈なり。伸ぶる時は、輔湯伐夏定天下たり。傅說の築于傅巖之野は屈なり。伸る時は、佐武丁中興天下したり。呂望の釣于渭濱は屈なり。伸る時は、輔佐文武。鷹揚牧野。表準東海たり。楊震が五十餘まで仕官せざるは屈なり。子孫四代三公たるは伸なり。袁安が雪中高臥は屈なり。是れ亦子孫四代三公たるは伸なり。張良が拏履于圯上老人は屈の甚しきなり。故に、帝王の師たる

以爲天下後世之戒。晏嬰曰。君子贈人以言。荀卿曰。仁者好告示人。若先生者。其庶幾乎。直嘗讀史書。至於宋庠救蟻爲宰相者。竊有疑焉。夫救蟻仁之小者也。取相。報之大者也。以小仁取大報。是必無之事。附會談也。不可信也。後讀先生是書。至於　生之論。恍然有得焉。夫秦西巴放麑。仁之煦々者也。孟孫以爲子傅。趙衰之全壺飧。義之子子者也。文公以爲原守。然則天道聰察。以其救蟻之微念。驗其可以爲宰相。又何疑焉。嗚呼。先生之學。窮古今。剖天人之蘊。此書殊其緒餘粃糠耳。猶足以警覺一世。嘉惠後學。所謂涕唾成珠。一字千金者。其此書之謂耶。是爲序。

文政甲申之春二月中浣　　片倉直薫沐再拜謹撰

梧窓漫筆後編序

先生學窮古今。尤邃於經義。力闢宋儒之妄。而明聖人之旨。有叩以人事之是非。無道之得失者。引援經義。參稽古今。以定其當。辭辯風生。殆若燭照數計。而龜卜者也非天下之大儒焉。能若是乎哉。平居教人。恒以陰德二字爲先。曰戒殺生。曰施丐者。夫戒殺生。即君子遠庖廚之仁。不可以釋氏之餘教而斥之也。施丐者即文王先四者之惠。不可以王莽之養贍而儀之也。此慈仁之端。而人道之先務也。苟擴充是心。施及於四海。亦可以贊化育。而參天地矣。以故是書前編務明報應之理。著殺生之戒。以警覺世人。今又刻此編。以補前書之所不足者。叮嚀反覆。以推明天道之不僭差。吉凶禍福之以類相應

文政甲申之春花朝日

出井元愷悌三識

人。遥不徒聖門之罪人也。又陳平之罪人也。嗟乎。蔿敖之埋蛇。而不死。惠王之呑蛭而後出。宋景有君人之言三。而熒惑移三舍。成湯之禱桑山。澍雨立至。東海之殺孝婦。枯旱三年。詩曰。昊天曰明。及爾出往。昊天曰旦。及爾游衍。天人之際。不甚相遠。可不察乎哉。此書前編。極言天人感應之理。今又續刻此編。以補前書之未盡者。蓋先生老婆之心。有不能自止者也。予遊于先生之門。于今二十餘年矣。親炙先生之教之日尤久矣。然才識婾陋。不能與今新進輩並轡而騁。亦明矣。唯以其親炙之日久。於先生之緒論。既饜聽而耳熟之矣。今刻成見囑以序。予曰以所嘗聞於先生之言。點綴以弁諸簡端。以告後之讀此書者。

梧窗漫筆後編序

董子曰。君子正其義。不謀其利。明其道。不計其功。于公之大門閭。王氏之植三槐。若執右契以責人者。君子之爲善固然耶。曰。謀其利而不顧其義。計其功而不以其道。此小人之所務。而君子之所耻而不爲也。若夫正其義而利自至。明其道而功自成。豈君子之所惡乎哉。且作善降之百祥。作不善降之百殃。書之明訓也。積善之家。必有餘慶。積不善之家。必有餘殃。孔子之言也。于公之大門閭。王氏之植三槐。皆善知天道報應之不忒。而豫與之期。篤信而不疑。君子之爲善固當然也。陳平曰。我多陰禍。我子孫必廢。夫陳平何人也。猶善知報應之理。必然不忒。至於司馬遷。不知道。妄起是非之論。以熒惑後之

成材何待十年謀　匠石操斤顧不然　收襲猶堪調律呂
剪圭還可命封侯　高陰遮日宜書幌　疏雨傳秋滴畫樓
慶氏從前百車富　定於後圃植千頭　拱把未曾勞灌培
扶疎乍見翳樓臺　姬瑞先臻卷阿樹　舜絃猶假嶧陽材
不與羣芳競榮蔭　早零一葉在青苔　最是漢園岑寂處
如眉纖月落宮限

詠梧桐七律二首　宅山公愷　題

天知り難きに非ず、書を讀て古今の成敗を知るは、天を知るの方なり。天を知れば天を畏るべし。君子三畏畏二天命一とあり、また小人不レ知二天命一而不レ畏とあり。予は天資愚陋にして世に立つべき才略も無く智謀も無し。されど道を信じ學を好む故、積累の久しき、天道の昭明を知り、又天命の威嚴を畏る。吾家の兒子門生、書を讀むといへども、外に馳せ博を務めて、其本を失はんことを恐る。故に北窓の凉處に就て、心に浮ぶ事を記載して其戒と爲し、小人の歸たらざるを要せしむ。されど其言詮次も無く書を披かずして憶記せるまゝを記したれば訛謬を免るべからず。兒曹の其謬を匡正せん事を欲す。

文化十年。癸酉。六月念五日。多稼軒主人元貞識

巫醫—占者と醫師

溫故知新—舊聞を溫習して新知を發見する義なり

ば、來格の義なり。當時孔子の仰せられたるは、來格の義なるべし。されども論語を譔次せる時は格正の義とせる者なり。以レ約失レ之者鮮矣、言語を約節するの義妙なり。禮記に儉レ易レ容也。以レ此失レ之者不二亦鮮一乎と云へり。是も論語を襲ひて約を儉約とせり。當時孔子の仰せられたるは儉約の義なるべけれども、論語を撰次するときは言語を約する義となせる者なり。庶民來格と云ひ、儉約不レ失レ道と云ふ、論語撰次の意に非ずとも極めて善教なれば、其說偏廢すべからず。南人有レ言人而無恒の條も禮記にあり。古註は禮記を以て解せり。朱註は皇疏衛瓘の說にて巫醫ともなるべからずと解せり。是れは不レ占而已矣に照らせば、禮記古註の意、語意を得たるべし。さて又溫レ故知レ新は、論語にては學問のこと也。中庸にては溫故は德行に屬し、知新は學問に屬す。中庸にて論語を解すべきに非ず。大學には如レ切如レ磋者道レ學也。如レ琢如レ磨者自修也。とありて、切磋を講學とし、琢磨を修德とす。荀子大略には、詩曰如レ切如レ磋如レ琢如レ磨謂二學問一也と、四つ共に學問の事とせり。今は考据證據と云ふことを悅べども、論語中庸と同字同語にて義理各別なるときは、經書は其章其章の文義義理ある事にて、下手證據の用に立つべき者には非るなり。

膏澤—恩を民に施すこと

り。襄二十八年に引詩斷章と云へり。隱元年の註に不與今說詩者同と杜預も云ひたり。さて書を引けるも同じ。臯陶邁種德。德乃降るは、德澤の民に降るを云ふ。君奭にも、德降于國人の語あり。孟子の膏澤降于民と云ふ是なり。然るを僖八年の左傳、郕降于齊師還の條に、我德あれば人降伏すと引けり。康誥の大に明服惟民其勑懋和とは刑罰の上服下服(呂刑の字)を明にすれば民も畏れて互に勑戒和順するを云ふ。然るを僖二十三年狐突の懷公を論ぜる條には、大明服の三字を我大に明なれば人服すと引けり。然るときは、書文の惟民の二字、解すべき樣なし。尙書を引くも皆々斷章取義なるを知るべし。さて又此斷章取義、實は詩書のみに非ず、論語の杞不足徵宋不足徵とは明徵證左なきを云ふ。文獻不足徵とありて、文籍も賢才も證左となるべき者二國に無しと云ふ事なり。然るを中庸に引ける杞不足徵也は、下文に上焉者雖善無徵。無徵不信。不信民弗從と云ふ。又君子之道。本諸身。徵諸庶民とあれば、其禮を民に施しても敎化の驗なきを云ふ。論語とは大に異なり。聖孫の論語を引給へる既に當時の語意と違へり。論語の有恥且格とあるは、格正の義を妙とす。禮記に此章を襲ひて、民有遯心。民有格心とあれ

仲尼―孔子の字なり

硜々然―小石の堅確なる貌より小人のこせつ〳〵く貌にいふ

動容周旋中禮―動作の禮法にかなふをいふ

如此の妙語多し。聚斂已甚に至れば亂亡すべし、苛察已甚に至れば亂亡すべし。信賞必罰も已甚に至れば亂亡すべし。善事たりとも已甚に及ぶ時は、害を生ず。仲尼不爲已甚と孟子の仰せられたるにて可知。今日の我人にも善惡共已甚ならざれば害なし。惡事は爲すべきに非ざれど、惡も已甚に至らざれば、亡國敗家の患無し。去ば治道に已甚を去ると云ひしは、妙ならずや。大抵天下を治るも、一身の世を渡るも、舟の中流を下るに同じ、柁を操て時々押直し〳〵して下るべき者なり。然るを寛猛剛柔偏なるを厭はざれば、舟は西か東の岸に衝き中りて微塵に碎くべしと知るべし。

一牛の角突に尤も甚しき事あり。論語に言忠信と敎へたまうて、さて言必信硜々然小人哉と仰せらる。孟子も大人言不必信。唯義之所在と仰せられたり。是れは能く分りたることにて。必信の害を云ふ。平生信を尊べども天下の爲、君父の爲には、僞をも言ふべきことなり。さて孟子盡心の終りに、大德の人を說て言語必信。非以正行也。と仰せらる。此必信は動容周旋中禮と同樣のことにて大德聖人の事也。論孟の角つき皆々如此。この牛の角つきを知ること、學經第一のことなり。

一左傳諸書に詩を引きたるは、斷章取義にて、詩の本意に異なるは世儒の知る處な

雁行―雁の列をなす如く稍斜めに行くをいふ
不遜爲勇―論語陽貨篇に子貢曰惡不孫而爲勇者とあるをいふ孫は遜に通ず

廷博が跋文に委く言ひたり。

一今の學者第一に心得べきことは、周易の柔順利貞なり。論語の溫良恭儉讓なり。先づ言行共に柔順を宗として顏色は溫和なるべく、言は卑遜なるべく、行は降挹なるべく、飲食衣服器用は質素淡泊なるべく、高ぶるべからず、爭ふべからず。路行くには人を避くべし。竝び坐するには末席を可とす、竝び行くには雁行を可とす。論語不遜爲勇を忘るべからず。慮以下人を忘るべからず。近來の文人に吾が文韓退之蘇子瞻に勝れりと誇る者あり、狂人と云ふべし。されども己が文の韓蘇に及びがたきを不知は、實は愚人なり。及び難きは知れども、如此の言を吐て愚人を欺くならんには、其狡黠可惡之尤なり。吾門の人は能く書を讀みて、詩文も德行も古人に企及びがたきを知り給ふべし。古人の及びがたきを知ると、讀書の功にて吾が眼識の明かに成りたるを自知し給へ。

明の汪道昆が、蜀人蘇子瞻の如き、文章一字不通と云ひたること、書影に見ゆ。彼我共に如此愚人はある者なり。

一漢の黃霸が治道去其已甚者而已矣と云へり。希代の妙言なり。都て漢人の語には

生知—生れながらにして知る者

道義—道德義理

今如ﾚ此の者なし。淸人の學は感服すべし。されども唯物知りになるのみにて、身心に用なし。孔子は多學而識ﾚ之ものを非なりとす。されば宋の諸名賢の解經は疎漏は多けれども、其言行は一言以終ﾚ身可ﾚ行ﾚ之ものあり。一事以終ﾚ身可ﾚ奉ﾚ之ものあり。一部の小學外篇にても聖經の羽翼と云ふべし。聖人出世の本懷は、唯是天下の人を善に導いて惡を沮み、四民凱安四海泰平ならん事を要する而已。聖人の學物知り自慢の爲には非ず。是れにて宋の諸名賢の尊きを知るべし。

論語に多聞而擇ﾆ其善者ﾆ而從ﾚ之。多見而擇ﾆ其善者ﾆ而識ﾚ之。生知之次也。と仰せられて、又多學而識ﾚ之者非也。と仰せらる。此等例の角突の尤なる者なり。

毛龜齡の西河合集は、妄謬怪誕の書にて信用すべき事極めて少なし。余蕭客惠棟惠士奇王鳴盛などの漢學を云ふは無用の事なれども、されども漢魏の傳注の滅廢せんことを傷みて如ﾚ此ことを建立せしなれば、道義に益ある事は少なけれども、經學には功無しとせず。閻若璩の古文尙書疏證、王鳴盛の尙書後辨は增多二十五篇の僞造を明辨せり。毛西河の書僞妄多き事は、全謝山が經史問答に見え、今は其書一向用ふる者も無く讀む人も無く、其板も滅びんとすることは、知不足齋叢書の中、鮑

牴牾—互に予盾するをいふ

解經—經書の解釋

精博—ひろく精密なること

泰の字の等の角突は、世の學者も知ること也。都て章々句々皆各其理ありて、萬世の法則となる。牴牾せるとて疑ふことも難ずべきことも無きを悟るべし。然らざる時は、伊藤仁齋荻生徂徠等が如き、陋見を生ずるに至る、可レ畏ことなり。

一繋辭には、精義入レ神と云ひ、中庸には盡二精微一とありて、學問は精密微細なるを可とす。されども、章句文字に考證考据の力を盡すときは、書厨書庫となりて、匱を買て珠を返し、隣の寶を數ふるに同じうして、必竟己の用とならず、無用の學なり。王陽明羅汝芳等の學は單刀直入、君子賢人の域に升るべき有用の實學なれども、章句文字を解釋せること誣妄のみにて、必竟信用するに足らず、朱晦庵郝京山の學異同あれども、章句文字をも略能く解釋し、又身心に有用なり。二家の學などを先づは可なりとす。されども二家の解經も訛謬あり、疎漏あり、極めて妄なることもあり。一々信用すべきには非ずと思ふべし。

一徳清胡渭が禹貢錐指を見るべし。其精密纖細、解經の書ありて以來、如レ此精博なるは無し。顧炎武日知錄、趙翼陔餘叢考を見るべし。其證据明白なること、宋明隨筆の書に如レ此者なし。王鳴盛十七史商榷、趙翼が二十二史劄記を見るべし、史學の明古

管仲―字は夷吾齊の桓公を輔けて諸侯の覇たらしめし人

慧眼如炬―觀察極めて鋭きをいふ

矣と仰せらるゝは、世に君子なきを云ふ。されども宓子賤をも君子哉。南宮适をも君子哉と仰せられたる故、是は時の諸侯のことなり等云ふは、先づ窮說なり。顏子の外未聞好學者と仰せられて、孔文子を好學と仰せらる。諸子には仁を許さずして、管仲が仁は、大に嘆美したまふ。さて此牛の角突は、經傳の常事たるを知らざる者、論語の不知肉味を以て、大學の食而不知其味を疑ふ者あり。可哂の甚しき也。論語は、夫子の韶樂を悅び給ふの深き三月肉味をも忘れ給ふに至ると云ふ。聖人道を信じ德を尊ぶの厚きを見する者なり。大學は愚童凡夫の色情に惑ひ利欲に耽り、肉味をも辨へざるを云ふ。本より疑ふべき事に非ず。論語五十三條、仁を說て、子罕言仁と云ふを疑ひて、子罕言利。與命共。與仁共と解せる者あり。可笑の甚しきなり。夫子之言性與天道同語例なれば、子罕言利與命與仁と讀むべき自定なり。論語に百條仁のこと有りとも、此語に碍あらず。一體論語は二十篇皆仁を云ふとおもふべき也。夫ゆゑに古人も張南軒の洙泗言仁錄に、五十三條の仁のみ仁と思へるとて笑ひたる者あるは、慧眼如炬の人なり。仁は諸德の統本容易の造るべきに非ざる故、漫りには語り給はずと云ふこと也。是も亦本より疑ふべきことに非ず。比周の字、驕

公山拂肸—二人が孔子を招聘せんとせしこと論語に見ゆ

と云へども、大學には慮而后能得と云ひ、太甲にも、弗慮胡獲と云ひ、洪範にも、思曰睿。睿作聖と云へり。子絕四に、毋必と云へども、又云必乎正名乎。必乎使無訟乎と云へり。論語に仁者不憂といへども孟子に堯獨憂之。舜以不得禹皐陶爲己憂と云へり。又勇者不懼と云へども、子路には臨事而懼と仰せられ、中庸にも戒愼恐懼とあり。又友諒とあれども、又君子貞而不諒と仰せられたり。又予欲無言と仰せられて、又吾與回言終日と仰せらる。又由也果。於從政乎。何有と仰せられて、荷蕢丈人を斥しては果哉末之難矣と仰せらる。躬爲不善者君子弗入也と仰せられて、公山拂肸の招きには往かんと仰せられたる故に、子路も之を疑へり。天下有道則見。無道則隱と仰せられ、孔子の時は無道の世なり。故に天下之無道也久矣とも、道之不行已知之矣ともあり。長沮桀溺は無道則隱るの孔子の語を得たるもの也。然るに孔子は隱れたまはず。天下有道。丘不與易也と仰せらる。一々角突ならざるは無し。故に祭義に夫言豈一端而已。夫各有所當也と云ふ一語、經を學ぶ大甲令也と知るべし。聖經の言は各其理ありて、彼を以て此を疑ひ、此を以て彼を難ずる者に非ず。得見君子者斯可

寡人―王が自ら呼ぶ語なり

揉堅忍して、君子の域に入る動心を善事とす。又孟子梁惠王の寡人於レ國盡レ心焉耳矣。又盡二心力一而爲レ之。後必有レ災。此盡レ心は心を勞すること今の骨を折ると云ふ位のこと也。盡心の盡二其心一者知二其性一也と云ふは、桀紂之失二天下一者失二其民一也。と云ふと同例にて、其本性を能く知る故に其心を能く盡す、仁義の良心を致し盡すを云ふ。中庸の盡レ性と略約相同じ。孟子大人者不レ失二赤子之心一。是れは大德聖人の事なり。左傳昭公生十九年矣。猶有二童心一とは、いつまでも小兒の心を免れざる愚人なり。孟子士尙レ志は美事なり。樂記の敖辟喬志は惡事なり。仲虺之誥と左傳襄公二十二年にある口實は、口くせに云ふこと也。周易の頤卦と左傳襄二十四年にある口實は、飮食のこと也。公羊傳文二年の口實は、死人口に含ませる珠なり。論語の中道而廢と云ふは、中庸には、半塗而廢とありて、半分路のことなり。論孟周易の中道中行は過不及なき中正の道なり。是れは經傳に夥しき事故十が一を擧るのみ。さて義理の角突は論語を殊に多しとす。其心三月不レ違レ仁と云ふは仁心なり。孟子に今有二仁心仁聞一而民不レ被二其澤一と云ひ。又仁聲入レ民之深と云へり。仁聞仁聲は一事なり。―一つは民不レ被レ澤と云ひ、一つは入レ民之深と云ひ、繫辭に天下何思何慮

王莽に事へし學者にて楊子法言の著あり

京山—郝京山

偏廢—一に偏し一を廢す

令儀—威儀のよきをいふ

馬康さへ此に不レ服、寡レ助之至。親戚畔レ之と孟子の言に符合せり。明道は聖人仁者に近けれども二程全書の言、信ずべからざること又多し。學問は、孔孟以後の人は善美を盡せるは無し。宋學正統を得たりとも孔孟に比すれば禹湯文武の天下と、漢祖唐宗の天下と違へるに同じ。然し宋學は霸統には非ずと知るべし。

一聖人は先知後行と說き給へり。陽明は知行合一とす。京山は先行後知と云へり。其言各各至理あり、偏廢すべきに非ず。

一經書を學ぶ者は、牛の角突と云ふ事を知るべし。文字の角突あり、義理の角突あり。まづ文字の角つきとは、皋陶謨論語にては、巧言令色は惡行なり。大雅は、仲山甫を譽めて令儀令色。小心翼々たりとあり。此令色は善事なり。顏色の溫潤溫和を云へり。中庸に索レ隱行レ怪吾不レ爲レ之矣と仰せられて、索隱は隱僻の理を探索することにて惡事なり。繫辭探レ賾索レ隱とあるは、聖人幽隱の理までを尋索し給ふを云ふ。大善事なり。孟子浩然の氣の章に、不レ動レ心は智者不レ惑。勇者不レ懼。智勇二德の成就して、心に疑惑なく恐懼なく、事に臨で不レ動ることを云ふ。君子の境界にて不動を善事とす。告子の終に動レ心忍レ性。增二益所一レ不レ能とあるは、心を感動變動し、性を矯

陽明―王陽明なり
大綱―大なる筋道
楊雄―漢の

至極の理なりとは解したれども、此時嘗て宋學を信ずる心なし。三十七八歳の時、論語を讀で文字言句は明々了々たれども、何か徹底せざること多し。始めて悟れり、身其地位に造らざれば、其言其旨眞知し難し。京師の畫圖を見たりとも、身京師に至らざれば實知に非ず。畫圖に毫髮も誤あるには非れども、畫圖のみにては畢竟見ぬ京物語と成て詭謬なきこと不レ能。是にて始めて顏子の學德一致、論語繫辭の智仁混一の事を悟りて、先づ王陽明の知行合一の善教なることを知れり。されば賢人君子の域に造らんことを志願して、身を省るに志願なり難き故は、人欲横流して天理昏昧なるを以て也。此にて始て悟る、天理人欲の說は、賢人君子に造るべき要術を得て、此學孔孟の正統を異傳へたることを。是より以後は、晦庵陽明を見ること舊日と大に異なり。されども今日に至るまで宋學を一々信用するには非ず。唯其大綱を得たるを悅べるのみ。今日の見解如レ此して、世間の詞章記誦のみを學問と思へる人と逕庭なるは、幼少より先父の教にて袁了凡が陰隲の說を悅び、廿餘歳より三十歳まで、好んで宋儒の書を讀みたる功德にもや。されば溫公程子を夢みたるも、偶然には非ざるなり。溫公明道の厚德は、可レ仰可レ敬。されども溫公は楊雄を悅て孟子を疑ふ。其子の司

珍羞―珍しくうまきもの
明道―程顥なり

越前に在りしより江戸に來りても、天明卯辰の飢饉丙午丁未の荒歉にて多くは粥を食ひ麥を食へり。是も學問成就の基と思へり。朝夕一度蔬食を忍び食へば、一事の善行也と袁了凡は教へたり。榮耀の内に生長する人は、此等の事をも知り給ふべし。

一唐玄宗より兵亂打つゞき、公卿の俸祿薄して、元載建議して祿を増けれども、顏眞卿は八省の尙書なれども、家屬多くして俸米少きが故に、粥のみを食はれたること見えたり。朱晦菴も晩年疏食のみ食はれたること見えたり。大賢の行事如此、予儕凡下の小人にて珍羞を食せんことは、冥の照覽瞿然として回顧せざることを得ざるなり。

一予少より好で溫公の通鑑を讀み、其書を悅ぶ。明道の行狀を讀で其高德に服せり。されども三十餘まで宋學を侮蔑して莊禪の流と思へり。寬政五年癸丑正月二十日の夜の夢なりしに、溫公と程子とを見たり。程子は明道か伊川か分明ならず、二人堂上に對坐し給へり。予は階下に拜伏す。仰て見るに、兩人の形一丈有餘の偉丈夫にて、吾身を顧れば、七八歲の小童の如し。何か畏れ服して一言も無く愧入る體にて汗を流して夢覺たり。（兩人共に深衣樣の物にて、小手袖の衣を著け給へり）學問のことは姑く置く。行義を以て見れば、兩大賢は一丈有餘の人にて我身は稚子の如きこと、尤

も抑へ制する程の剛明の人は、色情をも抑へ制すべく、衣服玩好凡百の欲抑へ制することと難かるまじ。されば身を立て家を起すも、謹身節用も何の難きことあるべき。如此なれば賢人となるべきことは必定なり。飲食男女人之大欲存焉（禮運）口腹耳目之欲（樂記）口腹の欲最も制しがたく、孟子の宣へる飲食の人は、人に賤まるゝに至る。まして男女耳目の欲制するに難くして、人欲肆而天理滅するに至る。さらば口腹を肆にせざる程の者は、耳目をも肆にすまじ。是れ賢人たるの術に非ずや。蚤起の一條は耳に留て三十年餘、朝寢と云ふことは爲ざれども、小食の敎を守り不得が故に、小人の域を免るゝこと能はず。老人の敎誨に背ける事耻づべきの甚しき也。予が諸子共是れを守るべき程の者一人も無し。故にこれまで此事を傳へず。今、記載して後の剛明の人に傳ふ。

虚勞―精力の衰へる病

予、十七歲の時虛勞を病みたるに、醫生の脾胃虛なりとて、百日の間米三合のみ食たり。十八歲より二十歲まで越前に在て、飯至て輕く三膳のみ食せり。飢に不忍して赤豆一合づつを煮て食ふ。當時は苦しき事と思ひたれども、今より是を見れば此功德にて、小々の學問も成就せるにや、道德のことも小々は知解せるにやと思ふ。

葛衣―くずかづらの繊絲にて織りたる夏の衣服

困學紀聞―宋の王應麟の撰なり

簞食瓢飲―少し許りの飲食物といふこと漢書貨殖傳に見ゆ

若し善惡も邪正も二なき時は、其徒の學者は雪中に葛衣を著て、炎天に綿服し、寒暑も混一にすべし。寒暑混一すべからざれば、善惡混一するの理は無きこと也。

一予十八歳の時、越前今莊と云へる山中に在て、一人の山伏と終夕物語せるに、其人予が禪學などを好めるを見て、其方は道を學ぶ志のある者なり、常體の學者には非ず。吾師より傳りたる賢人となるべき術あり、可レ傳やと云へり。予屈服して敎を請ひたるに其人の云く、唯二術なり。其一には、曉六の鐘に起き給へ。其二には、朝夕の飯を輕く二膳食ひ給へ。是にて賢人となるべし。是は國家安全の祈禱なり、一身壽福の符兕なり。子孫榮昌の守なりと云へり。予其時には至理ありとも思はざりしが、後に能々考ふれば希代の妙言なり。先づ朝起は、詩の蚤起夜寐。莫レ忝二爾所生一書の昧爽丕顯よりして、古人の蚤起を勸め給へること、困學紀聞に詳載せり。小食は周易の節二飲食一。論語食無レ求レ飽よりして、惡衣惡食、蔬食水飮、簞食瓢飲、汪信民の咬二菜根一まで皆此事なり。さて蚤起する者は、學問藝術、家業職業に怠惰する者に非ず、輕慢する者に非ず、柔弱不立の者に非ず、乾々孜々、困學精勤すべき人なれば、如何にも賢人となるべき一術なり。さて小食は養生養福の術のみには非ず、此嗜欲を

心行し—自ら慰むる所

莊周—莊子の名なり

王弼—字は輔嗣

何晏—字は平叔王何共に老子の説を好み清談に耽り當時の風をなせり

なり）是に困りて心行し無き故に、仁義を卑薄し。禮法を蔑弃せる老莊を假りて、先づ己が心ゆかしとする者也。魏晉の人老莊を好むも皆此心より出でたり。老莊を談ずるは、盡く己が過を飾るの道具なり。是にて莊周が不仁の罪を知るべし。當時此書を著せるは別に故あるべけれども、後の人此を以て己が罪を掩ひ、過を飾るの具とはなれり。桀紂は一代を亂り、王何は百世をあやまるとて、王弼何晏之罪。勝㆓于桀紂㆒と、晉の范甯の云ひたるは尤のこと也。莊周の罪は王何の上に出づ。さて今の學者老莊の見解より、堯舜も白骨、桀紂も白骨、善惡不二、邪正一如など佛語までを假て、己が惡の助けとなす。是を破れ大乘（煩惱卽菩提。生死卽涅槃）と云ふ。又石川五右衞門の悟道、明智光秀の順逆無二門の偈とも云へり。笑ふべき事也。善惡邪正の區別は聖人を待ずして天地自然の道也。美人と醜女とを並べたらんには、天下の人皆美人を戀慕すべし。美食と疏食とを並べたらんには、天下の人皆美食を悅び食ふべし。忠孝仁義の人と、弑㆑父弑㆑君亂臣賊子を並べたらんには、天下の人忠臣孝子を敬ひ尊で、亂臣賊子を賤め惡まざる者なし。善惡邪正の區別は、人心の自然にて天地自然の道なり。聖人此を以て天下の人に敎へて、自然の妙を失はざらしむるのみ。

令徳—善き徳

壽凱—壽にして樂しむ

老莊—老子と莊子

り。故に小雅の蓼蕭に、來朝諸侯の令徳壽凱を譽るに、他の善行を說かずして、宜レ兄宜レ弟とのみ褒めたり。聖人用心の妙如レ此。眼を開きて讀み給へ。

隱公の謙讓、鄭莊の叔段に克つ。春秋の發端なり、可レ見。

一勿二猱敎一レ升レ木と云へる妙なり。小人は利欲熾盛にして、親戚の愛情も薄き者なり。故に上たるもの堯の親二九族一。周公の不レ弛二其親一の敎を用ひて、親旅の親愛を深くすれば、其風下に移りて、庶民も於變時雍に至れり。然るに幽王の如く色情に惑て奢侈となり、奢侈より窮匱に至て、親戚を疏薄せらるゝ時は、小人は悉く親戚兄弟相背くに至る。是れ唯さへも升りたく思ふ猱に又木升りを敎へらるゝ也。君子有二徽猷一小人共屬すとは、論語の君子篤二於親一則民興二於仁一と云ふと同意なり。論語は小雅を解釋せると云ふべし。

一今の世の學者は、魏晉の人に近くして、多くは老莊を好むもの也。是にて性善の妙を知るに足れり。如何なる故ぞと問へば、學者は必定放蕩なる者なり。然るに論語孟子の内に、斷て己が放蕩の助けと爲すべき聖語なし。性善本心の良にて、己が身上に責を受く。此責は人の責むるに非ずして、己が己を責むるなり。(是皇天上帝の責め給ふ

無し。故に上古兵刑を一とし、後世兵刑を二とす。自然の勢なり。

一汝諧哉は、九官の內に益の虞となり、垂の共工となる二官に而已此語あり。是は九官の內佗官には僚屬なくして、虞には朱虎熊羆あり、共工には殳斨伯與あり、皆其僚屬なり。故に和諧せよと宣ひし者なり。然るを魏晉僞書の大禹謨禹の讓を受くる條に諧哉の語あり。王肅の學徒の無識を見るに足れり。されども此は僞書の僞書たる處を逗漏するにて、却て宜しき事なり。

一左傳に、學而後入レ政とあり。故に學而の次に爲政なり。左傳に禮以體レ政とあり。故に、學而の次に八佾あり。（禮樂を說く）人而不仁如二禮樂一何とありて、禮樂も仁に非ざれば無用なる故、八佾の次に里仁なり。人而不仁の一章は、八佾の次に里仁の篇を置けることを豫め說けるなり。論語篇章の譔次、心を用ひて考ふべき事也。衞靈公第十五、季氏第十六、陽貨第十七、衞靈は、諸侯の無道なる者、季氏は、大夫の無道なるもの、陽虎は陪臣の無道なる者、是れも撰次を紊らず。此にても論語の編敍に心を用ふべきことを知るべし。

學而、爲政、八佾等皆論語の章名なり

一匹夫には少なき事にて、諸侯以上は、兄弟國を爭ふの心より、不和なること多き者な

舜典―書經の篇名

九官―司空后稷、司徒、士、共工、虞秩宗、典樂、納言

洪範―尚書の篇名

不庭―王庭に來朝せざるをいふ

唯聖人の言萬世の模範なり。

一舜典の九官に、司徒司レ教。典樂も亦司レ教。教官二あり。此には深義あり。司徒は五教を天下の萬民に敷て、人と禽獸との異なる處を教ふる者なり。さるが故に、孟子も此章を解して、人之有レ道。飽食煖衣。逸居無レ教。則近ニ於禽獸一。聖人有レ憂レ之。使ニ契爲ニ司徒一教以ニ人倫一。とあり。典樂は胄子に詩樂を教へて、成德の方を教ふる者なり。是は君子と小人との異なる處を教ふる者なり。故に直溫寬栗皆皐陶の九德の目なり。庶民は人倫を知て禽獸に異ならしめ、士君子は德を成して庶民に異ならしむ。堯舜の時より如レ此區別ありて、士君子の貴きを知るべし。故に詩書には農工商賈を民と云ふ、士君子を人と云ふ。人と民との別を知るべし。

一舜典九官、士の一官兵刑の二を司どる、洪範八政には、師、司寇と二職なり。周官六卿にも、司馬司寇と二官なり。兵と刑とを一官に兼ねたるは、上代の事にて尤の理なり。此理は、他書には是無し、唯國語にのみ詳なり。晉語に范文子曰。夫戰刑也。魯語に刑を論じて、大罪於ニ原野一とあり。夫甲兵を興して不庭の諸侯叛亂の夷狄を原野にて誅罰するは、本刑なり。後世不義の兵互に相貪侵するに至ては、刑罰の道

官宦—恐くは宦官なるべし後宮に仕ふる男子にして去勢したるもの

赤脚大士—仁宗の渾名

哲婦—さとき女哲は知なり

一宋の仁宗の官宦宮妾と戲に賭博して一千文をまけ給へり。五百文を宦官侍妾に與へて、五百文を持て逃げ出で給ふ。侍妾寺人、皆官家寒乞なりと言るに、仁宗立ながら財は天下の財なり。我は天下の爲に財を守る者なり。汝等の爲に無用の財を費し盡すべからずとて、奥へ逃げ込れたり。戲とは云ひながら、難有御事なり。赤脚大士の不凡を知るに足れり。

一女子は家人の第二爻の无所遂。在中饋と云ひ、小雅の無非無儀。惟酒食是議。無父母詒罹と云ふ。これ正道なり。大戴家語烈女傳にも、此二經の言を推演して說けり。さて牧誓に武王の紂が罪を數へ給ふにも、婦人之言是用ふと云ふを第一とす。大雅には哲婦傾城と云ひ、婦有長舌。是厲之階と云へり。されば國家の事に婦人を雜ふべからざること、聖人の大戒なり。周の三母、漢の馬皇后、唐の長孫皇后のごときは、曠世の一人にて、宋の宣仁、女中の堯舜と呼ばれたるは、今古の珍事也。苻堅の夫人の諫を用ひずして、晉を伐て國を亡ぼし、竇健德の妻の諫を用ひずして、王世充を援うて、太宗に虜とせられ、明の寧王宸濠が妻の諫を用ひずして叛逆して、王守仁に捕へらるゝの類、婦言を不用して亡びたるも有れども、それは證驗とはなり難く、

ろ形に作れ
るもの

肖の者生じて、奢侈にて家を亡ぼせり。其者の平常に食せし膳は、あれに在る膳と同じこと也とて、吾が門生の蝶足の膳を指して告げたりと。丁未の歳に吾が門生の予に語れり。吾が門生も、一萬兩ほどの家資の者也しが、夫より十年を經ずして身上埋沒せり。彼門生は六かしき老人也とて、何心も無く語りしが、遂には其言彼が身の上の事とは成りたり。老人眼識の不凡なる事を畏るべし。予は此話を聞たるより二十八年、貧は不ㇾ習して倹也と云ふ言に同じく、家内の妻子迄蝶足の膳を不ㇾ用ことは此老人の賜もの也。

一漢の時に、篤實なる人を長者と呼びたり。おとなしき好き人と云ふことにて、此名義極めて妙なり。人の忿爭を好んで喧嘩口論するは、小兒のいさかひの習の不ㇾ變なり。凡百の器玩を好むは、小兒のもて游の習の不ㇾ變なり。醉狂して躁ぎ舞ふも、小兒の躍りはねたる習の不ㇾ變なり。無用の費をなし、人に物を與ふるには鄙吝なる類、皆小兒の心なり。勝氣の張りたるも小兒の心なり。されば長者とは小兒に對する言にて、おとなしく兒共心の無き人なり。上方にては、今に童部しき心ある人也と云ことを言ひ傳ふ、聖人君子には程遠し、學者小兒を免れて長者と爲り給へ。

縝密—心を用ふる細にして謹み深きこと

蝶足の膳—膳脚が蝶の翅を廣げた

學校之門」と記して、花押を居ゑたり。書迹も見事なり。天明丁未の秋、此地に游んで、予が親しく見る所なり。今を距ること二十八年、今此を想へば誠に一夢の間なり。

一下野の鹿沼に住せる一老人、終身其門前の流にしからみを爲して、流れ止る朽木古木を集め焚て、家内湯浴の用を爲す。其家は大福を發して、其子には博學能文にして、さて君子長者の風ある人を生じたり。武藏の本莊に住せる一老人、其門前の馬糞を終身掃ひ取れり。此れも其家は大福を發して、子孫には學者をも生じたり。されば大福を發して、子孫も榮昌ならんとには、勤儉にて縝密なる氣象有ものに非ざれば能はざること也。開國創業の人とても同じことなり。然るを粗豪浮躁なる氣象にて、徒手にて萬金を得ん、一家を起さんなど願ふは、博徒流の餘習にて、天地の間に此理此事あること無しと知るべし。

一鹿沼の老人を予が感服することあり。予が門生に彼が家に入塾して、其子に學を承けたる者あり。夫が噺に彼が家に往きたるとき蝶足の膳を携へて行きたり。或日老人の予が門生に語りしは、鹿沼に某と云へる富有の者あり。數世相續せしが、其末世に不

戎馬―兵馬に同じ

禪秀―上杉氏憲

龍逢比干―龍逢は桀王の臣、比干は紂王の臣、共に直諫して殺さる

三好の爲に數十年京師をば戎馬の區とはなせる也。關東は應永の禪秀が亂より永享に持氏亡び、嘉吉の結城合戰は勿論なり。成氏上杉憲實を父の寇として、其子憲忠を殺せるより、鎌倉の公方、兩上杉と爭戰となり、長享には兩上杉矛盾を爲し、遂に小田原北條の爲に關左の八州を奪はるゝに至る。此を根本の亂として終には六十六州兵亂ならざるは無し。腹心に病ありて四肢百骸皆安からざると同じ理なり。

永享の持氏滅亡の後、兩上杉の計らひにて、義政の弟政知を關東の公方と仰がんとて、伊豆の掘越に指置きたるに、延德に其次男（嫡子は義澄也）茶々丸に殺さる。故に成氏、（永壽丸とて、持氏の四男なり）を止ことを得ずして又鎌倉の公方とせしに、親兄の讐なれば、終には兩上杉を滅さんとて爭亂に及びしなり。

一上杉憲春の氏滿の叛心を諫めて切腹し、平手中務が信長の狂蕩を諫めて切腹したる、皆其君をして善に遷らしむ。龍逢比干にはまさりたり。中古以來忠臣の鑑とも稱すべし。上杉憲實の持氏を亡ほせしは、君を弑したるを耻しにや、出家遁世して、一生漂泊して死したり。平生學を好みたる故如レ此。されど是は悅ぶべき人には非ず。

足利學校の五經は此憲實の藏したるなり。每卷に上杉安房守憲實寄進。不レ可レ出二

陪臣執國命—またげらいが國の政令を司ること
左驗—證據

め登りて是も三世數人皆戰死也。四世長慶に至て天下の權を掌る。長慶老て其臣松永彈正忠久秀又天下の權を專にし、長慶の嫡子を毒殺し、將軍義輝をも弑するに至る。論語の禮樂征伐自二天子一出。自二諸侯一出。自二大夫一出。陪臣執二國命一。祿去二公室一。政及二大夫一と仰せられたること。彼土は、秦漢以來郡縣ゆゑ其言驗なし。我邦は、足利の時代より封建の形ゆゑ聖語一々符合せり。聖語の神妙千歳に涉て左驗あることを知るべし。又變亂の久しき內には、其下其下の人、段々と志を得ることを悟るべし。さて又細川の臣に三好あり、畠山の臣に游佐あり、斯波の臣に朝倉織田あり、赤松の臣に浦上浮田あり、大內の臣に陶あり、上杉の臣に長尾あり、土岐の臣に齋藤あり、京極の臣に淺井あり、小貳は龍造寺となり、龍造寺は鍋島となり、千葉に原、原に高城などと、永正、大永、天文、永祿、元龜、天正に至て、天下の兵亂極て其起る者共、多くは陪臣なり。三家の晉を分ち、陳氏の齊を奪ひたると同じ事なり。是れも兵亂の世の自然の理なりと見えたり。

一足利季世の兵亂は、細川山名の應仁の爭戰は勿論なり。長享の義植義澄の廢立、長祿の畠山政長義就の家督の爭、此を本とすれども、實は細川の澄元高國の家督の爭より

義植—義政子義視の弟
義澄—義政弟政智の子

の後、義興歸國して義植京師に在住すること能はず、淡路に出奔して、島の公方と稱す、果ては阿波の撫養と云ふ處にて沒せらる。義澄は、政元義植を廢して此を擁立すれども、義植の京師に復歸せる時に、近江に出奔して岡山と云ふ處にて沒せらる。義植路に奔て京師に將軍なき故、大永元年に義澄の次男義晴を播磨より召し上せて此を立つ。されども此も京師に在住なり難く、近江の朽木が谷へ出奔して、多年此に蟄居し、果ては近江の穴生の山中にして沒せらる。義輝は、永祿に三好松永に弑せられ、義昭は永祿に信長に立てられ、天正に信長に逐はれて足利氏亡びたり。足利氏の初、斯波細川畠山を三管領と稱して、天下の權を掌どれり。斯波は千世德丸早世して嫡統斷絶し、庶流家督を爭て其家衰ふ。畠山も德本姪の政長を養子とせるに、義就出生して長祿の家督爭より、天下の大亂を生じたり。細川のみ權威盛にして勝元婦翁の山名宗全と威勢を爭て應仁の大亂を生じ、政元長享に義植を廢して義澄立つ。政元だきに天を信して一生不犯にして子なし。香西又六とか云へる小姓に弑せられて、細川の嫡流此にて斷絶し、此より庶流の澄元高國の家督爭にて、細川衰へ、此亂足利氏の亡ぶるまで止むことなし。細川兩家の爭より其臣三好（阿波の小笠原）數々京師へ攻

塗炭の苦―水火の苦しみ

城のこと多けれども、委細に其樣を記したる書も無ければ、其慘毒酷烈の傷ましきをも心得ざる也。淸人王秀楚が揚州十日記、黃淳耀が嘉定屠城記略、などを讀て、其畏るべき樣を知るべきこと也。漢土は郡縣故に亂るゝも早く治るも早し。我邦は封建故、亂ては急に治り難し。彼土の春秋戰國の亂久しきと、我邦足利氏の時、亂の久しきを觀て知るべし。眞人出て四海一なるまでは、英雄豪傑互に出で互に亡びて戰爭止ことなく、人心虎狼の如くにして四民塗炭の苦みを免れ得ず。天道人道否塞して通ぜず。人心ある者の願ふべき事に非ず。唯世の中はいつも太平無事にして仁義忠孝の道の消滅せざることを願ふべき事也。

一兵亂の久しき内には、下人のみ志を得る樣になる也。足利氏の亂を見て知るべし。義敎は嘉吉元年に赤松滿祐に弑せられ、義政は應仁の亂に細川勝元の陣中に囚虜同然なり。義政は伊勢に走らる。義尙は延德に六角を征伐せんとて、江州勾里に三年在陣して其地にて沒せられ、義植は長享に畠山義豐を征伐せんとて、畠山政長細川政元と河內に出陣して、政元は義豐に一味して、政長を殺し義植を囚ふ。義植中國に出奔して大內を賴み、永正に義興義植を奉じて京師に入り、將軍に再任す。されども數年

軍旅之事―戰爭の事

趙奢の子―趙括兵法に熟達せるも實戰に敗亡せり

屠城―城を陷し人を屠ること

兵を論ずべき者に非ず。先づ孔子さへ軍旅之事。未ニ之學一也。と仰られたり。聖人明智の畏るべき所なり。孟子も、善戰者。服ニ上刑一。戰必克。古之民賊也、と仰せらる。陸機陸雲の兄弟、才名天下に震へども、族誅を蒙りたるは、兵家の子孫故なりと云ひ傳ふ。畏るべきこと也。さて兵法を暗練したりとも、多くは趙奢の子たることを免るべからず。且此一事興廢存亡の係ること故に、天運によるにや。光武敗散の卒僅に八千にて王尋王邑の八十萬を昆陽にて打敗り、明の四路の兵二十萬を、清祖の僅に四姓數千の兵にて打破りたるの類、其它は周瑜の赤壁、謝玄の淝水、虞允文の采石の戰、皆寡を以て衆を摧く、世人の知る所なり。されば兵を用ふる日に至ては、如何なる者に天運あるべしとも計り難し。百萬の兵たりとも、軍略に長じたりとも、調練に熟したりとも、天運あるものに敵すれば、一時に崩潰すまじき者に非ず。公羊傳に、戰不レ正レ克、と云ひたるは、古今の名語にて、古今の事理に明なる者は、先づ措て論ぜざること妙とすること也。

一太平の御恩澤に浴して、何も不自由なき天地の間に生れて、榮耀の餘りに、兵亂にも逢ひたしなど思ふ心の人多し。是は兵亂の難義を思はざるが故なり。戰國秦漢より屠

下の惡を說きたまふに、農民をも商賈をも說かずして工と而已說き給へるは、聖智の微妙なる古今治亂の樣をさし給へるが如し。是は亂敗は奢侈に生じ、奢侈は、工の造作し出す者と云ふ理を分明に知り給ふ故に、如ㇾ此に說き給ふ。さて是に根據有りて夏書に工執二藝事一而諫とあり。是れは僞書の胤征に出たれども、左傳に夏書を引きたれば、純粹の古經の語なり。是れも農とも商とも云はずして、工の諫むと云ひしは、古法制を守て今の淫靡の器を作らざるを云ふ。魯の莊公の桓宮の、桷をきざみ楹を丹せしを、匠慶の諫めしと、魯語に載せたる類なり。孟子の經學に明らかに、古今の治亂をさし給へること如ㇾ此なるに、朱子の解に、工官也とあり。是れは字義をも辨ぜず、又此節毎句互應の文法をも辨ぜず、又此言の古今の治亂を說き給へるにも心付かず疎忽甚しき注解なり。理學々々とは申せども、さて〳〵義理に通ぜざる事なり。此一節にても孔孟の御言は、人事治道に切實なるを、漢宋の註解夢中に說き過ること多しと知るべし。さて又此言を悟らば、金銀の器、瑇瑁の櫛笄の治道に害あるを悟るべきことなり。

一學者少年の英氣に任せ、兵を論ずることを好むもの多き者なり。是れ以の外の事なり。

迷樓─殿宇廻廊多くして中に入らば途に迷ふ宮殿

紅女─はた織を業とする女、紅は功に同じ

好まるれば─好まざればの誤か

からざる者なり。

一存亡興廢は、奢儉の二字に在りと云ふことを知りたる學者には教ふべき事あり。奢儉と云へる者、無形の者に非ず。必ず宮室とか、苑囿とか、衣服とか、器玩とか、有形の者に見はれる也。さて其有形の者は、天造の者にあらずして、人工に出づる者なり。人君の奢儉にもせよ、士民の奢侈にもせよ、是を作り出す工人あり、是を交易する商人あり。されど商賈は次の事にして本は工人の作り出せる也。迷樓飛閣を造營するも、奇器淫巧を造作するも、錦繡綾羅を織り出すも、工匠紅女の爲す所なり。工は奢侈の本なり。奢侈は亂亡の本なり。工に法制ありて、華靡奢麗の物を作り出さゞれば、如何樣に奢りたく思ひたりとも、奢る可き者なし。人君など淫靡奢麗のものを好まるれば、其職司の工人法制を守りて是を作らず。然るを工人の時好を追て淫靡華麗の物を作り出すに從て其上々と奢侈增長して亂敗に及ぶ也。孟子上無㆓道揆㆒。下無㆓法守㆒。朝不㆑信㆑道。工不㆑信㆑度。君子犯㆑義。小人犯㆑刑。國之所㆑存者幸也。と宣へるは、此ことを說き給へるなり。此章上無㆓道揆㆒。朝不㆑信㆑道。君子犯㆑義と、三句上の事を云ふ。下無㆓法守㆒。工不㆑信㆑度。小人犯㆑刑と、三句下のことを云ふ。工とは、工匠の事にて、

唐初の名臣なり
韓琦范仲淹—前に見ゆ
寇準—宋の名臣にして自ら奉ずる儉なりし人
東山殿—足利義政

賢君ならん。韓琦范仲淹にても同じ理なり。程朱は大賢なれども、天子とせば天下の人の明德を一々明にせしめんなど云て、迫切にすぎて、天下騷然として安かるまじ寇準は大英雄なれど、天子とせば至て能く出來たる處にて、漢武帝唐玄宗たるべし。多くは天下を亂敗する君たらん。儒者は天下を治むる道を學ぶ者にして、此理に疎く此事を成し得ざれば、物置小屋をも建て得ざる下手大工と云ふべし。

一天下の金銀は、多くは華麗なる事にて散ずる者也。色情これが根本たりと知るべし。さて茶人と云へるもの、舊物古器の見苦しく古びたる物を好で、多く金錢を費すは、奢侈華麗の增長して至極に至れる處より、變じて此に歸する、錦繡を著くる奢もの、乞食非人に墮て、敝れ薦古襤褸をば著るの象なり。不祥の甚だしき事なり。其源は天下を亂されたる、東山殿に起り、其道の達人たる千利休宗易、古田織部正、皆生害を免れず。小堀遠州の後も、吾覺て後其家滅亡せり。其不祥なる事を知るべし。吾は利休の七哲と呼れたる人の七世の孫なれば、此道をば如何樣にも褒賞せざれば祖先へ對して不孝とも云ふべけれども、此道の王侯貴人の奢侈を誘て、世道の害を爲すこと大方ならざれば、天下の爲に公言して其不祥を惡む。吾子孫たる者は、此道を學ぶべ

房杜—房玄齡杜如晦、魏徵と共に

本なれば也。さて天理人欲の學、宋學者の言ひ出せる樣に思へるは、以の外の謬なり。孔孟の傳へ給へる處より、漢儒相傳の古學にて、孔安國は仁者靜なりを解しては無欲故靜なりと云ふ。汲黯は武帝へ對して陛下內多欲。而外飾仁義。焉望堯舜之治乎と云へり。不欲は仁聖の學、多欲は亂亡の道たる事、從上の儒者の相傳如此のみ也。桑弘羊宇文融が如き聚歛の臣は論ずるに不足、唐の劉晏が如き治財の良吏たりとも、王制の量入爲出の四字の外に、別に爲すべきの理も無く、又爲すべきの術も無し。されば治財經世の道は儉にあり、儉の本は制欲なり。上儉素を以て政とすれば、下質朴を以て俗となし、上下豐饒にして、士民安穩なり。聖人の仁政も此を本とす。戴記に儉近於仁とは、此を云ふなり。天下國家豐饒の上にては、凡百の制度文爲禮樂刑政、治を飾るの具は、如何樣にも出來ること也。

一 一身にも天下にも乏して窮する者は金銀なり。儉の一字にて此物に乏からざれば、其宅の事は自由自在なり。學者の經史を通觀すれば此理明白なる故に、天下を治るは造作も無きことにて、反掌よりも易しと云ふは此理也。されど他人の事にては堯舜孔孟にても爲し難し。魏徵房杜を天子とせば、堯舜文武には及ばずとも、後世の大

をいふ守文は繼承の君始祖が武を以て興りしを文を以て守る意なり
犯觸—逆らふ
桑弘羊、宇文融…前に見ゆ
天祿—天の賜ふ福
輿人—衆人
天得の性—天性といふに同じ

ば、天下を平治、何の難きこと有んや。大聖人の方々孔夫子の儉は、經書に在れば知るべし。左傳にて、衞文公を中興の君と云へば、大帛之冠。大布之衣とあり。晋悼公を中興の霸と云へば、車服從ㇾ給。器用不ㇾ作とあり。鄭子產の政を執れば、輿人誦ㇾ之曰。取二我衣冠一而褚ㇾ之。杜註に奢侈者畏ㇾ法故畜藏すとあり。漢祖は豁達大度の人なれど、蕭何の未央宮を壯麗に作りしを怒らるれば、開國創業の人の天得の性、儉ならざること無し。文帝の身衣二弋綈一所ㇾ幸愼夫人衣不ㇾ曳ㇾ地とあり。此儉朴にて刑措の仁政を成せり。明德馬皇后は、後世に唐の長孫皇后と唯二人の賢皇后なり。衣大練とあり。曹操も天性儉節とあり。劉裕は葛燈籠、麻拂二于貧賤一の時、荻を刈たる襤褸を後世の爲に遺さる。唐太宗も木梳子を子孫の爲に傳へらる。玄宗も初年には、午門にて錦繡を焚き棄てらる。創業中興の君孰れか儉素ならざらん。漢唐宋明の史書を熟讀して吾言を知るべし。天下國家も一身も。儉朴にして興り存し、汰侈して滅亡すと云ふ、吾此言千萬世に涉て違ふことなし。さて此奢儉に其源本あり。欲を肆にすれば奢となり。欲を制すれば儉となる。汰侈淫靡、無ㇾ量惡行皆是れ欲の變相なり。故に克ㇾ己。脩ㇾ己。節ㇾ欲。制ㇾ欲を、聖人の學の切要とするは、唯此一字治亂興亡の源

子に見ゆ宮殿の極めて粗末なるをいふ

無告―告げ訴ふる者なき窮民をいふ

鰥寡孤獨―老て妻なきを鰥といひ老て夫なきを寡といひ老て子なきを獨といひ幼にして父無きを孤といふ

繼體守文―繼體は主後

民は今の乞食非人なり、豊なるの餘りには、此四の者をも憐み救ふことに至る。大聖人の天下を治る如レ此而已なり。然るに、繼體守文の君よりして、上の奢侈日々に增長して、其事國法と爲て變更なり難く、段々と困窮し、段々と衰微して、滅亡に至る。一家も一天下も同じ理なり。由二今之道一無レ變二今之俗一雖レ與二之天下一不レ能二一朝居一也。と孟子の宣るは此事なり。大有爲の君の天得に此理を辨じ給へる人出ざれば、國運は漸々に傾敗に至る。まして其内に汰侈暴虐、又は暗弱愚昧の君出づれば、一端に滅亡する者なり。國法を變改せずして、儉約質朴にすべきことは、人君の心にて如何樣にもなるべきこと也。

一後世守文の世に在て、儉約質朴云々の事を人君に說けば、酒色淫靡を好まるゝ心に犯觸して、其說行はるゝには及ばずして、其說者罪を蒙る故に、奢侈は其まゝに指置て、別に姦術權謀を行ひ、聚斂掊克の政にて、人君の淫靡を救ふ。是れ漢の桑弘羊、唐の王珙宇文融等が、金ため經濟なり。是れ一身一家の火急の匱窮を救ふと同じ理なり。實は、人君邪欲の焰に添薪して、以の外の惡事なり。如レ此の政段々に增長すれば、四民窮して天下滅亡す。堯舜禹の四海困窮天祿永終とは此事なり。此理さへ分曉なれ

掌を反すよりも輙し―手のひらを反へすよりもたやすい非常に易きことをいふ

茅茨土階―堯の堂高さ三尺、土階三等、茅茨翦らずと墨

亡すべし。言習はせる言、誤には非ず。さて、其源本の理とは唯一理にて、天下國家を治むる事造作も無きこと也。又反レ掌よりも輙きこと也。此を知らんとには、一身一家の上にて悟るべし。勤倹の二字なり。人々己が家業を精勤すれば游惰の事なし。分限に應じて倹約なれば放佚淫靡の事なし。是にて家事は豐饒にて、金銀財寶に乏しからざれば、家内の法式も調ひ、交際の禮數も欠ず。親戚の者、知識の人の患難危急をも救ふべし。仁義禮樂皆成ると云べし。さて、家人の怠惰ならんには、嚴威を以て制すべし。家人の勤勞ならんには、恩愛を以て慰むべし。操縱自由なり。然るに、游惰にして勤に怠り、汰侈淫靡にして倹約を忘れ、家事困窮して金銀に乏き時は、眉の毛に火の付きたる如き火急の難義なり。禮樂處には非ず、仁義をも打棄て、先づ火急の患難を救ふに暇なし。不仁不義種々の姦計種々の惡事を爲しても、其時其時を過さんと謀る。是にて心ならず最下の小人と爲るなり。堯舜禹湯文武の大聖人は、此理を悟り給へるなり。さるが故に堯舜は茅茨土階、禹は衣食非惡、文王は卑服、皆倹素なるが故に、財用匱乏の憂なく、豐饒富足なり。故に天下の人民を惠み救ひ、堯舜は不レ侮二鰥寡一不レ虐二無告一とあり。文王は發レ政施レ仁先二鰥寡孤獨四者一とあり。四の窮

聚斂苛察—聚斂は税を多く取りたてること苛察はやかましく吟味すること

人に對して心ならず不義理の生じて善人と爲り難し。夫のみには非ず。人々惡心を生じ、惡事を作して、惡人と呼ばれ、刑網に觸るゝに至るも、其本は財寶の乏しきに出づるなり。さて、此事を一身の事と思ふは愚昧の至り也。天下國家の政事に僻事の出づるも、其本は奢侈よりして困窮を生じ、困窮より聚斂苛察、種々の惡政起りて、仁義の正道も破れ、遂には亂亡に至る。されば金銀財寶は一身の命脈なり。又天下の命脈なり。天下と一身一家と但是一理にて少しも違ふことなし。是にて奢侈なれば亂亡し、儉節なれば安存することを悟るべし。我生命の命脈たる金銀財寶を、酒色淫泆の爲に費やし盡すは、是至愚至昧、亂國敗家の不肖者なり。是にて節欲制欲、克己脩身の學、一身を安存するの本、一天下を平治するの源たることを悟るべし。

一世の人、學者天下を治めたりとも、治まるまじきと云ふ事を言習はす、學者は天下を治むる事を學ぶ人なり。大工の家を造作し出すと同じこと也。何とて天下を治むる事を得ざるべきや。されど其源本の理を知らずして、制度文爲などを悅ぶ拘儒、又は詩酒遊佚を好む妄儒など天子たらんには、卽ち齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝、又は唐の玄宗、宋の徽宗、元の順帝などの再生なるべし。天下を平治には及ばず、卽刻に滅

害せられ、己弟の範頼義經を殺し、二人の子、頼家實朝公曉まで、父子兄弟相害して家亡び、尊氏は、嫡子を北條に殺され、己は弟の直義を毒殺し、我子の直冬には叛かれ、次男の基氏は兄の義詮に忌まれて自害せり。匹夫より天下を有つ太福の人々すら皆闕欠なり。まして凡下の人、誰か闕欠ならざらん。然るを愚なる人は、己が福の十分ならざるを恚る、笑ふべきの甚しき也。闕欠の世界に生れて、誰か如意圓滿なるべきや。唯々仁義忠孝の正道を蹈違へずして、人倫の正を亡失せざる處に心を居ゑて、福分の充足を願ひ、西方の大眞人に晒はれざる樣にすべきこと也。さて、世界闕欠の一語にても、大眞人の大智を悟るべきこと也。

一奢侈の心にて、一身も天下國家も滅亡す。儉節の心にて一身より天下國家も安存す。人の天地の間に生れて、第一に貴重なる者は、我が生命なり。生命なければ、仁義忠孝もなり難く、文章功業も建がたし。次には金銀財寶なり。人は飲食衣服宮室器用を以て、生命を養ふ。然るに、財寶なければ飲食衣服も得がたし、宮室器用も成し難し。されば、財寶なければ凍餒して生命忽ちに斷絕す。されど夫迄には至らずとも、人貧困なれば、忠孝にも事を欠き、仁義の心ありとも人の患難危急を救ふ事もなり難く、

成康—成王康王

西方の大眞人—基督を指せるならん

殛死—殛は殺すなり

不肖子—ばかむすこ

嫡子—太子建成

三男—齊王元吉

も、五代目の昭王は、膠付の舟に乘せられて、新田義興と同じ死を致さる。左傳に所レ謂、昭王南征不レ還と云ふ、此事なり。されば我邦は郡縣にても、漢土よりは能く治まり、封建にても漢土より能く治まる國風なり。是れ第一に人情風俗の純朴忠厚なる故なり。

一西方の大眞人の言に、天地闕欠の世界と說けりと承はる。是れは人欲の無量なるを悟りて、此言をなせり。誠に大智者の言なり。秦皇漢武などの帝位を踐で、別に願望の無ければ、長生不死を願ふに至る。都て天地間の人、己が心に充滿と云ふ事は無き事なり。是れ卽ち闕欠なり。さて、又此言、人欲無量の上に就て說き出せるのみに非ず。實に古今の人、闕欠ならざるは無し。堯舜の大福大德にも、丹朱商均の惡子を生じ、禹子賢なれども其父は殛死を免れず。湯は嫡子大丁早世なり。孔夫子無レ憂と嘆賞なし給へる、文王も、管叔蔡叔霍叔の三不肖子を生じ給ふ。後世にては、漢祖は其寵愛せる戚夫人趙王如意の死を救ふことすら得ず。唐の高祖は、次男の爲に嫡子三男を害せられ、太宗は、其太子を殺し、宋の太祖は、弟の爲に我子を害せられ、明祖は、太子は早世し、其子の爲に嫡孫を害せらる。我邦にて賴朝は、親兄は平家の爲に

さみする―あしざまにいふ

衣冠の人―朝廷に仕ふる人

文武―文王武王

ずして、遠く昔を慕ふは、學者の物好と云ふものにて、茶人の古物好と同じ事なり。中庸に生乎今之世。反古之道。如此者。烖及其身者也。と云ひ 荀子、舍後王而道上古。譬之。是猶舍己之君。而事人之君也。と云ふ。今の王室家は。子思荀子の戒め給ひたるに符合せり。烖を受くべきの學術なり。和歌を好む人も、延喜天暦の古を慕ひて、武家をさみするの氣習あり。勿體なきこと也。吾子孫は、和歌を學ぶとも、假にも此等の氣習を抱くこと無かるべし。

一周易、履の六三に、武人爲于大君。于は凌犯なり。漢の董卓、唐の李克用、韓建、李茂貞、朱全忠等の事に的當なり。我邦にては淸盛義仲等に的當なり。豫の六五に、貞疾恒不死。とあるは、東遷の周室、我邦中古以來の王室に的當なり。されば、天地に此事理あることも、聖人は既に知り給へり。

一昔王朝の盛なる時、帝王二十七代、三百四十餘年、衣冠の人を刑殺せず。(保元物語)仁厚の政漢唐宋明の企て及ぶべき處に非ず。今又德川家天下を知召てより、二百年、干戈兵亂の患なし。是れも亦三代聖人の治も及ぶべき事に非ず。周の文武は大聖人にて、成康は大賢人なり。成康の二代は、刑措不用こと、四十餘年と史記に見えたれど

大權弛びたるをいふ

幽厲—幽王厲王

兗冕云々—帝王の正裝

凱安—安んじ樂む

治の亂等にて、王綱は紐を解て、四百年あまり兵亂の世界とは成りたり。是にて凡そ官名冠服の治亂の用を爲さゞる事を悟るべし。醫者の吾は仲景流の桂枝湯、麻黃湯なりと云て、律派なる樣なれども病癒えざれば下手醫者なり。參蘇飮、不換金なりとも、病癒れば名醫なり。冠服官名の典雅を悅ぶは、仲景流の下手醫者に同じ。桀紂幽厲は兗冕十二章を著たれど、無德故天下を滅せり。後世開國の君は紗帽黃袍にても有德故天下を興し、子孫數百年天下を有てり。漢唐宋明の冠服官職凡百の制度、三代の制度に同じからず。されど天位を履で天下を領するは同じ。今の清朝は辮髮胡服の夷俗なれども、二百年天下を平治するの功德、漢唐宋明にも超絕せり。可レ見制度の典雅を悅ぶは、拘儒愚陋の至りなり。聖人は、人倫之至也。君を尊び親を愛する仁義の道さへ昭明ならんには、聖人の道、聖人の德は、萬代に消滅すること無し。冠服の雅俗、職司の古今などは論ずるには足らざるなり。能々聖人の心を知るべし。聖人の心は、唯天下の人の彝倫を違へずして、天下凱安に、四民豐饒にして、各其所を得せしむるに在る而已なり。如何なる制度にても、如何なる法令にても、世治り民安ければ、其卽ち堯舜の道、堯舜の治なり。是を堯舜の世と云ふなり。今の太平無事の恩澤を知ら

陳張—陳平張耳
關張—關羽張飛
蘇張—蘇秦張儀
王綱紐を解く—天子の

進んと貪欲する者、是れ援なり。是れ世間人情の恒事なり。中庸又云。居レ上不レ驕爲レ下不レ倍と、此倍の字即ち畔なり。此は世間の人、世に用ひられざる者は、必ず上を恨み世を恨み、朝政を非議し、君德を非謗し、背叛の心を抱く者なり。學者武人など此病最も深し。果ては世の亂を希て、天下亂れば吾は陳張たらん、吾は關張たらん、吾は蘇張たらんなど云て、治りし世を恨みたる、後藤兵衛に略似たり。太平の恩澤を忘れて世の亂を希ふの一念、天地の冥鑒に背くが故、如レ此の人は、益々困窮して、世に身を立つること難し。畏るべきの甚しきなり。さて、聖人の明智、人情の如レ此ことを知り給ふゆゑ、爲レ下不レ倍と宣ひしは、誠に人情をさすの御子とも云ふべき歟。

一世に王室家と云ふ學者あり。此は聖人の道德を知らずして、制度のみを道と思うて悅ぶ心より、昔の王朝の官職冠服などを慕て、今の月代上下などを惡くみ、武家の天下を非議するの徒なり。官名冠服は典雅なりとも、何ぞ治亂の事に益あるべき。月代上下にては世は亂れ、烏帽子冠にて世は治るべくは、如何にも我も降參して王室家ともなるべけれど、其冠烏帽子を著けたる世には、將門純友の逆亂あり、宗任貞任前九年、武衡家衡の後三年、果ては兄弟王位を爭ふ、保元の亂、源平武威を爭ふ、平

―屋漏は室の西北隅なり人なきも獨を愼みて鬼神に愧ぢざるをいふ

捷徑―ちかみち

浮圖―佛なり

なり。屋漏の二句は、中庸に既に引き給へり。凡夫の闇を欺て惡を爲す故に、心行一ならず、明暗（陰陽とも云）同じからず。天地の戮民とは成り行くなり。惡を惡むこと如﹅惡﹂惡臭﹂、善を好むこと如﹅好﹂好色﹂にして明處如﹅此、闇所も亦如﹅此なれば、卽ち是誠意なり。卽ち是愼獨なり。是れ聖地位に至るの捷徑なり。故に、大學中庸此を以て學者に示し給ふ。されど此境界には至り難し。強て爲んとには、操持迫切に過ぎて、宋人の持敬に近く、世間の萬事を放下して、唯靜坐澄心の工夫に走る樣に成べし。左すれば聖路を蹈違て、魔道に墮落し、無用の學とはなるべき也。

一聖人の心學は、大雅に是れあり、帝謂﹂文王﹂無﹂然畔援﹂。無﹂然歆羨﹂。誕先登﹂于岸﹂。畔とは上に倍く也。援とは上に諛ふ也。心の聲色に動くは是れ歆なり。（貪欲と訓す）心の富貴利達を慕ふは、是れ羨なり。（愛慕と訓す）人此四者を絕すれば、優に聖域に入る。登岸とは凡夫の境界を離れて、彼の聖人の域に躋るなり。浮圖吾が聖經の此語を襲て、到彼岸と云ふなり。文王の聖德を賛せる如﹅此。さて此畔援の二字、中庸に解釋せり。在﹂上位﹂不﹅陵﹅下。在﹂下位﹂不﹅援﹅上。援の字是と同じ。援とは攀援して上らんと欲するを云ふ。下位に在れば、勢威ある人に阿諛諂媚して身を立ん位を

布帛—綿布の類

炫賣—公然と賣ること

愼獨—人の見聞せざる所にても畏れ愼しむをいふ

不愧于屋漏

剪りて、初めて衣裳の用を爲すなり。されば世間の萬事も方正なる義理のみにては通じ難し。一天下の上にても、一身の上にても、斜なること筋違なる事有て、始めて安穩無事なり。先づ其一段を知らんとには、女は貞潔をのみ人道の正と爲す者なり。然るに色情を炫賣する遊女と云ふもの天地の間に有ては、人道の正は無き事なり。されども今日の時勢にては、是も無くては治平の大害なり。是筋違の最なる者にて又治平の道具なり。此一つを以て其餘は推て知るべし。此理を悟れば斜に行き、横に行くも、仁道の一端ならざる事なし。夫を大道に暗き學者は、唯義理の正直なる事のみを道と心得て、世間の人情に疎濶なるは、無用の學なり。道德の中にも、方正と廉潔は似せ物の多く有つて、さて贋物に非ざるも、多く世道の害となる者なり。心得の有るべき事也。

一大學中庸の愼獨の說は、皆大雅に出たり。不顯亦臨。無射亦保(思齊)と云ひ。相在爾室。尙不愧于屋漏。無曰不顯。莫予云覯。神之格思。不可度思。矧可射思。(抑)と云。昊天曰明。及爾出王。昊天曰旦。及爾游衍(板)と云。皆戒愼乎其所不睹。恐懼乎其所不聞。愼獨の說なり。されば此誠意の工夫從上の聖賢相傳の學術

疆場――さかひをいふ疆は大界場は小界なり

相家――人相見

孩提の幼兒――二三歲の幼兒孩は小兒の初めて笑を解するをいふ提は提け又は抱くなり

の字を和易樂易などと解たれど、羊にては通ずべく、牛にては通じ難し。故に朱晦庵は輕易容易と解したれども、是も通ぜす。漢書食貨志に、疆場の場を易に作りたるを見出して疆易なりと云ふことまでは、晦庵も知られたり。感賞すべし。されども其義理は知られず。（程傳、旅上九には、輕易とす）是れ易道の妙義なり。易は疆場にて、彼我田畝の界なり。されば彼我相對する處、是れ易なり。羊は狠戾觸冒の獸なり。人と相對する處にて、狠戾觸冒の氣を失へば、必ず恭順の貌を生ず。是れ是悔を亡ふ所なり。牛は柔順の獸なり。人と相對する所にて、柔順の氣を失へば、剛愎凌犯の態を生ず。是れ大凶の道なり。さて、王侯貴人の威嚴を以て、下を御する者は、各別の事なり。世に人に對すると、言語を接へざる以前に、莞爾として微笑する者あり。是も喪レ羊不レ喪レ牛の類なり。相家の說を聞たるに、人の顏面を見ると微笑を發する人は、少年發達の相なりと敎へたり。孩提の幼兒の人の面を見知る時は必ず微笑を發して相愛するの相あり。是れ人と人と相愛する本心仁愛の發見なり。是れ天性の良知良能なり。終身これを失はざるも、大人不レ失二赤子之心一の一端ならずや。

一布帛の端物は方幅なり。されど方幅のまゝにて衣裳となるべきや。斜に裁ち、筋違に

餘蔭―おかげといふ

滔天―滔は漫なり天をあなどり畏れざるをいふ

明德を說き盡し給へる事、無量の妙義なり。又無窮の奧旨なり、我は王公なり、我は富貴なり、我は厚祿なり、我は顯官なり。甚しきは父祖の餘蔭を假りて、是程の驕慢は有るべし、是れ程の奢侈は爲すべし、是程の榮耀は有るべきこと也など、自ら滿ち高ぶるの一念是れ既に上天の冥鑒に倍き、又人道の正理を失なふ。三代末主の肆虐も、後世亡國の君の侈暴も、皆滿ち亢ぶるの一念の增長して、滔天に至りし者なり。人臣庶民とても同じことなり。伉り滿る人欲を抑へ制すれば、恭となり、謙となり、儉約となる。皆聖人の明德なり。されば人欲の橫流を抑へて、天命を畏れ、人心を畏る、(天命の從違なり、民心の叛服なり)此抑畏の二字にて、國天下を有つ人は、國天下を太平にすべく、身家を守る者は、身家を安穩ならしむべし。聖言の至妙なる、是れ上天の宣へるには非ずや。

學者の我は雄才博學なりと思ひて、滿假の心を生ずる者は、富貴の人の驕奢よりも、其罪最も甚だし。大雅に、抑々威儀は。是德之隅也と。抑の字を以て、容貌の恭を敎へ給へり。容貌言語行事、孰れの所にか抑の字を用ひざらんや。

一周易大壯の六五に、喪二羊于易一无レ悔とあり。又旅の上九に、喪二牛于易一凶とあり。易

如くなること無しと云へり。されば御當代天下を知し召て、學術大に闢け、學問文章遠く前代に勝ること、實は神德の餘光の及ぶ處なり。讀書の人は、先づ此義を知らずんば有べからず。

一天には言なし。故に孔子は天何言哉。とのたまひ、孟子も天不レ言と宣へり。されども、能々考れば天に言あり。聖人の言は天言なり。凡夫の言とても、靈竅の自然より出で毫釐の人欲に渉らざるは、卽ち天言なり。況んや聖人の言は、天理の自然より出で、千萬世人道の模範たる時は、天言に非ずして何ぞや。聖言に從へば卽ち天道に從ふなり。身安くして家國全くし。聖言に違へば卽天道に違ふなり。身亡びて國家亂る。大易の六十四卦三百八十四爻等、孰れか天言に非ざらん。吾不レ知。文王周公の言なりや。蒼々冥々の中、無レ聲無レ臭。不レ可二測知一ものの言なりや。孔子の宣ふ。君子畏二聖人之言一。小人侮二聖人之言一と。天命を畏敬することを知る者、聖言を畏敬することを知らずして可ならんや。

一周公曰、嗚呼厥亦惟我周太王王季。克自抑畏と。周公二王の明德を說て、成王に教訓し給ふには、可レ說可レ語ことも多かるべきに、僅々たる抑畏の二字を以て、二代の

淫肆—女色を好むこと甚しきをいふ

本領を安堵せしむ—領地を其儘に與ふること

東照神君—徳川家康

黨を磔木に升せ、簑笠を著せて火にて燒殺す。苦くて身を動すを上總躍となづけたり。義景長政父子三人の髑髏を金だみとして元旦の祝儀に出したり。虎狼の、人に化したる者なり。

一秀吉の淫肆を見よ。信長の妹小谷の方を奪ふの心あり。信長の女氏鄕の後室をも奪ふの心あり。(會津より上洛せざるを怒て、秀行を宇都宮へ封を移せり) 信長の姪小谷の方の女淀殿を妾として夫が腹に秀賴を生みたり。皆小人の上淫を好むの心なり。高野山を燒亡さんと謀りしに、木食興山に感じて此を赦し、薩摩の父子剃髮降參せしにて、三州の本領を安堵せしめ、正宗の磔木を持たせて上りしに感じて、米澤の本領を安堵せしむるの類、大度寛容の處は、信長とは格別なり。されども秀次の妻子を枉害し、朝鮮にて、晉州城中の六萬人を屠戮せしの類、殘忍ならざるに非ず。我東照神君の御行狀を見るべし。御一生、戰塲にて人を殺さるれ共一人を枉害せられたる事無し。漢祖唐宗などの企て及ぶべきに非ず。古の聖人を除いて、誰か御德義に比並する者あらんや。

一烈祖成績に、我邦に武將ありてより以來、學を好み書を嗜み給ひしこと、東照神君の

文帝武帝―前漢の皇帝
周亞夫―前漢の名將
霍光―前漢の名相
昭宣―昭帝宣帝
則天―則天武后なり
太宗―唐の太宗皇帝

神宗の王安石の欺を啗ひしも、堅く見ゆる處より誤られて、宗社の禍を生じたるなり。

一曹操多智なれども、幕内に其子孫を亡す司馬仲達三馬一槽に食むの夢をなせり。仲達多智なれ共、其國を亡ぼす賈充の女、妬婦の腹に生せり。智力防慮の用を爲ずして、天に勝つ事能はざるを知るべし。文帝の陰德盡きざれは、吳楚七國を制する周亞夫を生じ、武帝無道なれども天より霍光を生じて昭宣を立て、福祚綿延す。太宗陰德盡ざれば、則天を諫むる狄仁傑を生じ、二張を誅する五王を生じ、韋庶人を滅す劉幽求を生じ。玄宗無道なれども、天より郭子儀、李光弼を生じて、天下中興す。一國一家に取ても亦同じ。子孫綿連せんとには、智力の及ぶことにあらず。唯陰德陰功を積むより外に爲すべきの術無し。陰德陰功は、慈愍の心にて人を惠み人を救ふより大なるは無きこと也。是にて袁了凡が陰隲の學の、天地に功あることを知るべし。若し此理を知らざれば、子孫は永代橋より墜て溺死すること分明なり。

一信長の殘忍を見よ。甲斐の惠林寺にては、多く僧俗を燒きころし、荒木攝津が叛せるを怒て、其人質の二百八十人を誅し、尼ヶ崎に籠りし、荒木が家老に見せんとて、其

文文山—宋末の忠臣文天祥

匱を買て球を返す—書を讀むも聖人の行を學ばず、文字のみを知りしにたとへたるなり

忍人—殘忍なる人

り、長上をも慢り、世人をも慢り、多少の悪行皆是よりして生ず。果ては、世を渡ること成り難くして、天を怨み、人を咎むるに至る。不レ知や、己が學ぶ處は、文字のみなり。其學積累の極に至るとき、書庫書厨なり。聖人の苦口して教戒なし給へる、道德には天地懸隔せり。看よ〳〵、論語の第一篇には何とか有るや。曰、夫子、溫良恭儉讓と、周易の坤の卦には、柔順利貞。君子所レ行と。謙の一謙四益迄、孰か今の學者の反對に非ざるや。されば學者は、恭儉柔順を以て身を守るの本となすべし。此の一事にても、己が學ぶ處は、匱を買て珠を返したる事を悟るべし。

一放蕩亡頼の者は、多くは輕薄の少年なり、取るに足らず。さて世の中に堅固なる人と云ふあり。刻薄殘忍なる人にて、其薄情不實遠く放蕩なる者の下に出づ。大抵世の奸佞邪智、人を讒訴する類の悪人は、堅き人にあり。堅く見ゆる人は、一體忍人なり、油斷すべからず。王侯貴人などは、此一流の人の欺を啗ふこと必定なり。予は幼少より四十年間、世間を漂泊せる故、人を知るの明智は無れども、善悪邪正は畧知りたり。唯人は、溫和溫柔にて、堅き人にも非ず、放曠なる人にも非ざる人、敦篤にて實情あるもの也。君子長者は、當に此一流の人より出づべし。

蒙を發する—發はひらくと讀む上に蔽へるものを取去るをいふ

途轍—轍は車轍、たどる道をいふ

狂簡—志大にして事に疎畧なること

狷介—高潔を尙び人を容るゝ量なきをいふ

天分の良心を斷滅せざる故に、却て事に觸れて、良心發見の妙あり。學者は良心掃地せる故、天地の理にも暗く人道の理にも暗く、昧然たる昏愚の人なり。聖人の經言も其蒙を發すること不レ能、其迷復を復すること不レ能が故に、近來大博識と云へる人の行狀非人と同類なるにて、予言の僞らざるを知るべし。況んや其下なる者をや。此後の學者は、途轍を改て聖道を志すべし。さて、此まで惡學に染みたる者も、其本心に復すべし。

一學者は、忼慨激烈の氣象も無くては、事變に臨て無用なり。故に是れも有りたきことなれども、初より此に志あれば、血氣粗豪の氣のみ增長し、聖人溫良恭讓柔順の妙を得ること不レ能。或は狂簡の似せ者となり、或は狷介の似せ者となり、或は曠蕩の流となり、或は疎暴の人となり、要聖賢の道に入ること能はず。先づ氣象らしき事は惡行なりと心得て、君子長者の風を倣ふべし。

一文文山の云ふ。讀二聖賢書一所レ學何事と、學者は、念々此語を以て、己に問ふべし。久しうして得る所あるべし。

一學者徹上徹下の病は、高慢の二字にあり。此心よりして親兄をも慢り、主人をも慢

原鎌足
小野宮の右大臣—藤原實資
疎濶—關係少きこと
天地蓋載の德—天地が萬物すべてを慈む德をいふ

一越前に幸若太夫と云者あり。今年初て其曲を聞きたるに、猿樂とは違ひ、極て不調子にて、今の世の人情には疎濶甚しきものなり。されども上より大祿を賜はりて、一族皆土著せり。予此を聞て天下泰平の故を悟りたり。如レ此不用の者にも、先祖以來の祿を賜ひて、一粒も減じ給はず、天下に如レ此不用の費夥しく有るべけれども、其まゝに指置かるゝこと、是天地蓋載の德と少しも違ふこと無し。如レ此の御大德なる故、御世繁榮して、天下は久安長治なり。收斂刻薄の吏などの知る所には非ざる也。

一近世の學者は、初に史記を讀んで、戰國の山師共を見覺る故、先づ是にて豪傑氣象を生じて、本分の良心を失ひ、次に世說を讀て、魏晋の放蕩者共を見覺る故、是にて曠達の氣象を生じて、天分の良心掃レ地滅盡す。さて、これより學問益博にして字面を知り、故事を記し、吾は博識なりと、高慢の氣日々に長じ、世人を見て俗物となし、義理にも通ぜざる詩文を書き散らして、予は才子なり、予は博物なりなどと、倨傲不遜の惡心惡行のみ增長す。顏之推の家訓に戒めたること、今の世顏前に多く湧き出づ。予故に、今の學問にては、百巻讀ば、百巻だけ道に遠く、千巻讀めば、千巻だけ道に遠くなると、云ふことはこれなり。無學の人の貴きには非れども、學者の如く、

晦庵―姓は朱、朱子のことた

鐵中錚々、中佼々―錚は金聲なり鐵佼中にて剛利なるものをいふ佼は好なり傭は凡傭なり凡傭中にて勝れたるをいふ

族誅―一族悉く誅せらる

大織冠―藤

一古今人物の輩出せるは、春秋と、後漢の時なり。司馬溫公も後漢人物の多きを稱嘆せり。されども名賢の多きは、北宋を以て第一とす。晦庵の名臣言行錄に載する處を見て可レ知。只言行錄遺漏多し。北宋諸家の隨筆類を以て之を補はゞ、其全を得べし。

一晉は羊祜の高德、謝安の鎭靜一代の人物なり。南北朝には、一人の漢宋の人に比似する人も無し。魏にては、高允の忠實、宋には、袁粲の見レ危致レ命の類、鐵中の錚々、傭中の佼々なる者と云ふべし。實に濁亂の世界なり。

一宋齊の時、人主も令終少なし。其臣は宋文の謝晦傅亮徐羨之、檀道濟を枉害せしより、宰相も大將も、多く族誅せらる。殺運、天地に充塞して、人々生を全うする事不レ能。我足利氏の中世より、元龜天正の時に至ると、同じ理なり。是れ天地の刧運殺氣、兩間に充塞して、人の免るゝ事を得ざる也。

一我邦にて、大織冠、天滿宮の相業も、記載詳ならず。小野宮の右大臣は、壽八十二、五朝に歷仕して、善き人には見ゆれども、是も詳なること知りがたし。藤原保則一人の事のみ、記載詳なり。されども、是は大臣にも非ず。中古以來大賢と稱すべきは、小松の内府に、北條泰時 楠 正成の三人而已なり。

李笠翁金聖嘆—共に清の小説家なり

腰斬—腰から斷ちきる刑

相業—宰相としての事業

子房—張良の字

何とせん身は風なりの柳かな

此句を見よ。柔順不ㇾ爭。又不ㇾ凝ㇾ滯物ㇾ。能與ㇾ世推移。の意言外に見はる。

澁柿の靜に秋を送りけり

此句を見よ。莊子の無用の用、櫟社の樹、其天年を全うする意、言外に見はる、今の詩人此見解ありや否。

一李笠翁金聖嘆の惡行は、尊鄕贅筆に詳なり。聖嘆の腰斬せらるゝ事は、秋坪新語に見えたり。學者此二家の書は、几案の前に近づけざるのみならず、門戸の内に入るべからず。

一古今の相業。西京には、宣帝の魏相丙吉、東京には、袁安楊震、唐には、貞觀の房玄齡杜如晦魏徵、開元の姚崇宋璟張九齡、德宗の陸贄、憲宗の裴度、宋には、李沆、王曾、韓琦、范仲淹なり。明には、三楊一李をなど云ふとも、揚士奇の惡子を愛し、李賢の賄賂を通ずるの類、名相とは云難し。唯孝宗の劉徤、謝遷、相業頗る高し。

一漢には、張良、唐には李泌、明には劉基、同樣の人物なり。されども子房を最も高しとす。功業は小なれども、三代已下の人物は孔明を最第一とす。

り
雕蟲篆刻―俗にいふ小刀細工つまらぬ技にいふ
鴟梟―ふくろふ悪鳥なり

でも、人の淫志を過め、人の善心を導くこと、これ其用とする處なり。然るに、今の世の詩と云ふ物は、楊雄の所謂、雕蟲篆刻の類にて、人の性情を正しうするの用を爲しがたし。碁將棋などの間を消すると、同格の用なり、其能く成得たるも、人の目を悦ばしむると、人の一笑を博するには不過、書畫と類を同うせり。然るに此流の詩人、儒者と列を同うして、世には是を儒者なりと思へり。此類近年最も多し。初めは明の李王七才子を悦べり。今は宋の范陸四大家を悦ぶ。其體は殊なれども、其無用たるは一なり。さて其徒は茶酒遊蕩を事業となし。書畫器玩を玩弄し、貴游子弟、豪富の少年を鉤引して、風流淫靡に趣かしむ。此が爲に身を破り家を亡ふ者、少からず。故に世の篤實儉朴の人は、今の儒生を悪む事、博徒尉間などに同うす、儒者の不幸なる此より大なるは無し。儒者なる者、今日の詩人ならんや。鴟梟を以て鳳凰となし、鳳凰悪聲の鳥と云ふ、然るや然らざるや。

一今世の詩は、遥に俳諧には劣れり。

富貴より其身は卑き牡丹かな

此句を見よ。富而無驕。降挹退托の意言外に見はる。

伊尹周公―伊尹は湯を佐け周公は武王成王を佐けて天下を治めし人

扁鵲倉公―共に支那古代の名醫な

一醫者の病を治すると云ふこと、人々皆知る。儒者の病を治すると云ふことは、世人これを解せず。醫者は身體の病を治するのみ、外科なり。儒者は心の病を治す、内科なり。心の本體は混然たる至善、道の本源、德の區域なり。然るに、心に百病ありて其因は唯一なり。一とは何ぞ、欲なり。是吉益爲則が云へる、萬病一毒なり。欲の一毒、種々の名相を變て、四百四病とはなれり。喜怒哀樂も欲の變相なり。欲を得れば、喜び樂み、欲を失へば、怒り哀む。されば喜怒哀樂の類は、五勞七傷の内傷なり。淫聲美色鮮衣珍食の類は、風寒暑濕の外傷なり。是を能く治め、人情を正し、人倫を得せしむる、是儒者治療の効なり。内は己が病を治し、外天下の病を治す。是儒者の職なり。伊尹周公は、扁鵲倉公なり。天下を治むと云ふも、法令制度も、實は天下の人心を治むる也。天下亂ると云ふも、天下人心の亂れて、父を弑し君を弑するに至るなり。然るに、今の世の學者は、人の病を治せざるのみか、人に淫蕩の病、華奢の病を生ぜしめて、身家を亡ぼすに至らしむるは、醫の疾を治する事能はずして、人の命期を促す者と、一同の戮民なり。

一天地の間に文字ある故は、事を記して後の世の勸戒となる爲のみ。されば詩歌の類ま

精明—精通すること

沈湎—酒に溺るゝなり

梧窻漫筆　卷下

一人々頭に戴きたる、天と云ふものあり。天子は、天下を能く治め給ふ。これ天より命ぜられたる處なり。諸侯は、一國を能く治めたまふ。これ天より命ぜられたる處なり。卿大夫、士は、上は君を輔佐し、下は三民を撫育す。是天より命ぜられし處なり。農工商賈の三民も、其各の家業を務る、是天なり。此理を知れば、左傳の邾文公を知レ命と云しも、明白分曉なり。さて醫者は、其業に精明にして、世人の病患を能く治むる、是天也。儒者は、何を以て天命とするや、學を講じ、道を明にし、天下の人の惑を解きて、天下の惡を戒め破り、天下の善を勸め導く事、是天より命ぜらるゝ處にして、頭に戴きたる天なり。されば、善を勸め惡を懲して、天下の久安長治を助ること不レ能して、詩酒沈湎華奢風流に陷て、人の家にては滅亡の助となり、國天下にては、亂亡の助となる者は、儒者の名を冐して、天道人道を亂る、國家の大蠹賊なり。聖世の戮を免れ難し。

梧窻漫筆　卷上終

卓然—秀でたる貌

たり。李格非文叔が季廷珪の名墨を不レ買こと墨莊漫錄に見えたり。皆古の賢士の卓然として不レ惑もの也。さて器物を玩弄して時日を費し金銀を費すもの、其本源を尋れば、幼少の時、物を玩弄せる餘習の老ても猶存するにて、實は幼き心のもてあそびを不レ念なり。老成の君子より此を見れば可レ笑の甚だしき事也。されども、唯もてあそびにて日を消する而已ならんには、辨斥にも及ばざれ共、相率て天下華靡奢侈の大害をなす時は、辨明せずんば有べからず。擧天下此悪習に染む時は、吾此言門流にも及ぼし難し。唯吾子孫たる者は、古書畫古器物を以て人の欺を啗ふべからず。又人を欺くべからず。有用の學を爲して、此無用の徒に変るべからざる也。

敦―器の名
彝―宗廟の常器なり又酒を盛る器なりといふ

董家の欺を啗て彼が腹を厭しむるのみ。北宋の時、唐畫と鑑定せるもの、宋の絹にて和買の印あるにて知りたること、陳鵠が耆舊續聞に見えたり。博古圖に徽宗の時の愚臣共、某の鼎、某の敦某の彝など名付て、人を欺きし事洪邁の容齋隨筆に二條まで辨駁して其僞を明白にす。古書畫古器の信用するに足らざるを知るべし。尙書に玩レ物喪レ志と、聖人の大戒なり。又器非レ用レ古惟新あるにて、書畫器物の名理に害あるを悟るべし。然るを近年は奢侈の餘習にて、學者學問して書を讀み義理を講ずる事は得知らず、唯書畫古器を好み、筆硯文房の具を集て學者の態を裝飾し、無學不文にて藝苑へ濫入し、學者文人の名を冒さんと欲す。學者も其徒に化せられて書の一葉を讀むにも不レ及、讀みたりとも文字を校するには過ぎず、何等の義理何等の妙所ある事も不レ知して、是は宋板なり、是は古寫本也など云ふ事になりて、典籍書畫器物と一樣の玩物となり、學問も風流好事茶人古董の部類となれり。さるが故にや、此二三十年來は、學者學問を業とはせずして、書肆古董を業とする者多し。惡むべきの甚だしき也。宋版の漢書を王元美錢謙益など高價に購りし事見ゆれど、是は學者の習氣にて好事の害也。宋の孫之翰の名石硯を不レ買こと、墨客揮犀に見え

清談―清雅なる空談

文墨風流―詩文を樂み紙墨に親しむこと

質實―質素にして實用を尙ぶ

り。

一學問變じて老壯放蕩の流となる。天下の一厄なり。身を脩め天下を治るの術は講ぜずして、無用の虛無清談となる。范甯が王弼何晏の罪は桀紂にまさると云ふは、知言なり。再變して文墨風流の事となる、又天下の一厄なり。齊の東昏、陳の後主、隋の煬帝など、華奢風流の極なり、身を害し國を滅すに至る。後世風流の好才子は、南唐の李後主、宋の徽宗なり、皆亡國の虜となれり。今の世にても貴人の學問風流に流るれば、學問の用は無くて奢侈の媒となる。故に目出度ことは無し。恐るべきの甚だしきなり。

一百年前までは、學者質實にて、皆有用の學を爲したり。近時物茂卿の徒より、學問皆、空詩浮文に流れて經義道學など講ずる人少し。此二十年以來は、學問益々浮薄にして、書畫文墨にのみ走り、風流を以て學問となす。恐るべきの甚だしきなり。有志の人は嚴戒せずんば有るべからず。

東山の義政は、我邦にて風流人の冠冕なり。此にて風流好事の害を悟るべし。

一古書畫古器物の類、少しは古を考ふるの證になる事有れども、夫は萬に一にして骨

たゞすの字なり
三辟—夏殷周三代の刑法
叔世—末の世澆季の世
冠冕—かんむりなり首領の義

り、遊方の僧の小田原の城下を過ぎて制札を見て、北條家運命も末になりぬ、滅亡に程あるまじと高聲に罵りたり。巡察の足輕此を聞きて大に怒り、捕へて奉行所へ引出し、如何なる事にて斯は申したりやと詰りしに、さればとよ。我は四十年前氏康公の御代、この御城下を通行せしに、町の制札五六箇條に過ざりしに、今御城下の制札四十餘箇條に及べり。左傳に亂國多レ制とあれば是亂亡の徵なり。怪み給ふこと勿れ、と云へり。奉行も理に服して放ち遣りたり。程も無く天正十八年四月朔日より圍を受けて、七月七日には氏政氏堯切腹して、氏直は亡虜となり、五代八州を領せる繁榮も、一時に滅亡したり。さて此僧は道理に明にして先識の智、感服すべし。此時代は儒生は無き故に、僧徒のみ儒學ありて此等の僧も有りし者なり。

一我邦にて、儒者にて上達し天下の政に預りしは、皇朝にては、吉備大臣、菅丞相、武家天下には大江廣元、新井君美、唯四人のみなり。儒學をなす者は心細き事なり。されども儒者も侮るべからず。菅丞相の御子孫は、加賀能登越中の三州を領して今は諸大名の冠冕なり。廣元の子孫は、一時は中國の十州を領し、今も周防長門の二州を領せり。積善の餘福天道の與する所を見るべし。是にて儒者の爲に氣を吐くに足れ

社稷

隱曲偏私—依怙贔負

治大國云々—老子の語にして小鮮は小魚小魚は其まゝ烹る故に國を治むるに煩雜のことを爲すべからざるをいふ

蕩々—廣大の貌

匡正—共に

一人君の德は、慈仁を本心となし、表は威嚴なるべし。慈仁を本とせざれば、臣民愛戴の心なし。威嚴を失へば、臣民畏敬の心なし。人臣の德は、忠信剛直を本心とし、表は柔順恭遜なるべし。柔順恭遜ならざれば、世を渉ること難し、忠信剛直ならざれば事あるの時用を爲し難し。

一政は簡約なるを尊び、公明正大を宗となすべし。假にも煩擾なるべからず。隱曲偏私なるべからず。治大國如烹小鮮とは簡約のこと也。論語には可也簡なりと云ふ。無偏無黨王道蕩々たりとは公正の事なり。論語には公則民悅と云へり。

一吾子孫門流の者に、王公の師範たる者もあるべし。末世人情の薄僞邪惡なるを怒らば、刑罰を峻にして一時を匡正するの念生ずべし。是以ての外の僻事なり。刑罰は表を嚴にして民の惡を懲すは、聖人の仁心なり。されども其實は慈仁の心を宗として、成べきだけは寬宥なるべし。刑罰を峻にすれば、無程世の亂を生じて國運を縮むべきこと必定なり。此義に暗ければ聖人の徒には非ざるなり。又吾子孫門流には非ざるなり。

一左傳に亂國多制とあり。政の簡なるは治世の良法なるを知るべし。又三辟之興皆叔世也とあり。刑法の盛なるは、末世衰亂の事なるを知るべし。昔天正十二三年の事な

惠心―他に惠む心
愷悌―和らぎ樂しむ
溫公―司馬光
荊公―王安石
介甫―王安石の字
宗社―宗廟

一儉は夫子の宣る節用愛人の義なれど、末世儉を主張すると、人々皆吝嗇になりて、己に私するの欲のみ熾になりて、慳貪甚しく、奢侈の風の猶人を惠み人を賑ふの氣習ありしには遙に劣れることと爲る。奢侈の美なるには非ずして儉の方を失ひたるにて、不德甚だし。とかく儉は自ら己を節約にして成るべきだけは人を賑ひ惠む事なりと心得べし。

一儉嗇よりして人々仁惠うすく、人惠心すくなくして、困窮の者多し。困窮の極、人人皆惡事を爲して刑罔に罹る。是にては奢侈の弊と同じ事になるべし。心得らるべき事なり。

一人は愷悌人情に近きもの君子の人なり。人情に遠き者は惡人なり。辨姦論に安石の惡を知りしも是なり。溫公荊公共に飲酒を好まず、二人他人の家に往きて主人の強て酒を勸ければ、溫公は強て一盃を擧ぐ。荊公は何と強ひても盃を把らず。溫公是は予が介甫に所不及なりと云へども、實はこれ溫公は愷悌人情に近く、君子長者の風を失はずして、安石が人情に遠き、宋の宗社を亡ぼすべき氣習已に此に逗漏せり。人君など唯堅固なる人を悅び給はゞ安石復出づべし。

茅茨不剪采椽不刻—宮殿の極めて質素なるをいふ
岐山—山名

無けれど、今日まで夫に安ずることは別に一說あり。藤田子定の言に光國中納言の桃源の御隱宅、予が草堂に少し廣き樣なりと、十五年前に云ひし故に、造作せんと思ふ度に、子定の言を思ひ出して且やみぬ。

一鳩巢小說を讀みしに、鹿島大明神へ鳳凰來れりとて、四方八面きら〳〵と玉の如く光りしと云ふ、新井白石の話を載せたり。此鳳凰は漢の武帝、唐の玄宗、宋の眞宗、徽宗などの世に出でては時めく鳳凰ならん。聖人の御世には覺束なし。堯舜の土階三等。茅茨不剪。采椽不刻。時に出て、文王の卑服をめされし時に鳴於岐山たるは、きら〳〵光る玉の如き華麗なる物には有まじ。白石は一體侈大を好み華麗なることを悅ぶは、此一條にて著明なり。一代の英物なれども、聖人の大道を知らず。

一忍の一字にて金錢を積む工夫は盡たり。先づ心に美食を欲する欲生ずるも忍んで堪へ美服を欲する欲生ずるも忍んで堪ふ、是は善忍なり。さて人を賑ふべしと云ふ仁心の生ずるも忍んで堪へ、交際の禮を缺くは羞しと云ふ義心の生ずるも忍んでこらふ、此は惡忍なり。善惡に拘らずして、唯一箇の忍の一字を守れば富なり。古人も忍は不育の本と云ふ、さるが故に長者子なし。

歸命頂禮―佛の前にひれ伏して餘念なくすがり頼むこと
歆羨の心―人をうらやむ心
環堵の室―方一丈の室

これ同類に非ずや。何を以て惡と禍と同類なりと云ふや。父に不孝なれば父惡レ之、君に不忠なれば君惡レ之。惡は人の惡む所、禍も亦人の惡む所、是同類に非ずや。古人吉凶の二字を以て善惡となし、禍福となす。其一なるを知るに足れり。然らば惡を爲して福を願ふは、火に就て冷を求め、水に入て煖を索るに同じ。必無の理なり。此理を知れば、善念の生ずるは已に天地鬼神に福せられたると云ふ理明なり。佛者は能く妙理を解したり、佛を有難しと歸命頂禮するは、もはや佛の光明に迎へ取られたる也と云ふ。召公曰。王其德レ之用祈二天之永命一。夫子曰。丘之禱久矣と。祈禱せずして祈禱せり。解すや、否。

一　幼なき時、老母より傳はりし古歌に

餘所にのみ見てや止なん葛城の高まの山の峰の白雲

此歌の意を觀得せる故にや、幼より歆羨の心うすし。又亡友吉田學生の友人の歌とて傳へし、

かくてしも棲めば菫の花にさへ憂を忘るゝ蓬生の宿

此歌の意を玩味して、多年環堵の室に安んず。家累多くして家狹し。實に容膝の處も

貴を願ふの志あらば、假にても可し、僞にても可し、唯孝道を盡すべし。富貴を願て、孝道を爲し、假に僞に孝道を爲せと云ふは、怪き樣なれども、天性純孝の人は世間に幾も無し。中下の人を導くに至誠と云ふとも、其所までは至り難かるべし。されば富貴を願ふ心より入るとも、孝心を盡さんは、不孝には萬々まさるべし。

一人は心に惡念を生ずれば、此一念既に天地の鬼神に棄られて、禍を得るの種子を種ゑたるなり。善念を生ずれば、此一念已に天地の神明に與せられて、福を享るの種子を種たる也。大小遲速は其事に隨ふなり。さて假令福を願の私心より入るとも、孝道は人道の第一にて、是を行へば可と云ふことを知て勉ても行へば、此念已に天地の神明を感動するに足れり。此念の生ずる、已に天地神明に福せらるゝ也。福を得ざるの前、既に福を得たりと知るべし。仁人者正㆓其誼㆒不㆑謀㆓其利㆒。明㆓其道㆒不㆑計㆓其功㆒など云へるは、大賢君子の事にして、今日の人を導くの方には非るなり。

一善と福とは同類なり、惡と禍とは同類なり。同氣相求、同類相應ず。善を爲ば福あり惡を爲ば禍あり、同氣相感ずる自然の理なり。何を以て善と福と同類なりと云ふや。父に孝なれば父喜び、君に忠なれば君喜ぶ。善は人の所㆑喜なり、福も人の所㆑喜なり、

刑綱に觸る
―刑罰を蒙むる

り起る。されば人情を厚し、風俗を正しうせんと欲する時は、奢侈を嚴禁するより先なるは無し。

山下廣內は名和長年の後胤なりと云ふ。余江戶に來る日は、其二子皆七十有餘の老翁にて軍學に達練せり。兄は孫子轉用と云ふ書を著し、甲越の二流を一部の書に集む。弟は軍學に神道を兼たり。皆頗る心得ありて、只人に非ざれば、廣內もさる者なるべし。然れども金銀を湧物なりとして奢侈の者を禁ずべからずなどの說は、不學にて聖意を不ㇾ知に出たり。其孫元直は余が門人にてありしが、自害して家亡ぶ。

一人道の第一は、孝の一字にあり。人子たる者は、孝道を念々忘るべからず。新唐書の孝義傳を見よ。親に孝ある者は、不可思議の奇瑞感應あり。唯此一德最も天地の神明に感通すと見えたり。されば世の孝心の人は才藝も智術も無れども、思ひ寄らざる發達榮昌のある者なり。余亦二人の非人を知れり。盜賊には非れども粗賊に類せる程の者なり、然るに二人共に賤民なりしが、皆一時に發達して頗る金銀にも富たり。さて此兩人平生の所行一事の人道を得ること無きに、天道不可思議也と疑ひしに、能々聞正せば、二人とも老母に孝心なり、是にて疑團氷釋せり。富貴を不ㇾ願人は無し。富

取られば—
「取るは憂し取られば人の數ならず捨つべきものは弓矢なりけり」

易にも行過乎恭。用過乎儉とありて、三百八十四爻、萃の用大牲の外、一語の侈大を好むなし。二簋可用享。孚乃利用論。東隣殺牛。不如西隣論祭實享其福。皆儉の用を云ふ。孝經の謹身節用、論語の節用而愛人、孰れか儉に非ざらん。左傳に云、儉德之恭也。侈惡之大也。二語已に說盡せり。されども經傳を讀むにも及ばず、一部の平家物語の開卷の一語を知れ。奢る者久からずと。奢の一字、國天下に在ては國天下滅亡の種子なり、一家に在ては、一家滅亡の種子なり、一人に在ては、一人滅亡の種子なり。さて高價高直なるもの、數萬金を貯て五兩十兩の金は貧家の十錢二十錢にも同じき人是を買ふ時は、金銀融通とも云ふべし。左には非ず、豪富の人是を買へば、貧家も競て之を買ひ、衣服器玩まで豪富の人是を服用すれば、困窮の家も之を服用し、果ては心得ありて是は不宜ことなりと知る人までも、取らねば物の數ならぬなど云ふ勢になりて、據所なく衣服を美にし、器玩を飾るに至る。今は瑇瑁の價は黃金よりも高し、服妖の類なり。奢るに手張て困窮す。困窮せざるも、手張れば人を惠み、人を賙こと不能して人情薄し。節用愛人の四字に全く背戾す。困窮の極は種々無量の惡心を生じて刑網に觸るゝに至る。其源を尋ぬれば奢侈よ

肅敬—つゝしみ敬ふ
韓琦—字は稚圭才文武をかね宋代の名相なり
范仲淹—字は希文兵事にて韓琦と並稱せらる
靖康建炎—年號なり
西夏契丹—夷狄の名

漢文帝、宋仁宗、明孝宗、三帝の陵前を過る人は、今に肅敬尊崇すと、清人の記載に見えたり。德義の人を感ずる千百歳の下如レ此。難レ有ことなり。宋人仁宗を詠ぜし詩に、桑麻不レ擾歳頻登。邊將無レ功吏不能。四十二年如二夢覺一。春風吹レ淚過二昭陵一と、當時の事實を說盡せり。

一韓琦、范仲淹は、趙元昊を打滅すの志あれども、仁宗は早々講和を許して兵を罷られたり。各別の高手段なり。安石用ひられて邊隙を啓き、遂に靖康の滅亡を馴致せり。是にて仁宗の明知を知るに足れり。されども靖康建炎にて和議を講ずるは、仁宗の西夏契丹を御するの理とは相違せり。

一奢侈も治世の道具なり。高直なる雛人形も、高價なる瑇瑁の櫛笄簪も、金銀なくては買ふこと不レ能。豪富の家の金銀を奢侈華麗のものにて引出して、貧賤の者の潤澤となれば、是皆金銀融通の道にて、是を制禁せらるゝは小器より起ると云ふ。世に此見解の者多し。是は山下廣内の說の餘唾にて、以の外の惡說なり。奢侈華麗なること天下の有用ならば、聖人何ぞ恭儉を苦口して人に示されんや。論語を見よ、夫子は恭儉とあり。夫子の雅言を見よ、與二其奢一寧儉とあり。儉則固　寧固とあり。周

惻怛之心—思ひやる心

霍光—字は子孟前漢の名臣なり

辟乎。至於夏人犯邊。禦之出境。契丹渝盟。增以歲幣。在位四十二年之間。吏治若媮惰。而任事蔑殘刻之人。刑法似縱弛。而決獄多平允之士。國未嘗無嬖倖。而不足以累治世之體。朝未嘗無小人。而不足以勝善類之氣。君臣上下惻怛之心。忠厚之政。有以培壅宋三百餘年之基。子孫(神宗)一矯其所爲。馴致於亂。傳曰。爲人君。止於仁。帝誠無愧焉。(宋史)

一開國創業の主は自ら各別のこと也。繼體守文の君は、文帝仁宗の恭儉を模範となすべし。此心にておらんには、天下は久安長治にして亂亡の期なからん。武帝は恭儉に反して、天下騷然として亂れたり。霍光の功にて、昭帝の時武帝の悪法を盡く變じ給ひ、宣帝又中興の良主故に漢室十二代を經たり。神宗王安石を用て仁宗の政事に反し仁宗を仇讎の如くにせり。安石常に文帝を誹謗す。此は文帝に託して仁宗を詈る也。新法の行はるゝ、天下騷然として亂る。元祐の皇太后司馬光、呂公著を用ひて、一旦は神宗の悪法を盡く變し給へ共、哲宗徽宗皆神宗の子故、紹聖元年より章惇用ひられて、安石の法安石の黨再び用ひられ、北宋の天下は亡びたり。是にて文宗仁宗恭儉の貴きを知るべし。

苑囿—庭園
露臺—屋根なき臺
玉淸舊地—昭應宮

一孝文本紀贊云。孝文皇帝卽位二十三年。宮室苑囿車器服御。無所增益。有不便弛以利民。嘗欲作露臺。召匠計之。直百金。上曰、百金中人十家之產也。吾奉先帝宮室。常恐羞之。何以臺爲。身衣弋綈。所幸愼夫人衣不曳地。帷帳無文繡。以示敦朴。爲天下先。治霸陵。皆瓦器。不得以金銀銅錫爲飾。因其山。不起墳。南越尉佗自立爲帝。召貴佗兄弟。以德懷之。佗遂稱臣。與匈奴結和親。後而背約入盜。令邊備守。不發兵深入。恐煩百姓。吳王詐病不朝。賜以几杖。群臣袁盎等。諫說雖切常假借納用焉。張武等受賂金錢。覺。更加賞賜。以媿其心。專務以德化民。是以海內殷富。興於禮義。斷獄數百。幾致刑措。烏呼仁哉。（漢書）

仁宗本紀贊云。仁宗恭儉仁恕。出於天性。一遇水旱。或密禱禁廷。或跣立殿下。有司請以玉淸舊地。爲御苑。帝曰。吾奉先帝苑囿。猶以爲廣。何以是爲。燕私常服澣濯。帷帟衾裯多用繒絁。宮中夜饑。思膳燒羊。戒勿宣索。恐膳夫自此戕賊物命。以備不時之須。大辟疑者。皆令上讞。歲常活千餘。吏部選人。一坐失入死罪。皆終身不遷。每諭輔臣曰。朕未嘗詈人以死況敢濫用

恕心—思ひやる心

桑弘羊—武帝に仕へ財政を司りて名ありし人

宇文融—玄宗に仕へ天下の農を奬勵して軍需に充つ

豐亨豫大の時—天下太平にして盛に樂むべき時

寒酸儒生—貧しき書生

紹聖—年號

にし、其用を異にすれども、其本は一心而已なり。是を仁と云ふ。是を吾道一以貫之と云。

一漢文帝宋仁宗など恭儉の世に、理財の臣あることを聞かず。武帝奢侈にして桑弘羊の如き者は出たり。玄宗奢侈にして王拱宇文融の如き者用ひらる。奢侈なるが故に財用乏し。此に於て理財の臣用ひらる。大抵天下の治は恭儉を本として仁義を主張し、務て天下の民の利欲の横流を防制すること也。然るを上財用に乏うして利欲を以て政となす時は、下は盡く賊心を生ず。此故に武帝の時は盜賊諸國に蜂起し、玄宗の時には祿山思明の亂にて兩京覆沒せり。畏るべきの甚しき也。

一宋の徽宗の時に、蔡京童貫王黼など用ひられて、今は豐亨豫大の時也。然るを儉素などを云は、寒酸儒生の陋見也とて一向に不用。事々侈大を事として丁謂王欽若が眞宗の欺きし故智を用ひたり。眞宗は太祖太宗の後を承て朝に君子多く國運も隆昌なる故に、何の害も無れども、徽宗の時は王安石執政の後、天下の士風盡く壞れ、哲宗の紹聖以後は朝廷盡く小人の捿家なり。然るを如此の横議を立て天下の國是となせし故、遂には二帝夷狄の虜となり、中國夷狄の捿家となれり。奢侈の畏るべき事如此。

天譴―天罰に同じ
澹然虛靈―澄みてくもりなきこと

一孟子に、治二於人一者。食レ人。治レ人者。食二於人一。天下之通義也と、是は君子と小人と相もちの義を云ふ。又通レ功易レ事。以レ羨補レ不レ足と云ひ、又陶以寡且不レ可二以爲一レ國。と云ふ。是は四民相養の理を云ふ。荀子には、相生相育と云ふことを數々言へり。飮食、衣服、宮室、器用、農工は是を作り、商賈は是を通じて人々以て天地の間に生活することを得たり。吳服屋などの大厦を成したるも、世間の人之を養ふなり。士は君の祿にて自ら養ふ樣なれども、薄祿の者は何か器什を作て妻子の養育を爲すときは、天下の御家人も世間の人是の養ふなり。一體世間の萬人にて、世間の萬人を養ふ、千古此道に易ること無し。是相生相育の道にて、仁者人也。二人爲レ仁。仁之大用如レ此ものなり。されば人たる者は、假にも相生育するの道を忘るべからず。相育の道を忘れて、人を欺て自ら己を立んと欲する者は虎狼の心にて、本心の仁を失ひたる者なり。天譴のがるべからず。

一人の本心は、澹然虛靈なり。親へ接すれば孝心を生じ、子へ接すれば慈心を生じ、兄へ接すれば悌心を生じ、弟へ接すれば友心を生じ、君へ接すれば忠心を生じ、民へ接すれば恕心を生ず。仁者人也、仁字从レ人从レ二、二人爲レ仁。接する處の人にして其名を異

流連―居つづける
報施―むくいほどこす
姦軌―わるだくみ

は第二爻日に樂處を去るに不終日とあるに對して、日たくるまで樂む人は後悔あるを云ふ、妙絶の御教なり。人は酒宴、遊觀、伎樂、玩好、何にても心に樂しと思ふ事は、其場を早く去るべし。うかうかと何までも流連すれば、遂には身の大害を生じて後に至りて悔ること多し。樂事樂處は早く去る者と心得れば、先づ一生人は無難なるべし。

一農工商三民の功は、眼前に現出して人々知る處なり。士の功は何か知れがたき樣なれども、天の果報ありて安坐して衣食するは如何なる事ぞと問ふに、天下に士なくして三民而已ならば、人欲放肆にして力の強き者は弱き者の財寶を奪取り、婦女を淫掠せんに、何人か此を制せんや。此惡心を肆にすること不能は、士と云者の捕へ誅すると云ふ理あるを以て、捕へざるも誅せざるも、畏服して天下は治れり。天子諸侯の國天下を有たるも、士の此功を本とせり。されば士は此功を以て安座して衣食をなすは天の報施なり。さて士の一字は寇賊姦軌を制する刑官の稱なるに、一統に士の稱となるは、此功を本とせるにや。今の世の士は、三民の邪欲を制する事能はざるのみか、先づ己より竊盜姦軌をなすは、本意を失ふの甚しき也。

酒の—原本のまゝ

敗家人—家を滅す人

一舜は隱惡而揚善。夫子の惡み給へるも、惡稱人之惡者。孟子も言人之不善。當若後患何。などの類、人の惡を掩ふの事を敎へ給へり。莊子好言人之惡謂之讒とありて、左傳に世亂則讒勝とあり。人を誹謗することを好むは末世の人情なり。何某なる者あり、和歌の達人にて、國學に詳に詩文をも能せり。一時の才人なり。されども好で人を非り人を罵る、一生の能事は人の惡を稱揚し人の不善を言ふのみを事とせり。遂に死して子も無く一代にて消失せたり。又一畫師あり、書をも能くし詩文を略解せり。畫家には奇特なる人なり、酒の嗜で醉て歌舞し、洒々落々可愛の人なり。世態にも老練して人情にも諳悉せり。されども是も好で人の惡を云ふ。恒言に、人の惡事を談ずれば、蒲燒を食ふ味ありと云ふ。彼れ一男子あり。英才にて詩文を能くす、年有らば名を成すべきに、惜かな、夭折せり。人を非誘する天譴免れ難し。可畏の至り也。

一戸障子を閉るに一寸殘し、草履木屐を蹈散らして脫ぎ置く人、皆敗家の人なり。

一周易、豫の六三に、盱豫悔。遲有悔。諸本盱に作て睢盱など解せり。姚信が本には、盱に作て旦日と云へり、可笑こと也。盱の字にて日たくるまで樂むと云事也。是

いふ意

郭子儀—唐の名臣なり

樽節—抑制すること

令なり。されど年中外より來る書牘の上包の紙を綴て小册として、日々の日記を付け給へり。王曾は、凝然不レ動。八九分の地位の人と云ふ。丁謂を打取て、仁宗の太平を開きたる大功の人なり。されども書簡の末の空紙を集て人に贈り物となしたり。特に儉素の德のみに非ず、無用の費を厭ひしなり。是にて大功業を立て大事を作す人は、粗心の人には非るを悟るべし。

一老人の傳へたるに、人は身を立てんと思ふには、苦しと思ふ事を務め成し、苦しと思ふ家に立入るべし。夫にて身は立つ者なり。面白しと思ふことを成し、面白しと思ふ家に立入れば、夫にて身は亡ぶと云へり。極めて奇特の妙言なり。

一恭儉の二字は、聖德の本なり。されども江戸には仕事師、きほひ等云ふ卑賤の者多くて、夫れが風習士君子にも移り、果ては學者までにも及びて、恭儉遜讓は拙き事の樣に思ひて、傲然として倨驕なるを、氣象高き人と悅び、儉約樽節は小量なる事の樣に思ひて、侈然として放肆奢華なるを氣象豪なる人と悅ぶ。聖人の惡み給へる、不遜爲レ勇の類、學者の常態となりたり。聖經を談じて論語の一句をも不レ辨、惡むべきの甚しきなり。

粗糲—粗食は玄米なり

謝玄—肥水の戰に秦の符堅を破りし人

履屐の間—細微の間と

解實に聖意を得たり。

一忍ㇾ事敵ニ災星一と云ふは司空圖の句なり。其味深長なり。人は無量の欲心を押こらへ押こらへ、妄意の怒を押こらふれば、夫にて如何なる災厄も消滅すべきことなり。

一汪信民、人常咬ニ得菜根一則百事可ㇾ做。と云しも味最深長なり。人は衣服居住よりも飲食の淡泊を第一に心得べし。粗糲を常とすれば、身に病なく、家に難なく、子孫に福あり。さて己の身、貧を厭はざれば節義も立べき也。

一裴晉公の雞猪魚蒜逢著則喫。生老病死時至則行。と云へるは達人の言なり。其胸中洒々落々一物を芥滯せざるを覺ゆ。

一一粒の米一寸の紙も大切にすべし。米粒寸紙を粗末にする人は、必ず天罰を蒙り身を亡ぼし家を滅ほす人なり。是吝嗇に非ず、小量に非ず、天物を暴殄せざるの大道なり。古より大功業を建る人は、麁豪にして浮氣粗心の人には非ず。謝玄は三萬の兵にて符堅の八十萬を打破り、晉の宗社を存せしが、郗超の其平日履屐の間にても不ㇾ失ニ其任一と云ふ處にて、其必定勝利を得べき事を知りたり。郭子儀は、安史の亂を戡定して、滅びたる唐の宗社を中興せし程の大功の臣にて、汾陽王に封ぜられ、二十四考の中書

冠履轉倒—冠と履とを轉倒して用ふる事

に此より要なるは無し。難痘を得たるの日、良薬も效なし、祈禳も無レ功。されば平日此を戒めて彼を救ふべし。さればとて、世に人を遇する事は不仁甚しくして、唯殺生を禁ずる者あり、是は冠履を轉倒するの人なり。

一忍の字、堪忍容忍と云へば美德にて、殘忍忮忍など云へば惡德なり。世其故を詳にせず。忍はこらへると云ふ字にて、善心の發するを押し怺ふれば惡となり。惡心の發するを押しこらふれば善となる。美衣腴食せんと云ふ慾起るは惡なり、此を押こらふる故善となる。卒暴に忿怒を發するは惡なり、此を押こらふる故に善となる。物命を害するは慘むべきことと、惻隱不レ忍の心發するは善なり、夫を押しこらへて殺す故惡となる。物を偸むは恥かしきことと羞惡不レ爲の心起るは善なり、夫を押こらへて偸む故惡となる。善心の發は不レ可レ忍、惡心之發は忍ばざる可らず。季氏陪臣を以て天子の禮を僭す。羞惡の心發せざるには非ず、夫を怺へて爲ときは、弑二父與一君も忍て爲すべきの人也。古人は魯君の季氏を容忍することと思へり。故に三國志晉書などにも皆人を容の事と用ひ來れり。集註范祖禹の說までも同樣なり。然らば季氏を評するに非ずして、魯の朝廷を議するなり。孔子謂二季氏一の義に切ならず、唯集註謝上蔡の

無津涯—津は渡し場涯は水際なり水のはてしなきをいふ

伊川—程頤を呼ぶ稱

先考—亡き父

行皆人事治道に切實にして千萬世の模範なり。唯二程の言は往々荒渺にして如レ無二津涯一、人事にも治道にも切實ならず。これ孔孟の言と同じきや不レ同や。伊川の易傳は治道人事に切實にして、經解ありてより以來、此書の如き大義理を說き出せるは無し。敬服すべきこと也。

聖賢の言は節レ用而愛レ人。省二刑罰一。薄二稅斂一と、其人事治道に切實なる事如レ此。

一吾家三世殺生を戒む。これ佛法を信ずるには非ず。禮記に、諸侯無レ故不レ殺レ羊。士無レ故不レ殺二犬豕一とあるにて、聖人の意も是を好み給はざることを悟るべし。吾子孫たるものは、永く是を守るべし。戒殺の文は、焦竑筆乘に載せたる一篇極て詳悉なり反覆玩味すべし。天子諸侯は多く人を養育せらるゝ德にて、禽獸などを殺すの罪も乘除すべけれ共、匹夫は人を養育することも少なく、天地の間に何の功德もなくて、唯物命を害して罪を作る事以の外の惡事なり。同氣相求。同類相應。物命を害するは殘忍の心なり。我此心あれば、天必ず是に應ずるに殘忍を以てす。故に殺生を好む家は、天必ず其子を殺して此に報復し給ふ。天道好て還すの其一也。吾先考東岩先生の殺生を禁じ給へる宿功にや、吾兄弟に痘難なし。又吾兄弟の子皆痘難なし。疱瘡の治療

大雅——詩經の篇名
彝—常なり
懿德—美しき德

けば、千人は千人、萬人は萬人、曹操仲達の惡を惡み、玄德孔明の善を善す。これ大雅に、民之秉彝。好是懿德と云ひ、周易に、我有好爵。吾與爾靡之。と云ひ、孟子に、天爵良貴。人心之所同然と云へる者、皆是なり。これ道の大本なり。

一有德の君子は、擧天下是を賞嘆感服し、有罪の惡人は、擧天下是を指斥非謗す。一人二人の事には私あり。擧天下の心一同に如此は、天理の公然なり。先づ人心と云ふものを知るべし。これ己のなせる者に非ず、又吾親のなせるものにもあらず、自然の生にて天造の物卽ち天なり。されば天下の人の善と服するは、天の善と宣ふ也。天下の人の惡と斥するは、天の惡と宣ふなり。是皐陶謨の天命、天討、天聰明、天明畏、泰誓の天視天聽とは此事なり。是亦此道の大本なり。

一人智力を奮て、天下の事皆智力にて爲すべしと思へり。可笑可笑。臨終の日に至て、今一日生んと思ふとも、天の許さゞれば半時も生き延ること不能。見つべし、吾此一身さへ自由なるべき者に非ずして、天の所有也。況や外物に於てをや。天に任せ命に任せずんば有べからず。

一孔孟の言は人事に切實なり、治道に切實なり。試に小學の外篇を讀むに、諸名賢の言

召誥—書經の篇名

妍媸—妍は美なり媸は醜なり

一神は正直の頭にやどる

心さへ眞の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん

と云ふなど、皆能く道に叶へり。左傳に、神聰明正直而一也とあり。小雅に、正直是與。神之聽レ之。式レ穀與レ爾。とあり。人心の正直なる處は、鬼神と一體なり、己の鬼神と天地の鬼神と相應和するの理あり。これ福祿を享る處なり。人心私欲膠々擾擾たる時は、遠く鬼神と隔たる。祈れども福なし。人は己を正し心を明にせば、祈らずして鬼神の福を得べし。召誥に云ふ、王其德之用。祈二天之永命一。夫子丘之禱久矣。とのたまひしは此事なり。されど愚不肖の人も、神佛を祈る時は、先づ身も敬し心も淸らかなれば、大美事と成して、非謗すべからず。

一人心私欲の揜ひなき時は、善レ善惡レ惡の心、昭々明々として、明鏡の妍媸を分つが如し。これ四端の是非之心。知之端也。と云へる者なり。さて私欲に揜はるれば、是非、善惡、混淆、錯謬、至らざる處なし。今日の事には私心雜りて、正人君子も己に害あれば毀り、佞邪の小人も、己に利あれば譽む。是非毀譽信ずるに足らず。古の人には譽ても利なく、毀ても害なし。私欲都て盡く、此時本心昭明なり。されば三國志を說

寥廓—空虚と同じ、ほからかにして大なること

一後世の人の心にては、天は空虚寥廓にして、無知無爲にして人事と相渉ることなく、人は自ら人、天は自ら天なりと。是より機智競ひ起り、權術日に甚しく、天下の萬事皆人の智力にて致すべく、治を圖るの君も徒に法制禁令を詳にして人事の防となし、之を己の德に本づけ、之を天の意に求ることを不知、哀むべきの甚しき也。後世の人には曹操司馬懿等の奸智深き人は無し。されども數世を經ざるに、劉放、孫資が燕王宇を拒て仲達を都へ召きし一事にて、魏の天下は亡たり。夕陽亭にて荀勗が賈充へ女を太子の妃にすべきと敎へたる一言にて、晉の天下は亡びたり。是にても悟るべし。智力窮する所ありて、天の禍を下す、智術防慮の外に出て如何ともしがたき事を、廸吉逆凶。福善禍淫。維天之命。於穆不已。盡未來際に渉て、此道此命絕え滅するの理なき時は、人は智力を棄て唯德を是修めて天意に負かざるより外になすべきの理なき也。

人事を盡して天命を待と云へば、智力も棄つべきには非ざれども、智力を宗とする者は、道德の尊きを知らずして、之を務めず。走て機智權謀に趣く。戒めずんば有べからず。

止むことなし。然るに足利の末世より信長秀吉の二代を經て、西國の人は東國に移り東國の士は西國へ趣き、其地士も何と無く、東西に漂泊して今は諸國の城下に住居する者は、五百坪か三百坪の屋敷に住し、江戸にある時は、五間か三間の長屋に居住し、武備も乏しく郎黨も少なく、威も無く勢もなく、町人と同樣にて百姓には遙に劣れり。これ武士の根を斷て鉢植となしたるなり。故に昔の地植生茂大木に對すれば、鉢植武士とも名付くべし。鐵砲渡來よりして此利器にて武勇の角を折き、鉢植にて武士の勢を碎き給へる故に、如レ此太平の世界とは成たるなり。今にも昔に復して武士を土著せしめば、又々足利時代の爭亂は眼前に出で來るべし。然るを近世土著を悅ぶ儒生あり。此は足利時代の事をも辨ぜず、又御當代太平の基をも不レ辨して只武士の武備乏しきを憂て此說を爲せり。實は其文盲笑ふべきの甚しき事なり。

一學問の功は天道を知るの一事にありて、古今の治亂成敗を詳にすれば、天道自ら明白なり。世の學者は天道を不レ知、大概其見解、如所レ謂天道是耶非耶など云ふの上に出ること不レ能。夫子も君子畏二天命一小人不レ知二天命一而不レ畏。とあれば、今の學者は小人の學なり。

肆妄に――何も考へず妄りに

家の子郎黨――家来眷屬

にて命は變動すべし、一定するには非ず。例へば百兩の金、費し用ひて終には無なるべきも、肆妄に用る時は、暫時に盡き、惜で緩く用ふる時は盡る事遲し。國家の運命は、又人壽よりは延し好き理あり。政治の善惡、君德の吉凶にて長くも短くも成べきものなり。命を一定不レ移ものと心得る時は、萬事天に委て人事を盡さゞるに至る、甚だ敎に害ある言なり。又道にも妨ある言なり。實理に似て實理には非ざるなり。

一諸國の武士、東鑑に出たる國々の御家人幾十幾人、國士幾十幾人と是あるも、元龜天正の比まで國々に城館を持ち、在々に在名を稱して住居せり。近比の儒者の云へる土著の士なり。千石二千石を領するもの、在住して此ある時は、武備も具り其領の百姓を家の子郎黨にする故に、兵卒も乏からず、千石二千石も領する者、後の山に建こもる時は、誠に一國の動亂なり。守護國主は替れども此地士は替らず、實に地より生出て繁茂せる大木なり。北條時代北條の一門、足利時代足利の一門の外は、守護國主も多くは肥後の菊地、薩摩の島津、豐後の大友、肥前の小貳、周防の大內、伊豫の河野の類にて、數百年の領主なり。甲斐の武田、信濃の小笠原、常陸の佐竹小田などにても知るべし。國主は將軍の下知に背き、地士は國主の命を用ひず、天下の爭亂

黎烝—庶民

の法を修せしなど是なり。覺束なき樣なれども、極めて有るべき理なり。子孫なき者の富貴なると同じ事なり。此等の富貴は俗眼より是を見ば福慶と思ふべけれど、君子は此を觀て天下第一の不幸とす。唯慈仁の心を本として人を愛育し、天の冥鑒に負かずして子孫永久を願ふこと、上一人よりして下黎烝に至るまで此道によらずんば有るべからず。

一大抵世人を見るに、薫然として慈愛の心ある者は、必ず子孫あり。殘忍刻薄の者は、必ず子孫なし。是また知らずんば有べからず。

一命定ニ於有生之初ニの說は、尤の樣なれども甚だ敎に害あり。百歲の壽相ある者は、百歲以前には他人之を擊ても刀にて傷くることも能はず。自ら屠れども刀腹に刺すこと不ㇾ能ならんには、定るとも云べし。斫れば斫殺すべく、衝けば衝殺すべき時は、百歲の命も縮むべし。縮む理あれば延す理も無ては不ㇾ協ことなり。尤も縮るは易く延すは難し。難易の違は有れども無とは云べからず。人惡を積めば天其鑒を奪ふ故に、惡業增長して公には刑殺に遇ひ、私には災厄病疹を得て命を縮む。善を積めば天其衷を誘むる故に、明智日に開て災患を退け康寧を得、壽も延ぶべし。されば人の所爲

房玄齡―字は喬孫、唐太宗の功臣なり

斬焉―さつぱりときりたやす形容

程には子孫長久ならず。隋の文帝は周の外戚にて天下を奪うて功徳なし。陳を滅して天下混一にせしのみなり。故に房玄齡は主上無ニ功徳一有ニ天下一と云て其天下の永久ならざることを兼て知たり。天下を有つの長と不長とは天より其創業の人の功と徳とに報ずるの厚薄なり。

一人道は子孫相續、血脈連綿する處のみ大切のことなり。近世は養子と云ふこと盛になりて、此道自ら明ならず。善惡吉凶の報も人一代にては分難し。故に夫子も積善之家。必有ニ餘慶一積不善之家。必有ニ餘殃一と、家と云て人とのたまはず。此理自ら明白なり。祖先と子孫とは、一株の樹なり。幾枝幾叉にわかれても、松は自ら松也。梅は自ら梅なり。故に祖先の善惡、子孫の吉凶を成せり。さて浮沈あり榮衰ありとも、血脈相續する内は、生氣未ㇾ息の樹なり。世に斬焉として子孫なき者、多く富み榮るものなり。此は祖先以來の生氣此にて盡果る故、一旦に榮華を發す。人道の不幸なる此上は無きこと也。是を吾家にては增上寺方丈の富貴と云ふ。いかほど富貴なりとも貧民の父子相續には遙に劣れり。世に諸天を祈て富貴を求る者は、子孫の富貴を吾一代に引上る故、子孫は必ず斷滅すと云ふ、源平盛衰記に載せたる、清盛の吒祇尼天

妖孽—わざはひ
彗孛—彗星に同じ孛は星なり
忠仁公—良房
昭宣公—基經
御堂殿—道長

邦にては開闢以來聞かざる所なり。

一大內義隆の佞臣は、相良武任、上杉憲政の佞臣は、菅野大膳、上原兵庫、今川氏眞の佞臣は、三浦右衞門、武田勝賴の佞臣は、長坂釣閑、跡部大炊。天其國を亡さんとする時は、先づ此一種の人物を生じて、賢臣をして其口を閉しめ、其君をして其愚妄を肆にせしめて然後亡レ之。されば此佞幸の臣は、其國の妖孽、彗孛よりも大なり。恐るべきの甚しき者也。人君たる者、人を知らずんは有べからず。

一大織冠鎌足公は、春日大明神の御子孫には有れども、蘇我蝦夷入鹿を誅せるの功にて、子孫四百年天下の權を秉れり。忠仁公昭宣公よりは、略天下を領するの勢にて御堂殿に至て極れり。我東照神君は、保元平治より天下兵亂の世界となりて、殊に應仁の亂後よりは、虎狼の世界となりしを、四百餘年の亂を平げ給ひて、如レ此太平無事、鼓腹凱樂の世界と成し給へり。その功德の高きこと、豈鎌足の比並する所ならんや。

一數百年の創業の君は、漢祖光武、唐の祖宗、宋の祖宗、明の太祖、皆一時の亂を平け天下に大功あり。故に其子孫數百年天下を有ち給へり。曹操劉裕などは、征伐の大功

可諄—房能の兄
長治—富山城主
野干—狐類
彝倫—人の践むべき道

民部大輔房能（越後守護）を越中雨溝にて弑す。關東管領上杉顯定入道可諄越後に往て長尾の黨を追討す。其翌年六月、長尾爲景高梨攝津、長森原にて顯定と戰て顯定を弑す。天文七年四月十一日、越中の椎名肥前守泰種（松倉金山城主）神保安藝守長治と千壇野の合戰に打負て、爲景誅に伏す。應仁の亂後より、元龜天正に至りて、君父を弑逆する者、國として是なきは無し。予曾て亂賊傳を作て此を詳記す。今斯に擧る處は、其最も倬然として人々耳目に存する物なり。此時足利の將軍は京都の在住も叶はずして、江州の朽木谷に蟄居せらるゝ勢なれば、誰ありて弑逆の人を征討する者も無れども　昭然たる皇天、下に臨で赫たること有るが故に、全姜實休浦上長尾の類、數年を經ずして皆天誅に罹りたり。愉快なること也。永正十五年七月十一日、三浦新井の城、北條早雲に攻滅さるゝ時、城主義同入道道寸兼て落ば落延べけれども、明應三年九月、養父時高を弑せし天罰にて天命此に盡果たりとて、息荒次郎義意と共に自害せり。惡人なれども天命を知りしは優しきこと也。されども如此の人情なれば、虎狼野干の世界にて、人道は盡果たるに、東照神君の御神德にて、天地再び淸明にして、彝倫再び次叙せること、その御功德の大なる、我

義隆―従二位兵部卿中納言
村宗―美作守則宗の子
政村―政則の養子
政祐―晴政のこと
義賢―之相とも之康とも云
細川持隆―阿波勝瑞城主
道室―輝虎の父

守晴賢入道全薑(初名隆房)は、天文二十年九月朔日、其君大内介義隆を長門の大寧寺にて弑して、弘治元年十月朔日、毛利元就と嚴島合戰に打負て誅に伏せり。浦上掃部介村宗、永正十五年、七月九日、其君赤松政村の妾胡蝶と云へる女を奪て、居城備前の三石に據て叛逆し、大永二年九月十二日の夜、政村入道常印を播磨の室の津にて弑せり。享祿四年六月四日、細川高國入道常桓が大物崩れの時、村宗は高國に與黨し、政村の子政祐は、細川澄元を助て高國を破り、村宗誅に伏せり。三好豐前守義賢入道物外軒實休は、長慶の弟なり。天文二十一年八月十九日、其君細川持隆を弑して其妾小少將(岡本美作女、後大形殿と云)を奪ひ、其が腹に嫡子彦次郎長治を生めり。此時持隆の妻をも奪ふべけれども、小早川隆景の女故、毛利に攻められん事を畏て安藝へ返せり。永祿五年三月五日、畠山高政と和泉の久米田合戰に打負て實休誅に伏せり。其前夜

　草枯す霜は旭に早解けて因果はめぐる小車の跡

と云ふ歌を夢みたりと云ふ。天正五年三月二十八日、持隆の子掃部直之(長治と同腹也)長治を別宮に攻めて是を誅せり。長尾六郎爲景入道道室は、永正六年春其君上杉

小雅—詩經の篇の名

年五月十六日なり。五月は可畏の月也。近時天明七年丁未の歳、打こはしと云へる騒擾も五月二十一日の夜なり。

一丙午丁未の厄歳たることは、洪邁の容齋隨筆に、漢高祖より南宋の淳熙丁未迄の事實を載せて、摠而言之。大抵丁未之災。又慘於丙午。昭々天象見於運行。非人力之所能爲也とあり。其後三衢柴望丙丁龜鑑と云書を著し、檇李錢士昌又其續編を著し、周末より元末まで、兩年災厄の事實を詳載せり。合せて六巻なり。近時王士禛が池北偶談にも、一條丙午丁未の事を載せたり。清朝にも此災厄を免れず。明を亡ほせし、流賊の張本、李自成張獻忠共に、萬暦三十四年丙午の生れなり。明の滅亡は崇禎十七年三月十八日十九日は、歳は甲申なれども日は丙午丁未の兩日なり。北宋の滅亡は丙午丁未の兩年なり。周煇が清波雜志には、歐陽永叔、邵康節共に靖康丙午の滅亡を先知せしにや、此後の丙丁には、我子孫蜀に入るべし、呉に入るべし、と記し置けりと有り。これ學問の效なり。

一史記に、申包胥曰。人衆則勝天。天定亦能勝人。と云ふは、これ小雅の詩に云ふ所の民今方殆。視天夢々。既克有定。靡人弗勝。と云ふに原づけり。陶尾張

日州—日向守光秀

一孔子曰、祭必享ㇾ福。此理最妙なり。祖先は根本なり、子孫は枝葉なり。祖先を祭るは根本を培養するに同じ、枝葉繁茂せざることを得ず。風水の術すら效あるときは、祭祀の效、必然の理なり。

一鎌倉北條の滅亡せしは、正慶二年五月二十二日なり。兩六波羅は五月八日なり。三好松永將軍義輝を弑して足利氏の滅亡せしは、永祿八年五月十九日なり。故に義輝の歌に

五月雨か露か涙か杜鵑我が名を揚よ雲のうへまで

義昭將軍の後度兵を擧て信長を討んとして、京都を去て宇治の槇島に入り、遂に滅亡に及びしも、天正元年五月なり。信長の滅亡は、天正十年六月二日なれども、光秀の逆謀は五月に萠せり。故に日州が五月二十八日の夜、愛宕山の連歌の句には、

時は今天が下知る五月かな

と、五月と云ふべし。(六月二日も、五月の節ならん)豐臣秀賴の滅亡は元和元年五月八日なり。亡國は必ず五月なり。奇と云ふべし。然し是には自然の理あり、解すや否。賴政卿の生害も五月二十六日なり、正成の生害も五月二十五日なり、應仁の兵亂も元

疾病にして—病氣危篤にして

轅を北にして越に適く—越は南國

忍を戒むべし、恭遜を主張して闘爭を戒むべし。國と家と此四つを以て治むべし。

一今の世の人情を察するに、上の眠り目を窺て、竊盗を爲し、博奕を爲し、淫佚を爲し、奢侈を爲さんと云ふ心のみなり。綱紀法度少しくも弛ぶべからず。四民の惡心湧き上る孑孑蟲に能似たり。棒を以て打てば底に沈み、暫時あれば又湧き上る。時々嚴刑の加へらるゝは是棒なり。棒を用ふるは不仁の樣なれども、四民をして其惡心を肆にせしめざるは、其天年を全うせしむる無量の仁なり。されども只今の勢にては、天下の惡民を制伏せしむる事甚だ難し。國家の善政に德化を加へ給はゞ、天下惡民の惡心も消滅すべし。

一元の太宗疾病にして脈已に絕たり。衆醫も術盡て爲すべき樣なし。皇后の深く嗟き給うて、耶律楚材に問給ふ故、外には爲すべき術なし、唯非常の大赦を行はるゝのみと答へたり。早速に赦令を出すべしと皇后の命ぜらるゝに從つて、楚材是を奉行す。赦令出ると同時に太宗の脈復したり。慈仁の德天地神人を感動する、其速なること如此。今の人其家の富貴、其子孫の繁昌を願ひて姦智詐力を以て之を求るは、轅を北にして越に適くなり。愈行いて愈遠し。慈悲心上に復て、陰德陰功の上に求むべし。

凍餒——こゞえうゑるなり

なる人は、奢侈繁華を目出度事の樣に思ふは誠に天地の理に暗きが故なり。今にも上より奢侈を誘ひ綱紀を少しく弛べ給はゞ、忽に世は繁華に成るべし。これ以の外の惡事にて亂亡の基なり。近く是を知らんには、今人家に金を借りて多く賓客を招き享宴し、妓女を集て歌舞を奏せば、其家はにぎやかにして、繁榮なるの形象を爲せり。されども是にて婦女の淫佚も生ずべし、醉客の喧嘩口論も起るべし。後は借金を債られて迷惑にも及ぶべし。一時繁華の形をなせるは、終年困厄の基をなさずや。世間の富貴繁華は全く是と同じ物なり。然はあれども三都などは繁華の餘潤にて活計を爲すもの多ければ、餘りに寂寥に過て、小民をして凍餒に及ばしめんも、仁人君子の所レ不レ忍なれば、本を不レ失して又別に處置も有るべき事ならん。

一今日にて天下第一の用たる者は金銀なり。されども金銀の事のみ主張せば、士氣鄙劣になりて利欲に而已走り、仁義の道は塗炭に陥らん。人に仁義の心なければ、唯利欲の心のみなり。人心利欲のみ熾盛なれば、父と君とを弑することも憚からず、是亂世の基を啓く。唯儉約を主張して困窮せざる樣に計れば、仁義の道をも失はざるべし。

一儉約を主張して奢侈を戒むべし、精勤を主張して怠惰を戒むべし、慈悲を主張して殘

夫安樂先生と號す康節は其謚號なり宋代の學者にして其學派を百源派といふ

怨懟—共にうらむこと

悖亂—もとりみだる

下を亂るべきを悟りたるは先識の妙なり。さて其時に天下將レ治時は地氣自レ北而南。天下將レ亂時は。地氣自レ南而北。と云ふことを言へり。少時は何の事とも心得ざりしが近き比其說を辨知せり。春夏の陽氣にて萬物は生長すれども、陽氣は亂れがちの者なり。春は地氣發生して陰多く雨多し。幾程も無て梅雨の候となり、夏の炎暑となれば、迅雷暴雨畏るべきの形象を成せり。これ陽氣は亂の象也。秋冬陰氣になれば、地氣收て雲雨少なく、晴日多くして天氣和平なり。是陰氣は治の象なり。人も少壯陽氣の時は血氣脩らずして酒色に荒み、榮利に惑ひ、或は忿怒の念甚しく、或は怨恨の情深く、人と爭ひ人と鬪ふ、是皆陽氣の成す處なり。衰老陰氣になれば、血氣の浮動やゝ靜まりて、酒色榮利の念も忿怒怨懟の情も薄くなりて、心中自ら和平なり。是皆陰氣のなす處なり。酒を被れば心氣悖亂す。此一つにても陽氣の亂を知るに足れり。東南の風起れば天氣變動し、西北の風にては天氣牢く晴る。陽氣の亂、陰氣の治を知るに足れり。然れば地氣の自レ北而南するは、天下治平の象なり。自レ南而北するは天下亂亡の象なり。邵氏の言確然として信ずべきこと也。さて又天下國家共に奢侈にて繁榮に見ゆるは、亂亡の徵なり。儉素にて鎭靜なるは治興の象なり。世の愚

時行—北條次郎

沛然—勢よき形容

宇—のき

邵康節—名は雍字は堯

天下群起して之に從ふの勢あり。誰にても宮方に弓を引く人あらんにはと思ふ時故に、時行などにさへ與黨多し、況や尊氏一代の英物にして名家の子なり。天下之に從ふは時の勢なり。義貞正成智勇あれども沛然の水を防ぐに同じ。

一信長は猜忌頼朝より勝れり。其殘暴は頼朝の所レ不レ爲なり。佛法を破るは英明に似たれども、其實は殘忍の心の所レ爲也。一向の徒を救給ひて信長を殺したまへば、天道の所レ不レ與昭明なり。猜忍の二字にて遂には其身を亡し給ふ。聰明秀出の處は有れども、局量の狹小なるは遙に諸將に劣れり。

一栂尾の明慧の泰時に教へし、天下を亂るものは、欲の一字にて、此欲種々の名相をかへて天下を亂ると云ひたるは、誠に要言不レ煩と云ふべし。色荒。禽荒。甘レ酒。嗜レ音。峻レ宇。雕レ墻。及び神仙祈禱。好レ兵。黷レ武の類、孰れか欲の名相を易へたる者に非ざるや。外面には名相の異あれども、只是一心の欲の千變萬化の色相をなすもの也。一身を亡し一家を敗るも、唯此一より起て無量の害をなすもの也。明慧が言は、明慧傳と、太平記第三十八巻にあり、知らずんば有べからず。

一邵康節の天津橋上にて杜鵑の聲を聞て、天子南人の王安石呂惠卿等を用ひられて、天

被官―下につく官

朱全忠―唐の國を奪ひ梁の太祖皇帝となりし人

各別の功も無れど、義貞正成の上に立ちたる事、數代氏族の勢にて如レ此。故に其天下を奪へるも甚易し。太平記を讀む人、此始末をば知らざるなり。

尊氏の家は、時々は四位にて左馬頭に進めり。

一尊氏は仁義の心なく、兵畧も拙なく、武勇も薄し。然し反復變化無窮の惡智ありて武勇兵畧に長ぜる人も勝こと能はず。他人は守る處有が故に窮する所あり。尊氏は心に仁義なく守る處なし、故に反復轉變して窮する所なし。若し人の臣たらば無類の惡臣ならん。人の上に立つ故に天下を有つ事を得たり。己が反覆不實なる故に、諸臣の反覆不實に怨み怒る心毫もこれ無し。其量寬弘ならずと云ふべからず。直義師直の惡事を爲は、尊氏の意を受て其命を受るには非ず、尊氏は惡名を避て其利は己に收む。小島のすさびに見えたる、天子を崇敬するなどの事は、朱全忠の涕を垂て昭宗の馬を牽けるに同じけれど、何となく誠しやかにて、姦雄とも見え難し。兄弟とも女色に耽らず。只此一事も古今武將の及ばざる所なり。何か不凡の人にて名狀は爲がたけれども、善人には非ざるなり。

一後醍醐反正の時、處置を失ひ給ふ故、天下の武士失職の恨あり。一人首唱の人あれば、

後には兵政の兩權を握りて世襲し諸侯王の如くなる之を藩鎭といひ朝廷制する能はず

春日大明神―藤原氏の氏神なり

猜忍―疑深く殘忍なるをいふ

其臣―日置九郎

上西入道―義重のこと

八幡殿―八幡太郎義家

一後三條院は英主にて、藤氏の權を奪ひ給へり。賴通は宇治に引籠り、敎通は春日大明神の神德も今日盡たりとて退出せらる。白河鳥羽二法皇、院中にて天下の政を聞給うて、藤氏の權益々輕くなれり。されども是より武士を御寵愛なされしより、武家天下の權を執に至れり。彼を奪て此に與へ、其實は却て皇室の大害を生ぜらる。藤原の信西と、淸盛父子義朝父子、三家會合して王綱をば微塵と成たるなり。

一賴朝は猜忍の人なり。同胞骨肉を害し己が枝葉を絕て、北條氏天下を奪ふの基を開く、智と云ふべけんや。平家亡びざるに兄義平の妻を烝せんとし、其意に從はずとて、其父新田義重勘氣を蒙れり、不義甚し。されども其臣の美服せるを怒て、小刀を以て其袖口を切裂れたるは、開國創業の人の儉素の道を天性に得給へり。

一足利の義兼は賴朝と連壻にて、北條の親み深し。上西入道は賴朝と不快なる故、兄の家なれども勢なし。足利は和田合戰にも、北條に黨して戰功あり。源家亡びて後は只足利のみ八幡殿の後胤なりとて、北條家にても尊敬尤甚し。當時迄は氏族を重ぜし故、北條は源氏の郞黨被官なりとて天下の權を執れども、將軍を奉じて其執權たるのみ。其勢ゆゑに天下の人も足利氏を各別に重き事に思ひなせり。後醍醐の御時、尊氏

けるー種の道德說、專ら陰德を積むべき事を敎ふ
金帛—金銀布帛
儉利—へつらひ利する
聚歛—稅を多く取り立てること
藩鎭—唐代に要地に節度使を置き一地方を鎭せしめしに

の學なり、心得べき事也。橘の千蔭が父の歌なりとて敎へし人あり、其歌に云ふ、

　行末の榮え願はゞ人の爲善らん事の數を積みてよ

一漢の文帝景帝二代の儉素にて積蓄へし財寶は、武帝驕奢の資となれり。宋の太祖太宗二代の儉素にて積蓄へし金帛は。眞宗佚侈の資となれり。金錢の貯へ子孫奢侈の用となることは、天子も匹夫も同じ事なり。されども武帝は大福分ある英主にて、眞宗は仁柔なる主なり。二主共に國運隆昌の時に出給へる故、無事にて終れり。末世に出給はば亡國疑なし。扨唐の德宗は至て鄙劣なる天子にて、初は盧杞の姦邪を悅び、後は裴延齡の儉利を悅び、獨の陸宣公贄ありても用を終へず、兩度まで都を落ち給へり。利欲の心深くして兩稅間架などとて聚歛し給ふ、以ての外の惡王なり。然し其貯へられたる財帛を軍用として、憲宗天下の藩鎭を十一二年の間に征伐して、玄宗以來瓜裂せる天下を、一旦は一統維新の形に成たまへり、英主と云べし。是金銀を蓄へ積んで、後世天下の大功業の用となれることは、唯古今に此一事のみなり。されども德宗の不淨財にて此功業を定め給へる故にや、其身は宦官に害せられ、僅に一統の形は二三年にて、穆宗の長慶元年よりは、又舊に依て藩鎭の世界とはなりたり。

斬然として—すつぱりとして

天の冥鑒—天意

陰隲の學—道教に基づ

一士君子も困窮すれば、惡念を生じ惡事を爲して、身を害し家を亡すに至る。儉素にして困窮せざる樣に心がくること、立身の道なり。金銀を多く蓄ふる事を願ふは、町人百姓は各別なり。士君子にしては以の外の僻事なり。世に長者子なしと云事を云傳ふ、至妙の言也。今の世の大富商巨賈を見るに、子孫相續せる者なし。皆養子にて嗣げり。一人の醫師の以の外富る人あり、是も亦子無して他人を養うて嗣となす。人生の福は、子孫相續するの一事に在て、斬然として後なきは、人生の無福凶惡此上はなきなり。浮沈は時の運にて、百代連綿たるの内には困厄も有るべし、榮昌も有べし、是れ人生の常理なり。縱令金銀山積せりとも、先祖百代の血脈我身にて斷滅する者は天の戮民なり。これを以て金銀を多く積蓄ることは、天の冥鑒に背くこと昭々明白なり。唯世の厚祿の家小富の人、子孫相繼いて其福祿を失はざる者、是れ天地間大福の人なり。

一子孫に福なければ、如何なる財寶を貽せりとも守り得ず、子孫に福あらば、財寶を傳へずとも榮昌すべし。されば子孫へは積德積善を貽すより外の術なし。積德積善も人を憐み人を救ひ人の爲をなすより外の術なし。天地の間に功ある者は、袁了凡が陰隲

にして諸德の本なり。唯色欲利欲の熾盛なる處よりして、身を害し家を亡す。忿怒の暴發する處にして、身を害し家を亡す。人此二つを戒愼すれば、一生安穩なるべし。さて佛法には、此二を三として、貪嗔痴の三毒と名付たり。貪は欲なり、嗔は怒なり。只痴の一を加へたる事最妙なり。欲怒は愚痴より生ずるなり。人有レ不レ及。可ニ以レ情恕一。非意相犯。可ニ以レ理遣一と衞玠の云へる味にて、人の行とゞかざるは、彼が愚昧故とさとる時は、怒うすし。夫を妄に暴怒するは、己が愚痴より生ず。色欲も己が精血を損じ骨髓を乾かし、性命を促がす。法華に云へる犛牛の尾を愛するに同じと云ふことをさとる時は、色欲も薄し。夫を妄に肆にするは、己が愚痴より生ず。利欲も昇進には落るの理あり。積蓄には散の理あることを知り、死する日に金銀財寶を抱いて、閻羅王の前にも出難し。子孫に貽せば子孫必ず能く守らず、却て金銀の勢を以て驕奢淫泆を肆行して、身を害し家を亡す。子孫不肖の種子を蒔くと云ふ事を曉る時は、利欲うすし。夫を妄に慳貪にして、目を瞑するまで饜足ることを知らざるは、己が愚痴より生ず。されば痴の一字は欲怒の生ずる基なり。佛老も有用の處は皆經傳より出たる也。

む故富貴の家にては其室をうかゞひて禍を下さんとすといふ意

崇禎—年號

收斂—とり入

今時の儒生輩には遠く優れることなり。さて其效にて百五十年を經て今日まで火災の御憂なし。京都の大佛殿の、天火にて燒失せるを見ても、感嘆に勝へざるなり。（都て屋の棟　嵩高なるは惡き事なり）

一儉約は治世の大道なれども、吝嗇と混ずべからず。吝嗇は亡國の基なり。明の亡る時崇禎の天子より、宗室の諸侯王一人として吝嗇ならざる人なし。李自成張獻忠の攻圍む時、一日とも防こと能ずして皆害に遭へり。洛陽にありし福王（萬曆子　鄭貴妃所ㇾ生）など最其魁なり。唯汴京に在りし周王は、代々學問の家にて吝嗇にも非ざる故、李自成の三度攻るを防ぎたまへり。（守汴日志に詳なり）其次は蜀に在し瑞王のみ也。皆吝嗇にて亡びし事、綏寇紀略に詳に記載す。されども兵亂起つて後吝嗇なるは必亡の理なり。治世には美事には非ざれども、吝嗇は汰侈には優れる也。

一論語に、少時の戒は色、壯の戒は鬪、老の戒は利得なり。色は春　華光麗の象なり、鬪は夏の暴雨迅雷の象なり、利得は秋冬收斂の象なり。一年の春夏秋冬も、一生の春夏秋冬も、同じ事にて、人の小天地たることを知るべし。周易損大象には、此三を二として君子以懲ㇾ忿窒ㇾ欲とあり、色と利得は欲なり。鬪は怒なり。人の一心は靈妙

龍顔—高祖

李沆—字は太初宋太宗眞宗に仕て後相となり謹直名望あり

高明之家云々—鬼神は満てるを悪

昌が桀紂に比せしをも低レ頭て納られたるは、寛弘の量は言ふにも及ばず、是却て柔道を得給へるなり。一體の行狀を論ぜば、光武は高祖には遥に優り給へる様なれども、此一條を以ても、子孫に文帝光武ほどの人を生し給へる人なれば、龍顔の不凡を知るに足れり。

一後世の人主は、漢の文帝光武、唐の太宗、北魏の孝文、宋の仁宗、僅に數君には過ざる也。漢の宣帝、金の世宗、明の孝宗も英主と云べし。

一易理を知る人は天理を知る人なり。古の人は家を作るにも、意に満ざる處を一所のこし置と云ふ。此易理の至妙なり。萬事此理を知るべし。李沆が天地缺欠の世界也とて、藥欄の損ぜしを修補せざるも、實は此理を知れり。明暦の火災後大城を再築せられたるに、大變の後幾程なく造營出來せるは、奇特の事なり。物は十分ならざるを好とすと云ふ御評議にや、天守をば再興是なし。これ一には易理なり。二つには餘り高大なる家は必ず火災ありと云ふ。漢の建章宮又宋の玉清昭應宮にても知るべし。易の天際翔也と云ひ、楊雄の高明之家。鬼瞰二其室一と云しも不祥を召く事を云ふ。此御時代の人は、書を讀ことは多からざれども、易理に暗合する事は感服すべきこと也。

愼房室—情慾を謹しむこと
樽節—おさへて制限すること
漢文—前漢の名君なり
光武—後漢創業の皇帝
高祖—前漢創業の皇帝

梗相同じ。

一約の一字を心得べし。愼言語も約なり、節飲食も約なり、遠嗜欲、愼房室も約なり、恭にして不倨傲も約なり、儉にして不汰侈も約なり、樽節も約なり、降挹退託も約なり、侈然として放肆なるべき心を抑へ制することこれ約なり。以約失之者鮮矣。とは(論語は言語を以ていへり)此事なり。大雅には抑々とあり、抑と云ふも可なり。此を能得るときは天祿を全うして身家を興すべし、年壽をも永くすべし、子孫をも榮昌ならしむべし。唯人に施し惠む時は約の繩を解き、慳貪の心を去て厚く多きに從ふべし。左傳に、施取其厚。事擧其中。歛從其薄と云ふにて施の別なるを知るべし。

一周易は柔を用ふるの書なり。亢龍有悔。群龍无首。黄裳元吉。何れか柔道に非らん。老子も此意をばよく知れり。漢文は柔道にて天下を治め給ふ。三代の聖人より後の帝王は、文帝を第一とせり。光武も朕以柔道治天下と宣へるは、誠に難有ことなり。光武も末世希なる明君なれど、郭后と東海王强を廢し給ひしは、一生の大過なり。さて韓歆が災異を云ふを怒て父子共に害し給ひしは、柔道を得給はず。高祖の周

尩羸—弱ること

天祿—天より賜はる福、天祐に同じ

大梗—大概に同じ

を肆にすることを得ず。不仁の器にて、又大仁の用を爲せり。何れにも此三寶にて、人の心を和柔にして、天下の太平をなす者なり。

一女色の害は畏るべし。第一には、人の身體を尩羸せしむ。第二には、人の心志を柔弱にして成立すること無らしむ。第三には、驕奢の心を生じて華靡に流れしむ。世俗の華奢は皆女を悦ばしむるの一念より、無量の害を生じて身を亡し家を亡し、國天下を亡す。古昔の亡國を以て觀れば、淫慾より奢侈を生じ、奢侈より困窮を生じ、困窮より亂亡を生ず。堯舜相傳の四海困窮。天祿永終とあるにて、困窮の源を塞ぐべきことなり。一身一家に取ても、其理一同なり。

一老子三寶は、慈仁なり、儉約なり、不敢爲天下先と云ふは降挹退託のことにて恭謙なり。人此三寶を失はざれば、終身安穩なるべきこと也。夫子温良恭儉讓も三寶に同じ。温良は慈仁の發ならずや。儉は卽ち儉なり。恭讓は不敢爲天下先なり。老子も多くは易論語を襲へり。

一論語に、慮以下人と云ふは謙なり。されども謙の字はなし。恭の一字にて謙を兼たり。繫辭に謙也者致恭とあれば、恭の倨り亢ぶらざると謙のへり下ると、其實大

粗厲猛暴―氣が荒く亂暴するをいふ

からず。

一男女の欲は、人の心を柔弱にするもの也。男女陰陽和合の和は、國語に、以レ宅平レ宅謂二之和一とあり。左傳に、和羹の和の義なり。やはらぐるの義には非ざれども、男女の和にて人情柔順になるを見れば、やはらぐるの義、妙なり。世の人男女の欲を遠ざくるときは、自然と粗厲猛暴になりて、忿戻鬪爭の心を生ず。畏る可きの至なり。國家を治むる人は、尤も此の所に心を付けて世の亂を防ぐべし。左傳に、戎事不レ近二女器一と云ふにて女子の猛勇の氣を挫くことをさとるべし。予が幼少の時老人の話を聞しに、世は三寶にて治れり。女房鐵砲佛法なりと云へり。當時は理ある言とも思はざりしに、今日能々此言を味て其妙を悟れり。女故に人の氣を和柔にし、且は妻子に羈さるゝ故、忍難き事をも忍べり。如し妻子もなきものならんには、忿怒の爲に人を打果すもの少かるまじ。佛法も慈仁柔弱を以て說を爲し、地獄天堂などの說にて世間の亂を止むること少からず。念珠を捏ぐり觀音を伏し拜む人は、人と擊合ことも少かるべし。是にて其大功を悟るべし。鐵砲なき時は、武暴猛勇の人、無レ涯横行をなすべけれども、劍術も、槍法も、此にて打碎かるを以て、武勇の人も、手を束ねて其惡

太虛寥廓の間―虛空をいふ、何もなくほがらかにして大なる間

を刎られ、物を盗めば笞たる。暗夜の如きにも非ず。唯世の中は、朦朧たる春月の夜の如きものなり。されども君子は白晝の十字街頭なりと心得て世を渡るべし。

一飲食男女の欲の心に生ずるは、自然の妙理なり。此にて性命をつなぎ、此にて嗣續を生育す。世の人、僧などを見慣て、男女の欲を拙なき事の樣に思なすは、以の外の僻事なり。人此欲を斷て、心中淸淨なるを覺るは、異端の極なり。欲の心に生ずるは、雲の天地の間に生ずるに同じ。一年中天地晴明にして、雲行雨施すことなき時は、草木枯死して、人と禽獸と皆餓死すべし。されば太虛寥廓の間に、雲を生じ雨を施すの妙にて、天地の萬物、皆生育を遂る事を得たり。人も心中空虛の處に男女の欲を生じて、子孫連綿す。此欲は是れ天地の正理生民の大道なり。さればとて心中常に此欲のみならば、天地常に雲雨して晴明ならざるに同じ。是も亦萬の生育を遂げがたし。さて少壯の時、男女の欲の熾なるは、春夏の雨多きと同じく、老衰の日、此欲の薄なるは、秋冬の晴日多きに同じ。人は一小天地なること此にても知るべし。然ばあれども、此國の人は、出家を見なれたる風俗にて、男女の欲さへ薄き時は、大賢君子の樣に思ふ愚惑なる習俗なれば、道に志す人は心得あるべき事なり。謹まずんば有るべ

衣冠の人—朝廷に仕ふる人

白日—白晝に同じ

武父子學を好で無道なし。元帝は善人に非ずと雖も宋齊の君には同じからず、佛法の弊仁柔に過て天下を喪へり。故に後梁三世宗祀猶血食す。唐に至て蕭氏の高官に至る者絶えず。唐人の言に、六朝之亡。唯梁無レ罪。故其子孫至レ今名官相繼と云へり。天道の昭明なること如レ此。

一先帝崩御ましく〳〵て、太子御幼少なれば、御相傳の方なりがたき故、御成長の後關白御相傳仕ると云ふこと、諸書に是れ有て其言は記せず。聖徳太子十七條の憲法にや、又は宇多法皇の御遺誡にもやと思ひしに、後に後太平記と云へる大俗書を讀みたれば其事を記せり。觀音經の慈眼視二衆生一福聚海無量と云ふ一句なり。誠に難レ有御事なり。平城天皇の藥子の亂に、藤原の仲成を誅戮せるより、帝王二十七代、三百四十餘年、保元の亂まで衣冠の人を刑殺せず。仁厚の政、三代聖人の御世も企て難きこと也。和歌佛法などにて柔過て遂に天下の權を失ひ給へども、一體慈仁の德、天地に充塞して、皇統百二十代の今日に至ること、由無くして然らんや。

一善も必しも賞せられず、惡も必しも罰せられず、天下の事は、白日に十字街上を走る樣には無き事なり。されば善人は世にも用ひられ人にも敬せらる。人を殺せば首

煥然―煥は散るなり釋くるなりはつきりわかるかたち

千古不刊―千萬年も滅せざる

曹操―三國魏の祖

司馬懿―字は仲達魏の名將

の聖之時なるも又是中なり。一部の周易中の一字を以て要とせり。聖人の意煥然として明なり。

一平治の亂に、藤原光頼其弟小別當を戒めし言（平治物語）西光法師の大相國淨海入道を詈しりし言（盛衰記）、佐竹の家臣の頼朝を難ぜし言（東鑑）、五郎時致の頼朝の前にて辨ぜし言（曾我記）、我邦にては希覯のことにて、皆痛快を覺ゆ。清盛上皇を幽する時、小松内府の諫められし言（盛衰記）、承久の亂に、泰時の義時へ異見を入れられたる言（承久記）、此二つは千歳の下之を讀で斂襟起敬、感賞嘆服せしむ。笠置山にて楠公の言は人をして義膽を張らしむ。皆千古不刊の言と云べし。

一曹操父子漢に逼りて天下を奪へば、司馬懿父子孫魏に逼りて天下を奪ふ。宋の後廢帝、無道にして齊祖天下を奪へば、齊の東昏無道にして梁武天下を奪へり。北宋の滅ぶる、金人宋の妃嬪公主を奪ひ去りし處を青城と云ふ。金の滅ぶる、元人金の妃嬪公主を奪ひ去る處、又青城なり。天道好還又巧なり。

一劉宋三廢帝の無道あり、父を弑するの元凶劭あり、武帝明帝も亦皆無道なり。蕭齊に鬱林東昏の無道あり、武帝明帝是も亦皆無道なり。陳には後主の奢侈淫肆あり。唯梁

り。飲食も過れば食傷霍亂の病を生ず、不足なれば飢ゑて氣力乏し。程能く飲食する處、是れ中なり。一身の世に處するにも、柔に過れば事を立ること能はず、剛に過れば凌レ人犯レ上、身を亡すに至る。國家の政事も、寛に過れば下より上を侮りて治らず、猛に過れば、上より下を賊して叛亂に至る。天地の萬事萬物皆此理なり。善も過ぐれば惡となりて、一身よりして家國の害となる事あり。中とは何ぞ。無二過不及一恰好得レ節の義にて、此理を得ること極て難し。

一周易の大過に、剛過而中と云ふことあり。夫子此一語至妙の理なり。過れは中に非ず、何故に過て中なるや。平常の病に烏頭の毒藥を用ふるは過なり。劇病に至て平常の藥效なきに至りては、此大毒の藥を用ひて效を得る事此れ其時の中を得たり。天下華靡奢侈に流るゝ時、平常の中禮を用ふる時は、世の敝風を矯ること能はす。此時に於て過儉過朴を以て此を挽回するは此れ其時の中を得たり。人平日飯三椀を以て節とするものも、或は遠行、或は力業を爲して、各別に饑たる時は、食平常の度に過る、此れ其時の中を得たり。故に中庸に時中と云ひ、孟子に執レ中無レ權猶執レ一也と云へり。

一學記に當二其可一謂二之時一と是れ時の字の妙解なり。中の字も當二其可一の義なり。孔子

天命を畏る—天の命ずるところを畏れ謹む

天道好還—天道は善悪ともに後に必ず報ずるあるをいふ

一時名高の三先生、皆子孫斷滅の人なり。其學の天に背ける驗明白なり。畏二天命一ものは、彼三人の書は几案の前に近くるも天に畏れあり。然るに、子孫斷滅せる天の罪人を奉崇して其學を悅ぶは何等の愚昧ぞや。

一天道好還の一語千萬世に涉て差ふことなし。信玄の父を逐出して、其子義信父を弑せんと謀て誅せらる。姑聟の諏訪賴茂を欺き害して、其女を奪ひ、夫が腹に勝賴を生して國を滅す。天道の巧なる、造作し出せるに似たり。

一信玄は無道の人なり。姉の子の今川氏眞を欺き、其國を奪ふ。信玄が駿河を奪ひしは、今川の家臣を欺き、降參せば駿河の半國を分ち與へん、或は一郡或は二郡を與んなど云しに、信長又武田の家臣を欺き、降參せば甲信の半國、或は一郡二郡を分ち與んなど云て、共に其國を奪ふ。天道好還の明驗なり。されども信玄親を逐出せるの大逆罪を知て、一生手に論語を把らざりしは、聖經の尊を知る、今の學者に優ること萬々なり。數箇國を併呑して、一代の英雄と稱せられしも無由には非ざるなり。

一堯舜禹の相傳に中の一字を說き給へること、無量の妙義なり。近く中を知らんとには、飲食を作るも、生烹なれば食はれず、烹過たるも食はれず、程能く烹たる處是れ中な

東照神君—德川家康の尊稱

鼓腹—太平を樂むをいふ

作俑者—惡例を作るもの

關東征伐の軍中にて、忍の成田の女を幸し、氏鄕沒後、其妻をも妾とせんの志あり。皆失德の事也。

信孝を殺し、信雄を伐つの罪は、戰國の習にて責難し。

一保元平治より慶長元和まで四百年餘、天下戰爭の區と成つて、四民安堵の日なし。東照神君の武德にて、天下凱安、四民鼓腹して樂むことを得たり。今日の天下に生長する者は、天地父母の恩よりも東照神君の神恩弘大無邊なるを知つて、四民共に天下の治平を助くるの心あるべし。假にも治安の妨をなし、且は亂を願ふ心ある者は、先祖以來十世、太平の澤に浴するの神恩を忘れたる逆罪に均しき者なり。

一左傳に大德百世祀レ之とあり。孟子に始作レ俑者。其無レ後乎。又云。不孝有レ三。無レ後爲レ大。文言に積善之家。必有二餘慶一積不善之家。必有二餘殃一近時、物茂卿の學、其淺薄疎謬は論ずるに足らず。茂卿は子なし、姪の道濟を嗣とす、又子無し。他姓の子を養嗣として、血脈斷絕せり。其高足弟子太宰純も子なし、他人の子を養て嗣とす。定保是也。酒を嗜みて至愚至陋の者なり。吾友井上貫流の家に寄寓して此に終る。終身世に所謂宿なし也。服元喬が子は、夭死して別に子なく、此亦仲英を養ひ子とす。

虎狼の世界―爭鬪のみを事とする故にかく云ふなり

豁達大度―事理に通達し度量大なるをいふ

一足利の十五代は、開國より滅亡まで、一日片時も、安寧の日なし。尊氏の正成義貞顯家を撃て天下を領せしは、能き手際なり。然れども其臣の叛逆を制すること能はず、弟直義子直冬まで逆心せるにて、その人の無道を知るに足れり。開國の始より如此なれば、まして應仁の亂後より元龜天正まで、天下は爭戰の衢となり。人々仁義の心なく、利欲熾盛にて、君を弑し、父を弑すること、國々に蠭起せり。此百五十年は、虎狼の世界と云ふべし。

一信長は弟勘四郎信行を殺して、家を治め、嫡家の彦五郎を滅し、本宗の右兵衛尉を亡して尾張一國を鎭め、外家の齋藤を滅して美濃を奪ふ、是れ身を立るの始なり。天下を領するの徳器あるには非るなり。

一秀吉は豁達大度、人君の器あり。されども勝家を伐て小谷の方を奪ふの志あり。若狭の武田に腹切せて松の丸殿を奪へり。失徳甚し。且天性驕奢にして、開國創業の道を知らず。秀次を殺せるはさることなれど、其妻妾に何の罪ありて命を幷せて畜生塚とは何事ぞや。暴逆甚し。無罪の朝鮮を侵して、兩國の民命を草芥にせるは、淺野長政の狐憑の亂心と云へる一語にて盡せり。是れ子孫永久天下を有つべき德には非ざる也。

時輔―時頼の嫡子時宗の兄

攝關―攝政關白

丙寅七月、宗尊親王上洛の亂に、名越中務大輔敎時、左近將監公時一味陰謀あるに似たり。同九年二月、式部丞時輔京都にて逆心を企て、六波羅にて害せらる。此時敎時公時一味にて誅せらる。佐介時國は、弘安七年六波羅にて逆心して誅せらる。師時宗方は、共に時頼の孫にて、嘉元三年、兩人權を爭て不和なり。常盤左近將監時村、熈時が師時に黨せるを怒て。宗方夜討して時村を害す。宗宣、宇都宮貞綱と宗方を誅す。外族には。寛喜五年丁未（寶治元年也）六月五日、三浦若狹守泰村、能登守光村以下三浦一黨誅に伏す。是は頼經上洛の後、足立景盛義景と不和にして滅亡に及べり。弘安八年十一月には、秋田城介陸奥守足立泰盛、宗景（泰盛は藤九郎盛長曾孫、景盛の孫義景の子なり）父子誅せらる。永仁元年には、內管領長崎平左衞門尉頼綱入道果圓、其子飯沼判官と共に誅せらる。されば北條の時も、治平の世には非ず、文永弘安の蒙古の亂のみに非ず。

一皇統の二流を分ちて十年更代の帝位とし、攝家を分ちて五家となす。皆貞時の時立てたる新法にて、其子高時にて滅亡せり。帝王攝關の權を輕くせんと謀りて、其事亡國の基となれり。

盛綱―盛國の子
公曉―頼家の子
親、祖父―義時時政を云ふ

一頼朝父の讎を報じて、平家を滅せるはさる事なり。範頼義經を忌み害せるは何事ぞや嫡子頼家は實朝に殺され、實朝は姪の公曉に殺され、父子三世相害して、其家滅びたるなり。

一泰時は四代の帝王（後鳥羽、土御門、順德、九條廢帝）を廢流して天下を領せり。然ども親、祖父には勝りて、我日本にては大賢八九分の人とも云ふべき人なり。頼家を諫しより、父母に孝なり、兄弟に友愛なり。寡欲にして私なく、感服すべき事少からず。子孫七代天下の權を執しも宜なり。

一時頼時宗も、禪學を奉崇して一代の賢人なり。祖先の家法儉素を宗とせるを、高時入道に至り、愚昧不肖にて驕奢に長ぜる故、一時に滅亡せり。さて世間不學の人は、北條九代は能く治りし世の樣に思ふは大なる謬なり。幼主を奉じて陪臣にて國命を執ること、本極難の事なり。故に平治の時なし。將軍成長の後は、北條家を滅さんと陰謀あるに因て、京都へ逐ひ上せり。先づ同族相害するは、名越越後守光時、寛元四年丙午五月、時頼を擊たんと謀りて、事顯れて六月伊豆へ配流せらる。頼經將軍上洛の亂なり。光時の弟修理亮時幸も一味にて、五月入道して六月朔日卒去す。文永三年

いふ
番場の辻堂—兩六波羅滅亡の時なり
白壁王—光仁天皇
田原皇子—施基皇子
褚淵—字は彥回、宋及南齊に仕へ官尚書令侍中に至る
南北史—南史北史にて支那南北朝の歷史
斬艾—斬りたやす

の跡を繼ぎて天武流を相承け給ふ時、時の勢威に畏れて、藤原百川の勸にて、嫡母井上皇后と姦通し給ふ。宋の逆臣褚淵が山陰公主の逼迫を拒しには遙に劣り給へり。されど是は子孫幷命の基にはあるまじき也。清盛時政の惡自ら子孫幷命べきの理あり。南北史を讀て劉裕、蕭道成、高歡、宇文泰等が前代の子孫を斬艾して、易代の時又吾子孫を斬艾せらるを見れば、時政上洛して、平家の幼兒共を搜り出して、盡く屠害せしにて考ふれば、其子孫の數を盡して誅戮を蒙りしは、天道の業報、免れがたき理なり。

宋齊の子孫は、多くは易代を待たずして斬艾せらる。淸趙翼が二十二史劄記に極めて詳悉せり

一平家一族魚腹に葬て後、重盛一綫の血脈は、伊勢の關の五家（神戸龜山國府鹿伏兎峰五家）に存せり。關實忠の弟、長崎盛綱泰時の家令となりてより、子孫北條の内管領と稱して、天下の權を秉れり。盛國の弟、津田先生親實は織田の元祖にて、信長に至ては、遂に再び大臣に任じて天下の權を秉る。一族兄弟皆滅と雖も、有德の人の子孫は存在して勃興の期あること、天道の昭明畏るゝに餘あり。

陸九淵—字は子靜象山と號す宋の哲人

大辟—死刑にして支那古代五刑の一なり

卓茂—字は子康、慈仁を以て名あり光武皇帝召して大傅に拜し褒德侯に封ず

幷命—死を共にするを

皐陶の後なり、楚漢の時、勃興すれど、猶被ㇾ刑然後王たり、黥刑を免れ得ず。祖先の宿縁免れ難きの理あり。此事北魏の高允も能く辨知せり。達人と云ふべし。

一刑罰は後暗きものと云ふ事を知るべし。今姦通露顯せば、男女共に大辟に處すべし。されども姦通の露顯せざるもの、天下の內幾萬人もあるべし。發露せざれば刑を免る。皇天より人主に問給はゞ、人主何の辭ありて答へんや。刑は天下古今の大法なり。されども天へ對して後暗きことなき樣には、聖人にも能はざる事なり。故になるべきだけは刑を輕くし刑を省き、且敎を明にし、風俗を儉朴にして刑を犯す人少なき樣に政を爲す事は、聖人の仁心なり。さて人家に發露せざる姦慝の多き事は、後漢の卓茂の賄賂取れる吏を訴へし惡民に告げし語にて悟るべき事なり。

一平家の人は、西海の波に沈溺せる日も一門幷ㇾ命たり。北條滅亡、五月八日の番場の辻堂、五月二十二日の鎌倉、是亦一族幷ㇾ命たり。其故は如何なるやと子定に問しに、桓武天皇は平安城を築て、百代帝王の居を定め給へる、雄傑の姿ある天子なれども、一體は失德の御方なれば、子孫にも如ㇾ此業報あるにやと云へり。此事は覺束なし。桓武の御失德は、御父白壁王田原皇子の御子にて、天智流なり。稱德天皇(孝謙重祚)

費の—「の」は「を」か

腴食—美味を十分食ふこと

暴殄—荒らしつくす

舜禹、—支那古代の聖王

契、后稷、伯益、四嶽、皐陶、—皆古代の賢人

ことを知るべし。況や其下たるをや。

一儉素の本は財を積で富まんとに非ず、財の費の惜むにもあらず。唯人天地の間に生れて上下の差あるとも、同じくこれ同胞の人なり。然るに同胞の兄弟に衣食住に乏して、一生困苦せるものあるに、我獨り天地に何の功德ありて、美衣腴食して天物を暴殄すべけんや、と云ふ理を眞に知りて、天の冥鑒を畏れて、衣食居住事々節約にすべし。是れ成德の本なり。養生の術なり。子孫長久の基なり。學道の人は先づ是よりして眞智を開くべし。

一舜有臣五人天下治る、禹は當身て天下を有ち、契は十四世、殷湯にて天下を有ち、后稷は十六世、武王にて天下を有ち、伯益の後は戰國の時秦趙是なり。始皇は呂氏の子四嶽の後なり。唯皐陶の一人、其子孫振はず。臧文仲、聞六與蓼滅曰。皐陶庭堅不祀忽諸(文六年左傳)春秋の時、其僅に存するの小國だも滅亡せり。一體堯舜の時に當りて、學德最も優なるは皐陶なり。其謨を見て知るべし。陸九淵子靜は、唐虞之際。道不在堯舜而在皐陶。殷周之際。道不在文武而在箕子と云へるは知言なり。されど其子孫の興らざるは、刑官の故なり。刑の畏るべきこと如此。英布は

梧窻漫筆

上

大田錦城著

鹿臺の財、鉅橋の粟—紂鹿臺を築きて財を貯へ鉅橋（倉の名）に粟を積む

一天下の治亂は、奢儉の二字にあり。先祖は儉素にして興り、子孫は汰侈にして滅ぶ。漢唐宋明は勿論なり、劉宋蕭齊偏安の國と雖も皆然り。漢書貢禹の上疏を見て、治亂の大體千歳一轍なることを知るべし。

一儉素とは、吝嗇にして財を積畜せんと願ふには非ず。財を積んと願へば大欲なり。此一念已に上天の冥慮に違背す。鹿臺の財、鉅橋の粟、殷紂は大富の人にて其滅亡を救ふには足らざるなり。扨天下を有つ身にしては、軀に錦繡を纏ひ、口に膏粱を飽くこと、幾程の費にも非るなり。されど禹は菲二飲食一惡二衣服一卑二宮室一とあり、文王は卑服即二康功田功一とあり。是にて、天下を有つ身にしても飲食衣服に儉素なるべき

知足不辱。余雖不敏。私事斯語也。刻已成。因冒數言爲之敍云。蓋此書有三錄。曰畏天。曰知命。曰畏聖。梧窻漫筆其統名也。

文政六年癸未二月望

晴湖　荒井堯民　撰

癸未。余年甫四十。於少年紛華之事。稍々屏欲。即欲捐資刻之。以圖不朽。因請藁本。校訂累日。功竣以授剞劂。前志初展矣。若夫四方之士。取此書一通。措諸座右。時々觀覽。豈啻陸賈新語耶。夫先生之於此書。實涓埃之微也。學於先生之門者。儻以此書自足。則非先生之所以誘掖敎育也。詩書義之府也。易天地之蘊也。學者必欲入義理之府。探天地之蘊。當今之世。舍先生其誰歟。宜親炙叩問。如日亦不足也。且先生著書之富。無論於經籍。至陰陽小數之事。皆考核成書。世有素封者。出貲印行。使積年苦學之功。暴著天下。徒季孫之粟南宮之車邪。何必傚余之從事於末擧。沾々自喜焉。余乃樗朽。無與諸子並騁之才。亦乏爭抗時輩之具。唯愼奉先生之正朔而已。老聃曰

梧窻漫筆序

余遊錦城先生之門。十數年矣。於其言語文章。未嘗爲無聞焉。唯至其論天人之際。說幽冥之故。槩乎未聞。或偶聞之。唯爲後塵之瞠若也已。嘗厠子弟群輯之席。聞其絮々談近古之事。刺擧史傳。引證經籍。往復論質。注焉不盈。挹焉不竭。沛然如河之決。油然如雲之興。私以祈嚮。欲筆以貽家庭。有志未果。其後陪侍書院。觀悟窻漫筆者。則往日爲子弟所訓諭。而其親裒錄者也。於是請受誦讀。則鄙吝日去。好善之意。津々而生。因謄寫藏之。以代韋茲之佩焉。蓋此書一時流傳。雖門外之士。猶能知其言之有裨益乎名敎。然亦苦謄本之多註誤也。余不肖不自量。欲校訂上木。匡豕亥之轉訛。亦有志未果。今茲

曰。百歲老人行不得。夫論語一書。槩是孝悌忠信。家庭俯仰。閭巷交接之近事而已。若有能行其一言者。卽聖人也。邇言之可察。而庸行之可行。固旣如此。錦城先生所著。梧窻漫筆二卷。出入治亂。揚推古今。其事皆覈實。其說皆切近。無高遠可駭之論。亦非陳陋腐臭之談也。讀之。則可由以行聖人之道矣。因可以窺夫子之牆矣。世能有咀嚼之者。以爲汪信民之菜根耶。抑將顧愷之々甘蔗耶。如此書。則不可不傳之以與衆饜飫也。因從源荒井堯民。鏤板行世。刻成所視。乃題數言。以弁其首云。文政六年。歲次癸未。春三月之吉。屺山處士唐公愷譔

姬路　山田安朴子孚書

梧窗漫筆序

道則高矣美矣。必有卑近易入之言。然後可繇以行焉。可階以進焉。故子思稱。大舜察邇言。孟子亦曰。君子之言。不下帶。子思孟子之意。卽夫子之諄々善誘也。後世聖學不講。競鶩高遠。厭棄卑近。欲勝大舜思孟而上。不亦妄乎。而顧其所行。則狂猨之不若。嗟亦過矣。商鞅說秦王。以唐虞。則睡而不聽。及五伯之事。則不知膝之前於席。徐無鬼以金版六韜進魏王。則瞶眊不通。爲說相馬之道。則瑳然啓齒。卑近之言易入如此。雖然。其易入者。未必易行也。菅輅諫何晏鄧颺。二氏嗤以爲老生常談。不用其言。菅輅於是嘆其不免矣。劉晏問釋道欽要語。道欽告曰。諸惡莫作。衆善奉行。晏謂。五尺童子亦知之。道欽

とくにもなり、男は全く法師にもなるべからんとぞおもはる。さもあらば、韃靼のえびすよりも見ぐるしかるべし。風俗のうつりかはるも、人力にはあらず、是も時運なり。されば古の聖人、只此事をおもんぱかり給ひ、よき風俗を永久にたもつべき術をまうけ置き給へり。其術は何ぞといふに、正樂をおこなひて、淫樂を禁ずるにあり。是國家を治むる政の要務なり。

獨語　終

髭―一本「鬚」
大わらは―大童髪を取り亂したるさま

そりて僧尼となる事あり。僧尼の外に、常の人髭髪そることなかりしに、近き世に韃靼の夷國をうばひて、天下の人をこと〴〵く其國の風俗にして、頭髪をそり、髻の所を少し殘し、組みて長くたれて、牛の尾のごとくなるを辮髪といふ。是中華の風俗の大變なり。我國もむかしは中華のごとく、僧尼の外に髪をそることなかりしに、いつの比よりか、武士の中に月代とて、頭の髪をそりしに、後は髭をもそりおとし、額に角をたて、頭髪をも半過ぎて項の邊までそりおとし、髪をば指のふとさにし、其末をきりすてゝ鶴の尾などのごとくなり。公家の人はいまだ髪をそらねども、是も武家をまねびて、髭をそり、武家もむかしは烏帽子、直垂を著たりしに、今は夫もやみぬれば、只月代をさらして、すこしの髪を後につかねたるさま、むかしの大わらはにもあらず、何と名づけんやうもなし。韃靼のえびすは髭をのこせるに、此方の人は髭さへそりおとしぬれば、斷髪の風俗彼よりも甚しといふべし。近き頃は、又うしろの髻の中をもそりて、いよ〳〵髪を少くす。しかのみならず、女も髪の多く長きをきらひて、頭髪の内を丸くそりて、髪をほそくし、髪の末を切りてみじかくす。これ大にむかしにかはれる惡風俗なり。もしこのまゝにて年を經ば、いつとなく女は今の男のご

けやけく―際立ちて

人さへ―一本「人だに」

佚樂―快樂を肆まゝにすること

彌分限を知りて身の程よりも引きさげて、萬穩便なるべしとおもふに、さはなくて、今ひときはをこがましく、我よりうへに人もなきやうに道をふさぎて行くさま、見ぐるしくもいふ計なし。此風俗も、我いとけなかりし時におもひくらぶれば、けやけくめざましく見ゆ。すべて昔は、諸侯貴人も多く恭敬にして禮をつゝしみ、賤しき者にも恥ぢてはしたなきふるまひをせず、君たる人も臣下に禮を厚くし、言づかひ迄もうや〳〵しかりしと、我が父語れり。今は大かたこの風もなくなりぬ。又むかしは、士君子の婚娶に財幣を求むる事なかりしに、今は一郡をも領する程の人さへ、財幣を求むる事になりぬれば、下ざまの人はいふにや及ぶ。世の治れる事久しきによりて、人皆佚樂して、近き頃は有祿の士より上つがた國郡のあるじまで、殊の外に貧困して、凡商賈をたのみて内外のことをいとなむ故に、位ある人も商賈を恐れ敬ふ事甚しければ、商賈は是に乘じて、士大夫をも輕しめあなどる。これも昔にかはれる風俗なり。かくばかりの貧窮にても、外に出でてしらぬ者の中にては、をこがましきふるまひするを、をかしともおもはれず。中華の人、往古は男も女も髮そることなし。五刑に及ばぬ程の輕き罪の者をば、髡刑とて頭髮をそりけり。佛法わたりてより、男女髮を

前註に記したる誤の結果ならん
面はゆげ—恥かしさうち
市井—まち
おめず—恐れず
薄祿—祿高の少きこと
をこがまし—馬鹿らし

しみあへりける。三味線を鳴らし、淨瑠璃をかたる事は、只市井の賤しき者のみなりし。夫さへ大かた人にかくして、忍び〳〵にならひしぞかし。今は工人商賈の中にてやゝとめる者は、學問し、詩歌管絃のもてあそび、少し下れる品なれど、猿樂などを習ひてたのしみとして、淨瑠璃三味線などを近付けぬたぐひ有り。士君子は、却りてよきたのしみをしらず、ひたすら淨瑠璃三味線を好みて、はれやかなる所にして、おめず、憚からず、卑しき所作をして人のもてあそびとなる。薄祿の士のみにあらず、諸侯貴人にも此類多しと聞けり。是等をば冠と履と所をかふるといふべし。これのみにあらず、今の諸侯貴人の道を行くさま、むかしにくらぶれば、殊の外にをこがまし。少の所領にて從者の數もさのみ多からぬを、廣く長くならべつゞけて、人の妨となるを顧みず、かひなをふり足ぶみをして、いかめしくあたりをはらふ。見るもうるさくかたはらいたくおほゆ。傍若無人是に過ぎたる事やある。凡そ君子は溫恭にして、萬穩便なることそたふとけれ。萬人通行すべき都の大路を、何ぞ我一人の道とおもひていかめしくふるまふべき。かへすぐ〳〵おろかなる心なり。諸侯すら猶しかなり。ましてそれより下つかた、少の祿を食みて十人廿人の從者を召ぐするばかりの人々は彌

あづまうど—關東人

蒙衣—外出の時を頭背に被りて面を蔽ふ衣

きまゝ—原本「着まゝ」とせり、恐くは「氣まゝ」の意なるべければ特に假名に改めたり

衣—一本「絹」とあり。此方よろしかるべしこゝに「衣」とせるは、

利にかしこく、江戸は武家の都なれば、あづまうどの心粗暴にして利にうとし。然るに、三十年以來は江戸の人京の風俗を學ぶ故に、武士のこゝろも昔にかはれり。唯京の婦女のむかしより蒙衣するのみこそ、いまだ江戸にうつらね。江戸の婦女の外に出るに、むかしはきまゝとて、黑き衣にて頭面をつゝみ、目ばかりをあらはしけるが、其後綿にて頭面を包みしは、我二十餘り寶永の比まではしかなりき。今は少しき綿を頭上にいたゞきたるのみにて、面をばうちさらし、はれやかなる顏にて道を行くさま、面はゆげにも見えず。男は面をあらはすべきものなるに、此頃はあみがさの肩の上までかゝるをかぶるはめづらしからず。冑のごとくなる帽子をかぶりて、面をかくすも有り、つねの頭巾に覆面のごとくなるものをつくりつけて、目計をあらはして道を行くもあり、むかしの女のごとし。人目をしのぶ者の多くなりたるにや。此ごろの男は小袖の裏を紅にし、或は紅のはだ衣を袖口長にして、腕をまとふばかりにひらめかす者多く見ゆ。女はかへりて縹の裏白き裏などを著るあり。是等は男女所をかふといふべし。又昔は士君子こそ學問し、歌よみ詩作り連歌し、或は管絃を玩び、少し下れる品なれども、琵琶を彈じて平家物語し、筑紫箏、幸若の舞などを、習ひてたの

すべて男女の衣服、帯は極めて質素なりき。男子も女子も十四五歳迄は、長き袖を著るに、むかしは鯨尺一尺七八寸を極とせしに、貞享の比より貳尺計になり、夫より稍稍ますく長くなりて、近き比は貳尺四五寸になりぬと見ゆ。婦女の帯も貞享、元祿の比より漸く廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸に及べり。綿を心として褥のごとし。男の肩衣といふもの、むかしは麻の幅鯨尺八寸計成りしに、貞享元祿の比より幅壹尺に及べり。寶永の比までは、婦女細き麻縄にて髪をつかねて、其上を黒き絹にて卷きしに、其後麻縄をやめて紙にて結ぶ。越前の國より粉紙にて元結紙といふ物を造り出して、海内の婦女皆これを用ふ。夫より絹にてまく事もやみぬ、と我父まさしく是を見てかたりきかせり。今の人聞きては信とせず。凡そ男女の髪かたち、我等が見及びてより此かたは、幾かはりかしつらん、今はむかしのかたものこらず。昔の婦人は、髪多く長きをたけにあまるといひてほめたりしに、近頃は髪すくなくみじかきをよしとする風俗になりて、髪多き女は髪の中を切り或はそりてすくなくす。此風俗は、京の婦女より移り來れり。此事にかぎらす、都て男女の風俗言葉づかひ、物の名迄近き比は京に似たること多し。京は公家の外、工匠商作のみなれば、人の心柔弱にして

歡か

歷然—はつきり見ゆる形容

禮服にて、糸にて—一本「禮服に、綿にて」とあり

そら言—虛

ぬれば、まして人間種々の儀式遊宴の樂など、新しき事ども年々に出で來りて、舊き事共はいつとなくすたれ果つ。大かた舊き事にはよき事多く、新しきことには能き事少し。風俗のうつりかはる事、目の前に歷然たり。其中に、昔と今と、寒暑のごとくかはれるさへあやしと見るに、冠をくつにはき、履を冠にする樣なる事有るこそふしぎなれ。つく〴〵と百年以來の風俗をおもひくらぶるに、余所の事をば置いて、江戸の人の風俗こそ殊にかはりたれ。我したしき者の中に、慶長、元和の頃生れたる者、男にも女にも有りて、寬永の頃を年の盛にて經たりといふに、男は冬革の打ちかけ革の袴を美服とし、女は紫の革の襪子をはくをよきけはひとせりといふ。その襪子は我幼き時までも殘りて有りしなり。婦女の帶は金襴を美麗の限とし、黑地に梅櫻松を所々にぬひつけて、是を鉢の木の帶と名付けて珍重しけり。廣サ僅に鯨尺の貳寸計、紙を心として綿などいるゝ事なし。四月より八月まで、婦女の禮服にて、糸にて廣サ鯨尺の八分計成るをうしろに結びてたるゝをつけ帶といふ。今のつけ帶は常の帶よりも廣し。今の人に昔のことをかたれば、そら言と思ひて露ばかりと信とせず。是等は我まのあたり見たりし事にて、詐にあらず、舊き事知りたる人あらば尋ね問ふべし。

いへり―一本「云ひはべりき」

一本「我父は」以下を別行とせず

大猷院―德川三代將軍家光

嚴有院―四代家綱

常憲院―五代綱吉

童稚―わらべ

干戈の苦―戰爭の苦

觀樂―觀は

長く大息すべし。國民の法禁ゆるき故に、非人を以て人類に混ずる、誠に痛ましき世のありさまなり。遠きむかしは云ふに及ばず、百年の前迄はかゝる事はなかりしと、古き人いへり。

一我父は寛永の中比に生れて、八十八歳にて享保の中比に終れり。大猷院殿、嚴有院殿の御代を經て、其時の事を常に語りつれば、我幼き時より能く聞きて、耳に熟せり。我は延寶の終の年に生れて、常憲院殿の御世よりこのかた、正しく此身に歴つれば、童稚の時より、是まで五十年のことをば目に見たり。父の語りきかせつると、我まのあたりみつる事を思ひつゞくれば、百年の世變歴々として目の前にあるがごとし。人に物がたりするついでには、昔の事ども云ひ出して、或は笑ひ又はなげき、且は治れる御世に生れて、干戈の苦をしらず、やすく寐ね靜かに起きて、嘯きうたひて明しくらす事を悦び、且は事ありし時にあはずして、猛虎も鼠となり、寶劒も鈍となる事をいきどほる。かくて此世治まれる事久しきによりて、上より下まで心ゆるみて、ひたすら觀樂のみをいとなむ故に、舊き事はをかしからずなりて、新しきことを珍しともてはやす程に、人の詞、身のさまより始めて、衣服、器物、屋作までむかしにかはり

けおさる―壓倒せらるる

賤しき者のみかくあるにあらず、士君子の品よき人にも此たぐひ多し。人の風俗の日々に惡しくなりくだる事うべなり。又異國にては、士農工商の正しきわざをして、世を渡る者を平民といひ、戯子の類をば都て樂人と名付けて平民の數にいれず、人の外なる者とし、種類を分けて殊の外にいやしめ嫌ふ事我國の穢多の如し。されば平民の貧しき者も、子を樂人となす事を得ず、樂人より平民に入る事も叶はず、平民と樂人と婚姻を通ぜず、皆國家の大禁なり。是を犯せば刑罰有り。平民と樂人と種を混ぜしむまじき爲なり。我國にても野郎役者はもと穢多の部類に定め置かれけれども、世の人かれが伎藝を愛する心より、かれらを近付くる事を恥とせず。かれらは家富みて都の内によき住居し、美服を著るのみならず、怜悧にて歌よみ詩を作り、學問するものさへありときけば、まして世間のあらゆる事何か暗からん、何かつたなからん。人の機嫌をしり、人の心に入る事極めてかしこければ、常の人、是にあひては、かけずけおさるとなり。さればいつとなく彼輩に位付きて、士君子にもまじはれば、賤しき者と知りながら士君子も得卑しめず。をはりには都の内に宅地求めて、商ひなどして平民となるも多し。諸侯に召されて俸祿給はり、士となるもあり。心有る人是を見聞きては

調度—道具
什器

の所を勾欄といふ。又戲場といふ。此方の芝居なり。雜戲を觀る所を棚屋といふ。此方の棧敷なり。今の猿樂も本中華の雜戲をまねびたるとみゆ。中華の雜戲には國家の法禁ありて、男女淫奔などの類、何にても世の風俗の害ある事をなさしめずして、只忠臣、孝子、義夫、節婦など風俗を奬ますべき事をなさしむ。若し此おきてに背く者あれば、刑罰を加ふ。これ國家の政なり。今吾國には此制禁なき故に、かりそめの戲にも、男女の色に耽り慾をほしいまゝにし、或は淫奔して身を失ひ、家を亡ぼしたる者の事をまねびて、ひたすら淫佚をすゝむるわざをなすよしなり。男女の若き者は言ふに及ばず、年たけたる者も、是を見ては面白き事の限りとおもひ、妻子を引具してしば〳〵戲場に遊ぶ程に、幼き者も昔より早く智慧付いて、よからぬ道にかしこくなり、物言ひ起居ふるまひより、姿かたち、身の粧ひ、衣服調度迄こと〳〵く野郎役者をまねび、かりそめにより合ひて物語するにも、戲場のをかしかりし事をいひ、野郎役者の名を指して、それはかくあり、誰はとありといひて、おのが心によしとおもふをほめ、あしきと思ふを誹れば、人々好ききらひありて、たがひに爭ふ程に、後には怒りを起して詞あしくなり、顔うちあかめ女などはいきまきてすゝり泣きするもあり。

も」の下に「の」の字あり

はれやかなる所—人中

相と成る—宰相をして

司馬—武事を司る官

三十年の内に、江戸の人のすき嫌ひ、寒暑の如くに變るは、他の故にあらず、これ全く淫樂のちからなり。雅樂の風俗を善くするよりも、淫樂の風俗を惡くするは其しるしすみやかなり。和漢古今の俗樂の中に、今の三味線淨瑠璃程の淺ましき淫聲またあるべしともおもはれず。世の末といひながら、淺ましく悲しき風俗ならずや。

一漢土にて俳優といふは、今わが國の狂言師なり。戲言を云ひて人をわらはすを俳といふ。優は別ち狂言師なり。俳優、侏儒といふは、人の身のたけ短きを侏儒と云ふ。たけみじかきものは、ものまねしてまひをどるによきゆゑに、俳優は多く侏儒なり。昔春秋の世に、魯の定公と齊の景公と夾谷といふ所にて會盟せられしに、孔子魯の大司寇の官にて、定公の爲に相と成りて行給ふ。會所にて宴饗の席に、齊の方より俳優侏儒を出して戲舞をなさしめしかば、孔子是をとがめ給ひて、先王の法に匹夫諸侯を惑すをば、其罪殺すべしとて、左右の司馬に命じてきらしめ給へり。聖人のいましめ後の世かんがみずんばあるべからず。優旃優孟などいひし者皆此類なり。唐の代には、利闔の樂工と云ふもの則ち俳優なり。宋元の代より雜劇と云ふ事あり。則ち俳優の所作なり。雜劇は全く此方の今の狂言なり。戲子といふもの、此方の野郎役者なり。雜劇

下ざまの人—下流の人
うれはしき—憂ふべく歎かしき
いまはし—厭ふべし
聞くさへ—一本「聞くだに」
一本「人ど

ねば、江戸の人、京、難波の淨瑠璃を聞ては頭をそむけ、耳をおほひて聞くべき事とせざりしに、寶永の頃、京より一中と言ふ淨瑠璃師來りて、京の淨瑠璃を弘めしより、江戸の人々稍是を悅びあへりしに、享保の始めに、又難波より竹本といふ淨瑠璃師來りて、難波の淨瑠璃を弘む。是れより江戸の人貴きも賤しきも、難波の淨瑠璃を好みあへりしに、其後又都路といふ淨瑠璃師京より來りて、悲しき聲にて、いやしき諺の淺ましく取りみだしたる事どもを語り出す程に、江戸の人又是にうつりて、興じもてはやす事限りなし。下ざまの人は言ふに及ばず、諸侯貴人、雲の上なるやんごとなき人々も、ひたすらにこれを好みて、歲の初にも、いかなる吉事有りて目出度折から壽きあへる座敷にても、哀に悲しき聲にてうれはしきこと共を、語りつゞくるををかしと聞きて、いまはしともおもはず、日をくらし、夜を明かして飽かず聞くめり。淨瑠璃師盲法師などの語るを聞くさへ淺ましくみるに、士君子のさも賤しからぬ人ども、此一ふしをならひて、はれやかなる所にて、はぢ顏もなく、聲打ちあげて語る者有りとかや。此比に及びては、江戸の人偏に京、難波の淨瑠璃のみを悅びて、江戸の淨瑠璃をば、又聞くべき物とせず。世の風俗は民の好惡に隨ひて移りかはる物なれども、

かしましー
やかましー

吉野などいふは、詞やさしくて、よき人の前にてうたひても、聞きにくからず。むかしの今樣にもすこし似たるべきか。俗中の雅ともいふべき者なり。三味線も是にあはする時は、調子ひくく手も間どほにて、きくもの耳にかしましからず、つくし箏にも近き樣にて、いやしげ少なかりき。今はめくら法師も、むかしの曲をいさゝかしらず、調子たかくかしましき事のみをならひて、三味線はいつもかくのごとくなる物とおもへり。うたふ歌も、只さわがしく。いやしくかしましきのみにて、昔のやうなるやさしき事は、露計もきこえず。我等が一生のうち、五十年の間に、俗樂さへかくのごとくいやしくなりくだれる、これそもいかなる事ぞや。淨瑠璃は、江戸、京、難波のみにあらず、遠國の田舍にも其所の風ありて、一ふしかはりたる事さまぐ〵なり。其中に、江戸の淨瑠璃は本より武家の好みにあはせたる故に、詞もふしもいさめる樣にてつよみあり。京、難波の淨瑠璃は、聲かなしくふるひてよわげおほし。さりながら、元祿より以前は、何方の淨瑠璃も皆昔物語なりしほどに、詞がらさのみいやしからざりき。其後は、只今の世の新しき事をかたり出せる故に、ことば甚だいやしくなりぬれば、聲もふしもつれていやしく淺ましくなれり。されども、土地の風俗同じから

かたりなし―一本「かたりしなり」

僞說―一本「俗說」

しほらしき―殊勝らしき

り。說經といふものは、もと法師の中に說經師と言ふ者ありて、佛法のたふとき事どもを詞につゞり、浮世の無常のあはれに戀しき昔物語を演じ、善惡因果のむくいある事どもを物語に作りて、これにふしを付けて、哀なるやうにかたりなし、鉦鼓をならして拍子をとり、世の婦女に聞かせて惡をいましめ善をすゝめて、菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の說法に、因緣物語するたぐひなり。其物語は、僞說にまかせて慥ならぬ事も多けれども、詞は昔の詞にて、いやしき俗語をまじへたる中に、やさしき事もすくなからず。其上幸若の舞の詞のごとく、むかしより定まれる數ありて、いつも古き事のみを語りて、今の世の新しき事を作り出さず。其聲も只悲き聲のみなれば、婦女これを聞きては、そゞろに淚をながしなく計にて、淨瑠璃のごとき淫聲にはあらず。三味線ありてより以來は、三味線をあはする故に、鉦鼓を打ちたるよりも少しうきたつ樣なれど、甚だしき淫聲にはあらず。いはゞ哀みて傷るといふ聲なり。淨瑠璃にくらべては、すこしまされる方ならん。めくら法師、妓女などのうたふ歌も、寛文、延寶の頃までは、長歌弄齋など言ふ曲ありて、俗調ながら詞やさしく、ふしもゆるやかに、いとしほらしき事ども多かり。かりそめのそゞろうたも、小倉、

朗詠―漢詩漢文、和歌などに節をつけてうたふもの
今様―七五句四句にて一首をなすうたひもの
聲明―梵讚又は經文に節をつけて長くひき唱ふること
幸若の舞―扇拍子にてうたひ舞ふ一種の舞

の興を催しけるに、是もいつとなくとなへうしなひて、今の世には跡かたもなくなれり。白拍子の歌の詞は、平家物語などにすこし殘れり。是も詞やさしく聞きにくからず。琵琶法師の平家物語は、天台の聲明のふしをうつして、生佛といふめくら法師、おのが生れ付きの聲にてかたり始めけるといふ。今の世までつたはりて、詞は元より平家物語なればいふに及ばず、ふしもむかしの習なれば聞きにくからず、琵琶をあはすれば其聲も淫ならず、もてあそぶ人に損なし。鎌倉の時の田樂には、いかなる謠ひもの有りけん、今知れるものなし。それより下りては、猿樂なり。又近き世に幸若の舞といふ物は、室町の末とかや、桃井氏の子孫に、比叡の山の兒にて、幸若丸と言ふものまひ始めけるといひ傳ふ。琵琶法師の物語に似たる所もあり、猿樂のうたひに似たる所もあり、いづれにも少しも淫聲なきものなり。まひとはいへども、起ちてまふことはなし、只扇にて手を打ち拍子をとるのみなり。詞はさだまりたる數ありて、皆昔物語りをのべたり。あたらしき事をば作り出さず。士太夫の中にもてあそびても、淫佚をすゝむる恐れなし。寛文延寶の頃迄は、諸侯貴人の宴饗にも是を用ひて心を慰め、酒をも勸めけるに、元祿の比より猿樂さかりになりて、幸若のまひ世にすたれた

なくして―一本「なくては」

貫之―紀氏平安朝の歌人古今集の撰者

ねをばなく―聲を上て泣く

まほろ―むさほり食ふ

かへらや―拍子言葉

おぎのりわざ―交易

されば、人は何にても少し聲を立つるわざを折々なさで叶はぬは天性なり。悦ぶ事、怒る事、かなしむ事、樂む事につきて、それ〴〵に聲を立つるは止む事を得ざるわざなり。賤しき者の力わざにも、聲を立てゝはげむは常の習ひなり。夫を其儘に捨て置きぬれば、かならず鄙俗に成りもてゆきて、はては淫聲のけしからぬ事になるを、古の聖人あらかじめしろしめして、樂といふ事を作り置きて、謳ひ舞ひ、糸竹鼓の拍子にて人をなぐさめ、湮鬱とて、うもれたる心氣を宣揚發越せしめ給ふ。異國の事はしばらく置きて、我國の古に催馬樂といふは、馬子の馬を逐ふにうたふうたなるを、取りあげて、是を糸竹にあはせて、朝廷の神事にも御遊にも用ひらる。是れ我國のうたひものの始めなりとかや。貫之が土佐の日記にかけるふな人の歌に、

　春の野にてぞねをばなく、わかすゝきにて、手をきる〳〵、つんだる菜を、おややまほるらん、しうとめやくふらん。かへらや。よんべのうなゐもがな。ぜにこはむ。そらごとをして、おぎのりわざをして、錢ももてこず、おのれだにこず。

といへるがごとき、昔は賤しきものの歌も、詞やさしく聞きにくからず。それより後は朗詠ありて、雲の上人のたのしみなり。又其後、今樣といふこと起りて、酒盛など

田樂——法師の業にて種々の樂を付て舞ふ一種の舞、初は農民耕作の勞を慰する爲になしゝものといふ
しれもの——馬鹿もの
詐——一本「誤」
南都——奈良
流俗——風俗
湮鬱——ふさぐこと

にはあらず。今の世にはやんごとなき人も猿樂を好む程にては、必ず自ら其所作をなして樂とす。昔の人に異なり。風俗の下れる悲しき世の有樣なり。前代舊事本記といふ書は大成經とも云ふ。近き頃世のしれものありて、聖德太子の舊事本記の名をぬすみて僞作せるなり。近き世に出で來れる事共を、皆古よりあるさまに書きなせり。其中に、「猿樂も神代に猿女といふ者より始まれり。聖德太子の時、三十六番の猿樂有り。白翁黑翁といふ者あり。指折のつゞみ二つありて、兄皷弟皷といふ」など、あらぬ事を書きしるせり。大なる詐にて、世を誣ふるといふ事是なり。かやうの書を見て、猿樂は往古より此國に有る事ぞとおもはゞ、大なる惑なり。南都の春日の祭に、いづれの頃よりか猿樂をなし、内裏にても、近き世には猿樂を御覽有るは、いかなる故やらん。賤しき東人は得しらぬ事なり。世に古を好む人希なる故に、か樣の事にも心付かず、流俗に隨ひて、筋なき事をもよしと思ひて、其儘に打過ぐるなるべし。

一人生れて、赤子の時は、啼く聲を出す。一二三歲より聲を揚げて叫呼す。四五歲より人をしへざれども、いつとなく歌謠をまねびて、かたことなる童謠をとなへのゝしる。これみな自然なり。人としては聲を出して湮鬱を宣ぶるわざなくしてあられぬ故なり。

無常―一本「無情」

白拍子―昔の遊女のなせし舞の名また遊女をもいふ

佛者なる故なり。武家に猿樂を翫ぶは常の事にて、さも有るべきが、吉事の宴饗に是を用ふる事は心得がたし。酒をすゝむるにつきて、其詞の其事に叶へる一ふしをうたふは、賓主の情をのぶるわざなれば、中華の古人、詩を賦せしに類すべし。猿樂をなせば、幽靈のあらはれて、とぶらひをうくるさま、または世の無常をしらするなど、はかなく悲しき事をうたひまひて、戲むるゝを忌はしともおもはず、只笛鼓にてはやしたてゝ舞ひかなづるを、目出たきとのみおもひて、いまはしきにこゝろづかざるは、愚なる事なり。湊の檢校といひしめくら法師、猿樂を好みしが、常にこの事をいひて笑ひあへり。又武家の貴人、猿樂のうたひものをならひて、一ふしをうたふまでは、せめての事なり。其所作を學びて、猿樂師に打交りて、色々のわざをなしてまひかなでものするは、有るべき事ともおもはれず。異國にて、後唐の莊宗といひし天子、俳優を好みて自ら其所作をなし樂しまれしが、程なく天下を失はれし事、五代史に見えたり。俳優は今の世の狂言なり。士君子の耻づべき事なり。昔平の相國の白拍子を好まれしも、妓王、妓女、佛などいふ白拍子を召してまはせしのみなり。宮女抔に是を習はせたるにあらず。鎌倉の相摸入道が田樂を好みしも、みづから其所作を習ひたる

今の世の猿樂―能樂
室町の時―足利時代
鹿苑院殿―足利義滿
僞樂―一本「俗樂」

り有りしとみゆれども、いかなる戲なりしといふこと詳ならず。今の世の猿樂は、室町の時より始れりとかや。竹田の八郎秦の嘉勝といふもの、此戲をなし始めけるといふ。嘉勝は今の猿樂師の今春大夫が先祖なり。室町の公方鹿苑院殿より、武家にて天下を治め給ふに、古より有り來れる公家の禮樂を捨てゝ、別に禮樂を作らる。禮は今川左京太夫氏頼、小笠原兵庫助長秀、伊勢武藏守滿忠、三人命を受けて是れを議定す。樂は則ち猿樂なり。夫よりこのかた今の世に至るまで、是を武家の禮樂として敢て改めず。武家の禮は皆此國の俗禮なり。猿樂は僞樂なり。猿樂の音はいかれる聲なり。鼓うつ者の口を張りてさけぶも怒るさまなり。孔子の仰せられし北鄙殺伐の聲といふもの是ならん。今の武士はこはばりたる衣服を著て、道をゆくにも臂腿をあらはし、肩を張り、臂をふりていかめしくふるまふによくかなへる俗樂なり。但猿樂には淫聲なき故か、人の心をとらかさず、これのみ他の俗樂にまされり。然れども、猿樂には死せる者の幽靈あらはれて、僧にあひてとぶらひをうけ、罪業を滅し、佛果を得ることを多く作れり。幽靈にあらざれどもおほかた佛道を宗とする趣なる故に、世のはかなき事をしめして、人に菩提をすゝむる心なきはすくなし。是を作れる人、多くは

作らせて、くみと名付けて―一本「作らせ、たくみに名けて」とあり。この本の「くみ」は組歌の意

絃―原本「弦」に作る一本により正す

淫聲―一本「淫奔」に作る

ひねもす―終日

ありき―歩き

越天樂の歌の「ふきと云ふも草の名」といふ歌を本として、色々の歌を誰人にか作らせて、くみと名付けてさま〴〵の曲折をなしけるより、彌世に行はれて貴賤のもてあそびとなれりと聞けり。雅樂には手のこまかなる事なく、一たびに六つの絃を鳴らすを、筑紫箏には一つ二つの絃をならし、ひく手細かにしげき故に、世俗の耳におもしろく聞ゆ。本樂器なれども、繁手に彈じ、諷聲などいふことをすれば、雅樂も淫聲を出す事、琴瑟といへども然なり。越天樂の歌は雅音なるを、のべて筑紫箏の歌となせば淫聲なり。然れども歌の詞猶やさしく、父子兄弟の中にても聽きにくからず、位ある人の前にても賤しからず、婦女の中にもてあそびても、淫聲を進むるまでの害もなし。三味線をひきて淨瑠璃を語るにくらぶれば、はるかにまされり。俗中にて絃歌のもてあそび、昔は唯是のみなりしといふに、今は貴き人もこれを好まねば、況していやしき者は其側に居ても聞かんともせず。江戸の内をひねもすありきても、箏の音をつひにきかず、只三味線の音のみ街にみちてかまびすし。されば、めくら法師にもめくら女にも、箏ひく者今は百人に一人なり。風俗の衰へて賤しくなる凡此たぐひなり。

一猿樂といふことは、玄惠法師がかけるといふ庭訓往來に見ゆれば、鎌倉北條家の時よ

所作―業

樂器―雅樂に用ゐるもの

配所―流されし土地

檢校―盲人の官名

皆むかし物語にて詞やさしかりしに、其後此藝に上手あまた出來て、我おとらじと巧をきそふ程に、樣々の妙曲を作り出して、人の聽を悅ばしむ。淨瑠璃も俗に遠き鄙俚猥褻なる事を語る程に、今に至りては、詞極めていやしく、淫聲いやまさりて、少しも心ある人は、聞くに忍びがたく耳をおほふ。是を面白くおもひて樂む、淺ましき世の風俗なり。昔なき斯樣の事の出できたれるは、誠に國家の大なる病なり。のぞかずばあるべからず。たとひ俄に禁止せずとも、三味線淨瑠璃は非人の所作に定めて、座敷に上らぬものとせば、士君子はおのづから是をもてあそばざるべし。これ風俗を正しくする所の道なり。胡弓と云ふ物は三味線の類なれども、其業ことにいやしげなるにや、好む者少し。唯めくら法師非人の所作にてやみぬれば、風俗を破る程の事なし。箏は元樂器にて、管絃にのみ入りしに、いつの頃にかありけん、一二百年の昔、公家の人筑紫に流されて、配所のつれ〴〵に、箏の手をひきかへて煩手になし、雅樂の越天樂の歌を延ばして節をながうして、是に箏を合はせてひかれしを、筑後國善導寺の僧、其曲を習ひつたへて、世に弘めしより、筑紫箏と名付けて、世のもてあそびとなれりとかや。其後八橋の檢校と云ふめくら法師、此曲をならひて殊に上手成りしかば

が桑林の間濮水の邊にて聞きし琴聲、淫亂の聲なり
風を移し俗を易ろ—風俗を移し易ふるなり
ちからなり—一本「功なり」

有る事をいへるなり、今の世の好み樂む三味線淨瑠璃は、古の鄭衞桑間濮上の淫聲にも過ぎなんとぞおもふ。昔はかやうの俗樂なかりし故に、矢作の長者の女、手越の遊女までも、雅樂を習ひ知れり。今は色々の俗樂ある故に、やんごとなき人々も是れを好みて、雅樂を習ふ事なし。雅は俗に遠く、淫樂は俗に近き故なり。孝經に「風を移し俗を易ふるは樂より善きはなし」といへり。あしき風俗をうつしかへてよくするは、雅樂のちからなり。善き風俗をうつしかへてあしくするは、淫樂の力なり。雅樂にて風俗をよくするは其しるしおそく、淫樂にて風俗をあしくするは其しるしはやし。されば、たとへ雅樂世に行はれても、淫樂を禁ぜざれば、雅樂すたれやすし。孔子の「鄭聲をはなて」とのたまへるは此故なり。今の世には、雅樂たえてなくして淫樂のみさかりなる故に、士民の風俗年を追ひてあしくなりくだること、走る馬のけはしき坂を下るが如し。貞享より元祿の初までの人の風俗を思ひ出して、今の人の有様をみれば、衣冠せる人の傍にて、赤裸なる人を見るが如し。五十年の間にかく計の變化あるは、いかなる事ぞや。全く是れ淫樂のなす所なり。三味線淨瑠璃は、元より淫聲にて、百年以來の物なれども、貞享の頃までは、三味線も今の如く煩手にあらず、淨瑠璃も、

ほろびにたれど―一本「亡ぶに似たれど」

千壽―平家物語に詳なり

妓女―あそびめ

やんごとなき―身分の高き

桑間濮上の音―昔衛君

みにて、淫樂なかりしと見ゆ。中古より白拍子、今樣などいふ者有りしかども、白拍子は今の大頭の舞その名殘ならんと思ふ。妓舞なれども古風猶のこれり。今樣はほろびにたれど、一つ二つ殘りて、人のうたふを聞くに、古雅の趣き、今の世にはたぐふべき物なし。此外に淫樂といふ物ありし事をきかず。されば、俗說にいふ、三河國矢作の宿の長者の女淨瑠璃が、侍婢を集めて管絃せしは、賤き者も外の翫びものなかりし故に、雅樂を奏してつれ〴〵をなぐさめけるなり。又平の重衡捕はれて關東に下りし時、旅寓のつれ〴〵をなぐさめんとて、駿河國手越の妓女千壽をすゝめしに、重衡琵琶をひかれしかば、千壽箏をひきて五常樂、皇麞、廻忽などを奏せしといふ。上りし世の風俗といひながら、いとやさしくたふとき事にあらずや。今の世には諸侯、貴人やんごとなき雲の上人も、雅樂をもてあそび給ふ事なく、筑紫箏をだに好み給はず、唯三味線、淨瑠璃をもてあそび給ひ、賤しき妓女を宮中に召して歌舞をなさしむるのみならず、あまたの女僕を蓄へ置きて、夜となく晝となくあらぬ戱をなさしめて、是を樂しみ給ふ類を多く聞けり。淺ましともいふ計なし。樂記に「鄭衛の音は亂世の音なり。桑間濮上の音は亡國の音なり」といへるは、淫樂に世を亂り國を亡ぼす道理

一節斷―尺八に似て細く短きもの

鄭聲―鄭國の樂極めて淫猥なりしもの

鄭衞―共と國名なり

もまばらにして、筑紫箏に類せり。うたふ唱も、詞やさしく節もゆるやかにて、俗調といひながらいやしげすくなかりき。近き頃は、調子高くひく手も甚だせはしくこまかなり。うたふ歌も、詞いやしく拍子つゞまりて、いそがはしさいふ計なし。淫婭の至極、人の心をやぶる事是に過ぐるものなし。凡雅樂は、拍子まどほにて、糸竹ともに手をつかふ事まばらなり。雅樂とは正樂をいふ。淫樂は煩手とて、手をしげくす。今の三味線、牧笛、尺八、一節斷、皆煩手なり。中にも三味線の煩手、たとふべきものなし。箏は雅樂の器なるが、筑紫箏になりて俗樂に落ちぬれども、其聲もと雅音なるゆゑに、いたく人の心をとらかさず。今の人雅樂を學ぶ事あたはずとも、せめて筑紫箏をもてあそばゞ猶少しよかるべし。牧笛、尺八、一節斷は、俗樂にて煩手なれども、三味線の如く淫聲にあらず。凡そ俗樂のあらゆる樂器の中に、三味線ほどの淫聲なし。古の鄭聲はいかなる聲にてか有りけん、孔子の「鄭聲をはなて」と宣ひしは、雅樂を妨げ風俗をやぶる故なり。世に雅樂ありても、鄭衞の淫聲を禁ぜざれば、雅樂行はれがたし。今の世には、雅樂絶えてなくして、淫樂のみ盛に行はるれば、風俗の衰敗する事甚だ速なり。我國の古を考ふるに、朝廷より民間に至るまで、雅樂の

多かりけり―一本に「けり」なし

鄙俚―鄙びたること

「面白き事と」の下、一本、「思ひて興じけるに」とあり

世に賤しき―一本「世の賤者の」

あらぬ―一本「あらざる」

筑紫箏―今行はるゝ十三絃の琴

演ぜし故に、詞やさしくつゞりなして、哀れにをかしき事も多かりけり。淫聲といひながら、忠臣、孝子、義士、節婦の事をいへれば、おろかなる小人女子も、是を聞きては感じあへり。元祿の頃より稍々ます〳〵俗に近くなりて、淫靡の聲のみ多し。寶永の頃京の淨瑠璃師江戸に來りて、鄙俚猥褻なる淨瑠璃を唱へしより、江戸の人是れを面白き事とおもひ、もて興じけるに、享保の初に、また難波の淨瑠璃師來りて、かなたなる俗調を弘めし程に、江戸の人々彌々是れを好みて、江戸の舊き淨瑠璃を捨てて、ひたすら京、難波の淨瑠璃を習ふ。賤しきもののみにあらず、士大夫諸侯までも是れを好みて、一ふしを學ぶ人有り。こゝに至りて、昔物語を捨て、只今の世に賤しき淫奔せし事を語る。其詞の鄙俚猥褻なること言ふばかりなし。士大夫の聞くべき事にあらぬはいふに及ばず、親子兄弟なみ居る所にては、面をそむけ耳をおほふべき事なり。されば此淨瑠璃さかりに行はれてよりこのかた、江戸の男女淫奔する者數をしらず、元文の年に及びては、士大夫の族は言ふに及ばず、貴き官人の中にも、人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にても、姦通するたぐひ、いくらといふ數を知らず。是れ正しく淫樂の災なり。三味線も寬文延寶の頃迄は、調子ひくく、ひく手

本「すぢなきものなり」

阮咸―字は仲容竹林七賢の人なり

見にくし―一本「みぐるし」

忽ちに―一本「俄に」

小野氏の女―名をお通といふ、其年代につきては説區々なり、其作は卽ち十二段草子なり

かず。

一今の世の淫樂多き中に、糸竹のたぐひには三味線、うたひ物類には淨瑠璃に勝る淫聲なし。三味線は琉球國の樂器なるを、慶長の頃とやらん此國に傳へしといふ。昔晉の阮咸の造りし樂器を阮咸といふ。此國に傳はりて昔はもてあそびけるにや、延喜式に載せたり。今の三味線は阮咸の遺制なりといふ、如何あらん。阮咸は如何成る制にてか有りけん、今の三味線は甚しき淫聲なり。其作り琵琶に似たるやうにて、琵琶にくらぶれば形甚だいやしく、是を彈ずるさまも極めて見にくし。此聲纔に發すれば、忽ちに人の淫心を引起して、放僻邪侈に至らしむ。其害いふ計なし。士君子のかりにも聞くべき物に非ず。淨瑠璃といふ物も、三味線と同じ頃に始れりと聞ゆ。小野氏の女、三河國矢作の宿の長者の女淨瑠璃といひし者の事を、十二段の昔物語に作りしを、其頃の目くら法師、是に節を付けて語り出せしとかや。後の人是れにならひて、色々の昔物語を彼の體に作りてもてあそぶ、本淨瑠璃が事を演ぜしより始れる故に都べて其名を淨瑠璃といふ。三味線の聲是によく叶ふ故に、淨瑠璃に必ず三味線を合せて、世俗の上なきもてあそびとなれり。然るに、寛文、延寶の頃迄の淨瑠璃は、皆昔物語を

意趣—心持ち

えもしらぬ—一本「えもしれぬ」

ものしれるやう—一本「ものしれる趣」

いやしきものなり—一

風早と聞くもおそろしけふの火や

とのたまひければ、公長卿とりあへず、

清水谷とてやけものこらず

と答へ給ひしとかや。これらをこそ眞の俳諧といふべけれ。和歌道おとろへたれ共、公家の人々には猶かやうのやさしきたはむれあり。此頃の俳諧といふ物は、さのみ笑ひ興ずるほどのをかしき事をいはず、連歌の詞に似て連歌にもあらず、意趣いかにも知りがたし。さしよりて其人にとひなじれば、俳諧は古今集に見えて和歌の一體なるよしを口に藉き、唐の大和の故事共を引きて其道をたふとくす。しかれども、其句をかき付けたるを見れば、何やらんえもいはれぬ事を、えも知らぬ文字にて記して、ものしれるやうなり。凡俳諧の草紙、究ていやしきものなり。俳諧師といふ者、極めていやしき者にて、諸侯貴人のもてあそび物になる故に、やんごとなき人々になれ近づきて、さま〴〵のよからぬ事をすゝめまゐらする類世に多し。士君子の友とすべきものにあらず。心あらん人はきびしく禁ずべき事なり。近き比は諸侯貴人も多く是れを好むことになれり。よからぬ風俗なり。いたく俳諧を好む人に能き人をいまだ聞

の字あり

住吉玉津島の神—共に和歌の神なればいふ

戯と—一本「戯に」

殿上人—昇殿を許さるる人、四位以上の公家六位の藏人

付といふ。此三笠付盛になりて、賤き者は言ふに及ばず、士君子も是をなして得つかんとするほどに、得は付かずして多くの財をつひやし、身を失ひ、家を亡す者數をしらず。此事上にきこえて、享保の初よりきびしく三笠付を禁ぜらる。其後禁を犯して刑罰にあふ者あれども、今に至るまで猶たえずと聞ゆ。和歌の流、その末變じて博奕となるべしとは、住吉、玉津島の神もいかでしろしめさん。淺ましく悲しきは、俳諧のわざはひならずや。凡むかしより戯に詠みたる歌、又時の人を嘲り笑ひたる狂歌の類、古き物がたり草紙に記し置きし事は、皆俳諧なり。しかれども、古き狂歌は詞いやしからず、きたなき事を言はず、父子兄弟の中にてとなふるに聊かさはる事なし。近き世に、江戸の醫師卜養といひしもの、狂歌に巧なりしも、世の諺のなれたる事共を戯といひかなへて、をかしき事多きのみにて詞いやしからず、やさしき姿なれば、其品くだらず。猶俳諧歌のたぐひなるべきか。此頃の俳諧といふ物にはまさるべし。寶永五年の春、京師火災にて、内裏炎上し、公卿殿上の人の第宅殘りすくなく燒け失せたりしに、淸水谷の大納言實業卿、風早の參議公長卿も火事にあひて、爰かしこにげまどひ給ひけるが、二人道にて行きあはれしに、實業卿、

賞―景物なり
布帛―反物
そこばく―若干
點錢―點をかくる禮金今いふ入花料
げす―下衆賤しき者共
三笠付の上に一本「猶」

優劣をあらそひあへるのみなりしに、元祿の初の頃より、前句付といふ事起れり、其法、宗匠より下の句を一句出して、多くの人に上の句を付けさせて、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第にしたがひて賞を行ふ。其賞、或は布帛、或は器物など、そこばくの値あるものを出す。布帛、器物に望なき者は、其器なる金銀を取る。この賞を得んとて、貴賤となく我も〳〵と句を付けて、日々に點錢をつひやす。是れ則ち博奕の類なり。此事盛に行はれて、世の俗人皆これを好む程に、下の句に上の句を付くるも猶むづかしとて、宗匠より上の句の初の五文字を出して、次の七文字、五文字を諸人に付けさせる事になれり。是を冠付とも笠付ともいふ。かくいやしきわざとなりぬれば、下部のわらは、げすまでも俳諧といふ事を知りて、笠付して褒美をとらんとする程に、詞いよ〳〵いやしくなり。寶永の比より、冠の五文字を三つ出して、三つ冠に各七文字、五文字を付けさせて、勝負を分くる事あり。是を三笠付といふ。是彌々博奕に近し。其後五文字の冠をも出さず、下の七文字、五文字の詞をもやめて、只數の文字を封じて、外より此數をはかりて札を入れて、其數のあたれるを勝として金銀をとらする事になりぬ。爰に至りては、正しく博奕なれ共、本の名を存して三笠

中華—支那人が自國の誇稱

貞德—松永貞德

宗因—西山宗因

くだれる品—下品

連歌といふ名出で來れり。中華に聯句といふ事ありて、五言四句を、一人二句づつ作りて、人あまたして數十百句もつらぬるなり。此國の連歌は、彼聯句に倣へる物と見ゆ。連歌は和歌のたぐひなる故に、歌人も是をきらはず。後世に及びて、連歌師と云ふ者出來て、さま〴〵の式法を立て、遂に世のもてあそびとなれり。近き世に及びて、又別に俳諧といふ事出來て　賤しきたはむれごとをつゞりて、連歌の如く長く連ねてもてあそびとするは、俳諧の連歌なり。その初連歌師の輩、連歌の句に、たはむれごとの連歌にはいひがたき程の事を、一句二句つらねて笑ひ興じたるを、其後俳諧師といふもの出來て、是を專にすることになれり。貞德、宗因、芭蕉翁などいふ者是なり。されど、貞德等が時の俳諧は、たはむれ事ををかしくいひなして、うち聞く者、こらへずわらひ興ずるのみなり。芭蕉翁迄は猶その體なりき。夫よりくだりては、ひたすらにをかしき事をいはんとて、下部の者迄も、うち聞きて悦ぶ樣なることをいふ故に、極めていやしきことをきらはず、親子兄弟の中にては、いひがたく聞きにくき事をもいひ出す。俳諧の中にても至りてくだれる品なり。然れども五十年前は、只歌仙とて三十六句つらね、或は五十韻百韻とて、連歌のごとくつらねて、宗匠の點を乞ひて、

いへり——一本「いふなり」

滑稽は俳諧の如しと言へり。俳諧とはたはむれをいひて、人を悦ばせ、人の心に叶ふをいへり。古今集には俳の字を誹に作れり。誹の字は謗の字とつらねて、誹謗はそしる義なるを、俳の字にかへて用ふる事いかなるゆゑといふことをしらず。誹の字と俳の字と、音も義も大に異なるをかよはして用ふる事、字書に見えず。恐らくは古今集の誤ならん。古今集に載せたる俳諧の歌は、只常の歌のごとくにて、詞すこし常のにかはるのみなり。かりそめに見れば、只常の歌とみゆ。くはしくまなばざれば、俳諧の姿を知りがたし。連歌と言ふこと中古よりはじまりて、末の世に盛なり。其本は、三十一字の歌を二ッにわけて、二人して唱ふるなり。たとへば、近衛院の御前にて、宇治の左大臣、

ほとゝぎす名をも雲井にあぐる哉

とのたまひしに、頼政

弓張月のいるにまかせて

と申されしなど、是も連歌なり。此事は上代より有りしかども、連歌とはいはず。後の世に及びて、上の句下の句をいくらもつらねて、ながくいひのぶることになりて、

迷ひ――一本「惑ひ」とあり

漆器――うるしぬりのうつは

利休、宗旦等が外には、片桐石見守貞昌、小堀遠江守政一なり。此人々は、貴賤異なれ共、皆聖賢にあらず、常の人なるに、今の茶人必ずこの人々のしわざをまねびて、是は利休が法、これは遠州の法、是は石州の法として、禮法を守るがごとく一向に堅く守りて、少しもたがはじとす。かたはらいたき事なり。今にてもあれ、世にいきほひの有る人、茶をもてあそび先輩に替りて新らしき業をしいださんに、與する人あまたありて、爰かしこにて、其しわざをまねびてせば、やがて一流と成るべし。是れ茶の道に一定の法なき故なり。我も平生茶をたしむ故に、人の許にて美膳などくひたる後に、上品の抹茶を濃く點じて出さるれば、口に叶ひて甚だ快し。但それも廣き座敷にて、くひ物を心に任せてくひ、酒も人にくませて飲み、點心もよく喰ひて、茶をもあたらしき茶碗にて、つかふ者の點じたるを、人々別なる茶碗にて飲むはよし。今の世の茶の道は、極めていとはしきわざなり。茶を貯ふるは、此方の磁器にもさるべき物有り。さもなくば、棗の形なる漆器よし、銀器、錫器もよし。茶を扱ふには、銀の茶匙を用ふべし。茶碗はいかにもあたらしきをもちふるぞいさぎよく心よき。

一俳諧は和歌の一體なり、古今集に見えたり。史記の滑稽傳の註に、姚察が話をのせて、

なる事もある故、樂器は少しも舊きを寶とす。樂器の外は、大かた何の器も、舊きはあたらしきに若く事なし。中について、のみくひの器は、いかにも新らしきを悅ぶ事誰も同じ心なり。茶具の中にて、釜計こそ舊きを用ふべけれ。茶碗はいかにも新しきを用ふべき物なるに、幾年を經たるとも知れず、何人の口の垢やらん染みてけがれたる、しかもかけ損じたるを繕りて、けがらはしとも思はず用ふるは、そもいかなる心ぞや。昔夜光の璧といひし玉は、夜車十二乘を照しける故に、世に希なる寶とて十五城にかへけり。明月の珠といふは、夜を照すこと明月のごとくなりしとかや。かやうのすぐれたる德あるものを寶として、多くの價にかへたるは、さも有るべき事なり。古畫、古墨蹟などを寶とするも、其畫書のたくみの、世にすぐれたる所をもてあそび、且は今の人の其業を學ぶ者の法則となるをたふとむ故に、力ある人は、金錢ををしまず、其代を出して是を求む。うつけたる事にあらず。今の世の茶をもてあそぶ人は、何の珍敷事もなく、すぐれたる德もなき常の磁器を、千金萬金に買ひ取りて、上もなき寶と思ひ、させることもなき人の作れる竹の筒、竹の篦などを、百金にも買ひて、世にめづらしき物ぞとおもふは、大なる迷ひなり。近き世に、茶の道を弘めし人は、

馳走
まれび―學ぶことと眞似すること
奇なる事―一本「あやしき事」
繕りて―一本「つくろひて」同意なり
畫書―一本「書畫」
法則―手本
うつけたる―たはけたる愚なる
磁器―燒きもの

寺
茶道―一本「茶堂」とあり。此方よかるべし
堅緻―質のかたくして密なること
大廈―大なる館
さつて―一本「さけて」
しつらひ―設け裝ふこと
樂みけるなり―一本「樂めるなり」
美膳―よき

み給ひ、朝暮に是を玩び、東山の慈照院の銀閣にて、茶の會しば〱なり。しかれども、義政は天性奢侈を好み給ひし故に、茶をもてあそばるゝにも、茶道より茶具に至るまで、必ず堅緻にて美麗なる事を好み給へり。今の世の茶人のごとくにはあらず。東山殿の調度とて、今に傳はれるを見るべし。近き世の茶人は、利休居士を祖師とす。利休は獨身の禪門にて、貧賤なるが、草の庵のせばき内にて茶をたのしみけるを、當時の諸侯富貴の樂みにあきて、利休が貧賤寒酸の樂みをしたひ、大廈高臺をさつて一間なる所をしつらひ、其内にててづから茶を點じて、人にのませて樂みけるなり。本獨身の禪門の、まづしくやつ〱しき者の樂みを學びたる故に、一間の作りより始めて、もろ〱の器物に至る迄、皆あたらしき物を用ひず。くひものにも、美膳をきらひて淡薄なる物をこのむ。凡茶人のなすわざこと〴〵く貧賤なる者のまねびなり。されども富貴なる人は、貧賤なる者をまねび樂みとするもいはれあり。元より貧賤なる者、何ぞ更に貧賤のわざをまねびて樂しむことあらんや。今の世に、富貴なる人おのが好む心より、貧賤なる者を茶に請ずるは、心得ぬ事なり。凡萬の器の中に、舊くて善き物は樂器なり。昔の上手の作りて多くの年を經たるは、必ず妙なる聲出でて、奇

びたろ」とあり同意なり

瀹す—湯にひたす

茶筅—茶をたてる時にかきまはす器

從者—とものもの

五山—鎌倉にて寺格の高き五の禪

の人のするわざのごとし。陸羽等が茶を煎じ、或は瀹すには、水を選む事甚だし。詳なる事は茶經に見えたり。陸羽等が茶をもてあそびし有樣は、今の世の茶人に似たり。陸羽が同時に常伯熊といふ人も、茶を嗜みて茶の道に精しかりけり。李季卿といふ人、丞相李適之が子にて、其身御史大夫の官なりしが、天子の使をうけ給はりて江南の方に往き、臨懷縣といふ所の旅館に著きしに、或人常伯熊が茶の道に達せる事を言ひしかば、やがて伯熊を旅館に請じ、茶をおこなはせけり。其時伯熊、黃なる衣に黑き紗の帽子を著、手に茶器を持ち、口に茶の名を唱へ、ねんごろに用意して、法の如く茶を煎ず。側にて見るもの、目をぬぐひて奇異の思ひをなせり。茶煮えければ、季卿二杯すゝりてやみぬ。夫より江外といふ所に至りて、又陸羽を請じて行はせけるに、陸羽野服を著て、茶具を先に立てゝ行きける。その作法こと〴〵く伯熊に同じ。季卿茶をば飮みけれども、此人共のしわざを見て卑しき事と思ひければ、從者に命じて、錢三十文を陸羽に與へしむ。陸羽大きにはぢくやみて、是より茶を弄ぶ事をやめて、毀茶論をあらはしけるとかや。我國にては、鎌倉の時、五山の禪僧、異國より茶を持ち來りて弘めしが、世の人さのみもてはやす事もなかりしに、室町の公方義政是を好

維摩居士—釋迦と同時の人—に淨名居士といふ
方丈の室—一丈四方の室
狗竇—いぬくぐり
調度—器物什器
物喰をしき—膳
やつ〳〵しき—やつれたる貧しき姿
まねびたる—一本「學

なれば、白晝にもくらく、夏は甚だあつし。客人の出入する口は、狗竇のごとくにて、くゞりはらばひて入れば、息こもりてそもたへがたし。のみくふものも、人の口に好みにくむものもあるに、主人のいかにこゝろづかひせりとも、口にかなはぬ物をば、かならず殘さずくはんとするも苦し。させる事もなき器を、珍らしげにほむるもそらはづかし。又物ずきとて、家の作りよりもろ〳〵の調度に至るまで、常にかはりて珍敷やさしき事をばすれども、茶人の家居は、必ず柱などもほそく、障子の骨までも風にたへぬばかりに細くす。或は丸くゆがみたる柱を、皮ながら用ひなどして、ものずきをかしともて興ず。物喰をしきも、足の高きを嫌ひて、平をしきを用ふ。すべて茶人の物好といふは、よろづ何事も貧しくやつ〳〵しき樣をまねびたる物なり。茶の道のおこりを尋ぬるに、漢土にては、南北朝の頃より、茶を飲むこと始まれりといふ。唐の代に至りて、世に盛に行はる。盧仝、陸羽はなはだ是を好めり。盧仝は茶の歌を作り、陸羽は茶經をあらはせり。其時の茶は、或は熱湯に瀹し、又は煎ず。或は細末となすを抹茶といふ。熱湯に點じて呑む、是れ今の茶人の用ふる茶なり。あるひは細末の茶を丸となすを團茶と云ふ。是も熱湯に點じて飲む。點茶には茶筅を用ふる事、今

病もなきに苦しみをめくに譬ふるなり
鬼神を感ぜしむ—古今集序にあり
汚穢—けがれ
唾壺—灰ふき
抹茶—ひき茶
撤す—膳部を持去るなり
點心—茶請の菓子

事言ふばかりなし。朝鮮國の人の常に用ふる唾壺の舊きを求めて、抹茶を貯へて是れを茶入といふ。これもけがらはし。竹箆を撓めて匙として茶を掬ふ、是れを茶杓といふ。人に茶を呑するに、まづかこひとて一間なるせまき所に集りて、くひものも人によそはすることなく、手自もりくひ、酒も自らくみのみて、其うつはものをも手づから洗ひ拭ひて撤す。點心くひて後出でて口すゝぎて入る。あるじみづから茶を點じて客人にたてまつれば、一つの茶碗に點じたる茶を、上座の人すこし飲みて次の人に傳ふ。三人にても五人にても次第に飲みて、末座なる人殘なく飲みて、其茶碗を上座に授く。上座の人取りて子細に見て、珍器なる事をほめて、又次座の人に傳ふ。次座の人も子細に見て、次第に傳へて末座にいたる。末座の人見終りてあるじにかへし、客人一同に謝詞をいたして頓首す。次に茶碗の袋を乞ひて見、次に茶入を見、次に茶入の袋を見、次に茶杓を見る。みるべき程の珍器にあらざれども、請ひ見るを禮とす。爐に炭を置くをば、客人さし寄りて見て是をほむ。瓶に花をさせばほむ。大かた何にても、主人のする事を見てほめずといふ事なし。諂の至りといふべし。かこひのつくりは、傳へ聞く、維摩居士が方丈の室よりも今少しせまくして、小さき窓をあけたるのみ

てわすれず、其意も人の解説をまたずして知る。かりそめに吟ずる時は、さのみをかしき事もなきやうにて、諷詠玩味すれば、限なき興致あり。今の人の歌は、詞むづかしくて、再三聞くも、耳を過ぐれば則ちわする。人の解説を聞くもその心通じ難し。歌のよきあしき是にても知るべし。古人の詩は、必ず實境に對し實事ありて漫興より出づる故に、其意皆實なり。後世の詩は、題を設けて作る故に、其意おほくは虛僞なり。是を無病呻吟といふ。呻吟はをめくなり。和歌も、古の人は皆實意にて詠めり。後世は題を設けてよむゆゑに、おほくは虛僞の詞なり。

しら〴〵しらけたる夜の月影に雪ふみわけて梅の花折る

といふ歌こそいと面白けれ。實境に對して詠める歌は、皆此の如く、わづかにとなへ出せば、則ち其時の事想像せらる。和歌の妙なり。天地をうごかし鬼神を感ぜしむること此境に有り。今の歌はしからず。

一近き世に人のもてあそぶ茶の道こそ心得ぬ事なれ。「器は舊きを求むるにあらず。維新らしきをす」と、尙書にいへるに、今の茶人は、幾年を經たるともしれぬ舊き茶碗の、汚穢不淨にして、然もかけ損じたるを、漆などにてつくろひて用ふ。けがらはしき

に行く道とは兼て聞きしかど昨日今日とは思はざりしを
わすれては云々—忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは
毛詩—詩經の別名なり
颯々—風の動く貌
萋々—草茂る貌
虛僞—いつはり
無病呻吟—

知音―心の友、よく我を知る人

陽春白雪の曲―詩詞の高き調をいふ文選に見ゆ

巴里下人の曲―通俗の下卑たる調

月やあらぬ歌―月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

つひに行くの歌―つひ

のおほきをほまれとする故なり。わが先師徂徠先生いはく、「異國とわが國と風俗大きに異なる中に、唯詩と歌との道ばかり、詞のことなるのみにて、其趣全くおなじ。人情おなじき故なり」又いはく、「和歌は人麻呂、赤人の外、在原業平を上手といふべし。伊勢物語に載せたる歌、絶妙なる多し。「月やあらぬ」の歌を見るに、何等の感慨ぞや。「つひに行く」の歌は、古今の辭世絶唱なり。惟喬の皇子をとぶらひ參らせて、「わすれては夢かとぞおもふ」とよまれしは、歌すぐれたるのみにあらず、節義の心詞の外にあふるゝか」とぞいはれし。毛詩に「蕭々馬鳴悠々旆旌」と云ふは、軍中の靜なる狀をいへり。馬のいなゝくを聞き、旆の風にひらめくを見るのみにて、他は言ふべき事なき所を、この兩句にていひ盡せり。楚辭に、「嫋々兮秋風。洞庭波兮木葉下」といへるは、秋風そよ〳〵と吹く時洞庭湖に波たち、湖邊の木の葉はら〳〵と落つるといへるのみにて、外に珍敷事も六箇敷事もなし。然れども、此兩句を吟詠すれば、洞庭の秋の氣色、今も目前にあらはるゝ樣におもはる。又「王孫遊兮不歸。春草生兮萋々」といへるは、人をなつかしむ心限なき感慨なり。これ等は皆詩の佳境にて、和歌も又此意なり。古の能き歌といふは、一度聞けば則ち耳にとまり

の事なり

足りぬ――一本「足れり」

一本、「稀なれば」の下に「我」あり

賤山がつ――山里に住む杣人など賤民の稱

服部子遷――名は元喬南郭と號し春臺と同じく徂徠の門人にして詩に高名なり

士庶人――一般の人々

べし。和歌の道のみにかぎらず、萬の事皆是に同じ。我詩の道を以て推して歌の道を知れることかくのごとし。詩は異國の詞なり、歌は我國の詞なり、詩にくらぶれば、甚だやすき事なり。學びやうのあしきと、志を立つる事の高からぬにて、古の賤山がつにも及ばぬは、いと口惜しき事ならずや。吾が友服部氏子遷は、和歌の道を知りて後に詩を學び、詩の道をさとりて遂に上手の名を得たり。されば今公家の人々に、我が輩のいふ詩の道を說き聞かせたく思ふなり。此道を聞きて悟を開き、我輩の詩を學ぶごとくに和歌を學び給はゞ、必ず古人に及ぶべし。さもあらば、おほくの人の中に傑出の人などか出來ざらん。今公家の人々、和歌の道を古にかへすべき事を思はずして、五百年來定家卿の敎を守りて、道の衰へゆく事を知らず、至りて歎かはしき事なり。今の士庶人、我此說を信受して、詩を學ぶ道を以て和歌を學び、一己の精力にて歌道を悟り、上代の歌に似たるばかりの歌をよみ置きたらんに、身の後に知音ありて、必ずとりあぐべし。其時、此歌は師範なく、公家の人に學ばず、自力にて讀みたりとて、いやしめすつる事はある間敷なり。陽春白雪の曲は和するものすくなし、知音の士にあらざれば、是を賞する事なし。今の人はたゞ下里巴人の曲をうたひて、和するも

賤の男賤の女—下級の賤しき男女
上つかた—上代
思量—思ひ考ふること
いたりぬべし—一本「足りぬべし」
わが庵の歌—わが庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり
身の後に—身後。死

上つかたの歌を、數千首そらんじたる上にて。好き歌をばよみ得べし。扨詠みたる歌を、必ず人にみすべしともあらず。まして公家の人々に見せて、稱美を得て名譽を求むべきにもあらず。我が心にて幾度も玩味諷詠し、古歌に引きくらべて、其似たると似ざるとの所を思量せば、何ぞよしあしの見えわからざることのあらんや。かくのごとくにして、歌數多く讀まば、其中に一首二首、古人におとらぬ歌、などかなからん。身一生に勝れたる歌一二首ありて、人にも稱せられなば、不朽にいたりぬべし。喜撰法師が、我が庵はの歌にて、名を千歳に遺したるを見るべし。さりながら、當時の人に知られんことを求めず、詠みたる程の歌を書きしるして、知りたる人一人二人にも遺しおきたらんに、當時は取り囃す人なくとも、百年の後に貫之、躬恒なる人あらば必ず取上ぐべきなり。凡そ人の德行も才藝も、當時には知る人なくて、身の後に、世上の論さだまりて、信ずる人も譽る人もあるものなり。然るをおのが一生の内に知られんとずる故に、きたなき心起りて、大事をあやまる。これ其志の高からぬなり。昔虞仲翔は、「天下に一人我を知る人あれば恨ざるに足りぬ」といひ、老子は、「我を知る者稀なればたふとし」といへり。此位にたてらば、ほまれを當時に求むる心やみぬ

の學問

極意―奥義に同じ

金科玉條―科條はおきて、法律。金玉は美稱

貫之―木工頭なりき

府生―右衞門府の下官

地下―堂上に對して五位以下の昇殿を許されざる人をいふ

愚意に思ふに―一本「愚思ふに」

き者どもなり。此輩皆歌道に達せし故に、撰集の勅を請けたり。歌道の盛んなりし時だに、高位の人には達者希なり。況や、今の世歌道衰微の時に、公家の高位の人に、何として上手あるべきや。我に眼なきゆゑに、公家の名家にて歌所と定められたる人をば、必ず上手ぞと思ひて、其添削批判を受くるは、淺ましき事なり。然れども、名利は悲しきものにて、譽を當時にとらんとおもふより、公家の名家の稱美を得て、世にほこらんとはかるなり。愚意に思ふに、歌道は師に付いて學ぶに及ぶまじ。但歌道の書は、傳受なくては讀みがたきものなれば、其事心得たる人にしたがひて書をば讀み習ふべし。已に書を讀み習ひたる上は、萬葉集より三代集までを、くり返し千遍讀みなば、おほかた諳んずべし。詞をそらんじて、朝夕諷詠すれば、自然に風調をも悟るなり。其間に古今の諸家の歌學の書を讀まば、法をも知るべし。其上にては、花を見月に對して、人情興感の事ある時、自然に三十一字をつらね出すべし。是眞の和歌にて、上代の人の歌は、皆此境に至りて詠み出したるものなり。上代の人は、自然の風俗にて歌を詠む故に、師に學びたる人はなし。されば賤の男賤の女も皆能く歌を詠む後世は風俗移りかはり、人の詞も古におよばぬゆゑに、今の人は必ず三代集より、

しは、後に見ゆる如く百首を撰ぶ時、定家の改めたるなり。

峨眉山月の詩―峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州

三代集―古今集、後撰集、拾遺集

異國―支那をさす

道學―道德

國に渡り、菅相公甚だ是れを好み給ひけるとかや。夫より公家の人々、皆々樂天が詩をおもしろき事とおもひて、其風調を和歌に移されし程に、其後の歌は三代集の體を失へり。又源平の亂の時、異國は宋の代にて、程氏、朱氏の道學興りて詩の道おとろふ。我國にも、俊成定家の歌道行はれて、萬葉集、古今集の風體衰へたり。俊成卿は天臺の佛法をまなびて、一心三觀の理を歌道の極意とせられたり。其子定家も亦其家訓を請けられし故にや、詠出ださるゝ歌、皆理窟にて、くだ〳〵敷事多かり。異國も我國も同時に詩歌の道衰へたるは、誠に氣運の然らしむるゆゑか、悲しき事なり。凡我國の歌は、定家卿より衰へたりと思ふ。爲家卿は又定家卿よりもおとられたるよし、然るに其後の人、京極家の教を尊信して、今の世までも堅く守り、金科玉條と心得るは口惜しき事、歌道の一大厄と云ふべし。今の人、書をよむ程にては、必ず公家の中の名家なる人を師として學ぶ、是大なる誤なり。古より、惣じて位高き人にものの上手はなき物にて、上手はいつも賤しきものに出來るなり。歌の道にても、人麻呂、赤人は貴人にあらず。古今集を撰びたる人々にも、友則一人、大内記にて五位の官人なり。貫之は又其下と見ゆ。躬恒は甲斐の目、忠岑は右衛門府生なれば。皆地下の賤

見えわく―見分け得る
はらめる―ふくめる
しもつかた―以下
吉備公―吉備眞備
あをうなはらの歌―有名なる「あまの原ふりさけ見れば云々」の歌。初句を「天の原」とせ

人にことならぬやうになるなり。詩の道かくのごとし。此理を以ておしはかれば、和歌の道も亦かくのごとくなるべし。我和歌を學ばねば詩の道をもつて考ふるに、今の世に居て、古におとらぬ歌をも詠出だすべきことは、さのみ難きことにもあらじ。詩を見たる眼にて歌を見れば、歌の位も姿も明らかに見えわくなり。萬葉集の歌は風雅なり。漢魏の古詩迄を兼ねて、稍盛唐の詩をはらめる物也。古今集の歌は、正しく盛唐の詩なり。後撰、拾遺の二集は、盛唐に初唐の詩をまじへたる物なり。後拾遺より新古今迄は、中唐晩唐の詩に、宋の詩を交へたる物なり。新勅撰よりしもつかたは、いふに足らず。和漢の時代を考ふるに、我國元正、聖武、孝謙の御宇、正しく唐の玄宗の開元、天寶の時にあたる。其頃阿部仲麻呂、吉備公のごとき人々入唐して、盛唐の禮樂文章を學び歸り、我國に弘めし故に、我國の歌も自然と唐詩の風體に似たり。仲麻呂が明州にてよみたりといふ、あをうなばらの歌は、盛唐の詩の佳境にて、李太白が峨眉山月の詩と同格なるべし。定家卿「天の原」と改められしは口惜し。桓武、平城、嵯峨の時に及びては、唐の大暦以後、中唐の世にあたりて、唐詩は格調すこしくだりぬれども、我國の歌は猶さかりなり。白樂天が詩は唐の極惡道なるを、白氏文集我が

人々を超ゆる事なるまじければ、いつも公家の下にかゞみなん事口惜し。詩は公家の政を請くまじければ、上手にさへなりなば、公家をも弟子にすべし。此道においては、天下におそるゝ所有るまじ。いざ歌詠む事をやめて、詩作る事を習はばやと思ひ定めて、書付け置きたる和歌の反古をこと〲く焚きすてゝ、一首も殘しとゞめず。夫より詩を好みて、ひたすら學習し、二十年を經て、漸く詩の道を明らめたり。天性不才なる故に、上手には得ならねども、詩の道を覺悟したる事は、誰にもまけじとぞおもふ。此道を以て考ふれば、和歌の道も明かに知らる。凡唐土と我國と風俗同じからずといへども、詩と歌との道ばかり其理全く同じ。其子細は、異國も我國も、古も今も、人情は異ならざるに、詩も歌も心の聲にて、性情を吟詠する物なれば、唐と大和と詞のかはるのみにて、性情を吟詠する事は少しもかはる事なし。詩と歌と其趣の同じきは此故なり。然るに、異國も我國も人の詞は時世につきてかはる故に、詩も歌も時世にしたがひて風體かはるなり。されば詩も歌も末の世になりては、むかしにおとるは風體のかはりにて、風體のかはりは其詞のかはりたるなり。此理を覺悟して、能々古にさかのぼりて古の風體を考へ、古の詞を取り用ふれば、今の人にても、いにしへの

天性—生れつき
覺悟—さとり
子細—わけ
風體—すがた

いひたき事いはぬは云々―兼好法師の徒然草にあり
ひとりごちて―獨り言をいひて
こしをれの歌―拙き歌なり
思惟―思ひ考ふ

獨語

太宰春臺著

一いひたき事いはぬは、腹ふくるゝわざなりと、昔の人の言ひしは誠なり。さればとて、思ふ事いふべき人にあらねば、得いはず。いはぬは今も腹ふくるめれば、唯空むきてひとりごちて、腹をすかすより外の事なし。世に和歌を好む人多けれども、和歌の道を知れる人こそなけれ。三十一字をつらぬる人は多けれども、萬葉集、古今集に入るべき程の歌を詠み出す人をいまだ聞かず。我父母ともに和歌を好みし故に、八九歳の比より三十一字をつらぬるすべを知り、十歳ばかりより十二三歲迄に、こしをれの歌凡三四百首もよみたり。師もなく友もなければ、歌よみたればとて、人に見する事もなく、書付けて藏し置きたるのみなり。其時の心に、歌はよみうべきものとのみ思へり。十四五歲の時、始めて詩といふ物を學びて、漸く七言絶句などを綴るすべを知れり。其時愚心ひそかに思惟せしは、和歌を學びて縱ひ上手に成りたりとも、公家の

駿臺雜話終

此筆記は、去年辛亥のとし春より冬に至る迄、諸生と語りし雜話を書集むとて、ことし壬子の春より筆を起して、秋に至りて稿を脱しぬ。もとよりいやしき蜑のもくづながら、もし朽ちずして吾黨にながく傳はりなば、後學の身を省る萬一の助にもならんかし。よりて、ことし試毫の言葉を末に附して、終りて復始まり、無窮におよぶの意をしめしけるとぞ。享保壬子のとし冬十月鳩巣しるす。

て他の行爲に倣ひ兩ながら失ふにいふ
蚍蜉の樹を撼し云々｜蚍蜉は蟻の大なるもの、精衞は小鳥、意は己の力も計らずに及ばぬ事に勞するをいふ
うけられね｜原本「うけらぬ」とあり、意により今假に改む

此道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利欲にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風敎を維持せんとすとも、わが力およぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼し、精衞が海を塡めむに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも吾儒分内の事なれば、是を度外に置くべきにもあらず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好みて異說を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにすることそうけられね。たゞ務めて新奇を競つて、俗耳を悦ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とは是等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、縱風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身ひとつはもとのごとく、仁義の道を守りつゝ、前脩の模範を失はじと思ふこそ、責て儒となりししるしともいふべけれ。しかるに、あら玉の春の初とて、人は皆己が志身の福を萬代といはふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらず目出たき物は此道なりとて、かくなん筆をこゝろむるならし。

此春もかはらでゆかむ七十にあまる五つの道をたづねて

黄金の術―神仙金丹の術、丹砂を化して黄金とするなり意は理想に達し難きをいふ

董生―董仲舒春秋を治め、毎に帷を下して講話す、武帝に重用せらる

邯鄲の歩を學ぶ―己が本分をすて

○壬子試筆の詞

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黄金の術成りがたし。されば、犬馬のよはひ是まであるべしとも思はざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへちかきころより身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生を學ぶとにはあらねども、此三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢につたふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に、過ぎしむかしをしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸にわかかりし時より學びの窓に年を經る甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯の風をたづね、韓歐が文をこのみて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老のね覺も慰みぬべし。さても多くの年月を經て、世のうつりかはる有樣を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん、現とやいはん。誠に富貴は浮べる雲のごとく、禍福は糾へる纆のごとしといへるに、なにのたがふ事あるべき。中にたゞ吾聖人の建て給へる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりはかはることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは

道中にてはやめよかし」といへば、其人いふは、「道中の日とて一生の外にあらばこそ。是も一生の日かずの内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異ならん」とて、其後もやめざりき。學者の道に志すも、此人の茶湯をこのむがごとくなるべし。もとより道は須臾も離るべからざれば、一生の間道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ道のある所にあらざるはなし。しかるを急迫にしてもとめば、たとひ僅々として有レ得とも、皮膚の間にてやみなん。いかでか其胾を嚌んで滋味に飫くことあるべき。況や、急迫なれば、久しきにたへぬ物ぞかし。いまだ日至の時に及ばずして やがて倦怠するに至りなん。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす。たゞ急にして迫切なるをおそる。義理は涵泳を貴ぶ。緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進脩の道において、緩急相得て背かざるに近かるべし。程子のいはく「志レ道懇切固是誠意。若迫切不レ中レ理。則反爲二不誠一。又曰。「人謂要二力行一。亦只是淺近語。這一點意氣能得二幾時一了」」諸君程子の言を見よ。翁が說あたらずといふとも遠からじ」

少作—年若き時の作

涵泳—全く其ものに身をゆだねること

呼老矣。是誰之愆。

此文本集に見えず。朱子家訓不自棄の文などの類にて、朱子の少作か、又は後人の擬作にて、名を朱子に託するにてもあらんか。よし誰の作にもせよ、言簡にして意も明白なり。折ふし打ちずんじて、自警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは、陶侃が語なり。「大禹聖人乃惜寸陰。至於衆人當惜分陰。豈可佚遊荒廢。生無益於時。死無聞於後。是自棄也」といへるこそ、學者立志の法とすべし。前にいふ淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思ひ侍る。およそ人と生れて學に志ありといふきはの、生れて時に益なく死して後に聞ゆる事なく、草木と同じく朽果てばいと口惜しかるべきことなり。されば、諸君も此陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。但學は勇進をよろこぶといへども、又急迫なるをきらひ侍る。とかく一生こゝを離れぬ事にて候へば、急迫にして求むべきにあらず。唯懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優遊涵泳せられれば、久しうしておのづから進益あるべし。翁むかし加賀に在りし時、士族の中に紹鷗、利休が風流を慕つて、茶湯を好むものあり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂としけるを、同行の人見て「いかにすけばとて

大夫、孔子を學び一生修德に心がけし人
得やすからざるまじ—得やすかるまじの誤ならん
春秋に富み—行末長く
朱文公—朱熹

寡過を欲すれども未能とし、五十にして四十九年の非をしり、六十にして六十化すといへるも、武公の自儆めて我過を聞かむ事を求むると前後相比して、自治誠切なる事一に出るがごとし。孔門七十子の中に求むるとも、顏曾の外には多く得やすからざるまじ、たゞに列國君太夫の賢といふのみにあらず。さればにや、その成德の篤實光輝、こゝに至りて今も猶人をして千載の下に興起せしむるぞかし。翁老いたりといへども、今より謹みて諸君の祝規を奉じて、殘生を終らむとこそおもひ侍れ。諸君のごときは、春秋に富み材力に足る。もし懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歲月は恃むにたらず、材力は多とするにたらず。たゞ孳々汲々として勉めて不息にありぬべし。もし悠々として日を渉り、一旦年老い齡傾きて後、日ごろの懈を思ひいでて、いかに悔ゆともなにの益かあるべき。即今翁が身の上にて候。されば古詩にも、「少壯不努力、老大徒傷悲」すといひ、陶淵明も、「盛年不重來、一日難再晨及時當勉勵、歲月不待人」といへば、古人も此感懷を同じうすとぞ見えし。是等の詩句時々吟詠して、勇進の志を振起すべし。又世に傳る朱文公の勸學の文に、勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣。歲不我延。嗚

期頤─百歳

呉下の阿蒙─何時までも學識のすすまぬ意

蘧白玉─名は瑗、衛の

我。必恭恪於朝夕以交戒我」とて、抑戒の詩を作りて自儆められしとなり。今翁、高年なりといへども、いまだ武公の年に及ばず、今より期頤のよはひを享けて、日に德にすゝまれ候やうにとこそ祝し候へ。諸弟子久しく師門に遊び候へども、今に呉下の阿蒙にて、むかしにかはりたる事もなく、多年の御教育をむなしういたし候事、材質の庸下なる故とは申しながら、學文のつとめざるによれば、翁のおしはかりもはづかしく、汗顔にたへぬ事にて候。されど、御善誘によりて、此一兩年はすこし道に見つけたる所も出來たるやうに候へば、此後は相ともに勉强して、日夜進益をもとめんとこそ存じ候へ。しからば、道においてなどか尺寸の効を得ざるべき。いよ〳〵翁の策勵を仰ぎ候」といへば、翁聞きて、「それは奇特なる御覺悟ながら、さもあるべき事にて候。さて翁が先各へ申し謝すべきは、衛の武公の事をもて翁をいましめらるゝこそ、永く佩服して忘れがたく覺え侍れ。もとより、武公の賢などか企及ぶべきにあらねども、其老いて自儆められしは、およそ年老いたる人の師法とすべき事にて候。翁かねて春秋列國の人物を論じておもへらく、春秋の時、衛において二人の大賢あり。諸侯には衛の武公、大夫には蘧伯玉、此二賢は、道を見る事眞に、學を好むこと篤し。皆聖人の徒なり。伯玉が

觱發—詩經の語、風の寒きさま
むかひて—「むかへて」歟
環堵—禮記の語、方一丈の小室

家路にまかりぬ。

○年にはづかし

朔風觱發として日夜に冽しく、寒氣もいやましなりしかば、講會もしばらくやみて、後日を期せんといふ程こそあれ、今年もおぼえずはや暮れにけり。例の人々、翁が起居を問むとて來りしに、翁むかひて、「このごろは、年の暮とて、世上はさぞいそがはしくこそ候はめ。しかるに、市朝に住みながら、翁が草堂ほどしづかなる事は侍らじ。蕭然たる環堵の中に、いつとなく病に臥して日をおくり侍れば、月のすぎ年の暮るゝをも覺え侍らず。されど、歳月の逝くはをしむにたらず。たゞ悲しむべきは、年ごろ學びし甲斐もなく、むなしく不德にて身老い年積りて、此まゝ朽果てむこそ、今更悔いてもあまりある事にて候へ」とて、

なにをして身のいたづらに老いぬらんとしのおもはん事もはづかし

といふ古歌を打ちずんじて、「年にこそはぢかはしく候へ」といへば、諸客聞きて、「むかし衞武公、行年九十五にて、猶箴二儆於國一ていはく、「苟在レ朝者無レ謂二我老耄一而舍レ

觴詠—酒盛をしてうたひあそぶこと

聖賢に至るも難かるべきにあらず。たゞその學一生文辭の間にとゞまりて、已に實德の驗を見ざりし程に、居恒飮博過從の樂に日を曠うし、潮州に流されし時は、大顚に動かされしぞかし。是其根源をたづぬるに、文章の爲に誤らるゝ故にて侍る。それにつけても、程朱の學者の詩文を好むをいましめられしも、あながちに詩文を禁絶せよとにもあらず、詩文の移レ人ことをおそれよとなり。是にて程朱道の爲に慮る事の遠きを、諸君よく思ひ知り給へ」といへば、諸客、「けふは終日觴詠のあそびに陪從し、又翁の訓戒を承れば、誠に樂みて淫せずとも申すべし。詩にいはく「好レ樂無レ荒。良士瞿々」今日の謂にてこそ候へ。我等とも此儘にて學問いたし候はゞ、庶幾は宴安の鴆毒を懷ふには至るまじく候。是皆翁の賜にて候」とて、各恭謝の體に見えしが、冬日の習にて、程なくたそがれ時になりしかば、諸ともに翁にいとまをこひてまかりけるが、一人門を出るとて、

暮下ニ駿臺一雪滿レ蹊　漫々平白失ニ東西一
一條正路依然在　知我同行醉不レ迷

かく自詠しけるを、かたへより吟賞して、「此詩有レ心かなや」といふこゝろして、各己が

雕鏤—文を派手にかざるにいふ

不逮の材をもて—古人におよび難き劣れる材を以て

し。やゝ實に近きは、言論の雄偉を尙ぶに過ぎず。其文に馳するは、雕鏤の美巧を衒ふに至る。身において何の益かあらん。道においてなにの得ることかあらん。いづれも玩レ物喪レ志をいふべし。かの好レ書ものは、最下れり。しかるに、唐の太宗の明をもて、遺命して蘭亭の本を棺に入れて、自ら隨へるを觀るに、其移レ人こと詩賦文章よりも甚し。これによれば、詩賦文章文字の類も、尤物の移レ人ものなり。聲色の移レ人とは違ひ、必ずしも有レ禍といふにはあらねども、人をして虛文にはせ、實用を忘れしむ。道に害なしといふべからず。翁老泉が高祖を論ずる意を取りて、文章を論じておもへらく、學者の詩賦文章におけるは、醫者の毒藥を用ふるがごとくなるべし。其毒をして治レ病に足りて、人を殺すに至らざらしむ。されば詩懷に足り、文章は辭達するに取りて、ふかく好まざるをよしとす。もし深く好まば、必ず其毒に中るべし。それに詩賦文章も一難事なり。今不逮の材をもて精しうせんとせば、必ず歲月を費して、學問の功を妨ぐべし。韓愈が文を學びし事を自ら叙るを見るに、處若レ忘。行若レ遺。儼乎其若レ思。茫乎其若レ迷といへり。翁こゝにおいて、嘆息して、ふかく韓愈が爲にをしまざる事を得ず。嗚呼韓愈が材をもて、心を道學に用ふる事かくのごとくせば、

摩詰—王維

鑑の名言といふべし。されば、徳義の移ㇾ人は、伯夷が淸のごとく、柳下惠が和のごとし。天地の間の尤物なり。こゝをもて、伯夷が風をきく者は、頑夫も廉に懦夫も志を立つる事あり。柳下惠が風をきくものは、鄙夫も寛に薄夫も敦し、人を移すにあらずや。其極をいはゞ、舜の韶、孔子の聖、天地の間の大尤物なり。孔子韶を聞き給ひて、三月肉味を忘るゝに至り、七十子終ㇾ身まで親炙して去ざるに至る。又人を移すの甚しきといふべし。其外、忠臣孝子高潔義烈の行の人を感慕せしむるも、皆其類なり。およそ徳義の類は、大に移せば大によし。小しき移せば小しきよし。何の禍かあらん。もし徳義の類にあらずして人を移すは、儀狄が酒、南威が色はいふに及ばず、其外錦繡珠玉珍禽奇獸に至るまで、人を移すにたるものはみな尤物なり。その爲に移さるれば、大なるは必ず身を殺し國を滅ぼし、小なるは必ず名を辱しめ咎を招く。古今歷々として考ふべし。詩文書札に至りては、儒者の事において近うして、又闕くべからず。然れども、李杜摩詰が詩、韓歐東坡が文、二王の書のごときは、是も又古今の尤物といふべし。各一種の人を移すにたるものあり。しかも亦外物にして徳義の類にあらず。この故に、古より詩賦を好み文章を好むの人、多く一心を投じ外事をすてゝ、こゝに寢處せざるはな

尤物—すぐれてよきもの

ごとし。これを見てなにのたのしき事をしらず」と申されしを、「百日の蜡、一日の澤爾が所レ知にあらず」と仰せられしと家語に見えたり。民ども四時稼穡を勸めて、歳終に一日飲酒宴樂して百日の勞を忘る、是先王の遺澤なり。民のながく勤勞に服して、相ともに君澤に樂しむを觀ては、君子も同じく樂む心あるべきを、子貢のそこに心づかれぬをかく宣ふなるべし。しかれば、翁も諸君も諸ともに飲酒宴樂して、一日の餘暇を樂むは、太平の餘澤なり。幸に時も蜡のころにあたれば、今日の會をばいはゆる一日の澤とも申すべし。我等ごときは、民のごとく稼穡を勸むる事はなくとも、各學問をつとめ忠信を脩め、仁義の道を世に明にして、風教を助くることを忘るべからず。是太平の澤に答揚して、不報の報と申すべし。何ぞ必ずしも官にをり職に仕するをのみ國家に報ずといはんや。

○尤物人を移す

翁弱冠のころにかあらん、左傳を讀みて、叔向が母の、「夫有二尤物一足二以移一レ人。苟非二徳義一則必有レ禍」といふに至つて、竦然として戒懼の心にたへざりき。誠に龜

字眼―文字中の眼目となるもの

大蜡の祭―支那にて、十二月に萬神を饗する祭

翁諸客にいひけるは、「律詩は文字のもちひやうこそ簡要にて候へ。たとひ聞え候うても、相應ずると相應ぜぬとあり。又一字にて景趣を生ずると意味なきとあり。自作の詩にて申し候は如何に候へども、しばらく愚意を申し候ふべし。此詩、第一句の平字かふべからず。雪深くして三徑のきはもなく、ひとつにふり埋みし體にて候。第二句の入字、字眼とも申すべし。諸君の謠を白雪の曲に比し、けふの雪の聲に入ると申す所に意趣あるにて候。第五句の合字は、雪にて四隣の樹のひとつになるを申すにて候。第六句の明字は、上に雪を銀沙に比し候故、的皪には明字的實にて、力あるやうに覺え候。いづれも心をつけたる字にて候。惣じて、律詩は韻字の取りやうにて、作者の品は其まゝ知れ申すものにて候。世間の詩を作り申す者、一兩句を得ては韻になづみ、其韻を搜し候うて强ひてもちひ候故、さながら韻に苦み候と知れて見ぐるしく候。其韻に相應の字なくば、其一句をすきとかへ申し候歟、又は其韻をすてゝ、他韻にて作るべき事にて候。唐詩の韻の用ひやうをよく考へて見るべし。是唐詩を學ぶ簡要のことなり。思過ぐ半とも申すべし。さて詩の僉議は是までにて候。今日の會ぞめづらしく覺え侍る。むかし子貢大蜡の祭に會飮せられしを、孔子「樂しきか」と問給ひしに、「一郷の人酒に醉ひて狂するが

散樂—サルガクと讀むを可とすこは能の意なり

又ひとり、

天從雪後海寰新　積素凝華先入春　淸白由來誰相似　草堂高臥是何人

又ひとり、

欲問駿臺臨雪時。行吟招隱太沖詩　古人高義今何在　此地無君誰與期

又ひとり、前の翁が詩の韻を和して、

高堂幽僻地　積雪暗長流　歸騎迷來路　漁人滯去舟
行藏論古道　經濟問嘉猷　寄語世間客　誰知塵外遊

夫より迭に唱和しける。かくて酒酣になる程に、翁も今少したうべんとてのまんとしけるが、座中に世に行はるゝ散樂の謠によき人ありしに、翁其人に一曲と勸めしかば、

肩上の笠には無影の月をかたぶけ、擔頭のしばには不香の花を手折りつゝ

と謠ひ出しけるを、外の客もつけて謠ひける。翁打ちきゝて、「折からよくこそ思ひよられ候へ。山家雪中の景氣を見るやうに覺え侍る」とて、硯引きよせて、

六出花埋三徑平　忽聞白雪入歌聲　市中賒酒酒家近　堂上開書書帙淸
玉樹玲瓏四隣合　銀沙的皪一川明　幽棲何滅山陰興　莫厭留談到日傾

安道子猷――晉の王子猷親友戴安道を雪夜に訪れし故事

は、翁の、から歌なくてやはあるべき」とて、翁に簡を授けしに、翁、「いやとよ、むかしは雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよりも候ひしが、今は老いほれて、其心もさふらはず。詩も久しくすてゝ作らねば、口澁りていひ出づべき事も覺えず。されど、けふの御尋ね忘れがたく侍るまゝ、いかさまにも申してこそ見め」とて、しばし打ち案じて、

家住駿臺下　門臨萬里流　隱雲平野樹　棹雪遠江舟
吾老愧安道　客來皆子猷　草堂偏闃寂　喜共故人遊

「もとより翁が家は、地たかく長流に俯し候へども、門はながれに臨まず候。然るに今の詩に「門臨萬里流」といへるは、そらごとにちかく候へども、言葉つゞきよく、句勢あるやうにと思ふより、かく申すにて候。韋蘇州が「野渡無人舟自横」といひし類にて候。されば、詩は詞に泥みて心ならず不實になり候故に、古より、篤實なる人は、多くは、詩を好まぬも理にて候。たゞし是程の事は、詩にはゆるし申すにてもあるべく候。常の言語に此くせ出で申さぬやうに、意得べき事にて候。さらば各も一首賦せられ候へ」とて、筆硯を授けければ、一人、

冬天衝雪到君家　此日倚欄眺望賒　兩岸水寒如夾鏡　千林樹合似開茶

長吉の故事に基く

おもひ侍る。

となんかきけるにつけて、かの兼好が、雪のいと面白う降りたりし朝、人の許いふべき事ありて文やるとて、雪の事何ともいはざりしに、此雪如何見ると一筆いはぬとて、口惜しき事といひこせし事をふと思出て、是は彼方よりかく氣を付ていひこせしを、此方より返事なくば、恨みやせんと思ひしまゝに、使暫しまたせて、返事かきて奥に、

空にふる雪はこずゑの花なれや散るか咲くかとあやまたれける

とかきて、さて、「けふはひとへにさびしくくらし侍る。思ふどちいひあはせて來られよかし。それこそ誠の志と思ふべけれ」といひやりけり。かくてやゝ日たくる程になりて、門をたゝく音しけり。人してあけさすれば、かの文こせし人、例の人々伴なひて來にけり。形のごとく主設して、翁うれしく、さむさ忘れてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒煖めて出しけるに、衆客もみな醉を勸めて、清談いとこゝろよく見えし。翁、

あるじする心ばかりはこゆるぎのいそぎありくにおとらめや君

「われら事足たち侍らねば、御爲にさかなもとめてありくことはかなひ侍らねども、心ばかりはそれにもおとり候まじ」と、戯ごとなどいひて程を經けるに、衆客、「けふの雪に

烏羽玉―「やみ」の枕詞

白玉京―白玉を以て飾りたるみやこ即白玉樓のある都などの意なるべし白玉樓のことは李

の謂なり」

○一日の澤

冬もやう〳〵深くなりけるに、暮行く雲のけしきすさまじく、雪もちら〳〵打ちちりしが、とかくする程に、日もすでにくれはてゝ、烏羽玉の闇さへいとゞうとまし。かくて夜もふけ行くまゝに、夜寒身にしみ渡り、暫しもいねやらで、丑滿ばかりになりぬるに、鐘のこゑも聞えず、鷄の音もせで、何となく靜になるやうに覺えしが、いつ明るともなく、窓のしらみあひける程に、家にありし童よびおこして、閨の戸あけさすれば、夜のまに雪いとおもしろうふりつみて、庭の草木も花さき、にはかに春來るこゝちし、四の山の端も皆白妙になりて、人間世界、さながら天上の白玉京かとあやまたるゝ折しも、あたり近き池の水鳥の、聲々になくも、程なければきこゆ。さこそ波の浮寢の寒からめと、それさへ哀を添へて、さても心あらん友もがなと、人ゆかしう思ひし折ふし、いつも問ひかはす人の許よりとて、文もて來ぬ。急ぎ開きて見れば、

めづらしき雪にて侍る。いかゞ見給ふやらん。さては此雪に、御起ふしも覺束なく

新井筑後守―新井白石

文廟―六代將軍德川家宣

采女といひし士あり。其子藏人といひし者は、翁が亡友なり。其父采女が子弟にいひしとて、「人と物をかへて興とする事、世にある事なれども、汝等必ずすべからず。替負けて彼に得あればよし、もしかへ勝ちて我に得ある時、碁象棋に勝ちたるとはちがひ、心すみせぬものなり」と語りしこそ、心憎く覺えしか。當世は人と物をかへては、かへかちたりとよろこび、又はたかき物をいやしく買得て、ほり出したるなど、といふは、商賈のわざにして、士たるもののすまじくいふまじきことなり。また先年新井筑後守がいひしを覺え侍る。「人の噂をいふとて、吝き人とはいふまじきことなり。金銀にさへしはければ、命にはいよ／＼しはかるべしとしれたり。しかれば、臆病の唐名ときこゆべし。侍講のとき文廟へも申上げける」とて語りし、尤道理ある事なり。されば、士は一言の上にも心をつけて、利欲、臆病、好色等の筋の事をいはず、口に無擇言をこそまたなく見事なるともいふべけれ。かの世儒のいふ文雅風流も、こゝにもとめば、道に中らずといふとも遠からじ。今身の言行をすてゝ徒に文辭の末にもとめて、聖賢の道こゝにありとす。これその所好に僻して、自ら道に背くことを知らざるなり。しかしながら、正學をみだり、後生を誤るこそなげかしけれ。詩にいはく、「誰生厲階、至今爲梗」こ

根野備中守朝鮮へ使に行きしが、家貧にして支度なりがたかりければ、三好新右衛門をもつて、黒田如水より銀百枚をかりける。歸朝して後、新右衛門同道して如水のがり行きて一禮をいひしに、如水對面して、しばらくありて人をよびて、「さきに貰ひし鯛を三枚におろして、其骨をたゞ今吸物にして出せ」といふを兩人聞きて、心に不足しけるに、酒をはりて、三好銀を取り出して返ししかば、如水、「最初より貸しぬる心にてはなし。合力する心なり」とて、再三しひてかへせども受取らずしてやみぬ。飲食の事には、もらひし鯛をもみだりにもちひず、しかも客のまへにていうて、いふまじき事とも思ひよらず。さて朋友急用の爲には、銀百枚を惜しむべしともおもはず。是等の事にても、其時代の士の風俗儉素質直にして、しかも義を忘れず、心事潔白なることを知るべし。翁わかき時の事をおもふに、其頃までも、年わかき人などは物の直段の事をば假りにも口にいはず、女色の咄をきゝては赤面する人もありけり。大かたは古戰軍術の事を聞きてよろこび、君父への奉公、武士の覺悟などを僉議せしぞかし。當代わかき人の出合ふをきくに、多くは勝手損得のはなし、又は女色遊興の事を互に語りあうて、一座の慰とせざるはなし。此五六十年前とは、格別の風にこそ成行きけれ。又其ころ、加賀に青地

牙儈—仲買人
內子—卿大夫の正妻
ひずかし—心のゆがみねぢけたるをいふ

いはんや金銀においてをや。もとより大切のものなれば、常に身の養生をつゝしみ、金銀もあらく費し用ひざるはさもあるべき事なり。さればとて、命惜し金銀たつとしと心におもひ口にもいふは、商賈などには似合ひたるべし、士にはあるまじき事なり。むかし小說の書にて見侍る。唐の柳公權が家に久しく召仕へし婢ありしが、柳家をいでて揚巨源が家に仕へしに、夫人絹を買ふとて、自ら牙儈と價の高下を議せしを見て、俄に驚疾を得て揚家を謝し去りけり。その後人にむかひて、「われ多年柳家にありしに、終に內子の自ら物をかひ物の價を問はれしことをきかず。しかるに夫人牙儈と價を議せられしを見ければ、氣も消ぬやうに覺えて、驚疾を得たり」といひしとなり。柳氏はさすが唐の世族にて、家風いさぎよく、新進の家とは格別の事なんありける。されば中唐のころにはめづらしき事なればこそ、かく記し置けるならし。我朝は君子國と稱せらるゝしるしにや、中古までは風俗淳素にして、貨利にひずかしからず、義理を堅く守るとにはなけれども、おのづから廉恥の風もほろびずなんありける。武家の世になりて、風俗大きに變ずといへども、士たる者は、金銀の事をば常にいろはずして、しかも儉素質直にて、いさゝか驕なかりき。近き頃までもしかなり。ある老人の物がたりに、朝鮮陣の時、日

に似たり。文雅風流安にかある。それにたゞ詩を賦し文を著はし、琴を皷し笙を吹きて古人の文雅風流とす、いはゆる買櫝還珠の類なるべし。たとひ文雅風流古人に似たりとも、優孟が孫叔敖を學ぶがごとし。況や大きに似ざるものをや。誰か眞の孫叔敖とすべき」座客の中にいふは、「兵家山鹿の何がしが、世に士の金銀の事を口に沙汰するはいやしき事といふは、大きなる僻ごとなり。金銀はなくて叶はずして、至りて大切なる物なり。それをいやしめ輕んずべきにあらずとて、諸侯より金銀を贈れば、取りて戴きてさしおきけるとぞ。翁はいかゞ思ひ給へる」といへば、翁、「それは兵家利害の僉議よりいふにやあらん。士の道はさにはあらず。いかにとなれば、士は義理より大切なるはなし。其次には命を大切とし、金銀は又その次なり。此二つも大切なる物故に、やゝもすれば生死の場金銀の事に臨みては、かの義理といふおもき物を取違ふるぞかし。よりて貪生貪利の事をば、心にとゞめじ口にもいはじと心づかひするは、士は假りにも利欲に近づかじとなり。惣じて利欲といふは、金銀の欲にかぎらず、身の勝手を思ふは皆利欲なり。されば、命は金銀より大切なる物にあらずや。勝手をもていはゞ、命をいくるばかり勝手によき事はなけれども、義に臨みては、塵芥よりも輕んずるは士の道なり。

奴隷―下部

玉帛云乎哉。樂云樂云。鐘鼓云乎哉」と宣ひし。翁も聖言を眞似て、文といひ章といふ文辭をしもいはんやといはましとぞ思ひ侍る。

○言は身の文

翁かねて思ふに、口を發する上にていへば言とし、言の連續する上にていへば語とし、語の模樣をなす上にていへば辭とし、それを文字に寫す上にていへば文辭とす。しかれば、言語、文辭同じものなり。たゞし後世文字の辭を文辭といふより起りて、文辭に限り文章といふは、古意を失ふのみならず、身に取りて文章のおもきは言語にあり、文辭はその餘事なる事をしらず。古より「愼」言の訓一にしてたらず。孔子も「言行は君子の樞機、榮辱の主」と宣ひ、子貢も「君子は一言もて知とし、一言もて不知す」といひ、南容は日に白圭を三復しけり。是によりていふに、身の文章は言語よりおもきはなし介之推が、「言は身之文也」といひしをぞ、ふかく其理にあたりたるといふべし。世の儒者と稱する人、多くは出」辭氣」して鄙倍を遠ざくる事をしらず。或は大言を恣にし、戯謔を好み、或は女色を論じ、貨利を議し、其言をきくに委巷の談のごとく、奴隷の語

観美—見た上のうつくしきこと

設くるの廣く、言を布くの贍はしきを見るべし。其四には體裁、鋪叙によりて首尾をなすをいふなり。起端あり、承接あり、轉折あり、收結あり、文勢の抑揚頓挫條貫の滯らざるを見るべし。右の四法をもてよめば、汎然とよむにあらず。加之歲月の功をつまば、おのづから自得する所あらん。筆を下し文作るに、用字に誤らず、造語にいやしからず、鋪叙備り、體裁正しく、言をたて道を論ずるの助けとするに足らんかし。もし徒に文字をもてあそび、觀美をつとめ、これをもて學問の事とせば、浮虛無實の甚しきといふべし。かの文雅風流を道とするものと、なにをもて異なるべき。しからば、今かく云々するも、人を邪に納るゝにして、翁も其罪なしとせず。今世の學者、多くは輕俊にして實行を心とせず、たゞ文辭に馳騁して虛譽を求めざるはなし。然るに師儒たる者、たとひ痛く懲すとも、猶たえざるべし。況や道は文雅風流にあるの說をもていざなはんには、誰かあひ率ゐてしたがはざるべき。且いへ、道は道德にあるか、文章にあるか。道德にあるといはゞ、文辭はもとより道德にあらず。文章にあるといはゞ、いはゆる夫子の文章は、道德の美の威儀文辭にあらはるゝをいふなり。今たゞに文辭をさして道とするは、玉帛をもて禮とし、鐘鼓をもて樂とするに同じ。されば孔子も「禮云禮云。

し。志慮分るゝ所ありて專一ならねば、意を精しうすることを得がたし。それにつきて、翁日ごろ四法を定め侍る。その一に字例、文字を用ふるの例なり。たとへば藥の能あるがごとし。參芪同じく補なれども、其用ひ異なり。芩連同じく瀉なれども、その用ひ異なり。文字も亦しかなり。勉字務字同じくつとむるなれども、其用ひ異なり。愼字敬の字同じくつゝしむなれども、其もちひ異なり。すべて我朝同訓の字、皆其同異を辨ずべし。もし同訓にまよひて其同異を辨ぜずしては、こまの行きをしらずして象棋をさすが如し。必ず用ひ誤る事多かるべし。其外の文字も、一字あれば一字の能あり。焉矣乎哉等の助字に至るまで、同異しりやすきもあれど、少しのたがひにて、疑似するもあれば、とかく古人の用ひし例をひろく考へ、彼此をかよはして見るにしくはなし。其二に語類、字かさなりて成語をなす、其類一ならず。政治に係る語あり、兵戰にかゝる語あり、人の性行に係る語あり、事の措置に係る語あり、古訓の語あり、比喩の語あり、其外あげていふべからず。必ずしも其語を直に取るにはあらねども、古の成語を多く記して、其中より轉化し出せば、おのづから雅にして俗ならず、直にして迂ならず。其三には鋪叙語を鋪きて章段をなすをいふなり。群分類聚の所あり、交互錯綜の所あり、意を

酒にのがれ道德爲に地を掃へり

いふべし―原文「いふし」とあり今「べ」を補ふ

遷固が史―司馬遷が史記と班固が前漢書

しの攀龍世貞が會に髣髴しけれ。よく其傳を繼ぎたるといふべし」

○寸鐵人をころす

後數日ありて諸客來會せしが、翁に、「前日文章のために讀むべき書御示教ありて承りて候。それにつき請ひ益たき事の候。右御差圖の書は、我等とも日頃讀み候うて、常に取りあつかひ申す物にて候。今改めて文章のために讀み候には、よみやうの意得もあるべく候や。承りたく候」といへば、翁、「それは尤なる心づきにて候。大凡書は多讀をよしといたし候へども、たとひ千卷萬卷の書讀み候うても、其書に意を精しうせず、たゞ上邊にてひと通りに讀通しては、何の益をか得べく候。寸鐵人を殺すとて、一寸の鐵にてもよく鍛へば人を殺すに足り、長道具たりといへども、なまりては用にたへざるが如し。むかし東坡自ら西漢書を讀みしことをいふに、治道、人物、地理、官制、兵戰、貨財の類一過ごとに、專ら一事をもとめしかば、數過を待たずして事々精覈なるとぞ。虞邵庵是をもて人に敎へて、讀書の良法としけり。今此法にしたがひて、五經、左傳、遷固が史をも文章の爲とよまんには、義理事實に貪著せず、たゞ文章の一筋を主としてよむべ

宿好―以前よりのすきの道

地望―地位名望

晉の清談―三國の頃より清談の風行はれしが茲に至りて最甚其徒老莊を尙び詩

と同じく結廬戒食し、それより賓客を謝し、筆硯をやき、朝夕梵誦をのみ勤めけるこそ希有なるわざなれ。しかもそれにもたへず、やゝ久しうして宿好を忘るゝ事あたはず、又出でて詩人酒客の間にあそびけるが、程なく身まかりにけり。各是にて鳳州が爲レ人を考へ給へ。病レ狂喪レ心の人に似たり。然れども、博聞宏詞の名を竊むに足り。同レ俗合レ汚衆を收むるに足りしかば、其時に當りて地望の高き、游道の廣き、海內の人物を鼓動せしかば、王守仁が良知の說をもて天下を傾けし後はきかざる所なりとて、世の論者、陽明を並べ稱して一代の盛事としき。翁おもへらく、明朝の學は二はに變ず。義理の學は陽明に變じ、文章の學は鳳州に變ず。但良知の說は內省存心の工夫に係りて、儒者分內の事を離れず。鳳州に至りては、名撿をいとひ規矩を破り、たゞ文雅風流をもて學とすれば、その害晉の淸談に似てなほ甚しきものといふべし。今世師儒と稱して法を孔子に誦すといへど、實は名聞をつとめて露道に志なければ、二百載の下鳳州が聲威をかりて、世好に投じ時望を收めんとするは、いとさかしき謀なり。今其師といひ弟子といふもの、群居して文談するをきくに、口にまかせて大言し、道を語れば程朱を排し、文を論ずれば韓歐を貶し、自ら牛耳を執りて一世人なきやうにいへるこそ、むか

き。もし己が博聞に傲りて、たゞに文辭に馳騁して、義理を主とせざるの文は、しひてその辭を矯飾して、文彩目を驚かし、變幻百出すといふとも、明眼の人一たび觀ば、その猥淺にして見るにたらざるをしらんかし。滄溟鳳州等が文是なり。翁かねて二子の爲人を考ふるに、狂卒輕佻にして、夢にも義理しりたる人とは見えず。なにによりて文章の義理にもとづくべき事をしらん。今その大概をかたり侍るべし。二子莫逆の交をなし、日夜徵逐して詞賦をもて相誇り、中原二子をもて自ら許すに至る。その顚狂恣睢いふばかりなし。いく程なくして、鳳州が父王忬、怨家のために誣ひられて、下獄論死せられしかば、鳳州弟世懋と同じく、棄官て長安に走り、父の死に代らんとこひしかどもかなはざりしかば、號泣徒跣して柩を負ひて歸葬しける。これは、さすが本心を失はぬ所もあるかと見えしか。それより身の不幸をかなしみけるにや、又は滄溟も心病にて暴卒せしかば、謔浪笑敖の友もなくなりし程に、志氣沮喪しけるや、忽に故態を變じて釋氏に歸依し、伽藍を建立し、又弇州の園をつくりて、日夜賓客と其中に宴游し、歲月を玩愒しける。なほそれよりもあやしむべきは、社友王錫爵が女、比丘尼となりて、恬澹教門を立てしを、鳳州これが弟子となりつゝ、其尼を尊びて曇陽大師と號し、錫爵

義理を主とせざる—原文「…主とせる」とあり、恐くは「ざ」を脫せるものならん

徵逐—招き又招かるゝこと、往來といふが如し

暴卒—急死

謔浪笑敖の友—たはむれ笑ふ義、詩經に謔浪笑敖中心是悼

鉅儒—大儒

されば—原文「ば」なし假に補ふ

貶議—批難

今更こと新しき申し事にて候へども、人は第一義理の大筋を知りたきものにて候。かやうの事をいふを今世の儒者きゝては、「たれ義理しらぬものやある。初心なる事をいふ」とて、さこそ嘲けり笑ふにてあるべく候へども、世に鉅儒と稱する人にも、義理の筋くらき人も見え侍る。孔子も「君子は義以爲質」と仰せられて候。是は君子言行の上にて仰せられ候へども、すべてよろづの事、義理を質とせざるはなし。況んや文章は質ありての文なれば、義理にもとづかずしては、浮靡亂雜にして、文章とはいふべからず。されば韓柳歐蘇の四人、いづれも文章科中の人なれば、道の深きをしりたる人とは許しがたけれども、義理の筋しらぬ人にはあらず。但韓歐は道のあらましをもうかゞひ、一代の正人たりしぞかし。柳蘇はふたりながら釋氏に浸淫し、それに柳は叔父が黨にいり、蘇は洛學の仇となる。これをもて、正人君子のために貶議せらる。それは學術の正しからぬによれば、今更是非するにたらず。その文を見るに、必ず義理に根據して、識遠く思ひ永し。中に柳が文は、精深雅健にて、氣格ことに雄拔しける。蘇が文は、議論振發し、理致明鬯にして、確乎として拔くべからず。こゝをもて韓歐に配して愧ぢざるにあらずや。明朝に至りても、弘治正德のころまでは、文章といへば義理を主とせざるはなかり

掄揚—ほめあぐること
品藻—批評して定むること
洸洋自恣に—海洋の限なきが如く、漫然と心の向ふままに説きたつること

ざる事になりにけり。此時に當りて、古文に志ある人世に輩出して、復古矯俗に急なりしも、韓柳歐蘇が文をこそ赤幟とせしが、篇ごとに掄揚し、句ごとに品藻せざるはなし。しかあれど、材識高からず、蘊畜深からざるによりて、その所作の文を見るに、古に似て古にあらず、雅に似て雅にあらず、最後に李攀龍王世貞出でて、その平易にて膚俗にちかきを厭ひて、相與に奇怪の文を造作し、狂蕩の論を譸張し、洸洋自ら恣にし、一世を鼓動せしかば、四方の文士靡然として歸依せし程に、號して文章の主盟と稱しき。されば滄溟鳳州も、常に韓柳歐蘇が文をば褒稱して、終に非議する事をきかず。鳳州は晩節に及びて文友と文を論じて、やゝ後悔して、平正にかへる志ありしかども及ばざりけるよし、錢謙益が列朝詩集に見えしと覺え侍る。しかるに、今文章をもて自ら許す人の、王氏が棄餘を拾ひて彼が四部稿を師祖とすと見れば、また鳳州が心にたがひて、反つて韓歐を毀るこそ、いと意得がたけれ。定めてふかき意もあるにかあらん、翁などが小見にて知るべき所にあらず。

○曇陽大師

機杼―たさ、機軸といふに同じ

雌黄を下す―是非する

りてその餘習いまだ除かざりしに、韓退之、柳子厚の二子、いづれも「超絶の材をもて、一生の力を盡し、古今の意を陶鎔して自ら機杼を出したれば、その文上追西漢て殆ど過ぎたりともいふべし。東坡が韓文公の碑に、「文起八代之衰道濟天下之溺」といひしが、道濟天下之溺はしらず、文起八代之衰といへるは異論なき事なり。誰かしからずといふべき。其後五代を歴て漸く衰へしを、歐陽、東坡の二子相繼いで出でて振起せしかば、文章ふたゝびいにしへに復しぬ。其文光明正大、又追配韓柳て羞ぢざるべし。是をもていふに、韓柳歐蘇は文章家の大宗たり。古今文章においては、一人も非議するものあるをきかず。されば明朝に至りて、詞臣文士多く出でて、文章世に盛なりしが、劉基宋濂李夢陽何景明が徒名を一時に擅にし、大家と稱せしかども、韓柳歐蘇が文においては、一言も雌黄を下す事なし。おもふに、ふかく慕尚して欽服しけらし。其外文章をもてきこゆるもの、唐順之王愼中が徒、各一家の言を立つといへど、いづれか韓柳が遺流をくみ、歐蘇が餘波を揚げざる者ある。然るに文章は時運と盛衰するものなれば、明の中葉より以後稍々衰へゆく程に、平易なるは鄙俚となり、簡古なるは剽竊となり、それより天下の文章科擧帖括の習に落ちて、是を時文と稱せしかば、古文は見るべから

四六併偶—四字六字の句にて對句をなすこと

え侍る。ちかき頃も其徒のいひしとて「韓はなほ取るにたる。歐陽はいまだ文辭を解せぬなり」と語るをきゝてをかしかりしか。むかし韓退之文を作りて人に見せて、人笑へばよろこびとし、人譽むればわが文いまだ俗人のよろこぶ所あると知りてうれへとすといへり。老子にも「下士聞道大笑之。不笑不足以爲道」とこそ見え侍れ。此等の人に笑はるゝにて、いよ〳〵韓歐が文の高きをしる。もし此等の人に譽めらるれば、韓歐とするにたらず。是も程朱を譏ると同じ意にて、もとよりいふにたらぬ事なれども、己が量をしらざるの甚しきをいふべし。古人を笑ふとすれど、みづから笑を後世に貽さんこそなげかしく覺え侍れ」

○文章の盛衰

しばらくありて翁、古今の文章を論ずるに、西漢の文章は、奏疏制策の外、賈誼が過秦論、司馬遷が答任安書、司馬相如が諭巴蜀檄、楊雄が解嘲、此類猶多し。其文大抵雄偉高邁、後人の及ぶところにあらず。東漢以後、文章衰弊して振はず、六朝に至りて、四六併偶をもて工とせしかば、規模蕩盡し、氣象萎薾して觀るにたるものなし。唐に至

舜水は其號、明末の遺臣、逃れて我國に來ろ、徳川光圀に聘せられ、長く水戸の客たり

浩繁―量多く類繁きこと

濂洛關閩―前に註せり

そかに取出して見れば孟子なりけるとぞ。此事なにの書にも見えず。あなたにてたゞ世にいひ傳へし事ときこえし。老泉が批點の孟子とて世に傳ふるも、眞僞はしられねども、是をもていへば、さもありぬべし。老泉も日ごろ先秦兩漢の書を見たればこそ、孟子を讀みて悟入しける程に、かく愛玩はしつらめ。されば多錢善賈、長袖善舞といふごとく、文章も多讀にしくはなかるべし。但先秦兩漢の書とても、卷帙浩繁にして、吾徒の材力にてはあまねく精讀し難かるべし。是によりて翁は其中を取りて、五經論孟の類は勿論にて、老莊屈宋が作、淮南、荀卿が書、さて丘明が國語左傳、司馬遷が史記、班固が西漢書に極めたく候。其外は唐宋大家の文を熟讀すべし。是も全集をよむにはおよばず、幸に明の茅鹿門の抄錄したるあれば、是にてこと足りぬべし。八大家の文をよみて自得する所あらば、明朝諸家の文は、遙に其下に出づる事を知るべし。體製迭に出で呈レ新とも、珍とするにたらず。奇怪相競ひて獻レ異とも、驚くにたらず、いはゆる觀二於海一者難レ爲レ水とは是等の謂なり。されば、義理は濂洛關閩に至り、文章は韓柳歐蘇に至りてもはやかふべからず。後世作者ありとも、これを易ふる事なかるべし。しかるに世の宿儒と稱する人、己が麤淺猥瑣の文をもて、みだりに韓歐が文を非毀するよし聞

舜水の朱之瑜——朱之瑜名は魯璵、

○多錢善賈

座中の諸客、「文章の學は讀書を要とする事くはしく承り候。しからば文章の爲によむべき書はなに〳〵と承りたく候」といへば、翁きゝて、「韓退之が進學解に、規をとり作を擬するの書をいふに、上姚姒より下大史所錄子雲相如に至り、柳子厚が韋中立に答ふる書にいふにも、詩書を首として太史公に至る、二子いづれも班固以下は取る所にあらずと見えて候。されど韓退之が答李翊書に、「三代兩漢の書にあらざれば敢てよまず」とあれば、西漢書をばすてざりしにや。歐陽、東坡などは、ことに博學の人にてあれば、古今の書によまざるはなかるべし。歐陽が韓文を學び、東坡が孟子を學ぶといふは、多讀の功つもりて、こゝに至りて、性のちかきより悟入する所あるによりていふなるべし。曾南豐陳無己に伯夷傳を與へてよませけるに、無己それより文法をさとるとなり。古人多くはかくのごとし。今伯夷傳をよまざる人はなし。しらずよく文法を悟らんや否や。ちかき頃歸化の人舜水の朱之瑜が物がたりに、東坡潁濱わかきころ、父老泉なにやらん常に一書を枕中より取出でてよみけるが、ふかく祕して見せざりしを、父あらぬ時にひ

疵病—缺點
口氣—くちぶり
悅懌—よろこぶこと

師友の指摘を求むるをのみよしと思へり。しらずや指摘の益は、大體文字程に中りて、中に一二所の疵病を改め、又は彼善二於此一とするをいふなり。今卒易にして不レ成レ體の文字をもて是正を求むるは、たとへば室屋のごとし。結構次第を失ひ、材木等倫を失ひ、或は堂を後にし室を前にし、或は棟を椽とし椽を棟とせば、一向に住居をなさずといふべし。大匠といふともいかゞ脩補すべきや。たゞ穹を塞ぎ、傾を支ふる迄にしてやみなまし。今後生の文字を指摘するも亦かくのごとし。爾においてなにの益かあらん。この故に翁かねて後生にいへらく、「先筆を下さず、その作の功を讀に用ひて、古文辭に覃レ思せよ。久しうして必ず古人の口氣になれ、古人の作意を得て、我心に悅懌する所あるべし。しからば時々譽揚するも工夫のひとつなりと先儒もいへば、著作を一向に廢せよとにもあらず、但十に七八の力を讀にもちひ、二三の力を作にもちふべし。かくして月を經年を經ば、韓柳歐蘇がやうにこそなくとも、相應に悟入する所ありて、文字を作るに手熟し筆活して、用ふるに隨ひて足りぬべし。是晩うしてはやく、遠うして近きの道なり」

弇州滄溟—明の王弇州李滄溟

李杜王孟—李白、杜甫、王維、孟浩然、原本孟を猛に作る

捷徑—ちかみち

のこさぶる—のこさゞるの誤か

躁進—前後も顧みずかろ〲しく進むこと

に、歐公のいはく、「作文無㆓他術㆒唯讀㆑書多則爲㆑之自工。世人之患在㆑懶㆑讀㆑書。又作㆓文字㆒少。每㆓一篇出㆒卽求㆑過㆑人。如㆑此少㆑有㆓至者㆒。疵病不㆑必待㆓人指摘㆒多作自能見㆑之」翁おもへらく、歐陽公の言平實にして味あり。文章を學ぶに、これより近きはなかるべし。翁數年文章に心を用ひて、何とぞ捷徑もあらんかといろ〲尋求めしが、後に、文を學ぶに別に悟入の法なし、たゞ讀書にあり。歐陽公の言我を欺かざる事をしりぬ。歐陽公古今文章の大家として、其言かくのごとく、其上古人の爲にいへるに、心底をのこさぶる事あるべからず。しかるに、その意是に過ぎざれば、此外に餘法なき事明らけし。又韓退之答㆓李翊㆒書、柳子厚答㆓韋中立㆒書、幷に蘇老泉が上㆓歐陽內翰㆒書を見て知り給ふべし。三子いづれも初より著作を事とせずして、積年の力を讀書にもちひしかば、讀書に勞して著作に逸せし事、はからざるに符節をあはせたるが如し。されば、韓柳歐蘇が文章におけるは天授の材といへど、それさへ讀書より得ざるはなし。今吾黨の學は、文辭を專にせねば、必ずしも文章家を學ばんとにはあらねど、常に用ふるに辭達して事のかけぬ程にとならば、それも古文辭をよむにつとむべし。今の後生多くは躁進にして、久しく潛㆓思讀書㆒にたへず、常に銳㆓志著作㆒して、たゞ自ら文を作りて、

なければ—原文「なけれど」とあり、今意に從ひ一字を削る
鉅作—大作
三蘇王曾—蘇老泉、蘇東坡、蘇子由、王安石、曾鞏

も、辭なづみ意塞り、或は奇險を務め或は怪僻に渉り、自ら古文辭と稱して世に傲れども、大かた見るにたらぬ事にて候。たとへば、富商大賈の己が貨財多きに誇りて、簪纓家の風流を眞似するが如し。珍器名物などのかざりにて紛らかしぬれば、はしぐ似たるやうにもあれど、かのやすらかにしておのづから風流なるに比すれば、なにとなくいやしきさまありて、更に同じ物にあらず。又口吃する人のものがたりするがごとし。さながらわけ聞えぬにてもなけれど、言葉つかへていひとりえざる事おほし。今此弊を矯めむとならば、漢唐以來明理の文を讀みて、其中より文法をさとるにしくはなし。其鉅作をもていはゞ、賈誼が治安の疏、董仲舒が對策の文、韓退之が原道、歐陽永叔が本論等の篇を最とすべし。其外、柳子厚三蘇王曾に至りて、古今大家と稱する人の文章を見給へ。平易條暢ならざるはなし。いづれか今人の好める弇州滄溟が文のごとく、詭異難澁なる事やある。文に韓柳歐蘇あるは、詩に李杜王孟あるがごとし。されば、宋明諸家の文章を論ずるにも、韓柳歐蘇を宗とせざるはなし。然れども、諸家の文章を論ずる、皆過高にして、初學に益なし。章法、句法、抑揚頓挫などやうの沙汰は、粗熟して後の事なるべし。むかし孫莘老、歐陽公と相識る事久し。或時乘レ間じて文字をもて問ひし

晩進後生―おくれて學に志すもの

今我等ごときの晩進後生、文章を學び候には、いかゞ意得てよくあるべく候や承りたくこそ」といふに、翁笑つて、「むかし漁獵をこのむ人のいふをきゝしに、魚をとるよりは、鳥をとるはおもしろく、鳥を捕るよりは猪狩は又おもしろき物なりとぞ。其相手にする事がらの大きなるにしたがひて、おもしろさもまさるにて候。翁いとけなかりし比、小倉の百首をよみ習ひしより、和歌のをかしきふしをもかたはし承り知り、其後學に就き候うてより、又詩文を好み候うて、是には多くの年月を費し候ひし。今は悔しき事に思ひながら、はや七十にあまり候へども、さすが日ごろのすきはいまだやみがたくこそ候へ。それにつきておもひ候に、和歌よりは詩はおもしろく、詩よりは文章は又おもしろく思ひ侍る。翁かねて申す事にて候。義理はふかき物にて候へども、義理の工夫は、我邦の人とても、からにおとるべきにもあらず。さる程に、宋明諸儒の說をも爰にて是非し、その及ばざる所をも發明するにて候はずや。たゞ此文辭ばかり、こゝにて常に取りあつかはぬ事にて候へば、書をも國語をもて訓じ、顚倒して讀み來り候程に、老師宿儒といふとも、よく辭に得て意に通ずる事難かりなん。況や多くは涉獵をつとめて、書をよむ事も雜駁なれば、いかでか文辭のふかき味を知るべき。これによりて自ら作れる文章

蘊―奥義

詩の六義、歌の六義と、格別に見て、あはせ論ずべからず。倭歌に限らず、官職律令等の事にても見給へ。我朝にて漢唐をまなびて建てたる事に、取誤りて名實齟齬したる事多し。しかるを、倭書をとく人、多くは强ひて牽合して、其誤を信にせんとす。恐らくは公道にあらず。たゞ信以傳レ信。疑以傳レ疑といふにしたがひて、是非のまゝに沙汰するこそ、明達の論ともいふべけれ」

○作文は讀書にあり

後數日ありて、諸客來會せしが、翁にむかひて、「前日倭歌唐詩の事くはしく承り、異聞を得侍る。但倭歌は、我等ごときのかねて學ばぬ事に候へば、必ずしも自らよむには及ばず。詩も必ずしも自ら作らずとも、古詩を吟詠しても、襟懷をきようするに足りぬべし。たゞ文章はそれとはたがひ侍るべし。たゞ今聖賢の書をよみ候も、文辭によりて求むる事にて候へば、文辭の法にくらくしては、其蘊に通ぜざるのみならず、其義を誤る事もあるべく候。其上、孔子も辭は達するのみと仰せられ候。自身に文辭をもて書を解し義理を論じ候にも、其法をしらずしては、道理をいひ達する事もなりがたく侍るべし。

かも—もは感動詞

おしてるや—「なには」の枕詞

おほあらきの森の下草おひぬれば駒もすさめずかる人もなし

とよめる、みな外のものをもて比して、始終本意をあらはさず。この類の歌は、詩にていへば此の體にかなへり。人丸が夜のながうしてあかしかねたるを、

足曳の山鳥の尾のしだり尾のながく〱し夜をひとりかもねむ

とよめる、此類の歌は、詩にていへば興なるべし。いかんとなれば、上の句に山鳥の尾をもていひ起して、本意は下の句にあり。其外世の人口にある歌に、自ら痛みて老いにけるをなげきて、

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我は老いにける哉

とよみ、うき身の世にすみがたきといふ意を、

あし鳧のさわぐ入江の水のえの世にすみがたき我身なりけり

とよめる、皆上の句に外のものをもていひおこして、下の句にて本意をいふ。いづれも興の體にかなへり。さはいへど、和歌はもとより風雅頌のわかちもなく、賦比興の體もさだかならず。貫之がいへる六くさは、詩の六義を深く考へずして、たゞ歌のさまを六くさにわけて、詩の六義とかずをあはせて、かくいふなるべし。されば、詩の六義は

つきて實例を示せるなり

今詩の六義をもて倭歌を論ずるに、萬葉集にのする國々の歌は、風ともいふべけれど、その外古今以下代々の歌、多くは輦轂のもとの作なり。これを雅といへば、閨秀桑門の作、又は戀釋敎等の歌まじれり、雅といふべからず。神祇慶賀の歌などは、その意や頌に近しともいふべけれども、これ又宗廟樂歌のこと葉にあらず。その體又別なり。しかれば、風雅頌の三は、倭歌にはきはめてあはぬことなり。いかでか是をもて、倭歌の部立を定むべき。賦比興の三は、倭歌の體をわかたば是はわかれもし侍らんか。されど、廿一代集の歌、大かたはすぐに風景をうつし、情事をのべて、比興するは稀なれば、十に八九は賦といふべし。中に比興の體もたま〳〵は見え侍る。仁德帝の御卽位をすゝめて、

難波津にさくやこの花ふゆごもりいまは春べとさくやこの花

とよみ、齋宮の御子の、さはり出來て、齋宮にたゝずなりなんとしけるに、其事はれて、つひに初に復せし事をよろこびて、

大空をてりゆく月のきよければ雲かくせどもひかりけなくに

とよみ、わが身の老朽ちて世にもちふるかたのなきを打ちなげきて、

福祚―さいはひ

宮人螽斯を賦して―以下「君子の福履をいひ起すがごとし」までの數行は、詩經中の詩に

女、各己が情を詠ずるの詩なり。國々にて其風體かはるにて、風といふなり。雅は朝廷の公卿大夫以下、己が情を詠ずる詩なり。聲正しく體いやしからぬにて雅といふなり。頌は宗廟において、祖考を尊び、福祚を禱るの詩なれば、頌といふなり。この三にて詩の全體をすべたれば、いはゞ織物のたてあるがごとくなるゆゑに、是を三經とす。さて賦比興の三は、右之三經を横に貫くありて、風雅頌の詩いづれも賦比興の三の體にはづるるはなく、いはゞ織物のぬきあるがごとくなるゆゑに、是を三緯とす。三經三緯を合せて六義とす。三經は前にいふごとく、詩の部立なれば、格別の事なり。三緯は毎章詩の仕立にてわかつ事なり。賦は葛覃卷耳などの詩のごとく、情事をすぐに詠ずるをいふなり。比興のふたつは、すこし紛はしき體ともいはんかし。比は他物をもてその本意に比喩す。宮人螽斯を賦して、螽斯の多子なるをもて、后妃の子孫多きに比し、婦人栢舟を賦して、栢舟の漂流するをもて、己が夫にすてられてよるべなきに比するがごとし。本意すぐに比する物にありて、別に本意をいふに及ばず。興は他物をもてその本意をいひ興す。關雎の詩の、關々たる雎鳩をもて、窈窕たる淑女を興し、樛木の詩の、樛木の葛藟をもて、君子の福履をいひ起すがごとし。上はいひ起す迄にて下に本意をいふなり。

浮靡―うはべを飾りて浮華なること

を吟詠せば、襟懐を淸くし、塵想もけぬべし。西行が、「わが佛法は、倭歌によりてすゝむ」といひし、さもありなんかし。わがともがらも、吟詠をたすけ、性情を養ふには、たよりなきにあらず。されば、倭歌のすてがたきはこゝにあるべし。但此ごろの歌は、あたらしくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、こと葉の外にけしき覺えて、あはれふかきはなし。いかでか人の心を感興するの益あるべき。是も晩唐以後の詩のごとく、詞にのみもとめて情に本づくといふ事をしらぬなるべし。なに事も、風俗の衰へ行くまゝに、浮靡にながれて、實をとり失ひぬるこそ、なげかしき事なれ。詩歌のみに限るべからず」

○六義の沙汰

座中ひとり、「紀貫之が古今集の序に、歌の樣を六種にわけて、からの歌にもかくぞあるべきといへば、詩の六義に其意かよひ侍るにや、承りたくこそ候へ」といふに、翁、「倭歌の事は知らず候へども、詩の六義は、古今集の序にいひける六くさの趣とは、大きにかはりたる事になん侍る。詩は風雅頌賦比興をもて六義とす。風は諸國にあらゆる男

あしのまろ屋―葦にてふきたる假小舍

なり。外に此體の歌おほく見え侍らず。武士たる人常に此歌を吟ぜば、その金革をしきねにするの志を感じて、勇氣をすゝむべきとこそ思ひ侍れ。さて春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其まゝに寫しとりて、さながらみるやうにあるは、なにのをかしきふしもなけれど、かの詞つゞき巧に、よくいひかなへたると見ゆるよりは、感ふかうしてすてがたく覺え侍る。今思ひ出したる數首をもて例していはゞ、

久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

朝日かげにほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞみる

うちしめりあやめぞかをるほとゝぎす鳴くやさつきの雨の夕暮

庭の面はまだかわかぬに夕立の雲さりげなく出る月かな

夕されば門田のいなばおとづれてあしのまろ屋に秋風ぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ

津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

是等の歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るがごとく覺え侍る。折にふれて是

　もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく

此歌を吟ずれば、老人の懷舊の情を感ずべし。

　春の夜のやみはあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくるゝ

此歌を吟ずれば、有德の不レ可レ揜の誠を感ずべし。

　世中にさらぬわかれのなくもがな千世もといのる人の子のため

此歌を吟ずれば、孝子の愛レ親の情を感ずべし。

　風ふけばおきつしらなみたつた山夜半にや君がひとり行くらん

此歌を吟ずれば、貞婦の思レ夫の情を感ずべし。

　忘れては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみ分けて君を見むとは

此歌を吟ずれば、君子不レ忘二故舊一の情を感ずべし。此歌外にもなほ多かるべし。古今集以後八代集に至りては、あげて數ふべからず。中に翁が常に好みて吟ずる歌一首あり。鎌倉三代實朝の歌に、

　武士の矢なみつくろふ籠手の上にあられたばしるなすのしの原

此歌を定家卿評して、鬼をとりひしぐ體といはれしとぞ。誠に勇壯をもてすぐれたる歌

あり

煊赫―かゞやくさま

螢燭の云々―くらべものにならぬとの意

御爐香ニと賦し、それを和して、王維が、「九天閶闔開ニ宮殿一、萬國衣冠拜ニ冕旒一。日色纔臨ニ仙掌一動、香煙欲レ傍ニ袞龍一浮」と賦し、岑參が、「金闕曉鐘開ニ萬戶一、玉階仙仗擁ニ千官一。花迎ニ劍佩一星初落、柳拂ニ旌旗一露未レ乾」と賦し、杜甫が「旌旗日暖龍蛇動、宮殿風微燕雀高。朝罷香煙携滿レ袖、詩成珠玉在レ揮レ毫」と賦するを見るに、文彩の煊赫たるのみにあらず、開元泰平の氣象目中にあるがごとし。かやうの所に至りて、倭歌の風情は、殆ど螢燭の日におけるやうに覺え侍る。たゞその情に發する一ふしは、おのづから詩にかなふ所ありて、人心を起す益なきにあらず。國風芣苢の詩に、「采ニ々芣苢一薄言采レ之。采ニ々芣苢一薄言有レ之」といふがごとし、是は婦人のおほばこを采りて日をおくるを自ら賦したるなり。なにのをかしきふしもなけれど、其時代泰平にして、婦人までも無事をたのしむの情、言外にあらはる。それにはからずしてかなひたるは、

　もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつ

とよめるにぞ、我朝も延喜天曆のころは、朝廷和平、群臣閑暇なりし事おもひやられて、いと感ふかし。芣苢の詩によくかなひ侍る。其外、古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、おほくは一倡三歎するにたへたり。

たとへ―原本「へ」を脫す

原本「白居易」の下に「の」の字なし今假に補ふ

長慶集―正しくは白氏長慶集、白居易の詩文集七十一卷

や申し侍らん。

○倭歌に感興の益あり

されば我朝に歌あるは、もろこしに詩あるがごとし。よりて詩歌とて同じやうに取りはやし候へども、我朝はむかしよりもろこしの文辭にうとく、李杜諸名家の詩をよむ人まれなり。たとへ讀みても、その旨に通じがたし。たま〳〵白居易の詩和かにて、倭歌の風にもかなひ、平易にして通じやすき程に、是を唐詩の上等として、このみて長慶集をのみ學びけらし。この故に、其詩みな膚淺粗俗にして、見るに足らず。懷風藻、本朝文粹など考へて知り給へかし。反て近來五山老禪の賦する絶句の體の、一種澹泊の味ありて取るべきにはしかず。しかれば我朝の詩は、すてゝ論ずる事なかるべし。さて倭歌に至りては、我朝の人これをもて性情を吟詠すれば、からやまと詞はかはれども、その所はかはるべからず。詩は一首にて詞理ともに具足して、曲盡人情たれば、もとより三十一字の及ぶべきにあらず。翁わかき時より、盛唐の詩を好みて讀みて、賈至が早朝大明宮の詩に、「千條弱柳垂青瑣。百囀流鶯遶建章。劍佩聲隨玉墀歩。衣冠身惹

浮萍云々—飄轉して定まる所なきをいふ
斷綆—原本斷梗

を含みて味あり しかいへばとて、初學の人、辭の雅俗をしらずして、にはかに情の沙汰には及びがたし。今世好みて詩を賦する人を見るに、多くは、日ごろ唐詩をくはしくよまずして、たゞ主意を先だてゝ、己が俗腸よりたゞちにいひ出す程に、巧なるは詼諧をきくに似たり。拙きは禪錄をよむに似たり。又世に一種偏曲無實の人あり。なにの主意もなく、樂府古詩の辭を剽掠して高古に傲り、己が家流の外一代に詩なしとおもへり。然れども其詩をよむに、猥碎流麗一向に文理をなさず、浮萍のごとく斷綆のごとし。文字の怪といふべし。しかるに、其黨の人は相師祖して是を文雅風流とし、あまつさへ聖人の道は文雅風流なる物といひしよしを聞き侍る。文雅風流はよしそれにもせよ、道は文雅風流なる物といへるは、いかなるいはれにかあらん。さいつころ、人ありて翁にかくと告けける程に、「さては道は仁義にはあらずして、詩歌管絃にあるよな。しからば、孔孟よりは世の騷客伶人こそ道に近かりけめ。今まで知らざりしは、いと口惜しかりける事よ」といひしが、是は翁が戯なり。もとより詩文を好み、華飾を事とするは、道に益なきといふばかりにてもなく、人の心術を害するなれば、學者の專につとむべき事には侍らず。但一向に詩歌をたちて風雅の趣をしらざらんは、質勝ちて野なる方と

窩臼に落ちて—かたにはまりて

者も、大かた聲律に拘り、窩臼に落ちて、詩は性情を吟詠すといふ事をしらざるなるべし。鄭谷が雪を賦して、「江上晩來堪畫處。漁人披得一簑歸」と作れるを東坡が評して「是は村學中の詩なり」とて、柳子厚が作りし「千山鳥飛絕。萬逕人蹤滅。孤舟簑笠翁。獨釣寒江雪」といふ詩を引きて、別格の事といへり。鄭谷が詩は、巧にして俗耳には諧ふべけれども、子厚が詩をもて見れば、その鄙俗あらはれておほふべからず。東坡が眼力のたかきを知るべし。それにつきて思ふに、「細雨濕衣看不見。閑花落地聽無聲」といへるは、盧綸が詩なり。人口に膾炙して佳句となん稱し侍れど、よくいひおふせたるばかりにて、吟詠するに餘味なし。宋の僧志南が、「霑衣欲濕杏花雨。吹面不寒楊柳風」といへるは、淸麗閑暇、咀嚼して味あり。盧が詩にはまさりぬべし。されば志南が詩を朱文公の稱し給ひしを、げにさることとおもひしが。其後擊壤集を讀みて、「梧桐月向懷中照。楊柳風來面上吹」といへるを見るに、又一等從容の氣象ありて、有道の言とこそ覺え侍れ。誠に風流人豪と申すべし。此三人の作、句調景趣ともに相似て、おのづから三段にきこえ侍る。盧は辭を主とし、志南、康節は情を主として、情に高下あり。是にてしり給へ、詩は辭に拘れば、理屈に落ちて味なく、情に發すれば、意思

王維—原本「王淮」に作る

難狀の景を寫して云々—此語詩人玉屑に見ゆ

し此二子の論、ふかく其理を得たりと覺え侍る。是にて唐詩の妙をしるべし。李白が大原早秋を賦して、「霜威出レ塞早。雲色渡レ河秋。夢繞邊城月。心飛故國樓」といへる、此類の詩は、雄壯の氣をもて勝れたり。杜甫が江亭を賦して、「水流心不レ競。雲在意俱遲。寂々春將レ晩。欣々物自私」といへる、此類の詩は、深遠の心をもて勝れたり。其外王維が「日落江湖白。湖來天地青」といひ、杜甫が、「吳楚東南坼。乾坤日夜浮」といひ、孟浩然が「微雲澹二河漢一。疎雨滴二梧桐一」といひ、柳宗元が「壁空殘月曙。門掩候蟲秋」といふ、みな馴雅の詞をもて不群の思を發せり。誠に宋人のいはゆる、「難レ狀の景を寫して目前にあるがごとく、不レ盡の意を含みて言外にあらはる」とは、是等の作をやいふべき。其餘の詩も是に例して知るべし。杜甫が秋興の八首、王昌齡が宮詞の諸篇は、其體はかはりたれども、各其能を縱にして、ことに傑然たるものならんか。しかるに、中唐より晩唐に至りて、韋蘇州、柳儀曹が外は、昌黎が文章古今に卓絕すといへども、其詩風雅には少し遠かりき。まいて孟郊賈島が寒瘦、元稹が輕浮、白居が淺俗、李商隱が僻澁、溫庭筠が媚艷、いづれも詩の厄といふべし。其作たま〳〵盛唐に出入するもあれども、其大槩を論ずるに、意趣鄙しく品格下りて、見るにたらず。其餘の作

綺靡—巧に花やかなること
王猛—猛は孟の誤
殘膏剩馥—遺風餘香といふに仝じ

う議するに及ばず。漢魏以後の詩も、文理悠暢、意思淵永にして、風雅の趣を失はざりしなり。蕭統が文選にのする古詩十九首、もろ〳〵樂府歌行の詩よみて知るべし。しかるに六朝に至りて、綺靡をきそひ、浮華をつとめしかば、風雅の體はほろびにたり。唐興りて李杜王猛が徒いでて、六朝の餘習を一洗し、大に古風を振興せしより、今に至りて詩を手習ふ人は、唐詩を學びざるはなし。盛唐の詩は、古をさる事遠しといへど、風景を寫し人情を述ぶるに、なほ風雅の殘膏剩馥ありて、おのづから人心を感ずるの妙あれば、學者の性情を吟詠するには、唐詩も捨てがたきものに侍り。宋の司馬溫公、杜甫が、「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心」といふ詩を論じて、古人の詩は意在言外を貴ぶ。山河在といへば、餘物なき事知るべし。草木深しといへば、人なき事しるべし。花鳥は平時娛むべき物にして、それを見てなき、聞きて悲しめば、當時流離の情いはずしてしれたり。又明の王鏊が唐詩を論ずとて、國風綠衣燕々、碩人黍離等の篇、いづれも言外無窮の感あり。後世たゞ唐人の詩のみ此意あり。溪水悠々春自來といへば、懷友をいはねども、懷友の意言外に溢る。潮打空城寂寞回といへば、興亡をいはねども、興亡の感言外に溢る。風人の體を得たり、といひ

河傾き—天の河のうつり行くなり

三百篇は云々—詩經をさすなり

に心をひるがへして、それよりなげかずなりにける」とぞ。翁おもふに、此僧婦人を敎誨せしは、誠にかしこく聞こゆれども、其身も同じことなるをばしらず。されば、昔より、佛に歸する人、貴賤男女をいはず、いづれも身の苦樂をおもふより起らぬはなし。明智の人といへど、此婦人の覺悟にも及ばぬなるべし。あたら人材をむなしうして、既にいく世をか經たる。末の代とてもさぞあるらめ」と、なにとなく空の打ちながめられて、

宇宙依然百代流　道喪文弊思悠々　誰知天上孤輪月　長照人間萬古愁

詩書道廢共誰陳　邪說紛々日競新　明月似知千載恨　慇懃來照白頭人

翁自ら此詩を賦して口ずさびければ、諸客も傳へ誦しけるが、月落ち河傾きて、夜も既にあけける程に、各いとま申してまかりぬ。

○詩文の評品

他日繼いで諸客來會せしが、各疑問事訖つて、詩文の談におよぶ。いづれも翁にむかうて、「詩文は學問の餘事なれば、急務には候はねど、是も藝に游ぶの類とや申すべき。されば、翁の詩文の論を承りたく候」といへば、翁先詩の事を論じて、「詩は三百篇はとか

けむとおもふは、世をば捨つれども、其心は、君にかへ父にかへても身をばすてぬにてありけり。身を捨てずしては、世をすつともいふべからず。世にありて名利をねがふも、世をすてゝ極樂をねがふも、清濁はかはれど、身の樂を思ふは同じかるべし。もとより、佛の敎は人倫を假と見れば、君父をすつるはよしさもあらばあれ、たゞとても捨つるとならば、第一に身の樂をおもふ心をもすてゝ、扨名利にはなれて見よかし。世をのがるゝにも及ばず、名敎中に自然の樂地あるべし。何ぞ必ずしも人倫をすて、事物を離るべき。人倫をすて事物を離れて、たゞ己が往生極樂をねがふは、世をすつるといへどいまだ世をすてえぬより起りて、樂欲はなはだしともいふべし。むかし或人語りしは、「わが鄕里にひとりの婦人ありしが、夫におくれて日夜哀慕し、玉の緒も絶えぬるばかりに見えしを、其子ふかく憂へて、いろ〳〵諫むれどもきかざりしに、日ころ佛法をとき聞かする僧のありしが、婦人にいひけるは、夫をしたふはさる事にて、それは佛法に妨とならず。たゞし、夫にわかれて、男女の道もたえ、身もさびしく、賴なくなりたるにつけて、我身のためにかゝりて、かなしむ心の少しもまじりなば、これ私欲のまよひにて大に罪障を增長すべし。その所をよく〳〵分別してなげきてよ」といひしかば、婦人忽

浮屠―佛法

群傑をも、人なきごとく思ひけり。頼朝もさこそとゞめたく思はれけめども、拘留せらるべうもなく、まいて引出物などは、中々沙汰にも及ばす、前にありし銀の猫を賜りしをば、其まゝ受けて、出づる時、道の邊にあそびゐたる兒にとらせてさりぬ。其後跡を消ちて、ふたゝび音もせざりけり。其ころ高雄の文覺といひし豪猛至極の惡僧、鎌倉の權をかりて釋門に威を振ひしが、西行が人となりをにくみて、「おのれもし西行にあひなば、まのあたり辱しめん」といひしに、或時、西行高雄わたりにて行きくらしける程に、文覺に宿をぞかりける。文覺幸とよろこびて、其徒弟にいひけるは、「汝ら見よ。西行見えば、かならず打たん」とて、拳を握りて待ちける程に、弟子ども、事出來んとて、うとましく思ひしに、文覺、西行を一目見て、氣を奪はれ、しほ〳〵と屈伏しけり。後日に、弟子ども、「何とて言葉には似給はざりける」といひければ、文覺、「彼がつらだましひを見よ。我をうつべきものなり」といひける。是等にて、其人がら高潔にして、氣魄精神たゞうどにあらざる事を知るべし。たゞ惜むべきは、儒道世に行はれざる故に、かやうの人あれども、眞の道をしらず、其質の高明なるまゝに、大かた世をいとひて浮屠に歸するこそ、歎かしけれ。但君をすて親をすてゝ佛に歸して、我身ひとつを助

簪纓家―公家

がら、佛にへつらふ。いづれも本心を失ふといふべし。

○世をすてゝ身をすてず

さはいへど、遍照が世をすつるとて、たらちねを思ひ出づるこそ、孝心言葉にあらはれて、殊勝に覺え侍る。古より、簪纓家の出家する多けれども、父母の事など思ひ出づるは、なほ俗習のまよひとする程に、かゝる心ある人をきかず。その外、遍照の歌どもは、さすが天理の殘香ありてきこゆるにや。

皆人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

君をしたふのなさけふかし。

はちす葉の濁にしまぬ心もてなじかは露を玉とあざむく

直きを崇ふの心たかし。さて遍照が後には、西行にてこそあなれ。東國へ行脚の序に鎌倉を過ぎしに、鶴岡にて群集の中に紛れるたりしを、其人がらの拔群なるにて、頼朝やがて見とがめて、營中に請じ、弓馬、倭歌の事などとはれしに、かの巍々然たる物にすこしもかゝはらず、思ふまゝに物語うちして、營中に候ひける三浦、畠山をはじめ其外の

ものにすといふべし。翁さいつころ遍照が歌を見て、返しの意につかうまつりし、
たらちねのかくはなでずとしりながらなどおろすらんその黒かみを
彼が徒もし聞かば、「出家の功徳にて父母も成佛する程に、髪をおろすを父母の報恩とす」といふにやあらん。それはもと佛説に惑うて天理に盲すれば、今更なにとさは告ぐべきやうなし。責ていはゞかくなん。
たらちねを思ふこゝろは世をすつる身にもすてえぬものとかはしる
いつぞや源平盛衰記をよませきゝ侍りしに、頼朝敵におはれて、ふし木の穴に隱れおはせしが、敵にさがされて、すでに自殺に及ばんとする時、髻の中に佛の小像をゆひ添へしを、首を敵に渡さん時、大將軍の所爲にあらずといはれんとて、かたへのくらき所にかくしおかれしとなり。いつか正しく公なる事の、人にはづかしき事あるや。佛をたのみて後生をたすからんとおもふは、丈夫のしわざにはあらず。はづかしと思はるればこそ、さしもたふとしとしける佛をばすつれども、この心をばすてえぬにてこそあなれ。是をもて、人皆羞惡の心を固有すといふ事をしるべし。されば、遍照は父母を思ひいでて、本意なしとしりながら、かしらをおろし、頼朝は敵にしらせて、はづかしとしりな

たらちね―垂乳根と宛つ。父母をいふ

抖擻―前に註せり

こゝをもて、孝を百行の本ともするぞかし。されば、屈子讒にあうて父祖をおもふにて、その君に忠あるの根ざしふかきを知るべし。むかし良峯の宗貞、深草の帝におくれ奉りて、俄に出家し、僧正遍照となんいひし。その遍照かしらおろすとて、父母を思ひいでて、

たらちねはかゝれとてしもうば玉のわがくろかみはなでずやありけん

すでに佛に歸して世を捨れども、そのきはになりて父母をおもひ出づるにて、天性に父母を忘るゝに忍びざる物のあるとはしらる。「しかるに、親をすて子をすてゝ出家するを、眞の道に入るとするこそかなしけれ。孟子の人の性を戕賊するといへるも、このたぐひなるべし。屈子は古今の賢人、宗貞は一代の寵臣、其人物もとより同日の談にはあらねども、いづれも名卿世祿の家に生れぬれば、その父母の心、わが子のながく國につかへ、身をはづかしめざるやうにとこそ期しつらめ。今身窮して、ひとりは離騷を作りて父祖をよび、ひとりは倭歌を詠じて父母をよぶ。それは似たれども、屈子は身をもて國に報じて、死して家聲を墜さねば、我父のつけし名をはづかしめずとなんいふべし。宗貞は家をすて世をのがれて、抖擻の身となり下りぬれば、たらちねのなでし髪をあらぬ

の見どころ此數句にとゞまるといふ事をしらず。翁久しく離騷を讀みて、ひとり此意を得しより、身づから屈子が知己として、いとゞあはれを添ふる中にも、又うれしくもなんありける。されば、祕事といひしは、是をふかくかくして人にしらせじとにもあらず、たゞ多年工夫して得たる事を淺はかにいはゞ、きく人さへ等閑にきゝて過なましとおもふ程に、祕事とは申しけるぞかし。諸君此意を得て、容易なる事とな聞き給ひそ」といへば、諸客「翁のいひ給ふごとく、古より離騷をよむ人おほけれど、先儒の論も終にこゝに及ばねば、我等ごとき淺見にて、中々おもひよらぬ事なるを、こよひ翁の御物語りにてこそ承り候へ。「共レ君一夜話。勝レ讀二十年書一」とは、かやうの事をや申すべき」とて各よろこびあへりき。

○遍照が黑かみ

翁又いふは、「父母は人のもとなり。人窮しては父母をよぶ。是人の天性にして、自然の誠なり。古より、仁人孝子は、常に父母を思ふ心を失はず。我より父母の名をあらはさんことをおもうては、善を果し、我より父母の恥を貽さん事をおそれては惡を遠ざく

君王の爲に身命をかへり見ずして忠をつくすみさを

祖孝──「祖考」の誤か

皇考曰伯庸といひ出せる心を、いかにと尋ぬべし。是たゞに身を思ひあがるにはあらず。又六朝の士太夫の門地にほこり、日本の武士の王孫を名乘るとは、其心大にちがひたる事にてあめれ。それ人は、先祖をおもはず、親を忘るゝ心より、身もちも輕々しく、人がらも崩るゝぞかし。屈子さすが先祖たゞしく、名だかき家に生れ、父のおもきあとをうけながら、いかに身をもちさげ、先祖をはづかしむべきと思ひつめてこそ、かくいひ出すらめ、といとあはれなり。其次に、「皇覽揆余于初度兮。肇錫余以嘉名。名余曰正則兮。字余曰靈均」といひ、又次いで、「紛吾既有此內美兮。又重之以脩能」とくり返し自贊するとて、屈子が心いよ〳〵しるし。其自贊の本意は、父の我を大事の物とおふしたてゝ、嘉名を名づけ、脩能を授けつゝ、かく、教育する心を、かりにもあだになさじとなり。こゝをもて見るに、君を愛し國を憂ふるの志、もと祖孝を思ふ仁孝の心より生じて、其根ふかく源遠し。うべも其誠始終一のごとくにて、死に至りてかはらざりけり。孝弟を爲仁の本とするも、是にてこそあなれ。それは、其說ながければしばらくさしおく。たゞ屈子忠藎の本は、こゝにありとしるべし。然るに、屈子死して二千載に及びぬれども、離騷をよむ人、其辭をのみ玩びて、一篇

國と同族—屈原は國王の一族なりしなり

惓々の心—君を思慕する情

匪躬の節—

の爲にいろ〳〵心力を竭しけるを、懷王不明にして、小人の讒を信じ其忠を察せず、終に遠ざけられしかども、君を露怨むる心なく、國をうれひ俗をなげくのあまり、此篇を作れり。一篇の大意をいはば、屈子國と同族にて、世卿の家に生れしかば、身を潔し行を脩めて、上に奉ぜんと思ひしより、一國の賢をしたしみつゝ、群に拔でて志をたてし事を、衆芳を佩びて奇服を好むになん言葉を託しけり。かゝりし程に、はからず、讒にあひて、君の心にはかにかはりしかば、さしもと思ひし人々も、時俗にしたがひて心かはりゆくを、蘭蕙をはじめもろ〳〵の芳草、にはかにあらぬものになん變じたるといへり。さて、今こゝに有りて、讒臣國を危うするを見聞くも心うければ、いづこの國へもさらましとおもへど、それはわが本意ならねばするに忍びず、又國に人なければ、故鄕に思ひものこらず。よしさらば、湘水にみづから投じなむといふにて篇ををへり。誠に惓々の心、匪躬の節、言外に溢れて、これを讀む人、袖をしぼらぬはなかるべし。されど、是は知れたる事なれば、今更いふに及ばず。但離騷のおこりをいはば、水の源あるがごとく、木の根あるがごとく、大切のところひとつあり。是をしるを離騷の祕事とす。其祕事といふは、外にあるにあらず、たゞ篇端の數語にあり。「帝高陽之苗裔兮。朕

見るにや、いとゞ感ふかく覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか、又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましとおもひ侍る。そのこゝろを、

月見れば末の代までも忍ばれて見ぬいにしへのいとどゆかしき

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず」

○離騷の祕事

諸客聞きて、「屈子の心をもて月を見る人、世にあることをきかず。今の世に翁ある事を屈子にきかせぬこそ遺恨にて候へ。されば、來者は吾不レ聞といはれけるもこゝにて候」といへば、翁、「とてもこよひは月にあかさん。さらば屈子のむかしをかたりて、離騷の意をくはしく說き申さん。きゝ給はんや」といへば、諸客、「是は大なる幸にこそ」とて、耳をすまし居ける。さて翁、「楚辭は離騷を第一とす。屈子三閭の家に生れて、楚王

かりにて、月にふかき感ある事をしらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人をしたひて、其書をよみ、其心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れてはむかしの事をとはまほしくもおもふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ、一氣に古今を洞觀して、「青天有レ月來幾時」といひ出るより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。むかしより李杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども、李白が詩も、古今流水ごときを感ずる迄にて、後代を待つの心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、「往者余弗レ及。來者吾不レ聞」といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語うてとおもへど、其世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめとおもへど、其人をきかねば、誰とかしらんとぞ。是なん屈子に限らず、古今心あるきはは、大かた此恨なきにしもあらず。翁も此心にして月を

「古今流水」ーこの下「の」字を脱するか

屈子ー屈原名は平、楚の同族なり、誠意を以て君に盡すも用ひられざるを憂へ、汨羅に投じて死す

玉山倒るゝ―醉へるさまの形容

大方は月をもめでじ―大方は月をもめでじこれぞ此積れば人の老となるもの（業平）

舌を喰ひけり―あきるるさま

寧知曉向二雲間一沒。白兎搗レ藥秋復春。姮娥孤棲與レ誰鄰」とうたふ。其次よりは翁も助音して、「今人不レ見古時月。今月曾經レ照二古人一。古人今人若二流水一。共看二明月一皆如レ此。惟願當レ歌對レ酒時。月光長照金樽裏」とうたひをさめけり。其後數獻におよびて、玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、「大かたは月をもめでじとはよみたれども、老の心も、月みるにぞなぐさみ侍る。されど、其につきて千載無窮の感もおこりぬれば、うべ、月を人の老となりともいふべかめり。但月を見るにいろいろあり、今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅にむかひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくづくと見て、「月は徑りいく尺かあるべき。各考へて見給へ」といふ。又同じやうの人かたへより、「あれはものゝ切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらん」とて、たがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりし。今おもへば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり影のきよきにめでて、良夜とてたゞ打ちより、物喰ひ酒のみなどして歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又騷人墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もたゞ景氣のうへを翫ぶば

駿臺雜話 卷五

○月は世々の形見

薄酒―味薄き酒、廉酒といふに同じ

あるじまうけ―馳走の支度

今年もはや半過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、荻吹くかぜも身にしむころなり。久しく翁のがり行かねば、此ほどの老のねざめも覺束なし。いざたづね問はむとて、ある夕暮に、例の人々打ちつれて來しが、又もまゐらんとて歸らんとせしを、翁とゞめて、「今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひてとまり給へ」といへば、「翁の心をいかでそむくべき。さらば」とて、各座をしめて、清談の露やうやう繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、さかな取りそへて、盃出しけり。諸客皆醉ひて、興に入るとぞ見えし。其中に、一人盃を停めて、「青天有レ月來幾時。我今停レ盃一問レ之」と、李白が詩を高らかに打ち吟じけるを、又ふたり脇よりつけて、「人攀二明月一不レ可レ得。月行却與レ人相隨」とうたふ。又外の人々迭に唱和して、其次を「皎如二飛鏡臨一丹闕一。綠煙滅盡淸輝發」とうたふ。又其次を、「但見宵從二海上一來。

民瘼―「瘼」はやまひ、即ち民の疾苦

出將入相―出でては將軍となり入りては宰相となる意

武侯と―原本「と」字なし

はれなきにあらず。然るに篤實の士は、謹厚にして用にうとく、材智の士は、敏捷にして事にさとし。この故に、古今人材をもちふるに、多くは徳行をすてゝ材智の士を取るぞかし。さし當りよく職を辨じ、しば／＼近効をたつる程に、敏速の功あると見ゆれども、事おほに僉議がちにて、事實常に隱れ、下情常に塞りぬれば、政弊民瘼も是より起るぞかし。是によりていふに兵に限らず、治世の政も、拙速をよしとして、巧遲を得たりとせず。むかし諸葛武侯の蜀につかふる、出將入相として内外の任を兼ねしが、高世の材をもて自ら用ひずして、つとめて衆思の益をあつめ、僚作の諫を求む。自ら至拙の地に處るといふべし。然るに、其魏をうつ、毎レ戰必ず勝しかば、司馬懿畏るゝ事虎のごとし。其益州を討ずる、七縱七禽にせしかば、孟獲心服して、天威とす。その神速なる事想ひ見るべし。其後出師表にいへらずや、「劉繇王朗各據二州郡一論レ安言レ計。動引二聖人一。群疑滿レ腹。衆難塞レ胸。今歳不レ戰。明年不レ征。使三孫策坐大遂并二江東一」これ巧遲の害を論ずる事明白なり。但武侯の度量規模、もとより孫武が及ぶ所にあらず。今其意によりて、孫武の拙速巧久の語、最軍國の龜鑑として、武侯といへども加ふる事あたはざるをしるべし。孫武も亦人傑なるかな」

懇到—ねんごろに行渡ること
祖宗—家康をさす
御當家—徳川家

しなり。拔群の識あるに非ずしては、いかでかくあるべき。其上あからさまにいはれず、前に日を定め其人に盛服させて、おもく傳授せられしも、かの太公望の丹書を武王に授けし面影あり。かくあらねば、其事輕し。そのこと輕ければ、其信深からず。其信深からねば、其人の益に成りがたし。亦誠意懇到を見るべし。掃部頭學術のありし沙汰もきかねども、おのづから聖賢の敎に叶へるこそ、極めて殊勝の事といふべし。我朝武家の代になりて五百年以來、世に是等の人あり是等の事あるをきかず。しかしながら、祖宗德澤仁厚なるが所レ致なり。これによりて、謹んで考ふるに、御當家天下をしろしめして、仁政四海に廣被せしより、歴代殘殺の風變じて、太平禮義の俗となりしが、寛永明暦の間に至りて、在廷の諸公運に應じて出でて、承レ化輔レ治しかば、其澤日に隆洽なりしぞかし。今其人がらを聞くに、いづれも篤實簡重寛厚の長者也。其政を謀るには、虚文を抑へ、事實をつとめ、人を取るには、材辯を退け、實行をすゝむ。近世智巧を尙ぶの風より見れば、其拙きに似たれども、凡百の有司、いづれも廉靜寡欲なりしかば、各守レ身恭レ職して、時勢に附かず、身計をなさゞりき。是によりて庶政あがり、百事熈まり、たゞ此時を別して盛なりとす。勿論時運のしからしむるといひながら、其い

端冕—冠を正すこと

てこそ候へ。いかにも一ッ存じよりたる事候まゝ、傳授し候べし。されども、大切なることを、あからさまには申しがたし。いよ〳〵御聞きあり度候はゞ、某が宅へ御越し候へといはれしかば、日を定めて、禮服を著し、彼宅へ往かれしに、掃部頭出でて對面の後、「世話に油斷大敵といふ事、定めて御心得あるべし。某が傳授外にはなく候、此一言にて候ぞ。必ず御忘れあるな」といはれしとて、むかし周の武王卽位の初め、大公望を召して、「簡約にして行うて恒とし、萬世に傳ふべき道ありや」と問ひ給ひしかば、太公望まうさく、「其言丹書にあり。王もし聞かむと欲せば、齋戒し給へ」とありしかば、武王齋戒端冕して東面して立ち給へり。其時太公望西面して、丹書の言を武王にさづけていはく、「敬勝レ怠者吉。怠勝レ敬者滅。義勝レ欲者從。欲勝レ義者凶」今油斷大敵の語、鄙諺なれども、丹書の戒に叶へり。然るに君につかへ事を務むるに油斷のあしきとは、誰も知りたる事にて、しかも眞實に知らぬ故に、右の諺をも等閑に聞きすぐして、こゝに心をとゞむる人なし。よりて每々油斷して、過失を生じ禍咎を招きて、ともすれば、臍を噬むことおほきぞかし。掃部頭は常に油斷を禁じて身に近づけぬ心から、眞實に此事の簡要たるをしらるゝ故に、この諺を大切の事として、信濃守にも傳へられ

端的に——うちつけに

というべし。

○大敵外になし

翁かねておもふ事にて候。今の學者、聖賢の書を讀みて、なまじひに義理の僉議をいたし候へども、大かたは僉議に日を暮し、何にてもひとつ取りとめて身に得たる事は侍らず。是も巧にして久しきと申すべし。然るに武臣たる人は、不學にして、一己の見付けたる所によりて覺悟を決して、直に行ひ出し候故、端的に其驗を見せ申すにて候。學術なく候へば、理に當らぬ事もあるべく候へども、其得たる所おのづから聖賢の敎にもかなひ候。いはゆる拙而速なるに候はずや。右の監物が事にて思ひ知り給ふべし。それに付いてこゝに殊勝なる事こそ候へ。寛永の頃にかあらん、永井信濃守尙政、しきりに昇進して、寵任せられけるが、其比井伊掃部頭直孝、一代の元老にておはせしに、或時邂逅して、「我等事、弱年の身にて、特恩を蒙りて、重職をつとめ候事、誠に至極と申すべく候。そこもとには、御老功の御事にて候へば、我等心得にも成るべき事おぼし召しよりも候はゞ、仰せきかされ候へ」とあれば、掃部頭、先感じて、「奇特なる御心得に

某に―原本某を
橫渠―張載

ひとつの覺悟ありての事にて候。各は此覺悟なき故に、某に先をさせらるゝとこそ存じ候へ。此後も各は殿の御供を勤めらるゝ事にて候へば、向後御心得にもなるべく候まゝ、今迄は人に申さぬ事に候へども、傳授いたし候べし。惣じて君の御前に伺候し御後に供奉し候時は、假にも脇へ目をやらず、初中終君に目をはなさずしてをるを簡要の法といたし候。たとへば、君の動靜針程の事も見つけずといふ事なし。よりて不慮の事ある時も、我しらず手にあふ事速なる物にて候。此某が一言を必ず忘れ給ふべからず」といひしとなり。是は武の心懸より覺悟したる事にてあるべけれども、聖賢の心にも協ひ侍るべし。翁日比論語鄕黨篇を讀むに、「君在すときは與々如たり」とあるを、朱子の註に、「威儀中適之貌」というて、又張子の說を引きて、「與々不忘向君也」とも釋しおけり。威儀中適にてよく聞えたる上に、張子の說を引かるゝは、不忘向君といふに一種の義理もあるにや、いかやうの意味にかあらんと思ひしが、其後此事をきゝて、橫渠の說緊要なる事をさとりぬ。かの監物が始終君に目をはなさぬといふは、是則不忘向君に非ずや。君に扈從し君に侍坐する時の第一の心得たるべき事也。監物固より橫渠與々の說を見て、其にて心付きたるにてもなけれど、其意おのづから相叶へり。奇特なる事

著候うて、緩やかなる物にて候。されば、すみやかなるは緩やかなるより生ずると思ひ給ふべし。もし速なるがよしとて俄にすみやかにすれば、心せき氣騷がしく候程に、事に當りて狼狽して、たゞおそきのみならず、却て不慮の害をも招くぞかし。近代諸侯の家にある宿老の武臣を見るに、そのかみ兵戰の世を經て、おのづから心ゆるまず氣たるまぬ故に、緩急の場に臨みて、其速なる事他人の及ぶべき所にあらず。翁、加賀にありし時、其先祖越後の堀の家に仕へし者ありて語りしは、越後守の家老に堀監物とて名ある者あり。(監物二代あり。二代監物は、慶長十五年、弟丹後守直奇と爭訟して、最上に謫せらる。この監物は父監物直政なるべし)主人越後守伏見の邸にて、日暮に客を送り出でけるに、越後守に怨ある者ありしが、かくれ居て急にきり懸けしを、越後守も拔きあはせし所に、監物はるかのうしろより、一番に來て彼者をきり倒しけるを、左右に供したる士共、諸ともに打ちとめけり。後日に右の士ども監物に逢ひて其日の事をいひ出でて、「日暮といひ不慮の事といひ、我等ども心ならず少しおくれ候ひしを、御身にははるかの跡に御渡り候ひつるに、いかなれば一番に手に御あひ候にや、不審なる事にこそ候へ」といへば、「いや、各とて武邊の某におとるべきにてはなく候へども、某はかねて

に基く。正道によらずして遇合するを願ふ即ち僥倖を欲する心

十三篇の初において、兵は詭道なりとはいひしぞかし。詭道なれば常道にあらず、常道にあらずして、いかで國家を治むるの道とすべき。況や當代の兵家に相傳ふるは、皆兵の末事なるをや。或は城とり、或は軍のそなへ、又は古戰の跡を僉議する迄にて、孫子の書をよむ人稀なり。たま〱よむ人ありても、文字にくらき故に、詭道二字の義にさへ通ぜず、何とて孫子のふかき心を得べきや。さるによりて、其說を聞くに、多くは臆見に出でて相違したる事なり。無知妄作といふべし」

○不レ忘レ向レ君

後數日ありて、諸客來會せしが、「前日兵の拙速を貴ぶ事を承り候うてより、自分にも考へ見候に、兵に限らず、大かたは何事も不調法にして速なるがよく候。然るを餘り思案過ぎ候うて仕方のよきやうにと拵へ候へば、多くは文に拘り實を失ひ候故、やゝもすれば機會におくれ候うて、後悔する事も出來候。是巧にして久しきの害にて候」といへば、翁きゝて、「さにてこそ候へ。但其速なるに本源あり、たゞ常に心ゆるまず、氣たるまざるを本源とす。心ゆるまず氣たるまざれば、事物に奪はれぬ程に、おのづから落

詭遇して—云々獲禽の心孟子の言

や。中にも武田、上杉などの兵は、號令脩り、約束明かに、師出るに律をもてすれば、桓文の節制にも近かるべし。されば本朝の兵は、こゝに至りて始て兵法をも論ずべかめり。然れども、當代兵家者流と號する人、多くはかの兵律を傳ふるのみにて、兵法のもとは、敵を料り勝つことを制するの謀にありといふ事をしらず。其中、ことに理にくらき人は、兵に荷擔して、國家を治むるの道も、是に外ならずといふめる。先年人のいひしは、ある兵家の說とて、孫子の「兵者詭道也」とあるを、兵は詭るも道なりとよむべし。兵は詭道なりとはよむべからずとぞ。翁きゝて一笑を發しき。是は兵を詭道といふを嫌ひて、兵はもと正道なれども、時としてはいつはるも道なりといふにやあらん。詭字は詐僞の二字と倭訓同じけれども、字義に差別あり。たゞ眞手になく、常格をたがへたる道を詭道とはいふなり。されば孫子も、「能而示之不能。用而示之不用」といはずや。よくしてよくすと見せ、用ひて用ふると見せては、いかで敵を料り勝つことを制すべき。よりて兵は眞手になく、常法に引きちがへて行ふ道なりといふべし。すぐに詐僞の道とはいふべからず。然れ共、此筋を今日の常に出せば、詭遇して獲禽の心になりて、やがて詐僞に陷るべし。そこを孫武さすがの明者にて慥に見つけし程に

事なりと——原文「と」字なし

假合の卒——假にかり集めし兵卒

拊循——慰撫する義

にか、ある一將、城守して敵に圍れしに、炎天の事にて有りけり、敵しきりに戰をいどみしかども、堅く城を閉ぢて兵を出さず、一人に冑をきせて庭中にたゝせ置きけるが、時を移して冑火のごとくなりて、其人堪へがたかりける時に、敵もさこそ困しまんと量りて、急にきりて出でければ、敵一こらへもこらへずして敗軍したりとなり。此事を、朱子兵を論ずるとていひ出でて、兵はかくあるべき事なりと仰せられし。語類に見えしと覺え侍る。されば孔子も、三軍を行はゞ、臨レ事而懼　好レ謀而成者にくみせんと宣へり。異國の事は遠ければ姑くさし置き、我朝武家の世になりしより、天下攻伐をつとめて、戰爭やむ事なかりし。建武以來、宮方武家がたとて、諸國にたて分れて、日夜合戰に及びしかども、いづれも諸國假合の卒をあつめて、衆の多寡をくらべ兵の强弱を爭ひ、なにの成策もなく、兩軍よせ合せて相撲角力の場のごとく、一時に勝負を決する外はなし。或は勝つ時もあり、或は負くる時もあり。勝も負も一旦の事にて、むなしく士卒を多くころしてやみぬ。なにの兵法か論ずべき。いはゆる齊の技擊、魏の勇卒ともいふべし。足利氏の季世に至りて、英雄蠭起し、四方に割據して、兵を磨き士を養ひ、日ごろ拊循して用ひしかば、其兵勇銳にして百戰して挫けず、秦の銳士ともいふべきに

淬勵―きたへはげますこと

故に、三軍心を同じうし力を戮せて、君上の難に赴く事、子弟の父兄を衛り、手臂の頭目を捍ぐがごとし。是を仁義の兵といふ。桓文の兵は、信義を守り、律令にしたがふ故に、三軍畏レ威て、一人も節義を踰ゆる事なし。是を節制の兵といふ。嬴秦の兵は、ただ賞罰を嚴にし、首級を尙ぶ、曾て兵に節制ある事をしらず。然れども士卒を淬勵して勇敢を倡ふが故に、敵に赴きて戰死する事を樂しむ。其強き事、魏齊の兵に比するに甚優れり。魏の兵は勇力の卒を募り、齊の兵は技擊の材を選び、一朝かりあつめて敵と鬪はしむ。其兵ただ利を要して、あへて死レ敵の志なし。是によりていふに、秦の銳士より以下は、やゝ優劣ありといへど、一切に武力をもて取レ勝のみ、すべて兵法ある事をきかず。兵法は節制の兵より以上にあるべし。仁義の兵といへども、僅に兵といへば、形勢智謀をすてぬ事にて候。是を捨てゝは、いかで敵を料り、勝つことを制し候べき。もとより、仁義の兵に、後世の兵のごとく詐僞を尙び反間を用ひるやうのむづかしく巧なる事はあるまじく候へども、たゞ敵と對したる正面において、或は敵の銳氣を挫き、或は敵の惰氣をうち、或は不意にいで、或は險阻に逼る。とかくに敵を制して敵に制せられず、敵をいたして敵に致されざるやうに謀るは兵の法なり。昔趙宋の時、いづれの戰

長く戰地に留めて風雨に苦します

魚肉す―魚肉の如く取扱ふ卽ち殺す意

權道―其場合に應じ假に設くる道

○兵は詭道

他日繼いで諸客來會せしが、「前日兵家形勢の說くはしく承り、感服し侍る。世に兵法を傳ふる人も一ならず候へ共、大かた上杉武田家の流にて、兵の故實器數には精しく候へども、中々形勢などの沙汰には及ばず。是にて敵を料り勝つことを制するは、なりがたかるべきやうにかねて思ひ侍りしに、翁の論を承り、いよ〱世に傳ふるは皆兵の末事にて、兵法とするにたらずとこそ思ひ侍る。但形勢を審にし、智謀をもちひ候事、仁義の兵にもあるべきにや。聖賢の道には、少したがひたるやうに覺え侍るはいかゞ」といふに、翁聞きて「それはよき不審にて候。兵は聖人の常道にあらず、いはゞ權道ともいふべし。みづから義を制する權度なくしては、にはかに用ひがたき道にて候。とかく兵は別段の事にて、常には用ひざる道と意得給ふべし。さらば古今兵の異同ある事を語り侍るべし。戰國以來料レ敵制レ勝の術を兵と申候へども、元來甲冑の士を兵といへば、兵は士卒の事にて候。むかし荀况古今の兵を論じて五とす。湯武の仁義、桓文の節制、秦の鋭士、魏の勇卒、齊の技擊是なり。王者の兵は、道德に本づき、仁義を崇ぶ

剽輕猾賊―躁急にして狡猾を極め人をそこなふこと

師旅を暴露す―軍隊を

て呉を攻むる時、七百營を連ね、三十屯をたて、呉と相拒ぐこと半年に及ぶ。巧而久しといふべし。つひに兵疲れ意沮んで、陸遜が爲に破られたり。我朝にても、近代上杉、武田の兩虎爭ㇾ雄しが、いづれも征法疎かなるにあらず、軍令精しからざるにあらず。然れども先爲ㇾ不ㇾ可ㇾ勝て敵の可ㇾ勝を待つ事をしらず。互に一戰の間に勝つことを力めて、しば／＼相攻むる事年を經てやまず。是又巧而久といふべし。遂になにの成功なくして、僅に其身を終へて國滅びにき。たゞ豐臣秀吉は、もとより不仁にして、誅ㇾ暴止ㇾ亂の兵にてはなけれども、勝敗の大數に明なりしかば、出ㇾ師になにの造作もなく、行ㇾ兵になにの巧計もなく、戰となれば必ず功を一擧に收む。遂に兵を頓して曠ㇾ日することをきかず。いはゆる拙而速なるものに近し。其將畧、恐らくは謙信、信玄の及ぶ所にあらじ。然れ共剽輕猾賊の人にして、禮樂慈愛は夢にもしらざりし程に、晩節無名の師を起して、朝鮮を征伐し、久しく師旅を暴露し、多く人民を魚肉せしかば、天下の人心離叛きけり。亦兵久しくして收めざるの禍なり。孫武が一言、兵の要旨を得たりといふべし」

煩瀆―わづらはしくかされて面倒になすこと

とは、先不レ可レ勝は我にあり。萬全不レ敗の形也。敵之可レ勝は敵にあり。必勝不レ失の勢なり。其機を形にこめ、其戰を勢に決す。其機を形にこむるに當りては、淵のごとく深く、龍のごとく潛まる。いはゆる藏二於九地之下一ものなり。其戰を勢に決するに當りては、飈のごとくおこり、雷のごとく擊つ。いはゆる動二於九天之上一ものなり。忽かくれ忽あらはれ、奇正相生じ、虛實相形る。環の無レ端がごとし。兵術の妙、こゝに至りてもはや加ふべき事なし。但其簡要をいはゞ、兵は神速なるにあり。もし神速ならねば、其計策多くは敵にはかられ、又は長陣すれば、將軍も退屈する程に、軍形兵勢もいづれの處にか用ふべき。孫子にも、「兵聞二拙速一、未レ覩二巧之久一也」といへり。善將レ兵者は、たゞ形勢に明かにして、其餘勝敗の數にあづからぬ事は、多くは不調なれども、反て是をもて勝利を得る事速なり。是を「拙而速也」といふ。兵家の貴ぶ所なり。若し勝敗の數に暗くして、たゞ屯營を周備にし、號令を煩瀆にして、すぎて持久の計をすれば、軍法調熟して、すきまもなく見ゆれども、兵久しければ變生ずる程に、はては敗軍に及ぶぞかし。是を巧而久しといふ、兵家の忌む所なり。況や兵久しうしてやまねば、其間多く財を糜し人を殺し、永く國家に害を貽す事少なからず。むかし蜀の先主自將とし

よりて、水にそむきて陣せしめたり。水に背きて陣するは死地なり。一足跡へむけば、水に逐ひはめられて死する故に、おのづから面々にかせぎて殊死して戰はざる事を得ず。趙軍漢の軍の死地に陷るを見ては、必ず何の用意もなく輕々しくすゝめ戰ふべし。我死戰の衆をもて輕進の兵を撃ちなば、必ず一戰に勝利を得べしとはかりしが、果してその謀はづれざりけり。然れども、水に背きて陣せしをば、當時諸將も口には諾せしかども、心には服せず、敵もこれを望見て大に笑ひしぞかし。これ敵もみかたも形にはめられ勢にのせられて、みづからおぼえず。戰勝つても其勝ちける故をしらざりけらし。その外、佯りて旗鼓を捨てゝ走りて、敵をして「空ㇾ壁逐ㇾ利」しめ、趙旗を拔いて漢の赤幟をたてゝ、趙軍の氣を奪ひしなど、いづれも敵を形におとして、自然の勢をもて驅せしかば、みかたはいよ〳〵勇戰し、敵はみづから死を救ふにいとまあらざりけり。孫臏が後、兵の形勢に熟し合戰に長じたるは、韓信ならし。うべ自ら將ㇾ兵の能を論じて、「多ければ多くして益善」とはいひけり。げにさもと覺えし。然るに孫臏、韓信が兵法をもて、孫武が書に考ふるに、符節を合せたるが如し。こゝをもて、兵法は、いよ〳〵形勢にある事を知るべし。孫子にいへらずや、「先爲ㇾ不ㇾ可ㇾ勝以待二敵之可一勝」

臏を足たちし時、人の足をきるは則わが首をきるといふ事を知らず。曾子の「戒之戒之。出乎爾者反乎爾者也」と宣ひしこそ思ひあたりしか。聖賢の言いつかたがひ侍るべき。是は小人の戒とすべし。

ながく世にたてじとてこそあしきらめ足はたゝねど首はとりけり

是は翁がたはことなり。足のかはりに首を得たれば、孫臏はかへどくしたりといふべし。しかるに、竈を減じてみせ、樹をしらけて見せける、ひとつとして敵を形にはめざるはなし。竈を減じて見すれば、敵必ず道を倍してゆき、樹をしらけて見すれば、敵必ず火を擧げて見る。火を擧ぐれば萬弩倶に發す。萬弩倶に發すれば敵自ら刎ねて死す。一として敵を勢にのせざるはなし。よく敵を料りて兵の形勢に熟せずんば、いかでかかくあるべき。孫武が後一人といふべし。炎漢の初に至りて、高祖の諸將の中に、韓信こそは兵術に精しく、合戰の上手にてありし。其趙王歇を攻めし時、背水の陣にて勝ちしは、今にあまねく世に稱する事なり。兵法に、「右倍山陵、前左水澤」といへるは、軍形の常なり。然れ共兵に常勢なし。敵に因て變化すれば、軍にも常形なかるべし。此時趙兵二十萬と號す。漢兵數萬にたらず。其上皆あつまり勢にて、決戰の心なし。韓信これに

阻隘―けはしくしてせまきところ

て、その勢のまゝに、態と利導して、己が思ふ圖に引付くるぞかし。兵法に、百里而趣利者蹶上將といへり。さらばいよ〳〵魏を驕らしめて、百里にして利に趣かしめん」とて、齊師魏の境に入りて、始て一舍する日は十萬竈をなし、その明日は五萬竈、又明日は三萬竈と、日々にかまどの數を減じて、軍行の跡に遺しけり。さる程に、龐涓齊の師の後を追つておしけるが、是をみて大によろこびていひけるは「我もとより齊師怯き事を知る。いかにとなれば、吾地に入る事三日にして、士卒のにぐるもの既に過半に及べり。いざ急に追ひつめん」とて、其日步軍をすてゝ騎兵ばかりにて、二日の道を一日にうちけり。孫臏其行を度るに、暮に馬陵に至るべし。馬陵は旁に阻隘多くして、兵を伏すべし。こゝに龐涓を討取るべしと思ひつゝ、大樹を斫り白げて、「龐涓此樹下に死なん」と大書したり。さて善く射るものをすぐり、萬弩をそろへて道を夾んで伏さしめ、それ等と約して、「暮に火の高く擧るを見て、萬弩一度におこれ」と、其期を待ちけるに、龐涓果して夜に成りてかの斫れる木の下に至りしが、白書を見て不審におもひ、急に火を高く擧げて燭しけるに、其書をよみて未畢に、萬弩倶に興りしかば、魏師大に破れて、龐涓自ら刎ねて、「遂に豎子が名をなしつ」といひて死にけり。龐涓が前に孫

掌握にあるがごとし―手中に握るが如く、確にしてあやまりなきなり

老弱、運漕して内に罷るゝを謀りていふやう、「趙に至らんよりは、速に魏都大梁に赴きて、其虚を衝かんにはしかじ。彼我國の危きを聞かば、必ず趙をすてゝ歸りて自ら救はむ。然らばわれ一擧して、趙の圍をとくのみならず、その弊を魏に收むるなり」とて、直に大梁に向ひしかば、魏師果して趙を捨てゝ還りけるを、迎へ擊つて大に勝利を得けり。これ趙を救ひながら、趙を救ふとは見せずして、魏を攻むる形をもてしめし、虚に乘ずる急迫の勢をもて逼りしかば、魏師などか趨をすてゝ歸らざる事を得べき。これによりて見れば、前にいひしごとく、形にはめ、きほひにのすれば、わが士卒のみにもあらず、敵を制する事も掌握にあるがごとし。孫臏が魏を伐つて趙の圍をとくにて、その形勢に熟するをしるべし。さればこそ、孫臏も形格へ勢禁ずれば、おのづから解くることをすといへり。形にはむれば、敵必ず形に格へられ、勢にのすれば、敵必ず勢にせかれて、自由を得ぬ程に、おのづから我計中に墮るぞかし。後十五年ありて、魏より韓を攻めし時、韓告急於齊しかば、田忌又將兵として、前に趙を救ひしごとく、すぐに大梁に赴きけり。魏將龐涓是を聞きて、韓を捨て歸る程に、齊師とくに行過ぎて先にあり。孫臏、田忌にいふやう、「三晉の兵素より悍勇にして、齊を怯しとす。善戰者は、敵の勢により

與國―同盟
國

人之勢。如轉圓石於千仞之山者勢也

孫武が此語、一字一句も兵の肯綮にあたらざるはなし。孫武は誠に兵家の祖なるかな。

○孫臏韓信が兵法

されど、孫武が兵法、その書ありといへども、自ら兵を用ひて敵を料り勝つことを制するをきかず。そのかみ、呉王闔閭に用ひられ、十三篇をも呉王に傳授せし事、史記孫子が傳に見えたり。闔閭西のかた强楚を破りて郢に入り、兵威諸國に振ひしは、定めて孫武が謀より出でたる事にてあらんかし。その事實世に傳らねば知るべきやうなし。孫武が後、孫武が兵法をもちひて、其功天下に著れしは、孫臏、韓信のふたりにてなむありけり。孫臏は孫武が子孫なりしが、先祖の兵法を傳へて、齊の威王の師となる、此時魏より齊の與國趙を圍みしを、威王將田忌に孫臏をさし副へて、趙を救はしむ。孫臏は、其前に魏將龐涓とともに兵法を學びしが、龐涓その能を嫉んで、陰に臏を召して、至れば其兩足を斷ちし程に、此度もたゞ車中に坐して、軍の指圖をしけり。田忌すでに趙へゆかむといひしを、孫臏止めて、魏趙久しく相攻めぬれば、魏の輕兵鋭卒必ず外に竭し

ながのし——遠く飛ぶこと

者勢也。鷙鳥之疾至ニ於毀析一者節也。故善戰者其勢險。其節短。勢如レ彍レ弩。節如レ發レ機」といへり。すべて物には、鼓の拍子あるごとく、はり合ひてはずみのあるは節なり。竹のふしあるごとく、きはだちて析めのあるは節なり。水激して石のおもきを漂はすに至るは、岩にあたるはずみのつよければなり。安流する水の水さき弱きが石をたゞよはす事をきかず。鷹鷲つて鳥の翅をとりひしぐに至るは、禽にせまる析めのきびしければなり。ながのしする鷹の羽つがひゆるきが、毀析する事をきかず。よりて善戰者は其勢必ず險しく、其節必ず短し。一足も所レ向を退けば斬る。一毫も軍法を敗ればきる。かく險しからねば、其勢弛ぶものなり。日を刻して急に進みて兵を駐めず。戰勝つては早く引いて長追せず。かく短かからねば、其節延るものなり。其勢弛び其節延ぶれば、士卒倦怠つて、必ず勝利を失ふべし。されば、勢如レ彍レ弩とは、必ずはりつめて少しも手をゆるさず。節如レ發レ機とは、忽急に放ちて、暫しもゆとりせず。この故に、良將の下に怯卒なし、愚將の下に强兵なし。孫子に是を論じて、

「善戰者求ニ之於勢一。不レ責ニ於人一。故能擇レ人而任レ勢。任レ勢者。其用レ人也如レ轉ニ木石一。木石之性。安則靜。危則動。方則止。圓則行。故善戰

震恐せしが—原本「せ」なし。今意に從ひて補ふ
陷穽—おとしあな

猛虎深山にありては百獸震恐せしが、陷穽の中に在るに及びては、尾を搖かして食を求むるがごとし。猛虎にはかに弱くなるにはあらず。又をかしきたとへなれ共、世にいふ女の丑時參りといふ事あり。常には闇がりをさへおそるゝ者が、嫉妬の怒に乘じては、丑時參りして、少しもおそれやらず。其女にはかにつよくなるにはあらず。是にて、勇怯の勢にあり、强弱の形にある事をしるべし。但軍形は本なり、兵勢は軍形よりしてこそ出來にけれ。もし軍形亂れなば、士卒勇なりといふとも、必ず敗軍すべし。此故に、「勝兵先勝而後求戰。敗兵先戰而後求勝」といへり。先勝は軍形にあり。未だ戰はぬ先に、必ず勝つべき手だて定まる故に、先勝とはいふなり。先勝つて戰へば、兵鈍らず。戰とゞこほらず、敵を破る事破竹のごとくなるべし。よりて孫子に、「勝者之戰若決積水於千仞之谿者形也」となん。是は必勝の形先定まりて、其勢に乘じて戰へば、なにの手もなく勝つ事をいへり。然るに、合戰の場に臨みては、ゆるやかなるを嫌うて、はげしきをいとはず。おそきを嫌うて、はやきをいとはず。もしゆるやかにおそれければ、士卒の心たるみて、其勢を失ふものなり。信繁の、人數をあらくつかへといひしは、こゝなり。是則兵勢なり。孫子は是を論じて、「激水之疾至於漂石

三軍―大軍

十三篇の要は、軍形兵勢の二篇にあり。おほよそ用兵の法は、形勢のふたつに過ぐべからず。しばらく常語にていはゞ、軍形は軍のかた、又は軍のもやうといはんかし。兵勢は兵のきほひ、又は兵の調子といはんかし。軍形は行師の法にして、兵勢は合戰の法なり。軍形は行師の法といふは、今僅に百ばかりの人數にても廻して見給へ。それさへ末々迄は下知とゞかぬ物ぞかし。まいて三軍の師をまはすに、時に當りての下知ばかりにしては、いかで自由に廻るべき。たゞ將帥たる人、成算より割出して、軍伍を定め、手分を定め、約束を定め、其外の事迄分段を明かにして、人數を一定の形にはめて師をやれば、三軍ひとつもやうになりて、なにの造作もなく廻るべし。軍の强弱は、もやうによりて生ずるものなり。又兵勢は合戰の法といふは、常の輕き事にても考へ給へ。急節に臨みては、すこし手延なれば、度を失ふ物ぞかし。まいて合戰の勝負は、呼吸の間にあり。それに鎗先に向ひては、士卒の勇怯ひとしからねば、とかく猶豫しやすし。たゞ將帥たる人、こゝに至りては、人數をはげしくあらくつかうて、其きほひに乘じてすゝめば、おのづから調子めいらずして勝利を得べし。兵の勇怯は、調子によりて生ずるものなり。されば、孫子に「勇怯は勢なり。强弱形也」とこそ見えて侍れ。譬ば

昏昧―智くらく心のくらきこと

かも身を守ること嚴正にて、かり初にも汚俗に同ぜず。其高風清節、古人に恥ぢざるべし。又一條に、「合戰に、赴く時、敵ちかくならば、人數を急にあらくつかふべし」とあり。是にて、信繁戰陣に勇ありて、兵をまはすに熟しぬる事をしれり。しかれば、勇威武畧さへ兼備りけらし。易にいはゆる、「知レ剛知レ柔萬夫之望」とは、此人のたぐひをいふべし。嚮に信玄社稷の慮ありて、はやく此人をたてゝ世子とし、監國の任にをらしめば、甲州ながく滅びざらまし。しかるに昏昧剛愎の勝頼に傳へしかば、信玄死していく程なく、織田氏のためにほろぼされにき。なげかしき事にあらずや」

○兵法の大事

後日諸客來會しけるに、例の講はてゝ、翁いひけるは、「各日比、武田流の兵法を講ぜらるゝよしきゝ侍る。前日申せし信繁の、「敵近くならば人數をあらくつかふべし」といはれしは、いはゞ輕き事のやうなれ共、尤用レ兵の要を得たり。信繁も是にて毎度利を得て、簡要の事と思はるればこそ、かく子息へもいひ傳へられける。此序に、兵法の事をあら〳〵語り侍るべし。翁日ごろ兵書を考へ見るに、兵術の要は、孫武が十三篇にあり。

褒稱—ほめたゝふること

感孚—感ぜしめてうごかし化すること

事をきかず。むかし後漢の東海王强は、光武の太子たりしが、廢せられて諸侯王に下れり。明帝母寵によりて、弟をもて立ちて太子となり給ひけるが、其後明帝の代に至りて、東海王恭謹にして、上を奉じ身を全うして終られしをば、前史にも褒稱して記置きしぞかし。されど、それは明帝孝友なれば、つかへやすかるべし。信繁はそれとはちがひ、殘忍至極の兄につかへて、朝夕國に惓々として、人臣の節を失はず。信玄といへども、常に親任して疑忌の心なく、始終一のごとし。その忠信誠實人を感孚するにあらずして、いかでかくのごとくなるべき。さて川中島にて討死せられしこそ、尤義にあたりて覺え侍る。信玄一生の危き折なれば、此時死せずして、いつの爲に命ををしむべき。されば主辱かしめらるれば臣死するの義を守りて、こゝろよく討死せられしは、誠に見レ危授レ命といふべし。其子を誡められし條子がきの物を見侍るに、一として恭敬篤實のことにあらざるはなし。其中一條に、「假令海は野となり野は海となるとも、盡未來際おやかたに對して二心あるべからず」といひ、又一條に、「たとひいかやうの御懇意にても、後庭へ出入すべからず」といひ、又一條に、「諸人同座する時、もし好色の語に及ばゝ、目にたゝぬやうにして其座を立つべし」といふにてしりぬ。信繁人がら恭謹なる物から、し

寄公―かゝりうど

○武田信繁

爰に足利氏の季世、天文、永祿の間に至りて、賢と稱すべき人あり。甲州武田信玄の弟、左典厩武田信繁是なり。然るに、近代武功をのみ尙びて、德行をば稱せざる故に、信玄の名は高けれども、信繁の賢はかくれて世に知る人なし。今翁があらはさずしては、誰かいひ出づる者あらん。信玄の父信虎、信繁を愛して信玄を廢する心あり。それ故信玄父子不和なりしに、群臣いづれも信玄の武畧に長じたるを見て、信虎をすてゝ信玄に思ひ附きしかば、信玄群臣と謀りて、信虎をすかし出して是を距ぎし程に、信虎甲州へ歸る事かなはず、今川氏眞が外祖父たるによりて、駿河に出奔して、今川家の寄公となりて、年を經けれども、信玄つひに父をむかへて國に入ることなし。信虎後に京都に流落して、一生をなん終へたり。信繁、信虎の愛子として、信玄を廢して信繁をたてんとするをば、かねて信玄も知りたる事なれば、必ず忌惡むべし。それに、國に殘りて信玄につかふるは、危難の場なり。父を追出す程の人なれば、露友愛の心あるべきにもあらず。しかるに、信繁嫌疑の間に處ながら、信玄につかへて、兄弟の間少しも違言ある

あはれもいやまし、仇ながらにくからぬおもかげなり。中村重頼、「この心ばへのやさしきに、歌ひとつものして手向に」とすゝめ侍りければ、その首にむかひて、

かゝるときさこそ命のをしからめかねてなき身とおもひしらずば

重頼返し、

なき身とは誰もしれども諸ともにいまはにおよぶことをしぞ思ふ

此道灌の歌は、孔子宣へる「勇士不レ忘レ喪レ元」といふ心にもかなひ侍らんかし。されど、古の勇士の不レ忘レ喪レ元といふは、其志朝夕に義を重んずるにあり。首を刎ねらるとも義を失はじとなり。必ずしも戰場に死を輕んずるに限るべからず。我朝の武士の、かねてなき身と思ふといふは、其志戰場に死を輕んずるにあり。首をとらるゝともうしろをみせじとなり。あながち朝夕に義を重んずるによるにあらず。其おもむき同じやうにて、しかもちがひありとしるべし。されど、其僉義はしばらくさし置き、此事歌にのみあらず、敵も味方も、死したるもいきたるも、とり〳〵いさぎよく、優にやさしき事といふべし。

藻鹽草―筆記もの

屋形―上杉定正

には得がたき人ともいふべし。翁いつも思ひいでて感吟するは、世に傳ふる、「かゝる時さこそ命の」とよめる歌にて侍る。此歌を、世には道灌敵にころさるゝ時、臨終によみしといへど、さにてはあらず。慕景集とて、彼が自からかきあつめし藻鹽草あり。其中に此歌をのせて、其詞書に、

康正元年の冬、藤澤の役に、かたきも味方も入りまじり、三日をかさねていどみあらそふ事になりぬ。されども、味方の武威つよくして、かたき北條憲定のぬしつひに自腹して、餘兵おのがじしむなしうなり、あるはあたにあたりてかたみに死するも侍る時、藤澤のかたへの松原の群にてたゝかふ男あるに、味方は中村治部少輔藤原重賴とて、京家の人の世にしづみて、屋形に扶持せられて侍りしになん。敵の男は、栗毛なる駒に乘りて、二ッ引りやうに上り龍の紋付きたるさしものなりけり。遠目ながら、よろひの毛もいかめしうぞみえける。しばしたゝかうて鑓をあはせしに、目の前に敵の男つきとめられ、やがて中村手づから首を取りて、我陣に來たりて、かう〳〵となん語りけるに、いまだ壯年にもたらぬ男の、色しろうしてたけたかゝるべき心地したり。鬢のあたりたゞならずたきしめつゝ

其頃、君上の廢立多くは人臣の手にいでしかば、楊復恭が、昭宗を己がたてたるとて、「負心門生天子」といひしをこそ、古今になき事なれ、とあまりの事にをかしかりしか。其後我朝近代の野史にて、「新参の主人譜代の家人に背くやうやある」といひし事あるを見て、さても亂世の風俗、からもやまともよく似たる事よと思ひ侍りし。されば應仁の後、足利家の代を終るまで、前後百年の間、其名將勇士、寒促飛廉が徒にあらざれば、賁育黝舍が類なり。中々賢愚得失を論ずるに及ばず。但鎌倉兩上杉の時、太田道灌こそ、名將の譽ありし。然れども翁おもへらく、上杉氏、山内、扇谷兩黨たりといへども、山内を宗室とす。此時越後の上杉房顯山内の家を繼ぎて、其子顯定に及べり。道灌は其父道眞より、扇谷の上杉定正が家老たれば、定正を輔けて、顯定と嫡庶の義を講じ、親族の好を篤くして、扇谷の家を安んじてこそ、身の輔相たりし甲斐もあるべきを、反つて謀をもて山内の權を奪ひしかば、兩上杉不和になりける程に、終に兵難を招きて、定正と同じく顯定が爲にころされたり。恐らくは、其材、主を庇し身を保つにたらざるに似たり。しかいへど、武略すぐれたるのみにあらず、文學に志ざし、和歌をこのみて、かゝる亂世

孫呉が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし。湊川にて自殺するとて、最後の一念を語る事甚だ陋し。

○足利家の亂れ

足利一統の後、幕下の人物にては、細川頼之をこそ世に良相と稱し侍れ。先君の遺命をうけ、幼主を輔け、上を奉じ下を御するをみるに、やゝ老成の材といふべし。然れども、小術を用ひて君威を强うする事をしりて、曾て陳善閉邪ことをしらず。されば、義滿昏弱の君にあらず。其輔佐よろしからば、いかやうなる英主ともなるべき人ぞかし。その驕泰をきはめ、僭逆を肆にするに至るは、頼之といへども其罪をのがるべからず。是をもていふに、其人稱するにたらず。其外足利家の名門右族、いづれも跋扈將軍にあらざるはなし。應仁文明の比、京都には細川畠山、黨を分ち、鎌倉には足利上杉、雄を爭ひ、日夜合戰して虚しき月なし。しかのみならず、君臣相害し、親族相殺し、その毒鬼蜮のごとく、其暴虎狼のごとし。天下に人倫の道絶えはてゝ、たゞ日月地に墜ちざる迄にぞありける。是をぞ古今亂世の極といふべし。もろこしにていはゞ、李唐の季、五代

鬼蜮—「蜮」は「魊」に通ず。卽ち共に「おに」の意なり

掌握にあるが如し—手に握れるものを處置するが如しとの意にて、容易にして誤なき意

底績—功を立つる

倉の易弱をしる。よりて韓信高祖を見て、盛に項王の勇を稱して、其勇は恐るゝにたらざる事をいひ、正成、後醍醐帝に謁して、盛に鎌倉の强きを稱して、其强きは恃に足らざる事をいふ。其後兩人共に多くは籌策を用ひて取勝し事、掌握にあるが如し。韓信は囊沙背水敵を破り、正成は鉤屏木偶敵を鏖にするを見給へ。兩人の兵を用ふること一轍に出でざるかは。何れも摧堅拉鋭といへど、韓信が材は敏速に長じてよく攻む、いまだその守るをきかず。正成が材は持重にたへてよく守る、未だその攻むるを見ず。韓信に城を守らしめば、よく正成が如くならんか。正成に敵を攻めしめば、よく韓信が如くならんか。古人も「攻守勢殊也」といへば、いかゞあるべき。翁が未だ決せざる所也。しかいへど、韓信が兵は、利欲の私にいでて、一身のためにし、正成が兵は、忠義の公にいでて、國家のためにす。其底績の心おのづから同じからず。むかし河内の人の語りしとて或人翁にいひしは、金剛山のあたりに、南北の明神と號する祠あり。その中坐を正成とす。左右は孫子吳子なり。正成常に、「われ天下に武功を立つる事は孫吳のかげなり」といひしによりて、是を祔祭するとぞ。是にて今に正成が遺愛の民にある事をしるべし。但正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を學びずして、

尙論—古にさかのぼりて古人の行跡などを論ずること

關趙—「關張」にて關羽張飛をさすなるべし

時勢に附いて反側を常とし、朝夕をたもたざる中に、獨楠家のみ子孫累葉かたく遺訓をまもり、一門闔族心を壹にし、力を戮せ、各身をもて國に報い、三代の間一人も貳心ある事をきかず。古今比類なかるべし。正成德澤深厚にして、ながく人心を結ぶ事なからんには、いかでかかくの如くなるべき。然るに世の尙論する人、推尊んで諸葛孔明に比するは、兩人いづれも兵畧をつとめ、興復を謀り、父子國事に死するも同じければなり。それはさる事なれども、孔明は臥龍なり。道德を懷抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終んとせしに、はからざるに蜀の先主の三顧に遇て、不ㇾ得ㇾ已して出仕へしが、一朝關趙が上に立ちて、君臣魚水のごとくなりし。されば、その出處、伊尹、呂望に近しとなん古人の論もあるぞかし。正成はもと功名科中の人なり。後醍醐帝笠置に臨幸の時、近國の名士を徵れし間、正成も召に應じて參じけり。是その出處孔明とは大きに異なる上、恢復の後も尊氏義貞の下に列して、專に任用せらるゝ事をきかず。孔明をもて擬せば、恐らくは其倫にあらじ。其兵を用ふるも、孔明は正大にして奇計をもちひず、節制の兵といふべし。翁かねて論ずらく、正成が敵を料り兵を用ふるは、韓信に似たり。韓信楚に寄食する時より、既に項王の易ㇾ制をしり、正成河内に家居する時より、既に鎌

田樂入道—北條高時をさす、常に田樂を好みし故なり

縉紳家—公卿

韜鈴家—武將

龍馬の諫—龍馬に託して後醍醐帝を諫め奉りしこと太平記に詳し

誅しても餘りあり。もし泰時なかりせば、北條家の滅びむ事、高時が時を待ち侍らじ。ひとり田樂入道をのみ罪すべからず。

○楠正成

建武中興の人物にては、縉紳家に藤藤房、韜鈴家に楠正成、もとより輿論の歸する所にて候。もし其人品をいはゞ、藤房は公卿輔弼の臣たり。正成は將帥禦侮の臣たり。其材の大小をいはゞ、正成の材、藤房の及ぶ所にあらず。藤房龍馬の諫は、直言極諫朝廷を聳動す。まことに朝陽の鳳鳴といふべし。然れども、正成恢復の功とは並べ論じがたし。其上藤房は一諫の後國をさり世をのがれしが、正成は其身國難に死するのみにあらず、忠義代々家に傳へ、天下にあらはる。當時誰か正成に比する人あるべき。たゞし正成も外の言行世に傳はらざれば、その爲人くはしき事はしれ侍らず。世に楠家の遺書とて、きれ〴〵流布する物あれど、おほくは後人の僞作と見え侍る。しかれども、其しるき事は、喪亂の始、一城をもて天下を引受けて、始終少しも挫屈せざるにて、其材量のたくましきを思ひはかるべし。殊に仰慕すべきは、天下一盛一衰の間、名將勇士といへども、

絳灌—絳侯(周勃)灌嬰の二人、共に漢高祖の功臣にして武勇一邊の人

らめ。それは道理をしらぬ人のいふ事なり。其身宗廟社稷の重きを受けて、自ら佛寺に逃れ。微行を樂とする事やあるべき。君德を穢し、治體を失へり。人主の法とすべからず。是にて見れば、其治規模近小にして、遠大に昧かりけらし。中々に泰時に及ぶべき人にあらず。其外鎌倉の人物を考ふるに、上下ともにすべて取るに足らぬ人なるべし。但建國のはじめ、あまたの人材幕下に群集すといへど、血氣勇悍の人迄にて、いづれも粗暴無識、皆絳灌が下にて候。其中に、畠山重忠は、勇力世にすぐれ、古今の壯士といふばかりにてもなく、志操潔白にして、きはめて正直の人なり。世に和田と並稱するは、その倫に非ず。梶原が讒にあひし時、「誓文をもて陳謝せよ」といひしを、「重忠、一生僞をいはねば、今更誓文に及ぶべきやうなしとてうけざりしかども、賴朝も疑をのこさず、梶原も怒を加へず。是にてもとより忠信の上下に感孚する事をしるべし。其上、己が善に伐らず、人の功を蔽はず、おのづから寛厚長者の氣象なんありけり。當時諸將の中に求むるに、少しき似たる人もなし。不幸にして、三浦と同じく、前後北條が爲にころさるゝこそ、いと口惜き事なれ。其最後も、さすがに他よりは一きはいさぎよく見えしぞかし。こゝに至りて、時政、義時が惡、天道にさかひ、人望に背く、其罪

を待つ事恭謹にして、爭を分ち訟を聽るゝ事明恕なりしこと、東鑑を見てしるべし。昔ある老儒の語るをきゝし。泰時ある時、訟をきかれしに、雙方對決しけるが、半に成りて、一方の相手忽に理に服して、「只今迄己が申す所をよしと思ひて候へばこそ爭訟に及び候へども、今日始て手前の非を覺悟いたして候。此上はもはや一言申すにも及ばず」とてやみぬ。泰時感じて、「此爭は汝がまけなり。理非によりて決斷すべし。但某今迄多くの訟をきゝしかども、即座に汝がごとく理に服するものを見ず。是を賞せずしてなにをか賞すべき」とて、別に恩賞を行はれしが、後は爭訟もやうやく稀に成りて、訟庭も閑になりしとぞ。此事何やらん古き物語にて見しといひしが、忘れにき。其後考へもし侍らず。此一事にても、泰時の公明にして、無情者は其辭を盡す事を得ず。又恩威二つながら正しき事もしられたり。其孫謀のよき、後嗣に及びて、時頼、時宗いづれも遺訓を守り、成法に依りてよく政を務められしかば、四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし。北條氏皇朝の陪臣をもて天下の權を執りて、數代の安きを得たるは、泰時の功といふべし。世に時頼を泰時より賢明なるやうに稱しぬるは、意得がたく思ひ侍る。たゞ早く高位を脱屣して浮屠に歸し。微行をこのみ下情を察せらしを、奇特の事とこそいふ

孫謀―前に註せり

脱屣―惜げなくすつること

蕭穆—和らぎて爭なきこと
浮屠—僧侶
蹇々—一身をなげうちて事に當るをいふ

候」といへば、翁「鎌倉治世の後に至りて、北條泰時こそ、漢の丙魏、唐の姚宋にもはづかしからぬ人にて候へ。わが國にはあまり比類なかるべし。此人、栂尾の明慧にあうて、「某不肖の身をもて、重任に當り、群下に臨み侍る。いかゞして衆を治め、爭をやめ侍るべき」ととはれしに、明慧、「たゞ無欲になり給へ」といはれしを。泰時重ねて、「某ひとり無欲に成り候共、群下なにとて無欲に成り候べき」といはれけるに、明慧、「下に目をつけずして、御身先無欲に成りて見給へ」といはれしを、泰時ふかく信じて、父義時死去の時、所領財寶大かた諸弟に配分して、其身はわづかに足るばかり取られけるを、二位の尼、泰時に、「自分の取られやうあまりすくなき事」といはれしに、「某は家督をうけ候へば、なにの乏しき事もなく候。只弟どものゆたかなるやうにとこそおもひ候へ」といはれしかば、二位の尼も感涙に及ばれしが、其後年を逐つて親族蕭穆し、鎌倉の武臣も感服しけり。明慧浮屠なれども、孔子の季康子に宣ひし、「苟子之不ㇾ欲、雖ㇾ賞之不ㇾ竊」といふにかなへり。泰時の明慧の一言を信用して、鎌倉よく治りしにて、聖人の言誣ふべからざる事をしるべし。明慧も唯人にはあらざりけらし。さて、泰時家督以後、日ごとにつとめて公廳へ出でて、ひねもそ蹇々として庶務を治められしに、群長

馬よりおり
—原本「馬
おりより」
とあり

ありければ、さらば鐘を撞くべしといふに、上へ釣上げこもをとく程に、つひにまにあはずして、たゞかゝりに懸りて攻潰しけり。其時、かのいつぞや申されし、方士蓬萊宮の物語は、かやうの事にこそと、そこの事を思ひ出せし」とありしとなり。これ戯れに近き物語なれども、伊豆守理にさとく、人の言をすてず、それに、たゞ今馬よりおり、御前へ出でて天草の首尾を申上げらるゝ折ふし、常人ならば、中々おもひつけじ。たとひ思ひつくとも、此節はさてやむべき事なるを、只常の氣色にて、稠人廣座の中ともいはず、我あやまりたりし事をも其のまゝに語られしにぞ、伊豆守の心公にして、器量の大きなるもしられける。世に古今の良相とするも、げに理と覺ゆるぞかし。是をもて見るに、世の權威にほこり。邊幅を脩る人は、誠に馬援がいはゆる井底の蛙也。嗚呼いやしいかな」

○泰時の無欲

他日繼ぎての會に、諸客、「前日平家の人物をば御評論承りて候。鎌倉以來の人物は多き事に候へば、あまねく承るに及ばず。其中に、翁の取給へる人は誰々にて候や承りたく

迎勞―出迎

馬鹿ものありて―原本「あ」を脱す

思はるゝは、此密語は貴妃とわれふたりより外他人知るべき事にあらず。然るを方士知りてかくいふは、兼て貴妃と通じたるにやと、つひに方士を誅し給ひしとなり。「前の玉の簪ばかりにて能く候を、あまり念をいれたる故にかくのごとし」といひければ、又新左が例のそぞろごとをいふとて、一座興に入りてやみける。其後天草の事出來て、伊豆守奉命てゆかれしが、不日に賊みな伏誅て江戸へ歸著せられしに、旅裝のまゝ直に登城ありしかば、折ふし在城の面々、殘らず迎勞しけり。新左衞門も衆中にありけるを、伊豆守はやく見つけて、「そこに語る事こそあれ。今御前より罷りて」とて、御前へ出られ、さてやゝしばらくありて、御前より退かれ、衆中にていはれしは、「此たび天草にて、諸侯一度に賊壘へ向ふべしと約束定りて、さておしよする時は、某が本陣にて、鐘を撞くべし。それを相圖に諸手の衆あつまるべしといひ合せて、僉議の間日を經けるが、某おもふには、今夜にても賊方の者か又は馬鹿ものありて、忍び入りて、鐘を撞きて、我衆を誤る事もあらむかと、撞木を取りよせて我側に置きけるが、又おもふには、必ず撞木にも限るべからず。鐵砲やうの物にても撞くまじきにもあらずと、鐘を地へおろさせ、こもにて卷きて置かせたり。然る所に、賊徒挑戰つて、思ひよらず俄に手合せ

りしは、世にたぐひなき事にてありけり。其頃井上新左衛門といふ人は、執政府の從事たりしが、疎直に文飾なきをもて、伊豆守のために愛せらる。新左衛門常に詼諧を好みて、其爲人東方朔に似たり。ある時、いづかたよりか鱈を獻上しけるを、御前に披露するとて、伊豆守見屆けられしに、鱈に塵つきてありしかば、伊豆守氣色損じて、取次ぐ人をしかられしを、新左衛門傍にありしが、「いや、鱈には塵ある筈にて候」といふを伊豆守「いかに」ととへば、「三番叟に、ちりやたらりと申候はずや」といふ時に、伊豆守聞きて笑ひつゝ、氣色なほりて、「とかく物に念のいらぬ故にて候。なに事も念をいるるにしくはなし」といはれしを、新左衛門、「各樣には、御念のいり候がよく候。我等ごとき輕き者は、あまり念をいれ候へば、却てあしき事もある物にて候」といふを、伊豆守「なにか念をいれてあしきやうあるべき」といはれければ、「其事に候。昔唐の玄宗、方士に命じて、楊貴妃のありかを尋ねられしが、方士蓬萊宮に到りて貴妃にあひし程に、歸りて此よしを奏聞せんとて、其しるしを乞ひしかば、玉の簪をたまはりけり。しかるをあまり念過ぎて是は世にたぐひあるべき物なりとて、かさねて玄宗、貴妃との密語を聞きて還り報じければ、一旦首尾はよかりしが、玄宗、方士を疑ひそめられしより

方士―神仙の道を修むる人。道士

私のもとめなく—賄賂をむさぼらず

し故にかくのごとき人も出づるぞかし。重衡などをしてきかしめば、ほとんど驚死にも至りつべし。されば、伊豆守善政多き中に、始て上聞して天下の殉死を禁じ、諸國の人質をやめ、大佛を錢に鑄られし、此三をば、世にも大器量の事にいひ傳へしなり。殉死を禁ぜられしは、ながく後世の害を除き、人質をやめられしは、あまねく諸國の患をすくひ、大佛を錢に鑄られしは、大きに古今の惑をとく。天下後世において大功德ありといふべし。但此時、伊豆守に限らず、諸執政いづれも至公至明にして、諸侯、諸役人に對して私のもとめなく、私の怒なく、只正道をもて下知せられし程に、其威令下に行はれしかば、諸侯諸役人も各おそれ愼みて、身持も正しかりしぞかし。しかも己が材智をもて人をふさがず、己が權柄をもて下をあなどらねば、諸役人も執政の威勢にはゞからず、上の御爲又は官守の事に付いては、必ず面爭ひて、言を盡さゞるなし。昔魯公伯禽、魯に、入封の時、周公いましめて、「平易近民、民必歸之」と宣へり。かの諸執政、この周公の詔に本づかるゝにてもなけれども、其心公にして治道に明なれば、おのづから聖人の心にも協へり。されば其餘澤今に至りて、太平の化日に盛なる事、上の御盛德とは申しながら、かの諸執政の力なきにもあらず。中に就て伊豆守の平易にて無造作な

容悦—前に註せり
光源院殿—足利第十四代将軍義輝
金仙—佛

されども、忠清、貞能がごときは、もとより容悦の具臣なれば、ふかくは論ずるにたらず。翁が日ごろうたてしくおもふは、重衡の事にて侍る。其身不幸にして生捕れしは、さして耻辱にあらず。然るに、鎌倉に囚れし時は、宴遊の席に臨みて艶女に欵語し、奈良へ渡されし時は、警衛の士にねがうて愛妾に邂逅す。すべて丈夫のすべき事にあらず、いとみぐるしき事なり。しかるに、それをばいさゝか耻ずして、父命によりて奈良の大佛を燬きし事を、自からも大きなる罪悪とくやみおそれて、鎌倉にて頼朝の前にても陳謝し、京師にて法然に邂逅しても、此事をいひ出してふかくくやみしは、罪障懺悔の爲とこそ思はれけめ。その愚暗是非もなき事なり。近世松永彈正がふたゝび奈良の大佛をやきしを、信長の猛悪にてさへ、是をば大罪と思はるればこそ、松永が主君三好義長を弑し、光源院殿をころし奉りし大逆罪にならべて、三ツの人のならぬ事をしたるとて、彈正をはぢしめられしぞかし。嗚呼佛法の人心を蠹惑する事、何ぞこゝに至るや。然るに寛文の比かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、千年以來金仙を尊みて、かく成りたる風俗の後に出でて、京の大佛を鑄て錢とし、天下を利益せられしこそ、先にも後にもきかざる事なれ。其卓識誠に古今に傑出すともいふべし。御當家創業以後、文明日に開き

けるは、「したしくならせ給ふのよし、存知がたく候。番は獨身の者にて候へば、御ゆかりに成りまゐらすべき事覺え候はず」とあららかにいひやりければ、遠景大きに憤り、やすからぬ事に思ひて、ともすれば大將にあしざまに申しければ、いよく\罪おもくなりまさりにけり。され共、番は少しもいたまず、物ともせざりけり。かゝる程に、大將奥州泰衡を伐ちし時、番をめしていはれけるは、「汝をとくに身のいとまとらすべかりしに、思ふ子細ありて今日までは生け置きたるなり。身の安否は此たびの合戰によるべし」とて、鎧馬鞍など給りければ、番かしこまり悅びてむかひけるが、身命を惜まずゆゝしかりければ、其科をゆるされて、本領返し給り、二たび舊里に歸りしとなん。番いかなる人とはしらねど、始終死を守りて志をかへざりしにて、其操の廉潔なる事思ひやるべし。當時嬖幸の臣にゆかりを求めて、命をたすかるをさへ屑とせず。いはんや貞能がごとく、仇を忘れ勢に附きて、苟も免るゝを幸とせんや。孔子も、行己有恥をもて士とのたまへり。番がごとき誠の士といふべし。

○大佛の錢

りけり。(加賀の國に天野何がしといひし一人の浪士ありしが、遠景が子孫なり。それが家に、賴朝より遠景に下し給りし御敎書一通あり。「天野藤内遠景は奉公他に異なるの間、賴朝十代、遠景十代所領相違あるべからず」とかけるよし、それをみたる人の語りし。いとめづらしき事におぼゆるまゝ、今十世の宥とはいふなり)其時鎭西の任はてゝ歸りしが、上洛の時渡邊を通りて、番が妹をめとりけり。相具して關東に下向しけるが、遠景、此上は彼御氣色においては、いかにもし申しゆるすべし。若御承引なくば、遠景申しあづかるべし」といひければ、番が親類郎等、「さりとも今は右馬殿の召籠はゆるされなん」と悅びあへり。さて遠景關東に下り著きて、いつしか使を番がもとへつかはしていひけるは、「思ひがけずかくゆかりに成りまゐらせて候へば、ひとへに親ともたのみ奉るべし。内外に付けて疎略を存ずべからず」といひやりたりけり。番多年の召人にて、今日きらるべしあすきらるべしといひて、十餘年に及びけれども、荷擔人一人もなければ、申しなだむる者なし。たまく\かよるたより出來けるは、いかばかりかうれしかるべきに、番がいひけるは、「弓箭とる身のかよるめにあふ事、恥にてあらずさこそたよりなき身なれども、あながちにそのぬしこひねがふべき婿にあらず」とて、返事にいひ

河駿東郡にあり。維盛源頼朝と富士川を挾みて陣し、半夜水鳥の羽音に驚きて敗走せるなり

運籌—はかりごとをめぐらすこと

抖擻—行脚といふに同じ

きりもの—きけもの、はばきゝ

其餘平家の君臣やゝ勇壯なるもあれども、それも優柔不斷にして、材力弱ければ、將率は運籌決勝の略なく、士卒は先登陷陣の勇なし。されば、上總介忠清が士大將としていかめしく振舞ひしも、維盛と同じくにげ歸りしをば、其時の人、「ころもたゞきよ」と嘲弄せしぞかし。又筑後守貞能は、清盛第一の寵臣にて、平家全盛の時は、意氣揚々たりしが、壽永年中、平家安德帝を奉じて西海に赴きし折しも、貞能出征して凱旋せしが、途中にて車駕に出合ひしに、ひとり引きちがへて都へ歸りしかども、身の置所なきまゝに、平家の跡を追ひて西國へ行きしが、平家の勢日に蹙りて、日に危亡に瀕きを見て、又逃去つて釋門に入りつゝ、肥後入道と稱しける。其後無程源氏の世となりしかば、鎌倉に至り、宇都宮朝綱と舊識のよしみあるによりて、朝綱に因て乞降し故に、一命を助けられ、抖擻行脚して、あなたこなたと餬ひつゝ、一生を終るときこえし。恥をしらざるの甚しきものなり。是につきて、渡部右馬允番が事を感じ侍る。義經西國へ落ちし時、渡部にて番がもとへよりて事のよしをいひければ、番あはれみて見送りけり、後に其事聞えて、關東にめされて、梶原にあづけられ、十二年を經たりし程に、鎭西の追討使に、天野藤內遠景むかひけり。大將家のきりものにて、十世の宥を得る程の事な

茂才懿行―すぐれたる才よき行

浮島が原にて云々―浮島が原は駿

○渡部番

ある時、諸客來會せしに、翁いひけるは、「ちかき比、我國の書をよませて承るに、古より茂材懿行の人もあるべけれど、ふるき物語などは、少しも道理のさたに及ぶ事なく、記錄の類も、國史をはじめ、時政事實の略をしるす迄にて、當時の人物、又は人の言行をば、しるすべき事ともおもひよらねば、しるし置くべきやうもなし。よりて忠臣義士の事も、世に湮沒して傳らず。是も我國の一缺事といふべし。其後武家の世になりて、勇將烈士、君のため國のため死を潔うする事、歷擧するにいとまあらず。責て是はすこし風敎の助ともなりなんかし。もし上にたち下を治る人にていはゞ、平家治世のはじめ、小松の重盛をこそ世に賢人とは稱すれ。父淸盛暴逆にして君に背きしを、重盛その間にゐて、忠孝ふたつながら闕けず、誠に後世臣子たる者の法とすべし。されど、燈籠の大臣といはれ、異國へ金を渡せし事を見るに、材識暗弱、恐らくはいふにたらず。其子維盛、浮島が原にて水鳥の羽音におどろきて都へにげ歸り、天下の人口に係りしも、家法嚴ならずして、子弟驕泰にそだつが故なり。燈籠の念佛祟をなすなるべし。

凡人 たゞうど―

中に簑笠著て尋ねにゆきしをば、兼好もよしとおもへばこそ、是をもしるしおきけめ。

さいつころ、太平記を見輩のよむを聞侍るに、北野通夜物がたりに、むかし青砥左衛門、夜に入りて出仕しけるに、いつも燧袋に入れて持ちたる錢を、十文誤つて滑川へ落したりけるを、よしさてもあれかしとてこそ行過ぐべかりしを、其邊の人家へ人を走らかし、錢五十文を出して續松を十把買つて、是を燃しつゝ、川を浚へて、終に十文の錢を求め得たりける。さていひける、「十文の錢は、たゞ今求めずは、水底に沈みてながく失せぬべし。五十文の錢は、商人の手に渉りて、ながくうせず。彼と我となにの差別かあるべき。彼此六十文の錢を失はず。豈天下の利にあらずや」といひしとぞ。五十文の錢を費して十文の錢を求むるは、常人の思案にていはゞ、勝手にはきはめてせぬをよしとする事なれども、道理においてすべき所を考へてかくするにこそ。いはゞ輕き事のやうなれども、拔群の見識なくてはなるまじき事ぞかし。「商人と我となにの差別かあるべき」といへるは、「楚王失レ弓、楚人得レ之」といふにかなひて、「天下の利にあらずや」といへるは、楚人得レ之といふよりも其識量一かさ大きなる事なり。青砥左衛門たゞうどにはあらず、其言行世に傳らざるこそ遺恨なる事なれ。

いはぬものなり。いうてもよしいはでもよしとおもふ事をいうて、やゝもすれば跡にくやむぞかし。喰ひてあたるとしれたる物は、誰もくはぬ物なり。喰ひてもよしくはでもよしとおもふ物を喰ひて、やゝもすれば跡にくやむぞかし。兼好も身に覺えありてこそかくはいひつらめ。よのつねの人の省になる語なり。但兼好は老莊の無爲を尙ぶ人なれば、何事も必ずしもいはんとせず、必ずしもなさんとせぬ心にてかくいふなるべし。今翁が此語を用ふるは、さにてはなし。孟子に、「可以取。可以無取。取傷廉」といへる、其意、此語と相似たり。可以取は、はじめかくと見て、可以無取は、かさねて料簡をくはふる意なり。されば、兼好が此語も、かくいへばとて、一槩にたゞいはぬがよし、せぬがよしとは意得べからず。其いはずやあらまし、せずやあらましと思ふ所に意をつくべし。道理にて思ふと、勝手にておもふとのちがひあるべし。道理においていふべき事なるを思ひよらずして、勝手にいはぬがよしと思うていはでやみ、道理においてすべき事なるを思ひよらずして、勝手にせぬがよしとおもうてせずしてやみなば、ひかへがちにて後の悔みこそなかるべけれども、それにはいつか善にすゝみ。義にいさむべき。されば、「まそほのすゝきますほのすゝき」といふ事は、なに事かはしらねども、雨

時とし—時としてか

ふ。外にもかやうのたぐひ多かり。いづれも簡要の旨にて、聖賢の教にもかなひぬべし。さすが人物怜悧なる故に、其いふ所時とし道理にあたる事もあるにこそ。鐵中錚々傭中佼々といへる類なり。管中より豹を窺つて、一斑を見るともいふべし。たゞし、是ほど頴悟なる人もおほく得がたし。もし聖賢の道を學ばしめば、中々釋門に陥るには至らじ。をしき事なり。それに、釋門に入りにし甲斐さへなくて、女色に溺れ一生を誤り、今に至つて汚名を殘しつるこそ、なげきても餘ある事なれ。是につけても、人欲の險しきをしるべし。

○青砥が續松

しかはいへど、「君子は人をもて言をすてず」と聖人ものたまへり。翁も、徒然草にて一の益を得たる事こそ侍れ。それは、かの巻中の一條に、「いひやせましいはずやあらましとおもふ事は、おほやうはいはぬがよきなり」とあり。又一言芳談とやらんいふ物語を引きて、「しやせましせずやあらましと思ふ事は、おほやうはせぬがよきなり」ともあり。翁、いつも言語飲食につけて此語を思ひ出し侍る。いうてあしきと知れたる事は、誰も

氷炭薫蕕を云々ー薫は香草蕕は臭草、卽ち善悪正邪など相反するものの同在する意

俳諧ー滑稽

あかり障子ー今障子といふに同じ

醜惡なる物ぞかし。然るを、聖人垂教の書に比していふは、誠に氷炭薫蕕をひとしうするなるべし。昔より、我國釋教世に行はれて、佛につかふるより重しとするはなく。荒淫俗をなして、色に耽るより樂しとするはなし。それ故に、當時あらはしぬる物語もこの二端をしるすを高致とするならし。さて自餘の記しおく事も、多くは奇怪妄誕の談ならねば、俳諧鄙陋の說なり。ひとつとして義理にわたる事なし。責て此徒然草ほどの物も見當らず候。世に賞翫するも理にて侍る。其載る所、佛法のさた好色の事を除きて、風景をのべ人情をかたり、又は世にあらゆる種々の事をしるしおきけるも、尤おろかに聞ゆる事もあれども、大かたは理趣ある事になん覺え侍る。中にも、雜念をいましめて、「我心に主あらましかば、そこばくの事は入來らじ」といひ、懈怠をいましめて、「道を學する人、夕には朝ある事を思はず、朝には夕ある事を思はず、たゞ今の一念の上においてたゞちにすゝむべし」といひ、貝をおほふたとへを引きて、「萬の事外にむきて求むべからず、たゞこゝもとを正しくして、前程をとふ事なかれ」といひ、松下禪尼のあかり障子をはられし事を引きて、世を治むる道儉約をもととする事をいひ、高名の木のぼりがいひし事を引きて、あやまちは危き程はなくして、安き所になりてある事をい

三鏡—大鏡増鏡、水鏡

縉紳—原本薦紳

二南、雅頌、國風—皆毛詩の卷の名なり

程我國の物がたり草子をよませて承るに、事實を記し候書、三鏡、榮華物語などの外は、いづれも取るにたらぬものにて候。大かたはあまき佛ばなしにて、あきはて侍れど、それは世の流弊なればいかゞせん。其外、ともすれば好色のさたにて、聞くに忍びざる事おほく。中にも伊勢、源氏物がたりなどは、年弱なる男女には、禁じて見すまじき物なり。淫亂を導く媒ともなりぬべし。しかるに、縉紳家に、源氏物語を我國の寶といへるは、いかなる故ともしらず。定めて倭語の妙を得たるに心酔しての事にやあらむ。いはゆる庶子の春花を採つて、家丞の秋實を忘るゝ也。それに、近世此物語を註釋し講説して、毛詩に淫奔の詩を擧げて勸懲をしめすごとく、人の戒世の教とするといへるは、俗話にいふ杓子定木なるべし。いかにとなれば、二南は脩レ身齊レ家の本なり。雅頌は論レ道述レ德の辭也。國風はもとより里巷の男女各言レ情の詩なれば、正もあり邪もあれども、其邪といふも、媒介によらずして淫奔するといふばかりにて、いづれも后妃を盜み繼母寡嫂に淫するやうの事やある。又伊勢、源氏のごとく、邪淫の事のみを始終いひ盡してやむにはあらず。よりて、正を見てはみづから勸めて、邪を見てはみづからこらすぞかし。伊勢、源氏は、いはゞ長恨歌、西廂記などの品にて、其冗長にして

朶頤―むさぼり求むること

○つれ〲草

ある時、諸客來り會してけるに、翁が傍に兼好が徒然草あるを見て、一人の客いひけるは、「兼好は倭語に長じたる者にて、風景人情をよくいひとり、人に頤を解しめ候。翁も好みて見給へるや」翁、「いやとよ、病中臥しがちにて日をくらしかね候故、かやうの書を兒輩に讀ませて承るにて候。これをとさして好むといふにも侍らず」といへば、外の一人、「兼好はやゝ見識ある人のやうに世にも申習はし候。翁はいかゞ思し給ふにや」翁、「世に一種の侘人ありて、兼好をしたひ侍る。それは、彼が名利をいとひ、閑寂を樂しむに同心するゆゑにて候。翁は、それもたしかには思ひ侍らず。太平記に、高師直が爲に艶書をかきし事見えたり。其後、伊賀守橘成忠が招に仍つて、伊賀の國に赴きしが、そこにて成忠が娘に通ぜし事、園太暦に載せて、其時の歌なども見えたり。是にてしるべし、世に諂らひ色にふけり、隱逸をこのみ名利をいとふといへど、もとより隱者の操ある人にあらず。されば、徒然草も佛法に朶頤し、諄々として出離をとくかと見れば、女色に垂涎して淫奔を語る、なにの見識かあるべき。されど、徒然草に限らず、此

奔競—爭ひせりあふこと

唐庚—宋人、文章精密を以て名あり文集三十巻あり

を耗しながら、何の甲斐なき事になるぞかし。しかのみならず、毛を吹いて疵を求め、風なうして波を生じ、忠厚の風日に敗れ、奔競の習日に長ずる程に、たとひ小利を得るとも、ながく國家の害を貽す事輕きにあらず。いはんや祖宗の良法成策、先代より用ひ來りて、天下の耳熟し目馴れし事久し。かやうの類は、輕々しくいろふ事あるべからず。宋の煕寧中に、しば〳〵法を變じければ、唐庚存舊の論をあらはしけるが、「國家の舊物は常に民の耳目に習はすべし。不得已に非ざるよりは、改易變置して民心を失ふべからず」と論じけるこそ、尤其理ある事に覺え侍れ。但それも一槩にはいひがたし。たとへば、祖宗の代に、時宜にしたがひ假に建置きて、ながく用ふべからざる事あり、いまだ首尾備はらざる事あり。さやうの類は、後嗣の代に至つて、或は改革し、或は斟酌してこそ、祖宗の志をなすともいふべけれ。もし祖宗の法とてそれに泥みて、世のわづらひ、治のさまたげとも成る事を、其まゝさし置きなば、何をもて舊弊を改むべき。何をもて善政を行ふべき。又なにをもて孝子慈孫ある事を望むべき。定めて祖宗の心にもかなふべからず」とて、翁古を援き今を證して語りけるに、夏のみじか夜はやあけがたにちかければ、諸客皆いとま申してまかりぬ。

ありふりたる―ありふれたる

り候故に、づくとかき候」と長々とことわりけり。それならば、始よりみゝづくとかけかしと、片腹いたし。文字をつゞめんとて、多くの文字をそへ、詞を短くせんとてかへりてながくなる事をしらず。翁、世間の事を見るに、此たぐひ多し。たとへば、ものをいふにも、常にいひつけたるやうにいへばよきを、我しりがほに、漢語などにて舌短にいひつれば、人きゝとらぬ程に、亦いひなほしなんどして、いとむづかし。事をなすにも、今までなし來るやうにすればよきを、我かしこげに理窟をもて手廻しにしつれば、事つかふる程に、又でなほしなんどして、跡へもどる事おほし。かやうの事は、物馴れぬ人のある事なり。いづれもみゝづくの文にたぐふべし。其外、なに事によらず、たゞありふりたるやうにすれば、やすらかにして事ゆきぬるを、よろしき仕方こそあれとて、あたらしく仕出しぬれば、事多くむづかしくなりつゝ、かねての用意とはちがふ物なり。中にも國家の政には、もつとも此意得あるべき事也。古より、新進の人、己が材智をあらはさんとて、好んで新意を出し、舊政を改むる事、いづれの代にもなきにあらず。其内十に二三は益ある事もあれど、大かたは近効をのみ見て遠慮を忘れ、事の易きをのみ見て難きをしらず。さる程に思の外にさはる事おほく出來て、貨財を費し人力

原本「過ぎん事なし」の下に更に「ことなし」の三字あり。

鴟鴞—みゝづく

たとへも、前にいひし江河溝渠の意と同じかるべし。然れば、古の明王賢相は、寛を本とすといへど、時によりて猛をも用ひけらし。この故に、「寛則民慢。慢則糾レ之以レ猛。猛則民殘。殘則施レ之以レ寛。寛以濟レ猛。猛以濟レ寛。政是以和」と孔子も宣へり。二偏には意得べからず。

○鴟鴞のふみ

たゞし、國家の事は、大小によらず、國弊え民瘼まば改めずんばあるべからず。其外は、おほやう舊貫によりて改めざるをよしとす。木の匠のつくれる器も、舊制を改めて新しく仕出したるは、一旦勝手に能きやうなれども、其すがた下りていやしきのみならず、其用手せばくして廣からず、小まはしにてやすからず。さるまゝに、いろ〳〵たくみ出して、わづらはしくなりゆく程に、やがてもちひずなりぬるぞかし。こゝにをかしき物がたり侍る。ある人鴟鴞を畜ひて、それを囮にして鳥を捕へけるに、同じく殺生する友達のもとより、みゝづくをかりに越しけるが、其文に、みゝづくを略し「づく」とかきて其末に、「づくとはみゝづくの事にて候。みゝづくとかき候へば、文字かず多く言長に成

褐—長き下著

輿人—衆人

原本「愛養する」の下に更に「する」の二字あり。

しきを見て、衆謗競起つて、異議もまち〳〵なる物ぞかし。古より明智の人は、それに少しも拘らずして、其功を成就しぬれば、畢竟天下の利となる故に、つひには上下安堵して、もろともによろこぶものなり。是かの晦きをもちひ、遠きを照すの明ならずしては、成りがたし。小智短慮の人の及ぶべき所にあらず。むかし鄭の子産、鄭國の政をせしに、舊俗の弊を改めて、いときびしく車服の驕を禁じ、田廬の制を定めしかば、富人おそれて、美服をば褐に入れてかくしけり。豪民の兼幷する田をばこと〴〵く取上げて、部伍に歸せしむ。さる程に、輿人これが爲に誦していはく、「取我衣冠而褚之。取我田疇而伍之。孰殺子産、吾其與之」とまで怨望せしかども、三年に及びて、驕奢の風やみ、侵暴の害除きしかば、亦誦していはく、「我有子弟。子産誨之。我有田疇。子産殖之。子産而死。誰其嗣之」とて、たがひによろこびけるとぞ。子産は惠人なりと孔子ものたまひて、其政民を愛養する事ふかゝりしかども、ひとへに寬を貴ぶにあらず、猛なるべき時はかくありしぞかし。其後政を子大叔に授けし時、子大叔が寬に過ぎん事を兼てさとりて、「火は烈くして民望んで畏るゝが故に、火に入りて死するものはすくなし。水は懦弱にして民狎れて翫ぶ故に、多く溺れて死す」といへり。此水火の

利病―利益と病弊

れども、遠きを照すことあたはず。この故に、人君の明は燭臺のごとくなるべし、紙燭のごとくなるべからず。天下の法は、寛大にして江河のごとくなるべし、瑣細にして溝渠のごとくなるべからず。江河は大きにしていちじるければ、よけやすし。しかも深廣にしてあなどりがたき故に、犯しがたし。溝渠は小さくしてしげければ、よけがたし。しかも淺狹にして近づきやすき故に、犯しやすし。さるによりて、昔より江河を蹈あやまりて、はまるものあるをきかず。溝渠には、やゝもすればはまるもの多し。こゝをもて、後漢の郎顗が安帝に上る書に、「王者の法は江河のごとし。易レ避して難レ犯」といへり。古今不易の名言といふべし。されど、しかあればとて、政は一向に寛大なるをよしとするといふにもあらず。是は科條を繁くして、法令煩苛なるを惡むといふ事なり。もとより寛大なるをよしとすれども、時により事によりては、嚴急にするを貴ぶべし。大かた泰平の世は、民俗遊惰に流れ、驕奢を好むぞかし。今是を治むるに、もし無事を專にし、簡易をつとめては、舊弊除くべきやうなし。必ず政事を革め、法令を嚴にして、民の耳目を新にすべし。然るに、民は可ニ與樂一レ成、不レ可ニ與謀一レ始とて、民はおろかにして國家の利病をしらず、たゞ私の利害をのみ先とする故に、其事の始には、己が勝手にあ

濫觴―はじまりきざすこと

仁宗の後神宗に至りて、王安石呂惠卿等を用ひて、新法を造り、功利に趨る。是より朝野騷擾し、民心愁苦し、宋朝の禍こゝに濫觴しけらし。二君みな英明の主にてありしが、いかゞしてこゝに至るといへば、たゞ材力に驕り、諸欲を盡さんとして、持滿の道にくらく、三驅の法をしらざればなり。宋史に、史臣仁宗を贊していはく、

四十二年之間。吏治若㆓偸惰㆒而任㆑事蔑㆓殘刻之人㆒。刑法似㆓縱弛㆒而決獄多㆓平允之士㆒。國未㆓嘗無㆓嬖倖㆒而不㆑足㆓以累㆓治世之體㆒。朝未㆓嘗無㆓小人㆒而不㆑足㆓以勝㆓善類之氣㆒。君臣上下惻怛之心忠厚之政。所㆓以培㆓植國基㆒者厚矣。

此贊よく仁宗の朝を推論してその理を盡せり。是をもて見るに、仁宗の時、君臣ともに聰明をつくさず、寛容をたつとぶとしれたり。誠に三驅失㆓前禽㆒の遺風といふべし。

○法は江河のごとし

されば古人も、「人君は貴㆑明不㆑貴㆑察」といへり。明と察とは、似て似ぬ事なり。明は燭臺にて座を照すがごとし。其光たかく其本をぐらけれども、座中をあまねく照すべし。察は紙燭にて物を照すがごとし。手もとあかるくして、物を見とむる事いちはやけ

政にていふとも、其理同じかるべし。いやしき諺にいふごとく、國の仕置は、すり木にて升の底をまはすがごとくすべし。すみ〴〵すり木の行きとゞかぬところあり。其行きとゞかぬ所、かへりて人のくつろぎ、事のよけいともなる程に、久しうしておのづから行きとゞくもの也。然るを、法令を嚴にして、急に行きとゞくやうにとするときは、終に行きとゞかざるのみならず、外にさはり出來て、騷動にも及ぶぞかし。易に、「王用三驅失二前禽一」といへるも、天子の獵は不レ合レ圍とて、網の三面ばかり張つて一面をあけ、禽のにげみちを殘す也。其ごとく、政事のおほやうにて、たゞ七八分程にして、二三分を殘すにたとへていふなるべし。詩にいはく、「彼有二不レ穫穉一。此有二不レ斂穧一。彼有二遺秉一。此有二滯穗一。伊寡婦之利」これ田畝の事ながら、周時上に寛政あり、下に遺利ある事をしるべし。又十分に盡さずして、前禽を失ふの心なり。翁嘗て歷史を考ふるに、漢は文帝に至り、宋は仁宗に至つて最盛なりと稱す。然るに、二君いづれも寛大にして、政事はかどる事なく、行きたらぬやうなりしが、天下穩にして、おのづから治り安かりき。文帝の後武帝に至りて、張湯・桑弘羊等をもちひて、威怒を十分にきはめ、貨利は一毫も遺さず。是より生靈荼毒し、民心離叛いて、漢家の危き事殆ど累卵のごとし。

子にして後鳥羽帝より順徳帝まで頃の人
木偶人—木人形

したくてもかなはず。口目をば先小くすべし。もし口目を十分よき程におくれば、後にもし大きに見ゆる時に、小さくしたくてもかなはず。されば、耳鼻を大きにし、口目を小さくするを第一の口傳とするとぞ。是はもと韓非子に出でて、宋の蘇頌がいひし事也。此木偶人を作る意得は、何事にもあるべし。しばらく思ひつけたる事にていふに、曲禮に、「君子不レ盡二人之歡一、不レ竭二人之忠一、以全レ交也」といへり。是等にてもしるべし。人の我爲に杯酒を催しなどして歡愛を篤うするを、人の歡といふ。人の歡を十分にきはむる故に、あまりしたしくなれば、反て無禮にもなり、あまり興あらむとすれば、反て無興にも成るもの也。陳の公子完、齊の桓公のために親愛せられしが、桓公其家に就きて飲まれしに、晝迄にてはあきたらずとて、「火をもてつげ」といはれしを、「臣卜二其晝一、未レ卜二其夜一」とて、夜飲を辭せしは、人の歡をつくさじと也。人の我爲に音問をかゝさずなどして、心のまめやかなるを人の忠といふ。人の忠を十分に賴む故に、すこしとゞかねば、必ずとがむるもの也。聖人易の恒の卦において、初六の九四に求望の心深きをいましめて、「復二恒一貞凶」といへるは、人の忠をつくさじとなり。こゝをもて、君子はかねて人の歡を盡さず、人の忠を竭さずして、人と始終交を全うするぞかし。もし國家の

其明わづかに近うしてやみぬ。小人の道は的然として日にほろぶるがごとし。此理をしめして、明かなるものは必ずもとを暗うすといふ心にて、燈臺もとくらしといふにもあらむかし。但此諺の正意は、各のいへるごとくなるべし。翁がいへるをば、姑く一說にそなへ給へかし。さても根もなき事に、あまりくはしき僉議かな」とて、翁微笑しければ、諸客、「かやうの事にも、翁の心のつけられやうこそ別段の事にて候へ」とて、各感じあへり。

○運慶が口傳

さて翁いひけるは、「月は盈つれば虧け、花は盛なればちる。家語に、子路持滿の道を孔子に問ひければ、「聰明睿智守レ之以レ愚」とのたまへり。翁が前にいへる、明を晦に養ふも、聰明を十分に盡さじとなり。すべて、物は十分に盡すを嫌ふ也。なに事をするも、七八分にして前を殘して盡さぬをよしとす。もし心ゆくまゝに、一旦に殘さず盡しぬれば、必ず後に悔みあるもの也。或人、佛師運慶が口傳とて語りしは、佛を作るには、耳鼻をば先大きにすべし。もし耳鼻を十分能き程に斷れば、後に小さく見ゆる時に、大きに

運慶—有名なる佛師なり。康慶の

其家主の名をきかせて通られしが、翌日其家主を召しよせて、「汝先年何にても訴訟したる事やある。今尋ぬるは、少しもきづかひなる事にてはなし。ありしやうに申すべし」といはれしかば、始めなにかと辭退しけるが、再三とはれて「此上はかくさず申上げ候。それの年それの月の事にて候。父の配分の事に就きて、一類の者と爭ひ候うて訴へ候ひが、其者無實の事を申しかけ候へども、證人共を多くこしらへ候うて申出で候故、御聽斷の上、相手の勝に定まり候。其次第かやう〳〵とくはしく語るを、下役人に命じて、其手にあたりし簿案をくらせけるに、すこしもたがひなかりしかば、其上にていよ〳〵尋ねきはめて、「是はたしかに某が聽きあやまりたるなり。いと殘念なれども、もはや年久しき事なれば、今更すべきやうなし。其配分ほどを某償つて、我過を謝すべし」とて、自分の金銀を出して其者へとらせられしとぞ。是にてしるべし、周防守己が威勢をつのらず、己が過失をかくさず、我は常に晦に處て明を衒はず、我は常に愚に處て智を先だてず、其心公にして私なし。誠に古今に有りがたき明智といふべし。今是等をもて此諺を考ふるに、燭臺はながくしてもとのくらきにて、其明おのづから遠きにおよぶ。君子の道は闇然として日にあきらかなるがごとし。もし短うしてもとあかるければ、

簿案―控の帳簿

のたれ
黈纊—みみあて
はやきり—意不明なり或は「はやまり」か
兩造—原告と被告

きらうて、晦きをもちひて養はんとなり。古より倭漢ともに大智遠識の人の、己が材智に傲りて、好んで自ら用ひるをきかず。老子の「良賈深藏若虚、君子盛德若愚」といへるも、げにさることぞかし。ちかきころ、故板倉周防守、京師に留守たりし時、訴訟をきかれしに、己が材智のはやきり、聲色のうごきなば、我もそれに氣乘じ、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情を盡さゞる事あらんとて、必ず障子を隔てゝ、わざと手づから茶をひきなどし、たゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり。さすが近代の名人とはいひながら、おのづから聖人の心にもかなへり。それ故、曲直理を盡し、聽斷神に通じ、人々畏服せざるはなし。いはゆる用晦而明なるにあらずや。今に至りて世の談者傳へ誦して、口實とする事枚擧するにいとまあらず。中にも、翁が最感じおもふ事あり。周防守、ある時京の在家を通られしに、さる家に、幼少の子出であそびしが、「あれ周防こそ通らるれ」といひしを、周防守馬上にて聞きとがめて、「我不肖といへど、上の御代官としてこゝにあれば、京中村閭に住する者、男女老弱をいはず、我をかくおしくだしていふ事あるべからず。しかるに此家の兒輩かくいふは、常に家人の我をうらみてかくいふを、聞馴れし故なるべし。是は定めて子細あるべし」とて

淺近短慮―あさはか
冕旒―玉を貫きたる冠

しに、「吾道は處暗がごとし、よく明中の事を區畫す」といへり。關尹子は關令尹喜が書なり。尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も、此人の爲にあらはせると也。今世に傳る關尹子の書は、大かた後人の作にて、尹喜に名を託したる物にてもあらむかし。されど、老子の道は、たしかに處暗を宗とすることにて侍る。但老子の道にも限るべからず。吾儒にも簡要とする事也。たとへば、わが身くらがりにゐて、くらがりよりあかりを見れば、あかりの事殘なく見ゆるものなり。わが身あかりにゐて、あかりよりくらがりを見ては、くらがりの事一切見えぬものぞかし。されば、くらがりにゐてあかりを見るやうに、己が智をふかくひそめ養ひて、くらきより明らかなるを生ずるやうにすれば、其明悠長寛大にて、自然に遠きにおよびなん。それこそ眞の明といふべけれ。もし己が材智にほこり、聰明を盡して、たゞ手もとのあかるきを專にせば、あかりにゐてくらがりを見るがごとし。其明淺近短慮にて、遠きに及ばざるのみならず、たゞ手もとの事のみ見えて、下手の棊をうつがごとし。末の手は見えざる程に、每々是非をあやまる事も多かるべし。こゝをもて聖人易において、「明入二地中一明夷、君子以蒞レ衆用レ晦而明」と宣へり。古の聖王、冕旒目を蔽ひ、黈纊耳を塞ぐも、聰明の刃はやきを

蕭墻―かきれ、即ち身近きところ

短檠―丈の低き燈火

英主の遠畧をつとむるが、其威望遠く敵國に及べども、まぢかく蕭墻のもとに敵ある事をしらざるも、燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはゞ、織田信長、關東關西の諸國迄手をのばし討ちしたがへられしかども、手本にくらうして、明智にころされし、燈臺もとくらきにあらずや」といふを、翁きゝて、「すべて比喩の語は、義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候。此諺も、各たがひに其義をつくされしにて、もはや此外はあるまじく覺え侍る。但各の申さるゝは。いづれも燈臺もと暗しを、あしきかたにたとへらるゝにて候。翁は又、此諺を、よろしき方に取りなして聞きたくこそ侍れ。又一種の道理もあるべきにや。韓退之が短檠の歌に、「長檠八尺空自長。短檠二尺便且光」とつくれるごとく、燭臺も、長きは燭のもとくらく、短きは燭のもとあかるし。夜中に書をよみ字を寫すやうの事には、手もとを明らかにして其用をかなふる故に、短きを貴ぶにて候へども、さりとて、一二尺の手燭にては、燭のもとこそあかるくあるべけれ、此座上にても、くまぐ〜のくらきを照しぬる事は難かるべし。まいて稠人廣座をいかゞして照し申すべしや。しかれば、もとをあかるくしては、遠きをてらし難し。遠きをてらすは、必ずもと暗きものとしるべし。翁いつの比か、關尹子を見侍り

子の「道在レ邇而求ニ諸遠一」といふ意にもたとへばたとへつべし。人ごとに本を忘れて末をつとめ、近きをすてゝ遠きに求むるは、常の事にて候。是を射る者の的にのみ志して、あたりの手前にある事を知らぬにたとへたれば、燈臺のもとくらきにたとへても同じこゝろならんかし」亦ひとり聞きて、「されば其事にて候。羅大經が鶴林玉露に、悟道といふ尼の作とて、

盡日尋レ春不レ見レ春　芒鞋踏遍隴頭雲

歸來笑撚ニ梅花一嗅　春在ニ枝頭一已十分

是も、道のちかきに在りて遠きに求むるたとへなり。終日山野に春を尋ねくらして、春はとくにわが宿の梅にある事をしらずといへるも、燈臺もとくらきの意にもよくかなひて、いとゞおもしろくこそ候へ」又ひとり、「道のさたばかりにも限らず、外の事にもあるべし。たとへは、東晉の時、桓溫、三秦に打入りしに當つて、王猛來見しけるに、「三秦の豪傑、なにとていまだ一人も見え來らぬ」と問ひしにぞ、桓溫が眼のくらきもしられけり。三秦の豪傑王猛に過ぎたるものやあるべき。眼前に豪傑あるをしらずして、豪傑にむかうて豪傑を問ひしは、燈臺もとくらきにて候はずや」又ひとり、「古より倭漢共に

積雨—連日の雨

駿臺雜話　卷四

○燈臺もと暗し

三伏の夏もはや半過ぎ行きし頃、人々すゞみがてらに、駿臺の菴にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に霽れて、夕日梢にのこれるに、庭の竹樹露すゞしく、池の芙蓉風かをり、なにとなく見すぐしがたき折からなり。諸客はしるしつゝ、勾欄によりて、詩歌を朗詠しけるが、はやもののあやめも見えぬばかりに暮れゆけば、やがて内に入りて、翁にいとま申さむといふを「今しばし」とあれば、「さらば、宵の間過ぐる程こゝにありて、御物語承らん」とて、各坐につきけり。しばらくありて、燭もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、「世俗の諺に、「燈臺もと暗し」といふは、いかやうの事にたとへていふにやあらん。おの〳〵いうて見給へ」とあれば、座客の中ひとりいひけるは、「世に何事にてもあれ、外にはかくれなき事を、其もとにてきけば、却て分明ならぬやうの事に、かく申しならし候。但我等が愚見にて、是に道理をつけて申候はゞ、孟

結解の何がし、乞食八兵衞が類、世になほ多かるべし。翁がきかぬはいかゞせん、きゝてはいはざるに忍びず。昔我朝勅撰の和歌集を見るに、いやしき野僧妓女の類も、天子公卿に名を列するは、倭歌に尊卑の差別なし。是を倭歌の德といへり。今翁が節義を語るとて、良家名族の士に、乞食などをも竝べ擧げてひとつに稱するも、其心亦しかなり。節義に貴賤のへだてなし。是節義の德といふべし。各にもきかれ候ひて、翁が議論不倫なりと思ひ給ふべからず」

嗟來の食—いやしみて與ふる食
凍餒—寒さと飢
甄揚—前に註せり

ば、世には名は歴々の士大夫とよばれて、實は乞食なる人もあり。此八兵衛は、名は乞食なれども、實は士大夫といふべし。又加賀の國に野田山とてあり。前田家先祖以來代代こゝに葬る故に、家中の諸士も、死すれば其麓に葬らざるはすくなし。さる間、中元には家々より。墓前に燈籠を具ふ、毎歳の事なり。厚祿の家こそ、假屋を造り人をつけ置きて守りもすれ、其外は、大かた夜ふくればともし捨てて歸りぬるに、下部の惡黨ども來て、火を打ちけし、蠟燭を奪取りけり。側に乞食とおぼしき者、こもをかぶりて臥し居たりけるが、それを見て、「人の祖考のためとて墓にすゝめける物を、さやうに狼藉する事あるべからず」と制しけるに、惡黨ども、もろともに罵つて、「こもをかぶる身として、いらぬ事をいふ奴かな」といひしに、その乞食きゝて、「各が今するやうなることをせぬ故にこもをかぶる」といひしとぞ。齊の餓者の、嗟來の食を食せざる故に、こゝに至る、といひしに語意相似て、おもしろく覺え侍る。此乞兒辭令にもよかりなん。言簡にて意足るといふべし。只いつもくり事のやうなる事なれども、古も今も、からもやまとも、節義の守りある人あれど、凍餒にさへ免れずして、溝壑に斃れて、其名も世にしられぬこそかなしけれ。もとより幽隱の行を甄揚するは、吾徒の任なり。今物語せし

商賈—「商賈」にあらざるか。且く原本に從ふ

孤貧—よるべなくまづしきこと

火伴—仲間の義

べ候うて、食傷いたし候か、今曉急死いたし候」といふを聞きて、市十郎おどろき、死骸を見屆け、善七に、「此死骸もらひたく候。かまへて粗忽に外へ移すべからず」と堅くいひ合せ、さて家に歸り、其よしを吉兵衛にいひきかせければ、早々人をつかはし、死骸をうけ取り、右の五兩の金をもて、本庄無縁寺にて厚く葬りしとなん。吉兵衛も義に感ずる事商賈には奇特といふべし。日ごろ加賀侯家の用をきゝて出入する故に、手代市十郎その月の廿日に加賀の邸へ來て、かの家の役人に始終語りしとて、翁にきかする人ありき。世に是に似たるやうの事ありと、折ふし人の話に聞くといへど、是程たしかなる事はきかず。よりて聞きたる通りを、少しものこさず、各にも語り侍る。おもふに、八兵衛たゞ人にあらず。いかなれば乞食の黨には入りにけん、定めてもとは賤しからぬ者にありしが、孤貧きはまりて、家もなく乞食してありく程に、外の乞食と一例になりて、是非なく善七が手下に屬しけるにもあらむ。されば、ながらへて甲斐なき事とおもひしが、幸に金を得て酒肉をもとめ、火伴と歡會しける程に、これを限りとおもひて、自ら喉などしめて死しけるにもあらん、はかりがたし。この八兵衛を士とし、又は人の上におくとも、權柄をもて人の物を乞求るやうの事は、決してすまじき者なり。され

金一星━小粒銀一箇

たるにてなく候。定めておとしたる人、主人の金などならば、さぞ難儀に及ばるべし。他人に拾はせなば、其落せし人にはふたゝび返るまじ。さらば我等拾置きて、其人に返さまく思ひて、拾ひ置きたるにてこそ候へ。そこ許へ渡し候へば、我等が志通りて候。さらばいとま申し候はん」とて、其儘そこをさりて、見かへりもせで行きけるを、市十郎跡をしたひて、取あへず懐中より金一星取出し、「けふは寒氣もつよく候。歸られ候はば、是にて酒をもとめてたべられ候へ」とてあたへければ、「是は御志にて候まゝ、申受け候うて、是にて御酒たべ申すべき」とてそれをば受けて立ち別れける。名を尋ねければ、名は八兵衛とて、車善七が手下の乞食のよし申候。市十郎宅に歸りて、主人吉兵衛にくはしく語りしかば、吉兵衛聞きて感涙にたへず、「なにとぞ右の五兩を八兵衛につかはしたし。明朝早く善七が宅迄持參し、善七にも申しきかせ、八兵衛に合點いたさせ、とかく受け候やうにはからひ候へ」とて、市十郎に手代頭をさしそへつかはしける。さて善七がもとへ行きて尋ねければ、「其八兵衛と申候乞食は、昨夕いづくにてやらん、金一切もらひ候とて、善七へも見せ候ひしが、なかまの乞食どもよびあつめ候うて、その金をもて酒肴もとめ、人にもたべさせ、其身もたべ候ひしが、たべつけぬものを多くた

おもひ侍れ。此十年以前、享保癸卯の歳の十二月十七日、江戸室町の商人、越後屋吉兵衛といふ者の手代市十郎、諸方の買置の金請取りて歸りしが、金三拾兩入れたる袋ひとつ見えざる故、さだめて途にておとしたるものにてあらん。もはやあるまじきとはおもひながら、もと來し路を段々に尋ねありく程に、ある所に乞食一人ありしが、見とがめて、「なにを尋ね候や。もし金をおとさるゝにて候はずや」といふをきゝて、市十郎うれしくて、有のまゝに語りければ、「さればとよ、我等拾ひ置いて候。其主のたづね來ぬ事はあらじと、それを待ちてこそさき程より此所にをるにて候。いよ〳〵慥なる事承りとゞけて、たがひなくば渡し候べし」といふ。市十郎、金の員數、又は中にある證文などのやう、一々いひきかせしに、「さては疑なし」とて、取出し、袋のまゝにて渡しけり。市十郎餘の事に、さてやみがたくて、内五兩取出して、「是はせめてそこの得分にせられよ」とて與へけれども、中々受くるけしきなし。市十郎いひけるは、「此かねはなき物にきはめ置きしに、そこの志ゆゑにこそ、ふたゝび手にも入りたれ。然るを、殘らず我物とすべきにあらず。達て受けてくれ候へ」といへば、「よく考へて見給へ。其五兩をもらふ心得ならば、三拾兩を返し申すべきや。もとより自分の慾にてひろひ置き

見えざりき。此事私にて決しがたく、時の町奉行所へ申出でければ、「其者の遺書のごとく沙汰いたし候へ」との事にてありける。後日に忠秋もきかれて、「さては餓死しけるよな、不便の事なり」と申されしとなり。世に申し傳ふる佐野源左衛門常世が事、何に出でける事にかさだかならず。或人、「是は、太平記、北野通夜物がたりの段に見えし、攝津の國難波の浦の老尼の事を取直して、造り出したる物なり」といひし。さもあらんかし。それはそれにもせよ、此餓死しける浪士などこそ、今の世の常世ともいふべけれ。上に御大事あらば、一番に馳參るべき事疑なし。されど昔の常世は、ふたゝび世に出でしが、此人はむなしく餓死して果てけるこそ、其身もさぞ無念に思ふらめ。かやうの人、世にうづもれて、語り侍る人もなし。なげかしき事なり。

○二人の乞兒

近世是ほど風俗衰へて、利欲にさかしけれども、人の性もと善なる程に、族姓にもよらず、ならはしにもよらず、乞食體の者にも、はからざるに義理をしるの心あるぞかし。朱子小學の書に、「幸玆秉レ彝、極レ天罔レ墜」といへるは、信にして誣ひざる事とこそ

巳の刻ばかり—まだ古くならぬをいふ

皆具—附屬品などの一切具はりゐること

世に沙汰せし事なり。阿部故豐後守忠秋の家にて、物頭つとめし者のよし。姓名をば今忘れたり。何とぞ子細ありけるにや、忠秋へいとまを取りて、江戸八丁堀にて、町の裏屋をかりて住居せしが、年を經るにしたがひ貧困して、糧も絕ゆる程に、家主見かねて、朝夕のたべ物つゞけ候ひしが、病氣づきけるとて、打臥して、外へも出でずなりぬるゆゑ、家主人をつかはし、粥などやうのものもたせ贈りけれども、不食の病とて、それを辭してうけず。戸をさして人の入り來らぬ樣にせし間、家主日々戸外より病を尋ねけるに、始はいらへもしけるが、後はいらへもなかりし故に、近隣のものなど召しつれ、戸を破り。内へ入りて見れば、具足櫃によりかゝり、膝の上に大小を横たへて、すのこの上にこも一枚敷きたるに坐して終りけり。傍に遺書一通あり。披いて見れば、年來家主の恩を忘れぬよしをしるしおき、「寺へのつかはし物、並に家主へ宿代のいまだすまずして殘りしを、此金にて引取り給はり候へ」とて、遺書に金を添へて殘しおきけり。扨具足櫃の中には、巳の刻ばかりにかゞやきける鎧一領、皆具のまゝにて、黃金三枚いれ置きけり。大小のしたても、古くこそあれ皆金ごしらへのまゝなり。さて衣服は、著せし物のみにて、其外鍋釜等のものひとつもなし。百日にも食物をしたゝめたる氣色とは

つゝ、行倒るゝまでと覺悟いたし候ひつるに、存知もよらず寺の御恩になり候。今はただ此御恩をこそ報じがたく候へ」とて、九戸合戰の時、其外にも氏鄕より賜りし感狀、其後蒲生滅びて、方々諸侯より招きし書狀ども取出でて、座中の人に見せて、「もはや是も無用のものに候」とて、火にて燒きすてけり。斯くて歲月を經し程に、明曆丁酉のとし、江戶中大火にて、天德寺も延燒しけり。結解、「たゞ某にまかせられ候へ」とて、和尙をはじめ衆僧をも立ちのかせ、わが身ひとり後に殘りてかけ廻りつゝ、佛像、佛經、其外諸道具ひとつも殘らずのけさせて後、「もはや思ひのこす事もなし。汝等ものき候へ」とて、下邊男までをもことごとくのかせけり。さて、火燒通りてのち、堂閒の燒あとに、一人凝然として、手を拱し、結跏趺坐して、焚死してありけるを見れば、かの結解なりけり。寺中の上下、淚をながしをしみあひしとぞ。結解、いつまで寺のわづらひとなりて存命せんと、ほいなき事におもひしかども、久しく寺の恩を受けける故、なにとぞ今一度恩を報じて、ともかくもならばやと思ひしに、幸火災に付いて、寺の爲に身をすてて、一かどの奉公せし程に、もはや是までと思ひてこそ、自らは焚死ぬらめ。その心を思ひやるに、いさぎよく覺え侍る。又ちかきころ、一人の獨行の士あり。翁わかき時、

こよひは是に一宿いたされ候へ」とてとめけり。翌日住持いひけるは、「御身の落つき所もいまだ定まらぬと聞えて候。其間はいつ迄も御宿いたし申すべし。ゆる〳〵と寺に御逗留候へ」といへば、「かたじけなく候」とてとゞまりけり。さてなにくれと物がたりするに、ふるき事など覺えて、たゞ人とは見えざる程に、天德寺の和尚聞て、後は本房へまねきて、ねんごろに扶持し置きつゝ、寺中の事をまかせしが、殘る所もなくよく取りさばき、衆僧のしまりにもなりしかば、簡要の人とてたつとびあひけり。其ころ或國主の退休して居らるゝ人ありしが、世に年たかく、ふるき事をも覺えて、常に傍にゐて伽になる人あらば、俸祿も厚く、國賓のあしらひにて召抱へむとて、尋求められしに、此寺の檀越、「この人にしくはあるまじ。幸の事」とて、この人に告げければ、「御志は忝く候へども、某事、奉公の望はなく候。今までは申さず候へども、斯く御懇意の上につゝみ申すべきにても候はず」とて、そこにて始めて名乘りけり。それ迄は寺にてなにとか名をつきてをりけん、それはしらず。「某は蒲生氏鄕の家にて、結解の何某と申す者にて候。蒲生の家亡び候うてより、他家に腕くびを握る心なく、乞食候うてなりとも一生ををへ

な。無辜をころして己が身を立つるは、非義なり。ころさねば上意にそむくに似たり。とにかくに世にありては、身の一分たゝずと思ひきりて、三萬石の祿を棄てゝ跡を消ちぬるこそ、世にたぐひなき事といふべし。

○結解の何がし

されど、潔白なる武士も、世に絶えずあるものなり。寛永正保のころにかありけん、江戸芝の天德寺境内のわき寺に、常念佛とて、常にたえず念佛を唱ふる所ありしが、ある夕暮に、住僧外へ出るとて見れば、旅人と見えて、油單つゝみ頭にかけて、其さまいやしからぬ人の、門前にたゝずみてありしが、やゝ久しくして、歸るまで元の所にありし故、住持怪しみて「何人にて候や。内へ入りて休み給へ」といへば、其人いふは、「御寺の念佛の聲いと殊勝に覺え候程に、こゝに時を移して居るにて候。左候はゞ、御茶ひとつ給らん」とて内へ入りぬ。住持「いづかたよりいづかたへ參られ候ふや」と問ひければ、「某は奧州邊より出でたる者にて候。江戸にむかし知りたる者の候うて、遙々尋參り候へども、年久しき事にて候故、其人の行方も今に知れ申さず候。是よりいづかたへなりと

台廟―徳川二代將軍秀忠

されたる上にて、其通に仰付けられねば、御威光も輕きやうに聞ゆる間、三人に鬮をとらせ、その内一人とりあたりたる者を誅ししかるべきのよし、正純申されしかば、「御威光輕くなるとある上には、とかう申上ぐるに及ばず」とて、御うけ申上げにける。さて申しけるは、「理をまげて罪なきものを殺し我身を立つるは、勇士の本意にあらず、所詮身を退くるにしかず」とていづちともなく逐電し、行方はしれざりけり。其後、台廟の御時に及びて、ある人駿遠あたりの地にてかありけん、その所はたしかに聞かず、一人の仙人とおぼしきに行きあひしに、其仙人「今は誰の代ぞ」ととふ。「今の君は、權現樣の御子御代を繼がせ給ふ」といふ。「權現樣とはたが事ぞ」と問ひける程に、くはしくいひきかせければ、その時よく合點して、「土井甚三郎といふものありしが、いまはいかがなりぬる」と問ひけるとぞ。甚三郎は大炊頭の事なり。此事世に沙汰ありて、「其仙人は大かた天野三郎兵衛にてあらん」といひけるが、「康景駿河にありし時、甚三郎既に大炊頭といひしに、かの仙人甚三郎といふを見れば、康景にてはあるまじ」といふ人もあれど、古人は眞率にて、いつもよびつけたる名をいふほどに、大炊頭の若名をよく覺えて、かくいひたるにもあらんかし。よし其仙人は誰にもせよ、嗚呼康景潔白の士なるか

の事は、くはしくしらず。天野康景は、慶長年中、駿州興國寺の城主として、三萬石を領しけり。領地の竹をきらせて、營作の爲に積置きて、足輕三人をして守らせけるに、御領田原の鄕民、此竹を盜取りしかば、番をせし足輕見付けて、盜一人をきり殺す。殘黨逃有つて、代官井手某に訴ふ。井手鄕民の手前を吟味せざる事はあるまじきが、竹を盜む事慥かならぬにやありけん、人を康景がもとへつかはし、御領の民を、こなたへ斷なくして卒爾に殺す事重罪なり。速にその足輕を誅すべきのよしをいひやりければ、康景、「盜を殺すは古今の法なり、なにをもて罪とせん。其上かの足輕私に殺すにあらず、康景下知してころさしむ。もし此事誤にならば、康景罪に行はるべし」とて、少しも許容の氣色なし。井手其まゝにてはやみがたき故、鄕民實は竹をぬすまず、無實の罪にてころさるゝを、康景己が足輕に荷擔して、誅せざるのよし言上しければ、康景がもとへ下手人出すべきのよし仰出されけれども、前のごとくいひて御うけ申上げず。東照宮きこしめして、康景においては、不義の所爲あるべからず。もしくは、人のいふに欺かるゝにやあらん。後日に御糺問ありて、實否を定めらるべきのよし仰出されしが、本多上野介正純を康景がもとへつかはされて、たとひ此事理なりとも一たび仰出

先格—先例

遷就—あれにつきこれにつき心の動くこと

むる程に、相嫉まねば必ず相おもねるものなり。さる程に、外はしひて相和すれども、内は互に相ふせぐ。それ故、智も勇も相さへられて、剛も剛をなさず、柔も柔をなさず、たゞ僉議がちにて、先格をおひ、後難を招かぬやうに裁斷する迄にて候。いかでか國家において推したちたる驗を見るべき。よりて諸事はかどらず、ゆきて屆かぬ事もおほきぞかし。永祿のころ、東照宮參河に御座なされし時、御制法を定められ、高力與左衞門清長、本多作左衞門重次、天野三郎兵衞康景を三奉行に仰付けらる。其頃輿人の諺に、「佛高力鬼作左どちへんなしの天野三郎兵衞」といひしとぞ。どちへんなしは、左右遷就して一決せぬの俗語なり。此諺をもて考ふるに、高力はたゞ寛仁にして、本多があらきにかまはず、本多はたゞ勇決にして、高力が慈悲にかまはず。天野は高力か本多が裁斷をそねむ心なく、たゞ道理次第にして、少しも己をたてぬと見え候。これは、三人ともに人がら廉潔にして、奔競の心なき故に、同職にあはせんともせず、また同職をおさへんともせず、互に面々の心のまゝにふるまふと見えし。そこを御覽なされ、同職に仰付けられしが、始は思ひ〳〵にて一致せぬやうに見えしに、此三人にて國政たゞしく、諸事治まりし程に、御目がねのつよき事を、人々感服し奉りしとなり。高力、本多が人がら

に、母子たがひに忠孝の道を盡したる事、是に類すべきはなし、一奇事といふべし。況や匹夫をもて萬乘の尊を動かし奉りし事、至誠の致す所とも申すべし。然るに是程の事を、加賀にてさへ、今は沙汰する人も稀なれば、其名世にあらはれずして埋るゝこそ口惜く候へ。さて、上の御仁政は勿論の事ぞかし、よく下情を御察し、卑賤の義を御そだてなされしは、誠に有がたき御事なり。御祖訓のごとく、國家の元氣を養はるゝの思しめしにてもあらんかし。淺智短慮の及ぶべきにあらず」

○天野三郎兵衞

耿介一節を守り度に從ふこと

他日繼いで諸客來會せしに、翁いふやうは、「前田節義の事を申候ひつる。但節義は、事變によりてあらはれ候。もし平居無事の時にていはゞ、廉潔耿介の士ほど世に貴ぶべき物は候はず。官職に任ずれば、必ず成績をいたし、事變にあへば、必ず節義を顯す、常變ともに國家の用に立つものにて候。すべて智勇ある士は、一人一職に任じては、一かど用にたち候へども、諸司の職を命ずるには、人がらの廉潔なる士を選ぶべし。いかにとなれば、諸司には必ず同寮あり。其心廉潔ならざるは、權威を貪り、又は名聞を務

徴辟—召抱へんと招くこと

きやうなし。其かはりには、外に願ひ奉りたきことあらば、御かなへ下さるべきよしいひ渡しければ、兵太夫かしこまりて、卑賤の身として、上をはゞかり奉らず所存を申上げ候に、重く御取りあげありて、是程迄に仰出され候ふに、此上に私の所存をたて申すべきにも候はず。たゞし、一つ願ひ奉りたき事こそ候へ。前田家は、浮田と由緒ある事にて候へば、彼家より、毎歳助成の金並に入用のもの承り候ひて、永代島へさしこし候ふやうに公命下り候はゞ、限なき御恩澤にて候ふべし。しからば、母も悦び申すにてあるべく候。某母への孝行このひとつにて候。外に願ひ奉るべき事はなく候よし申上げければ、其事下りて朝議ありけるに、「是はくるしかるまじき事なり。されど、金も員數多くはなりがたし。其外の物も、品によりてならぬものもあるべし。所詮僉議して、其員數、其物品をきはめて、前田家へ申渡し候やうに」との事にて、今に至るまで、毎歳加賀の家より、定めのごとくしたゝめて官へ付し、官にて其物件を點檢し、島へいたり届くる事になりたり。此事四方へきこえしかば、列侯の家より爭ひて徴辟せしかども、兵太夫、「我此後仕官の所存なし。但加賀の家は、舊君の事なれば、これは辭すべからず」とて、加賀へ歸參しけるが、程なく病死し、子なくして家絕えにける。翁古今を考ふる

仰出さるゝは―原本「仰出さるは」とあり

にてありしに御預ありて、後程なく江戸へ還御ありしかば、大和守召具して江戸へ下りぬ。其訴狀の趣は、「某三歳の時、母にて候もの、主家の爲に、八丈が島へ罷越して候。母を島にさし置き、其子として跡に殘り居候ひては、いきてあるべうも覺えず候。御慈悲に、母と一所に島へ遣はされ下され候へ」との事になんありける。官吏上の御旨を奉りて、思ひとまるやうに再三寛喩ありけれども、御うけ合ひ申さず。所詮思ひ切りたる容色なり。上にも其志を不便におぼしめさるゝにや、重ねて仰出さるゝは、「島へ遣はさるゝ事は、御大法においてならせられぬ事なり。島より母をめし返さるべし。島より歸り候やうに、文にて申しこし候へ」とありければ、兵太夫申すやう、「有難き御事に候。たとひ申しこし候うても、母中々承引仕るまじく候。されども仰出されにて候まゝ、申しこし候はん」とて、文かきて遣はしけるが、兵太夫申す如く、母島にて其ふみを見て、大きに腹だち、「我汝が三歳の時、御主の先途を見とゞけんとて、上へ奉願て、一度こゝへ來りしものが、今汝を見んとて、御主をすてふたゝび歸るべきやうやある。いと口惜しき事を聞くものかな。かさねて申しこし候はゞ、返答にも及ぶまじ」といひこしける。官吏、兵太夫を公廳へめしよせ、是程に仰出されてかなはねば、上にもなさるべ

正しとす、貴人の子弟のなほ部屋住なるを尊びていふ稱

まさずば、此子を御側の人へ仰付けられ御育てさせ、人になして給り候へ」といひすてさりぬ。夫人其子を常に膝下に置きて撫育し、「此子が母は、身をすてゝ我子八郎が先途を見屆けし者なれば、此子をばわが子とおもふべし」とて、所生のごとくせられしとなり。其子の父は、いかなる者にかありけんしらず、氏は澤橋にてありける。夫人後には加賀に到り、前田家に依つておはせしが、秀家備前の國守たりしによりて、加賀國人夫人を稱して備前君とす。今に其墓加賀にあり。夫人在世の時、澤橋氏が子成長して、仕ふべき程になりしかば、前田家へ召仕はるゝやうにふかく附託せられしかば、彼家にて所領賜り、澤橋兵太夫何がしと名乘りけるが、たゞ明暮母の事をのみ思ひて、涙をおとしけり。いく程なく、遁世の願あるよしにて國をさり、形をかへて僧となり、いづかたにありとも行方しれざりけるに、元和のころにかありけん、將軍家御上洛ありて、二條の御城へ入らせらるゝ時、ひとりの僧御駕輿ちかく訴狀を捧げけるを、御供の中より抑へけれども、きかざりける程に、討つてすてんとしけるを、御輿の内より御覽ありて、「沙門を聊爾なる事いたし候な。訴狀うけ取り候うて、御跡より召連れて參り候へ」と、御直に上意あり。さてもと前田肥前守家來のよし申すによりて、前田大和守、御上洛の御供

渠魁―巨魁

徒跣―かちはだし

御曹子―「御曹司」な

む。翁加賀にありし時、其いはれを故老に問ふに、澤橋兵太夫といふ者より起りたる事なり。豐臣太閤の時、前田家の先祖、大納言利家の女を、太閤養女とし、浮田秀家に嫁す。是秀家の夫人なり。然るに慶長年中、關原師散じて後、秀家は石田方の渠魁たれば、死罪に處せらるべかりしを、島津家の乞哀によりて、死一等を減じて、秀家竝に其子八郎、八丈が島へ竄逐せらる。八郎に乳母ありけるに、是はとくに逃去りぬ。其介の女房、(俗にさしといふ)八郎が幼少にして、乳母に離れて、遙々島に赴くを、ふかく泣悲しみ、徒跣にて官廳に詣り、しきりに八郎につれて島に到らんと願ひけれども、制禁ありし程に、是をゆるさず。女房、「此上はなにの爲にいきてあらむ」とて、すでに自殺せんとするを、官吏おさへて、さて議しけるは、「此女房を目前にて見殺しなば、後に上に聞えん時、不便におぼしめして、など窺はざりしともし御とがめもありなんか。只窺ひ奉りて、御旨にまかするにしくはなし」とて、窺ひければ、「女なればくるしかるまじ。島へつかはし候へ」と、命下りしかば、女房限なくよろこびて、秀家父子につれて、島へ赴きけり。其時三歳になりし子を抱き、浮田家の夫人のもとへ來て、「自は八郎御曹子の御事、餘り勞しく候へば、御供申し候ひて島へ參り候。此御奉公を忘れおはし

蔕芥—小さきとげ、微細のことの譬

高舘—義經奥州にのがれし後住ひし所

幾星—幾粒

よしの山峯のしら雪ふみわけて入りにし人のあとぞこひしき

とかなでければ、頼朝怒つて、「今日の事なれば、時世をぞ祝すべきに、叛逆の義經をしたふ事奇怪なり」とて、すでに罪にも處せらるべかりしを、夫人政子の詫言にて、事解けにけり。靜それを蔕芥ともせず、程へて都に歸りつゝ、一生世に出でず、身を隱して終りけり。かの草も木もなびきし威に惕れず、勢に屈せず、始終志をたてゝ、義經に負かざりし事、高舘にて殉死せし輩とも竝稱すべし。ちかきころ、京師の醇儒中村惕齋が撰びしとかやいふ、倭漢貞烈の女を載せし、姫鏡と題せし書に、是をいひ殘しけるこそ遺恨なれ。是は靜娼家に生れて、出所たゞしからざる故なるべし。それはさる事なれども、名敎を裨くるためには、是等をもすつまじき事と、翁はかねて思ひし程に、今各へも申しつるぞかし。詩にいはく、「采封采菲、無以下體」この謂なり。

○澤橋が母

加賀の前田家より、毎年八丈島浮田家子孫のもとへ、資用のために、小金幾星、丹藥幾包、其外瑣細の物件、定數ありて、目錄の如く、公の官吏に付して、八丈が島へ達せし

甄揚―取りあげ顯はす

へ。翁が申すは、人類の種あるを知りて、天性の種あるを知らざるにて候。但夫につき候ひては、婦女又は卑賤に節義の行あるは、甄揚して本然天性の種あるを證し、又は下賤のつたなき婦女等にさへかく節義あれば、士太夫をもてそれにおとるべきやはと思ひ候はゞ、人の義心を興起するにもなり候ふべし。こゝに、その人柄にも似ず、奇特に覺え侍るは、源義經の妾靜が事にて候。靜は京師にて名を得たる舞妓なりしが、材色をもて義經に寵せられけり。義經都を落ちし時、靜も吉野までつきまとひしが、それより都へ歸り居しを、賴朝鎌倉へめしよせて、義經の行方をとはれけれども、吉野より末はしらぬよしを申す程に、さて放ちかへさるべかりしを、義經の子を懷孕してありける程に、誕生する迄とて、しばらくとめられしが、かねて舞曲の藝、世に隱れなかりければ、賴朝その藝を見ばやとて、鶴が岡の祠にてまはせられける。靜心うき事に思ひて、再三辭しけれども、しひて命ぜられしかば、いなみがたくて舞ひけり。賴朝時といひ、所がらといひ、靜必ず祝歌をこそ唱ふらめと思はれけるに、さはなくて、

しづやしづしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな

又おしかへして、

れける。其跡に、石田が兵忠興の舘に來て、夫人をとらへてゆかんとしけるに、夫人、「われ一命を惜みて、夫家の辱を貽さじ。敵のこみいらぬ先に」とて、自殺して果てられければ、其義にすゝめられて、留主の士、小笠原勝齋、河北石見、舘に火をかけておし竝びて腹をきる。何の局といふ女房其外三四人、手に手を取り、火中にとび入りて死にき。今に至りて、世にめづらしくいさぎよき事にぞいひ傳へ侍る。かゝる大逆臣の女に、かゝる貞烈の人ありける事、上千載をへだてゝ、孝平皇后にならぶべし。其外には、倭漢共にたえて類なき事なり。されば名將に種なしと申し侍るが、翁は、烈女にも種なしとこそ思ひ候へ」といへば、ひとりの客、「いやその種なきがたねあるにて候べし。此節義の心は、仁義の性を種として生じ候。此性なくして、氣習よりしからしむる物にて候はゞ、或は膂力のごとく、丈夫にはありて、婦女にはなく、或は威儀の如く、良家には餘ありて、卑族にはたらざるにもあらむかし。今本性を種として生ずる故に、父祖にもよらず、世類にもかゝらず、善人の子にも惡人あり、惡人の子にも善人あり。男女貴賤にもよるべからず、父祖親戚にもよるべからず」といふを、翁打感じて、「是こそ正當の論にて候

「尤なる事なり。然るに、すべて婦人は、柔順を事にして、剛健をつとめずとはいひながら、士の婦女としては、此一ふしを忘るべからず。もし不慮の變にあはん時に、心よわくして節義を欠きなば、日ごろの婦行もいふにたらず。古より、衞の共姜を始として、歷代貞節の女世に絕えせず。漢の陳孝婦、魏の令女が事を、朱子の小學の書にも載せ給ひしはふかき心あるべし。それにつきて、衞侯の夫人南子が、「忠臣不爲昭々信節不爲冥々惰行」といひ、令女が、「仁者不以盛衰改節、義者不以存亡易心」といひしこそ、婦人の言にも似ず、耳をおどろかしぬ。聖賢の訓といふとも、是には過ぐまじく覺ゆ。されど、令女は言にはぢず、其行相叶ひたれば、元よりいふべきやうなし。南子は是ほどの見識ありながら、淫行あるこそ、いとゞ罪おもく覺ゆれ。こゝに又丈夫にもまさりて貞節世にすぐれたるは、倭漢よく似たる事あり。漢の平帝の皇后は、王莽が女なり。父莽、漢の臣として、天下を簒ひ、平帝を弑せしが、いく程なく漢兵起つて、莽を攻滅してけり。皇后宮闕に火のかゝるを見て、「我なにの面目ありて漢兵に見えんや」といひて、自ら火に投じてほろび給ひけり。我朝にては、長岡越中守忠興の夫人、明智光秀が女なりしが、父光秀織田信長の臣として、信長父子を弑しけるを、羽柴秀吉、

上意なんありける—原本「上意ありなんけろ」とあり意に従ひ假に改む

にあひしをも怨みず、従者の列にもあらぬ蟄居の身として、外より來て赴死し事、其忠烈はるかに温井等が上にあるべし。武田滅亡の後、東照宮内膳が忠義をふかく感じ給ひ、其子なくして祭祀の絶ゆるを哀み給ひて、内膳が弟小宮山又七郎をめし出されしが、其後小田原陣の前、武職の人をきはめられしに、又七郎を以て御長柄鎗奉行に仰付けられける。其時内膳が勝頼に對じて忠義ありし事をくはしく仰せたてられ、誠に武士の手本とおぼしめす。又七郎いまだ弱年なれども、兄内膳が忠義を感じ思召すによりて、重き職を命ぜらるゝよし上意なんありけるとぞ。誠に死後の面目、忠義の驗と申すべし。

○烈女種なし

翁むかし加賀にありし時、ある人のいひしは、「およそ人の諸惡、大小によらず、改めぬれば、世にいひわけあり。舊惡は少しも疵にてなし。たゞ改めてもいひわけのたちがたき事ふたつあり。士の死ぬべき場をはづしたると、ぬすみしたると、此ふたつは、一たび其事ありては、一生の疵となりて、其人ながくすたりぬべし。しかれば、士の家に生るる者には、男女ともに幼少より節義の事を常にいひきかせて、忘れさすまじき事也」と。

の名を云々―義貞の妻は聖秀とは伯父姪なれば已が一族の名を惜まばとの意

寃枉―むじつの罪

たるを友とするうたてさよ」と一度はうらみ一度は怒り、彼使の見る前にて、其文を刀に拳りそへて、腹かき切つて死にける。嗚呼聖秀いかなる人ぞや。義氣の勇壯志操の潔白、是に過ぎたる事やあるべき。さて近代にては、武田勝頼の臣小宮山内膳が節義こそ、最感嘆するに餘りあれ。内膳は勝頼近習の臣たりしが、天正年中の事にや、内膳人と爭訟しける事ありつるに、勝頼讒人の言をもちひて、内膳が不直に決せしかば、内膳罪なくしてながく逐ひしりぞけらるゝ程に、是非なく家に蟄居して數月を經けるが、織田の兵甲州に亂入して、勝頼敗北し、故府をすてゝ溫井常陸介を先とし、纔四十二人の兵と天目山中に奔るときこえしかば、内膳身をもて赴レ急しが、道にて追付きけり。さきの内膳と爭ひし者、並に讒せし者を問ひけるに、いづれもとくに逃去りぬといへば、内膳慷慨としてかたへの人にいひけるは、「君我をもちひずして棄て給ふに、今出でて其難に死せば、君の明を損ずるに似たり。又死せねば臣の義をやぶる。よし君の明を損ずるとも、臣の義をば傷らじ」とて、四十二人と同じく國難に殉ひけり。此難に、甲州の士皆勝頼を叛きて逃去りしに、四十二人ばかり、傾覆流離の間につきまとひて、いさゝか二心なく國難に殉ひしは、いづれも節義の士と申すべし。中に内膳は、讒をもて寃枉

死なん命を―原本「死なんを命なし」とあり意をたどりて假に削る
涙をさへ―涙をおさへか
いかにしも―原本のまま
我かたざま

かば、鎌倉すでに陥る時、彼女房義貞の文に我文を添へて、ひそかに聖秀がもとへつかはしける。聖秀は高時が將として新田の兵と戰ひしが、郎等大かた討死し、聖秀も薄手あまた負ひて引きかへしけるが、高時すでに屋形に火をかけて、東勝寺へ落ちけるといへば、「御屋形の燒跡には、討死のもの多く見ゆるか」と問ひけるに、「一人も見えず」といふを聞きて、「口惜き事かな。いざ殿ばら、とても死なん命を、御やかたの跡にて心靜に自害せん」とて、百餘騎を相從へて、やかたのあとへ赴きしが、今朝まで甍をならべて、さしも奇麗なりし大厦高牆、忽に灰燼となりぬるを見て、聖秀感慨にたへず、涙をさへ惘然として立ちたる所へ、彼文をもて來りぬ。是を披き見れば、「鎌倉の有さま、今はさてとこそ承り候へ。いかにしもして此方へ御出で候へ。身にかへても申し宥むべし」とあり。聖秀是を見て、大きに色を損じて申しけるは「我今迄主恩に浴して人に知らるゝ身が、今事の急なるに臨みて、降人になりて出でなば、豈恥を知りたる者といはんや。されば女性心にて、たとひかやうの事をいはるゝとも、義貞勇士の義をしられば、さる事やあるべきと制せらるべし。又義貞こなたの許否を試んためにいひこさるゝとも、北の方は、我かたざまの名を失はじと思はれば、かたく是を距るべし。只似

瓜期—任のみつる時期

板蕩—騒亂

の時、祐親に依りておはせしが、祐親禁衞の役に當りて京師に赴きし間に、祐親が女と通じて一男を産ます。祐親瓜期に至りて京師より歸りし後、是を聞きて大に怒りつゝ、其男を殺しけり。頼朝をも害せんとするを、祐清かなしみ頼朝をふかく愛護し、ひそかにのがれさらしむ。其後、頼朝兵を起して伊豆より相摸へ赴きし時、祐親平家のみかたとして。大庭景親等と石橋山にいたりて、頼朝を追襲ひけり。其後頼朝すでに東國を平定し、自ら大兵を率ゐて駿河に至られし時、祐親を生捕りて至りしを、その罪を決する迄、祐親をば祐親が婿三浦義澄に預けられ、祐清をめし出して、勸賞を行はれんとありしに、祐清「たゞ御恩には、はやく殺され候へ。父囚はれ、其子勸賞せらるゝ法や候。もし我を殺し給はずば、平家に歸すべし」といふに、さればとて、我を救ひし者を殺すべきやうなしとて、許して放ちやりけり。祐清それよりすぐに京師に奔りて平家に屬し、後篠原の合戰に、つひに討死をとげけり。此三人、時代も大かた同じく、志節も相似たり。その清風高義源平の間に求むるに、其類すくなくおぼえ侍る。さて元弘建武の亂に至りて、天下板蕩の間、死レ難死レ節の士限なく相見え候中に、翁かねて安藤左衞門聖秀が事を感じて落涙しける。聖秀は北條高時が臣なり。新田義貞の妻の爲には伯父なりし

時の花をかざしにせよ―當時の勢力ある者につき從へとの俗諺

いたはる事―病氣

と一所になりしが、其後宇治橋の合戰に、いさぎよく討死してけり。彌平兵衛宗清は、平頼盛の士なり。平治の亂に、頼朝幼少にて頼盛の家に囚れしを、頼盛の母老尼、清盛に乞ひて死を救ひけり。其時宗清、頼朝を朝夕にいたはりしが、平家西國へ落ちし時、頼朝かねて頼盛に通問して、疎意なきよしをいはせける程に、頼盛獨一門に叛きて都にとゞまりける。其後平家いまだ亡びずして西海にありし時、頼朝、舊恩の謝せんために頼盛を鎌倉に招きしが、宗清をも必ず召具せらるべき由をいひおこされければ、頼盛關東に赴くとて、宗清に「いざつれて下らん」といひしに、宗清いひけるは、「頼朝 某 に下れと候は、定めて昔のなじみを思ひいでて、所領引出物などして、そのかみ扶助せし勞を報ぜんとの事にてあるべく候。今更源氏に諂ひて、其蔭により候はんは、西海にある朋友どもの 承 る所も口惜くこそ候へ。君はかくて都に御安堵しおはしまし候へども、御一門はいづれも西海に流落し給ひ、日夜やすき御心もあるまじく候。こゝにて思ひやり奉るも痛はしくこそ候へ。鎌倉に御越し候うて、頼朝 某 が事を尋ねられ候はゞ、折節いたはる事あるよしを仰せられて給り候へ」とて、鎌倉へは行かざりけり。其後西海へ下りけるにや、其終をしらず。伊藤祐清は、伊藤祐親が第二子なり。頼朝伊豆に流謫

大將のかへうちたへかたらひ給ふ云々—大將のかく打たへ云々の誤

やありけん、競にかくとしらせざりし程に、競しばらく猶豫して家にありしを、平宗盛聞きて、日ごろ競が魁偉なるを見て、己が所從にせまほしく思ひしが、賴政が親臣なれば、請ふべきやうもなかりしに、このたび競ひとり都に殘りしときゝて、「六波羅に參れ」と人していはせければ、參りけり。宗盛對面して、「汝今より我につかへば、入道の恩にはまさるべし」とて、小糟毛といふ馬に貝鞍おき、乘かへの料とて、遠山といふ馬を引きそへ、黑糸縅の鎧冑まで皆具してたびけり。競かしこまり賜りて、ほくそ笑て罷歸りぬ。一族家人打ちよりて、「入道殿是程の大事を思ひたち給ふに、ひとり取殘されしは、眞實に遺恨なり。大將のかへうちたへかたらひ給ふはいなみがたし。時の花をかざしにせよといふ事もあれば、たゞ此まゝにてあれかし」といふを、競、「いやとよ、勇士の義さはあらず」とて、宗盛よりたびける鎧著て、小糟毛に乘り、郎等七騎打ちつれて、三井寺へとて打出しが、六波羅の門前を通りし時、馬に乘りながら門の内へのぞきつゝ、高聲にいひいれけるは、「競こそ只今下し賜りし馬にのり、三井寺へ罷越し候。御眷顧を蒙り候へども、三位入道の恩忘れがたく候へば、此度死をともにいたすにて候。御門前をむなしく打過ぎんはほいなく候へば、御いとまを申候」とて、三井寺にいたり、賴政

池魚の災―近火のわざはひ

唯有ニ春風最相惜一　慇懃更向ニ手中一吹

これ唐の楊巨源が楊柳の詩なり。此三四の句意、婉にしておもしろく覺え侍る。よりて、其意を翁がよめる歌に、

なれてふく名殘やをしき青柳の手折りし枝をしたふ春風

楊柳の人にをられてはや木を離れたるとて、春風のそれをよそにしてふきなば、いかに情なかるべきを、なほ其手折りし手をさりやらで、をしみがほに吹くこそ、いとやさしく覺え侍る。古より忠臣義士の、盛衰存亡をもて心をかへぬに喩へつべく候。翁むかし源平盛衰記を讀みて、源氏の士には渡部瀧口競、平家の士には彌平兵衞宗清が事を感ぜしが、又東鑑にて、伊藤九郎祐淸（祐淸が事東鑑兩所に見えて、前には祐泰とす。今考ふるに、伊藤九郎が兄河津三郎を祐泰といふ。九郎を祐泰といふは誤也）が事を見て感じけるまゝ、三烈士の傳を半選び置きしが、いまだ稿を脱せざる内に池魚の災にかゝり、其後ふたゝび草を起す事もなく打過ぎし程に、今は其文をば跡もなく忘れ侍る。渡部競は、源三位入道賴政が所從の士には第一のものなり。然るに治承年中、賴政高倉宮をすゝめて兵を起せし時、京師を急に發して、倉皇として三井寺へ赴きしが、打忘れて

に從ひて出亡してより、こゝに至つて三十九年の間、艱楚をなめて始終つきまとひ、ふたゝび帝を宮中にいれし事、其貞節の堅きをいふに、古今いまだきかざるところなり。狐趙が文公にしたがひ、甯兪が成公に從ひしには、はるかにまさりぬべし。是をもていはゞ、一時殉難はやすく、程濟たる事は難し。孔子のいはゆる「其知には及ぶべく、其愚には及ぶべからず」とは、是等の事をや申すべき。帝既に宮中に入りしかば、宮中の人老佛といひける。つひに壽をもて終られけるとぞ。これも古今にためしなく、いとめづらしき事なり」

○手折りし手にふく春風

日かず經て繼いで講會ありしに、講はてゝ、翁「前日節義の事を語り候ひしが、跡にておもひ候へば、いまだ申しのこして候。前日申しつる事どもにて考へて見給へ。盛衰榮枯は世の常なり。それによりて志をかへぬは、是又士の常なり。もし時のもやうにつきて覺悟を變じ、世話にいふえりもとにつくやうにては、なにをもて士と申し侍るべき。

水邊楊柳綠煙絲　立レ馬煩レ君折二一枝一

兩比丘—應能と希賢

屢空にして—食糧の缺乏をいふ

械繫—いましめつなぐこと

詐罔—いつはり欺くこと

影をかくし、迹を消ちて、四方に漂泊す。其後從亡の人皆うせはてゝ、兩比丘も相繼いで身まかりければ、程濟一人ばかりのこりて、帝を奉護しけるが、或は屢空にして出でて糧を募り。或は侍ㇾ病て出でて藥を乞ふ、その崎嶇艱難思ひやるべし。帝詩をよくす。名勝を遊歷して、多くは詩を賦して、懷舊の情をいへり。其中一首覺え侍る。

牢落西南四十秋　蕭々白髮已盈ㇾ頭　乾坤有ㇾ恨家何在　江漢無ㇾ情水自流
長樂宮中雲氣散　朝元閣上雨聲收　新蒲細柳年々綠　野老呑ㇾ聲哭未ㇾ休

是を吟ずるに、人をして千載の恨あらしむ。帝長命にて、成祖、仁宗の兩朝を歷て、英宗正統五年に至りて、粤西におはせしに、帝と同宿の僧ありしが、今において帝いでては、朝廷にあはれまれんことをはかりて、帝の詩を竊みて、自ら建文帝と稱して出でければ、藩司其僧竝に帝を械繫して、京師に送りしに、程濟徒跣にてしたがひけり。御史鞫問の上に、其僧は詐罔をもて論死せし程に、帝はさてやむべかりしを、帝南歸の思ひあるによりて、自ら其實を白狀せられければ、朝廷舊宮人に命じて探求めしむるに、建文帝たること無ㇾ疑に決定せしかば、詔ありて帝をむかへて西內にいれしむ。程濟これを聞きて、今日始めて「臣が職を終へぬ」とて、終に跡をくらましてのがれさりぬ。その帝

度牒—俗人が僧尼となる時官より下げ渡す許可状
髪を祝し—剃髪せしむるをいふ

あり。三人の名、ひとりは應文、是は建文帝たるべし。ひとりは應能、是は楊應能く應じ、一人は應賢、是は葉希賢應ず。程濟急に帝の髪を祝しければ、兩人も同じく髪をおろし、衣を易へて袈裟を著しぬ。帝は殿中にありあひける士九人を從へて、丑寅の門よりいでけるに、神樂觀の道士王昇舟を艤して待ちうけつゝ、帝を導きて觀に到りしが、程なく應能、希賢を始として、すべて二十二人來會する時は、すでに薄暮になりにき。かの紅篋の讖すこしもたがふ事なきは、いとあやしといふべし。それより二十二人の者、妻子をふり捨て、帝にしたがひ、いづくともなく出亡しけり。應能、希賢は比丘となり、程濟は道人と號し、此三人は左右をはなれず。外の十九人は東西に聚散し、道路に往來して、衣食を給し、應援をなし、相與に壹心戮力て、始終一のごとし。京城陷りし時、成祖、宮人に帝のあり所を詰問はれしに、馬后の屍をさししめしければ、さては自ら焚死しけるとて、其屍を煨燼の中よりとり出でて、禮葬せられしが、其後世に建文帝いまだ死せずと沙汰しけるを聞きて、ひそかに天下を捜してやまず。胡濙に命じて、仙人張三丰を訪求めさせられしも、實は帝の蹤迹をたづねんがためと聞えし。よりて人に物色せられん事をおそれて、一所に留居するもかなはねば、君臣ともに

いとあはれなりし事なり。百世の下までも、きく人袂をしぼるべし。されど、殉難の諸臣は、世に赫著する事にて侍れば、今更申すにも及ばず。こゝに其列にはあらで、殉死よりもまさりて覺ゆるは、建文帝に從ひて出亡せし二十二人にて候。中にも翰林修選程濟が貞節は、古今比類なき事といふべし。それにつきて、建文帝の始末を、各はくはしく考へ置き給へるや。翁たゞ今は記憶うせて、たしかに覺えしと思ふ事も多くはたがひぬれば、只あらましを物語し侍るべし。太祖の時、懿文太子薨じて、建文帝嫡孫をもて皇統を繼がれしが、帝年わかく材弱くおはせしに、叔父の燕王雄才ありて、倔强難レ制見えし程に、百歲の後國家の變あらむ事を太祖かねて慮り給へるにや、其時誠意伯劉基博學にて、讖緯の事をも奏進せしと聞えしが、劉基などが所爲にもあるにや、ひとつの紅篋を密緘して殘しおかれけり。大難に臨みて是を開けといふ事にぞありける。然るに、燕兵すでに大内に迫つて、京城守らず、今はかうよと見えし時、命じて大内に火をかけさせ、帝自から焚死するやうに物して、其紛れに程濟かの紅篋を打碎きて見れば、度牒三張、三人の名にそへて、袈裟、帽子、剃刀の類まで內に備はりてあり。又篋內に朱書して、應文は鬼門よりいで、其餘は水關の御溝よりいでて、薄暮に神樂觀に會すと

赫著—名のかゞやきあらはるゝこと

讖緯—先きの事を察し考ふること

紅篋—朱塗の手箱

密緘—密封といふに同じ

講となす。建文四年、燕兵來り犯すや其執ふる所となる清の成祖孝孺をして登極の詔を草せしめんとす孝孺應ぜず反て之を罵る。終に磔せらる。時に年四十六・

顯仕—顯官といふに同じ

宋の丞相にて、もとより國と休戚を同じうする身なり。疊山は宋の臣たりといへど、顯仕にも登らず、國事に預る程の身にもあらねば、宋亡びて、元に仕へずして、隱れ居ても、さてやみなん。然るに八十歳におよべる老母ある故に、しばらくながらへてありしが、後に元人の聘を却けて、つひに食を絶ちて死しけり。其淸節文山と抗衡すべし。趙子昻、留夢炎等是を見て、恬然として元に仕へしこそ、いかで羞惡の心を失ひけるにや。無恥の甚しきものなり。さて明朝靖難の亂に、殉國の諸臣、その勇壯義烈、いづれも孝孺に劣るべからず。古今義氣の集るところとや申すべき。此時先朝の文武名をしらるゝ程の者、燕王を迎奉せしかど、此諸臣ばかり國難に殉ひし事は、誠に歳寒うして松栢をしるとも申すべし。孝孺が弟孝友が就戮しを孝孺見て、それまでは、九族門生ころされて尸を前に積むを見ても、一たび顧る事なかりしが、さすが兄弟の愛忍びがたくやありけん、おぼえず落涙しければ、孝友詩を口づから占つて、兄の孝孺に訣れける。其詩に、

阿兄何必涙潸々　取義成仁在此間
華表柱頭千載後　旅魂依舊到家山

文天祥、謝枋得—共に宋末の忠臣
方孝孺が事—字は希、直又希古、宋景濂に學ぶ。明の惠帝召して侍

義は、大人のせざる所なり、此時光秀をつよく諫めてきかれず、光秀が手にかゝりて死なんは、中々まさるべし。萬一光秀本望を達し、永く世にあらば、内藏介いきてをるべきや。いきてをらば、前にいひたる事はいつはりなり。よしまた其時自殺するにもせよ、賊黨の名はのがれ得ず。世話にいはゆる犬死といふべし。畢竟義理の筋にくらき故に、小節に拘り時勢に逼られて、つひに賊黨に陷り、極罪に處せられけるは、なげかしき事ならずや」

○歲寒知㆓松栢㆒

座中ひとり、宋の文天祥、謝枋得が事をいひて嘆美するに、又ひとり、明の方孝孺が事をいひ出でて、「孝孺、成祖に對して始終少しも屈せず、あくまで成祖を罵つて口をさかれ、まのあたり赤族せらるゝを見て悔いざりし、古今義烈の士といふべし」といふを、翁聞きて、「文山が衣帶にのこれる贊、疊山が却聘の書を見給へ。二子の心事明白なる事をしるべし。文山が元の博羅と問答するを見るに、其氣象凜々として犯すべからず。しかも其從容たる事は、方孝孺等が慷慨して就㆑死にもまさりて殊勝にぞ覺え侍る。但文山は

石碏―春秋時代の衛國の忠臣

耆老―先輩　曲禮に「六十曰レ耆」

はてにければ、いかでかつひに其身を全くすべき。程なく滅びぬる事は天理なり。およそかゝる事は、其身のとがはさる事にて、朝家の御あやまりなり。よく朝議あるべかりけるに、其比名臣もあまたありしが、などか諫め申さゞりける。大義には滅レ親といふ事のあるは、石碏といふ人其子を殺したる事なり。不忠の子を殺すは理なり。父不忠なりとも、子として殺すの道理なし、保元、平治よりこのかた天下亂れて、武威盛に、王位かろくなりぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、名行のやぶれぞかし」とぞ。此時代是程正しき議論あるをきかず。さすが親房南朝の耆老とて、此見識ある程に此議論もあるぞかし。ちかきころ、明智光秀が織田信長を弑せんとて、丹波路より引返す時、途中にて、旗下の將士へ隱謀の企ある事を始ていひきかせ、さて一黨同心せんといふ一紙の誓文を出しけるに、軍士たがひに驚き視て、とかうの事に及ばざりしに、齋藤内藏介申しけるは、「此御企千に一つも御利運あるべき事にて候はゞ、同意いたすまじく候へども、御敗亡は見えたる事にて候。それに只今辭退いたし候はゞ、命ををしみて其場をはづし申すにて候。それは士の義にあらず」とて、一番に血判しければ、殘りの人々も一言に及ばず、みな同じけるとなり。孟子に、「非義之義、大人弗レ爲」といへり。内藏介が

無慙—恥を知らぬこと

蹇義、夏原吉、楊溥、楊榮を始とし、いづれも燕王を奉じて、是に臣とし仕へざるはなし。其外歴代不學無識の徒は論ずるにたらず、是等は皆一代の文儒として、世に名をあらはす人ぞかし。是にてしるべし。季路、冉有を弑二父與一君には不レ從と宣ふは、二子大義においては、見ること明かにして、慥に覺悟のたがはぬ所を、聖人見屆け給ひてかく宣ひけることを。實に容易の事とはいふべからず。我朝にても、源義朝が父爲義を殺すにて見給へ。其身も大惡としらぬにてはなけれども、君命はおもし。父ながら朝敵となりたる人なれば、是を救ふ事叶ひがたし。それに鎌田正淸などいふ無慙の輩、いろ／＼拵へていひけるまゝ、あへなく是を殺してけり。彼二子はかやうの場に至りては、たとひ身命を果しても、覺悟をたがふる事あるまじきなり。義朝さしも源家の名將と聞ゆれども、勇氣ばかりにて、義理にくらく、志節なき故に是ほどの理非にまよひたり。いかがして長田忠致がおのれをころすをとがむべき。但此事は、北畠親房の神皇正統記の論正しうして、最理に當れり。此事の斷案ともいふべし。正統記にいへるは、「義朝父のくびをきらせたりし事、大きなるとがなり。古今にもきかず、倭漢にも例なし。勳功の賞に申し替ふるとも、自から退くとも、などか父を申し助くる道なかるべき。名行かけ

いたす所にて候。されば鎌倉以來敎化は世に行はれず候へども、責めて此武義ひとつにて士風をも維持し、國家も治平なる事に候へるに、近來はその武義さへかやうにおとろへ行き候事は、所詮風俗の日に遊惰になり候故と、いとなげかしくこそおもひ侍れ」

○士の節義

或時の會に、古今節義の事に及びけるに、翁いひけるは、「孔子、季路冉有の二子を、父と君とを弑するには不レ從と仰せせられて候。少し志あるきはの人の、君父を弑するに同意する事あるべきや。二子は孔門の高弟にあらずや。それにかく仰せらるゝ事、たゞ季氏が不臣を戒め給ふといふばかりにはあらず、これはいはれある事にて候。たゞ今刀を取つて君父を殺す者ありて、我に同意せよといはむには、誰か從ひ申すべきにて候。然るに時移り勢變じて、君父たる人を殺しても、其跡あらはれず、人もさしてとがめぬやうに成行く時は、己が利害にひかれて、覺悟を失ふものにて候。楊雄は王莽が平帝を弑せしに仕へて、反て莽が功德を頌し、沉約は蕭衍をすゝめて、和帝を弑し、その謀臣となる。さては明の靖難の時にて見給へ。燕王は建文帝を殺せしかども、在朝の名臣

季路冉有―論語に「季子然問、仲由冉求、可レ謂ニ大臣ー與。子曰、弑ニ父與レ君、亦不レ從也」仲由は季路、冉求は冉有

先祿—以前に食みしと同じ祿高

僉議—研究

人此事を語るをきゝしが、青木が武者振の見事なるはさる事にて、阿閉が彼が事をいひ出でて、名のり合ひてよろこびし、又伊勢が子の鎧の著初に掃部を招きて、子のためにとて武功の物がたりを望みし、いづれもさしたる事にてはなけれども、其頃の士風、武をたしなみし事しられ侍る。只今人家に子をそだて候ふに、食の喰ひ初袴の著初などとて祝ひ候へども、鎧の著初と申す事は、大祿の家は存ぜず、我等如きの賤しき武士の家には承らず候。是も人々武の心懸うすき故にて候。よりて大小兩刀又は甲冑等のこしらへの華美を專にし、たゞ武を道具と迄意得る體にて候。我朝は、武家の治世になりしより、五百年以來天下武をもて風をなし候故、外の事はしらず、武の一筋は人々常に忘れず、假初の一言にも臆したる事をばいはず、しばらく立つにも脇指をはなさず、文道より見候はゞ、かたくなに賤しき方にもあるべく候へども、是程に心懸けず候うては、武の一筋はとほり申さず候。翁かねて學者に申し候は、「學者の道に志す事、武士の行住坐臥に武を忘れぬやうにさへ候はゞ、聖賢の域に至らん事も難かるべきにあらず。もとより武も義氣の發する所にて候。古來我朝の武士を見るに、多くは不學にて、文道の僉議はうとく候へども、義にあたりては、一命を輕んじ、廉恥の心を失はぬは、武義の

ひきける―引出物に授く
一伯殿―越前侯忠直

候へども　是までにて候。御暇申候べし。御名こそ承りたく候。某は青木新兵衞と申す者にて候とて、某が名をも承り候ひて、此後又陣頭にて出合ひ候はゞ、互ひに人手にはかゝり申すまじく候。もし又味方にて候はゞ、わりなく入魂致し候べし。さらばとて立ちわかれしが、是程見事なる武士はつひに見侍らず。いかゞなりはて候にや」と語りけるに、其比伊勢がもとへ心安く出入する青木方齋といふ浪士あり。其日も來て勝手に居たりしが、此物語をきゝて、勝手よりにじりいでつゝ、掃部にむかひて、「さても只今の御物がたり承り、今更昔を思ひ、涙をおとしてこそ候へ。其時の御相手になり候青木新兵衞は、はづかしながら我等にて候。かく申すばかりにては、浮きたる事におほすべく候」とて、其時雙方の鎧のをどし、馬の毛色を一々いひけるが、ひとつも違はざりければ、掃部驚きつゝ、「さて〱久しくてあひ候うて本望に候」とて、手前にありし盃を方齋にさし、「是をしるしに」とて、腰の脇指を拔いてひきける。それより方齋が名國に高くなりし程に、秀康卿の耳へも達せしかば、掃部と同じ祿にてめし出されけるとぞ。其後一伯殿筑紫へ左遷の時、掃部はいかゞなりけんかしらず。方齋は先祿にて加賀へ招かれ、それよりすぐに仕へて、子孫相續して今にあり。翁加賀に有りし時、ある

志津ヶ嶽の戰―天正十一年羽柴秀吉と柴田勝家との戰．

著する事を賴みけり。さて饗膳すみ、祝の盃に及びし時、伊勢「今日は愚息が鎧の著初にて候まゝ、御身の御武功の事御物語候ひて彼に御きかせ候へ」といひしに、掃部、「いや某が身の上に、御はなし申すべき程の武功は覺え申さず候。されど、御望も默しがたく候まゝ、某一生の内に武者振の見事なる士を一人見申して候。その事を話し申すべし。江州志津嶽の戰に、暮方に某一騎余吾の湖のわたりを引き候ひしに、(阿閉掃部が父は阿閉淡路守とて、明智にくみしけるとなん。然れば志津ヶ嶽合戰の時、掃部は柴田方にてあるべし。)敵と覺しくて、うしろより詞をかけし故、馬を引返し候へば、其人申し候は、「今朝よりかせぎ候へども、よき敵にあひ申さず候。御人體を見うけ、幸とこそ存候へ。御不祥ながら御相手になり申すべき」とて進みより候故、「それこそ此方も望む所にて候へ」とて、たがひに馬をのりはなし、すでに鎗をあはせんとしけるに、其人、しばし御待ち候へ。今朝より雜兵をおほく突崩し候故、鎗よごれて候まゝ、鎗をあらひ候ひて御相手になり候はん」とて、余吾の湖に鎗を打ちひたし、二三遍洗ひつつ、「さらば」とて突きあひしが、久しく勝負なかりし程に、日も暮れはてゝ、もののあやめも見えずなりぬ。其時あなたより又詞をかけ、もはや鎗先も見えず候。御殘多くは

孫謀を貽す―子孫の爲に計りて人才をのこすこと。詩經に出づ

敷はつゞかぬものなり。さればこそ、いづれも遂に亡びしぞかし。是をもて、東照宮御思慮のふかきをしるべし。其ころ御弓矢のつよかりし事、天下にならびなかりしは、いはれなきにあらず。然れども、今世の人、大かたは御武運つよかりしとばかりいふめり。もとより御仁德ふかゝりし故に、天命にかなひ給ひしは、自然の道理にして、それはせんぎの及ぶところにあらず。せんぎの上にていはゞ、御武運のつよかりしは、御弓矢のつよきにあり。御弓矢のつよかりしは、諸士の義氣を御そだてなされしにあり。しかれば、下の義氣を御育てありしは大切の事にて、御孫謀を貽したまへるひとつともいふべし。しかるを、たゞ御武運のつよきとばかり意得るは、いと淺き事なるべし。

○阿閉掃部

前に申しつる杉田壹岐が事につけて思ひ出し候。是も越前の士にて候。さして忠義に係る事にては侍らねども、其ころの士風を語り申すべし。秀康卿越前に封ぜられ給ひし後、阿閉掃部とて、武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。又狛伊勢とて、是も國にて世祿の歷々なりしが、嫡子に鎧の著初させけるに、かの掃部を招待しつゝ、子に鎧

池籞―いけす

きは、ういやつとおもふなり。今の世に、われらが前へいでて、さきのやうなる事をいふべき者は、外には覺えず。武藏守はよき人をもちたる」と上意ありしとなり。そもそも大膳が匹夫をもて天下の御威光に對し、主君の爲に一命を抛ちて、國の宿寃を明かにしけるは、世にたぐひなかるべし。さればこそ上聽を回し、御氣色も霽るゝのみならず、ふかく御感を蒙りしは、大かたなるべき事かは。しかしながら、上の御盛德と申侍るべし。されば是に限らず、鈴木久三郎が池籞の鯉をとりしをば御手討になされんと、おぼしめすほどの事なりしかども、直言を申上げければ、其まゝ御怒をやめられ、反て御感じあそばしけり。初鹿傳右衞門が御朱印に墨をぬりて惡口申せしをば、一往放棄せられしかども、長湫の戰に、傳右衞門ひそかにかくれて御供して首級を得たりしかば、卽時に其場にて御直に前の罪を御免し、戰功を御感じありける。其外にも、常に御威光を屈せられ、下の義氣を御取立てなされしかば、群士も勇氣を折かれ奉らざる程に、御ために命をすつる事を露いとふ心なかりき。かの織田、北條、武田、上杉の主將も、智謀勇略は世にすぐれけめども、專に己が威力にほこり、下の勇氣をひしぐをもて手柄とせし程に、一旦は盛なるやうなれ共、上一人の威勢ばかりにて、下の義氣おとろへては、久

指を抜いてうしろへなげすて、御側へ匍匐ひより、御小袖の裳にすがり、「是は御情もなき上意にて候。いかに御姫さまの御腹より生れ候はずとて、武藏守も御孫とは思しめされず候ふや。只今此申わけ仕らずしては、いつ申わけ仕るべく候や」とて、はら〳〵と涙をながしつゝ申上げければ、其誠を感じおぼしめさるゝにや、「よし、今は聞きわけたるぞ。いそぎ歸りて武藏守に申しきかせて、安堵させよ」と上意ありしかば、大膳手を合せ平伏して、御禮を申上げてまかり出でけり。其跡にて御前伺候の衆へ仰せられしは、「あの大膳が父をも大膳といひて、武藏守が父三左衛門いまだ弱年にて庄三郎といひし時の馬卒なりしが、長湫の戰に、庄三郎が父勝入、兄庄九郎討死したると聞きて、同じく討死せんとて、乘りつけゆかむとするを、彼が父大膳、其時は何がし男とかいひて、馬の口を取りしが、しひて馬を引返してつれてのきけるを、庄三郎怒りて、「はなせ〳〵」といひて、馬上より鐙にて、頭を續けざまに二三町が間蹴つけし程に、面より血の瀑の如くながるゝをもかまはずして、つひにのかせけり。其時討死せば、むなしく死して家も絶えなまし。しかるに播州一國の主となりしは、かの大膳が其時の働にて存命したる故ぞかし。さすが親の子ほどありて、あの大膳も、主のために身をかばふ事な

此申わけ―原本「申此わけ」とあり

剛直なる人ならでは用にたちがたし。それに付きて、右の杉田事とはちがひたる事なれども、序ながらかたり侍るべし。大坂冬御陣の前に、片桐市正攝州茨木の城に據つて御味方いたせしに、柴山小兵衛が泉州堺に有りて急難なりと聞きて、間近く味方の急難を見捨てては、御味方申したる甲斐なき事とおもひ、茨木の城へ引取り一所にならんとて、手下の兵少し引きわけてつかはしけるに、其兵攝州尼崎を過ぎて堺にいたらんとしけるを、大坂より兵をつかはし、茨木の兵を取巻いて攻めける程に、尼崎の城へ援兵を乞ひしかども、城より救はざりしかば、茨木の兵のこらず討死しけり。此時尼崎の城主建部三十郎幼少なりし故、播州池田武藏守より、池田越前、宮城大藏などいふ宿將に、士卒を添へてつかはし置きけるが、此者ども片桐を疑ひて、茨木の兵を救はざるにてありける。世には武藏守大坂と内通あるやうにも沙汰せしなり。大坂と一たび御和睦の後、京二條の御城にて、此事御僉議ありしに、武藏守の家臣に、伴大膳といふ者は、上にもよく御存知ある者なりしが、御前において段々申わけいたしけれども、御憤未だとけず、「今においてとやかく申候うても、眼前に味方の兵うたるゝを見殺せし事、武藏守心底いぶかしく思しめさるゝよし仰せられ、其まゝ御座をたゝせらるゝを見奉り、脇

付けらるゝ後にても、たゞ朝夕今迄御恩の有がたかりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。もし女心とて、我身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を、言葉の末にもつゆおきなば、黄泉の下までもふかく怨と思ふべし」といひける。さて今やと待ちけるに、夜ふくる程に人來て門をたゝきしが、「召あるまゝ登城すべし」となり。さてこそとおもひて登城しけるに、すぐに寢所へめし入れ、「其方が晝いひし事心にかゝりて寢られぬ間、夜陰なれどもよびつるなり。わがあやまりたる事はとかくいふに及ばず。其方が心ざしをふかく感じ思うて滿足する」との事にて、直に腰の物を賜りしかば、壹岐も思ひ寄らぬ事にて、おぼえず落涙に咽びつゝ、拜賜してまかり出でけるとぞ。此事、翁加賀にありし時、越前の人ありて語りしが、今おもへば、此杉田などこそ、東照宮の仰せられし世に有がたき家老といふべし。誠に一番鎗よりも難き事にあらんかし。

○伴大膳

されば、巧佞なる臣は、人君の心にかなひて、常に任用せらるれども、大切の事には、

糟糠の妻―貧困の時より艱難を共にし來りし妻

壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な」とて、其まゝ脇指を拔いてうしろへ投げすて、伊豫守殿の側へ進みより、「たゞ御手討に遊ばされ下され候へ。むなしくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、責めて御恩の報じ奉る志のしるしと存じ候はん」といひて、頭をのべ平伏しけるを見給ひて、なにともいはで奧へいられけり。其跡にて、外の家老ども壹岐にむかひて、「御爲を思ひて申されしは尤にて候へども、折もあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきををられ候事は、遠慮もあるべき事にこそ」と云ひしを、壹岐、「君へ諫を申上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よき折とてはなき物にて候。今日はよき序とこそ存候へ。其上某事は、御取立のものにて候へば、各とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても其分の事にて候」といひければ、諸家老各感じあひける。さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日ごろ糟糠の妻のありけるにむかうて、「其許にいひおく事たゞひとつ侍り。御身は女の身なれば、直に御恩をうけたるにてはなけれども、我御厚恩を荷ふ故に、足輕の妻といはれし身が、今歷々の妻として、大勢の所從に圍繞せられしは、かぎりなき御恩にあらずや。しかれば、われ生害仰

晡時―申の刻、卽ち午後四時頃

言して、君の過を匡救する事を忘れず。ある時、伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもいづれも出迎へしに、伊豫守殿ことの外氣色よろしく、家老どもに對して、「今日わか者どものはたらき、いつにすぐれて見えし。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りていづれも喜び候へ」とありしかば、家老どもいづれも、「御家のため何より目出度御事にて候」といひしに、壹岐一人末座にありけるが、默々として居たりしを、何とぞいふかとしばらく見あはせられしが、こらへかねられ、「壹岐は何とおもふ」とありしに、其時壹岐、「只今の御意承り候に、はゞかりながら歎かしき御事に存じ候。當時士共御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討になり候はんも計りがたく候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべきとは不レ存候。それを御存知なく、頼もしく思しめさるゝとの御意こそ、愚なる御事にて候へ」といひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかやいひし者、伊豫守殿の刀もちて側に居たりしが、「壹岐に座を立ち候へ」といひしを、壹岐聞きて其人をはたとにらみ、「何れもは御鷹野の御供して、猪、猿を逐うてかけ廻るを御奉公とす。此

主君の氣に背くにもかまはず、幾度もすゝみいでて極諫しなば、主君怒を積みて手討にするか、又は押籠めて出さぬやうにするにてあるべし。それを露も心にかけず、たゞわが報國の志をつくして終るは、世にありがたき忠臣といふべし。是に比すれば、戰場の一番鎗は、反てやすき道理なり」と仰せられしとなん。誠に萬世御子孫の御事は申すに及ばず、すべて人君たる人の永き鑑戒となるべき御言葉どもなり。

○杉田壹岐

是によりて思ふに、陷陣先登するは、難きやうにて易く、犯顏直言するは、易きやうにて難し。然るに古今君も臣も、陷陣先登の功を貴ぶ事をばしれども、犯顏直言の忠を重んずる事をばしらず。されば、君たり臣たる人、いづれも東照宮の上意を忘るまじき事なり。寛永のころ、越前故伊豫守殿の家老に、杉田壹岐といふ者あり。もとは足輕なりしが、其身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿をうけ、國老に列しけり。伊豫守殿、參覲にて一年在江戸の內、費用過分なりしを、常に前年より支度して、用度足るやうにしけるは、ひとへに壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に犯顏直

容悦—おもねりへつらふこと

て何にせんとおもふぞ」とて、いひきかせざりしとぞ。上野介年わかにて、其人を嘲る心にてをかしく思うて、名をきゝ其事をきかんといはれしを、佐渡守合點して、押へられしなるべし、其後駿府の御城に御座なされし時、御側に侍座の衆へ上意ありしは、「人君はよき家老を持つべき事なり。我常におもふに、主君の惡事あるを見て、主君の怒をもかへり見ず、諫言をいるゝ家老は、戰場にて一番鎗をするよりも、遙にまさりたる心ばせといふべし。其子細は、敵に向つて勝負をするも、身命をかばひてはならぬ事なれども、必ず敵にうたるべきにもあらず。たとひ討死しても、世に名を殘し、主君にもをしまれぬれば、死しても本望なる事なり。又敵を討取りぬれば、主君の感にあづかり、恩賞を得て子孫にも傳はれば、戰場のはたらきは、生死ともに心にいさみあるべし。それとはちがうて、主君の無道なるをなげきてしば〳〵直諫すれば、忠言耳に逆ふ習にて、主君の心にあはぬ程に、常にいとひ嫌はれて、たゞ禮貌にてあひしらはれ、日に疎遠になるものなり。それに新進容悦の諂ひもの共、件の家老を事にふれて讒する程に、日を逐うて主君の目見せあしくなりて、何をいうても用ひられず。其時はいかなる忠臣も退屈する故に、或は病氣と稱し、或は致仕をねがうて、身を引退く分別するぞかし。然るに、

見せんとおもふ志は、なによりも奇特なる事ぞかし。其いひ上る事、用にたてばとり、用にたゝねばとらぬ迄にてこそあれ、卒爾なるしかたなどといふべき事にはあらず。惣じて、上も下も、我身の過は知らぬものなり。されど、小身なる者は、心安き友達傍輩などあれば、たがひに身の上の悪しき事をいうて吟味もする程に、意付きて改むる事おほし。是は小身の益なり。大身なるものは、友達傍輩と出合ひて心安く語るといふ事もなければ、常に出合ふものとては、家臣所従ばかりなり。それらは、大方の事をば御尤とならではいはぬ程に、我過を知るべきやうなし。しらねば改むる心もつかずして打過ぐるのみなり。是は大身の損といふべし。古より、富貴なるものの國を失ひ家を亡すは、大かた我過をいひきかするものなくて、自身にする事をよきとばかり思ふ故なり。しかれば、わが悪事を告知する者は、大切に思ふべきにあらずや」と仰せられしを、佐渡守承りて、覺え居けるが、あるとき嫡子上野介に語りきかせ、上の御思慮のふかきにそへて、御仁厚なる事をいうて、落涙に及びしに、上野介きゝて、「其人は誰にて候ひつる、其申上げし事はいかやうの事にて候や」と尋ねられければ、佐渡守、上野介をしかりて、「たゞ上の思召の結構なる事を思ふべし。其人の名も、その申上げし事も、汝きゝ

言路をひらき、下情を通ずるを御心とし給ふをぞ、古今にすぐれ給ひたる御事と申すべし。遠州濱松の御城に御座なされし時、ある夜、本多佐渡守、竝に外樣の者三人、御用の事ありて御前に召出さる。御用すみて、三人の者は退出しけるが、中に一人、御前にて鼻紙袋より筆記の物一通取出し、自身に御前へ持ちてさしあげけり。「それは何ぞ」と御尋ねあれば、「日頃私の存じよりに候事ども書付けおき申し候。憚りながら、萬に一つも御意得にもなるべきかと存知候うて、さし上げ候」由を申しければ、「それは奇特なる心入かな」と御感なされ、「佐渡守はきゝてもくるしからず。それにて讀みて聞かせよ」と仰せらるゝ程に、數箇條ありしを段々讀みけるに、一箇條を讀みをはる每に、「尤なる事」と御挨拶ありて、「其筆記の物是へ」とて御取りあそばし、さて仰せられけるは、「是に限らず、此後も存じよりたる事あらば、少しも遠慮なくいひきかせよ」とありしかば、「御聞きとゞけあそばされ、かたじけなく存じ奉る」と申して、御前を立ちけり。其跡に佐渡守殘り居けるが、「さても彼者卒爾なる仕かたにて候。それに一箇條も御用に立ち申すべきと存ずる事はきこえ申さず候」と申上げければ、御手をふらせ給うて、「いやとよ、さして用にたつほどの事はなけれども、其身相應の思案をつくし、內々書付け置いて我等に

虚損の疾―活力の耗して空しくなれるより起るやまひ

過擧―あやまてる行

永代不朽の御名譽とはいふべけれ。それに別してひとつ感じ奉るべきは、かくばかり古今に傑出し給ふ御事にて、御在世の内、御自身の聰明に傲り給はず、常に下の直言を納めさせ給ふこそ、眞の御聰明とも申し奉るべけれ。古より人君の徳を論ずるに、諫をいるゝを本とす。凡そ人聖人にあらざれば、必ず過失あり。假令あしき事ありても、諫をいるれば、虚損の疾の補藥を受くるがごとし。虚損おもしといへど、よく治するの頼あり。いかほどよき事ありても、諫をふせげば、虚損の病の補藥を受けざるがごとし。虚損輕しといへど、不治のおそれあり。しかれども、英明の君のくせとして、好んで自ら用ふる程に、下の直言をふかく忌みにくめり。もろこしにては、いづれの代にも、諫議正言などの官をたておきて、求諫要とすれども、多くは其名ばかりにて、直言する人は退きやすく、阿諛する人はすゝみやすし。よりて、上に過擧あれども改めず、國に闕政あれども擧せず。是古今の通患なりき。いはんや我朝武家の代になりて、上は専に武威をもて下を制し、下はたゞ勇力をもて、上につかふ。言語塞りやすく、下情通じがたく、國事日に非なる事、もととしてこのよしなり。しかるに、上下ともにこれを簡要の事と思ひよる人あるはまれなり。こゝに東照宮兵亂槍擾の間に御出まし〳〵て、常に

燕翼の謀—子孫の爲のはかりごと

重暉累洽—明德の人相嗣いでよく世を治むるをいふ

絲毫—いさゝか

しめさぬ故に、御治世の後も、いさゝか御身の御榮華をばおぼしよらず、たゞ天下の爲に御思慮を勞して、ながく燕翼の謀を貽しおかれしかば、重暉累洽、御代を逐つて昇平なるぞかし。關ヶ原御陣以後、いつの比にかありけん、山岡道阿彌前羽半入など御前に伺候し、御閑話ありしに、「天下をしろしめさるゝ御身にては、なにゝても世にまれなる事をあそばしおかれ候はゞ、ながく御名も遺るべく候。それ故太閤も大佛を建立にて候」と兩人申上げけるに、「各申す通り、大佛殿は末の世迄殘り、太閤の名も傳るべし。されど我は一方の名を殘す事を思はず、たゞ天下のためになるべき事を工夫して、後嗣に貽す外はなし。是大佛殿いくつ建立したるよりも增るべしとおもふ」と上意ありしとぞ。さて兩人をば、おろかに淺はかなる事を申すとこそおぼしめしけめと、恐れながらもおしはかり奉らるれ。かの朝鮮を征伐して、おほくの人を殺し、大佛を建立して多くの財を費しぬるは、天下の害にてこそあれ、國家のためになにか絲毫の益になる事ある。たゞ愚人の耳目をおどろかすばかりにて、少し心ある人は、いまの世迄も眉をしわむるぞかし。しかれば、末の世に名をのこすとはいへど、ながき譏を招くなるべし。しらずや、今日光の御廟、屹として泰山の如く、國々までも奉祀して、仰ぎ奉らざるはなし。是こそ

代らむ—原本「代らぬ」とあり

賓主—客も人も、

權詐—いつはりのはかりごと

それにおもき御身といひ、をしき御命をもて、天下に代らむと仰せられし御一言の誠は、天人に感通すべし。それ故にこそ天命人心に御かなひありて、天下をたもち給ひしぞかし。されば、明の太祖は、命をかけて功臣の死を救はんと禱り給ひ、東照宮は、御命をかけて天下の難を濟はんとおもひ給ふ。御器量の大きにして、いはゆる寶に心なきは同じ事なれども、御仁心の深厚なるは、恐らくは太祖のおよび給ふ所にあらじ。いつの比にかありけむ、ある人の家にて、東照宮の御軍功の事など語りあひしが、其序に、主人この事語りいでて、其忝なさを思ひとり、賓主ともにおぼえず落涙に及びにき。しかるに、兵家者流、又は世の智謀を好む者、是等の事を聞きては、主將人心を攬のかしこき謀とおもへり。常に權詐を尙ぶ心より見れば、さいふも似合ひたる評議とはいひながら、是非もなき事なり。さやうの人のためには語るべからず。

○直諫は一番鎗より難し

されば、古より倭漢ともに、創業の君おほくは天下を一人の天下とおもふ故に、天下を得ては、榮華をきはめ、名聞をつとめぬはなし。しかるに、天下を御一人の私物とおほ

鉾楯―不和となりて戰を交ふること

吉と御和睦ありしが、秀吉使を遠州濱松へつかはし、上洛と號して大坂へ御來會をすゝめられしかども、御同心なかりしかば、頻に使來る事數度に及びてやまず。それにてもなほ御同心なかりしかば、秀吉母氏大政所を質として、御出駕を請はれしに、御思案ありて、御上洛あるべきのよし仰出されしを、群臣危き事におもひて、いづれも一同に申上げけるは「もし御上洛なきを秀吉いかられ、鉾楯に及び候とも、もとより御弓矢の強きは申すに及ばず。それに臣等一命をすてゝ禦ぎ候はゞ秀吉百萬の兵といふとも、心やすくは敗れ候まじ。それに只今危き所へ御越しまします事あるべからず」とて、達てとどめ奉りしかば、その時、「いづれも申す通りにて候。秀吉の威勢に恐れて上洛せんといふにはあらず。よくおもうて見よ。天下の兵亂久しく打續きて、此比までも干戈をさまらず、都鄙安堵せざるにあらずや。此一兩年の間、漸く天下靜謐にむかひつるに、某秀吉と鉾楯におよびなば、又爭亂始まりて、天下の大難になりぬべし。もし上洛して不慮の變もあらば、其時は天下のために一命をすてんと覺悟したるぞ」と仰せられしかば、群臣みな肝に銘じて、とかう申上ぐるに及ばざりしとぞ。岡崎を御首途の時、井伊、本多に御身後の事まで仰せおかれたれば、御自身にも危しとおほしめさゞるにもあらず。

規模—かた

長湫合戰—既に註せり

年天下の安きを共にして、死なば諸共に死なんと、わが命をかけて神にちかへるなるべし。翁明の史錄を讀みて、こゝに至りて歎息しておもへり。古より、眞主は別の事なり。馬援が光武を見て、「帝王有レ眞」といひし、うべさもあらんかし。固より徐達が死する時、天下すでに明に歸して、家門も定まり、社稷も固く、たとひ太祖崩じ給ひても、そこに危き事なき程に、かくは宣ひしぞかし。されど、天下を得ては、ながく存命して、わが身の樂をきはめむとこそ思ひ給ふべきに、功臣の死を悲しみて、死を同じうせんと誇り給ひしにて知りぬ。あながちに天下を得るをもて樂とせず。なにとて天下を得るを樂とせざるといへば、其心はじめより、天下を天下の天下として、一人の天下とせねばなり。漢の高祖、光武なども、同じ規摸なるべし。此大器量なくては、天下を得がたし。もし小兒のめづらしき玩物を得て、いつも身をはなさず、人にとられんかと氣づかひするやうにては、たとひ天下を得ても、やがて失ふべし。秦の始皇、楚の項羽。我朝にてもちかき比、信長、秀吉をもてしるべし。いづれも不仁にして天下を失ふはさる事にて、しかしながら天下をたもつ器量に非ず。されば古人も、「深山有レ寶無レ心二於寶一者得レ之」とはいへるぞかし。天正十四年の事かとよ、長湫合戰の後、東照宮すでに豐臣秀

撥亂反正—亂世を治め正道に復すること

幾世不刊—幾萬年の後までも削除すべからざるをいふ

中國—支那をさす

明の太祖—朱元璋

に沐し、御一生の力を盡し、撥亂反正し給ひてより、今百有餘年に及びて、干戈動かず、四海浪靜かにして、天下泰平の化に浴しぬ。又誰か御恩のふかきを戴かざる。然るに我等ごときいやしき身にて申すは恐れあれども、上の御盛德をのべて世に傳へ廣むるは、儒臣の事なれば、さしてふかく憚るべきにもあらず。それにつきて、御盛德の事おほき中に、日ごろふかく奉感て、あまねく世にしらせたしとおもひ侍る事あり。今客のために語り侍るべし。天下は天下の天下、一人の天下にあらずといふ事は、六韜の書にいでて、天下の君たる人は、常に忘るまじき事にて候。最萬世不刊の名言と申すべし。されど、中國にても、三代を除きては、凡そ創業の君、大かた天下を得るを我一人の樂として、天下の天下とするはなし。むかし明の太祖創業のはじめ、中山王徐達、軍中にて病を得ると聞給ひて、いそぎ召しかへし、諸醫を召していろ〳〵療治せられしかども、終にかなはざりしかば、太祖自ら山川社稷に禱りて、「今數年徐達が命をあたへ給へ。さるにおいては、達が死せん時、朕が命も一度にとり給へ」と神に告げ給へり。太祖の諸將、徐達を第一とす。天下を平定するの功、徐達にしくはなし。此時天下甫て定まりて、達先死し、われひとり殘りて、泰平の樂を享るの本意なき事を悲しみて、せめて數

花にまさる—王安石の「綠陰幽草勝レ花時」

歷觀—たどり見ること

樂とし—原本「と」を脫し下に「に」字あり

駿臺雜話 卷三

○天下は天下の天下

春過ぎ夏來て日もやう〳〵ながきころ、天氣も折から清和にて、庭の綠樹もしげりあひつゝ、花にまさるといひしもさる事とおもはる。翁が身のわづらはしさも、やゝこゝろよく覺えしかば、ひとり明窓の下に卷をひろげて、古今の事を歷觀し、いと感慨ふかゝりしに、いつも見馴れし心しりの人さへあまた問來て、かたみに書を講じ文を論じて、日をくらしけるが、座中の人々いかゞ思ひけん、於戲前王不レ忘といひしを、翁きゝ咎めて、「各申さるゝ如く、只今天下泰平なる故に、世にある有德有位の人は、もとより親を親とし賢を賢とし、我等ごとき德もなく位もなきいやしき身までも、樂を樂とし利を利として、優游して卒レ歲は、これ皆泰平の餘澤にあらずや。歐陽永叔豐樂亭記を著して、「宋の太祖四海の亂を定めて、天下の人をしてゐながら百年泰平の樂みに安んぜしむ。たれか其恩のふかきをしらむ」といへり。翁も亦おもへらく、東照宮風に櫛り雨

僉議の趣を委細に具狀し、其人を竝せて府廳に遣して、廳主の處決を仰ぐべし。しかあらば、府下の人家、何事にても官に達するに、府廳に至るの勞なく、府廳も小廳の成獄を受けて聽斷せば、日々應對簡易にして、下より訴ふる事も、壅滯するの患なかるべし。それのみならず、下の惡黨鄉曲の間に隱るべきやうなく、人々庸行をつゝしむ心も出來て、急に感服する事はなくとも、面革には至りなん。斯くして時月を經なば、風俗も漸く改りぬべし。たゞ官長たる人、大かた此事を專にし、姑息を安んじ、其下を治むるに、公法をさへ犯さねば、見ゆるしきゝのがすをよしとす。それにては風俗の改まるべき期もなかるべし。もし一旦の料簡にていはゞ、風俗の僉議は迂遠なるやうに聞ゆれども、翁はふかく恐れて、國政を妨げ士風を敗るのもとは、こゝにありとおもへり、腐儒迂濶の故態とやいはん。しかしながら、杞國憂天の愚人ともいふべし」

壅滯—ふさがりとゞこほること
面革—外面丈を改むること
杞國憂天—列子に「杞國有レ人、憂ニ天崩墜一」

嚴譴―きびしくとがめらるゝなり

什伍―十人組五人組

悛治―改め治むる、悛は悛か

凶狠―性よこしまにして人にさからひ争ふこと

にはかに府廳の晴なる所へいでては、事の子細をくはしく陳ずる事あたはず。それに下吏いさゝか推恕の心なく、威勢を募る程に、少しにても無調法なる事あれば、嚴譴せられ、一言にても口上相違する事あれば、詰問せらる。よりて、我に十分の理ありても、府廳へ訴ふるをはなはだ難事とす。その上、府廳はたゞ一所にて、四方の訴は日々にかさなりて山のごとし。中々手およびがたく、たとひ輕き事にても、滞りて多くの日數を經る程に、其間比隣什伍相與に、たび〳〵廳へ召出ださるゝまゝ、一閭のわづらひとなり、費用もかゝる故に、それにこりて、大かたは下にて無爲にすますをよしとす。かくては、姦賊惡黨いかでか國にたえぬべき。所詮府廳手遠く、又は訴ふる事たやすからず、むづかしき故ぞかし。今姦惡を悛治せんとならば、方々にあまた小廳をたて、囹圄を設け、人を擇びて其長とし、その手寄々々に幾街と各受取の限を定め、すべて府廳に屬せしむべし。さて什伍の法をいよ〳〵嚴にし、比隣互に相いましめて、善をすゝめ惡をこらし、もし凶狠にして人の言を用ひず、衆目にあまる程の惡ある者をば、たとひ其人國家の法ををかす事はなくとも、すみやかにその手寄の監司へ告げしらするやうにし、其場にて僉議の上、輕科ならば當座にすまし、重科ならば禁獄もいたさせ、追うて

泥塞—泥のためにふさがること
戯場—芝居小舍
寃告する—寃罪を訴ふ

る物は、もらひてもさてあるべきを、上の御爲を忘れぬよりして、かり初の事にも、世の風俗へも移り、わが權威にもなるやうの事は、かたくつゝしまるゝ程に、かくありけり。其外同じころ執權の衆は、いづれもつゆ身に驕なく、權にほこらず、何事も公に沙汰せられし程に、其風下に移りて、末々の役人までも、廉潔質直なる人ありて、風俗を維持せしぞかし。されど、翁おもふに、風俗の上より下へ移るはさる事にて、又下より上へも移るにてありけり。たとへば上より下へ移るは、水の源すめば下流すみ、源濁れば下流濁るがごとし。下より上へ移るは、下流泥塞すれば、其泥を上へ推しのぼせて、漸く上流に及ぶがごとし。今富商大賈の子弟、武人俗吏の惡黨、其外市井無賴の徒、日夜娼家戯場をもて家とし、酒色博奕をもて事とす。其風上へ移りて、列侯郡守の身にて、ひそかに娼家の遊を好むもあり、士太夫といはるゝ身にて、きそうて戯場の風を學ぶもあり。是皆下より上へ移るにあらずや。今此流俗を正さんとならば、いよ〳〵上にたつ官長を沙汰して、源を澄すこともとよりの事にて、又下にある惡黨を捜抉して、下流の泥を浚ふべし。しかるに、今比屋の賤民ども、日ごろ府廳へ手遠き程にたとひ寃告する事ありて、官へ訴へんとしても、大かたは口上拙く、禮義をしらねば、

踊貴——「騰貴」に同じ

し。萬治寛文のころかとよ、世に鶉はやりて、貴富の家互によき鶉を購りもとめし程に、其價しきりに踊貴しけり。阿部豐後守忠秋も其ころ鶉をすかれて、常に籠を座側に置いてなかせてきかれけり。それをさる列侯なる人きゝて、其ころ世にかくれなき鶉を厚價にてもとめて、ある官醫をもて、近きころ珍らしき鶉をもとめ得て候。御慰に進じたきよしをいはせけり。その官醫豐州のもとへ來て其旨を達して、「御もちひ候はゞ、さぞよろこびにてあるべく候」といひければ、豐州きかれて、「先へよく意得て」とばかりにて、とかくの返事なし。しばらくありて近習のものを呼びて、「鶉籠の口をみな、庭のかたへむけよ」とある程に、みな外へむけければ、「其口をのこりなくあけよ」とある程に、皆あけければ、鶉殘らず籠をいでて飛去りぬ。かの官醫見て不審におもひ、「久しく御手馴せし鳥にて、又立歸り候にや」といへば、豐州「いや、さにてはなし。今日より殘らず放ちやるにて侍る。さて序ながら申す。某ごとき、上の御威光にて人に執しおもはるゝ身にて、物は好くまじき事にて侍る。某このごろふと鶉をすき候へば、はやさやうにきこゆる人もおはし候。向後はふつと鶉すきをやめ侍るべし」といはれしかば、かの官醫も手持なくみえしとぞ。わが數寄たる事はやめがたく、人の志とてたま〳〵贈

淫佚―佚樂に心奪はれて法度の外に走ること

をとゝのふるにしくはなし。されば、風俗のもとは人君の身にあり。人君たる人、身ををさめて下を化するといふは、古今不易の道なり。人君の身をさまらずしては、下たる人なにを目當にすべき。しかれども、古より善惡ともに久しく堅まりて、世の風俗となりて、急には改まらぬ物ぞかし。中に惡に移るはやすく、善に移るは難き習なれば、今風俗を改めんとならば、たゞあしきかたへゆかぬやうに、つなぎたもつにあるべし。是を風俗を維持すといふなり。風俗を維持する事は、君一人の力にては及びがたし。時の執權をはじめ、もろ〳〵官長として群下の上にをる人、各君の意をうけて、身ををさめ行を愼みて、人の手本となるやうにだにあらば、其下にたつ人、おのづから恐るゝ事あり恥づる事ありて、法令もきくべき程に、風俗も改りてゆくべし。今の御代、上には儉素を尊びおはしまし、毛頭も御榮耀なき事は、天下の知りたる事なれども、末々の驕奢はいまだやまず、常に聲色を遠ざけられ、晝夜御政事に御心を盡さるれども末々の淫佚はいまだやまず。されば、上の御盛德は、翁づれが數ならぬ身にさへ、常に仰ぎ奉る事なれば、まいて歷々諸役人として、たれか上の御旨をうけざる人あるべき。さこそ各油斷はあるまじけれども、久しく衰へ來りたる風俗なれば、かくあるにてやあらんか

諫動―悚の誤歟

に及ぶ事をきかず。しかるに此嚴命をきゝては、そのかみの老臣たる人、たれか恐懼諫動して、上の盛意に承順はざる者あらん。うべも御治世以後、人材輩出し、庶政脩擧し、文明日に開けて、天下泰平の化に浴せざるはなし。是皆東照宮の御遺澤にあらずや。日夜奉仰も餘りあるべき事なり。

○風俗は政の田地

しかるに天下國家には、風俗といふ物ばかり大切なるはなし。君上の威は天のごとく、其恐るべき事は雷のごとし。たれか背くべきなれども、世話に大勢に手なしといふやうに、一世の風俗には勝ちがたし。さる程に、號令法度も、それにて一邊は改るやうなれども、つひに風俗におされて、あまねく下へ達しがたく、ながく末まで遂げざる程に、たゞ局面ばかり取傳へて、はては風俗のなりになりてやむぞかし。たとへば風俗は田地なり、政は穀種のごとし。たとひ嘉穀の種にても、地拵あしくしては、そだちがたし。そのごとく、善政良法といへども、風俗とゝのはずしては行はれがたし。穀種のそだたん事を欲せば、地ごしらへするにしくはなく、政令の行はれん事を欲せば、風俗

苟偸―苟且偸安、姑息にして安逸を貪ること

君相―君主と宰相と

權家にこび諂ふをよしとせん。されば、麾下の士恥をしり義を守るは、國家の元氣なり。それに諸士の心きたなくなりて、恥をしらず、鼻は曲りても息さへいでなばと思ふやうになりゆきなば、なに事をするも苟偸にして、義を守る心なかるべし。しからば人の元氣うせて死するごとく國家の元氣衰へて、やがて敗亡に至るも難かるべきにあらず。向後汝等こゝに心をつけて、大切の事と覺悟いたし候へ」と仰ありけるとぞ。竊に此仰によりて考ふるに、人材を至寶とし給ひ、四維を國の元氣とし給ふ事は、誠に國家の龜鑑、宗廟の基本たるべし。我朝の人主に、つひに此御面影に似たるもきかず。古今にすぐれさせ給ふ御事といふべし。中に老臣を御しかりありし事、とかう申すに及ばず。周禮に冢宰あり、歷代に吏部あり。常に六卿の上に居て、ために人材を選ぶを己が職とす。其外閥閲の家も、所識の材を保任して、朝廷に登進むるを奉公としけり。しかあれど、後世に至りて、古道日に衰へ、君相ともに是を急務とせず、常に人の賢否をしるに心なければ、選擧の道ありといへど、洽聞、宏詞、身言、書判の末事にすぎず。吏部たる人も、身詮衡の職にありといへど、簿書、期會さし當りたる事をのみつとめて、第一の本職を取失ひし事、代々もてしかなり。況や本朝において、鎌倉より以來、君相たる人、此さた

云々—規則に拘泥して變通を知らざること

はりて、「麾下の多き諸士を、のこらず其人がらをしれといはゞ、わが誤なり。又は汝諸士の善惡を必ずしもしるべき職にもあらぬに、問ひてしらぬをとがめば、わがひが事たるべし。件のものは麾下人多き中にも、日ごろ祿もなみにこえて、人にしられぬ程の身にもあらず。それに汝は、第一群臣の善惡を見聞き置いて、わが今のごとく尋ぬる時はいひ聞するを職とする者なり。いづれに付ても存知せずというてさてやむべき事かは。さやうの事とはしらで、おもき職をいひつけ置きしは、わが目がねちがひたるにてこそあれ。よく思うて見候へ。すべて武道に志ふかき士は、家老又は權柄の人に諂ひ追從せぬ物ぞかし。さやうなる中によき人あるべし。その埋れぬやうにと、つねに氣をつけ心にかけてたづねもとめてこそ、君の爲を思ふとはいふべけれ。刀脇指、茶湯道具の類に、名物埋れてあると聞きては、なにとぞ取出してわれに見せんと思ふべし。それはいかやうの名物にてもあれ、國家の用にたゝず。なくても事欠かぬものなり。たゞ寶の中の寶といふは、人にとゞめたるなり。これはわれ常々口癖のやうにいふ事なれども、それをよその事にして、うかときく心から、唯今のやうなる返答をばするぞかし。さて、汝等がもとへ出入するものばかり立身する事とおもはゞ、諸士の心だてあしくなりて、

麑を射しむ明帝忍びずして弓矢を放つ父歎じて立てゝ太子とす

卵を盜めども―子思苟變を衞侯に薦めて將とせしむ、侯變の嘗て民の鷄卵を强取せしを以て用ひず、子思小過を以て人物を棄つべからざるを說きて用ひしむ

柱に膠して

卵を盜めども干城の將をすてず。公孫弘が布被は、儉に似て矯情の姦をしるべく、郭子儀が奢欲は、奢に似て汚行の譏を貽さず。もし一定の格に泥んで、萬變の事を制せんとならば、いはゆる柱に膠して瑟を鼓し、舟に刻んで劍を求むるなり。いかで變にあひ宜きにかなふべき。たゞ其人を得て、法を人にゆだねて行はしむれば、操縱進退時により事によりて變通する程に法を用ひて法に用ひられず、法華を轉じて法華に轉ぜられず。さやうの人多く官にあり事に任せば、國政なにの滯る事かあらん。法も行はれ衆も服して、日に治平ならむかし。されば、天下の寶、なにか人材に過ぎたる物あるべき。この故に「楚は白衍を寶とせずして賢を寶とす」と王孫圉がいひし事、楚語に見えたり。梁の惠王、吾國に徑寸の珠ありて、車の前後十二乘を照すとて、齊の威王に誇られしかば威王、「寡人四臣ありて千里を照す。何ぞ十二乘のみならんや」といはれしには、惠王も慚づる色ありしとぞ。それに付いて申すも恐れなれど、ひそかに感じ奉るは、東照宮の御事なり。ある時、一役人闕けたる事ありしに、或老臣に、何がしを代りに仰付けらるべきと思しめす。其人柄いかなるぞ」と御尋ねありしに「其人はかねて臣がもとへ出入いたし候はねば、いかやうの人物にて候や存知し候はぬ由を御いらへ申せば、御氣色か

なしの宰相、峭直無私を以て著る
二典—書經の舜典堯虞典—舜典
忽微—極めてわづかなること
贓—收賄せる官吏
麑を放つ—魏の明帝王たりし時父帝に從つて獵す鹿子母あり父母鹿を射て子に

官の畏慎みて、おのづからしたがひ、官長正しからねば、言語をもて敎ふといへど、其下爭訟へて心服せず。法令屢下れども、いよ〳〵多事になりて治り難し。所詮官長その人にあらざればなり。もとより國政は、法令を闕くべからずといへど、法は人をもて行はる。人なければ法虚しく行はれず。孔子も、「爲政在人、其人存則政擧、其人亡則政息」とのたまへり。翁、昔ある故人の家に會して、二典の文を論ぜしが、曆數の事に及べり。翁いふは、「步歷の法始て虞書に見ゆるといへど、後世を經て元に至りて精しくなりし。そのかみ此法だに具りなば、羲和に命じて候せしむるにも及ばざらまし」主人聞きて「いやさはいふべからず。天は運動の物なり。運動の人をもて候せずしては、其きざしの忽微なるを覺えず。曆法は一定の物なり。曆法にのみゆだねて、人の目力をもて審にせざるは、聖人敬天の心にあらず」といふを聞きて、心に銘じてふかく感服しき。天度は萬古不易にて、遲速盈縮常ある物なり。それさへ動物なれば、定法の及ばざる所あるぞかし。況や人心變動常なく、是非互に見え、情僞紛ひいづ。一定の法をもて畫すべきにあらず。この故に、材は取るべけれども、嗇夫の利口は張釋之是れを黜く。贓は罪すべけれども、掾吏の自首は吳祐これを賞す。麑を放つをもて託國の仁をとり、

ばさら男―派手なる男

有らしむる にあり―原本「に」の字

に萃るにて候。されば、郡縣やゝゆたかになり申さず候ては、府下の盜賊やみがたかるべく候歟。それに無用の華奢を專にする風俗に候故、貴族厚祿の家より、すこし時めくものに至るまで、下人を召抱ふるに、今樣のばさら男の異形に作れるをえらぶになんありける。下部にても、謹厚なる者に、さやうなるはなし。よりて世上に溢れものども、宅內の側屋にあつまりゐて、飮酒博奕し、はては醉臥して、多くは失火するをもしらず。又其最惡性なる者は、貨をぬすみ難をのがれんとしては、みづから主人の宅にわざと火をつくるもあるやうにきこえ侍る。是は主人たる者の心得あしきに起り候へども、畢竟華奢をこのむの流弊にて候。とにかくに、市朝の奢侈を抑へ、郡縣の困窮を賑はすにしくはなかるべし。

○天下の寶

されど、古より、太平百年に及び候へば、大かたは奢侈風をなし候。今奢侈を抑へ、儉素を崇ばんとならば、節儉廉直の士を選んで官に有らしむるにあり。號令科條の及ぶべきにあらず。第五倫いへらずや。「以身教者從以言教者訟」と、官長身正しければ、一

無類—無頼の誤
流氓—國を離れてよるべなき民

候へ。此外に申すべき事は候はず」といひしとなん。是易の剝卦の意にていへるなるべし。剝卦上を艮にす、艮は山なり。下を坤にす、坤は地なり。これ地上に山ある象なり。山は高く上に位すれども、下は地に附いてはなれず。是山は地を基本とするなり。人の上たる人、上を剝落して下を厚うすれば、邦安うして、山の地上に安置するがごとし。もし下を剝落して上にませば、山在₂地上₁の象にそむく程に、やがて危かるべしとなり。其に付きて、翁が愚案にて考へ候に、只今市井無類の徒、多く府下に介居て國の害をなし侍る。第一、人家に火をつけて大害を貽し候。是大方は郡縣の流氓にて候。郡縣困窮して流離に及び、身の置所なきまゝに、なにの心當もなく府下に出で候へども、生活すべきやうなく、又故里へ歸りてもよる方なく候故、盜賊をして身命をつぎ申す外はなく候。もし郡縣困窮せず、父兄親族土著してあらば、それらにも勘當せられて立のく程のものは、格別にて候。其外はたとひ府下にいでて手振すとも、かなはずば故里へ歸り候べし。身のより所あるに、眼前極刑に陷るを見ながら、身をすてゝ惡事をいたす事はあるまじく候。又諸國より追放せられて流浪するものも、郡縣賑ひ候はゞ、しるべにつきてたよる所もあるべく候へども、それ右に申す通にて候故、諸方の惡黨こと〴〵く府下

郡縣へも移るぞかし。況や四方の郡縣、各安堵して阜厚になりなば、其風天下へ移りて、撲實日に勝ち、華靡日に減じなん。しからば驕奢の風やうやく變じて、儉素に復せん事うたがひなかるべし。

○富士のすそ野

たゞ思ふべし、民は邦の本、郡國は邦の藩屛なり。もし郡縣の民憔悴流離しなば、天下の勢もこれより薄くなるべし。古より、民窮しては亂を思ふといへば、郡縣危ければ國も危く、郡縣安ければ國も安し。さきに郡縣は治亂のかゝる所と申しつるは、是にて候。ひとり風俗のもとといふばかりにては候はず。むかし憲廟の御時、ある士人の好學ありけり。其人按察使に命ぜられて、畿内の郡縣を巡りしが、首途に臨んで學問の師に贈言を乞ひしに、其師、「此度道中にて、富士山の下を通り給はん時、よく裾野を見て行かれ候へ。あれ程の山は、あれ程のすそのなくてはたもつべからず。すべて山は、上より土下りて、下の埤厚なるにてこそ持ち候へ。もし上かさありて下細く、上大きにして下小さくば、忽に崩れつべし。此度上の御爲をおぼさば、たゞ下を厚くするやうに御意得

憲廟―徳川五代將軍常憲院綱吉

以下の文に倣ひて假に補ふ
鴆毒—鴆といふ鳥の恐ろべき毒、左傳に「宴安鴆毒不レ可レ懷也」
畜ふるに足る—源本畜ふに足るとあり

つしかさやうの人もうせはてゝ、在朝の士太夫世祿に浴し、泰平なるまゝに憂き事をしらねば、宴安をのみ懷ひて其鴆毒なる事をさとらず。驕奢淫佚こゝに至るもあやしむにたらず。まいて、貨殖の家遊俠の徒は、論ずる事なかるべし。されば、其弊郡縣にも移るといへど、今とても、田舍にはさすが古風のこりて、市朝とは同じ物にもあらず。もとより民はおろかにして麤暴なるまゝに、大惡をする人もあり、又は一槩にて分別なき程に、難儀に臨みては、己が怒にたへず、上にたてあふ事もあれども、大やう市朝の人の邪智をもて人をたばかるやうの事はなき程に、おのづからすなほなる方もありて、惠に感じやすく、理にをるゝもすみやかなり。己がなりはひだにあれば、みづから足る事をしる事ぞかし。たゞ郡長たる人、民を天とするの心を忘れず、歲の豐凶にしたがひて賦稅を上下し、飢寒の患なく、父母を養ひ妻子を畜ふるに足るやうに相計ひなば、民安堵して、ながく流離の愁なからまし。さる上にて、條法を設けて、威刑をしめし遊惰をいましめ、紛奢を禁じなば、一郡感服して、好風俗となるべし。もろ〳〵の郡縣一統にかくありなば、其風おのづから市朝にも移りなん。今市朝にあらゆる人數夥しといふとも。天下の郡縣に比せば、十分の一にもたらざるべし。それさへ市朝の風盛なれば

日に賤し。食祿の士は、いやしき米穀をもて貴き金銀に易ふる程に、家貲いよ〳〵たらず、貨殖の家は、貴き金銀をもていやしき米穀を買ふ程に、家貲いよ〳〵餘りあり。しかるに、有數の金銀をもて無限の驕をきはめ、有用の金銀をもて無用の物に費しぬる故に、金銀日に虛耗して、あまねく民間に流行せず。よりて粒米狼戾して極めて價廉なれども、閭里の貧民はそれをさへもとむる力なければ、富民は常に膏粱に厭けども、かたへには菜色ある人あり。富民は常に肥甘に飽けども、かたへには餓死する人あり。中に惡性なる者は、自ら死を救はんとては法禁をも犯し、盜賊をもするぞかし。こゝをもて見るに、世の困窮なる故にこゝに及ぶなれば、その本源風俗の驕奢より起りて、一朝一夕の事にあらず。されど此六七十年以前迄は、世間今よりも猶繁華なりしが、もとより驕奢を好むの俗はありながら、儉素を尊ぶの人もおほくありき。それをいかにといふに、其比は前代の故老あまた國にのこりしが、いづれも其父祖わかゝりし時より、晝夜草野に起臥して、汗馬野戰にいとまなければ、華奢風流の事は夢にもしらず、其子孫も家風に習ひて、いはゞ今いふ田舍風なりしかども、おのづから文なうして質にあまり、かりにも虛なうして實にあつし。甲斐〴〵しく賴もしく、しかもまめやかに情ありし。い

狼戾—狼戾の誤歟れちれもとるの義

菜色—あをざめたる顏色

文なうして—原本「て」の字なし。

の懐王の大傳となる文帝の十二年卒
文景―文帝景帝
ひとりの齊語云々―多勢に無勢の意

申すべし、是によりてつら〳〵古今を考ふるに、上代は格別にて候。後世に至りては、郡縣の風市朝に移るはよく、市朝の風郡縣に移るはあしゝ。其故は、市朝の風は奢侈を貴び、郡縣の風は樸素を失はず。しかるに近來市朝の事を承るに、國に貪墨の吏あり、郷に貨殖の家あり。いづれも公には法禁を守り、貨賂を遠ざくとみゆれども、私には利欲をつとめ、宴樂を好まざるはなし。しかも私智を逞うして、己が惡を隱し、上を欺き人を誣ふるをかしこき謀とす。その會をきくに、食膳美をつくし、歌舞艶を競ひ、一日の費數十百金に及べども、互に是を風流とし、をしとも思はず。少しも儉素正直なる人をみては、これをそねみにくみて、世をしらぬ田舍人なりとて、群り聚まりてこれを嘲笑ふ程に、ひとりの齊語衆楚の咻しきにたへねば、つひに一統の風となりて、田舍までも見および聞および、華美をつとめ、詐僞を習ふこそ、いとなげかしき事なれ。されば、世こぞりて驕奢を貴びぬれば、その費用過分なるにつけて、己が諸欲を快うするに、金銀なければかなひ難き程に、おしなべて金銀を貪りもとめざるはなし、よりて、天下の金銀常に有力の人のために兼并せられて、おのづから流行も滯るぞかし。それに、金銀は世を歷て減し、米穀は年を逐うて生ずる物なれば、金銀は日に貴く、米穀は

大抵—原本「大根」とあり。意通じ難きを以て假に改む
頭會箕斂—人口を精査して重税を課すること
封侯—大名
賈誼—漢の人、博覧強記、詩文に巧なり、梁

は食を仰戴きて天とすべしと。かりにも耕作を粗略にすべからず。是風俗の本、治亂の係る所にて候。今其あらましを申侍るべし。むかし三代の時は、上に民をもて天とするの心ある故に、租税を薄うし、凶歉を拯ひ、困厄流離する事なからしむ。よりて郡縣の民土著に安んじ、農業をつとめ、米穀を出して君上に奉じ、食をもて天とせざるはなかりし。其風おのづから市朝にも移りしかば、士太夫をはじめ、商賈等に至る迄、大抵勤倹にして華奢をいましめ、遊惰の俗ある事をきかず。暴秦に至りて、民を天とするの心なかりし程に、頭會箕斂民に虐取してやまざりしかば、はては郡國離叛き、四方土のごとく崩れて、天下の亂民間より起りしぞかし。炎漢起りて、天下泰平無事になりしかども、逐末射利の徒日に出來て、富商大賈封侯にひとしく、食貨の權を恣にせしかば、村閭の民もそれに化して、豪奢にながれ、游俠を事とす。賈誼が治安の疏を見て知るべし。然れども、上に民を天とするの心なほ残りて、しば〳〵詔を下しつゝ、農は天下の本といふ事を郡國に告諭し、租を免し復を賜ひ、郡吏の貪欲をいましめ、其上孝弟力田をもて下を率ゐ、たゞ務めて本を崇び、末を抑へし事くはしく、漢史に見え侍る。さればこそ、かの文景の時、君臣恭倹にして、阜厚を致せし事は、三代以後の治世とも

磬控—馬を走らせ又とどむること

式す—頭をさげて拜す

○民は王者の天

ある時、論語郷黨篇の講訖りて、その「式二負版者一」とあるにつけて、翁諸客に對して、「王者以レ民爲レ天。民以レ食爲レ天」この意いかん。各いうて見給へ」といへば、坐中ひとり、「民はこれ邦の本なり。民歸すれば邦存し、民叛けば邦亡ぶ。邦の存亡は民にあり。故に王者は常に民を尊びて天とす。食は民の命なり。食を得れば民いき、食を失へば民死す。民の死生は食にあり。故に民は食を尊びて天とすといふ意にてあるべく候」翁、「さやうにとき候ては、上下兩意に聞え侍る。是は二句ともに、所詮農を重んずるを主意にしていへる事にて候。天より人を生ずれば、又五穀を生じて人の食とす。人あれば食あり、食なければ人なし。天下豈食より重き物あらんや。民は天下の爲に食を生ずるもの也。それを天より王者にあづけ給へば、王者は民を仰ぎ尊びて天とすべし。一夫をも輕慢るべからず。されば、昔は諸國の民數をしるす籍を王に獻ずれば、王も拜して受給ひ、孔子も、民數の籍を負ひたるものには、式し給ひしとなり。又民としては思ふべし。天より我人命を續くなる天下の大切なる物を、我等にわたして作らしめ給へば、民

悍馬—あらき馬

のりずまひ—馬が急に狂出して、人をのせじとすること

とび魚のをどるとおなじく、現在わが當然の事ありとして、常にそこを離れずして居るまでの事にて候。此外毫髪も加ふる事はなかるべし。しかるに、忘るれば、その有レ事所をうち忘る。助長すれば氣力を用ひてしひて作爲す。忘れもせず、强ひて作爲もせず、其間にて自然の天機を自得して、持敬の法とすべし。昔加賀にありし時、ある士人、持敬の法を問ひしに、翁、持敬の說をあらはして是にあたへき。其大略おもへらく、たとへば、心は悍馬のごとし。持敬は悍馬を御するがごとし。我氣たるみて、鞍弱く韁ゆるめば、馬馳出して、泛駕の患あり。是忘るゝなり。さればとて、力をもて馬を制しつゝ、韁をつよく引きはりて、馬の口を痛むれば、馬なづみ苦みて、こゝろよくゆかずなりぬ。是助長するといふべし。たゞ行かざるのみにあらず、反つて馬の邪氣をさそひて、後にはのりずまひなどして、いろ〳〵くせつくものぞかし。いはゆる「非二徒無一レ益而又害一レ之」にあらずや。されば、磬控中を得、緩急程にかなへば、おのづから進退疾徐たゞ我心にしたがひて、自由ならずといふ事なし。是をもて持敬の法をしるべしといひしが、はや四十年にちかき事なり。其問ひし人も、今は昔語りになりたり」とて、翁感愴いとふかく見えし。

黄勉翁―黄幹、朱晦菴の聟

みだるゝがごとし。荀子は是を偸心といひ、釋氏はこれを流注想と名づく。是我人ある心の持病なり。今翁が、心のむきを眞直にして、わきへゆかぬやうにといふは、是を療ずる主方とすべし。さて心火とて、心は火に屬する物なり。心のむき正しからざる時は、心のほさき亂れて、用ふるにたへず。黄勉齋のいはれしやうに、心は一炬の火にたとふ。其本を堅く引束ねて、火をともすときは、光つよくして、風にもたへず雨にもきえず。もし本のつかねほどけてゆるまらんには、たとひ火をともすとも、光よわく打ちちりて、滅えぬべし。翁が本を束ねて末の散らぬやうにとは、こゝをいふなり。ひとりある時は身のある所に心ありて、常に身をまもるを敬とす。是身の番人なり。事にむかふ時は、事のある所に心ありて、常に事を察するを敬とす。是事の目付なり。今敬の事を翁に申せとならば、大かた是にたがひたる事はあるまじく覺え侍る。然るに是等の工夫は、いはゞ病氣に的中したる良藥なり。この上にいふべきならば、藥の用ひやうひとつにて候。其用ひやうは、前に申すごとく、孟子養氣の法に外ならず。翁かねて孟子を讀みておもへらく、「養氣、持敬ともに必有」事焉」といふ一言にて、もはやその理盡きたる事なり。いかにとなれば、養氣持敬何の替りたる事かあらん。いづれも本來の面目なれば、鳶の

盤水―盥などに入れた水

となるやうに」是にて敬はのこりなくこそ候へ。此翁が語、至つて淺きやうに候へども、淺うして反つて深く、至つてやすきやうに候へども、易くして反つて難し。各是を身に驗みて見給はゞ、主一無適も、常惺之法も、この外になき事としり給ふべし。事新しき申樣に候へども、天下に至極大切にて又至極たもち難きものは、此心にて候。孔子も、「出入無時、莫知其鄕」と宣へり。然るに、其至極大切なる物を粗略にいたし、至極難持ものを心安く存知候程に、此心放逸するよりして、諸惡も起り、萬事もやぶるゝぞかし。しかれば、敬はその大切にしてあぶなき物をたもつ時の心にて候、古人の執玉捧盈にたとへしも、げにさる事ぞかし。今もし寶玉をとり、盤水の盈てるを捧げば、少しも手をゆるさず、氣をゆるめざるにてあらん。其心にて心をたもつを持敬といふなり。されど、玉もとらばとらなん、盈てるも捧げばさゝげなん。此心の執がたく捧げがたきは、中々それに譬へてやむべきにもあらず。いつも申す如く、心は神妙靈活なる物にて候故、たゞむなしく無爲にしてはをらぬものにて候。あるは人に接り、あるは事にしたがひ、さなくして隙にものする時は、不用の事を引出して、彼へ移りこれへ移り、水のつとふがごとし。無根の根をきざして、とさまにおもひ、かうさまにおもひ、麻の

鮮の李晦齋がいひしやうに、たとへば鷄卵の手にあるがごとし。勿レ忘は手にとる事を忘れぬなり。忘るれば取りおとすべし。勿ニ助長一は力をいれて握りかためぬなり。握りかたむれば、握り潰すべし。ふたつの間を體認して、持敬の法を知るべし。もとより存心集義二致なければ、持敬養氣二法あるべからず。是等は簡要深切の事なり。たゞ一場の說話とき〻給ふべからず」

○敬の工夫

座中ひとり、「敬の字の義は、程朱の說最詳明親切にして、なにの疑もなきやうには候へども、敬の工夫は、學者第一の事にて候へば、もし翁の思ひよられたる事も候はゞ、承りたくこそ候へ」といへば、翁、「いやとよ、程朱のとき給へる外に、翁が今更申すべき事は侍らず。但程朱の說あまり反復切要なる故に　吾黨の學者ふかく取り過ぎて、いとむづかしくなりぬるこそ、反つて程朱の心にもかなふまじく覺え侍れ。翁はたゞ常人の心にあて〻、俗語に引きさけて申したく候。「敬は心のむきを眞直にして、わきへゆかぬやうに、心のもとをたばねて、末のちらぬやうに、身の番人となるやうに、事の目付

持敬—常に心をひきしめて道德に離れしめぬこと。

執泥—拘泥

に靈異なる物かな。氣を噓いて雲を生じ、又わが生じたる雲に乘りて日月に薄り、陵谷を汨ぐ。是雲は龍より生じて、また龍の變化をたすくるにあらずや。今浩然の氣は、心のきれより生じて、又心のきれを助くるにたとふるに、一理なるべし。しかいへばとて、しひて氣力をもちひて、よわきを强しとし、むなしきを盈てりとするは、いはゆる助長するにて、かの宋人の、苗を抽きて長ずるの類なり。此氣自然の生路を妨げて、大きに集義の害を貽すべし。たゞなにの作爲もなく、集義を事とするにあり。孟子に「必有事焉」といふは、たとへば、人なにぞさし當りて緊要の事あれば、朝夕そこに心をとゞめて、すておかぬ物なり。そのごとく、集義するは必定一事あるなり。必の字最力ありて心の一定する所なり。しかるに、およそ世間の人、忘れねば助長す。助長せねば忘る〻。「勿忘勿助長」というて、ふたつの間をしらするなり。忘れもせず助長しもせずして、心のきれを用ふれば、おのづからにぶらず、又はそこねずして、浩然の氣もこれより生ずべし。先儒をもて持敬の法を論ずれば、持敬もまたこゝに同じかるべし。いかになれば、敬はたゞ儼然として、なにぞ事あるがごとしとしかいふべし。さればとて、敬に執泥して、此心をしひて拘定すれば他病を生じて　その害忘るゝよりも甚し。朝

達人足利義詮義満に仕ふ

一劍兩斷―「一刀兩段」に同じ、斷乎として事を處置し去ること

體認―のみこみ守ること

禀賦―うまれつき

左驗―證據

やゝもすれば機嫌にまかせ、調子に乘じなどして、一槩に物を決行して快しとす。是は眞のきれにあらず。反つて大に氣をそこなひ、心の刃もこぼれつべし、いよ〱きれぬ物になりなんこそうたてけれ。孟子に、「義を集めて生ず」とあれば、一時一事のきれにてきほひを取りて、浩然の氣を生ずべきとにはあらず。其工夫日用の間、事の大小輕重によらず、道理に當りてはいさゝか狐疑せず、たゞ平等に心のきれを用ひて、一劍兩斷して宜きに合ふにあり。これかれたび〱かくのごとくにしてやまねば、此氣常にたるまずして、丈夫になる程に、後には氣より心のきれを助けつゝ、義と合體して、おのづから浩然たるにも至るべし。但氣にて心のきれを助くるといふ事、よく體認してしるべき事にや。たとへばこゝに二人あり、極寒の時に當りて拂曉にふたりながらいひあはせつゝ、同じく起き出るに、ひとりは寒さを痛んで起くるにものうく、ひとりはさむさを事ともせず速に起く。其故をいかにと問ふに、禀賦の强弱によるにもあらず、そのすみやかに起る者は、上戸にて酒氣あればなり。是氣にて心のきれを助くるの左驗とすべし。しかるに、浩然の氣は義より生じて、其生じたる氣が又義を助くるこそ、いと奇妙に覺え侍る。前年韓文をよみて、其雜說の中に、神龍の事をいふにてしりぬ。龍は誠

張夫子、知禮をもて敎をたてゝ、知禮成性の說あり。されど、それは橫渠に限らざるべし。濂洛關閩の學は、すべて格物に本づきて知を致し、持敬によりて禮をはなれず。誠に孔門以來學者不易の法とすべし。

○浩然の氣

翁幼少にして手習せし時、世にもてはやす今川のふみをよみ習ひて、仁義禮智ひとつも闕けては、諸道成就しがたしといへるを、今におぼえ侍る。了俊さしたる學者とも聞えねども、此一言は、不思議にいひあてられし名言ともいふべし。さて、仁義禮智いづれも大切なる中に、仁に次ぎて義の大切なる事は、孟子浩然の氣にていよ〳〵著く侍る。浩然の氣は、至大至剛、天地の間に塞るといふにはあらずや。各考へて見給へ。斯くばかり盛大なる物が、いかなれば義より生ずるといふにやあらん。人は天地の正氣を得て、もと浩然たる物にて候へども、私欲ありて、心のきれをなづまする程に、其氣いつとなくちゞけて小さくなる事にて候。されば、浩然の氣は、心のきれより生ずる物と知るべし。しかるに、心にきれなき人のくせとして、世話に牛の一さんといふやうに

濂洛關閩の學―周茂叔及び二程子張橫渠朱晦庵の學、皆其の生地の名よりいふ

今川のふみ―所謂今川狀といふもの、今川了俊の家訓の壁書なりといふ

了俊―今川貞世、薙髮して了俊といふ文武の

頑鐵―鍛冶せぬあらき鐵
防閑―ふせぐもの
機括―ため直す具

とく、其生氣絶えぬれば、喬木も枯槁に同じ。それよりして心のきれも鈍くなりゆく程に、義もつひに失せはてぬるぞ悲しき。たとへば、刀にさびの生ずるがごとし。其はがね腐りぬれば、利刀も頑鐵に同じ。是仁亡ぶれば、義も一時にほろびて、我心あらぬ物になるぞかし。この故に、孔門の學、仁をもとむるを要として、仁をもとむるには私に勝つを本とす、されば顏子仁を問へるに、孔子、克已復禮をもて告給へり。禮は天理の節文人事の儀則とあれば、身を撿するの防閑にして、私に勝つの機括なり。一日私に勝ちて禮に復しなば、枯れたる木のふたゝび榮に向ふがごとく、さびにし刀の新に硎を出づるがごとく、天理流行して、本心の徳全かるべし。但顏子は、素より天理人欲の分において、判然として疑なきが故に、すぐに進修の目を問ひ給へり。其餘の學者は、念慮行事の上において、天理人欲の分を眞に不レ知しては、しひて私に勝たむとすとも、いと難かるべし。さる故に、孔門の教は、博文を約禮に先んじ、大學の法は、致知を誠意正心に先んず。是にて知りぬ、道は仁義にすぎずといへども、禮智をすてゝ仁義に至るの理なし。易にも、聖人の徳を論じて、「知崇禮卑」といへり。知崇は天なり。禮卑は地なり。いよ〳〵崇ければいよ〳〵卑し。これ成レ始成レ終の道なり。この故に横渠の

粛殺―前に註せり

含糊不斷―はき〲とせず決斷のにぶきこと

苟且因循―かりそめに事を處してぐづ〲すること

いふにはあらず。もし義の裁制なくば、心の生道を損じて、仁も亡びぬべし。翁かねて初學の人に申侍るは、義は心のきれなり。朱子も心之制事之宜と註し給へり。心の制は、心のきれなり。事之宜は事のきれめなり。事によき程にきれめあるは、すぐに心のきれになる物にて候。仁に心之德、愛之理とあるも、愛の理すぐに心の德にして、二つにあらず。それと同じ例なるべし。されば、日用行事のうへより、取與去就の間に至る迄、含糊不斷の心を持しては、いかでか道理に當るべき。此心にては、たとひ學問しても、苟且因循して、行に敏きことあたはねば、過を改むるに吝にして、善に遷る事速ならず。又なにをもて德にすゝむべきや。よりて、百行すべて心のきれあるを下地とするにあり。孔子も君子の行を論じ給ひて、「義以爲質」とはのたまはずや。又坤の六二を論じ給ひて、「敬以直内義以方外」と宣ひ、又聞達を論じ給ひて、質直にして好義とものたまへり。是をもて、義の簡要なる事をしるべし。たゞ人心の害をなし、仁義の仇となる物は、私欲にて侍る。私欲あるが故に、邪智に誘かれ、外物に引かれて、かの仁の情あり哀をしりてすなほなるものも、忽にひすかしくこはぐ〲しくなりぬれば、天理のかよひたえぐ〲しく、人欲日に熾なるぞかし。たとへば、木を蟲の蝕めるがご

心の毒に思ふ心

乾元—坤元に對す、天

の武にあらず。況や其餘の事は、なほもて知るべし。されば、忠孝も禮義も、文道も武道も、內より油然として潤ひわたりて發するにあらざれば、眞のものにあらず。是則、前にいひし人に情あり、物の哀をしるの心なり。すべてもろ〳〵の言行ともに、義理に當りてはこと〴〵く忍びざるの心より出でて、天德寺が淚をこぼすやうにだにあらば、是心德の全きなり。仁者といはんになにの疑かあるべき」

○義は心のきれ

座中ひとり、「仁は心の德にして、愛の理たる事は、くはしく命をきゝ訖りぬ。今承るごときは、仁は心の全德にて、四性を包ね侍るに、四性の中にひとり義ばかりを掲出して、仁に對して仁義と申し候は、義も仁にさし次ぎて大切なるものとみえて候。此序に、義字の意をも承りたくこそ候へ」といへば、翁、「人に仁義あるは、天に陰陽あるがごとし。この故に、易にも、「立天之道曰陰與陽、立人之道曰仁與義」といへり。されば、乾元は春に居て四時を統べずといふ事なけれども、秋の肅殺するにて、發生の功をなすにあらずや。人道もまたしかなり。仁の四者を包ぬるといふは、一向に自愛すると

名なり―名なれ

惻隱の心―他の不幸等に對して氣

梶原にもたまはらぬ生唼を、高綱に賜るにあらずや。されば、其甲斐もなく、此馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじきと、賴朝に暇乞して出でける、其志を察して見られよ。あはれならぬ事かは」とて、しば〳〵涙を拭ひつゝ、しばしありていひけるは、「又那須與市も、大勢の中より選ばれて、只一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乘入れて的にむかふに至る迄、源平兩家鳴をしづめて是を見物するに、もし射損じなば、みかたの名をりたるべし。馬上にて腹かき切つて海に入らむと覺悟したる心を、察してみられ候へ。武士の道程あはれなる物は候はず。某は每に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて鎗を取り候故、右の平家を聞く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙にたへざりし。しかるに、各にはあはれになかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊は、たゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにては賴もしからずこそ候へ」と、云ひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり、是天德寺が武邊は、涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲の事にて、手あらき道なれば、いはゞ仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞

天德寺―佐野了伯

へど、所詮内より生ぜねば眞の德にあらず、公の理にあらず。このゆゑに仁に心の德というて外に德をいはず、仁に愛の理というて外に理をいはず。そのいはざる所にふかき意ありとしるべし。其につきてひとつの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主天德寺、豪健の勇將なりしが、ある時、琵琶法師を招きて、平家を語らせて聞きけるに、いまだ語らぬ先に琵琶法師にいひけるは、「某はたゞあはれなる事をきゝたくこそあれ。其意得して語り候へ」といへば、法師、「心得候」とて、佐々木四郞高綱が宇治川の先陣を語りけるに、天德寺あはれがりて、雨雫と泣きける。さて「今一曲前の如くあはれなる事をきゝたし」といへば、那須與市宗高が扇の的を語りけるに、平家半より、天德寺また落淚數行に及べり。後日に家臣の輩に、「過し日の平家はいかゞきゝつる」といふに、家臣ども、「尤おもしろき事にて候。但我等どもひとつ意得ぬ事こそ候へ。前後二曲ともに、勇烈なる事にて、あはれなるかたはすこしも候はぬに、君には御感淚に咽ばれて候、是はいかゞの事にて候にや。今に不審なる事にいづれも申あひ候」といへば、天德寺おどろきて、「只今迄は各を賴もしく思ひ候ひしが、今の一言にてさて〱力をおとして候。先佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。賴朝、舍弟の蒲冠者にも賜らず、寵臣の

齒德—年高く德ある人

さやうの一通りの淺き事にてはあるまじく候。いかなれば慈悲の心一つが心の德となりて、義も禮も智も、仁なければうせほろぶるにやあらんと、工夫すべき事にて侍る。此ところを今少し承りたくこそ候へ」翁聞きて、「只今申さるゝ所すこしもちがひなく聞え侍る。されば日ごろ申したる外に、改めて申すべき事もなく候へども、猶更くはしく申し候はゞ、心の仁あるは、人の元氣あるが如し。人の元氣は脈にあらはれ、心の元氣は愛にあらはる。脈のかよひ絶ゆれば人死するごとく、愛の理ほろぶれば心死する程に、仁は心のいのちとも申すべし。夫心は活物なるにより、人に情あり、物の哀をしりて常にいきたる物ぞかし。よりて父母を見ては自然に親愛し、親愛せざるに忍びず。君長をみては自然に尊敬し、尊敬せざるに忍びず。齒德を見ては自然に遜讓し、遜讓せざるに忍びず。義を聞いては必ず感ずる事をしり、不義を聞いては必ず恥づる事をしる。もし情なく哀をしらずば、其心頑然として鬼畜木石の如く、痛さ痒さもしらずなりなん。何をもて自愛し、なにをもて恭敬せん。義を聞いて感ずる事なく、不義を聞いても恥づる事なかるべし。是をもていふに仁義禮智いづれも心の德にして、各その理わかるれども、其本源は仁に外ならず。人として不仁なれば、義も禮も智も、其さまあり其用ありとい

今の世に鉅儒と稱する人は、それにもあらず、道においてなにの見付けたる事もなく、自から高ぶる心より、むなしく大言を吐いて、たゞ人の上にたゝんとのみする程に、後は世にもてはやされて、自身にも聖賢のやうに思ひなすこそ、身の程をしらざるの甚しきなれ。たゞし是等の人は、論ずるにも足らざるべし」

鉅儒―大儒

○仁は心のいのち

ある時、例の人々とぶらひ來て講習しけるが、仁義の說に及べり。中にひとりいひけるは、「人は天地の心を得て心とす。天地は萬物を生ずるをもて心とする故に、それを得て心とすれば、人は人を愛するをもて心の德とすること勿論なり。よりて仁は心之德愛之理といへり。心の德とあれば、仁義禮智諸ともに、仁にもるゝ事なき程に、仁は四者を包みて、義も禮智も仁によりて立つなり。是は翁の講說にて、かねて承りし事にて侍る。但仁は人を愛する心にあらずや。それを衆善の長とする事、誰も知りたるやうに候へども、大かたは、人はたゞ慈悲を第一とするをもて、仁を衆善の長とするとばかり意得侍る。それは慈悲の重き事をいはゞ、しかいうてもやみなまし。今仁を心の德とするは、

身に應じたる志津を心ざして硎ぎし程に、終に正宗にはなりたり。翁此物がたりを聞きて、おもしろき事に思ひしが、其後さる酒もりの座にて、二人盃の先後をたがひに辭退しけるに、ひとりのわかき士、「御年にあやかり候やうに御盃を賜り候へ」といふに、其相手の人「われらが年もそことあまりちがひ候まじ、御あやかりありたき程の年にてもなく候」といふに、其時わかき士、「其事にて候。大きにちがひ候ては急にあやかり申すべき思ひよりもなく候。先少しの御年だかにあやかりまゐらせて、それより齡をかさねばやとこそねがひ候へ」といふにぞ、相手道理にまけて、盃をさしけり。彼老人の佛のねがひやうと、此わか士の年のねがひやうと同じ事なり。いづれも高遠に目をかけず、身の程をしりて、卑近なる所より漸々に至る意得なるべし。いへば當座のはかなき物がたりのやうなれども、よくおもへばまことに祕事は睫にてこそ侍れ。もとより學は聖人を目あてにする事にては侍れども、たゞ目ばかりたかあがりして身の程を省ずしては、道といよ〳〵遠くなりつゝ、一生自得する事なくしてやみなん。右の老人、わか士の覺悟には大きにおとりたるといふべし。古今高明の人の行過ぐるは、大かたこゝにあやまらるゝにて候。されど、それは虚見にてこそあれ、道に少し見付けたる所ありての事也。

にても正宗になりたる時に返し候へ」とありし程に、意得がたき事に覺えけれど、取りて家に歸りてしばく\砥ぎてみるに、志津に似たる鍔は見ゆれども、正宗とは見えず。かくて年ふる程に、右の主君もうせられしが、二代になりて、本阿彌右の刀を持參して、「御預けの刀、はたして正宗になりて候へ。今更先君御目利のつよきにいづれも驚きて候」といへば、家老ども其子細を問ひけるに、本阿彌「これは不思議にさる男の後生ばなしにて正宗になりて候。日ごろ某が家に心易く出入いたし候老人あり、常に念誦打して後生をねがひ候ひしが、ある時に來て、「我等此程は後生のねがひやうをかへ侍る。只今までの願ひやうこそ惡しく覺え候へ。このあら凡夫の身として、俄に佛にならんとねがへばとて、佛になられ候べきか。佛にならんとならば、先よき人にならむと願ふべし。よき人になりて後佛をねがはゞ、佛になるにたよりあるべしと語りしを承りて、是は尤なる事にこそ。彼刀もすぐに正宗の鍔にせんと砥ぐ程に、反て正宗にならざるにてあらん。それより近き志津にして見ばやと存じ候て、志津の鍔をこゝろざして砥ぎ候へば、やがて正宗に似より候程に、さてこそと存じ、いよく\心にいれてとぎあげ候へば、今はたしかに正宗になりて候」といひしとなり。正宗の鍔には目をつけずして、其刀の

を、かの高き御目にて御覽ありて、御料簡の上にて宣ひし事にもあらんかし。されば三河より起らせ給ひ、御威光日に盛なりしかども、いさゝか驕らせたまふ御心なく、常に御身の程を御考へ御働ありしかば、寸を得れば王の寸、尺を得れば王の尺にて、終に天下をしろしめしけり。されば右の五字七字の訣、なにはにつけて深き御心も有りなんと覺え侍る。たゞ假初の事とは思ふべからず」

○佛になるやう

座中ひとり、是を聞きて、「上を見ずして身の程をしるは、わがともがら道藝を學び候にも要訣たるべく候。身の程をしらず思ひあがりて高慢なる人の、成就したる事は承らず候。たゞ引きさげて身の程をかんがへて進修するにてあるべく候」といへば、翁は「よくも心づき給へり。なる程さにて侍る。其につきて物語こそ候へ。ある大藩の主に刃物の目利に長じたるありしが、或時無銘のふるき刀を見て、是は相州の正宗なりとて、本阿彌にみせられけるに、本阿彌うけがはず、「是は志津と見えて候。中々正宗にてはなく候」といへば、「いやとよ、正宗なるぞ、汝に預けおくなり。より〳〵研ぎて見よ。いつ

奉―衣食住の取まかなひ

かゞはせん。それも華麗を專にし、もの數奇を事とするは、何の用をなす事にやあらん、ほめられぬ事なり。古き人のかたりしは、大阪夏の御陣に將軍家惣陣を御巡見の時、本多佐渡守は澁帷子を著して冑ばかりにて御供せられしとなり。又加賀の家臣に、山崎長門守といひし名高き武功の者あり。後は祝髮して閑齋とぞいひし。翁其子孫なにがしとしば〳〵參會せしが、閑齋大阪在陣の時著せし物とて、紙子羽織に銃丸のあたりたるあとあるを、其家に藏めけり。是等にて其比軍裝の輕き事をしるべし。况や平日の衣服飮食家作等に華美をつくし、無用の事に金銀を費すこそ、なげかしき事なれ。古より太平の弊かくあるとはいひながら、これを改めずしては、風俗日に敗れ、國事も日に非なるべし。但其本源をいへば、私欲にひかれて、上に目をつけ、身の程を忘るゝより起る事なり。東照宮そこをかねて思しめして、斯くは仰ありけるならし。但この驕といふ病は、上下ともある事にて、わが一身の奉に限らず。古より戰國の時主將たる人、自ら驕りて力を恃み敵を慢るは、必ず國を失ひ身を滅す。その例和漢ともにあげて數ふべからず。永祿、天正のころにていはゞ、今川氏眞、武田勝賴にてしるべし。いづれも上にばかり目をつけて身の程にくらく、たゞ一旦の強きにほこる故に、まのあたり滅亡しける

をつけ身の程をしらず。それ故におのづから驕りたかぶりて、物ごとに華麗を事とする程に、家をもち崩し、不義のことも出來て、禍辱にも及ぶぞかし。むかし或諸侯の家老何某といひしもの、萬石以上の身にてありしが、其國にて登城の時、あかねの木綿羽織を著けるが、路次にて雨にあうてぬれける程に、玄關の扉にかけてほしけるを、其主君折しも鷹野がへりにこれを見て、「あかねは日にほせば色かはる物ぞ。取り入れさせよ」といはれけるとぞ。又同じころ、親藩の家にて物頭たりし者、黄金十兩にて著がへの鎧を威せしが、「今當家中にこれ程の金出して鎧威す人はあり難かるべし。武具は格別の物なればかくは結構にしつるなり。子孫わが此意をよく知りて忘るべからず」と一筆書いて、その鎧に添へて家にのこしけるとぞ。又同じ比、諸侯の中に、世に賢君と稱するありしに、其家老の子弟年わかなるが、蒔繪の印籠に大きなる珊瑚珠を緒締にして腰にさげたるを、其主君見とがめられ、他日に其人を前へよびて、「汝は印籠を好むと見えたり。此印籠は藥をよくもつなり。是をさげよ」とて、黑塗の印籠に木欒子を緒じめにして賜りけり。それより國の貴族皆恐れて、華麗を禁ぜしとなり。是等は皆六七十年以前の事ぞかし。いつの程に風俗かく驕奢にはなりぬるや。馬具武具は軍裝にかゝる物なればい

珊瑚珠—原本珊瑚樹とあり

邇言―淺近の言

芻蕘の言―草苅人の如き賤しき人の言

滄浪之水云々―離騷の句

藻にすむ虫の―「蜑のかる藻に住む虫の我からとれをこそなかめ世をば恨みじ」（古今集）

る事を覺え侍る。誠に祕事は睫にて、あまりちかきは反て見えぬものにて候故、我等どもの意得ぬにて侍るべし」翁、「その事にて候、孔子も舜の邇言を察し給ふにて、大知と稱し給へり。されば、芻蕘の言も聖人擇焉とも申すにて候。むかし孺子ありて、

滄浪之水淸兮可㆓以濯㆒我纓㆒滄浪之水濁兮可㆓以濯㆒我足㆒

と歌ひける。此歌の本意は定めて、聖人は不㆑凝㆓滯於物㆒、世と推遷るの意にて、かく歌ふにてもあらんかし。それを孔子きゝ給ひて、水すむ故に人纓を濯ひ、水濁る故に人足をあらふ。是纓をあらはるゝも足をあらはるゝも、水の自ら取る事なり。小子よくきけと宣へり。されば榮辱禍福みな藻にすむ虫の我から招くといふこと、此歌にて著く侍る。たゞ人をとがめずして、手前をつゝしむにしくはなかるべし。かり初の歌とて、あだにきくべき事に侍らず。翁わかゝりし時、京師にひとりの老儒ありしが、ふるき事をおぼえて語りしは、東照宮御在世の時、御近習の若き者に、「汝等身をたもつに簡要の語あり。五字にていふもあり、七字にていふもあり。いづれを聞きたきぞ」と仰せられしに、「いづれをも承りたし」と申せば、「五字にていはゞ、うへを見な。七字にていはゞ、身のほどをしれ。汝等是を常に忘るべからず」と上意ありしとなり。當世の人、大方は上に目

揖讓—舜の天子となれるは堯の讓を受けたる也

征伐—武王は殷を伐ちて天下を取れる也

こし薄きかたともいはん。それ故に韶は善つくし、武はいまだ善つくさぬなるべし。さればとて春も秋も天なり、天の徳に同異ありとはいふべからず。舜も武王も聖人なり、聖人の徳に同異ありとはいふべからず。唯其時の同じからぬ故としるべし。韶は花の陽和の時にあへるがごとし、聖人の幸なり。武は紅葉の風霜の時にあへるが如し、聖人の不幸なり。さればこそ程子も是を論じて、「所レ遇之時然爾」といへるにあらずや。此たとへほど始終よくかなひたる事は侍らず。各はいかゞ思ひ給へるや」といへば、座中の人人もろともに感じて、「日ごろ、韶の善つくし武のいまだ善つくさずといふ事、くはしく自得しがたかりつるに、けふ戯れに花もみぢの事をあらそひて、はからざるに久しき惑を解侍る。あり難くこそ侍れ」とて、各額をつきて謝し侍りぬ。

○祕事は睫

さて諸客いひけるは、「われ等書を讀みて憖に性命道德の說のみ沙汰し、其道理を世話に移して察し候はぬ故に、世話は別段なる事のやうにいと輕く意得候ひつるが、此程世の諺に申し傳へしはかなき事につきて御物がたりを承りて、いづれもふかき意味あ

されど其後代〻の歌人、春に心よする人もあまた出來て、「淺緑花もひとつにかすむ」など詠み、「秋は夕とたれかいひけん」などともあれば、吉野の雪、龍田の錦は、伯仲の間にあるべし。さはいへど、艶陽桃李の節に先だつべき時しなければ、紅葉はつひに花におとるべし。但此事は清豫閒暇のはかなき戯事に似たれば、いづれ優劣ありてもさてやみぬべし。今是をもて古の韶と武との樂を論ずるに、善喩と覺え侍る。昔孔子韶をば美盡せり善盡せりと宣ひ、武をば美つくせり未ㇾ盡ㇾ善とのたまふ。美は聲容の見事なるをいふ。善は美の實なりとあれば、美の出る所なり。たとへば韶は春の花なり、武は秋の紅葉なり。花紅葉ともにその見事さは更に優劣なきが如く、韶武ともにその聲容の盛なるにかはる事はなけれども、花は春の陽和より咲出づれば、其見事さの中におのづからのどかなる氣を含めり。紅葉は秋の風霜より染めなせば、其見事さの内におのづからすさまじき氣をふくめり。韶の樂は揖讓より出づる故に、其美の實優々として泰かなる方に勝れたり。いはゞ春の花の陽和の氣あるがごとし。武の樂は征伐より出る故に、其美の實慄々として嚴なるかたに勝れたり。いはゞ秋の紅葉の風霜の氣あるがごとし。いづれも聖作といひながら、韶はあくまで手厚く、武も薄きにはあらねども、韶に比すればす

「殺風景」の目ありて趣を害するものをあげたればいふ

山有木ー左傳に見えたる諺

大津の宮ー天智天皇

大職冠ー藤原鎌足

清豫ー俗事に遠ざかりて心静に暮すこと

韶ー舜の樂

武ー周武王の樂

今日こずは—古今集「今日こずはあすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」

いひくたす—惡くいふ

義山が云々—唐の李義山が雜纂に

それは翁がしる事にあらねば、今更沙汰に及ばず」

○春秋のあらそひ

ころは彌生の半にもありけむ、庭の櫻もやう〳〵さかりなるに、鶯さへ友をもとむる聲に打啼きて渡るめれば、今日こずはあすは雪とぞとひとりごちて、人待がほなる折しも、跫然たる音して、五六輩打ちつれて問來りぬ、主もともに花のもとに團居してなん、數獻におよびて、かたりくらしつる中に、ひとりの客人、「春の花ばかりめでたき物はあらじ。花紅葉といへど、紅葉は花なき時に見ればこそあれ、花にはおよびがたし」といへば、又ひとり、「紅葉もさのみいひくたすべからず。秋ぎりの晴間に、千林萬壑さながら錦をさらすごとくなるは、春の山も忘れつべし。今花にむかひてかくいふは、義山が殺風景の譏もあるべけれど、我は紅葉に心をよする」といふに、又ひとり、「山有レ木工則度レ之、賓有レ禮主則擇レ之」とあれば、所詮主の心にまかすべし」といふ。其時翁いざり出でて、「此あらそひは大津の宮の御宇に、大織冠に詔して其沙汰ありしとかや。それより秋に心よするは多し。大伴の黒主も、「錦をはれる秋はまされり」とかよみし。

活計—處世の方針

和歌は人の心を種として云々—古今和歌集の序の詞

人あるにや。されど、是は先王の遺澤いまだ竭きざる時の事なり。もろこしも漢より以後は、此俗ある事をたえてきかず。まいて我朝は、昔より釋教のみ世に行はれて、聖賢の敎ある事をきかねば、婦人の事は申すにやおよぶ、士太夫たる人も、たゞ名利の境にのみ一生をくらして、かりにも誠の事をしらぬ程に、一旦空と說き夢ととくをきゝては、いと高き事におもひつゝ、是をもて世を觀念して、身の活計とするのみなり。もとより五倫五常をさへ空と見るなれば、いかで一草一木にふかき理ある事を知らむ。されば松永氏があさがほを詠ずるの主意は、道をきかざる人のしるべき事にあらず。今翁が不レ忮不レ求をもて松にかはらぬ心とするは、子路の狐貉をきたる人をそねまずうらやまずして、狐貉も縕袍もふたつながら忘れたる心と一つ事と見れば、かくよむなり。かやうの事を詩にいふさへ、明朝の人は、儒者の頭巾をぬがずとて笑ふ事になんありける。いはむや和歌によめるをや。京師和歌の名家など、翁が此歌をきゝては、さこそ笑ひ給ふらめ。されど、詩は人情に發すとあれば、なにのいはざる事かあるべき。三百篇を見てしるべし。和歌は人の心を種として、よろづの言の葉となれりとあれば、何のよまざる事かあるべき。萬葉集を見てしるべし。もとより歌の風體詞の用捨はあるべきなれど、

し。いつかこゝに來て見もし見えもすべき、といひて、其跡に、

百爾君子不知德行不忮不求何用不臧

是は夫に告げやるやうにいふなり。早く歸り給へかし。相見まほしとおもふは、女のつたなき私の情なり。かねて、男子は德行こそ大切の事と承る。それに羇旅はよろづ艱難にて、おもひがけぬ事もあれば、日ごろの名節を損ぜられぬやうにとこそ思ひ侍れ。それは百の君子なべて御存知の事なれば、申すにおよばねども、女のおろかなる心におもふには、人はたゞ人をそねみにくまず、人に貪りもとめずして、手前をさへ正しく守らば、何所に在りても、何のよからざる事かあるべき、といふなり。かくいふ意をみるに、夫の德行に疵なく、身を全うして歸るを望むにぞありける。限なく殊勝の事なり。誠に情に發して禮義にとゞまるといふべし。其上、不忮不求といへるは、淺き事にはあらず。それをいかにといふに、人は人我あれば、必ず人を害ひ、利害あれば、必ず人にむさぼる。人我を忘れ、利害を離れずして、此味はしりがたし。されば、孔子も子路の敝れたる縕袍を衣て、狐貉を衣たるものと並び立ちて恥ぢざるを、此詩を引きてほめ給ひしぞかし。いかなればいにしへは、賤しき閭里の婦人にさへ、かやうの事をしりける

縕袍—どてら
狐貉—よきけごろも

なり、吹章を見よ

兎脣の嘯云々—此諺いぐち（缺脣）のうそ（嘯）も心慰みとして東海道名所記に見ゆ

毛詩—詩經の別名

詞をすてゝ意をとり給へかし」

○不レ忮不レ求

座中の人々、翁の歌めづらしとて、各たゝう紙に書きつけしに、中にひとりいふやう、「そこなはずむさぼらずといへるは、毛詩の詞にて侍る。いま朝がほにはちとあはぬ事のやうに覺え候はいかゞ」といへば、翁聞きて、「およそ人をそねむは、そこなふ心にあらずや。人をうらやむは、むさぼる心にあらずや。是は朝がほの己が天のまゝに、なに心もなくかつ咲きかつしぼめるを、人の心に移して見れば、松の千とせをそねまず、又うらやまず、たゞ己が上をつくすと見ゆるを、かくいひけるなり。さらば此序に、詩のこゝろを語り侍るべし。此詩は婦人の作れる詩なり。其夫役に行きて、久しく歸らぬ事をかなしみて、前に先わが思ひの切なる事をいひて、

瞻二彼日月一　悠々我思　道之云遠　曷云能來

一度別れしより、いく度か日もいに月もきぬ。されば日月の往來を見ても、これとともに悠々とながき我思ひあり。はるぐ＼路遠き所なれば、我夫の歸らむ期もはかりがた

絲毫の遺念―いさゝかの心のこり
修短―長短
そこなはずむさぼらず―毛詩の詞

外の事にはあらず。たゞ此道理を眞にしり實に行うて、魚の水を安んじ、鳥の林を樂しむ如く、常に道理をいのちとして、しばらくも離るゝ事なく、いきてある限は道にしたがひ、死すれば身も道もこれまでにて、ながくやすかるべし。一日いきては、一日の道を盡して死し、一月いきては、一月の道をつくして死し、一年いきては、一年の道を盡して死す。かくてはたとひ朝に道を聞いて其夕に死しても、絲毫の遺念なし。こゝをもておもん見るに、あさがほも一日の壽といへど、己が受得しまゝに殘なく十分にさきて、さて日かげを待得てきゆれば、何の恨かありなん。松の千とせと修短は大きにかはれども、いづれも天命をつくして自らあきたる事は、同じかるべし。これを松にかはらぬ心とはいふなり。松永氏も此心にならまほしきまゝに、朝がほによそへてかくは詠みけるならし。翁も其歌にならひて、

天地にうけしまことをそのまゝに咲きてはしぼむあさがほの花

あだなりと見てやはやまぬあさがほのさくもしぼむも花の誠を

そこなはずむさぼらぬをぞあさがほの松にかはらぬ心とはしる

まことに、世話にいふ兎脣の嘯も心慰にて侍る。各さぞをかしくおぼすらめ。たゞ

瞿曇が涎を引き、莊周が唾をなむる—瞿曇は佛、莊周は莊子なり。右にいふ如きは僅に此佛と莊子との餘說を傳ふるのみとの意

朝に道を聞いて云々—論語

頓悟—一旦にさとること

にてはなかるべし。各いかゞおもひ給へる。翁は、朝に道を聞いて夕に死するも可なりといへる意とこそ思ひ侍れ。朝に咲いて日かげを待ちてきゆるは、朝がほの天より受けたる性なり。世には千とせを經る松さへあるに、是程はかなき生を得て、いさゝか己を忘れ外を羨むの心なく、朝な朝ないと快く見事に咲きて、受得たる性分をつくして枯るるこそ、花の見する誠なれ。いかであだには見るべき。それは松も同じ事なれど、あさがほのはかなきにて、一入そのことわり著く見え侍る。されば松の心に千とせなく、あさがほの心に一日なし。たゞ各己が性分を盡すばかりなり。然るを松の千とせをさかえと見るも、あさがほの一日をはかなしと見るも、たゞ見る人の欲目なり。松と朝がほの心になにかあらん。およそ無情の物はかくの如し。人は有情なる故に、萬物の靈とはいへど、反て私智に妨げられて、いまだ道をきかざる時は、こゝに至る事を得ず。されば人は道をきくべき事なり。しかれども、道をきくといふは、佛者の頓悟などのやうに、別段の事とは意得べからず。道はもとより事物當然の理なり。匹夫匹婦も共に知り共に行ふところなり、たゞ眞にしらねば、實に行はず。それ故に習ひて察せず、行うて著しからず。身を終るまでこれによれども、遂に悟入する事なし。今道をきくといふは、

し知るとはいふなり。かくいへばとて、翁も未だこゝに至らねば、眞にしる人にあらず。鈴木某も、こゝに及ばぬ事を自らさとりて、希望の意にてこそ、身にしらばやとは詠みけるにぞ。

共にわづかのひまの意

○朝がほの花一時

此時松永某とて、鈴木氏が道學の友ありけり。その人朝顏の歌とてかたりしが、自らよめる歌にや、又は鈴木氏がよめるにや、とかく兩人の内にてあるべし。

あさがほの花一ときも千とせ經る松にかはらぬこゝろともがな

此歌も意味ふかきやうにおぼえ侍る。昔よりあさがほをよめる歌おほけれども、大かた朝がほのあだなることをいひて、秋のあはれをそへ、世のはかなきをしらするを趣向とする外は見えず。白居易が、「松樹千年終是朽、槿花一日自爲榮」といふ詩を、公任の朗詠にも取りて風雅とすれども、是もしひて榮枯をひとつにし、彭殤を齊しうする意にて、俗耳には高きやうにきこゆれども、いと淺き事になむありける。是等は瞿曇が涎を引き、莊周が唾をなむるに過ぐべからず。今松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それ

彭殤を齊しうする—長壽と短命とを同視する

霍去病―漢の平陽の人騎射をよくし、六度匈奴をうちて功あり、冠軍侯に封ぜらる

造次顚沛―

ばやとは詠むなり」といひしと、ある人の語りしに、翁其時は未だいとけなかりしかば、さやうの事に深く心づきなく、かさねて問ひきく事もなかりき。今おもへば、此歌身にししるといふ所に深き意あるべし。さきに翁がいひける外に、夢ならぬ理とてはなけれども、そのことわりを身にしらねば、眞に知りたるとはいひ難し。もし人ありて、此道の天よりいでて我にある事を身にし知りなば、其親切なる事前に似たる事にも有るべからず。譬へば、今まで由緒あるともしらで其人といひかよひたるに、我とのがれぬ事を知りては、日ごろの親しさは物かはと思はまし。霍去病が父と名のりあひて、始てその遺體たる事をしりし後は、其したしさ其ゆかしさ、前に百倍すべし。其人はもとの人なれども、別人のやうにこそ覺ゆらめ。旨酒のうまさは、下戸もしれども、上戸のしるは別の事なり。蒸餠のうまさは上戸もしれども、下戸のしるは別の事なり。儒者も此道の眞にして實なる味を、劉伶が酒の美をしり、何曾が餠の美をしる如く、朝夕に身にしりなば、何とて外物に移され、實理にまよふ事あるべき。起くるも是、居るも是、動くも是、靜なるも是、行住坐臥皆是なり。夷にも是、險にも是、生ずるも是、死するも是吉凶禍福皆是なり。造次にもこゝにおいてし、顚沛にもこゝにおいてす。是を道を身に

どむなしく靈覺なるこゝろあり。日本は推古より前、もろこしは後漢の明帝より前に、かくのごときの人なく、つひに斯くのごときの心なし。佛性ともせよ、本覺ともせよ、無用の妖物といふべし、しかるに倭唐土ともに、はや千年に餘りて尊きも卑きもこれに傾かぬはなし。あるひは君臣をすて父子を背きて、出家遁世する人も世にたえせず。それを見きく人、おしなべて眞の道に入りぬよとてうらやみぬ。いかなる心にやとあやしきまでにおもひ侍る。昔の賈誼にはあらねども、長太息しつべし」とて、翁しばらく默然たり。

○鈴木某が歌

さていひけるは、「むかし鈴木のなにがしといふ人なんありけるが、父は一向に釋教に歸依せしに、其子は儒を學びて、道の大意をも知りたる人と聞えし。其人のよめる歌に、

　夢の世とたがいひそめし夢ならぬ其ことわりを身にししらばや

それを同志の人に見せけるに、「其理をしれどもかくよみけるにや、但知らでかく詠みけるにや」と問ひければ、「知ればとて遽に知りたるとはいひがたし。よりて疑うてしら

孔子も―論語に「不義而富且貴、於レ我如二浮雲一」
瞽聾―めくらとつんぼ

往き忽に來り、圖らざるに榮え、はからざるに衰ふ。これ等は皆人欲よりいでて妄なるものなり。夢ともいふべく假ともいふべし。孔子も不義の富貴を見給ひては、浮雲のあるかなきかのやうにおもひ給ふとなり。しかるに釋氏三世の說世に行れしより、すべて此世を夢と見假と見て、眞と妄とをわかずして、三綱五常をはじめ悉く打破りて、是を棄つる事塵芥の如し。たとへば目ありて物を見、耳ありて物をきく故に、見る事にまよひ聞く事にまよふぞとて、終に目をつぶし耳をつぶして瞽聾となり、何事も見ずきかずして快しとするが如し。しらずや、心はもと天より受けて、衆理を具へ、萬事に應ずるにてこそ、その虛靈なる事を貴ぶなれ。今理と事とを二障として、三綱五常をさへすてゝ、わが心をあらぬものとなしなば、なにをか本來の心とすべき。定めてその神識の靈覺なる物をとらへて、本覺眞如とするにかあらん。たとへば心は火の光明なるが如し。火は物を照してこそ火とはいふべけれ。もし山海などにある龍燈、山燈などと世にいふ火のごとく、ものを照す事もなく、たゞすさまじく沈める光のみありて、人里遠く無用の地に自在に飛びありくを。神火とて尊ぶがごとし。されば佛法世に行はれてより後、五倫五常をはなれて、たゞむなしく動作する人あり。人事物理を具せずして、た

實有の相—實在のすがた

本覺—佛果を證見すること

果然の腹—「果然」は飽く貌。莊子に「三餐而反ル腹猶果然」とあり

にもせよ、佛性をさとり、本覺の地に至る人も多し。吉凶糾へる繩の如く、慶弔踵を門に接ふるを見れば、浮世の有樣すべて夢にて侍る。いかで是に心をとゞむべき。一向に夢と見破りてこそ道にも本づくべけれ」といふ。翁聞きて、なにがしの申さるゝ所、其いはれなきにもあらず。昔より高明の士の儒を逃れて佛に歸するは、其故にてこそ候へ。それにつきて、鄙しきものがたり侍る。いつの事にか、或人翁に語るは、「さる家に宴饗の設ありしに、其座はてゝ衆客もろ共にまかりしが、其中に一人、あまり酒食に飽滿してそのくるしさにたへがたきまゝに、うめき〳〵果然の腹を抱いて歸りしに、路にて乞兒の飢ゑて食をもとむるにあうて、あらうら山し、彼が身にならばなにかあるべきといひし」とぞ。いとをかしく侍る。今儒者世事にあき名利をいとひて、反て頭陀の教をしたはしくおもふは、此人の酒食に飽きて乞兒をうらやむに似たり。わが名教中に樂地ある事をしらざればなり。夫天下に眞と妄とあり。天理より出るは眞也、人欲より出るは妄なり。天地開きそめしより、三綱五常の道ありて、古も今もかはる事なし。されば天道の誠より出でて眞なる物なり。いかで是を夢となし假となさん。但世の人々、多くは富貴利達を謀り、毀譽得喪に拘りつゝ、一生東西に奔走して日夜經營する程に、忽に

葱嶺の教—葱嶺は釋迦の修行したる山、故に佛教をいふ

善惡の報輕重大小すこしもたがふ事あるべからず。昔よりもろこしやまと共に、世の英雄豪傑、多くは己が武勇智謀に誇りて、天の未だ定まらざるを見て、天道は人力をもて自由になるものと思ひつゝ、猛威を逞うし、詐力を恣にして、一旦は志を得るに似たりといへども、程なく天定まりぬれば、忽に天罰にあたりて、身失せ家滅ぶる事、古今歴々としてそのためしすくなからず。されば人として天に勝つは、禍のもとと知るべし。小人は眼前の利を見て、淺はかにこれを喜び、君子は未然の害を監て、ふかくこれを懼る。詩にいへらずや「畏二天之威一、于レ時保レ之」と。誠につねにおそれて保つべき事なり」

○夢のうき世

こゝにもと葱嶺の教を信ぜしが、近きころ翁にまなべる人あり。ある日の會に、かたへの人にむかひて、「某翁にまみえしより、儒道の尊きことをさとり侍る。されど釋氏にもすてがたき事侍る。今の儒者を見侍るに、多くは實有の相に泥みて、世事に拘り名利にわづらふ程に、一生道に所見なくて終り侍る。佛者は世を如夢如幻と見る故に、異端

恬然—恥ぢざる貌

の交互紛糾の間、金銀の出入たがひありても、大かたは知れ難き程に、小人は利欲にさときものなれば、それをよき機會と見て、色々智を廻しつゝ、ひそかに官財を私して、妻子をさかやかし、奢侈を極むれども、その跡見えぬ程は、恬然として自ら計を得たりとす。其内あらはれて罪に行はるゝもあれども、それは其人の才覺たらぬ故也と、反て己が智に自慢して、いさゝか懲戒むる心なし。されど才覺をもてする事の、いつかたがはぬことやある。一旦はからざるに其端見えて、糺問におよぶ時にこそ、分釐も勘定に漏るゝことなければ、智も計も施す事なく、その姦利忽にあらはれて、さきにしばらくのがるゝと見えしも、末の露もとの雫にて、彼も是も終には免るゝはなし。しかれば、國家の上にて見るに、大きなる所帶は、かくの如く事の實否俄には知れ難きぞかし。いはむや天は四海國土を偏覆し、幾億萬ともなき人を引受けて、いはゞ莫大の所帶なり。およそ人のする事、善となく惡となく限もなく入亂るれば、善惡の報いかでか急に極るべき。されば前後不同ありて、治定せぬ事のやうに見ゆる程に、小人の險を行うて幸をもとむる事も、怪しむに足らず。然るに天にも終には勘定の極まる時あり。是を天定まるといふなり。こゝに至りて天の聰明は、天下の名算の人といふとも及ぶまじければ、

一簞の食一瓢の飲—貧困にして飲食心に任せざること

贓吏—賄賂を収めて事を一二にする不正の吏

り。天定まりては人に勝たずといふ事なし。但天は悠久にて自然なる物なれば、人間の約束などの、急に其驗見ゆるには似べからず。然るを人ちひさき眼をもて、天道を窺ふ故に、たゞ目前見る所をもて、善惡の報なき事と見過しつゝ、君子は善をしても疑あり、小人は惡をしても恐れず。その善惡はかはれども、いづれも天定まりて人に勝つといふ事を知らねばなり。それ顏囘の夭、盜跖が壽は、天のいまだ定まらざるなり。其後天の定まるをみるに、顏囘は一簞の食一瓢の飲、陋巷に窮居せしかども、其名今に日月と倶に垂れて、千載朽ちずしてあり。盜跖は聚徒千人、天下に横行せしかども、身死して肉いまだ寒えざるに名先ほろびて、誰いひ出す者もなし。責て遺臭百世こそ、積惡のしるしともいはん。是をもて見給へ。天の顏囘に報ずる事果して薄しとせんか、盜跖に報ずる事果して厚しとせんか。その上顏囘、盜跖の如く善惡の報おそきは稀なり。其外世俗を見るに、善惡の報端的なるもあり、又しばらくおそきもあれども、其身に及ばぬはなし。近きころ國家贓吏多くして、前後罪にあたるが如し。はやくあらはるゝもあり、おそく知るゝもあり。又幸にして一生のがれて死後にしるゝもあり。いかゞして斯くはあるぞといへば、郡縣の租稅、金穀の出納、年を積みて限なく稠疊する故に、そ

愚頑—おろかにしてかたくなること

必ず臍を噬むぞかし。されば福善禍悪といふは、道理の前なる事なり。聖人の教も、君子の守も、道理の前にて極めて、其上吉凶禍福は天にまかする外はなき事なり。いはんや道は人の當然の事なれば、福を得んとて善をなし、禍をおそれて悪をなさぬといふにもあらず。この故に孔孟の人を教へ給ふを見るに、福善禍悪の沙汰に及ぶ事なし。商書にこそ、天道は福善禍淫とは見えたれ。是はもろ〳〵愚頑なる民に命じ給ふによりて、かくはありし事ならん。然れどもこれ道理の至極したる事なれば、釋氏の方便などやうの事と、同日の談にはあらざるべし。

○天人相勝

翁かさねていひけるは、「人衆勝天、天定勝人」是は伍子胥呉王闔閭を勸めて、楚國に攻入り、父兄の仇なればとて、舊君平王の墓をあばきて、尸を戮するを、伍子胥が舊友申包胥、平王の臣たりしが、あまりの事とて、人して伍子胥に斯くいはせける。古今の名言といふべし。天は必ず人にかち、邪は正に敵せず。然れども人衆くして勢盛なれば、人力をもてしばらく天に勝つ事もあれど、それは天の未だ定まらざる内の事な

黜罰—官をおとされ罰をうくること

不易—變ずることのなきこと

仕合にて不定なる事なり。聖人はたゞ正理を説給ふにて侍る。不定の事をばいかで説給ふべき。たとへば身に病なく、長命ならんとおもはゞ、常に酒色をいましめ、養生するにあり。主君の氣にあひ、立身せんとおもはゞ、職事を懈らずして、よく奉公するにあり。然るに、養生よくても夭死する人あり、養生あしくても長命なる人あり。さればとて養生しても益なし、養生せずしても害なしとはいふべきや。よく奉公しても、不幸にて立身せざる人あり、奉公よくせずしても、幸にて立身する人あり。さればとて、よく奉公しても益なし、奉公よくせずしても害なし、とはいふべからず。もし養生しても益なしといひて、日夜酒色を恣にせば、やがて病死に至るべし。奉公しても益なしといひて、たび／＼職事に懈らば、やがて黜罰せらるべし。しかれば、養生は長命を得るの道、奉公は立身を得るの道たるは、是不易の理といふべし。各よく考へて見給へ。なに事にてもあれ、かねて覺悟をさだめ給はんには、道理の前にて定まりたる方にきはめ給はんや。時のしあはせにて定まらぬかたに極め給はんや。道理の前にて定まりたる方にきはめ給ふにてあるべし。道理にて極めたる事は、たとひちがひても後悔なかるべし。しあはせをたのみては、覺悟も定まらぬものなり。それ故に、かねてのあらまし違ひぬれば、

師表―表は木を立てて晷を見るもの。師は弟子の望んで法をとるものなればこれに譬へていふ
左道―邪道
夭す―若死す

力にて武運を守らむとおもふ事、至つておろかなりといふべし。孔子も、「獲二罪於天一無レ所レ禱也」とこそ宣へれ。凡神にこび佛に諂うて、符章陀羅尼やうのことを信ずる、婦女などのするはいかゞせん、丈夫たる者の有るべき事にはあらず。然るに近世士大夫より上つかた民の師表たる人も、こゝに惑はざるはすくなし。されば左道の民間に行はれてはてしなきも、是誰が過ぞや」とて、翁毛詩の「瞻二烏爰止一于二誰之屋一」といふを打吟じて、慨嘆におよびしが、いかなる心にかありけん。

○善惡の報

しばらくありて、座中より翁にいひけるは、「武運の稽古と申す事、あたらしき事承りて感服し侍る。今より此稽古わすれ怠るまじきにて候。但世には仁にして信ある人に禍あるもあり、不仁不信なる人に福あるもあり。顏回は大賢なれども、貧窮にして夭し、盜跖は大盜なれども、富厚にして壽し、翁のいへる武運の稽古も、こゝに至りて少し疑はしうこそ候へ。是はいかゞ心得侍るべきにて候」翁、「それ善をすれば福あり惡をすれば禍あるは、是正理の前にて必定の事なり。それに幸あり不幸あるは、時の

冥助し冥々のうちたれ給ふ神佛のたすけ
よき計―原本其下に「と」字なし
三つ葉四つ葉に―幾棟となくつゞくさま
厭勝―まじなひ

にあらば、おのづから天心に叶ふべし。天心に叶はゞ、などか擁護なかるべき。さりとて、しばらく仁を行ひ假に信を守りて、其驗あるべきとにはあらず。是は平生にある事なり。常に仁を好みて人をそこなはず、常に信を篤うして人を欺かず。かくしつゝ歳月を積みなば、其誠天にこたへて、はからざるに自然の冥助もありなん。されば戰場にても、おのづから禍機に觸れず、矢石にもあたらざるべし。翁が武運の稽古といふは、是を申すにてこそ侍れ。老人の僻言と聞給ふべからず。たゞなげかしきは、世俗の有さまなり。專に身を利して人をそねみ、偏に智を恃みて詐を飾る。自らこれを世を渡るよき計とこそ思ふらめど、終には天に見捨てられぬべし。人として天に見捨てられなば、いかでかよき事のあるべき。翁わかき時より、世に時めく士大夫の邸宅を過ぎて見るに、三つ葉四つ葉に作りならべたるに、歳々に諸寺諸山より捧げすゝめける武運長久といふ牌を、門に釘せぬはなし。然るに其家或は刑戮せられ、或は子孫斷絶して、武運長久の牌は其まゝ門にありながら、主うせ家滅びて、跡方もなく成行くもあまた有るにて侍る。又それ程にこそ侍らね、身を辱しめ名をおとして、晩節を保たざるもいくばく人ぞ是等は皆武運の稽古なき故にこそとおしはからるれ。日ごろ稽古なくして、祈禱厭勝の

し稽古にて及ぶ事ならば、誰か稽古せざるべき」といへば、翁かしら打振りて、「いや武運に稽古こそ侍れ」。「さらば承らむ」といへば、翁「各思案して見給へ。運はいづくより出づる事にて侍る、天より出るにあらずや。されば世話にも運は天にありと申候。とかく運をば天に禱るより外はなかるべし。天の心に叶はんとならば、天の好める事は何事ぞ、惡める事は何事ぞと尋ぬべし。翁つら〳〵天の好惡を案じ見るに、天は仁をこのみて甚不仁を惡む。信を好みて甚不信を惡む。其いはれをいふに、天はたゞ萬物を生ずるを心とする故に、古より今に至るまで、年々人物を生じ〳〵てやむ事なし。秋冬肅殺の氣行はるゝといへど、果して肅殺するには非ず。生氣を固うして根へ歸せしめ、春を待ちえて又發生せんとなり。易に、「生々之謂レ易」といひ「天地之大德曰レ生」といへるは此事なり。天にありて物を生ずるは、人に在りては人を愛するなり。各是をもて見給はゞ、天の仁を好みて不仁をにくむといふ事疑なかるべし。又信を好む事をいはゞ、日月星辰の行度、萬古を經ても一日の如し。日月の食を見給へ。遙に大空の外なる事を、こゝもとにて推步するに、分秒迄もたがはず、是に過ぎたるたしかなる事あるべきや。天下の至信といふべし。然れば、人は外の事はしばらくさしおく、たゞ仁にして信にだ

「稽古」の字原本「藝古」に作る

肅殺の氣―ものをそこなひからす氣

日月の食―「食」は「蝕」に同じ

推步する―おしはかる

駿臺雜話　卷二

○武運の稽古

ある時、わかき人々、武藝の場より歸るさに翁が菴へ來て、例の文談に及べり。翁いふやう、「武藝は各の家業といふべければ、常に稽古あるべき事なり。但武藝と武運といづれか重き事とおもひ給へる。翁は武藝より武運は重き事とおもひ侍る。其故は、いかに武藝に達したる人なりとも、武運つきなば何の詮かあるべき。長湫の合戰に森武藏守は打物取つて鬼武藏といはれけれども、かけ出るとひとしく銃丸に中りて卽時に果てぬれば、武藝も武勇も用ふべきやうなく侍る。然れば武運ありての武藝ならずや。各武藝の稽古あらば、先武運の稽古し給へかし。さて武藝の稽古は、それ〳〵の師に問給はゞくはしかるべし。武運の稽古においては藝術の師の知る事にては侍らず。それは翁などこそ」と語りのこしけるに、座中ひとり、「翁の仰事には候へども、武運の稽古と申す事こそうけられ候はね。昔より人力の及ばぬ事なればこそ、武運とは申しつれ。ち

長湫の合戰―前に註す

衆善―多くのよき事
名聞―世のきこえ名譽
惡心―心地惡しくなること
老耄の瞽言―おいぼれの事情にくらきことば

君父につかうまつる道をもしらずは、禽獸に近かるべし。幸に聖人の教によりて、義理のあらましをもしり、禽獸に免がるゝは、これ聖人の大恩にあらずや。いかゞして忘るべき。およそ人として、常に此三を忘れずば、天理おのづからほろびずして、本心を失ふに至らざるべし。衆善のあつまる所ともいふべし。翁は常に此三を忘れずおもひ出でて、身にしむばかりに覺え侍る。家學の要訣とも申しつべし。今人家の子弟を見るに、多くは我身の樂をのみ思うて、君父の恩を思ひしる心なきよりして、言行に愼みなく、放逸に流れ侍る。又老子碩學と稱する人も、聖人の恩を身におもひしらざるが故に、自ら高ぶり、名聞を務めて、篤實なる方は露殘り侍らず。もしこの翁が家の要訣を授けて内省せしめば、陽浮の氣を降伏して、誠實にすゝむの媒ともなりぬべし。されど、彼が師といひ弟子といふ者、程朱親切の訓を聞きては、嘲笑うて頭痛すといふもあり。惡心すといふもありと、人の語りしが、翁が今いふ說をきかば、さこそ嘔吐もしぬべし。もし世に篤學の人しあらば、老耄の瞽言にあらざる事をしらんかし。

簡約—てみじか
通誼—古今に通じて守るべきみち
術業の師—一術一業を教ふる師
大端—發端

心懸けて忘れじとするは何事ぞといふに、釋氏は五戒を破らず、聲利に近づかざるをいひ、武士は武道に不覺をとらざるをいふにやあらん。それは簡約にて紛るゝことなく、心懸くるにやすかるべし。吾儒の道は百行を該ぬれば、何をか題目として心懸くべき。翁常に立居につけて思ひ出つゝ、忘れぬ事三あり。其三は、父の恩、君の恩、聖人の恩なり。欒共子が言に「先王之制、民生於三、事之如一。惟其所在、則致死焉。父生之、君養之、師教之」といへり。是欒共子が始ていひ出るにあらず、先王の大訓にして、古今の通誼なり。中に、師といふには同異あり。道德の師あり、術業の師あり。古人も、人師は得がたく、經師は得やすしといへば、まいて後世に至りては、道德の師は得がたく、大かた術業の師なれば、君父の恩に並ぶべきは稀なるべし。たゞ後世に教をたれて、我人依頼し、其恩深長なるは聖人なり。夫報本不忘恩は、人道の大端なり。されば、父母はわが出來し本なり。我を生じて我を育す、一毛一髮までも、父母の遺體にして、遺愛のある所にあらざるはなし。いかゞして忘るべき。さて君恩に浴して、不餓不寒、妻子を養ひ、親族を賑はす、すべて養生送死の道、世話にいふ箸一本迄も、君恩にあらざる事やある。いかゞして忘るべき。されど、飽まで食し、煖に衣て、

授けらる。貞治六年寂年七十八
比丘—僧侶
阿同す—おもねり雷同する
踐履—道をふみ行ふこと
圓悟—人名。僧

命を殞すとも、比丘の模範を失はじと、是第一の覺悟なりとぞ。寂室異端の徒ながら、いと殊勝なる事なり。儒家にこれ程の志操ある人をきかず。大方儒者の模範を失ひて、反つて釋氏に阿同し、彼が下風に立つ事をしらず。むかし尹和靖の踐履の嚴整なるをば僧も見て感じ、「儒家にいふ周孔も是に過じ」といひ、朱文公の高風を圓悟仰慕し、其梅花の詩を和して、「獨憐萬木飄零後、屹立風霜慘淡中」となむいひける。二賢は眞儒にて、異端を絕れしかども、彼さへ歸向せしぞかし。今世の儒者をみるに、武人俗吏にも貶議せらるれば、いかで人の敬信を得べきや。甚しきものは、戈を倒にして聖言を駁し程朱を譏る者も、近來世に多く出來侍る。儒敎の振はざるこそ理にて候、又近來武士の風の衰弱になるも、人々多くは武道に心懸薄きが所致にて候。北地にひとりのふるき武士ありしが、子弟に訓へて、汝等すでに兩刀を佩びて武士と名乘りぬる上は、朝夕武名をけがさじとおもふべし。こゝに一つの口傳あり。汝等門外に出る事あらば、家の閾を跨ぐ時に、必ず氣をつけて、再び家に歸らじと覺悟すべし。此覺悟なくば、外にて不慮のことあらん時に心おくれしなん、とぞいひし。寂室がいふ所と、道は替れども其意趣は同じ事なり。されぱいづれの道にも、心懸ふかき人は、かくなんありける。但其

ま

六經ー詩、書、易、春秋、禮、樂の六經書

釋寂室ー名は元光、佛燈大師に師事し、元應二年入唐、七年にして歸る。圓應禪師の號を

六經の教も良知にて、すむ事にしあらば、詩は思無邪にてすみ、毋不敬にてすみ、易は審變識時にてすみ、春秋は尊周抑夷にてすみなまし。何によりて詩に國風雅頌の情をいひ、禮に經禮曲禮の目をわかち、易に陰陽卦爻の變をつくし、春秋に朝聘會盟の事を備ふべきや。この故に六經の教は、天下にあらゆる事物の理を明かにするにあり。事物の理明かならざる事なければ、吾心の知つくさゞる事なし。わが心の知つくさゞる事なければ、是をもて身を撿するに、節文愼まざる事なし。然れば程朱のいふ所の致知力行は、則孔門の博文約禮にあらずして何ぞ。それに致知格物の説を義外とて譏るは、たゞ罪を程朱に得るのみにあらず、實に孔門の教に違ふなるべし」。

○釋寂室の祕訣

ある日講はてゝ、翁もの語りに、「昔足利家治世の季に、寂室といひける僧あり。わかきころ大明に渡海し、東歸の後、僧侶歸依せしが、其徒に語つていふは、吾に緊要の一訣あり。祕密の事なれども汝に付すべし。汝毎日晨に興きて、まづ手を引いて頭顱を摩で、又目をもて袈裟を顧て、心に念じ口にいふべし。吾はこれ釋迦文佛の法孫なり。たとひ

六藝—禮、樂、射、御、書、數、

崑吾の鐵—崑吾は山名、崑吾の劍西戎に出づ玉を切ること泥を切るが如しと列子に見えたり

荊山の璞—荊山は山名、和氏の璧を産したる地なり、璞はあらた

さにはあらず。およそ天下の道、なににてもわざより入らざるはなし。詩にいへらずや。天生二烝民一有レ物有レ則、物はわざなり、則は法なり。たとへば六藝を習ふが如し。其わざにより、其法によらずして、吾心の知にて其理をきはめんとせば、何として其道をつくすべきや。聖人の道もかくの如し。吾心に不レ學してしるの良知ありといふとも、事物に卽きてその知を致さずしては、未レ鍛のかねのごとし。崑吾の鐵といふとも、あらがねにては銳利の用をなさじ。未レ磨の玉のごとし。荊山の璞といふとも、あら玉にては、溫潤の色を發せじ。この理をよく思ふべし。今孝にていはゞ、聖人門人の孝を問ふに答へ給ふを見給へ。孟懿子には無レ違を宣ひ、孟武伯には愼レ疾をのたまひ、子游には不レ敬をいましめ給ひ、子夏には色難しを詠じ給ふ。此四子親を敬愛するの心あらざるとにはあらず。たゞ事レ親事レ長の上に付いて、或はこれに得て彼に得ず、又は愛勝つて敬たらず、敬勝つて愛たらざるゆゑに、かく宣ふにてありける。仁を問ふに答へ給ふも是に同じ。顏子には克己復禮を告給ひしが、克己復禮、必ず日用事物に卽いて其理を驗むる事なれば、視聽言動をもて宣へり。仲弓には敬恕を告給ひしが、敬恕も亦日用事物の上にて驗むる事なれば、出レ門使レ民をもて宣へり。其外も推してしるべし。もし

職事―職務とする事柄

親切―身に關係の深きこと

下の事に卽きて其理をきはめて、吾心の知を致すは内外を合するの道といふべし。しかるに陽明良知の學をする人、朱子格物の說を譏りて、朱學の格物よき事にもせよ、世の居レ官務レ職日夜給仕する人などは、何の暇ありて天下の理をきはむべきと難じけるよし聞き侍る。是朱子格物の說をあしく意得て、先一間時を得て事物の理を窮めて、後に其事をするとおもへるにかあらん。朱子の格物といふはさにはあらず。親に事ふる上にて、その事々に卽きて孝の理をきはめ、君に事ふる上にて、其事々に卽きて忠の理をきはめ、昨日情のいまだ至らざるを今日しり、今日事のいまだつくさゞるを明日しる。是格物致知の學也。居レ官任レ職がごときも、必ず其事をつとむる上にて當否を處し、事空を察し、日々に職事に熟し、誠實に進む。是則格物致知なり。もし居レ官任レ職ものは窮理のいとまなしといはゞ、嚮に翁が世事故に廢學するといふに同じかるべし。されば事に大小ありて理に大小なければ、時となく所となく格物の地にあらざるはなかるべし。さりぎらひすべきにあらず。よりて天下の物に卽きて其理をきはむとはいふなり。さりとて先後緩急の序はあるべき事なり。日用親切の事をすてゝ、一草一木の理をきはめよといふにはあらず、今良知の說手短く本づきやすきやうにきこゆれども、聖人の道は

後生―少年

をもて自修に對しぬれば、その學といふは、致知の事なり。子夏も、「仕而優則學」といへり。仕ふるも學に外ならねども、仕へていとまあれば學ぶとあれば、その學といふは、讀書の類なるべし。又子路、「何必讀書然後爲學」といへるを見れば、そのかみ孔門の學といふは、讀書を事とすると知られ侍る。しかいへど、學は讀書に限るべからず。書を讀みて義理を講じ、事物に卽きて其理を窮る、同じく致知の事にして、力行の始なり。もとより聖人の道は、日用事物を外にせねば、父母につかへ君につかうまつり、朋友に交るより、其外世にあらゆるもろ／＼の應接に至るまで、一事一物、いづれか致知の地にあらざる。一動一靜、いづれか力行の時にあらざる。善はその善なる理をきはめ、惡はその惡なる理をきはめなば、世事善惡ともに、皆わが學中の事なり、いかで世事にさへられて懈るといふ事あるべき。翁加賀にありし時、大坂よりひとりの後生北地に寓居するあり。翁に相見したきよし紹介していひこしけるが、他日翁が敝廬を問ひて談論時を移しけるに、翁、「近き頃は世事多くして、久しく廢學なんしける」といひしかば、其人「學は世事の外なる物にや」といひしに、翁意得て、其失言を謝しき。翁が意は讀書を廢する事なるを、ふと廢學といひたる故、彼聞咎めけるなり。されば天

夜ぶかきに」（壬生忠見）

比興―他の事物に托してうち興ずること

おふする―負はしむる

百篇の詩を歌ひしも、みなかくの如し。いと優しき事なり。その平手、後に信長をいさめかねて自殺しけり。その諫書を見るに、學問ありて義理のあらましをしる人とおしはからる。をしき事なり。古より忠臣義士の不幸ほど痛ましき事はなし」とて、長使英雄涙滿襟といふ句を口ずさびけるにぞ、座中の人々感じあへりき。

○諸道わざよりいる

ある時、講會やゝ懈りしに、日を經て諸客來會せしが、此ほどは世事にさへられて懈怠がちなりとて、悔みけるを、翁聞きて、「世事にさへられて懈怠するといふは、大かた學者の常語にて候。此翁をはじめ、さやうに申す事にて候へども、畢竟己が志のたゝぬ故にて候を、それとは意得ずして、世事に咎をおふするにて侍る。但世事にさへられて、書をよむに懈るは、さもあるべし。それは一說ある事なり。すべて學といふは、聖賢の道をつとめ習ふ事なり。そのつとめ習ふに、致知あり、力行あり。されど、其理をしらねば行はれず。其理をしるは書に限らねども、聖賢の書を第一とする程に、學といへば、致知を主とし、致知といへば讀書を主とす。この故に、大學に、自修も學なれども、學

春秋の世―周末六國對立の時代

淀のわたりの云々―拾遺集「何方に鳴きて行くらむ郭公よどのわたりのまだ

やとくらんとよせけるにて、かゝる事によそへても、こゝろ深く思ひ長く、言葉さへたりて、誠にたけき武夫の心をも和ぎぬらんとおほえ侍る。中務かしこくも思ひよりぬるにて候。翁はいかゞ思ひ給ふにや」翁打ちうなづきて、「昔春秋の世に、列國の士大夫宴會の時は、必ず三百篇の詩を歌ひて、互に志をあらはしけり。其後このこと世に絶えて、魏晉よりこのかた、たゞ自ら詩を賦するを事にし、巧拙を爭ふ事になりけるこそなげかしけれ。やまと歌もさにてこそ侍れ。むかしより歌を好む人をみるに、たゞよまんとのみするなるべし。必ずしも自らよまずとも、萬葉古今などの歌を、時にあたりて思ひよりて、打吟じたらむは、心もやすらかに、あはれも深かるへし。白河院、五月のころ淀に行幸の時、曉になる程に、子規ほのかに鳴きて過ぎければ、俊頼など一首詠ぜまほしく覺えしに、女房の舟中にて、「淀のわたりのまだ夜ふかきに」と打吟じたるは、中々あたらしくよみたるには、まさりて聞えけるよしいひ傳へ侍る。されど是は、ほとゝぎすの歌をほとゝぎすに思ひよりたるなり。作者の心はそれとはなきを、平手が袖ひぢての歌を引きしやうに、その意のかよふをとりて、外の事に引合せたらんは、すぐに比興のこゝろにもかなひて、ことに感情ありてきこえ侍る。周人の三

ある物から、歌にたけありて、餘情かぎりなきものなり。此外の歌も、古今集にのせしは、いづれも言葉すなほにて、なにの手もなきやうにて、打吟ずれば、その味おのづから深長にして、言外にあるやうに覺え侍る。詩にていはゞ、漢魏の樂府古詩の如し詩は盛唐といへど、漢魏の詩は、實情より發して、おのづから巧拙をはなれて見ゆ。更に同じものにあらず。古今集の歌もしかなり。その言葉すがた後の作者の及ぶべきことがらとは見えず。是をおもふに、さして撰者よみ人のとがにもあらず。文章は時と上下すとあれば、時代の盛衰につれてかくあるにこそ。いかゞ思ひ給へる」といへば、「翁の仰せられやうちがふまじく覺え侍る。歌人の論も大かたさにてこそ候へ。さて右の貫之が歌に付いて思ひ出したる事侍る。天文のころかとよ、織田備後守、一族彦五郎と不和になりて、爭戰に及びたるを、備後守が家老平手中務といひし者、一族の不和なるは、敵國の侮を受くるものなりとて、和睦の事を謀りしが、事とゝのひしかば、彦五郎が家老坂井、河尻などいふ者のもとへ、中務よろこびの文を遣すとて、其文のはしに、貫之が袖ひぢての歌をかきつけけるとぞ。親族のちなみは、袖ひぢて結びしやうになれ睦じきものの、不和なるは是氷れるにて、今又和睦してもとへかへるを、春たつけふの風

貫之—紀氏古今集の撰者

難かるべし。されば、元方の歌、詞のをかしきのみにもあらず、聖學のふかきにさへたとへつべし。常に打吟じて、我心の省とするに助なきにあらず」。

○袖ひぢての歌

座中ひとり和歌を好める人ありしが、「只今迄、元方の歌たれも口馴れたる事に候へども、人心善悪の機にして意得べき事とは思ひよる人なく候に、御物語にて始めて承りて候」といへば、翁、「古今集は外の集とちがひ、其歌いづれも誠實に候故、おのづから道理にかよはして見るべくこそ候へ。右の元方の歌にさし繼ぎて、貫之の自らよみたる袖ひぢての歌をのせしも、月令に、孟春のはじめに、「東風解レ凍」とあるにかなひて、心ありて見え侍る。其故は、春風の凍をとくこそ、陽和の至る最初のしるしにて侍れ。かの霞鶯などやうの事は、是程に的實には覺え侍らず。されど春風の凍をとくといふばかりにては、いかによみかなへたりとも、さまで餘情あるまじきに、去し歳の春過ぎての後より夏秋冬をへし事を、「袖ひぢて結びし水のこほれるを」と、一首の中に詠みこめて、さて「春たつけふの風やとくらむ」と、今又春にかへるこゝろにて結びし事、千鈞の重さ

ろ如くよそほひ話す譬
古今集—我國最初の勅撰歌集
祖父—在原業平
千里の謬も云々—禮記「君子愼レ始差若毫釐謬以二千里一」
濂溪先生—宋の大儒周敦頤の號

も手づよく力あるやうに覺え侍る。二十一代集をはじめ、家々の集にも、春の卷頭とするを見るに、大方は空の霞、谷の鶯など、春の景色をもて春たつ事をよめり。それは春の始をいふには、第二段に落つるなるべし。いまだ冬ふかく何のけしきも見えぬに、氣色をはなれてよまんは、なにをか言葉の種とせむ。いと難かるべきわざなるに、去年とやいはん今年とやいはんとは、なにの造作もなく、さりとは面白く取りなされたり。祖父にもはぢざる作者といふべし。されど翁が此歌を取侍るは、詞の面白きといふにもあらず、これをわが修行にたとふるに、我心に人しらず一念のきざすは、獨居の時暗處の事なれば、なにのけしきも見えず、いはゞ年の內に春の來るに同じ。一念の萠すところに、既に善惡のわかれあれば、年の內に去年と今年のわかるゝに同じ。されば千里の謬も毫釐の差よりおこるといふも、こゝにある事なり。濂溪先生の、幾は善惡といへるも此事なり。是非のさかひ善惡の關と知るべし。されば目をはなたず此關を守りて、われとわが心に善とやいはん惡とやいはんと尋ねつゝ、一筋に惡をさり善に向ふこそ、我儒の修行の本とする事なれ。もし此所に心ゆるして、色にいで聲にあらはれて始めてさとらば、たゞ手の延びたるといふばかりにもあらず。たとへ勉強すとも、力をもちふるに

無體の體—形なくして然も形あるに等しきこと

萬化の大柄—萬の變化のおほもと

不御の權—制御を加へずして自ら他を從はしむる權なり

見ぬ京物語—知らざることを知れ

まりて萬物の後に墮つる事なく、鬼神を制して鬼神に制せらるゝ事なし。無レ聲無レ臭して天下の大本となる、無體の體ともいふべし。無レ思無レ爲して、萬化の大柄となる、不御の權ともいふべし。老子の象二帝之先一といひ、釋氏の唯我獨尊といふも、此所をすこし見つくるにやあらぬ。されど彼は人倫をすて事物を外にし、たゞ空寂を事とすれば、人欲を制すといへど、天地を明かにするに足らず。一心を治むといへど、萬事を宰するにたらず。其體はありと見えて其用なし。なにをもて大本とし、なにをもて大柄とすべき。大に似て大に似ざる事なるべし。

○年内の立春

されば中庸にいはゆる、其不レ覩を戒愼み、其不レ聞を恐懼るとは、誠の本源、かの何事もおはしまさぬところを持養するの功夫にて、さて隱微の中、一念の起るを省察して、その本源の地を亂らぬやうにするこそ、又簡要にて侍る。これは中庸を講ぜし時にくはしく申したる事にて侍れば、今更いふに及ばず。それに、見ぬ京物語に似候へ共、倭歌の意に引合せて申候べし。古今集の巻頭にのする在原元方の歌、もとより歌のさま

不思議の一　原本「の」の字なし。今假に補ふ

いふ也。それに付きて、あやしき事ながら、加賀にありし時人の語りしは、北國にいやしき工の、飛驒山に行きて、杉を採りてへぎて生業とする者ありき。ある時山中に杉をへぎて居けるに、ひとりの山伏の鼻の隆きが來りしを見て、心に、不思議のものかな。天狗にや、と思ふに、汝はなにとて我を天狗とおもふぞといふ。はやく去れかしとおもふに、汝はなど我をいとひて去れかしとおもふぞといふ。何にても心におもへば、はやしりてとがむる程に、後は是非なく、そのへぎし板のながくはへたるを綰撓めて、繩して括らむとしけるに、心ならず取り外して板はねける程に、其板の末、天狗の鼻にしたたかに當りしかば、汝は心ねの知れぬものかな。恐し、とて行きさりぬるとぞ。板のはねけるは思慮より出でざる事なれば、こゝには天狗も及ばぬにこそ。是にてしるべし。念慮なき所は、鬼神も窺ひえざるになんありける。常人多くは、心に閑思雜慮常に絕ゆる事なく、何事も思慮作爲の中より出づる程に、氣にひかれ物にうばはれて、我といふ物自立する事あたはず。さればこの我を失はじとならば、心源存養の工夫をなすべし。心源存養の工夫は、私欲なきを本とす。この心私欲だになければ、靜虛動直とて、何事も思慮作爲をからず、たゞ靜虛の中より、道理のまゝに眞直に出づる程に、萬物の先に定

いろひ得ざる—干渉し得ざる

邵康節—宋の高士

○飛驒山の天狗

しばらくありて、翁、「鬼神の感應は氣の往來なり。わづか氣に涉れば、聲色に顯はるゝを待たずして、鬼神ははや疾にしるものにて侍る。こゝに寂然不動にして、毫末も氣をまじへず、鬼神もいろひ得ざる所あり。是わが本分のある所にて候へば、翁はこゝをさして、我と申したく候。謝靈運が詩に、達人貴自我といひしは、暗に申しあて候へども、その我といふもの、中々靈運ごときが知る事にてはなく候。天且不違、況於人乎、況於鬼神乎。とあるも、人はいふに及ばず、天地鬼神も我にたがひえざる事をいふなり。三代の聖人、この我をもて天下の上に立ちて、天下惟我のみあり、たれか我志に違ふ事あらむといへり。後世の賢人、この我をもて萬人の外に立ちて、千萬人の中といへども、たゞ我ある事を知るといへり。されば我といふもののあり所を尋ぬるに、一念未生の時、本然未發の體是なり。君子こゝを存養してそこなはねば、天地も我より位し、萬物も我より育し、鬼神も我より感應す。なに事か我によらぬ事あるべき。邵康節の、一念起る事なければ、鬼神もしる事なし。我によらずして誰にかよらんといへるは、これを

虚誕―うそいつはり

よ。あな恐とて逃げさりぬとぞ。彦左衛門は、手に覺のある時に、わが手共にきりて落さんと思ひつめけるを、狐さとりしなり。されば武士の心剛にして一筋に直なるさへ、其氣燄になき程に、狐も妖をなしえず。まいて正人君子においてをや。本より邪は正に敵せねば、正氣にあうては、氷の日にむかうて忽に消ゆるがごとし。西域の妖僧、傅毅を祈り殺すとて自から暴死し、武三思が妾、狄仁傑にあうて藝を施しえず畏縮せしにて知るべし。夫につきても、世に正人君子乏しき故に、邪氣おのがじし威福をなすこそ悲しけれ。しかのみならず、世擧りて宮觀の淫祠をあがめ、浮屠の邪法を信じて、あゆみをはこび、貨を費さざるはなし。もとより正體もなき事なれども、もののゆるみながらも、形あれば其なりに影あるやうに、深く信向する心から、不思議と見ゆることもあれば、いよ〱これに惑ひて、正理を失ふにてぞありける。ともある事には、こゝの神かしこの佛とて、漫に靈驗ありと稱しつつ、いろ〱虚誕なる事を造作して、世を誣ひ民を欺く程に、人群聚りて市をなし、錢財積んで山をなす。其人は國家の大賊、其事は天下の大弊といふべし。」

駿府—今の静岡

廻舞のやう—めぐりひろがへるさま

此祠を多年信仰して、祭奠聊か懈らざりしに、冥助なかりしこそ遺恨なれ。明日は必ず此祠を焚かんと思ひきはめていねたりし其夜の夢に、水神ふかく恐るゝけしきにて、汝わが罪をゆるさば、湖上にて樂を奏して、其恩を報ずべし。さればとてわれ祠をやかるるを恐るゝにあらず、又汝が怒氣のいきほひに恐るゝにもあらず。唯心のそこに必ず焚かんと決斷したる一念、我にこたへて敵しがたき程にかく謝する、といひけるとぞ。もとより齊東の野語、信ずるにたらぬ事なれども、神は決行におそるゝといふ事、道理ある事なり。もし此人怒の心ゆくまゝに、やかんと思ひながら、その氣燄にして、燒くともやかぬとも決せず、其氣進退せば、やがて神にけおされて、反て祟を受くべし。むかし駿府の御城に、うは狐といひ傳へし狐あり。人是に手巾をあたふれば、それをかぶりて舞ひしが、聲ばかりして形は見えず。たゞ手巾空に飜轉して廻舞のやうを見せし程に、人々興に入りけり。人手巾をあたふる時に、受取る形は見えねども、もたる手をものゝすりて通るやうに覺えて、其まゝ取りてゆきける。若き人々わざと渡さじとあらがふに、なにと堅く持ちても、とられぬといふ事なしと語るを、大久保彦左衛門聞きて、我はとられじとて、手巾をもちて、これとれといふに取得ず。さていふは、さても無分別の人

に書記すこと

是等はことにたしかなる事にて、其感いちじるしといふべし、然るに衰世に及びて、人心正しからねば、大かた邪氣の感のみにて、それより妖怪を生ずるなるべし。もとより怪力亂神は聖人の語り給はぬ事なれども、其理を窮むるは格物の一端なれば、諸君のために申侍るべし。左傳に、妖を魯の申繻が論じて、人之所ㇾ忌其氣燄以取ㇾ之妖由ㇾ人興也といへり。よく物理に通ずる言といふべし。燄は火の未ㇾ盛して進退するとあれば、人の氣にても斯くの如し。すべて人の忌みおそるゝ所は、世話に恐しき物の見たきといふやうに、さながら心に忘れえぬほどに、思想にひかれて火のかつ燒えかつ消ゆるやうに、あると見つなしと見つして、かくしてやまねば、氣うかれて我にもあらずなりぬる程に、邪氣隙に乘じて、幻に形象をさへ生じぬれば、さま〴〵に妖をなし怪をなすぞかし。齊侯の彭生を見、鄭人の伯有を見るの類是なり。すべて氣燄の所ㇾ致にて、正氣の感には絶えてなき事なり。唐宋小說の書に、洞庭湖の邊に水神の祠あり。大湖を渡る人は、是に水難をのがるゝやうに禱る事になんありける、ある賈人毎年大湖をわたる程に、その祠をふかく信じて、往來に必賽祀せしが、ある年湖上にて風に遇ひて船破れて、つひに溺死しけり。其子湖邊に到り、父の死を悲しみつゝ怨悔する餘りに、わが父

五行―木火土金水

燁煜―ひかりかゞやく貌

櫩楹―のきとたるき

榜表―立札

天地の功用二氣の良能といへば、勿論正理より出でたる事なれども、人の本性惡なくして、氣質におちては善惡あるごとく、神も人世に降つては、正しきあり正しからざるあり。其子細は、陰陽五行の氣の四時に流行するは、天地の正理にて、不正なけれども其氣兩間に游散紛擾して、いつとなく風寒暑濕をなすには、おのづから不正の氣もありて、人に感ずるにてしるべし。されば天地の間、この氣の往來にあらざるはなし。正氣をもて感ずれば、正氣應じ、邪氣をもて感ずれば、邪氣應ず。但正邪ともに二氣の感應より出づれば、邪氣の感とても神にあらずといふべからず。夫正氣の感は、大小となく精誠の所レ致にあらぬはなし。大事にていはゞ、高宗の良弼を感じ、周公の金縢を感じ、小事にていはゞ、鄒衍が六月の霜を感じ、韓愈が惡溪の鰐を感ずる、其事は異なれども、同じく精誠の感にして、怪むにたらず。前年眞西山の集を見侍るに、ある民家の女子、父の疾を憂へて、夜になれば天に向つて身をもて代らんと禱りしに、その誠感じてやありけん、一夜群鵲にはかに遶レ屋飛噪し程に、仰いで空中を眡れば、大星三ツ燁煜として月のごとく櫩楹の間を照しけるが、翌日より父の疾瘳えけり。西山郡守として、其事をまのあたり見聞せしまゝ、其閭を榜表して懿孝坊とし、記を作りて其事をくはしく著されける。

食—「蝕」に同じ

蠻貊—南蠻と北狄とをいふ、即ち夷の意なり

しるれば、反て其德の光もまさりぬべし。されば子貢も、君子の過は日月の食のごとし。過てるも人皆見、更むるも人皆仰ぐといへるぞかし。むかし小邾驛千乘の盟を信ぜずして、子路の匹夫の一言を信じ、回紇六軍の兵をおそれずして、郭子儀が單騎の約をおそる。是二子の誠かねて隣國にあらはれ、蠻貊に及ぶことを知るべし。千里の外應ずるにあらずや。もとより聖人の誠には及ばねども、心事明白にして一毫の疑なき事を、天下の人皆しる故に、一たび其言を聞き、一たび其面を見ると其まゝ信服する程に、なにの手もなくなにの造作もなし。是誠の感應にして、恩威智力の及ぶ所にあらず、是をもていふに、好事門を出でず、惡事千里を行くと世話にいへど、これ僻言なるべし。好事、惡事ともに、其實ある事のいづれか千里にゆかざる事あるべき。惡事のみに限るべからず」。

○妖は人より興る

座中ひとり「神は聰明正直なるものにて至誠の感應はさもあるべき事にて候。然るに、昔より妖怪不正の事ども世に流布し侍る。是もその理ある事にや」といふに、翁「鬼神は

錦を衣て――禮記「衣レ錦尚レ絅惡ニ其文之著一也」

なれば、千里の外應ず。況やその邇きものをや。室に居て言を出して不善なれば、千里の外違ふ。況やそのちかきものをや」と孔子ものたまへり。さりとて家にてする事の、忽に千里に及ぶといふにはあらず。たとへば風の草木に移るが如し。其響彌高にまさりゆく程に、家より國にひゞき、國より天下にひゞく、是自然の理にして、誠のおほふべからざる所なり。こゝをもて、君子は常に内に心をもちひつゝ、たゞ手前を正しくして外を飾る事なし。たとへば錦を衣てうはおほひするが如し。其美おほへどもおほふべからず、いやましに著きぞかし。小人は内行をさまらずして、外見をのみ飾れば臭きものに蓋するがごとし。其臭ふさげども塞ぐべからず、いとゞあらはるゝぞかし。枚乘が呉王を諫むる書に、「欲ニ人勿レ聞、莫レ若レ勿レ言、欲ニ人勿レ知、莫レ若レ勿レ爲」。此語淺きに似て味ふかし。名言といふべし。口にいうて人の聞かぬやうにし、身になして人の知らぬやうにとするは、いやしきたとへながら、惡に利息を添へて身に負ふが如し。日にそひ月にそひて、其負まさりなば、いかでおほひ隱すべき。聖人より以下は、君子も過なきにあらねども、これをかくさんとはせずして、人の見るまゝに改むる程に、過ちは過ちと見え、改むるは改むると見えて、其しかたにかくるゝ事なく、心に一點曇なきと

無爲—人爲を施さぬこと

○聖人の誠

翁又いふは、「前に申侍る西行が歌にて、舜の無爲にして治まるといふ事を思ひ給ふべし。聖人の誠は則神明なり。もし何事のおはしましては、無爲とはいふべからず。そも何事の何故とは知らねども、たゞその篤恭の至りなん神の如くにして、おのづからかたじけなさに涙こぼるゝばかりに覺えぬべし。それに衣裳をたれ手を拱いて、上に現在しておはしませば、天下仰ぎ奉る事日月の如く、慕ひ奉る事父母の如し。天地無形の神の感應時あるやうなる事にてはあるべからず。されば所レ過者化とて、聖人の身の歴たまふ所は變化をなして改まる事、物のかたに入るがごとし。舜歴山に耕したまへば、民皆畔を讓り、河濱に陶したまへば、器皆いしまあらざるといふにて知るべし。又所レ存者神とて、聖人の心のとまる所は自由を得て廻る事、ものの掌にあるが如し。孔子邦家をえてんには、綏ずれば其まゝ來り、動かせばそのまゝ和すといふにて知るべし。こゝに至りては、とかく凡慮の及ぶ事にあらず。これ聖人の手柄にて仕出したまへる不思議にもあらず。たゞ誠は覆はれぬものになんありける。されば「君子室に居て言を出して善

ろこと

舍—居所

は、其まゝ月のうつりて、たがひに光をますが如し。久しくなれば、一つ誠に渾融して、神と人とをわかず。たとへば水や空、空や水ひとつに通ひてすめるが如し。こゝに至りては、洋々乎として、其上に在るがごとく、其左右に在るが如くなるべし。是神のあらはるゝなり。誠のおほふべからざるなり。さりとて神を遠き事とな思ひ給ひそ。ただわが心にもとめ給へ。いかにといへば、心は神明の舍なり。一毫も私欲のさはりなければ、おのづから天地の神明と同氣相感じて、斯く著きぞかし。但相感ずる事なければ、さる事なかるべし。西行も神前に至らぬ時は、いかで涙こぼるゝばかりのかたじけなさあるべき。是をもて來格は相感ずるにありといふ事を知りぬ。今各に申す。たゞ躬に省み内に求めて、心の誠に本づき給はゞ、下學の功積んで上達せらるべし。其時にこそ只今翁が申すやう、いさゝかうける事にてなしと思ひ知り給はめ」とて、其談やみぬるに、座中良久しく聲もなく、靜まりかへりてありしが、「翁の御物語いとたふとくこそ侍れ。誠に西行が歌にこたへて、今日もかたじけなさに涙こぼれつべう侍る」とて、各感心にたへずぞ見えし。

聽—耳のさときこと

端的—其のまゝ

來格—いた

きかずしてありなん。目をもて視れば、目の及ばぬ所は、離婁が明といふとも見ずしてありなん。心ありて思慮すれば、穎悟の人といふとも、なほ猶豫ありぬべし。神は耳目をからず、思慮に渉らず、眞直に感じ眞直に應ず。是二つもなく三つもなきたゞ一ツの誠より得たる德と知るべし。されば天地の間に、きはめて耳敏く極めて目はやき物ありて、時をもわかず所さりせず、有のまゝに現在し、端的に往來し、あらゆる物の體となりて兩間に盈ちわたりてあれども、元より形もなく聲もなければ、人の見聞には及ばずして、たゞ誠あれば感じ、感ずれば應ず。誠なければ感ぜず、感ぜねば應ぜず。應ずれば忽ちあり、應ぜねばおのづからなし。これ天地の妙用にあらずや。中庸に視レ之而弗レ見聽レ之而弗レ聞體レ物而不レ可レ遺といへるは此事なり。昔西行法師伊勢の神祠に詣でてよめる歌に、

　なに事のおはしますをばしらねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

なに事のおはしますともしらずして、かたじけなさは何事によるや。涙は何故にこぼるるや。是誠の感動にあらずして何ぞ。神前にて其心他念なく一筋に誠になれば、神も其誠のなりに來格して、迭に感動する程に、涙もこぼれつべし。たとへば清くすめる水に

益をこふ—學びて益を得んことを乞ふ。教を乞ふなり
神妙—靈妙にして易く知るべからざること
覺悟—のみこみさとること

ある日講過ぎて後、五六輩跡に殘りゐて、おの〳〵疑問に及びしが、中にひとりいふは「こゝにひとつ問ひまゐらせたき事侍る。我朝は神國とて、ちかきころ世に神道を說く人あまたあれども、いづれも其說隱怪にして、正理を得たりとも覺え侍らず。もとより鬼神の說は、聖人も假初にはのたまはねば、我等ごとき薄識の人のにはかにさとるべき事にはあらねども、たゞ其片端を示し給はゞ、他日の功夫の種ともならまし」と、各同じ心に益をこへば、翁きゝて、先易を引きて、「聖人以神道設教」とあるは、聖人の道の神妙なるをさして神道といへり。仁道などいふが如し。是をひとつの道とするにあらず。然るに世に神道とて說くを聞くに、我國の道とて、聖人の道より一等たかき事のやうにいへるこそ心得難けれ。抑鬼神のふかき道理は、翁もしらぬ事にて侍れども、日ごろ覺悟し置けるあらましをかたり侍るべし。中庸に、鬼神之爲德といへるは、いかゞ心得給へる。朱子釋して性情功效といへるは、德字の義を釋してかくいへり。もし其德たる實をいはゞ、左傳に神は聰明正直にして壹なるものなりといへる、是則神の德なり。然るに、神は正直なるものといふ事は誰もしれども、聰明なる事をしらず。神ばかりすゝどきものはなし。其故は、人は耳をもてきけば、耳のおよばぬ所は、師曠が聰といふとも

長湫の戰―天正十二年豊臣秀吉と織田信雄との戰
池田勝入―池田信輝

かりし。是等の事誠に吾徒の師法とすべし。忠臣去レ國不レ潔二其名一といふも、忠厚の事なり。是は人臣たるもの君と義絶えて其國を去らんに、あながちに君の非をいふもあらねど、己があやまらぬ事をいうて、一分の上を潔うせんとすれば君の惡しきになるゆゑ、わが名をにごらし自らわが惡しきやうにしてをるとなり。是忠臣の心なり。翁加賀にありし時、ひとりの老人あり、其父太陽寺左平次といひし者。長湫の戰に池田勝入の手にて戰功あり。其後天下泰平になりて、大阪籠城の輩をさへ、御仁政にて諸侯の國に仕ふる事を御許しありし程に、戰功ありし士ども、己が手にあひし事をいひたてゝ仕をもとめしに、左平次一生己が長湫にての戰功をいはず。さて親しきものに、「大將の敗亡したるに、其手に屬したるもの、己が戰功をいふべきにあらず」といひしと語りし。己が戰功をいへば、惣勢の敗軍をば大將の越度にし、一分の言譯して退くにて侍る。左平次そこを思ふにこそ。古人忠厚の餘味あり、いとやさしき事なり。其戰功をいふは遙に劣り侍りぬべし。」

○鬼神の德

空谷の足音—極めてめづらしき意

兒の手がし—其葉表裏共に緣なるより「ふたおもて」の序としていひしなり

ずる書をみるに、忠厚の心言外に藹然たり。戰國反復の世には空谷の足音と申侍るべし。その書中に、君子交絕不ㇾ出二惡聲一忠臣去ㇾ國不ㇾ潔二其名一といへるは、三代の遺言なるべし。もし學問なくしては、誰か其言の旨き事をしらむ。今其意を解き侍るべし。交絕不ㇾ出二惡聲一とは、たとへば人と交通して、其人の惡事をいはぬは、もとよりの事なり。其人と中たがひては、己が是をいはんとて其人の非をいふべきに、交絕えて後に其人のあしき事を一向に言に出さぬは、君子の忠厚人に負かざるの心なり。翁其意を詠じ侍るとて、

ならはじな兒の手がしはのふたおもて身は葛の葉のうらみありとも

今更翁づれが申すも愚なれども、伊川先生に感服する事あり。蘇東坡伊川を嫉み惡みて、哲宗に上る奏狀に、程頤が姦と稱し、又衆中にて嘲りて、鏖糟陂裏の叔孫通などといひしが、伊川遂に東坡が是非を一言のたまひし事をきかず、是にて知べし。洛蜀の二黨いづれか正なるいづれか邪なる、いはずして明かなり。又邢恕初めは伊川に從ひて學びしが、後に小人に黨し、伊川を讒して涪陵に謫せしむ。門人聞いて伊川に告げしに、伊川宣ひけるは、故人かねて情厚し。われすこしも疑ふの心なしとて、いさゝか不平の辭色な

造作―つくりだす
橫渠先生―張載
郷愿―一郷の俗人の稱して謹厚の人とする者

渠先生も是をもて學者の要務とし給へばこそ、矯輕警惰の一語を擧げて示されしなれ。惰弱なれば義にいさむ志なく、つひに郷愿の人となる。剽輕なれば忠厚の人なく、はては讒佞の徒に陷るべし。こゝをもていへば、矯輕警惰の一語、學者の要務なるのみにあらず。しかしながらすべて士たる者の頂上の鐵針たるべし。

○忠厚のこゝろ

されば、士は第一忠厚の心を本とすべし。その人となり輕薄にしては、材の美ありといへど見るにたらず。それにつきて、翁日ごろ樂毅が傳をよみておもへらく、毅は戰國の士にあらず、學問ありて道のあらましをきくの人なり。しかるに後世毅が將略あるをしりて、學問あるをしらず。樂毅燕の昭王に仕へ、上將として齊を伐つて七十餘城を下せしは非常の大功なり。不幸にして師未だ凱旋せざりし先に昭王薨じ、惠王齊の反間を信じて將をかへ兵權を奪ひしかば、毅みづから垂成の大功をすてゝ、すみやかに燕をさる。見レ幾而作不レ俟レ終レ日といふにちかし。其後身を趙によせし時、趙王燕を伐たむ事を毅に謀りけるに、固辭して其謀に預らず。誠に忠臣の法とすべし。その惠王に報

蘇秦―春秋戰國時代の人。洛陽の辯士。六國の合縱を策して秦に當る

洛陽負郭の田―都の町はづれの田地

二頃―一頃は百畝

用レ意の勞をいかでしるべきなれば、たゞ道を容易なる事に心得る程に、はては先賢を慢り程朱を毀りてやみぬ。たとへば王孫公子、煖に育ちて艱苦を經ねば、おぼえず驕泰になるが如し。宋の武帝の高祖の葛燈籠麻蠅拂を見て罵つて田舍翁とするも、祖宗の大業を建立せし艱難をしらねば、更にとがむるに足らず。翁むかし史記蘇秦が傳を讀みて、秦が我をして洛陽負郭の田二頃あらしめば、豈能佩二六國相印一乎といふを見て、實にもしかりと思ひき。今洛陽の儒、大かた土著に安じて、隱居放言自から足れりとす。もし其人をして世務にあづかり、一官をつとめ、一職を辨ぜしめば、知らずよく其任に堪へんや否や。恐らくは洛陽二頃の田祟をなさば、懷レ居求レ安の人にひかれて、やがてかけ籠らまし。いかで是等の人と聖賢の志を論ずべき。東都の儒は又是に異なり。關東は風氣薄く土地濶し。それに武人俗吏其地に逼居て、其風おのづから儒者にも移れば、昔は文飾なく質直なるかたありて取るべかりしが、今は質直變じて麤惡となりぬる程に、放蕩輕薄德義を銷刻し、浮辭恠說文字を造作す。たとへば蘇秦が洛陽宿執の害はなけれど、世に游說するは縱橫捭闔傾危の道なるが如し。されば今天下の學者、惰弱ならねば剽輕なり。此二病除かざれば、高談二性命一博究二群書一とも、聖賢の徒といふべからず。横

譊々—さわがしきさま

洛陽—京都

剽輕—かるはずみ

ず。その議論を聞くに、不急の察、無用の辯譊々として人耳を喧しうせざるはなし。なにをか取擧げていひ出すべき言の葉にせん。たゞ太息に付してやみなまし。むかし扁鵲齊の桓公の疾を見て、二たび迄はなほいふ事ありしが、三度に及びては、もはや療治の手なかりし程に、藥匙をすてゝ驚き走りき。俗學の弊も、こゝに至りては、桓公の疾の日に深きが如し。儒に扁鵲ありとも、療治の手なかるべし。況や老學非才無智の身にて何とて道の輕重をなすにたらん。たゞ口を箝みて驚き走りつべうこそ覺え侍れ。」

○矯レ輕警レ惰

翁又いふやう、「當代東西兩都の儒を見るに、もとより人によりて一槪には論じがたけれども、多くは異論を好み、名譽を要するは同じ事にして、其病根は又異なるべし。大抵洛陽の儒は驕惰の弊あり、東都の儒は剽輕の弊あり。洛陽は風氣和し土地狹し。この故に近き比まで其土の宿儒おほくは溫厚柔謹にして、制行正しく、威重ありて人望を失はざりき。然るに近年溫柔變じて惰弱となり、威重變して驕泰となる。空談を尙び文史を玩び、是をもて自ら尊大にして曾て遜レ志時敏する事を知らず、されば良工

樞紐根柢—もの事の根本
方所—方角場所
底極—きはまるところ

天言はずして四時行はれ、百物生ず。是その樞紐根柢となるものありて、天地の太極柱となりて、四時も是より行はれ、百物も是より生ず。然るに車をかぞへて車なく、歳をかぞへて歳なければ、氣をはなれて理なし。外に形象もなく方所もなきほどに、たゞ道理とまでいふべし。よりて孔子は形よりして上下をもて器に對して道をいひ、朱子は形よりして先後をもて氣に對して理といふ。すべて同一理なり。今其本源をしらずして、枝葉の上にて議論を生ぜば、紛々異同なにの底極かあるべき。體用の説も亦しかり。道に用あれば、必ず體あり。寂然不動は體なり。感而遂通は用なり。靜にして存養すれば、體に卽いて用存し、動きて省察すれば、用に卽いて體行はる。是を體用一源顯微無間といふなり。孔子の敬以直內、義以方外とのたまひ、子思の中和をもて大本達道といひ、孟子の仁義をもて正位大道といふ、是またすべて同一理なり。體用をいはねども、いづれか體用にあらざる事ある。彼曲學の徒、僅々として得小自足とすれば、道に全體大用あるをしらぬも理ぞかし。深く論ずるにたらず。第三等には、放蕩を貴び、名撿をいとひ、專に文辭典籍を學とし、一たび程朱居敬窮理の説をきゝては、腐儒の常語とて、相ともに嘲笑ふ程に、學者修己の道においては、講ずべきものともせ

ても
疑難—うたがひ非難すること
臆決—よい加減にきめること

へて車なし、歳を數へて歳なし。譬へば車を數へて、是は輪なり、是は軸なり、是は軾なり、是は轅なり。輪をもて車とすべからず、軸をもて車とすべからず、軾、轅をもて車とすべからずとて、輪をすて軸をすて、軾をすて、轅をすてゝ見たれば、車も共になくなりにけり。唯車の理は、車の出來ぬ前に定まりてあればこそ、上代車のなかりし時、車をば作り出すらめ。今とても車匠車を作らんとては、輪を斲り軸を斲りて、何時によらず車を作り出すは、車の理常に滅びずしてある故に、それに基づきて作り出すにあらずや。是によりて見よ。車は輪軸より出づる歟、輪軸は車より出づる歟。車は輪軸より出づるといふは、車の形ある事を知りて、車の理ある事をしらざればなり。歳をもてたとへても同じかるべし。十二時を日とし、三十日を月とし、十二月を年とす。是は時なり、是は日なり、是は月なり、是は年なりとて、のけて見たれば、外に歳といふ物なし。然れども三百六旬有六日に、天と日と會して歳となるの理は、前に一定してありて、日月も約束の如く運ればこそ、それに本づきて、上代に暦をも作り出し、今も暦家に當代の暦を作るは勿論にて、只今なき日月を考へて、前百載後百載の暦を作るに、毫髮もたがひなきぞかし。是その理は日によらず月によらずして、常に存在するにあらずや。されば

規々としー規々としてか
蹈襲ーあとをふみ行ふ
踈鹵膚淺ーておち多くあさはか
擧正ーとりあげたゞすこと
流行しーゆきわたり
昭然ーあきらかなる貌
あなたにてもー支那に

せざる所を發すとて、殊に稱嘆せられけり。況や程朱の時、孔孟の世をさること遠し。言を選び論をおこし、道を明かにするに急なり。道理においてたがふ事なくば、何ぞ必ずしも規々とし古人の言を蹈襲すべき。今朱子の説孔孟宣はざるに出でなば、其意を深く考へ究むべし。もし未だ合はざる所あらば、しばらく疑を闕くとも可なり。然るを己が心にあはぬとて、孔孟のたまはざるに事よせて、にはかに大賢の説を輕々しく毀るこそ、其學識の淺陋なるもしられ侍れ。其議論を聞くに、いづれも踈鹵膚淺なる事になん有りける。こゝに一々擧正するにいとまあらず、たゞ其理氣の説をあらく辯じ侍るべし。彼がいふは、天地の間氣の外になにかあらん。この氣四時に流行し、萬物を生じて、おのづからやまず。是則天道なり。昭然として見えたる通りの事なり。然るを朱子一等上に形象なき物をたてゝ、氣に配して理とするは、隱怪にちかしとぞ。其説似たり。此疑は彼に限らず、あなたにても先儒の中に、是に類したる疑難ありしぞかし。それは朱子の言を深く考へて、なほ疑を免がれぬといふにてありける。かれが一過の見をもて、臆決するやうの事にはあらず。固より理氣前後の説は微妙なる事にて、一座の話にていひ盡し難し。翁暫く老子の語をかりて、譬をもてかたばかり申侍るべし。車を數

體用—心の本體と活用

毫髮—極めていさゝか

やめて是等の事を講ぜよといふにもあらず、又是等の理をのこらず究めねば事レ親べからずといふにもあらず。たゞ事レ親の上にて其事の當否をきはめ明にし、又は讀書の上にても聖人孝を論じ給ふにあはゞ、反復して其理趣を味ひ、其本末をきはむべし。もろもろの事是をもて例して知るべし。是則格物の學なり。斯くしつゝ久しうすれば、やうやく道理純熟して、後はわが愛レ親の心ひとつをもて親につかふるに、其道を盡さずといふ事なし。是程朱格物の學の妙處なり。かねて力をこゝに用ひる人にあらずば、其味をしるべからず。孟子の不レ學してしるは良知なりといへるは、人に孝弟の心學びずしてあり。是を本として學んで、其量をつくせとの事なり。不レ學してもそれにて足れりといふにはあらず。今朱學の弊を改んとて格物窮理を廢するは、朱子の言を知らざるのみにあらず、矯レ枉過レ直といふべし。それも亦まがれるなり。第二等には、理氣體用などの說、孔孟の言及ばざるといふに據つて朱子を議するあり。むかし孔子性相近しと宣ひしに、孟子に至りて性善を論じたまひ、其外養氣夜氣の論など、唐虞三代の書に沙汰もなく、もとより孔子も似たることをも宣はざりしかども、宋の諸先生其旨の聖人にもとらずして、毫髮の疑ふべきことなきを見つけられし程に、先聖のいまだ發

恒言不稱老云々――かりそめにも老といふことを言葉に出さず、又犬馬に對しても荒き聲を出さず

も、五味は物にあり。五味をなめずしては、五味の眞をしるべからず。況や五聲にも淸濁物每に異同あり。五色にも淺深物每に異同あり。五味にも厚薄物每に異同あり。其物にあらずしては、何によりて其別をしるべき。親を愛し兄を敬するは不レ學して知るといへど、事レ親事レ兄の事の上にて、愛敬の理を窮むべし。すべて君子百行皆しかなり。其事に卽きて、其理を窮めずして、己が善く知り惡しく知るものひとつにて知るべきにあらず。孝は百行の本といへば、しばらく事レ親の事にて申侍るべし。朝省昏定やうの事は、およそ事レ親の人誰か知らざるべきなれども、其さへ田舍農家の民などは、愛レ親の心なきにはあらねど、朝に省むべく昏に定むべき事とも知らざるぞかし。況や親を養ふは誰も養へども、口體を養ふと志を養ふの異同あり。親を敬ふは誰もうやまへども、嚴威儼格は事レ親の道にあらず。其外父母の前にては、恒言不レ稱レ老、叱咤の聲犬馬に及ばずといふの類に至るまで、すべて事レ親の事なり。もし其事に卽きて各其當然をきはめずして、わが愛レ親の心にもとむれば、おのづから事々つくすに足りぬといはゞ、聖人の上にはさもありなん、學者の及ぶべき所にあらず。おそらくは孝の道をつくさぬのみにてもなく、又心ならず不孝の事もありぬべし。かくいへばとて、事レ親を

五聲—宮、商、角、徵、羽
五色—青、黃、赤、白、黑
五味—辛、甘、鹹、酸、苦

ず、事物に卽きて良知を致すなり。たゞ陽明の說の如く、良知に求めて事物に求むべからずといはゞ、先王の敎、詩書禮樂といはずや。詩書禮樂、事物にあらずして何ぞ。孔門の敎、文行忠信といはずや。文に六經あり。行に百行あり。忠と不忠と、信と不信と、必ず事物によりて其理を知るべし。もしひとつの良知を致せば、おのづから敬して、禮を學ぶに及ばず、おのづから和して、樂を學ぶに及ばずといひ、又ひとつの良知を致せば、おのづから百行も修り、忠信にもすゝむといはゞ、それほど簡約にして手近き道あるを、聖人何とて示し給はず、かくむづかしく迂濶なる敎をたて給ふべき。且いへ良知を致すに、事物をもてせずして何をもて致すや。定めて內省を專にして私欲を去るをもて、良知を致すとするにやあらむ。それは、たとへば五聲を知るは耳にあり。耳を守れば、五聲をきかずして五聲をしるといひ、五色を知るは目にあり。目を守れば、五色を見ずして五色を知るといひ、五味を知るは口にあり。口を守れば五味をなめずして五味をしるといふが如し。知らずや、五聲を知るは耳にありといへども、五聲は物にあり。五聲を聞かずしては、五聲の眞をしるべからず。五色をしるは目にありといへども、五色は物にあり。五色を見ずしては、五色の眞をしるべからず。五味をしるは口にありといへど

藥匙—藥を調合するに用ふる匙

標的—めあて

ば此子あらじとなん思ひ侍りき。さて此事を今申出し侍るは、九十郎が斯くばかり歳にも似ずしてけなげなるを、世にきゝ傳ふる人もなくて果てなんは、あまり不便に候へば申す事にて侍る。其上今翁をはじめ、言論文字にて古人のまねをして、その實のあらはるゝ時に至りて、日ごろのあらましと違ひありなんは、是ぞ誠に童子の灸なるべし。多年學問して儒者といはるゝ身にて、かの童蒙無智の九十郎が覺悟にさへ劣るべき事かはいと恥しき心ならずや。諸君も常にこゝを察して、よく〳〵省み給ふべし。」

○扁鵲藥匙をすつ

他日の會に翁いふは、「過し日學術の邪正を論ぜしが、其論いまだ盡きざるやうに覺え侍る。今日其論を果し候べし。今世儒者、朱子を議するに三等あり。第一等は陽明良知の說を祖として朱子を議するあり、陽明は傑出の人なり。朱子の學を毀りて支離とするも少しいはれなきにもあらず。當時朱學の弊多くは文字言語に求めて、內省の工夫やゝ少きを見て、朱子格物の說を義外とする程に、良知を標的として、一向に內省につとめしむ。これ其意よからざるにはあらず。しかれども朱子格物の說、良知を外にするにあら

つとめて—早朝

謝詞をのべ、此程附居たる家人へも、それ〴〵に懇に暇乞して、さていひけるは、「面面へ名殘もをしく候へば、今宵はあくるまでも語りたく候へども、明日切腹の時ねぶたく候ては、いかゞと存じ候へば、先へふせり候べし。面々は是にてゆる〳〵と酒すゝめられ候へ」とて、奥へ入りて高鼾して寢ぬるを聞きて、跡に居たりし人々感じあひけるとぞ。又の日つとめてよき程におきいでて、沐浴し衣服あらためつゝ、用意心靜にし、其後切腹の席へいでて、檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬ。其有樣從容としてやすらかなりし。いかなる勇烈老功の士たりといふとも、是には過ぐまじきと見えしとて、其場に有合し人々、年を經て後迄も語り出して、涙おとさぬはなし。此事おこりし始に、翁彼が父のもとへ文やりて知らするとて、「九十郎たとひ切腹するに及びたりとも、此程のおとなしさにては、未練なる事あるまじ。それは心安くおもふべし」といひ遣しけるに、後にきけば、父そのふみを人にみせて、「かくはいひて來れども、童子に灸するに、前には人にすかされて思ひの外におとなしく見ゆれども、火を取つてむかへば、その際になりて俄に泣出して、前の言葉には似ぬ物ぞかし。わが子もいまだ年にたらねば、潔く切腹したるといふたよりを聞くまでは、心もとなく思ひ侍る」といひしとて、古人のいふ如く、此父なく

賊莽―漢の天下を奪へる王莽

後世の子雲―後世の我と等しき人、子雲は楊雄の字

東へ行役し〻る―江戸詰にて勤役せるなり

楊雄道徳を論じ大玄を著し、一代の儒といはれしかども、一旦賊莽に臣とし仕へて、節義を失ひしぞかし。たとひ莽が世に生れずして此事なくとも、是等の學問にては、もし孔孟にあうて節義の事をもて責められなば、必ずにげさけぬべし。然らば大玄五千文皆虚文にあらずや。後世の子雲ありて我を知らんといへど、後世莽が太夫ありて知音たらんかし。この故に、言論のみを聞きてその實迹を見ざれば、世話に畑水練といふ如く、仕方ばかりにては人信じがたきものなり。はや三十年前のことにて侍る、加賀の國に杉本の何がしとて、ひとりの微賤の士ありき。翁その人を久しく相知りしが、其子九十郎といふもの、十五歳の時、父は東へ行役しける其跡、年輩同じ程なる近隣の人の子と圍碁のうへにて口論しけるに、九十郎こらへず、刀を抜きて相手を一大刀きりしを、かたへの人取りさへけり。さて其事廳に達して後、相手の創療治さすべしとのことにて、其間九十郎は官長の家に預り置きしに、いさゝか臆したる氣しき露ほどもなく、言語振舞の落ちつきたるは中々年におはぬやうに見えける。日を經て相手終に創にて果てければ、九十郎も切腹するに議定しける程に、その前の夜、主人名殘ををしみつゝ、酒肴いろいろ用意してもてはやしけるに、九十郎母への文などしたゝめ置き、さて主人にくはしく

ろ—人がましき名
載籍—書物
林慙澗愧—宋の孔德璋が周顒といふ僞君子を謗りたる文句
晏嬰—晏平仲
程頤—程伊川

かりしより、心に聖賢を慕ひ、口に六經を誦し候へども、たゞ載籍のうへにて聖賢を窺ひて、少し其意を得たると申すばかりにて侍る。今も〳〵眞の聖賢にあひ奉りなば、日ごろしたひ奉りし心とちがひ、反つていみはゞかる事あるまじきや、心もとなくこそ候へ。すこしもいみはゞかる事ありなば、今申す事も皆僞になり、林慙澗愧盡くべからず。又なにをもて後世を待ち候べきや。むかし葉公龍を好みて、其形を畫がかせて日夜愛翫せしが、ある時眞の龍これを聞きて、ゑがける龍をさへさやうに愛翫あるに、わが行きたらむには、ことなるもてなしにもあひなんと思ひ、窓より顏をさし入れたれば、葉公大きにおそれてにげまどひけり。今東西兩都の儒者を見るに、多きなかには正學の志ある人もあるべけれども、大かたは自ら尊大にして師儒と稱しつゝ、我こそ聖賢の道を好むといへど、たゞ論說をつとめ、著述を衒ひ、是をもて世に傲り名を釣るには過ぎず。もとより道に實得の功なければ、もし眞の聖賢にあはゞ、目をかへして相見むとぞ覺え侍る。しからば日ごろ聖賢の道を好むといふは、葉公が龍を好むに同じかるべし。晏嬰が仲尼を毀り、蘇軾が程頤をにくむにて考へ見給へ。ひとりは齊の賢人、一人は宋の名臣にて候へども、それさへかくの如し、況や二子に及ばざるものをや。されば漢の

にさやうに心をつくす事の不用なるぞ」と上意ありしかば、老僧「御身は誰人なればかく心なき事をきこゆるものかな。よくおもうて見給へ。今此木どもつぎておきなば、後住の代に至りていづれも大きになりぬべし。然らば林も茂り寺も黒みなんと、我は寺の爲をおもうてする事なり。あながちに我一代に限るべき事かは」と言ひしをきこしめして、「老僧が申すこそ實にも理なれ」と御感ありけり。その程に御供の人々おひ〳〵來りつゝ御紋の御物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大きに恐れて奥へ逃入りしを、御めし出しありて、物など賜りけるとなん。今翁も此老僧が接木するごとく、老朽ちぬれども、ある限は舊學をきはめて、人にも傳へ書にものこして、後世に至りて正學の開くる端にもなり、此道のために萬一の助ともなりなば、翁死しても猶いけるが如し。古人のいはゆる死しても骨くちじといひしこそ、思ひあたり侍れ。いさゝか我身のために謀るにあらず、諸君も翁がこの意を信じ給へかし。

○葉公の龍

しかれども、かく申せば、翁が身ものに似たるやうにて、はづかしくこそ候へ。翁わか

實にも—原本「實も」とあり。

ものに似た

將軍家―「寛永のころ」と先にあれば、三代家光なるべし
みづはぐみつゝ―い屈まりて

がめるにやあらん、此志を守りて身を終へなんとこそ思ひ侍れ。愚公が山を移すの類なるべし。

○老僧が接木

されば是につけて思ひ出しし事あり。忍が岡のあなた谷中のさとに、何がしの院とてひとつの眞言寺あり。翁いとけなかりし頃、其住僧をしりてしば〱寺に行きつゝ、木の實ひろひなどして遊びしが、住僧かたへの人にむかひて前住の時の事をなん語りしをきゝ侍りしに、寛永のころの事になん、將軍家谷中わたり御鷹狩のありし時、徒歩にてこゝやかしこ御過ぎがてに御覽ましましけるが、此寺へもおもほえず渡御ありしに、折ふし其時の住僧はや八旬に及びて、庭に出でて、みづはぐみつゝ手づから接木して居けるが、御供の人々おくれ奉りて、お側に二人三人つき奉りしを、中々やんごとなき御事をば思ひよらねば、そのまゝ背き居たりしを、「房主なに事するぞ」と仰せられしを、老僧心にあやしと思ひて、いとはしたなく、「接木するよ」と御いらへ申せしかば、御笑ひありて、「老僧が年にて今接木したりとも、其木の大きになるまでの命も知れがたし。それ

國中屬而和者數千人、…其爲陽春白雪、國中屬而和者數十人…其曲彌高、其和彌寡

鴃舌—蠻音解すべからざるもの

禦寇—列子の字

むと思ふは、未練のことといふべし。諸君列子が書を見給へりや。愚公といひし人ありけるが、家居近く山のありしをいとひて、わきへ移さんとて、日々に子ども引き具し出でつゝ、手づから耒耜をとりて一簣づつ毀ちとりけるを、智叟といひし人是を見て、「かく大なる山を、わづかなる人の力にてこぼてばとてこぼちつくさるべきか」と、其愚さを笑ひければ、愚公きゝて、「わが代よりこぼちそめて、わが子の代にも繼ぎてこぼち、わが孫の代にも又其子の代にも繼ぎてこぼちなば、終にはわきへ移さぬ事やあるべき」といへば、いよ〳〵笑ひけるとなん記し置きけり。もとより寓言なれば、この人あるにはあらねども、愚公がいふやうなる事は世に愚なりといへば、愚公と名づけ、智叟がいふやうなる事は世に智なりといへば、智叟と名づけけるならし。およそ天下の事、愚公が心ならば、遲くも一度は成就すべし。然るに世に智ありと稱する程の人は、大かた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふ程に、なに事もその功を成就せぬなるべし。しかれば、世のいはゆる愚は反つて智なり。世のいはゆる智は反つて愚なり。それ故に禦寇が世を諷じてこそかくはいひつらめ。今翁も百年論定まるの日を身後に期し侍れば、世の明智なる人よりみては、翁が迂濶なることを笑はるべし。されど老いひ

て人を惑すものを罰する刑

大厦の一木　文中子「大厦将レ顚、非二一木所一レ支也」

宋人の章甫は冠、荘子「宋人資二章甫一而適二諸越一、越人断髪文身、無レ所レ用之」

郢客の　文選「客有下歌二於郢中一者上、其始曰二下里巴人一、

刑あるは、この爲にて侍るぞかし。かやうの中に、翁が道徳もなく材力にも拙き身をもて、是を支へむとするは、誠に大厦の一木ともいふべし。たとひ言ひて距ぎ、辯して闢くとも、誰か信ずべき。己が量をしらざるの譏も身にのがれがたく侍る。たとへば、程朱の説は先王の禮服なれども、宋人の章甫を越に賣るが如し。断髪の俗には用ふるところなし。程朱の説は天下の名曲なれども、郢客の陽春を楚に唱ふるに似たり。鴃舌の俗には和する人なし。詩にいはく、「知レ我ものは我こゝろ憂ありといふ。不レ知レ我者は我何をか求むといふ。悠々たる蒼天これ何人ぞや」此詩は周の大夫周室のおとろふるをかなしびて作れり。今翁が吾道の衰ふるをかなしむも、事はかはれども心はおなじかりぬべし。

○愚公が山

されども翁が心は、知己を一世にもとむるにも候はず。昔より邪僻妄誕にして根もなき事の盛に世に行はれて、あなかしがましく聞ゆるは、女郎花の一時とや申すべき。大方は續かぬものにこそ。世を歴て正道へかへらぬはなし。然るを心短くして早く其驗を見

記誦—よみそらんずること
四子—孔子曾子子思孟子
六經—易經書經詩經禮記樂經春秋
荀莊—荀子莊子
王李—明の王世貞、李于鱗
造言の刑—訛言を放ち

事もあるべきぞかし。今承るごときの說は、取りあげてなにと申すべき樣もなく侍る。たとへば喪心の人を相手にして是非を論ずるに似たり。その論ずる人もさきと同じ事と申すべし。然れども、翁ひそかに此說の起りを考ふるに、其人もと記誦の儒なり。記誦の儒は諸子百家を涉獵することをのみ好みて、四子六經に心をとゞむる事なし。たゞ其文辭訓詁を僉議して、理趣のふかきに及ばず。然るに日ごろわが學の義理にくらきをばしらず、飽まで己が博學を自負して虛譽を要する程に、世も亦是をもて推崇みて一代の儒宗とす。明季諸儒の風、大抵かくの如し。それに放蕩不遜にして、人に驕り物に傲るを高致とし、好みて大言を吐いて先賢を毀り、抗然として高く唐宋諸儒の上に出でんとす。然れども有識より是を見れば、學は遠く荀莊が餘毒に醉ひ、文は近く王李が浮華を拾ふに過ぎず。されば己が臆見にまかせて、道は天地に出でずとし、事物當然の理にあらずとす。己が曲學に合せて、道を文雅風流のものとし、己が俗情にこゝろみて、夫婦の外は五倫みな人の性にあらずとす。本より論ずるにもたらぬ事ながら、世俗多くこれを信じて、群をなし徒をなすにぞ、とかく世は奇怪を好む事となん今更思ひ當り侍る。たゞ人の心術を害し、世の名教を損ずるこそ返すぐ\もなげかしく候へ。周禮に造言の

ば也」

五倫—「父子有レ親、君臣有レ義、夫婦有レ別、長幼有レ序、朋友有レ信」

東坡—蘇軾、字は子瞻、宋の文豪

それにしたがひて辯說を費さんは、反て吾道を淺はかにするにて侍りなん。此頃の事にて候。ある儒者の說とて、耳を驚かす事をこそ承り候へ。「道は天地に出づるにあらず。聖人の作り給へる事なり」又いふ。「道は事物當然の理にあらず、文雅風流のものなり」又いふ。「五倫の內に夫婦のしたしみばかり天性なり。其外君をたふとび父母をうやまふの類は、人の性にあらず、聖人の作り出せる道なり。其作者聖人なる故に、古今に行はれて變ずる事なし」とぞ。古より邪說多しといへど、是ほど乖戾りぬる事は承らず。いへばいはるゝものに候」とて、互にいひあひて笑ひけるに、翁きいて、「諸賢は東坡が日喩の說を見給へりや。生れて盲ひたる人あり、日はいかやうなる物と思ひて、かたへの人にとへば、日はかく圓なりとて銅鑼を探らせけるに、銅鑼をたゝいて、さては日は聲ある物とおもへり。又かたへの人いふは、「日は光あり、燭の至る時には、おのづからあかるきやうに覺えぬべし。その如し」といふを聞きて、蠟燭をなでて、さては日は細く長きものと思へり。今の世俗道理にくらき人多し。たとひ書を讀みても、道理にくらければいふ人もきく人も、目こそあき候へ、心は盲ひたるにて侍る。さればその盲ひたる心をもていろ〳〵に思ひなぞらへ候はば、此人の日をはかるやうに、おほきに取たがへたる

の道二つなしといへば、其いはゆる古學は、德性の外にやあらむ。是等の說、何れも翁が疑をのがれぬ事にて侍る。然るに、仁義をかね、內外を合せ、古今に通ずるは、ただ程朱の學なり。されば大中至正の道にて、孔孟の正統たる事、なにの異論かあるべき。たゞ翁がふかく恐るゝ所は、程朱の學をするの輩、身をもて踐履をせずして、たゞ講論をのみ事とせば、其學は正しといふとも、道において何の得る事かあるべき。明朝にすでに其弊ありし故に、陽明も支離をもて朱學を譏りしぞかし。邪說の起るも是故にてこそ侍れ。もとより實行を忘れて空談をつとむるは、聖賢の戒むる事なれば、今更翁が事新しく申すにも及ばず。ふかく愼むべき事にこそ。」

○心のめしひ

座中又ひとりいふは、「翁の仰せらるゝごとく、吾黨の士は、相戒めて實行を力むるこそ、邪說を距ぐ上策と申すべく候。されば、孟子も楊墨を距ぎて、好辯の譏をば辭し給はねども、其要を論じて、君子は經に反るのみといふに歸せられ候。況や今僞學詭辯の徒、野邊におふる葛の如くはひひろごり、邪誕妖妄の說、林に落る木の葉の如くしげければ、

との道。即ち儒佛の二道

踐履—實地にふみ行ふこと

支離—統一なきことと譏りし。ぞかし—原本「し」を脫す

楊墨—楊子と墨子

好辯—孟子「我豈辯を好まんや己むを得ざれ

魯は孔子の生國、
濂洛—周茂叔程明道程伊川
藩籬—かきね、皮相
武藏房云々—蕃山の言
孔釋の道—孔子と釋迦

なし。今の儒者、多くは自ら高ぶる心ありて、濂洛の書を精しく讀む人まれなり。いまだ程朱の藩籬をも窺はずして、己が心を先だてて、にはかに大賢を議す。所見の是非は姑くさし置きぬ、先づ其學の輕薄浮淺なることそ、うたてしく覺え侍れ。さやうの人は孔孟の書をもくはしく讀むまじければ、孔孟の意をも得ざるべし。孔孟の意を得ずしては、いかで程朱の說に疑なかるべき。然るに程朱をば輕々しく議すれども、孔孟を議する事をばきかず。是は孔孟にも疑なきにはあらねども、孔孟は二千年來世に尊信す。それを議しては人のうけがはぬ事なり。程朱は世代ちかく、明朝に至りて或は譏る人もありける故に、是を譏るなりといはば、是毛遂がいはゆる因レ人成レ事なり。一定の所見ありとはいふべからず。もし又己が道德學術孔孟には企及ばねば其憚ありといはば、さては今程朱を譏るは、是己が賢ははるか程朱の上に立つとみづから許すなるべし。それはともあれ、神道とはいへど、其說を聞くに、我國に荷擔し、湯武叛逆の類といへば、其いはゆる神道は、仁義の外にあるにやあらむ。良知といへど、其說をきくに、佛性を明德と並べ稱し、武藏房辨慶を智仁勇の士といへば、其いはゆる良知は、是非の心にあらざるにやあらん。古學といへど、其說をきくに、大學を聖人の書にあらずとし。孔釋

神道を雜へてとく―山崎闇齋等の流
良知を主としてとく―中江藤樹熊澤蕃山の流
新義を造りてとく―伊藤仁齋等の流
一原―根元の單一なること
鄒魯―孔孟、鄒は孟子の生國、

○異說まち〳〵

ある日、翁が病を問ふとて人々來りしを、「翁も徒然にこそ侍れ。今日はしばし」といへば、「さらば侍坐つかうまつらん」とて、日をくらし語りあひし程に、當代異說の事に及べり。座中一人翁にむかひて、「たゞ今西京東都において、世に鳴つて人を率ゐる儒者の說を承り候に、或は我國の道とて神道を雜へてとくもあり、或は陽明が學とて、良知を主としてとくもあり、或は古の學とて、新義を造りてとくもあり、紛々異同の說まち〳〵なり。いづれを是とし何れを非とせん。翁の心においていかゞ思ひ給へるにや」翁聞いて「當代門戸をたてて異說を唱ふるもの、おほやう今申さるゝ三流ときこえ侍る。是等の說を立つる人々、さこそ所見あるにて侍るべし。もし翁が古に聞くところをもていはば、いづれもさには侍らず。それ道は天にいでて一原なるものなり。その一原のところをさへ悟りぬれば、わが國の道とて人の國にかはるべからず。良知の說とて窮理にはなるべからず。鄒魯の學とて濂洛にたがふべからず。然るに是を知るは聖賢の書にあり。聖賢の書は讀みやすからず。されば志を遂てくはしく讀まずしては、その意を得る事

眞假一如―眞も假も歸するところは同じもの
密旨―深く祕したるところ
雲泥の沙汰―非常のちがひ

の命を喪ふ外に神罰なき事を意得て誓ひしやうに、源空も土になるより外に地獄なき事を意得てこそ、かくは誓ひつらめ。今翁が誓はそれと異なり。上は皇天を戴き下は后土を履みて、天地にかけて誓ふ。誓もし誕ならば、天地の罰をかうぶるべし。されど我道の爲に誓ふは、源空も同じ心なり。是につけておもふに、釋氏の教は有を無にし、實を虛にするにあり。然るに無を有にせねば有を無にしがたく、虛を實にせねば實を虛にしがたし。されば極樂地獄の沙汰はもと虛なる事としれども、もとより眞假一如とみてこれを說く、往生の教をたてゝ衆生を導けば、賢愚をわかず思慮に渉らず、すべて念佛滅罪の中に歸してやみぬ。是釋迦如來の密旨なり。我朝にても諸宗の祖になる程の僧は、此旨を互に心をもて心に傳へて、假にも淨土地獄の沙汰を浮きたる事とはいはず。今源空が誓も、相傳の旨なるべし。九條殿の生るべき淨土もなく、源空が墮つべき地獄もなし。されば無をもて有とし、虛をもて實として、衆生に生死を出離さする法とするは、釋迦の本意にかなへり。それはいさゝか僞なきことなり。もし吾儒至誠をもて人を教化する道をいはゞ、雲泥の沙汰なるべし」。

勝手な暴論、猖狂はたけりくるふ意

源空—淨土宗の祖。法然上人建暦二年寂す

月輪殿—關白藤原兼實

誕ならば—作りごとならば

ならば、源空地獄に墮つべしといふ事なんありける」と語りし。彼宗門にては、さぞ慥なる事におもふべけれど、吾儒よりいへば、この誓ほど浮ける事はあらじ。いかにとなれば、もとより極樂といふ事なければ、又墮つべき地獄もなし。いくたび誓ひてもいと安かるべき業なり。前代いまだ殉死の制禁なかりし時、或諸侯の家殉死あまたありける中に、ひとり輿論のをしむ人にやありけん、其家の老臣みづから其宅へ行きて死をとゞめしに、中々許諾せざりしを、いろ〳〵にこしらへければ、其人やむ事を得ずして一諾しけり。「さらば誓ひてよ」といへば、いと快く誓ふ。さては心安しとて歸りぬ。さて其翌日にか、殉死の面々亡君の菩提所へと相約して寺に聚りしに、日ごろ知舊名殘ををしみつゝまうで來にけり。かの老臣も行きて上座しけるに、昨日ちかひし人、いちはやく來て諸客に暇乞しけるを、老臣うちみて「某をこそ欺き給ふとも。いかで誓をば背き給ふべき。口惜しきわざかな」といへば、其人笑ひて、「御うへを欺き候事は御許し候へ。昨日ちかひ申さず候へば、とかく御のがしなく候故、御疑を散ずる爲にこそ誓ひ候へ。誓を背きて神罰を得候とても、死ぬるより外の事はあるまじく候。されば死をきはめたる身にて候へば、もとより誓を背く覺悟にて誓ひ候」といへば、老臣言葉なくしてやみぬ。此人

するをいふ
鷃の鵬を笑ひ云々—莊子及び漢書に出づ、つまらぬ者のすぐれたる者を笑ひ小人の心を以て君子をはかるに譬ふ
井に坐して云々—原道に見ゆ己が小見識を以て聖人の道を小なりとするをいふ
俑作る—惡例を殘す
猖狂の論—

徒其說の新奇なるを喜びて、雷同瓦鳴する事、あげて數ふべからず。國家百年以來太平久しく、文化日に開けて、師儒世に輩出しけり。其學の是非はしらず、たゞ程朱を堅く崇信して ふるき模範を失はざりしをぞひとつの幸とせしに、ちかき比俑作る人ありて始て一家をたて、徒弟をあつめしより、老姦の儒いでて、其上に立ん事を欲し、猖狂の論を肆にして忌憚る事なし。一犬虛を吠ゆれば群犬これを和する習なれば、邪說橫議世に盛なるこそ理にて侍れ。誠に此道の厄運ともいふべし。されば韓愈も、佛老盛に行れし時に生れて、獨是を排斥して、みづから孟軻に比せしが、その孟簡に與ふる書をみるに、天地鬼神臨之在上質之在傍とは誓ひしぞかし。今翁が誓も孟子の功にこそ及ばずとも、韓愈が心にはおとり侍るまじ。あなかしこかり初の空言とおぼすべからず。

○釋源空がちかひ

むかし源空上人九條の月輪殿へつかはせし一枚起請とて、今に新黑谷に殘りてあり。其誓書を翁は見侍らねども、そのかみ人に尋ねしに、「念佛申して極樂に生るゝといふ事誕

の古くさき學問

聽を改むる—容を改めて聞く

道學—程朱の學

綜核—すべ明にすること

王陽明—明の大儒。名は守仁、字は伯安、嘉靖七年安南に卒す。年五十七

陽儒陰佛—表面は儒學を唱へ裏面は佛法に歸

見ありて申す事にて侍る、もし實見なくしてさもなき事を申すならば、翁が身忽天地の罰を蒙るべし」と誓ひけるにぞ、座中も聽を改むる氣色也。其時翁いふは「是は五百年來論定りたる事なり。今更翁が誓を待つべきにもあらず。朱子以後宋には眞西山、魏鶴山、元には許魯齋、吳草廬、明には薛敬軒、胡敬齋の諸賢を始め、其外道學に志ある人、程朱を尊信せざるはなし。一代の碩學たる事宋潛溪が如く、百家を綜核する事楊升菴が如き、文字論說の末においては程朱を議すといへども、學術道德においては間然する事をきかず。されば明の中葉までは、おほやう世の學術も正しく、名教も頽れざりしぞかし。王陽明出でて良知の學を唱へ朱子を排せしより、明の學風大に變じぬ。陽明既に沒して其徒王龍溪がごとき、つひに禪學となる。それより世の學者良知に沈醉し、窮理に欠伸し。其弊嘉靖、萬曆の間に至りて、天下の學者陽儒陰佛の徒となりてやみぬ。諸賢よく思ひて見給へ。西山以下の諸賢、假令汗下なりとも、所好に阿るには至らじ。又其德行材識、何れも明季竝に今の儒者の下にあるべきに非ず。それに程朱萬分の一にも及ばぬ學識をもて、輕しくなにくれと譏議するは、鷃の鵬を笑ひ蠡にて海を測るに似たり。韓愈がいはゆる、井に坐して天を觀て天を小なりといふの類なり。然るに輕薄無識の

俗儒に習つて云々—朱子の大學の序に「自レ是以來、俗儒記誦詞章之習、其功倍ニ於小學一、而無レ用」

老學—老人

世にあるこそいと本意なき事なれ。されど翁を信じてこゝに問來る人々に、日ごろ自得したる事を語りきかせて、後學のたよりともならば、それこそ責めてながらふる甲斐もあるべしと思ふにぞ、病をつとめ痛を忍んで、たえず書を講ずるにてぞありける。ある日講はてゝ、宋儒以來學術の異同におよぶ。座中に程朱の學に疑を貽す人ありしに、翁のいふやう「某も若かりしとき俗儒に習つて、記誦詞章を學びて多くの年月を曠うせしが、或時忽往日の非を悟つて、始て古人己が爲にするの學に志ありしかども、不幸にして良師友もなかりしかば、諸儒紛紛の說に眩惑して、程朱をも半信じ半疑ひつゝ定見なかりし程に、とかくして又むなしく歲月を經にけり。年四十に近き頃にもあらん、ふかく程朱の學終に易ふべからざる事をさとりて、それより日夜程朱の書をよみて、心を潛め思を覃うすること今に三十年、仰げばいよ／＼高く、きればいよ／＼堅く、高遠に過ぎず卑近におちず、聖人復出づとも必ず其言に從はん事疑なし。されば天地の道は堯舜の道なり。堯舜の道は孔孟の道なり。孔孟の道は程朱の道なり。程朱の道を捨てゝ孔孟の道に至るべからず、孔孟の道をすてゝ堯舜の道に至るべからず。堯舜の道をすてゝ天地の道に至るべからず。老學もとより信ずるに足らぬ事には侍れども。是ばかりは實

駿臺雜話

室鳩巣 著

卷一

○老學自叙

つらつら身の過來し昔を思ふに、もとは武藏の產にてなんありける。そのかみ初て髮を結びて、詩書を事としてよりこのかた、あるは檄を捧げて藩邸に游事し、あるは笈を負ひて京師に旅食す。其後北地に家居せしかば、常に舊學を修め、素願を償つて、一生を終る事をなんはかりにき。然るに往年、はからざるに大家の徵を辱うして、ふたたび故鄕に歸り住せしが、身老い材腐ちて、やがて丘に首する死を待つ程になんなれりける。されば多くの歲月を經て、今犬馬のよはひ七十にあまる四の年まで、學を好み道に志すといへども、人の師表となるべき道德もなく、又外になにの材能もなくして、むなしく

丘に首する—禮記「禮は其本を忘れず古の人言あり曰く狐死して正しく丘に首するは仁也」

作るなるべし。すべて此類は假名をもて其詞をしるしおきてもよかるべし。されど畠山梶原などいふ氏族をしるすには、假名をもちひ難し。誤りながら眞名をもちひても、咎なかるべし。

雜話の中に引用ふる古語古文もしくは事實頗多し。そのかみ客に對しては、あらまし覺えしまゝに語りし程に、すこしづつたがひ、又は首尾せぬ事もあれば、後に本書を考へしるし置きぬ。されど今老耄して、精神も乏しければ、その出處を忘れて、急に考へあたらぬをば、必ずしもしひて考索せず。もし善讀者あらば、たゞ大意のある所をとらんかし。其餘は論ずるにたらず。

君父の義絶を勘當といひ、山林の鬼魅を天狗といふ。是等の類なほ多し。甚無レ謂といへども、久しく世にいひ來る詞なれば、今改むるに及ばず。又字を誤りもちふるあり。號令して流布するをふるゝといふに、徇の字たるべきを、觸の字をもちひ、强忍にして敢てするをおすといふに、忍の字たるべきを押の字をもちふ。是等は同訓に誤らるゝなるべし。雨露の滴をしづくといふに、雫の字をもちひ、種レ菜の田をはたけといふに、畠の字をもちひ、伴語の人をとぎといふに、伽の字を用ふ。是は雨下の二字を合せて一字として、露の下垂するといふ意をとり、白田の二字を合せて一字として、白地の田といふ意をとり、人加の二字を合せて一字として、人の相加はるといふ意をとるなるべし。又同仇の兵をみかたといふに、味方の字をもちふるは、一味の方といふ語を略するなるべし。又家號氏族のかぢるかぢはらといふに、梶の字を用ふ。是は柁の字を誤りて梶に

の事多端にして一にあらず。今こゝに所記は、正道を明かにし、邪說を辨じ、すべて學問の大綱に係り、又は世俗の諺淺近の語といへど、平生の事に通じて觀省の益ともなるべき事どもを採集めて、しるし置くになんありける。よりて觀るに、たよりあるべきために、章段を分ち、其中の提要の一語を摘みて、篇に名付けけらし。鋪叙倫なく、議論複出するやうにきこゆるもあれど、本より撰次して書となすに心なければ、たゞそのかみ語りしまゝに、叙錄して、家に貽し置くものならし。

國語大やう古雅にしたがひ、世俗のいやしき語を避くるといへど、事情にちかく、人聽に切なれば、たとひ鄙しき俗語にても、そのまゝ取用ひて、擇びすつるにいとまあらず。又近代漢字をもちひて、音にてつらねよみて、常語とするあり。武家の盛衰に武運といひ、武士の戰功に武邊といひ、人に禮辭するを挨拶といひ、事に懈弛するを油斷といひ、

月は世々の形見　　離騷の祕事
遍照が黒かみ　　世をすてゝ身をすてず
詩文の評品　　倭歌に感興の益あり
六義の沙汰　　作文は讀書にあり
多錢善賈　　文章の盛衰
蠶陽大師　　寸鐵人をころす
言は身の文　　一日の澤
尤物人を移す　　年にはづかし

駿臺問答の話、是に限るにあらず。經傳の文を論ずれば、所レ論の書により、諸生の問に答ふれば、所レ問の人にしたがふ。この故に、所レ論の文參差として齊しからず、所レ問

享保壬子のとし九月中旬、鳩巣の翁駿臺の草の庵にして筆をとる。

かしより良辰は失ひやすく、嘉會は得がたければ、いつも賓主ともに唐錦たゝまくをしくなん見えし。翁も客に對して淸談することをこのみて、身の煩はしさも心地よくおぼゆる儘に、いにしへ今の世にいひふる難波の事のよしあしとなく、本末懸けてその理を盡しけるが、われながらをかしとおもふひとふしもあれば、其席はてゝ、わが子弟に命じて、やまと文字に寫し置きけるに、日數を經ておぼえず卷をなせり。もとより有識のきはの人の目をとゞむべきものにもあらねば、さしてをしむべき事にはあらねども、古人の雞肋といへるも類しぬべし。さすが反故となしてかいやり捨てんも本意なければ、さて兒輩にあたへてよましめんとて、しばらくのこしおきけらし。

むさしの國大城の東駿臺のもとに、草の庵むすびて住みける獨の翁あり
けり。そのかみ北國より爰に來て家居せしが、もとより深山木の花にあら
はるべき材もなければ、其梢としる人もなくして、たゞ學の窓に文をひろ
げ、見ぬ世の人を友とし、老の至るをもわすれつゝ、きのふといひけふと暮
して、はやふたとせあまりにおよべり。ちかきころより衰病日に加り、それ
に痿痺の疾ありて、起居も心に叶はねば、日夜衾枕をのみ親しみ、書籍にさ
へうとくなりにたり。何をか世にあるおもひ出にせまし。爰に此翁に就い
てもの學ぶ輩ありて、書を講じ文を論じ、おの〳〵虛にして往き實にして
歸らぬはなし。其外、花の晨月の夕には、かならず問來て、なにくれと世にあ
らゆる事ども語りつゞけつゝ、日をくらし僕を更ふれどもやむ事なし。む

寛延庚午十一月冬至日

東都　直學士　藤原明遠　謹識

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五卷。廼鳩巢室先生之所著也。夫以講論之餘。亹亹及此言。大抵發乎所問者。而研窮理義。藻鑑人物。或往事之可感。或當世之可警。莫非守正學而扶名教之意也。何其諄諄諭人之若是哉。一時遊門之士。皆虛往而實歸。從可知已。明遠雖不敏。執經下座。竊與有聞焉。嗟乎。在則人。亡則書。先生已遠。九原不作。後之讀此書者。亦可以想見其造詣之深爾。雖然鐘之應撞而始鳴。其聲之大小洪纖。惟隨乎其所叩。則善教之待其問。理亦不異於是。而先生之蘊。固有非斯書所能盡者矣。書肆崇文堂。請上諸木。以傳不朽。因與其孫室直溫謀焉。遂告之官。以一本授之。適剞劂功成矣。於是乎序。

卷五（信集）

名家隨筆集 上 目錄

醇儒にして、德川吉宗の師事せし所、獨語の著者太宰春臺（延享四年歿、六十八）は、文辭に耽溺して放縱に流れたる蘐園派中、獨り毅然として名節を尊び、師友に畏憚せられたる高士、梧窻漫筆の著者太田錦城（文政八歿、六十一）は、淵博の學を以て百家を綜該し、折衷の一派を立てゝ、一代に雄視せし鴻儒、三家三樣の面目、本篇によりて其一端を窺ふを得べし。

駿臺雜話、梧窻漫筆の二書は、木版原本に據り、獨語は寫本を以て底本とし、百家說林本を參照せり。校訂に就きては文學士青木存義氏を煩したること多し。玆に記して謝意を表す。

本書の索引は上下二卷を通じて之を下卷に收む。

大正二年四月

校訂者　武笠三

緒言

名家隨筆集二卷は、德川時代著名の學者の隨筆中に就きて、其尤なるものの五六を選輯して卷を成す所なり。

上卷收むる所の三書は、漢學者の隨筆中夙に白眉を以て目せられたるもの、特に玆に其價値を誇揚するを要せず。駿臺雜話の、義理明晰にして道を諭ふるの懇到なる、獨語の、世態人情を盡して、一家の識見を以て之を剖判せる、梧窻漫筆の、漢宋明清諸儒の註誤を匡して其弊竇を攻め、學者をして必ず中正の見地に住せしめんと試みたる、皆是良匠心苦の作、時移り勢變れる今日と雖も、亦讀書家架上の珍たるを失はず。

駿臺雜話の著者室鳩巢(享保十九歿、七十七)は、程朱の道學を骨髓とせる

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

名家隨筆集

上

